日本名著全集
江戸文藝之部第廿四巻

和文咊歌集 上

この巻の装幀——

背及表紙意匠　中村岳陵氏畫
見返し前附・後附　中村岳陵氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

賀茂眞淵畫像

千蔭筆

森繁夫氏藏

和文和歌集上目錄

琴後集（文化十年）　村田春海

志濃夫廼舎家集　（明治十一年）

橘曙覧 ……六一五

（目録をはり）

緒言

一、日本名著全集の江戸文藝之部に、和文和歌集として二卷だけが加へられることになつてゐる。和歌だけとしても江戸時代は極めて多く、そのうちの名著だけでも、とても二卷に收めることは出來ない。江戸時代を通じての代表歌人は、賀茂眞淵と香川景樹である。單に歌人としてすぐれてゐたばかりではなく、その時代はもとより後代へかけて影響するところ多かつた意味においてである。そしてどちらもその時代における和歌の革新者である。それで二卷のうち一卷を賀茂眞淵及びその系統の歌人の家集にあて、一卷を香川景樹にあてることとした。

一、賀茂眞淵くらゐすぐれた弟子の多くを持つてゐた人は稀だ。その重もなる人を擧げても、加藤枝直、同千蔭、河津宇萬伎、村田春海、山岡俊明、建部綾足、楫取魚彥、服部高保、內山眞龍、栗田土滿、田安宗武、荒木田久志、本居宣長、海量がある。又女流には、油谷倭文子、進藤沿波子、鵜殿餘乃子、青木峕根がある。これらの人はいづれも逸すべからざる人であるが、編輯の上から、すべてを本卷に入れることが出來ない。それでこのうち特にすぐれた人だけを撰んで、他は又の機會に讓ることとした。

一、賀茂眞淵は家集と、代表的な歌論二卷を取つた。田安宗武は家集だけを取つた。楫取魚彥は刊行されてゐる家集だけを取つた。加藤(橘)千蔭と村田春海も家集だけを取つた。海量はその代表作といはれてゐる「ひとよ花」と、たまたま見ることを得た日記の一部を添へることとした。日記は稿本として殘つてゐたもので、印刷されたことのないものである。

一、眞淵の系統といへば、本居宣長は逸すべからざる人であるが、和歌の上では宣長は眞淵の影響をうけてはゐない。和歌では逸し難い荒木田久老などをさへも入れられない以上、宣長をはぶくのは餘儀ないこととしてはぶいた。女流歌人の和歌もはぶかざるを得なかつた。

一、眞淵の直接の弟子ではないが、上田秋成と、橘曙覽の家集とは加へた。秋成は河津宇萬伎の弟子で、孫弟子といふ關係になつてゐる。眞淵系統の和歌といふ上からは、はぶき難いものと思ふからである。曙覽は、本居宣長の弟子の田中大秀の弟子である。關係は一層薄い。しかし和歌の上からいふと、當然加へるべきものと思つたからである。

一、要するに、限られた紙數のうちに、眞淵系統の和歌の優秀なるもの、及びその名聲から見て逸し難いものだけを入れようとして取捨したのである。

一、江戸時代の歌人として、賀茂眞淵及び本卷に收めた人たちが如何なる事をしたかをいふ必要があると思つて、解說として添へた。又別に略傳をも添へた。

解說　その一

窪田空穗

一

和歌史の上から觀ての江戸時代がいかなるものであるかは、あらゆる國文學史が、筆を惜しまずに說いてゐることである。ここに改めて說く必要はない。しかし本「全集」は解說を忽ろにするのが例となつてゐるから、この卷もそれに倣つて、いささかの解說を添へることにする。

江戸時代の和歌は、これを和歌史の上から觀ると、際やかなる特色をもつた時代で、小說、脚本、俳諧などが、この時代にそれぞれ特色を發揮したのにくらべて、さして劣らぬほどに發揮してゐる。

これを量の上から見ても、江戸の和歌は、奈良朝、平安朝時代の比ではない。これは和歌が完全に民衆化した爲である。普通奈良朝の和歌は民衆的であるといつてゐる。その趣はあるにはあるが、何といつても文化の及ぶ範圍の狹い時代であつた。大體は智識階級すなはち貴族のものであつた。平安朝では一に宮廷のものであつた。鎌倉室町時代は、宮廷に代つての權力階級すなはち武士にも及び、智識階級であつた僧侶にも及んでゐたが、これを全體の上から見ると、無論一部分に過ぎなかつた。しかるに江戸時代になると、にはかにその範圍が擴がつて來た。社會の中心になつてゐる武士は、事實においての貴族で、有閑階級である。そして當時の嚴格なる社會制度のもとにおいて、何らかの消閑の具を持たずにはゐられなかつた。平民のう

ちのやや富んだものも同じ要求を持つてゐる。爲政者は、治國の上の必要から學問を奬勵した。上の好みに從ふよりほか、一身の安泰の法のない時代である。爲政者の奬勵する學問の方面に、有閑階級があひ競つて向つていつたのは當然のことである。

和歌はいふまでもなく民衆文藝である。形式がきまつてゐるので、それに縋りさへすれば、詠まうとさへ思へば誰にでも詠める。加へて和歌には、特別な魅力がある。それは和歌は、いかなる戰亂の代にもかつてその尊さだけは忘れられなかつた皇室と共に存して來たものである。いはゆる敷島の道である。傳統的に尊敬をせられてゐるところがある。それに又、當時の武士は、社會上からいへばまさしく權力者で、自信も持つてゐるが、文化といふ上からは、劣敗者と思つてゐる公卿に對して、一種のひけ目がある。成りあがりものの持つひけ目である。彼らは、公卿の唯一の誇としてもつてゐる文化を、我がものとしようといふ熱意を持つてゐた。公卿の文化とは和歌である。魅力といふのはこれで、この魅力は當時としてはかなり强いものであつた。

事實上の貴族で、有閑階級である當時の武士が、新たに興つた好學の精神のなかにゐて、この詠みやすいしかも魅力のある和歌に向つて眼を凝らしてゐたのは、むしろ自然である。

二

優勝者である武士から、一種の注意をもつて睨まれてゐたところの、劣敗者である公卿の持つてゐた和歌はどんなものであつたか。

當時は和歌の最も墮落した時代であつた。和歌のやうに歷史が久しく、且つ前代に幾つもの黃金時代をもつたものは、勢ひ回顧的となり保守的とならざるを得ない。回顧的保守的となれば、勢ひ偶像を生み出す。加へて實生活の上では、血統と家の格式とを重んじてゐる時勢であるのに、殊に劣敗者である公卿の世界のことである。偶像の生まれるのは當然に過ぎる當然である。

偶像の貫錄の上からいふと、第一に萬葉集はそれに値する。しかしこれはよくは讀めなかつた。第二には古今集でもいい。しかしそれでは、當時の公卿中の歌人には都合がわるかつた。自分たちと血統上の關係がないからである。そこで、藤原定家を偶像として生み出し、まつり上げた。定家は第三の黃金時代の新古今集を代表する歌人である。そして自分たちの先祖でもある。この先祖といふことが、自分たちに箔を附ける上では何よりも便利なのだからである。

定家の子孫は連綿として續くには續いたが、何百年となく精神力の萎靡した狀態でのみ生きて來たので、これといふほどの人は出なかつた。たまにはやや優れた人も出は出たが、祖先にはくらぶべくもない程度の人であつた。そしてそれらの人は、和歌の家として、師範家として、和歌を敎へることを職業としてゐるのであつた。

實力のない師範が、師範としての面目を保たなくてはならないといふことは、さみしくも苦しいことだ。ここに古今傳授といふことが工夫された。それは古今集には、師範家よりほか知らない秘密がある。その秘密を知らなければ、和歌を知るとはいへない。これはそれを傳授するに堪へる特別のものにだけ傳授するといふのである。勅撰集に秘密があるとすれば、それは無智の生んだ秘密に過ぎないものであることは分りき

つたことである。これは言ひかへると、祖先を利用して、非力な自分を偶像化する方便である。しかし時代が時代だけに、このことがかなり長いあひだ續いて、格別怪しまれもせずに江戸時代に及んだのである。

この師範家の敎へる和歌はどんなものかといふと、古今傳授と調子の合ふやうなものであつた。

既に偶像があれば我はない。たとへ我はあつても、その偶像に似ることによつて初めて價値を帶びて來るところの我である。その仰ぐものも、するものも、抒情詩で、民衆文藝であるところの短歌である、摸倣をするより外にはない。作歌とは摸倣をするといふことと異語同義である。

彼らは、その手本とするところの歌集にある歌を、雅情のあらはれと見た。雅情とは平安朝の宮廷における生活情調及びその摸倣をしたものの謂ひである。それに對して、實生活の上の實感は俗情といつた。彼らの平生もつところのものは俗情で、雅情はただ庶幾するものである。しかし和歌はこの雅情でなくてはならない。

如何にすれば、この俗情をとつてかの雅情とすることが出來るか。雅情として古人にも恥ぢない和歌にすることが出來るか。これが彼らの問題の一切であつた。

俗情を化して雅情とするといふことは、勿體の附けやすいことである。それは卽ち一種の修養になるからである。この意味から和歌を詠むことは第一の修養法で、同じく修養法であるところの神道、佛敎、儒學などに劣らないものである。いな、それよりも適切な法で、それらにも優つてゐる。いな、それらの一切をも含んだ法であるといふことは、盛んに問題とされた。

さうした法がありとして、その法は何によつたらば得られるかといふと、これは自己の身內にはもとめら

れるものではない。身外の、歌集、歌學書によつてのみ得られると信じた。彼らの立場としては當然な考へ方である。それだと摸倣より外にはない。摸倣してつかれた心から、古今傳授にあこがれるのは、當然なことだといへる。

心に既に何ものの新しいものも得られない。もし多少なりとも手柄を立てようとすれば、表現の上においてである。

心が摸倣である以上、表現が摸倣とならざるはずがない。摸倣しなければ奇怪なものとなるのみだ。奇怪なものもあつた。それを厭ふものは、古歌のすぐれたものを解剖することによつて、何らかの秘密を掴まうとした。彼らは多くの方則を發見した。そして方則に縛られて、ますます摸倣の度を高めた。

その何れにしても、雅情のあらはれである詞は、優美なものでなくてはならなかつた。和歌と優美なる詞といふこともまた、異語同義となつてゐた。

師範家は、制の詞といふものを設けた。古歌のうちの特に優れた詞は、よし摸倣を旨としてゐるにしても使つてはならないととどめた。その數がかなりあつた。これは定家の戒めておいたことだと、僞書をさへ作つて權威を附けて禁じた。

要するに作歌は純粹に藝となつてゐた。藝といふうちでも、教養のいる、手ごころの呑み込みにくい、極めて困難な藝となつてゐた。その困難が魅力となつて、性懲りなく、幾らでも、いつまでも、繰り返し繰り返し作らせてゐたと見える。

江戸時代の武士が向うへ廻して、注意ぶかい眼を凝らして見てゐた和歌の世界は、大體かういつたもので

あつた。

三

堂上家の手のうちのものとなつて、將に亡びてしまはうとしてゐた和歌は、江戸時代に武士の手によつてよみがへつた。よみがへつたといふのは、和歌に新しい解釋を加へ、新しい標準を立てて、これを新しい意味をもつたものと變へたことである。

新しい解釋、新しい標準といふことは、これを一と口にいふと、技巧の末に走つてしまつたものを、自然に歸らせたといふことである。わき道の、狹い道へはひつて行き詰まつてしまつたものを、大道の見える初一歩へ引き戻したといふことである。

更にいふと、自然といひ初一歩といふことは、自己といふことである。抒情詩の世界では、自己が一切である。自然に法る（のつと）べきものとすると、自己は自然の自然である。又何物も變化する力を失つた時には亡びてしまふが、抒情詩とても同様だ。が抒情詩の上でいふ變化は、抒情詩そのものの變化ではない、それを生みだすところの自己の變化だ。抒情詩においては、自己に初一歩であると共に目的地である。要するに抒情詩は自己を離れてはない。自己を信ずる力の強い時は抒情詩の盛んな時、その弱い時が衰へた時である。

鎌倉時代から江戸時代の初期へまでかけての和歌のことは前にいつた。當然に衰へるべきさまざまの事情があつた爲とはいへるが、詮ずるところ、彼らは自己を信ずる力がなかつた。そのために衰へたのだといへる。

江戸の武士は、新興の權力階級である。自己を信じ、自己の力を恃む心に燃えてゐる。好學の精神が起り文藝に對する本能が眼覺めて來て、そちらの方面にも自己をほしいままにしようとしてゐる。加へて成上りものの持つ下剋上の氣分がこれを煽つてゐる。

彼らは堂上家の和歌を、自己を標準として見た。權威ありと見て來たものは、値なき偶像に過ぎなかつたことを忽ちに悟つた。新たにもつた好學の精神から學びえた學問は、彼らの悟に權威をつけた。和歌の革新をしたことは、彼らとしては當然すべきことをしたに過ぎない。

これを周圍との關係から觀ると、漢學は疾くの昔にその事をし遂げてしまつてゐる。小說、脚本、俳諧など、これを和歌にくらべると遙に低級だと思つてゐたものも、すべて同じく疾くの昔にその事をし遂げてしまつてゐる。立ち遲れたのは和歌だけである。この立ち遲れたのは、和歌は文藝の他のものにくらべると、傳統から貫祿があつて、迂濶には手を着け難いものに見えた爲であらう。しかし大勢は既にさうなつてゐる。和歌だけが大勢の外にゐられるはずがない。和歌の革新は、まことに、當然すべき事をしたに過ぎない。

四

江戸時代の和歌革新の上に働いた人は多くある。それらの人を代表する、劃時期的の働をした人は二人である。一人は賀茂眞淵、一人は香川景樹である。二人の爲事はいかにも際立つてゐて、異論を挾む餘地のないものである。

眞淵の本領は古學にあつて、和歌の方はその方便となつてゐる。古學といふのは、我が國の古代精神を、

文献によつて明らかにすることである。これは我が皇室の尊貴の源で、又神道の源でもある。それまで神道者流のして來たことである。しかし神道者流のして來たことは、著しく外來の佛教、陰陽道、儒學などの影響を受けたもので、それとこれと一つになつて、甚しく純粋さを失つたものである。彼の志した古學は、それら外來の影響を拂拭し去つて、本來の古代精神を明らかにしようとしたのである。すなはち古代そのままの精神を現代に生かさうとしたのである。

賀茂眞淵筆（森繁夫氏藏）

何の爲にそれをしようとしたか。學問としてか、又は他の目的の爲にかといふと、彼はそれを國家の爲と信じてゐた。それによつて我が國の尊貴を國民に意識させよう、それを日常の道德にもさせようとしたのである。これを他との關係の上から觀ると、當時の學問は無論儒學である。爲政者の奬勵してゐる學問で、いはゆる官學である。しかし儒學は外國の學問である。それを國家の學問としてゐるのは、我が國民としての彼の自尊心が許さない。それでは我が國には、敎とするに堪へるものがないかといへば、ある、儼としてあ

る。それが無學の爲に蔽はれて、顯はれずにゐるだけである。これを顯はして、かの儒學に代らせよう。これが古學の目的で、彼の師荷田春滿によつて明らかに意識されたことで、彼はそれを繼承したのである。

古代精神を明らかにするには、古事記をとほさなくてはならない。然るに古事記は從來閑却されて來て、にはかには讀み難い。これを讀むには、その準備として古語を學ばなくてはならない。古語を學ぶには萬葉集による外はない。

この意味で彼は萬葉集に親しんだ。彼は本來歌人である。古語を覺える爲に讀んだ萬葉集を、彼は和歌として見るやうになつた。その結果彼は、彼の求めてゐるところの古代精神は、直接に、さながらに、萬葉集の和歌にあらはれてゐる、この和歌を正しく解することは、やがて古代精神を體得することだと思つた。

みいら取はみいらとなつた。彼は晩年、大和めぐりの途中、伊勢參宮をして、偶然にも初めて逢つた本居宣長から、その古事記の註釋を書くことを目的としてゐると話されると、述懷して、その事は自分も一生の目的としてゐたことだつた。しかしその高い目的を遂げるには、古語の研究といふ低い方便を重んじなくてはならない。それでないと低い事さへも出來ないと思つて、萬葉集にのみ沒頭してゐた。今は自分はかく老いて、その事には堪へられない。代つてしてくれと勵ました。これが宣長の古事記傳の成つた一つの理由となつた。彼の本よりの願ひは、本居宣長によつて遂げられることとなつた。

彼の方便としての萬葉風の作歌は、案外にも盛んとなつて行つた。和歌を解するには、親しく作つて見るのが何よりだ。古代精神のあらはれである萬葉集の歌を解するには、萬葉集風の歌を作るべきだ。さうするとおのづから古代精神を體得することが出來る。又作歌は面白いものである。面白みをとほして道に進みう

ることであるから、作歌はいゝことであるとして、弟子たちに勸めた。彼の高弟の一人である村田春海のいふところによると、歌は素質のあるものでなければ駄目だといつて、進んで學ばうとするものにてなければ敎へなかつたといつてゐる。しかしこれはむしろ例外で、彼の門に集るほどのもので、和歌を問題としなかつたものは稀であつたらう。彼自身がいかに和歌に力を入れてゐたかは、その述作のおもなる部分が和歌に關したものであることからも窺はれる。

賀茂眞淵筆（森繁夫氏藏）

五

古學者をもつて任じた彼ではあるが、彼の力の大部分は和歌の上に費されてしまつた。それには相當な理由もあるが、何よりも大きな理由は、彼は本來詩人で、和歌が好きで、好きに心を牽かれたと見るべきであらう。その結果として、彼の本來の目的である古學の方は、彼の弟子の本居宣長によつて遂げられ、歌人にして歌學者といふ、彼自身としては案外な方面が、われわれの前に際やかにあらはれることとなつた。

方便と見た萬葉集が目的となつてしまつたといふことは、言ひかへると萬葉集のうちに彼自身を見出したといふことである。眞淵の見た萬葉集の和歌はどういふものであつたのか。

彼は晩年に「歌意考」と「新學」の二書を著した。これは彼の歌論としては代表的のもので、斷片的に書き來つたものを一つに取纏めた觀のあるものである。

彼の文章は、文章に對する彼の主張をさながらな、極めて簡約な、そして熱意をもつてやつてゐるものである。捉へやすきに似てやすくない。註釋めく嫌ひはあるが、聊か註釋を加へる。

「歌意考」の主意の一半は、彼が萬葉集の歌を尊むは何故であるかといふことを、彼自身の體驗をとほして說くにある。

彼も幼少から、三十代頃までは、その當時の堂上家の歌風を是認してゐた。堂上家の源流である、藤原俊成、同定家、西行法師などの歌を模範とあふいで、それに對して非難めいたことをいふ兩親をさへ、無智のいたすところと思つてゐた。しかし次第に源流に溯つて、萬葉集の和歌を知るに及んで、後世の和歌のいかに誤つたものであるかを悟つた。そこにはどういふ相違があるか。後世の和歌には智識が加はつてゐる。儒敎、佛敎など、風土と政體とを異にしてゐるところのものがまじつて來て、心としては意識的に、表現としては技巧的になつてしまつて、天地と共に變るところのない、人間の性情の自然に反したものとなつてしまつてゐる。

然るに萬葉集の歌は、それら後天的の智識にけがされたところがなく、人間の性情の純粹さをそのままにあらはしたものである。この純粹さはいかにしてあるかといふと、當時の人は、心が一本氣で、眞つすぐだ

つた。一本氣だからする事が少く、隨つて言ふ事も少ない。言ふ時には、高い聲をして、卽ち熱意をもつていふのであるが、しかもその言葉は平生の言葉で、智識を解さない、直接な言葉をもつてしてゐる。これが雙方の相違だ。

彼は心を振ひ興して、この後世風から、かの上世風へと移つた。それは、後天的の智識を棄て去り棄て去ることとであつた。そして結局、世の中てふものは、物なく事なく、いたづらなる心をも悟らへ」といふところまで到つた。そしてこの心がやがて萬葉集の心であることを知つたといふのである。

「歌意考」の主意の他の一半は、和歌の推移を皇威の推移につないだところにある。和歌の純粹な時、卽ち藤原、奈良の宮の時代は皇威が振つてゐた。その純粹が失はれて智識的となつた平安京この方は、皇威も共に衰へて來た。和歌を上世風にかへらせるといふことは、やがて皇威の振つてゐた時代の精神にかへらしむることとで、これによつてそれもなしうるといふのである。これは彼の古學者としての信念で、古學と和歌とを關係させた理由もそこにある。

第二の古學者の方面は暫く措いて、第一の新古今風より萬葉風へといふことは、これを今日から見ればむしろ當然のことのやうに思はれるが、その當時としては思ひも寄らない、飛び離れた、極めて異常なことであつた。

當時の和歌は、藤原定家以來六百年、偏にその流風を逐つて、些の動搖もなかつた和歌である。釋契沖は江戶時代の和歌の改革者だといはれてゐる。だが、したところから見れば、權威者定家の假名遣を訂正して、その意味でその權威を疑はしめたに過ぎない。同じく改革者の戶田茂睡も、ただ堂上家の歌風を罵つたに過

ぎない。古學の主唱者である彼の師荷田春滿も、歌風は新古今風である。國歌八論の著者で、藝術には目的なし、ただ本能としての表現欲をみたして、我と我をたのしましむるにあるのみだと、當時としては驚くべき卓見を抱いてゐた荷田在滿でさへ、和歌の頂點は新古今集にあるといつてゐた時代である。その時代にあつて、ひとり彼のみが、敢然として新古今集風を排し去り、單に學問的にのみ扱はれてゐた萬葉集を、學ぶべく習ふべき唯一の歌風としたといふことは、當時としては、まことに驚き呆れるほどの言説であつたらうと思はれる。

かれ眞淵は、いかにしてかうした信念を持つに至つたらうか。

十代から彼の弟子となり、五十から七十近くまでの彼を見つづけて來た橘千蔭は、師である彼の家集の序のうちに、

千蔭いと若かりしより大人(うし)にしたがひて、常のみありさま、のたまへりしことを、親しく見もしききもしつるに、大人は今の世の人さはことにして、うち見にはさかしきかたはおくれて、心おそき樣(さま)に思はれしかど、たまさかにいひいで給へることに、敷島の大和心をあらはし、一言(こと)としてみやびならざるはなかりき。筆とりて物かき給ふを見るに、五百(いほ)とせも經にけむ筆の跡の如くなむありける。

といつてゐる。この、一見愚かのやうに見えたといふことが、よく彼をあらはしてゐる。

又、當時の儒者で彼の古學を評して、眞淵の古學は、神道と老莊とをまぜたやうなものだと非難したものがある。彼の文章のうちには、老莊風の心持を語つたものが珍しくない程度にある。彼は本質として、社會よりも天地を大なりとし、智識よりも自然を大なりとして、この天地の自然を法として生きようとする、謂

はゆる宗敎的情操の豐かな人だつたと見える。皇室といふうち、殊に上代の皇室に對して彼の持つた心も、この宗敎的情操から、宗敎的色彩を濃厚に帶ばしめたものであつたらう。

本來さうした素質をもつた彼である。その彼が、研究者として讀んだ萬葉集に心醉して行つたといふのは、むしろ當然なことである。

彼の說く萬葉集は、名は萬葉集であるが、實は彼自身である。萬葉集を假りて彼自身を說いてゐるものといへる。

六

「新學」は、その名の示す如く、新たに歌を學ばらとするものに敎へる態度で書いたものである。遠隔の地にゐるもので、直接逢ひ難いものの質問に答へる爲に書くと終りに言ひ添へてある。書籍の刊行の困難な當時を思はせる言葉である。

彼の歌學の上から見ると、「歌意考」は總論で、「新學」は各論といつた形になつてゐる。「歌意考」は和歌の本質を說いたものであるが、「新學」は進んで、實際に作歌をする上では、いかなる注意を拂ふべきかといふことを說いてゐる。

堂上家の歌風からいふと、作歌の上で第一に重んずべきものは趣向である。內容である。藤原定家が、詞は古く、心は新しかれと敎へた、その心の新しさである。

新しい心とはどういふものか。人の性情は古も今も變りはない。同じである。もし新しい心を欲するなら

ば我といふものを強く感じ、深く感じることによつて、從來は感じえなかつた感じを捉へるより外はない。卽ち高い程度の感じ方である。これを外にしての新しさがありとすれば、從來は價値が少いとして注意を拂はなかつた方面へ、我が感覺を開放して向つてゆき、それをうけ入れることによつて、新たなる價値を發見することとである。この二つより外には謂はゆる新しい心を捉へる道はない。

新しかれと定家に敎へられた堂上家の歌人は、その新しさを和歌の世界においてもとめた。旣に詠まれてゐる和歌のうちにもとめた。平安朝以來の和歌をあさることによつて求めた。そこには新しいもののあるはずがない。ないものを求めれば無理に陷る。彼らは無理をした。

新しくないものを新しいがやうにする爲には、古いそれとこれとを綴り合せた。複雜の爲の複雜をあへてした。取り合せることの出來ないものをも取り合せた。不自然の爲の不自然をもあへてした。そして、さらすることを作歌の上の興味の大部分とし、勞苦の大部分とした。それをすることが卽ち趣向である。

眞淵は、源實朝ひとりを、萬葉集以來の歌人としてゐる。そして實朝の趣向の捉へ方に共鳴してゐる。

こともなく聞ゆるに「此ねぬる朝けの風に薫るなり軒端の梅の春の初花」「玉もかる卯月の栅はるかけて咲くや河邊の山吹の花、などの本のいひなし、且常あることをわざといはれつる、末の調の心高きを見よ。又梅開猒雨てふ題にて「我宿の梅の花さけり春雨はいたくな降りそちらまくもをし、とよまれしを思ふに、其頃京に歌よむ人、みな造心もて巧にくしつつぞ在らむ。いで古へ風よみてみせむよとて、天の下の歌よみを見下したる心もおのづから見ゆ。

いふところは實朝の上であるが、さながら彼自身の心をいつてゐるやうに聞える。中心は「常あることを

わざといはれつる」といふ點である。定家と同じ時代に生きてゐて、歌の上では定家の影響をうけてゐた實朝である。或は眞淵の評したやうに思つてゐたのかも知れぬ。しかし實朝は一方では、時樣の新古今風の歌をも詠んでゐた。その徹底の程度は問題となる。實朝としてはとにかく、眞淵はここにいつてゐるやうに信じてゐた。實朝は、歌人といふ歌人が第一の問題としてゐる趣向といふものを、全然問題としなかつた。のみならず、態と平凡にした。そしてそれは和歌といふものを正しく解しえてゐた爲だといふのである。

この、實朝の歌をとほしていつてゐるところが、眞淵の趣向に對しての意見であることはいふまでもない。

和歌の上では、趣向すなはち取材は大きな問題ではない、それよりも一段と大きな問題がある。趣向は從で、その主たるべきものがあるといふのである。

それは何か。何で歌の上では第一に問題となるべきものであるか。

それは調である。調こそ歌の上で第一のものである。

「新學」の起首は、この調のことで始まつてゐる。

古への歌は調を專とせり。うたふ物なればなり。其調の大よそは、のどにも、あきらにも、さやにも、遠くらにも、おのがじし得たるまにまになる物の、つらぬくに、高く直き心をもてす。且其高き中にみやびあり。直き中に雄雄しき心はあるなり。

調といふものの如何なるものであるかを、彼はここで説明をしてゐる。だがこの説明だけでは足らぬと見えて、往往にして曲解されてゐる。

曲解されるのは、調といふと、言葉の調子卽ち言葉の節奏的なことに聯想する習慣をつけられてゐるが爲である。彼のいふ調は、言葉に屬したものではない、心に屬したものである。心そのものの直接なる表現を、彼は調といふ言葉をもつていつてゐるのである。もとより言葉を離れては調は存在することが出來ない。言葉と共にはある。爭ふところは、言葉に屬したものか、その奧にあるところの心に屬したもので、言葉の主となつて、言葉と共にあるものかといふことである。この關係は微妙で、それ以上の說明は出來ない。彼は、「おのがじし得たるまにまになる物の、つらぬくに高く直き心をもてす」と說明してゐる。卽ちいふところの調は、高く直き心の表象であるとの謂ひである。心といふうち、特殊なる心の表象だといふのである。この調といふことを、現代の言葉に言ひ換へると、まさしく內在律といふことである。

ここに殊に注意されるのは、「高く直き」といふことである。これは「古へ」の心である。「歌意考」で、「心しひたぶるなれば、なすわざも少なく、事、少なければ、いふ言の葉も、さわならざりけり」といつてゐる、さうした特質をもつた心である。卽ち一本氣な、常に集中して、多岐にわたるところから散漫の趣などは少しも持たない心である。彼のいふ調とは、さうした心から出るもので、「歌意考」はそこの消息を、ここに引いた文に續けて、「しかありて、心に思ふ事ある時は、言にあげてうたふ。こを歌といふめり」といつてゐる。これを現代の言葉に言ひかへると、主觀の全部を托したものといふことである。更にいふと、心を集中し、純一にし、しかも言にあげて熱意を伴はせることによつて、その主觀の全部をあらはしたものといふことである。

この、調は主觀の全部で、いはゆる趣向などいふ一部とはくらぶべくもないものだといふことを、さきに

引いた賀朝の歌の評のうちにもいつてゐる。それは、「其頃京に歌よむ人、みな迫心もて巧にくしつつぞ在らむ」といふのがそれである。趣向をたよつて歌を詠むといふは迫心のさせることである。天地間における人間といふ廣い心を忘れ、單に風雅といふ狹い心に捉へてすることである。さうした心をもつて、技巧の上で屈托する、それが卽ち趣向だといふのである。卽ち趣向は、謂はゆる歌といふものの上から見るからこそ大きいので、歌を天地間に生きてゐる人間の心の表現といふ上から見れば、その心の全部を托しうる調にくらべては、單に一部に過ぎないものだといふのである。

この趣向と調とについて、從來とは全く反對した價値を附けたところが、眞淵の歌論の中心である。「新學」は他の多くの問題に觸れてゐるが、純粹の歌論としてはこれが中心で、又ここに彼の特殊の面目がある。形から見れば、彼は萬葉風の歌を唱導したといふに過ぎない。しかし心から觀ると、以上のことを體驗し、信念としたのである。そしてこの信念がやがて彼を江戸時代における和歌の革新家とならしめたのである。

七

眞淵の歌論と作歌とは何んな關係になつてゐるか。卽ちその思ふところをどの程度まで實行に移しえたか。この點について瞥見することとする。

「賀茂翁家集」に橋千蔭は、

かくいにしへにつとめ給ひし中にも、歌をば殊に心高くもてつけて物せられたれば、歌一つよみいで給へるにも、深くかうがへ、あまたたび味はへてによびいでられしなり。歌のさまは、始と中頃と末と三

つのきざみありき。始の程は、物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまに通ひて、花やぎたよわきさまなりしを、中頃よりみづからの一つの姿となりて、みやびにして調たかく、しかも雄雄しきすぢを詠みいだされ、齢の末にいたりては、いたう思ひあがりて、まうけずかざらず、誰も心の及びがたきふしをのみ作られき。

といつてゐる。眞淵が東滿に物を學んだのは三十代の終りに近い頃であるから、四十代のいつ頃までかは、東滿の風、すなはち當時の風である新古今風の歌を詠んでゐたのである。中頃といふのは田安家に仕へた五十以後のことであらう。一つの姿といふのは萬葉風である。齢の末といふのは、七十を越すまで生きてゐた人であるから、六十代に入つてのことと思はれる。その頃は萬葉風よりは更に溯つたところを覗つてゐたと見える。

彼は作歌の上では生涯を通じて動搖してゐたと見える。このことは、藝術家である彼としては當然のことのやうであるが、歌人としては異數といはなければならない。和歌のやうな形式のきまつたものにあつては、その形式を自由に扱ふにいたるまでは、誰でも動搖をするが、それを越すと、さしたる動搖をしないのが普通だ。のみならず大抵の人は、進歩は練達といふ意味にとどまつて、練達と共に退歩するものが多い。五十になつて、それまでかかつて得た風を抛ち、六十になつて、それまでの風を抛つといふやうなことは、その道に對する向上心が強く、熱意が伴つてゐて、常に懸命になつてゐる人にして初めて出來ることである。その意味においてこの動搖は異數な尊いものである。

彼の家集は、例の部類分けによつて編んだもので、作の年代の分るものは僅かに過ぎない。だが大體は、千

蔭のいふところの一つの姿が出來あがつた後のものである。

「九月十三日、縣居にて」と題した五首の連作がある。これは年代がはつきりと分る。縣居とは田舍といふ意で、彼が晩年に隱居所として日本橋の濱町に建てた家の名で、座敷はいにしへの風にし、庭は野や畑のやうにしたところから附けた名である。九月十三夜は明和元年のそれで、そしてその時は彼は六十八であつた。その夜は、新築の祝をして弟子などを招いたのであつた。

歌は、

秋の夜のほがらほがらと天の原てる月影に雁鳴きわたる

こほろぎの鳴くや縣の我が宿に月かげ清し訪ふ人もがも

あがた居の茅生の露原かき分けて月見に來つる都びとかも

こほろぎの待ち喜べる長月の清き月夜は更けずもあらなむ

鳰鳥の葛飾早稲の新しぼり酌みつつをれば月傾きぬ

五首一連、一夜の情景を髣髴させてゐる。事實は客として弟子を招いたのであるが、歌では縣居の月夜、雁の鳴きゆくのを愛し、月に鳴くこほろぎに催されて、人戀しく思つてゐると、わびしい茅生の露原を掻き分けて、遠い都びとが來てくれたと誇張して喜び、月の夜の更けゆくを蟋蟀と共に惜しみ、葛飾の早稲の新酒を酌みつつ愛してゐた月も傾いたと惜しむのである。

この連作は、彼の所期を實現してゐる。彼は「新學」で歌の單純であるべきを教へた後、複雜なことをいはうと思つたら、何首でも連れて詠めばよいといつてゐる。これは萬葉集から暗示されたものである。しか

し連作はたやすきに似てたやすくない。今の場合にしても、一夜に亙つての景情を、一つのものとして支配しえた上でなくては詠めない。即ち氣魄がいる。彼はその氣魄を持ちえて、優に餘裕をもつて詠んでゐる。

第一首目の「秋の夜の」の歌は、萬葉集に類歌があつて、よく似てゐる。第三首目の「こほろぎの待ち喜べる」といふ秋の夜の形容も、萬葉集にあつて、成句である。だがそれを彼の歌のうちに見て、いささかの無理も感じさせない。全然彼のものとなつてゐる。これは言ひ換へると、彼は萬葉を我が物としきつてゐるといふことである。

この一連を讀んで、それらよりも先に、又直接に感じられることは、彼の喜びに躍つた心のおのづからに感じられて來る、讀むものも一種の快さを感じさせられることである。しかし喜びの心は言葉とはなつてゐない。一句の說明に似た句もない。何がさう感じさせるかといふと、彼のいはゆる調の力である。「新學」でいつてゐる、高く直き心の、みやびを含み、雄雄しさを含んだものが、そのままに調となつてあらはれてゐる爲だといへる。

しかし、この一連を移して萬葉集のうちに入れて見るとすると、萬葉の歌ではない。似てはゐるが、まぎれはしない。やはり彼の臭ひを濃厚に持つた彼の歌である。

この一連のみが代表的なものではない、他にも相應にある。しかしこれを、彼の最後に到達しえた境を示す例として見れば、適當なものといへる。

八

彼がこの渾然とした境に到達するまでには、かなりな動搖と混亂とを示してゐる。

混亂といふのは、新古今風と、萬葉風とのあひだに立つて、かれを棄ててこれに隨はうとするが、習ひ性となつてしまつてゐて、容易に前の癖がぬけない時代である。

　　　　家に歌よみしけるに晩夏といふことを

　　空高く螢を誘ふ夕風の身にしむまでになれる夏かな

　　　　同じむしろに大井川の夏を

　大井川わか葉すずしき山かげの綠を分くる水の白波

「家に歌よみしける」といつて、題を設けて詠んでゐる。彼の家で開いた歌の會で、弟子たちが集つて來て詠み合つたことと思はれる。いつの年であるか、江戸でのことと思ふ外は分らない。

前の歌は寫生で、單純な調の強い歌である。伊勢物語の歌から暗示をうけてゐるものとは思はれるが、傾向としては萬葉風の、彼の希つてゐる歌風だといへる。

　しかし、同じ筵で、卽ち同時に詠んだ後の歌は、まさしく新古今風だ。眼目である四五句の「綠を分くる水の白波」は、事實の面白みに縋つてゐるところ、綠と白とを對照させて感覺的にいつてゐるところ、又言葉が多くて調の詰まつてゐるところ、まさしく、彼の嫌つてゐる新古今風である。彼はそれから離れようと思ひ、一方では離れつつゐるにもかかはらず、猶引きずられるところがあつた。

　　　　七日の夜のうた

　天の原とほき川との夕波に今や漕ぐらむともしき小舟

　たなばたの逢ふ夜の秋の初風に男をみなの花も咲くらし

天の川見つつしをれば白妙の我が衣手に露ぞ置きにける

三首連作風に詠んである。同時の作と見える。我が戀ごころを天上の星に寄せて、それによつて單純に統一してゐるところ、調の強さを含んだやすらかなものであるところ、まさしく萬葉風といへる。しかし第二首目の、二星相逢ふ夜の秋風に誘はれて、非情の草である男郎花、女郎花の花も咲くであらうといふ心持は、人間と自然とを同じ心を持つたものと見て、それを詩情だとした平安朝この方の心持の踏襲である。それが明らかにあらはれてゐる。第三首目の「我が衣手に露ぞ置きにける」の「露」は、表面は久しく戶外に立つてゐたが爲に置いた秋の夜露である。同時に裏面には、二星の歡びを思ふが爲に催された我が淚である。袖の露といへば必ず淚の譬喩だとした平安朝この方の習慣のままに使つてゐるのである。これを新古今風だといふのは過ぎるかも知れない。しかし平安朝趣味である。形は萬葉であるが、心としては平安朝で、しかも婉曲な表現を欲してゐるところも平安朝である。

この、新古今風と萬葉風とのあひの子ともいふべき歌はかなりまである。

卷首の、「春の始の歌」

を筑波も遠つあしほも霞むなり根越し山越し春や來ぬらむ

の如き、調の強く、さわやかなところは萬葉風といへる。しかし春は東方より來るといふ心と、その春を擬人してゐるところとは平安朝のものである。あひの子といへる。

水上月

立つ鴫の影ばかりをや隈と見む野澤の水の深き夜の月

調には強さがあるといへる。しかし心は全く新古今風で、全體としてもそれに近いものである。この類を擧げればかなりあるが、今は省くこととする。

九

新古今風から離れて萬葉風になつたとはいつても、萬葉の模倣で、彼自身のものとはなつてゐないと思はれるものが、同じくかなりある。これは題詠の歌に多い。

「月の歌とて」と題して、五首續いてゐる。

遠つあふみ濱名の橋の秋風に月すむ浦を昔見しかな
住の江の浦わに立ちて月見れば難波のかたに鶴ぞ鳴くなる
さざ浪の比良の大和田秋たけてよどめる淀に月ぞすみける
播磨路や夕霧はれて久かたの月押し照れりいなみ野のはら
大舟に小舟引き添へます鏡隅田河原に月を見るかな

詠み方が極めてよく似てゐるところから、多分は同じ時の作かと思はれる。第一首目は、月に對して、昔、鄉里の濱名の橋に立つて、今と同じ月の澄んでゐる浦を見た、それを思ひ起したもので、これは實感で、題詠の臭ひがない。他の四首は、いかにも題詠である。その境を面白さうに思つて、そして面白さうに詠んだだけである。殆どその中へ踏み込んだところがない。それが題詠臭である。しかし何れも景は大きい。調もさわやかだ。その點は萬葉風である。萬葉風ではあるが、單に形としての萬葉風で、向うへ廻しての萬葉風で、

それが彼自身のものとはなつてゐない。

「嵐」と題した

信濃なるすがの荒野をとぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな

といふ歌も、有名で、人の記憶してゐるものである。この歌なども、景は大きく、調はさわやかで、その意味ではまさしく萬葉風だが、心から見ると、初句から四句までは嵐の形容で、巧みなる説明といへる。同じく向うへ廻したもので、自身のものになつてゐないからである。

「磯」と題した

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

も同じ趣がある。これは彼の好きな源實朝の「箱根路を我が越え來れば伊豆の海や沖の小嶋に波の寄る見ゆ」から暗示をうけたものであらう。實朝のこの歌も、形としては、萬葉集から暗示をうけたものではあるが、心は實朝のものだ。感傷的の氣分が生きてゐる。眞淵のものは、形だけにとどまつてゐて、氣分とはなつてゐない。卽ち萬葉集の形を學んだといふにとどまつてゐる。

この種のものを擧げようとすると或程度まで擧げられる。彼は新古今風を離れて萬葉風に移つたとはいふものの、それは萬葉の形であつて、或期間は、その骨髓にまで入ること とは出來なかつたことを示してゐる。

一〇

同じく萬葉風ではあるが、壯大な趣をもつた方面の歌は、よく何かに引かれて、今は誰も知つてゐる。し

かし、輕い、寂びた、小味な方面のものは、割合に閑却されてゐる。そして價値の上からいふと、これもかれに劣らないものである。今さうした歌の數首を引くこととする。

童遊に、竹の葉もて作れる舟に櫻の花をつみて流したるを見て、戯に人々と共に

少名神つくれる舟に木の花のさくや姫こそ乘りていづらめ

野分せしあした

野分して縣の宿は荒れにけり月見に來よと誰に告げまし

寒蘆をよめる

津の國の難波の葦の枯れぬれば異浦よりも寂しかりけり

寒草

枯れにける草はなかなか安げなヽ殘る小笹の霜さやぐ頃

世の中は夕霜さやぐ翁ぐさ枯れても安き時なかりけり

寒樹

冬枯に里の藁屋のあらはれてむら鳥すだく木末さびしも

薄にかかれる雪のをかしければ、友の許へ

思ひやれ枯生の薄うち靡き友待ち顔の雪の垣根を

題しらず

思ふ人來てふに似たる夕べかな初雪なびくしのの小薄

雪のあした

初み雪はれたる朝に見渡せば里のけぶりもめづらしきかな

年の暮に友を訪ふ

年立たば春野の若葉まづ摘まむかね言しにぞ今日は來にける

題しらず

眞柴たく橋場の里のうす瓦思ひくだくる世にもあるかな

二

彼の家集には多くの長歌がある。萬葉以來、彼ほど長歌を詠んだものはなく、彼だけの長歌を詠みえたものもない。短歌は單純に、事が多かつたらば幾首にも、又長歌にもといつてゐる彼である。長歌の作のあるのは當然である。

彼は自身で詠んだばかりではなく、弟子にも勸めて詠ませた。弟子にも長歌の多いものがある。長歌は彼によつて、一時、再び盛んになつたといへる。

彼の長歌の特色は、短歌と同じく、その內容の單純なところにある。彼の先輩であつて、且つ萬葉研究者である下河邊長流、釋契沖なども長歌を作つた。だが何れも長歌の趣を解さなかつた。徒らに事と心との多きをむさぼつて、一首の持つ力といふものを問題としなかつた。卽ち心としては新古今風を脫し得ざるもの

であつた。彼は一に力を欲した。力を欲するところから、單純にした。例せば、彼の「詠筥根山歌四首并短歌」、「詠蝦夷島歌四首并短歌」の如きは、いかに彼が單純を欲してゐたかを語るものである。これらは一種の連作である。もし新古今風の、複雜を欲する心からすれば、いづれも四首にはせず一首にしたであらう。そしてその複雜と長さとを喜んだのかも知れない。彼は四首としてゐる。一つの題材のうち、心に觸れた一點があれば、それを捉へて他へは渉らせない。他は他として、別な一點をもとめるといふ手法である。短歌の連作と同じ手法である。萬葉集でも、これをした歌人は柿本人麿一人のみである。人麿の手法から暗示されたものと思はれる。

最もよく彼を現はしてゐると思はれるのは、次の歌である。

うま酒のうた

美らに喫らふるがねや、一杯二杯。樂悦に掌底拍ち擧ぐるがねや、三杯四杯。言直し心直しもよ、五杯六杯。天足らし國足らすもよ、七杯八杯。

一二杯はうまく飲み、三四杯は興に入り、五六杯は機嫌がすつかりよくなり、七八杯は陶然として天地と一體になるといふほどの心である。調の力はこの心を、さうした分解的なものではなく、ふつくらと圓みのある、直ちに胸に流れ入るものとしてゐる。調も、これを音數として見ると、五七七を基調として、それを四たび繰り返した形になつてゐる。新しいものである。その五七七も、基調といふに過ぎず、音數はいづるに任せてゐる形である。

この率直な表現と、この古語と調とを自由にしてゐるところは、偉觀といへる。これを萬葉集中に移して

も佳作である。後のものでまだ及ぶものがない。

殿の御賀に御杖たてまつる歌

葛城や一言ぬしの、神のます森の榊を、鵜じもの頸根突きぬき、倭文機の幣とり向けて、我が君の御杖にとりき。今日の日の御賀の庭の、庭雀蹲りゐて、百千ぢの言も何せむ。萬代にいませ我君と、一言申さも。一言申さも。

よき言を一言ぬしのおほ神の幸ひまさむ杖たてまつる。

殿といふのは彼の仕へてゐた田安宗武である。宗武の老の賀の時に、祝ひとして杖を奉つたのに添へた歌である。杖は大和の葛城山の榊の木を伐つて作つたものだと歌にいつてある。この杖と賀の心とを緊密に關係させることが、今の場合第一に必要なことだが、本來無理なことである。しかしそれをしなければ、彼の作歌の上の信念となつてゐる單純とはならない。彼は巧みにしおふせてゐる。

古事記の雄略天皇の巻に、葛城の大國主尊の御魂が、そこへ狩に行かれた天皇にあらはれて、互に名のりをしあふ一節がある。その時大國主尊は、「吾は惡事も一言、善事も一言、言離の神、葛城の一言主の大神なり」といはれた。今はその一言を提へて來て、それによつて一首を統一した。「萬代にいませ我君と、一言申さも」が一首の眼目である。その一言と照應させる爲に、杖は、「葛城や一言主の、神のます森の榊を」と、葛城の神を特に一言主といふ御名によつて呼んだ。又、反歌も「よき言を一言ぬしの大神の幸ひまさむ杖」といつて、又照應させてゐる。卽ち起首と結末と反歌と、三たびまで一言といふことをいつて、それによつて緊密に統一させてゐる。

猶、緊術の上からいふと、濃い心づかひをしてゐる。祝ひの言葉を多く並べず、ただ一言だけといひ、その多く並べる譬に雀を捉へて、「今日の日の御賀（みほぎ）の庭の、庭雀（うずすま）蹲りゐて、百千ぢの言」といつてゐる、その「庭雀蹲りゐて」は、同じく古事記雄略天皇の卷に出てゐる歌の句で、他にはないものである。その句をいへば、おのづからその御代が思はれるほどのものである。卽ち一言主の神も庭雀も、雄略天皇の御代の歌だけから捉へたもので、その意味での統一をもつけて單純化してゐるのである。

彼の長歌についてはいふべきこともあるが、今は際立つた特長である、力強さを欲する上から單純といふことを捉へ、それを萬葉以上にも實行しえたといふことを注意するにとどめて置く。

二

彼は當時における和歌の革新者であつたが、革新者のすべてがするやうに、これを社會に喧傳するといふことは全然しなかつた。のみならず避けてさへゐた。それでは白眼で社會を見てゐたかといふと、熱意をもつて門弟を敎へてゐた。道の爲にはその方が有利であつたと信じたが爲である。道を主とし、自身の事功は後にして、自然の成り行きを待つてゐたといふところに、彼の面目がある。老莊風の思想がそこにもあらはれてゐたといへよう。

それを語る彼の書翰が殘つてゐる。高弟の一人である栗田土滿への返事である。（佐々木信綱氏著、「賀茂眞淵と本居宣長」所載。）

眞淵が歌を一覽せんといふ人ありとよ。吾等近來古風を詠（よみ）候へば、一覽して可不可を辨（わきまへ）あるべき人、六

百年以來覺え候はず候。見せ候ても無益の事なり。只古風をよくと申せば、古今以上萬葉、其外又は鎌倉殿の歌をよく見よと御申し候へ。但近年はいそがしく候て歌も專らよまねば、覺え居たるものなし。古學に志ある人ならでは、吾歌は見せ侍らずと心得給へ。見せて心得まじければなり。後世は一往の理のみを知りて、一向に工も何も無きを見知る人なければなり。總て學問はかく心得給へ。自ら學あれば、錐脫袋といひて、自然と顯はるる也。いまだなる間又は俗士にほこる人は、遂に學之就りたるは無し。おのれ如此かまへて默しをれど、今は天下に名を得たり。名聞好む人の名を得たるはなし。又人をすすむる爲とていふ人もあれど、天下は如蚊蠅、數群の人の中百人二百人を進め得んも何ばかりの事にあらず。只みづから學問して自然に天下に發動する時を待つにしかず。

から信じ、から行つてゐた彼が、それ以前には例のないほどの多くの門弟を得て、その志を行ふを得たのであつた。

一三

眞淵の門弟には歌人が多いが、最も傑出した人は田安宗武である。歌人としての素質の上からいふと、眞淵よりもむしろ宗武の方が優つてゐる。宗武は江戸時代を代表する極めて少數の歌人の一人である。彼の歌集の「天降言」は、傳統の久しい和歌史の上でも特殊な光をもつたもので、尊いものである。しかし彼を全體として見ると、和歌の師として賀茂眞淵を召抱へたといふことは、それにも優る意味多いことであつた。

前にもいつたやうに、我が國學は漢學に壓しられて發達しかねてゐた。非凡な人があつてもその力をあらはしかねた。幸にも權家で且つ好學の人があつて、國學者を後援して志を伸ばさせた。前にしては水戶の義公があつて、釋契沖をして萬葉集の研究をさせ、その上での劃時期的の大著、代匠記を著さしめた。後にしては彼があつて、眞淵をして同じ狀態に立たしめた。眞淵の大著は全部田安家に仕へた後のものである。又彼の社會的信用も、宗武の師であるといふことによつて添つたところが多く、彼の力ばかりではない。その事は彼の高弟さへもいつてゐる。新興の學問である古學のもとに、當時の多くの秀才を集めえたのは、彼の背後に宗武のあつたといふことが、大きく關係してゐよう。

宗武の眞淵を召抱へたといふことは、彼としては小さなことに過ぎなかつたらう。學問といへば漢學の時代である。彼の藝術觀さへも儒學的で、易風の具と觀てゐるに過ぎない。和歌も好きではあつたが、それよりも古代の音樂の方が好きで、又古代の服裝にも興味を持ち、その上の著述さへもある。荷田在滿を師として召抱へたのも、その方面の研究をたすけさせようとしたものと思はれる。眞淵を召抱へたのも、在滿が事情があつて、致仕したので、その代りとしてである。眞淵の俸祿を見ると、初めは五人扶持に過ぎない。十年を仕へて十五人扶持となり、致仕して、隱居料として五人扶持をいただいてゐるに過ぎない。十萬石の田安家としては、いふにも足りない扱ひである。

この、宗武としては何ほどのことでもなかつたことが、時代の上に大きな影響を及ぼしてゐる。そしてそれは彼の功に歸せざるを得ないことである。今日から觀ると感慨の深いことである。

一四

宗武には歌學書として「國歌八論餘言」といふものがある。名の如く荷田在滿の「國歌八論」を讀んで、それに對する自分の感想を書いたものである。八論の一論一論についての斷片的の感想で、纏まつたものではない。さすがに彼の歌に對しての意見は窺はれるが、作歌に比してはいふにも足りないものである。

在滿が、作歌は遊戲だ、治國の上などには關係がないといつたのに反對して、彼は儒學の立場から　古の支那の歌（樂といふ意味で）は治國の上に關係があつた。後のものは無くなつた。本來歌には理と技と兩方面ある。その兩方面を併せもつたものがいい歌である。すぐれた人はその理を得てゐる。しかし技を持たない人が多いからいい歌とはならない。治世にはこの理が盛んで、衰世には衰へてゐるといつてゐる、即ち歌は人格的のもので、いい歌とはその人格の適當なる表現だといふ程の意と見える。

我が國の歌にはそれほどの力はない。しかしやさしいもので、その意味での感化力がないとはいへない。といつて、まんざら棄てたものでもないといふほどの心を示してゐる。

要するに儒學の立場から歌を功利的に見、値の少ないものと見てゐるのである。この點は、眞淵によりも在滿に近いといへる。この考は、歌人としての彼にとつては都合のいいものといへる。對社會的の關係を認めないので、心をほしいままにすることが出來るからである。

歌について學ぶべきものがありとすれば、歌の理、即ち本質の方である。謂はゆる歌學は、技より外はいはない。學ぶに足りないものであるといつて、歌學から離れてゐる。これも歌人としての彼としては都合のいいことである。何物にも捉へられず、自己をほしいままにしうるからである。

歌は慰みだ。心やりだ。自由に詠むべきだ。詞に誤りがあり、拙いものであつたらば、人が捨てる。念と

すべきではないといつてゐる。これが彼の作歌の信念である。詞は古い方がいい。直截で、優だといつてゐる。これは彼の、他の方面に亙つても持つてゐた好尙である。

和歌の衰へたのは、對他的のものとし、競爭して作り出した爲である。歌合があつて以來、和歌は衰へて來たといつてゐる。彼の信念からは、當然のことである。

最後に、作歌の態度として、歌のよきを求めるは人の本性だから止むを得ない、それに捉はれないやうにすべきだといつて、

たゞ心にはよからむ事を思ひながら、そのあたる所のことわりにまかせて、やすらかにこそ有たきわざなれ。されば歌よむ事はもとよりおのが心をのぶるなれば、あながちにようせむと求むべきわざにあらず。ただ心にのみよからむ事を思ひて、そのわざをばたやすくすべき事にや。

といつてゐる。「そのあたることわりにまかせて」といふのは、ここでは、「その場合場合の實感に隨つて」といふほどのことである。作者としては徹底した態度といへる。

一五

「天降言」は侍臣の集めたもので、大凡年代順に集めてある。歌風の推移が分る。歌を得ようとせず、心をやらうとした彼としては適當な編み方をされたことといへる。

初めの方に、「右の御歌は享保より寛延までのうち云云」と註がある。眞淵の田安家へ仕へたのは寛延三年で、眞淵五十歳、宗武三十二歳の時である。それまでの歌は少く、且つ彼としては拙い。平凡な詞の誤用な

どさへある。眞淵が仕へた頃から、歌が躍進的によくなつて來てゐる。彼の歌はそれ以後である。

彼の歌風の特色は、一言にいへば寫生的である。彼のいはゆる歌の理(ことわり)に隨つたものである。同じく實感といつても、眞淵は心を主とする傾きがある。彼は形を主としてゐる。眞淵は綜合する傾きがあるが、彼は部分だけでをはるところがある。しかし、その形も部分も新鮮で、怪しきまでの魅力を持つてゐる。彼の歌の味ひはその魅力にある。

魅力はどこから來るか。彼は老いるまで、少年の持つ驚異の情を失はなかつた。それが歌のうちに際やかに出てゐるものがある。又、すべての歌のうしろに流れてもゐる。彼は平生見なれてゐたと思はれるものを、或時には初めて見るもののやうに見ることが出來た。そこには輕いながら驚異の情がある。そしてその情をとほしてその物を詠み出しえた。魅力とはそれである。大體は寫生であるが、單なる寫生とはならず、一種の氣分の添つたものとなつてゐる。形を主とし、部分にとどまつてゐるが、それが不足を感じさせず、十分なものとなつてゐるのは、かうした感情の添つてゐるが爲である。

彼の調(しらべ)はさわやかだ。本來、古代を重んじ、古語を愛してゐる彼だ。土臺はおのづからに素朴だ。その素朴に、この驚異の情が加はつて來てゐる。單純と明るさとのあるのは自然である。それがさわやかな調(しらべ)として感じられるのである。

彼は萬葉に溺れた時代がある。寶暦になつて間もない頃の或期間である。その頃の歌は萬葉の模倣となつて、彼としては比較的拙かつた時代である。

彼の歌を讀んで、生れ來つた歌人だと思はせられるのは、主としてこの驚異の情をもつてゐるところであ

る。彼ほどに持つてゐたものは中世の西行法師くらゐなもので、他にはちよつと見當らない。しかもその驚異の情が、實際に卽してあらはれてゐるところは、江戶時代でなくては出來ないことだと思はれる。同時に一方では、古典の影響を受けた時が最も拙い時であつたといふことも、歌人としての彼のすぐれてゐたことを裏書することとなる。

一六

題材の上から見ると、「天降言」は見落し難い特色がある。それは題詠の歌の多いことである。そしてその題詠が、驚くべくも謂はゆる題詠臭味を帶びてゐず、全く彼の實感になつてゐることである。

眞淵は題詠を避けた。止むなくするにしても、それによつて制限されることとの少い單純な題を擇ぶことにした。題詠は智的作爲に陷る。和歌を墮落させた一つの原因はそこにあると信じてゐたからである。しかし當時の風として、彼もかなりまで題詠をしてゐる。彼としては、不本意ながらするが、謂はゆる題詠にはしまいといふ用意は十分持つてゐたことだらうと思はれる。しかし實際を見ると、その彼でさへも題詠には題詠臭味が附きまとつてゐて、從來よりは少くなつてゐるといふ程度だけで、離れ去ることは出來なかつた。

然るに宗武は、この眞淵の出來なかつたことを、あざやかに仕おふせてゐる。

「天降言」の註に、「右の御歌、寶曆の年の中に堀河初度の百首の題にて遊ばしたるなり。されど今十題殘り侍りたるは、殿の炎燒の事ありてよみのこさせ給ひたるなり」といふものがある。卽ち九十の題を据ゑて題詠を試みたのである。

この九十題の題詠のうちには、いふところの驚異の情と、題詠臭味を脱しきつたものと、二重の意味を持つたものが多い。その意味で彼の歌風を代表するものといへる。こゝに引くこととする。

歸　雁

霞わけて雁歸る見ゆ行く先の遙けさもへばあはれむ吾は

盧　橘

御階邊（みはしべ）の橘さけりたちならす右の舍人（とねり）ら弓な觸れそね

宮中の御庭にある左近の櫻、右近の橘を捉へたのである。「右の舍人」は右近衞の舍人の意である。

葵

何故と事はしらねどあふひ草かもの祭に吾ぞかざせる

女　郎　花

わが戀ふる妹が垣根の女郎花白露重みかたむくもよし

薄

武藏野を人は廣しといふ吾は唯尾花分け過ぐる道とし思ひき

朝　顏

あした昇り夕べまかづる宮人の家によろしき朝顏の花

荻

荻はそもいかなる氣よりなり出でしそよげる音のかなしくあるは

雁

春さればきそひていにし雁がねの心細げに啼きて來にけり

紅葉

東の山の紅葉は夕日にはいよいよ紅くいつくしきかも

霜

霜はただ白しと思ふに霜おけば白菊あかく匂はすやたぞ

網代

夜半毎に網代もるなり篝火を氷魚は好みてよるにやあるらん

鷹狩

ふる雪に御笠もめさず皇子達のみ狩せすなりみ鷹勉めよ

逢不逢戀

かへらむと我がせし時にわが紐を結びし姿いつか忘れん

片思

吾はこへど汝は背くなり汝を背く人をこはせて我よそに見ん

恨

相思はぬ人は恨みじ四十餘の七つ經にける吾が年をのみ

曉

ひむがしに向へる家は朝あけに明けゆく空を見つつ樂しき

鶴

淸きかも白浪來よる住の江の岸に群れゐる鶴をし見れば

山

二つなき富士の高根のあやしかも甲斐にもありといふ駿河にもありといふ

驚異の情は暫く措く。單に題詠として見て、これほどその臭味のない作は、題詠といふことが初まつて以來、これほどのものは曾てない。何故に脫しえたといふことは、用意からではなく、彼の人柄から來たことと思はれる。

一七

彼の佳作を擧げることは止める。今日から見れば、彼ほどの詩才を持つたものが、「天降言」の歌だけでとどめてしまつたといふことは、和歌史の上から見ても極めて惜しむべきことであつた。

一八

眞淵の系統で、歌人として最も高名であつたのは、橘(加藤)千蔭と村田春海の二人であつた。二人は單に眞淵系統といふだけではなく、眞淵歿後には、その時代を代表する歌人となつて、矜持の高かつた京都の小澤蘆庵などさへも、交りを結ぶといふほどであつた。

一と口に千蔭、春海といはれた。彼らは歌風も似てゐた。歌論も似てゐた。人となりは千蔭の方が溫和

で、且つ書家としての名もあつた。漢學は春海の方が優れてゐて、文章では縣門第一といはれてゐた。又門弟にもすぐれたものがあつた。いづれも江戸の人で、千蔭は身分は高くはないが、割合に勢力のある幕吏、春海は百人の召使をもつてゐたといふ富商の主人で、社會的位地も相似てゐた。しかも二人は同門のうちでも親交を結んでゐたなかである。千蔭春海と、離すべからざるものゝやうに並べ稱したのも、理由のあることであつた。

橘千蔭筆（森繁夫氏藏）

彼ら二人はどんな歌を詠んだか。彼らの歌は、古典に類をもとめると、最も新古今集に近いものであつた新古今風は當時の堂上家の歌風である。眞淵が和歌として墮落の極にあるものとして攻擊してやまなかつたものである。然るに彼の後繼者にして、又その代表者たる二人は、その新古今風に近いものを詠むやうになつたのである。

彼らの當時における名聲といふものも、その新古今風なるが故である。妙法院宮堯延親王が、千蔭の歌名

を聞いて京都からその歌を召された。千蔭は喜んで奉つた。それを見て春海は、我が師の道が天下が弘まつたといつて喜んだ。眞淵は見ようと望むものにさへその歌を見せなかつた。解しえまいとする矜持からである。春海の喜びは、我が師の道の弘まりだといふところにあるが、それは師の道ではなく、當時の堂上家に似たところの歌であつた。眞淵を中心として見ると、案外な推移といはなくてはならない。弘まつたといふ上からいへば、春海のいふ通りであるが、如何せんそのものは、既に質の異なつたものであつた。

村田春海筆（森繁夫氏藏）

一九

千蔭には歌論といふほどのものがない。さすがに少しはあるが、大體春海と同じものである。春海は明晰に歌に對して自分の思つてゐることをいつてゐる。彼の歌はその心から出てゐる。

彼は師の眞淵を、自分の性情で解釋した。これは當然のことといへばいへる。しかしそれが師の眞面目であるといふに至つては誤りであるといはなければならない。今、師の道を行ふといひつつ新古今風になつて

行つた心持を、彼の歌論について瞥見することとする。

第一は、眞淵は古代精神を明らかにしようとし、その方便として歌を讀んだ。眞淵の歌は向上の手段である。尤も、古代の歌はやがて古代精神のあらはれで、古代のやうな歌が詠めるといふことは古代精神を我が物としたことだとはいつてゐる。春海はこの後の方に中心を移した。師の學問は歌學の根本は歌學で、師は歌人であつたとした。これは形を主として心を谷とした觀方である。和歌に深い興味を持つた彼は、おのづから眞淵をさう解したゝ見える。

第二には、眞淵が作歌の上で準據とした時代についてである。眞淵には三期のあつたことは前にもいつた。一期は新古今風、二期は萬葉風、三期は萬葉以上の時代である。春海は、眞淵の作歌に最も興味を持つた時代は第二期で、そこに彼の本領がある。その時代は、萬葉から三代集時代までを準據とした。これは自分の親しく見てゐたことであるといつて、時代を引き下げて來た。眞淵がさういつたのは事實だ。しかし眞淵の努力は、次第に時代を古くしようとするところにあつたことは前にもいつた。それを春海は意識的に引き下げようとするのである。

第三には、眞淵の上代の歌を慕つたのは、作爲を棄てて、心の誠に歸らうとするのである。又、調といふことは、詞のみやびやかならんことであると解した。誠と調さへ古への手振であれば、それ以外は自由であつていいと解した。そして「歌は心の眞をのぶるものなれば、必ずおのがものならむやうにこそあらまほしけれ」といつた。卽ち箇性のあらはれた歌を作るべきだといふのである。眞淵のいふのは、人間性の根本へ歸らうといふのである。春海の解したのは、我が箇性の眞をといふのである。同じやうではあるが、そこ

に深淺がある。

第四には、我が個性に中心を置く以上、自身の目をもつて見た、新奇なる題材をと思ふのは、當然の要求である。春海は、「珍らかに新しき心をこそ詠ままほしけれ。さらずばいかでかわが歌ならむ」といつてゐる。眞淵は新奇は欲しなかつた。のみならず源實朝の平凡に安んじてゐるのを尊しとした。新奇だと智的に部分的になる。平凡であつてこそ我が全體をあらはせると思つたのである。これも眞淵とはちがつてゐる。

三代集まではいい。しかも新奇なのがいいといへば、勢ひ、三代集を新奇にしたところの新古今風とならざるを得ない。一方この新古今風は、その時代に瀰漫してゐた時樣の風である。その當時から歡迎される風でもあつたのだ。

彼は又、我が眼で見た新奇とはいつたが、事實としてはそれは出來なかつた。歌は雅情だといふ從來の歌學に捉へられてゐたからだ。歌は心の誠とはいひ條、日常生活の上の俗情ではない。詩情として身にしみたものだと從來の信條である。それを承認する以上、新奇には限りがある。その意味での新奇を追つたところの新古今風を學ばざるを得ない。

彼らがかうした見解を抱くに至つたことを辯護する法がありとすれば、眞淵の萬葉風は末流は、同じく心を外にして形だけを學んだ爲、半解の古語を使ふことをもつて能事なりとして、和歌が異なつた意味における智的な、そして從來のものよりも面白くないものとなつて來た。彼らはその反動として、妥協の道を求めたのだといふことである。

しかし藝術には妥協がない。眞淵は歌を方便としたにもせよ、自己の爲に詠んだ。宗武は自己の慰みに詠

んだ。妥協を欲した千蔭と春海とは自己の爲のみではなかつた。歌の爲に歌を詠んだ。妥協を欲したのはその爲である。ここに純粹が失はれた。他の方面は知らず、抒情詩である和歌が純粹を失つて、妥協の上に立つては生きる道がない。

千蔭、春海の歌は、その當時は極めて歡迎されたものであるにもかかはらず、今日から見れば、その評價はかなりまで引き下げなければならないものである。彼らはその時代から適當な賞讃をうけたのであつた。

二〇

千蔭の歌風は、心としては常識的で、深いところはない。そこが親しまれやすかつたのだらうと思はれる。時に平俗に過ぎるものもまじつてゐる。又、餘りにもしやれを愛し過ぎる。ここにしやれといふのは主として、懸詞である。懸詞も、心を緊密にする爲に用ひられる場合は、そこに自然が添つて來て、一種の價値ある修辭法だと思はせられる。しかし彼の懸詞は、緊密を欲するところから來てゐるものは殆どない。單に詞の遊戯として用ひられてゐる。これは萬葉には少く、後になるほど多くなつて來てゐる。彼の懸詞の率は恐くは新古今にも劣るまいと思はれるほどである。率はそれほどで、心はそれよりも輕い。しやれ好きの彼の心から來るものと思ふ外はない。これもまた、泰平の極、樂天的に、享樂的になつて來た當時の人に親しまれた一つの點であつたらう。

常識的で、しやれ好きといふと、多くの場合、卑しさを聯想させられる。然し彼にはその卑しさがない。この二つが怪しくも自然なものとなつて、そこに或程度の魅力を醸し出してゐる。彼の歌の美はその魅力に

ある。
　この常識的と、しやれ好きは、彼の本質である。のみならず彼の時代の江戸人の生活情調であつて、性來として持たされてゐたものと見える。それが卑しさを帶びないのは、彼が幼少から始めた藝術的教養の結果であらう。卽ち彼は生來の詩人ではない。たまたま惠まれたる環境を持ちえ、それを善用して教養を怠らなかつた爲、おのづからにして或境地に到達しえたのだと見える。
　代表作とはいひ難いが、一夜十五首を詠んだものを引く。

八月十五夜、空いと晴れ渡りたるに、人人訪ひ來て共によめる十五首

なべて世の人の心も澄む月も空に滿ちぬる夜半にもあるかな
夕潮に浮べる月の桂楫（かつらかぢ）大江の御門（みと）に今ぞ寄すなる
吾園の小萩が上の露すらも名に負ふ夜半の月を待ちけむ
露深き軒端に這へる蔦かづら來る秋毎に月ぞ宿れる
數ならぬ庭の苔路（ぢ）の露をさへとめて宿れる夜半の月かな
定めなき秋のみ空の雲さへも今宵は月に心ありけり
今宵しも筏の床に浮寢して墨田河原の月を見てしが
玉すだれかかぐる宿も何かせむ軒端の蔦の露の月影
降るべき山の端もなき武藏野は月見るためのところなりけり
ことわりの夜半なりながらかくばかり隈なき月の影は見ざりき

明日も見む月とは思へど同じくは今宵ながらに明けずもあらなむ
いつはあれど秋のなかばの中空に隈なく澄める月を見るかな
あはれ知る今宵の月の影のみぞ八重葎をも隔てざりける
訪へかしと思へば人の訪ひ來つつ同じ心を月に見るかな
名に負へる今宵の月の隈なさに千度あふとも飽く夜あらめや

十五夜の月に對して十五首を詠んだといふことは、多作家の彼ではあるが、又、人人と共に詠んだとはいふが、珍しいことである。或意氣ごみを持つたものと思はれる。

續けてはあるが連作ではない。同じく月に對したものでも、眞淵の縣居での作は、連作で有機的になつてゐる。これにはそれがない。辛くして十五首にしたと思はれるもので、出來ばえにも相應にむらがある。

又、眞淵の作には、感興のおさへ難きものがあつて、おのづからに誇張も伴つ來た。これは平坦で、描寫の形を取つたものでさへも、後ろに說明の氣分を持つてゐる。彼は眞淵のやうな感興は持てなかつた。

卽ち彼には、眞淵の持つが如き全體を支配する魅力がない、又眞淵が持つが如き、自然に對し人に對して愛するところ求むるところがなく、隨つて喜ぶところがない。

あるものはといへば、平坦さである。明るさである。或程度まではしみじみとして、輕浮ではないところである。これを表現から見れば、古今集の說明に、一味の萬葉の描寫と、率直とをまじへて、淡淡として詠み去つたものである。しかもそのうちには、細心な注意が拂はれて、不注意なるが如くして注意深いものである。

第一首は、自然と人間との心を相關させた、古今以來の常套的の心ある說明である。厭味のないのを取りえとすべき作である。第二首は、「月の桂楫」が例のしやれである。月を舟に譬へ、又月中には桂樹があるといふ古今以來の思想を捉へて楫に關係させて、海に浮んだ月を叙したのである。彼の慣用してゐる風である。第三首は、萩を愛して植ゑ、家を萩園と號した彼であるから、眼前を捉へたのである。第一首と同じく、露すらも月を待つだらうといつてゐる心、それを想像としてゐる心、これが彼らの謂ふところの雅情である。眞淵の避けんとし、宗武の避けたものである。彼の系統からいへば平俗なものである。第四首は彼の庭に蔦を這はせてゐたことが春海の歌にもある。眼前である。今それに月の宿つたのを見て、「來る秋毎に」と、永い時の上に浮べて見てゐるところ、謂はゆる雅情で、常套的な心である。第五首の「數ならぬ」は身の下賤をいつたので、月の無差別をあらはす爲の對照である。これも平安朝以來の常套的の心で、幾何の實感が彼にあつたのかと疑はれもする。第六首は、非情の雲も情をもつて、我が見る月の趣となつたといふので、同じく平安朝以來の非情を有情と見る心である。第七首は、隅田川の舟中からこの月を見たいといふので、その舟を「筏の床に浮寢して」といつて、故事をにほはせて雅情化してゐる。第八首は、第五首と同じ心で、「苔路の露」が「蔦の露」に變つてゐるだけである。月の平等をたたへたものだ。「軒端の蔦の露の月影」といふ表現は、その纎細も調も、まさしく新古今風である。彼の慣用の一つのあらはれと見るべきである。第九首の「障るべき山の端もなき」は常識の常識である。何らの感興をも持たずに說明してゐる。平俗といはざるを得ない。第十首の、「ことわりの」は、永い過去を思ひ出して、眼前を餘情としていつてゐるので、謂はゆる上手とはいへる。しかし初二句は說明に過ぎたもので、それが感とならせない。第十一首は、古來どれほど詠

まれてゐる心か分らない。これほど熱意がないと、一種の詩的常識を說明したものに過ぎなくなる。第十二首は、一讀平凡には似てゐるが、或熱意によつて、その場の彼自身をおのづからに客觀化してゐるところがある。眞淵の精神に適ふところがある。しかし「秋のなかばの中空に」と、中を重ねてゐるところに、輕いながら例のしやれ氣を出してゐる。これが不徹底にならせてゐる。第十三首は、「八重葎」を下賤の家とし、月を擬人して「あはれ知る」ものとして、そして月の無差別をいつたので、第五首、第八首の繰返してある。この歌は本歌もある。第十四首は、このうちでの優れたものである。樂天的な和平な彼の人がらが、おのづからにあらはれてゐる。「同じ心に月を」といはず、「同じ心を月に」といつて、說明とはせずに狀態としていつてゐるところ、彼の教養を思はせるものである。第十五首は常識である。平俗に近い。

看來れば駄作の多きに堪へない感がある。しかし「うけらが花」は彼の自撰である。心ならぬものを加へてゐるとも思はれない。これを代表とはし難いが、ここにも彼のゐることは否めない。彼には長歌がかなりまである。全體として見ると、長歌に何よりも必要な氣魄がよわく、散漫になり稀薄になつたものが多い。しかし布置は正しく、言葉の流麗はある。今いいものの一首を引く。

縣居大人みうせまして三十ぢまり三とせになりたまひける神無月の晦日に、竹芝のおくつきのもとにつどひて、ふるきを思ひてよめる歌並短歌

四方山の守りにすとふ、梓弓末の中頃、いそのかみ古りにし世世の、手振をば忘れいにつつ、本つ世に引きも返さず、あまた年經にける事を、ますらをの弓末振りおこし、いそしくも思ひ起して、菅の根のねもころごろに、さどはせる世の人皆を、我が大人の導き給ひ、弓弦なすただ一筋に、すなほなる皇御國の、

古言を傳へたまへれ、新玉の年も經なくに、古への學びの道に、村肝の心を寄する、人さはになりにけるかも。かくしつつ五百千ぢの世に、天傳ふ日のたて日のぬき、隈もおちず行き足らはして、古へに立ち返る世を、松が根の遠く久しく、竹芝の磯山寺の、おくつきをあふがざらめや、梓弓本つ世しのぶ、ますらをのとも。

反歌

今よりの千歳の後に世の人のしきしのぶべきおくつきどころ

いふところは常識で、表現も平坦で、當然あるべき熱意が足りない感がある。しかし詞の使ひ方の上から見れば、「梓弓」といふ一枕詞を捉へて、それを初めに置き、終りに置いて照應させ、「本つ世に引きも返さず」といひ、「弓末振ひおこし」といひ、「弓弦なすただ一筋に」といつて、この「梓弓」で統一を附けてゐる。しやれといへばしやれであるが、不自然ではなく、目にも立たせずに使つてあるところに、技巧家としての手腕が見える。このしやれは短歌で慣用してゐるもので、その延長に過ぎないが、洗練されて自然なものとなつてゐる點は、揆を一にしてゐるものである。

二

千蔭の歌から春海の歌に移ると、かなりまで味ひのちがふことを思はせられる。何よりも先に感じることは、魅力の少いことである。何故だらうかといふことが問題となつて來る。

千蔭は、たとへ心は常識的であるにもせよ、しやれの面白みを知つてゐる。短歌の上で、しやれの爲のし

やれをいへば、全體はそれで終つてしまふ。即ち一つのしやれの爲に一首を捧げてしまふことになる。彼のしやれは、しやれとはいつても駄じやれではない。教養を待つた人のしやれである、必ず洗練が伴つてゐる。このことの正しいかどうかはもとより問題となる。しかし、心持の面白みを解してゐる人にして初めて出來ることで、それがないと出來ないことだ。春海にはこのしやれが少い。時代が時代なので、春海にもあるにはある。しかし古典を捉へ來つてするしやれが多い。しやれではあるが理詰めなところがある。

心持の面白みが少く、心をいふにも、物をいふにも、それを十分に言ひ切つてしまはたいと堪能の出來ないのが春海である。心をいへば、首尾を整へ、十分にいつて、言はずして悟らせるといふやうなことはせず、殆ど理詰めに近いまでにいふ。物をいへば、殘る隈なく、複雜を厭はずいつて、整つた形にしなければゐられない。即ち神經質な、潔癖な、學者肌のものいひをしなければ承知の出來ないのが彼である。心持の面白みではなくて、形の面白みである。魅力のないのはこの爲だと思はせる。

更に又、彼が獨自の姿を欲して、新古今風になり、題材の新奇を求めるやうになつたのも、彼としては必ずしも短見なばかりではなく、又時代に制されたばかりでもなく、彼の天性は、さうならざるを得なかつたのだとも見られる。彼が歌の上で眞淵を師としたのは、彼としては誤つたことであつたと、見て見られないことはない。

「雜歌」の中に「山畑」と題して

なづなさく花のにほひに暮れかねて霞に殘る春の山畑

續いて、「晴後遠水」と題して

水上や雨の名殘の山見えて夕日に浮ぶ宇治の川舟

といふがある。二首とも、捉へた光景のはつきりしてゐるところ、その光景の必ずしも平凡でないところ、又、その措辭の強くしつかりとしてゐるところ、手腕が見える。その手腕の上から迎へて見れば、新古今風とはいつても、模倣ではない。それに強さを加へえてゐる。又漢詩の趣を取り入れえたところもある。新風で、彼の歌だといへる。それならば面白いか、味ひの深いものがあるかといへば、それは俄にはうべなひ難い。面白みもないとはいへないが、題詠の作としての面白みである。手腕の面白みである。このなかに作者の心が生きてゐるとはいへないからである。作者の心の生きてゐない、抒情詩は、面白いといつても二の町のものであるのはいふまでもない。同じ「雜歌」に「閑居」と題して三首續いてゐる。

身をかくす類(たぐひ)とな見そ草の庵に事なくて世を過(すぐ)すばかりぞ

訪はれぬを何か歎かむひく琴も向ふ硯も友なるものを

世の事は思ひ忘れつ今日もまた筆のすさみに日を暮らすとて

產を破つて老いては侘しく暮した彼である。又好んで琴を彈いた彼である。この三首は述懷で、實感を詠んだものと思はれる。

言ふところはすべて對他的の心である。閑居の樂しみを感じて、我と我にいふのでもある。侘しさを感じて呟くのでもない。第一首は、覇氣を藏してゐる彼を他に說明する心、第二首は、訪はれぬ歎きを我と慰めた痩我慢、第三首は、筆のすさみに世間を忘れえた、月日の喜びの形ではあるが、いづれも他に示す心を持つて詠んだものと思はれる。侘しく暮して、侘しさを感じつつも、他にはそれを思はせまいとして詠んでゐ

る。不自然であるる。不自然を押し切らうとするのであるから、行き届かせざるを得ない。行き届いて、不自然が蔽へず、そして味ひのない作となりをはつてゐる。
彼の歌集は　歌の數が多い。しかし手法は單調で、大體上の繰返しである。

閑中春曙

散り積る花にやまだき白むらむ拂はぬ庭の春の曙

朝顔を見て

朝顔の移ろひやすき花にしもはかなかる世をたぐへてぞ見る

又

郭　公

さやかにも名のるか月の玉すだれかかぐる軒の山ほととぎす

夏　虫

おろかなる身にぞたぐへむ夏虫の結ぶ氷も知らぬ習ひは

新奇を欲する上からの技巧の多過ぎ、言ひ過ぎの理詰めが隨所に繰返されてゐる。純主觀の歌の方の割合に少ないのは幸である。
彼は長歌を詠み、又他にも勸めてゐる。後來歌に志あるものは、この處女地に向ふべきだといつてゐる。形の整ふことより複雜を欲する彼である。又漢詩を好む彼である。長歌をと思つたのは當然である。
しかし彼の長歌を見ると、形が長く、整つてゐる割合に、心が薄い。隨つて散漫の嫌ひがある。手腕の優

れてゐる爲に救はれてはゐるが、眞淵に見る長歌の如きものは全くない。

一首を引く。それは本書に收めた海量と初めて逢つた時の作で、その關係からも面白いが、彼の長歌としてもいいものだからである。

海量法師の始めて訪ひ來けるに詠みて送れる

春の日の、のどなる時に、伏庵のかな戸を開き、弱湯酒のみつつをれば、走り出にくつの音聞ゆ、今しはし誰か來ぬると、立ち向ひ姿を見れば、霜八度置くと見るまで、眞白髪を頸根に生ほし、海松の如わわけし髯を、胸坂に長くし垂れて、布衣眞袖もゆたに、手束杖腰にたがねつ、いづくより來ますと問へば、年久にしが名を聞きて、岩橋の近江の國ゆ、はろばろと我は訪ひくと、ねもごろに君ぞ宣らせる、しかれどもおその我はも、なぞへなき世のしれ人、ひがみたる國の棄て人、我が眼らは四つしもあらず、我が口は二つもなきを、いかさまの人と聞かして、めづらしみ我を訪はせる、いともいとも怪しきかもよ、眞白髪のをぢ。

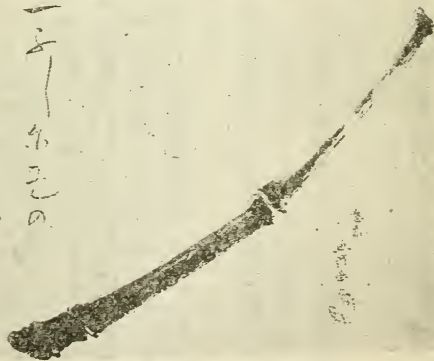
籠もつた味ひはない、狀態が見えるのみである。遊歴僧海量の樣子も變つてゐるが、近江から慕つて來たといふと、眼が四つある譯でも、口が二つある譯でもない自分を、何が珍らしくて來たといふ春海のすね方も面白いといへばいへる。とにかく彼の面目を直寫してゐるところに生きた味ひがある。その意味で面白い作である。

楫取魚彦家集は、清水濱臣の編んだもので、安永五年、六年の二年分の歌の、寫しとなつて散らばつてゐ

るのを限にしたものだと序に記してゐる。安永五、六年は、魚彥の五十五歲から五十六歲へかけての時である。六十歲で死んだから、晚年の完成された歌だけが刊行されてゐたのである。

眞淵の創めた萬葉風の歌を、敎へられるままに詠んで家を成したものは、僅に三人だけである。宗武と、魚彥と、海量である。

しかし、その三人も、眞淵の精神は受け繼がなかつた。宗武は我が慰みにとどめた。海量も同樣である（これは後にいふ）。魚彥に至つては、慰みといふ純粹さはなく、これをおもちやにした傾きがある。家集を見ると、彼の二年間に詠んだ歌の數は相應に多く、宗武の生涯に詠んだものに匹敵するほどである。しかしその大部分は、出入りをしてゐた豐前中津侯の家で、侯の家族の歌の相手として、題を出されて詠んだ當座の歌と、又、侯の家中の懇意な者へ送つた謂はゆる消息の歌である。自身の心をやる爲のものは少數だ。のみならず謂はゆる難題を得意になつて詠んだものも少くはない。今の家集だけで見ると、魚彥は謂はゆる歌詠みとなり、權家の歌の師匠となつたことを甚だ得意にしてゐたがやうに見える。この點から見ると、歌風は萬

梅取魚彥自書賛
（森繁夫氏藏）

葉風であるが、歌そのものに對しての態度は、堂上歌人のそれをもつて渡世の具としてゐたのと擇ぶところがないかのやうに見える。

彼は氣魄には乏しいが、歌才は極めて豊かだつた。しかも素質は純粹で、濫作をしつつも、俗惡な作は一首も持つてゐないといへる。

萬葉風を單に一つの歌風と見、その風を我が物とすることが彼の願ひであつたとすれば、彼はその意味では眞淵門下第一である。氣魄がないので創意はない。萬葉の作意を捉へて詠みかへることによつて滿足してゐる場合も少くはない。この點では宗武には比すべくもない。しかし口を開けば歌となり、その歌がそれぞれ或程度の趣を持つてゐる點では、宗武も彼には遠く及ばない。彼は樂天的な、問題を持たない、素性のいい人で、歌才としては非凡なものを持つてゐた人である。

九月二十五日(安永五年)の夜、同じ殿(中津の殿)の御母君の御許に、琴笛のすぐれたる人人を召して終夜遊びしたまふに、歌よめと仰言ありければ

常世かも海の宮かも糸竹は田鶴の聲かも龍の聲かも

賀の歌である。固くなり易く詠み難いとされてゐる賀の歌である。淡淡として常語のやうだ。それで歌になつてゐる。形が萬葉風になつてゐるのが、その歌となつてゐる一つの理由だ。才人といはざるを得ない。

十月十八日(同じ年)、薩摩中將君、備前侍從君、中津の君の御館に入らせ給へる日、御前に侍りて親しき御中らひをことほぎ奉る歌

茂り合ふ五百枝橿原橿原に風は吹くとも霜は置くとも

これは前よりは改まつてゐる。しかしその輕妙においては同樣だ。

四月二十三日（安永六年）、父まさずなりて四十九年なれば、後のわざすとて
おくつきの前にてよめる

ちゝの實の父いまさずて五十年に妻あり子ありその妻子あり

人生を大觀しえた心があるといへる。しかし樂天的な、明るい心である。複雜した心を、これほど單純にいつて、一種の感となしてゐるところは、さすがに彼である。

秋の花野

秋の野の尾花くず花はぎの花知らえぬ花も今盛りなり

萬葉の歌を踏んではゐる。しかしこれでいいとしてゐる彼の腹は、その道に老いたものにして初めて持てゐるものである。

七月朔日（安永六年）、姫路君の御館に召されけるに、御題五。筑波山に登りて國見す

筑波根に汗かき登り見放くる國うましけむ女の神男の神

「汗かきのぼり」は萬葉を取つてゐる。「女の神男の神」は、山そのもので、古代の信仰をそのままにいつたのだ。四句は「見放くる」で四香である。題詠としては自在なものだといはざるを得ない。

雲を

天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

單なる寫生と見えるが、陰影が伴つてゐて、狀態だけだとは思はせないところがある。詩魂を持つてゐた

といはざるを得ぬ。

數の文字のみにて歌よめと人のいへりければ

一九二八、千萬四四八、十四三九二、八萬十九二二四、四九九二八七四

人國は、千萬よよや、豐御國、やまと國にし、如く國はなし

求められ、喜んで、かうした遊戯をもしたのである。

海量法師の歌は、「一夜花」と日記とにある。これを長い和歌史の上から觀れば、歌人としての海量は、一流でも二流でもなく、それ以下の人と思はれる。しかし眞淵系統の歌人として見ると、純粹な萬葉風を詠んだ點において、宗武、魚彥と相並びうる人であらう。それは眞淵系統とはいつても、他の人たちは、萬葉以外の歌に親しんでゐる。そしてその影響をうけてゐる。これは、それを脫せんと努力した師の眞淵でさへも、如何ともし難いものであつたと見える。然るに宗武と海量とは、殆ど萬葉以外のものの影響を見せない。さういふうちでも、宗武は萬葉を道しるべとして、どこまでも自身の所好にはひつて行き、あざやかに自身の歌としてしまつてゐるが、海量にはそれだけの冴えがない。どちらかといふと萬葉を模倣し、それから脫しようとしつつ脫しかねてゐる趣さへある。純粹といふのはその意味においてである。今和歌史といふ上から離れて、江戶時代における萬葉風の歌を詠んだ人といふ上からいへば、彼は注意に値する人である。

「日記」の序は彼の歌論となつてゐる。要は、歌を詠むといふことは、それによつて胸中の一切を排し去ることである。この、胸中の一切を排して、樂しい氣分になるといふことは、敎といふ上から見れば極めて

鋭いことである。我が歌はそれだといふのである。初めは一向宗の信で、後には禪門に入つたといはれてゐる彼である。漢學も修めて詩文も作つてゐる。敎養の上からいふと、當時としてはかなり廣かつたと思はれる。その彼が、作歌を第一の敎と信じて、實行したのである。我が眞をいはうと思つたのは論の無いことであらう。それでなければ、慰めとはなつても敎とはならないからである。

彼の歌は、これを形から見ると萬葉風ではあるが、味ひからいふと一家の風がある。第一は自在で言はんとすることは必ずいつてゐる。時にはその自在があくの脫けたものとなつて、一種の魅力をもつて、微笑を催させるものがある。しかしこの自在は主として心で、表現は時には伴ひかねて、粗笨といはざるを得ないものがある。二流以下と思はせるのは、この表現についてである。第二には一種の柔らかみがある。眞淵はこの柔らかみを避けた。後世の歌風から脫しようとする爲なので、そこに意圖が加はつた。避けは避けたが、態とらしさがある。海量は萬葉風ではあるが、初めからこの强さは念としてゐない。萬葉といふ圈内にあつて、安んじて柔らかさを發揮してゐる。そこに自然がある。時にはしみじみしたものとなつて、その意味で魅力あるものとなつてもゐる。

旅の歌は面白さうに見えてその實面白くないのが普通である。和歌はおのづから抒情的になるが、旅での抒情はおのづから單調になつて、型に陷りやすい。旅での興はおのづから度を過しやすい。隨つて獨よがりの、興を强ひるものになりやすい。海量にはそれがない。「一夜花」の歌は、何處での歌を見ても、眞を持つた安らかなもので、受け入れやすいものである。これは何ほどのこともないやうに見えるが、和歌としては注目に値することである。これは一つには、彼は全國を二度までも步いてゐたといふから、自然に馴れ親

しんでゐた爲もあらうが、主としてはその人柄から來てゐるものと思はれる。

日記の歌には粗笨なものが多い日日の興をつとめて歌としたのであるから、當然のことで、そこを趣とすべきであらう。時に閑があつて、旅愁を感じつつ、ひとり眼前の景を眺めて興をやつてゐるものがある。さうした場合彼は、淡い感傷をとほして、老成した人生觀をあらはして來る。それには態とではない宗教的情操が籠もつてゐて、これを歌として味ふよりも、直ちに海量といふ一人格の氣息に觸れるやうな感を起させられる。又歌として見ると、その無意識に詠みすてたものが、却つて現代的になつてゐることを思はせられて、その意味の味ひをも感じさせられる。

今、「一夜花」から、彼の面目の偲はれる歌の數首を引く。

大みねにまうでける時

あさまだき霧のくらきに大みねのみ谷とよもしほととぎすなく

須磨にて

おほ海のありそに出でてあまのかるみるめにあかぬすまの海かも

なごやより大野の浦にわたる時

夜もすがらふねこぎゆけばちたの浦のあまのたくひのをちこちにみゆ

沖津のうまやより身延山までふじ川のながれにそひて山路をのぼりゆく時

ももくまの山の間めぐるふじ川のかはべの道のはるけくもあるか

養老のたきを見て

ももしぬのみぬのたき野のた度山の
みたにひびきておつるたきつ瀬

刀禰川をわたるとき

とね川のみかさまさりて生ひしげる
あしの葉末を舟こぎわたる

阿武隈のほとりをすぐるとき

みちのくのあぶくま川のもゝくまの
道ゆくたびのかぎりしらずも

松嶋にて

天地はあやしきものか八百あまり八
十ぢの嶋のなれるおもへば

むろの津よりさこしの浦にわた
るとき

はろばろにおもひし嶋のあづき嶋ち
かくも吾はこぎきつるかも
つつみもてゆくものにもがとときさへ
ぐからにの嶋によする白浪

上田秋成筆
（森繁夫氏蔵）

上田秋成は眞淵の直接の弟子ではない。眞淵の弟子の河津美樹の弟子である。しかし學問の上では眞淵を慕ひ、又歌は萬葉風を詠んでゐる。まさしく眞淵系統である。秋成は多方面の人である。しかし和歌だけを取り出して見ても、この系統における傑出した人といへる。

今、單に和歌だけについて瞥見することとする。(歌論については省く。)

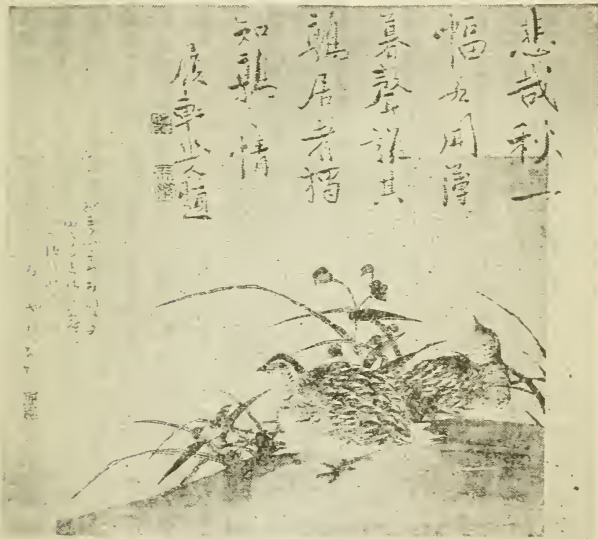
物の趣、面白みを解してゐるといふ點から見て、秋成は江戸時代を通じての極めて少數のうちの一人である。しかも彼はやや廣い範圍にわたつて、その事が出來た。概して歌人は、その興味を感ずる範圍が狹い。その廣さからいふと、彼は極めて少數のうちの頭立つた人であらう。

今「冬歌」のうちから例を引く。

落葉

森ふかき神の社の古籬すけきにとまる風の落葉は

上田秋成筆懐紙

(森繁夫氏藏)

雪

故郷はいかにふりつむけふならむ奈良の飛鳥の寺の初雪

丹波路に打越えくれば野も山も照る日ながらにはだれ雪ふる

雪深し

根芹生ふ田打の水澁の色ながらこほれる上に雪のつもれる

水鳥

池の鳥松の小枝にゐる鴛鴦の妻よびかねて波の上におつ

冬の梅

ひらくやと冬の北窓あけ見ればふふめる梅に雪のかかれる

追儺

年毎にやらへど鬼のまうでくる都は人の住むべかりける

上田成秋自書賛
(森繁夫氏藏)

これらの歌は、必ずしもすべてが優れてゐて、彼を代表しうるものといふのではない。しかし當時の歌として見れば、際やかな特色を持つてゐる。特色といふのは、これらの題材は、誰が見ても歌になるといふものではない、多分は大抵の人は捉へないものである、捉へても熱意をもつて歌としようとするものではない。それを彼は捉へて、熱意をもつて歌として、或程度まで優れたものとしてゐる。卽ち彼によつて發見され、彼によつて生かされたものである。

彼はちよつとしたものにまで興味を感じた。古社の古簾の編目に落葉が挾まつてゐると、それが面白かつた。田の水澁が水澁の色のままで氷つてゐるとそれが面白かつた。追儺を見ると、年年からして鬼を追ふのだから、ここは餘程よいところで、追はれても追はれても鬼が來るのだらう、それだとこの都は人も住んでゐるべきところだと興じた。これほどのことは或は思ふ人があるかも知れない。しかし當時の歌の世界では、誰もこれほどまでに打込んで詠んではゐない。その打込むところに、彼の興味の强さが見られると共に、彼の自己をほしいままにしてゐるところがある。この興味に觸れて自己をほしいままにする、これが秋成の歌の特色となつてゐる。彼の歌の面白みはこの點にある。

彼くらゐ印象的の歌を詠むものは少い。今「秋歌」から少しを引く。

あした湖上（琵琶湖）の樓に遊ぶ

白雲に心をのせてゆくらくら秋のうな原思ひわたらむ

月　　歌

我がすれる花田の衣のつき草の色なる空に月澄みわたる

峰　月

ねざむれば比良の高ねに月おちて殘る夜暗し志賀の海面

鹿

月かかる梢の紅葉散りはてて牡鹿のたちどあらはなりけり

秋のはて

久かたの天の河原もかげきえて秋の夜くらく雁なきわたる

これらの歌のうちの或物は題詠かとも思はれるが、それにしても彼に捉へられて來ると、一種特別の氣分となつて來てゐる。秋の色を見て、「我がすれる花田の衣のつき草の色」だといつてゐる。花田といふ色は、その初め月草で染めたところから來てゐるといはれてゐる。今は一種の智識である。それにもかかはらず、空を形容してかういはれると、それが直接な、印象的な動かし難い力を持つたものとなつて來る。これは技巧ではなく、打込んでゐる彼の氣分である。技巧はその氣分を表現する上で適當に驅使されてゐるに過ぎない。

「久かたの天の河原もかげきえて秋の夜くらく雁なきわたる」といはれると、われわれは見上げる暗い空に雁の聲がして、その遠ざかりゆくのを聞きうる。彼は「天の河原もかげきえて」と斷つてゐる。見えてゐたあの天の河原が今は隱れてしまつたことをいつてゐるのである。普通ならば、その隱れた理由をいふ。われわれも聞かうとする心がある。彼は理由になぞ頓着せず、ただ暗い夜空の雁の聲をいつてゐるだけであ

る。この歌の持つてゐる魅力は、その理由をいはないところにあるといふより、その理由をいはうと思はない、即ち一點にのみ打込んで來るところにある。この魅力は彼が物語の上であらはして來るものと同一なものである。これは形式が短く、取材が平凡であるので、それほどには感じさせないが魅力そのものだけいへば、物語のそれに劣るものではない。

彼のこの歌風はことごとくが成功してゐるとはいへない。しかし殆どすべてが同じ詠み方であつて、たまたま純寫生の歌に平坦に近いものがある程度である。

今「春歌」から、その風のやや目立つものを引く。

立春霞

風はやき山はけしきをたちかへて横川の杉に霞たなびく

比叡山を眺めての歌である。上三句は、事實であるには相違ないが、これだけ踏ん込んだ言ひ方は、彼でなくてはしないところで、又他の人はしようとも思はないだらう。

我こそは面がはりすれ春がすみいつも生駒の山にたちけり

「面がはり」は老いての面變りである。自然の悠久に對して人間のはかなさを感じたのであるが、上三句の言ひ方で、さうした宗教的なしみじみした心は消えてしまつて、むしろ自然を罵つてゐる氣分があらはれてゐる。四句の「いつも生駒の」といふところにもそれがある。毒毒しいから惡いともいへるが、反對に面白いともいへる。とにかく彼の臭ひの濃い作である。

梅

曇り日はことにぞ匂ふ梅の花風ふきとづる深き霞に

上三句の説明は、踏ん込まずにはゐられない彼の風からである。一脈の卑俗味があるといへる。しかし反對な表現を自在にするところの彼である。好んでしたので、止むたくしたのではない。彼のその時の氣分の持つた卑俗味である。

柳

大寺の門べに立てる古柳土はくまでに枝は垂れにけり

九重もちかくやなりぬ道ひろきゆくてにもゆる春の青柳

彼としては輕い心のもので、寫生風のものである。しかし「土はくまでに」、「道ひろきゆくてにもゆる」など、印象が際立つて、やはり彼の氣分の作だと思はせられる。

山路花

夜にかくれ逢ひにし人に花山の道にゆきあふおもなしや我

取材はまさしく狂歌又は川柳である。歌人の誰もが詠まうとは思はなかつたものであらう。自身の氣分に觸れうる彼にして初めて詠めるものである。或は物語の作者にして詠める歌といふべきであらう。

花下遊

石川のこまのたはれ男花に遊びぬしある人の帶たとらしそ

古い謠ひものを捉へての作である。前の歌と同じく、彼でなくては詠まない境である。

古墳花

しめはへし苗代小田にかげ見えて年ふる塚の花も咲きけり

古墳に春の花の咲くのを見ると、自然と人事との對照から來るあはれを感じるのが普通だ。彼はさうした感は起さない。古墳のめぐりの鋤かれて田となつてゐるのも平氣だ。古墳の上の花が、しめ繩を張つて祝つた苗代田の水にうつつてゐるのを見て、早苗と同じ美しさを感じてゐる。これも彼でなくては詠まない。

蛙

夕されば蛙なくなり飛鳥川瀨瀨ふむ石のころび聲して

淺瀨の小石川の飛鳥川は、徒渉することが古くから歌に詠まれてゐる。今もそれをしつつ、そこに鳴く蛙の聲を、我が踏む小石の鳴る音に譬へたのである。境は何でもないものだが、彼のその時の明るい氣分を捉へられて、寸情の溢れた歌となつてゐる。これも彼なのである。

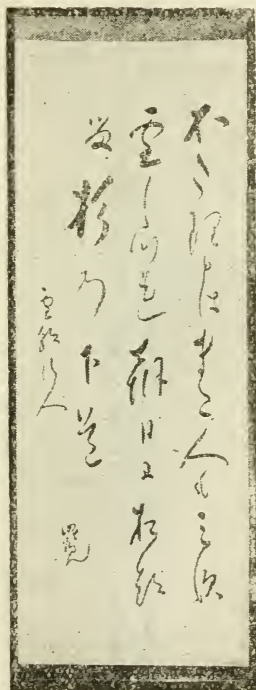
眞淵系統だとはいふが、秋成の歌は、傳統から完全に開放されて、我をほしいままにしてゐる點においてその系統である。その我をほしいままにしてゐる點は、宗武と似てゐる。彼は貴族の打ちあがつた、のびやかな態度をもつてしてゐる。これは平民の鬱壓させられた心を我とまぎらさうとしてのほしいままさである。我儘といふに近い。しかしその平民は傑出した文藝家で、文藝家のする我儘である。宗武よりも視野が廣く、多方面である。又陰影が深くて、それが趣となつてゐる。

眞淵の系統に彼のあることとは、その系統の大きな誇りである。

橘曙覽は、系統からいへばまさしく眞淵系統であるが、關係からいふと、かなり間接になつて來る。彼は眞淵の弟子本居宣長の弟子である、飛驒の田中大秀の弟子である。そのあひだに二代を隔ててゐる。しかし思想からいへば、眞淵に創められ、本居宣長に大成された近世の古學を繼承してゐ、歌の上では眞淵に創められた萬葉風の歌を、終生を通じて詠んでゐる。その萬葉風の上では、宣長はもとより、師の大秀よりも徹底してゐる。眞淵系統とすべきである。

萬葉風の歌人としては、彼は江戸時代を通じての二三、三四の代表者の一人である。それに彼の歿したのは明治元年で、まさしく江戸時代の末期を飾る人である。

系統の上からはやや間接であるが、彼の名は本集からは逸し難いものである。

橘曙覽筆（金子薫園氏藏）

眞淵は作歌を向上の方便とした。宗武は慰めとした。曙覽は事業としてゐた。單に作歌といふことに沒頭し

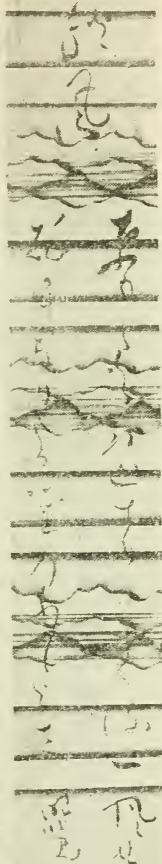
てゐたといふ意味では、千蔭も春海も沒頭してゐた。事業といへばいへる。しかし彼らは、歌の爲に歌を作つてゐた。初めから歌の世界にはひつて、優れた歌を詠むといふことを念としての沒頭である。歌を主とし、自身を從としての生活である。曙覽は自己を歌とした。優れた歌を詠むといふよりも、自己を完全に表現するといふことを念としてゐた。自己が主で歌は從である。その點がちがふ。尤もこのことは程度の差で極度まで行けば曖昧となつて來る。それは事の性質上當然のこととしなければならない。全體として觀れば、彼はかういふ意味において歌と終始して、その他の事は何も思はなかつた。

橘曙覽筆（山口氏藏）

意識的に自己表現をして、人としての或完成に達する。これは眞淵の敎へたところで、直接の弟子の殆ど全部が遂げえなかつたことである。彼は後に生まれてそれを遂げた。事業として立派な事業である。同時に

この態度は、現代に繼承されてゐるものである。彼は一面では同時に現代的だといへる。

彼の思想の根本は古學である。古代精神を奉じてそれを實生活に移してゐる。この天地を、生ませられた神のものと信じ、その神は嚴存されるものと信じ、自然に任せて生きてゐた。自身の生活としては、心には眞心、實際生活には單純を欲して、極度にまでそれを行つた。この間の消息は、作歌の隨所にあらはれてゐる。

しかし彼は單なる神道者流ではなく、生まれながらの歌人であつた。彼は豐かな趣味をもつてゐ、鋭敏な感受性を持つてゐた。事毎に面白かつた。そしてそれに引き込まれ、溺れても行つた。

稲　曙覧筆（蓬山宗璞氏藏）

古學の信念と、生まれながらの物好きとが、彼の性格と敎養とによつて、微妙に統一されてゐる。そのあらはれが卽ち彼の歌である。彼の歌集は、取材が廣く、變化が多いが、要するにこの範圍のものである。

蝨

着る物の縫め縫めに子をひりてしらみの神世始まりにけり

綿いりの縫目に頭さしいれてちぢむ蝨よわがおもふどち

やをら出(いで)てころものくびを匍匐(はひ)ありき我に恥する蝨どもかな

三首連作で、續いてゐる。自分の着てゐる綿入の縫目に、蝨の卵のどつさりあるのを見附けて、蝨の神世が始まつたと、冗談ではなくいつてゐる。蝨と人間とを、同じ天地のあひだの生物と見る心と、蝨の世界の始めに、尊くも尊いものにしてゐる神世といふ譬喩を用ひる心とが、やがて彼の心である。彼の古學の精神がいかに實際化されてゐたかを思はせられる。第二首は親の蝨の、縫目に頭をさし入れてゐるのを見て、こ

橘曙覽筆（森繁夫氏藏）

の世に小さくなつて暮してゐるからだと見て、われわれの仲間のやうだとあはれんでゐる。蝨と自身とのあひだに隔てのない心だ。第三首は、人前で蝨が這ひあるいて、我に恥をかかせるものどもだと呟いてゐる。しかし憎む心は見えない。

蝨を題材とするなどといふことは、從來の歌の世界では思ひも寄らないことであつた。それに似たことをいつても、他の何事かをあらはす方便としてであつて、その物を中心としてなどいふことは全然なかつたこ

とだ。彼によつて蟲は、この世界の相應なものとして初めて生かされて來た。生かしたのは彼の古學の精神である。

彼のこの生活態度と狀態とを最も直截に傳へてゐるものは「獨樂吟」五十二首である。

たのしみは草の庵の莚敷ひとり心を靜めをる時

を始めとして、同じ形式の繰返しによつて、實際生活の上の彼の樂しみを詠みつくしてゐる。或特殊な場合の喜びを詠んだ歌は古來少くない。しかし實際生活の上の樂しみをこれほどまでに詠んだものは例がない。彼は貧窮のうちに豐富なる樂しみを味ひえた人である。趣好と古學とが彼をそこまで到らせたのである。

「彼」の歌は連作であるが、この連作といふことは眞淵が奬勵したことである。それは前にいつた。しかしこれを好んで用ひて大成の域に進めたのは曙覽である。ものを全體として見て、その全體をあらはさうとする心が、彼にもあつた爲である。更に又、眞淵の連作は、抒情味の勝つたものであつた。歌風の然らしむるところであるが、連作としては抒情的のものの方が詠みやすいからでもある。曙覽の連作には敍事的のものがある。連作としては當然その方面へも向ふべきである。それに又曙覽は、敍事すなはち客觀描寫の上に實に非凡な力量を持つてゐる。これは彼の特色である。彼が作歌に溺れて、他念なく過しえたのも、一つはこの客觀描寫そのもの即ち推敲を樂しみえた爲かも知れない。

今、連作と、客觀描寫の一つの例を引く。

飛驒國、富田禮彥、おほやけのおふせにて、去年より此國(越前)の堀名といふ山里に物しをる、春ば

かりとぶらひたりけり。ここは近きころ白がね出づとて、禮彦其つかさにまけられて……、人あまたありて、此わざ物しをるところ見めぐりありきて、

日のひかりいたらぬ山の洞のうちに火ともし入てかね掘出す
赤裸の男子むれてゐて鑛のまろがり碎く鎚うち揮て
さひづるや碓たてゝきらきらとひかる塊つきて粉にする
筧かけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる
黒けぶり群りたたせ手もすまに吹鑠かせばなだれ落るかね
鑠くれば灰とわかれてきはやかにかたまり殘る白銀の玉
銀の玉をあまたに筥に收れ荷緒かためて馬馴らする
しろがねの荷負る馬や牽たてゝ御貢つかふる御世のみさかえ

銀山の狀況が、宛として眼にうかぶ。記事ではあるが、同時に詩趣をも持ちえ、一首一首の聯絡が緊密であるが、同時に餘裕を持ちえてゐるところ、歌としては特別の出來ばえではないが、しかし和歌史の上からも注意に値するものである。

彼がいかに微細なものにも興を持ちえたかの一つの例を引く。

疎竹三禽圖

茂からぬ一もと竹の細き枝に乘りて親まつ雀兒みつ
山がらと雀と二つ今一つ何鳥なれか竹くぐりをる

竹の霜うちとけ顔に頭三つ集めてかたる友すずめかな

竹の霜とけて雀の睡るかな三つ一枚に羽をまろめて

畫を見ての興である。竹に小鳥三つの畫を見て、その興を詠んだのである。畫は特に好きで、好んで題畫の作をしてゐる彼である。これは微細な興の例として引いた。

以上、言ひ來つたことは、つとめて概略にとどめようとしたが、或は冗漫に失したかも知れない。それはとにかく、江戸時代の中頃に、賀茂眞淵によつて唱道された、萬葉復歸といふ當時の新風は、その時代の終りに、橘曙覽によつて、事實として完成された趣がある。曙覽をいつたことによつて、この解說は終りとする。

解説　その二

賀茂眞淵

賀茂眞淵の生れたのは元祿十年であつた。江戸時代としては漢學は旣に開けたが、國學はこれからといふ時期であつた。生れた家は遠江國敷智郡岡部(今の伊場村)で、その家は神官を職としてゐた。その家は由緒のあるものであつた。祖先は賀助といつて、天喜年中(御冷泉天皇の御代)從五位下に叙せられた人で、又歌にも名があつて、その作が後拾遺、金葉、詞花等の勅撰集に入れられてゐる。この人は京都の賀茂神社の氏人であつた。

遠江へ移つたのは、天皇としては龜山天皇、執權としては北條時宗の時代の天永年間、賀茂氏のもので宮中へ仕へてゐた女官があつて、名を筑前局といつた。この人が遠江で、封戸五百石を賜つた。女の封戸は一代限りの定めであつたのを弟が相續することになつた。これは、その領地へ賀茂の大神を勸請したので、その社領としてであつた。

戰國時代に、その社領は今井氏の爲に奪はれてしまつた。その末に政定といふ人があつた。元龜年間、德川家康が、甲斐の武田家と三方原で戰つた時、政定は德川氏を助けて、家康から賞をもらつたことがあつた。

眞淵の父は定信といつた。母は同郡天王村の竹山氏の女であつた。賢婦人であつたと思はれる。眞淵は末子であつた。姉婿である同族の政盛の聟養子となつたが、妻に死別した。彼は悲しんで、出家して眞言宗の僧とならうとした。二十八歳の時である。

次いで、濱松驛の本陣梅谷甚三郎の聟養子となつた。彼の妻は彼の宿屋の主人に適さないのを見て、學問をもつて世に立つことを勸めたといふ。

賀茂眞淵畫像（森繁夫氏藏）

當時の學問といふと漢學である。彼は太宰春臺の弟子の渡邊蒙庵を師として古文辭學を修めてゐた。しかし同じく學問をするならば國學を修めようと思つた。祖先には和歌で名を成した人がある。自分もその跡をとめようと思つたといつてゐる。しかしそれのみではなく、家が代代神官であつたといふことも關係してゐよう。又、當時の國學の大家荷田春

滿とも多少の關係があつた。彼は濱松の諏訪社の大祝、杉浦信濃守國顯と友として交つてゐた。國顯の妻は東滿の姪であつた。國顯と東滿とは深い關係があつた。國顯は、東滿について國學を修めることを勸めた。これも關係のあつたことであらう。

荷田春滿は當時の國學の大家であつた。京都伏見の稻荷社の司家であつた。皇道復古の學に志して、國史、律令、古文古歌に通じてゐた。一方では、漢學が國家の學となつて、國學の顧みられないのを憤り、京都に國學校を興さうとして、爲政者に建白をして許された。その事は果さずして死んだが、當時としては時流を拔く抱負をもつてゐた人であつた。

眞淵の京都へ行つて、東滿について學んだのは、三十七の時であつた。學ぶこと四年、四十一の時に、春滿は六十八をもつて歿した。

眞淵は家に歸り、翌年、四十二で江戸へ出た。

江戸では初め村田春道の家に寓居した。春道は豪商で、召使を百人も使つてゐたと眞淵の文にいつてゐる。代代學問を好んで、春道の子の春鄕、春海二人とも、眞淵門下として家を成したといふ家風である。後、橘枝直の家の隣に移つた。枝直は幕吏で、與力であつた。微官であるが、勢力はあつた。歌を好んで、立派な歌論を持ち、歌集「東歌」をも持つてゐる。兼て眞淵の高足の一人である千蔭の父でもある。

年、五十の時、眞淵は田安宗武に學問をもつて仕へることとなつた。彼を宗武に推擧したのは、荷田春滿の甥で、その養子となつて家を嗣いでゐた荷田在滿であつた。在滿は律令などの方面をもつて宗武の師として仕へてゐたが、その著「大嘗會便蒙」を刊行したことから問題を惹き起した。その事は宗武も喜ばなかつ

た。在滿はみづから致仕し、轉仕するに際して、特別の關係のある眞淵を推擧したのである。

眞淵の田安家における待遇は、初めは御出入、五人扶持。進んで大番格、十五人扶持といふ程度であつた。もとより輕いものである。しかし當時の社會にあつては、田安宗武の國學の師だといふことは、眞淵をしてかなり重からしめたことに相違ない。眞淵の重くなつたといふことは、やがて新興の國學を重からしめたことであつたらう。この事は、國學といふ上から見ると、宗武や眞淵の思つたよりも重大なことであつた。これはちやうど水戶の義公と契沖との關係に似てゐるが、それよりも後への影響は大きかつた。

眞淵が田安家に仕へてゐたのは六十四(寶暦十年)までで、隱居して、日本橋濱町の縣居に住んだ。

眞淵の著述は、殆ど全部田安家に仕へてからである。大著「冠辭考」の成つたのは六十一の時(寶暦七年)、「萬葉考」の成つたのは六十四(寶暦十年)である。その他全集に收められてゐる尨大の書は、殆ど全部それ以後である。

歌風も、田安家へ仕へる前後から一變したといはれてゐる。

眞淵の歌集は數本ある。本集に收めたのは、序にもあるやうに、歿後、村田春海の編輯したものである。その歌の少い理由など、序にいつてあるから略す。猶、眞淵の文章は獨得の、たぐひなきものである。本集に收めるべきであるが、頁數の關係から省くこととした。

「歌意考」は、「明和のはじめつかた」と自身いつてゐる。多分元年であらう。それだと六十八の時で、縣居に移つた年である。

「新學」は明和二年、六十九の時のものである。

眞淵の歿したのは明和六年、七十三である。
墓は、品川東海寺にある。そこを撰んだのは生前親交のあつた當時の漢學の碩學、服部南郭の墓がそこにあつた。それを緣として、同じ東海寺にしたとのことである。碑の立つたのは、文化三年の九月の命日で、文も書も千蔭である。その千蔭の歌、春海の歌が、それぞれ歌集にある。

田安宗武

田安家で編んだ「悠然公略傳」といふものがある。悠然公は宗武の諡である。それによつて「國學者傳記集成」の編者の拵へた年譜から、更に抜書きすることとする。
宗武は、幕府中興の將軍といはれる吉宗の第三子である。赤坂の紀州邸で正德五年に生まれた。享保十四年、十五で元服をし、父の諱をもらつて宗武と改め、德川氏を稱するやうになつた。從三位、左近衞權中將で、右衞門督を兼ねた。同じく十六年、田安門内の邸に移つた。同じく十九年、二十歳の時、近衞准后家久の女を娶つた。延享二年、三十一の時、參議となつた。同じく三年、吉宗が將軍職を家重に讓つた時、攝津、和泉、播磨、甲斐、武藏、下總などで十萬石の采邑を賜つた。明和五年、五十四の時、權中納言に遷つた。同じく八年、田安邸で薨じた。上野東叡山中の凌雲院に葬つた。
漢文で書いた「悠然公略傳」が引いてある。引くことにする。
公爲レ人。仁孝恭謙。節儉以居。惟素好レ禮。動止有レ則。望レ之威嚴可レ畏。就レ之愷悌愛レ人。其於二臣下一。恤二老幼一。振二窮乏一。記レ善忘レ過。不二責以一レ備。是以得二其觀心一者深矣。常研二究皇朝故典一。

兼通二雅樂聲律一。所レ著有二服飾管見。樂曲考。及其他若干篇一。秘而不レ出。常自言。淺見薄識。豈足三以傳二レ世。況其中有下未レ脫レ稿者上乎。又嗜二和歌一。徵二賀茂眞淵一。爲二侍臣一。給以二稟米一。搜二索歌書一。日夕講論。有レ所二啓發一。眞淵長二國學一。最善二萬葉一。古風學者。至レ今仰爲二泰斗一。雖二篤志所一レ致。抑亦公爲レ之資者居レ多。明治六年七月。公四世孫慶頼。追二懷祖德一。以二遺著服飾管見。樂曲考一書一。獻二朝廷一。賜二木杯壹個一。其餘稿本。今尚藏二于家一云。

更に私生活について、「譚海」三の所載の文を引いてゐる。ここに引く。

田安中納言殿は、風流好、古人に超させ給へり。音樂、殊に好せ給ふ餘りに、天下の樂書を集め、折衷し給ひて、中古斷絶の舞樂までも、悉く興じおこなひ給ふ。その再興の舞樂を、一書に集成有て、紅葉山の伶人、多氏に賜はり、今その家につたへてあり。伶家にも此御事をば、樂の聖成べしと沙汰しあへる程の事なり。攝家より、簾中嫁取ののち、その女房にみな音樂を敎へ傳へさせまして、時時女樂の合奏有。又西陣の織屋の女を召下し、邸中にて織物をおらせ、堀川の染物する女をも召れて、機の模樣このみ染させ給ひ、京都の女工を、そのまま、江戸にて調じさせ給へり。深川の屋敷に、時時おはしまして、手ぬぐひを戴き、木綿の浴衣など着たまひ、下種のわざをもせさせ給ふとぞ。其處もさながら田舍の住居の如く、いろりに燒火し、手自茶などをもせんじめされけるとぞ。和歌は萬葉の風を好みよみ給へり。岡部衞士と云もの、萬葉を執し、その注解の新意を著せしも、新たに出來たり。此等をも殊に寵し給ひて、衞士を大和河りに遣し給ひ、往古名所の分明ならざるをも、多く糺させ給へり。又猿樂の觀世流の謠の章の誤を正し、詞をも直し改させ給へり。高砂の能の、あひの狂言のことばなどは、全く此卿の御作なりとぞ。

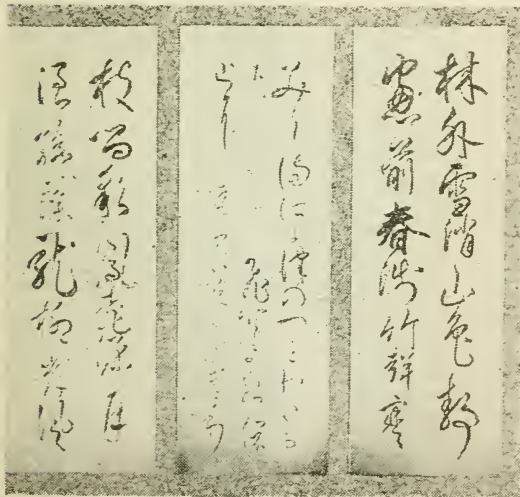
宗武の歌集「天降言」は佐佐木信綱氏の編輯された「續日本歌學全書」によつて初めて刊行された。それまでは歌界からは忘れられてゐたのである。氏は「天降言」を「近世名歌選」のうちに改めて收め、巻末に、この書の稿本は田安家に一本があるのみで、それに改めて校訂した。これを定本とするべきだといはれてゐる。然るに、戸川殘花氏の藏書のうちに、「田安殿御集」と題した寫本があつて、「天降言」と同じものである。奥書によると、海量法師の持つてゐたものを、上田秋成の寫したものといふことである。戸川氏のものはそれを更に寫したものである。その當時から或範圍には寫し弘められてゐたが、後には埋もれてしまつたといふことが分る。佐佐木氏のものと對校すると、往往ちがつたところがあるが、佐佐木氏のものの方がいいと思はれた。しかし珍らしいものなので、ちがつた所は「イ」と斷つて、小書として添へることとした。

橘　千蔭

加藤氏だ。もと橘氏であつたところからそれを用ひたが、後にはその方がとほつてしまつた。家系からいふと歌僧として有名な、因法師の、在俗の時の子、景貞といふ人の末だといふ。代代伊勢に住んでゐた。父の枝直が、享保五年に江戸へ出て、町奉行大岡忠相に隷した與力となつた。それが江戸へ移つた次第である。

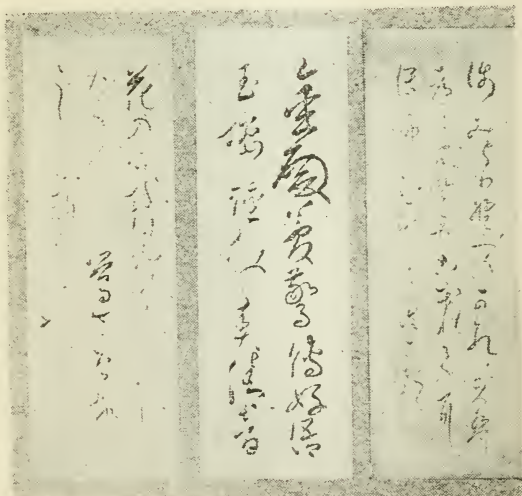
枝直は方正な人で、和歌を好んで、家をなしてゐた人である。賀茂眞淵とは友人關係であつた。眞淵が晩年崇古癖に捉へられて、古代の衣服を拵へて著てゐた頃、今の世に生きてゐるからには、今の服を著るべきだと非難したといはれてゐる。人柄が察しられる。

千蔭はこの枝直の子として、享保二十年に八丁堀の家で生れた。幼少の時から、父に敎へられて和歌を作つた。父との關係で、十四の時眞淵の弟子となつた。それから眞淵の歿するまで約二十年のあひだ、眞淵について敎をうけた。自身では、公の務が忙しくて怠りがちだつたとはいつてゐるが、同じ江戸に住んでゐた關係から、多くの弟子のうちでも最も師に親しみえた一人となつた。五十五（天明八年）で仕を致してからは、專念に古學の研究と作歌に耽つた。彼の名聲の一代に振つたのはその後で、權門貴族から、花街の婦女に至るまでその門に出入した。

彼は學者ではなかつたが、その方面の著述の「萬葉集略解」は、當時に行はれたばかりではなく、今日でも棄てられずにゐる。その動機は、彼師眞淵の「萬葉集考」は、立派なものではあるが偏つたところがあるとして異見を抱いてゐた。寛政年間、執權の田沼意次に代つて松平定信が將軍補佐役となり、同時に田沼時代の役人

橘千蔭筆屏風

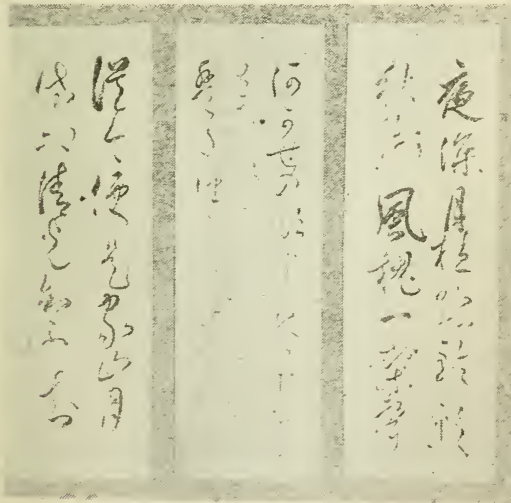
は全部一度は咎められた。千蔭もその一人で、減祿の上、百日間の押込を命ぜられた。これは彼の五十二の時のことである。この押込のあひだのつれづれから、彼は豫て思つてゐた萬葉集の註を思ひ立つたのである。

「略解」の成立については關根正直氏のくはしい考證がある。要は、「略解」は本居宣長に負ふところが多いが、彼は功を己にをさめようとの心から、宣長のことは云はずにゐたといふ非難に對しての辯明である。「略解」に着手する前に、既に宣長の「玉の小琴」の初めは（三四卷まで）刊行されてゐた。千蔭はそれを見て、事毎に宣長の意見だと斷つて引いてゐる。その後の部分は、疑義ある毎に、伊勢まで使をやつて質問し、同じく宣長の意見だと斷つて引いてゐる。宣長は「略解」をとほして自分の意見をいはうとしたのか、「玉の小琴」は後を續けなかつた。二人は相逢つたことはなかつたが、交情は密であつた。文化元年、「略解」の版が完成した時、將軍家から一部を獻

（宇都野研氏藏）

上すべき仰せがあつた。將軍家は褒美として銀十枚を賜つた。その時は宣長は既に歿してゐたが、千蔭は生前を思つて、嗣子の大平に裾分けをした。大平は喜んで靈前へ手向けた禮狀が殘つてゐるといふのである。

千蔭の略解は十二年かかつた。早過ぎる。無學の爲だと、時の學者が蔭でいつたことが傳つてゐる。

菅茶山の「筆のすさび」に、老いての千蔭を見た時の印象が書いてある。「千蔭は隱居して總髮なり。顏色容貌、さしも歌人と見えたり。耳しひて、息女を傍におきて、彼此の言を通ず」といつてゐる。簡ではあるが、面目が窺はれる。

又「三十六家」にはこんなことを傳へてゐる。「また翁〔千蔭〕、京師を知らず。一年上洛の意あつて、江戸を發し、相模國箱根の山下に臻りここに於て、その高嶽嶮岨ならんことをおそれ、思念を斷ちて、江戸に歸る。また一奇ならずや」といふのである。旅行嫌ひの江戸人としても、やや甚しいことである。人柄が思はれ

橘千蔭筆屏風

る。

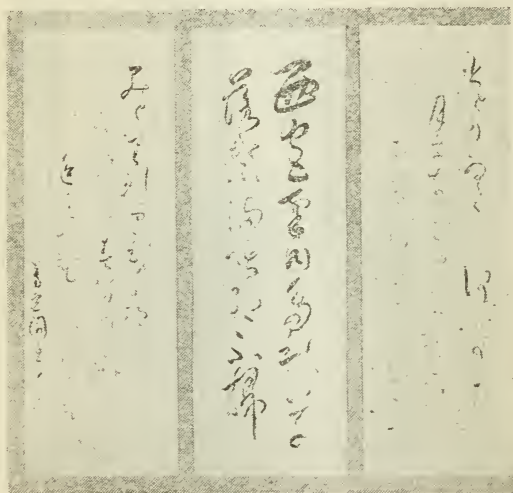
千蔭は書を同門の建部綾足に學び、字は瀧本松花堂の風を學んだ。字では家を成した。殊に假字では、近世その右に出づる者なしといはれ、歌人の八分通りはその風を學んだところから、千蔭流といふ名が出來た。

號は幾つかある。朮園(うけらがその)、芳宜園(よしきその)が通つてゐる。

死んだのは文化五年、七十四であつた。自身で認め、墓標を生前、檀那寺である回向院へ託して置いた。今日殘つてゐる墓はそれを刻したものである。

村田春海

春海の家は江戸の豪商であつた。召使が百人ゐたといふことは、彼自身の詩にもあり、眞淵の文章にもある。代代學問を好んだ家で、父の春道は、江戸へ出て來た當時の眞淵の保護者といふ仲であつた。

(宇都野研氏藏)

春海の生れたのは延享三年で、眞淵が五十で田安家へ仕へた年である。千蔭とは十一ちがひだと自身でいつてゐる。

幼少から眞淵の門に入り、眞淵の歿するまで教を受けた。

彼の修めたのは古學だけではなく、漢學にも造詣が深かつた。服部仲英、鵜殿士寧、皆川淇園などを師とした。

春海の思想の土臺は儒學である。道といふべきは、周公、孔子の道か、然らずは佛道があるのみだ。我が國には道といふべきものがない。有りとするのは、その無さを恥ぢて牽強附會したに過ぎない。我は眞淵の教を奉じるが、曲從するものではない。作歌はするが、儒にして歌を詠むものだといつてゐる。

千蔭は歌で聞えた。春海は文章と學問とで聞えた。その文章は漢文を骨にして、眞淵の擬古に走らず、他のものの平俗に陷らず教養深き國語をもつてするといふことで褒められた。紀貫之以來の一人者だともいはれた。

彼自身かういつてゐる。契仲、眞淵、宣長など、人は四目兩口の人のやうにいつてゐるが、才分の上からは及ばないとは思はない。自分も勉强さへすれば、あれくらゐの事は出來ると思ふ。出

村田春海筆

（窪田空穗氏藏）

來ないのは、幼少の頃から我儘で、酒色に耽つてしまつた。又身が弱くて、一日勉强すると二日倦み心を持たされてしまふが爲だといつてゐた。

彼は遲吟で、歌會などで、苦しみつつひに詠めずにしまふといつた風であつた。

彼は性質が寛優で、理財に疎かつた。富饒に馴らされた爲もあらうといはれた。とにかく家産を破つて、晩年は不足がちな生活をした。

白河樂翁公は彼の才を愛して、侍問とした。そして月俸を贈られた。

菅茶山の「筆のすさび」は彼をも叙してゐる。「春海は半髪にて、頭大に、下ほそりたる顏なり。一面舊知の如し。磊落の人なりし」といつてゐる。面目が躍如とする。

彼は口がわるかつた。人を譏ることが好きで、自身鰻の蒲燒よりもうまいといつてゐた。他人の内證話の聞きにくい事までもいつたが、和漢の學を引き引きいつたとのことである。これは太田錦城の家に來てのことで、錦城の子が傳へてゐる。

號を琴後翁（ことじりのおきな）といつた。家に一つの古琴を藏してゐた、それにつけた名である。歌集の名にも取つた。又錦織齋（にしごりのやのあるじ）ともいつた。

歿したのは文化八年。六十六であつた。墓は深川の本誓寺である。

歌集は、歿後二年、文化十年、娘たせ子などによつて編まれたものだ。序文にくはしい。

楫取魚彦

魚彦は下總香取郡佐原に生れた。祖先は豐後の國の人で、尾形景能といひ、同郡大須賀の地頭となつて來り住み、土地の名を取つて伊能を氏とした。後佐原に移り住んだ。

彼の生れたのは享保八年であつた。父の景榮は六つの時に歿した。

魚彦は眞淵門下のうち、最も古く入門した一人である。眞淵が濱町に住むやうになつた翌年の明和二年、彼はそれに隣つた山伏井戸といふに移り住んだ。日夕出入りの出來るのを喜ぶ心からである。そこを茅生庵といつた。

古風を自在に詠むといふので彼は有名であつた。殊に催馬樂調を詠むことで聞えてゐた。

學書としては「古言梯」が有名であつた。又、同門の建部綾足に學んで畫をも書いた。

楫取魚彦筆

(森繁夫氏藏)

眞淵の歿後は、彼について古學、古風の歌を學ぶものが三百人に及んだ。諸侯のうちにも弟子の禮をとるものが多く、奥平侯からは殊に優遇された。
天明二年、六十で、茅生庵に歿した。遺骸は郷里へ葬つた。
歌集は、村田春海の弟子の清水濱臣が編んで、文政四年に刊行した。本集のものはそれである。
その頃、濱臣の手では得られなかつた自筆の歌稿が、今も殘つてゐるとのことである。本集には入れるを得なかつた。

海　量

この傳記は「國學者傳記集成」に引かれてゐるもので、「日本敎育史資料」五に載つたものである。

僧海量は、近江國犬上郡開出村、一向宗覺勝寺某の子にして、父に繼ぎ住職たり。二十餘歲の時、寺職を甥立綱に讓りて、禪門に入り、東西南北に行脚し、江戸に至り、賀茂眞淵の歌を聞き、遂に其門に入り、古體を能くす。後に彦根城南、里根村に草庵を結びて居り、又後に城東、石个崎村に移る。然れども仍ほ諸國を行脚し、足跡六十餘州に及ぶ。蓋し周遊する者二回と云ふ。常に百里の行も隣家に行くが如し。文政中、年八十有餘にして、石个崎の廬前に死すと云ふ。
海量、固より釋氏の學に達し、兼て漢學を善くし、尤も音韻の學に精し。加ふるに國學に通ず。藩の歌人小原君雄、村田泰足、松居泰樹、小林義兄を友として善し。其他藩士の、苟くも學識ある者、皆交はらざる

は莫し。藩主直中の將に學校を創設せんとするや、海量に命じて、密に有名の諸藩を歴覩せしめ、學校の景狀、制度を探問せしむ。海量、萩藩の明倫館、熊本藩の時習館、其他數種を圖寫し、制度を錄して呈す。終に時習館を模擬して建設す。海量、或は長崎に至りて、新渡の書籍を購得し、歸りて藩主に呈す。皆之を學館に藏む。藩黌創建に於ける、海量の功頗る多く、藩主の之に賚する、亦頗る篤しと雖も、簿書の存せずして、詳らかにし難し、惜む可し。著はす所の書、蓋し多からん。其書名を失す。一夜茫は其著書中の一なり。

海量、人と爲り、淡泊無欲にして、常に食あれば食ひ、無ければ食はずして、數日を過ぐ。其彦根に在るや、一日竊盜ありて、一物をも殘さず持去る。歳餘を經て、其盜縛に就き、海量の庵にして竊取するを狀す。藩吏、海量を召喚して詰問し、其告げざるを責む。對へて曰く。貧道、素より獨居にして、他に出づるも鎖さず。輒ち獨語して曰く。人若し得んと欲せば、意に任せて取り去れと。故に貧道より與へしなり。彼の盜むに非らず。是を以て告げずと。

海量書像（森□夫氏藏）

其石个崎に在るや、一日、藩士佐藤貞寄之を訪ふに、海量あらず。六十有餘の老婆ありて掃除す。曰く、師は江戸に往かる、師、今日嫗の家に來り、予は今より苟且江戸に往く、請ふ庵室を掃除せよと。乃ち來り見

れば、諸物狼藉たり。今蔵し終りて掃除するのみと。凡そ、海量の行、輙ち路金を要せず、行行談義法談して旅費に代ふ。今日も亦一錢をも齎らさずと云ふ。而して七年を經て歸る。乃、宋版の一切經、及び書畫器物を購得し、身には羽二重の白衣を重ね、龍文絹の褥を齎らし歸る。一日、藩士高野眞盈の家に至り、無双上品の白羽二重を出して、裁縫を乞ふ。一兩日を經て又來る。裁縫成りて之を與ふ。海量、卽ち取りて之を服し、而して曰く、快然と。其服し來れる古衣を投出して曰く、奴僕に賜へよと。而して新衣を服するも直ちに橫臥し、曾て意とせず。

又一日、眞盈の家に在りて、橫臥雜談の次で眞盈謂ひて曰く、師の行は、古の西行に類すと。海量勃然色を變じ、起坐して曰く、貧道を以て西行の如きに比するは何ぞやと。海量、嘗て曰く、世に橋立、宮島、松島を以て、三景と稱す。予は富士山、琵琶湖、那智瀧を以て、三絶とすと。海量、一世の行事奇談、茲に盡るに非ず、今其一二を錄するのみ。

「ひとよはな」は寛政四年の刊行である。

東遊日次記は自筆のまゝ殘つてゐた稿本であつて、本集に引いたのはその第五卷の一部である。

橘　曙　覽

「橘曙覽全集」を編輯した曙覽の息今滋氏の、卷首に添へた小傳に聊の取捨を加へて引く。

先子姓は橘、幼字は五三郎、初め尙事(易經に、不事王候高尙其事、と云ふに取るなり。)と稱し、後曙覽と改む。井手左大臣橘諸

兄公三十九世の孫なり。父を五郎右衞門といひ、母は山本氏。文化九年五月を以て、福井石場町正玄家に生る。正玄家は福井橋七郎の一にして、著名の舊家なり。越前名蹟考（福井藩の史官井上素良著）に曰く、橋宗賢（木田二十四輩圖會云、此舊蹟は在家たりと雖も、其姓氏正しく、橋諸兄公の正統なり。故に禁廷より、醫藥の綸旨世に所謂薄墨の綸旨にて、今現に奉持す。）を賜ふといへり。承元元年二月、親鸞上人、越後へ左遷の時、此家に寄宿して敎化有りけるに、主人歸依して弟子と爲り、法名を了善と賜はり、自筆彌陀の畫像を授與す。其外、寶物三五種、今猶傳來せり。いにしへは、橋三郎左衞門といひし凡俗の家にして、六百餘年退轉なく相續することいと有難し。〇素良案ずるに、此家誠に久しく相續して、所所に免除地多く、橋七屋敷と稱す。

先子二歲にして母を喪ひ、十五歲にして父歿せり。此に於て大に感ずる所あり、佛に歸せんとし、日蓮宗の巨刹、大道村妙泰寺住職明導に就き佛經を學びたり。明導漢籍に通じ詩歌を能くするを以て、傍ら之を習得す。是れ後に

橘曙覽筆

（森繁夫氏藏）

意を文學に傾くるの端緒となりしなり。後遂に竊に京師に赴き、故頼山陽の高弟、兒玉三郎の塾に入る。居ること數月にして、又親戚の迎ふる所と爲る。此時親戚相勸めて、三國港の富商酒井氏の次女を娶らしむ。卽ち室直子なり。

天保十年江戸に遊び、數月にして還る。時に年二十五。此に於て遂に意を決して、祖先相傳の家業財産を擧げて弟宣に讓り、飄然として城南の足羽山に退去し、專ら文學に從事す。自ら謂らく、文を修むる國文に如くは無く、學問は本居宣長翁の遺風を祖述せざるべからずと。然れども翁既に歿し、門人の世に在る者亦稀なり。偶ま飛騨に田中大秀の在る有り。就いて問ふべしとて、卽ち穴馬の險を冒し、飛騨に臻り、大秀に親炙して、皇道の大旨、國文の要領を授かり、大に得る所あり。藁屋詠章中、師翁の許に物學にまゐりて詠める長歌あり、此時の光景を詳叙せり。弘化三年京師に上り、仁孝天皇の御葬儀を拜觀し、其佛式を以てせらるゝを慨歎して、「ゆゝしくも佛の道に曳き入るゝ大御車のらしや世の中」の詠あり。

橘曙覽筆（窪田空穗氏藏）

嘉永元年、城西の三橋に轉居し、雅號を藁屋と稱す。蓋古歌の「世の中はよきもあしきも同じことと宮もわら屋もはてしなければ」に取られしなるべし。此に至りて學問大に進み、自得發明頗る多く、而して讀書に耽り、著作に勉め、時に寢食を忘るゝに至れり。福井藩の重臣中根師質（號雪江）と賢にして學才あり、先子に長

ずること數歳、交最も厚く、意氣相投ず。遠邇之を見て愈先子を信重し、贄を執りて門に進む者兪多きを加ふ。

師賢、先子の行狀を叙して曰く、翁は素より才賢かりければ、いちはやく其梗概を悟り得て、昔より此福井の里に、果敢果敢しき古風の歌よむ人のなきを憤慨し、おのれこそはと思ひ興したり。云云。神習ふ古學の道に雲眞柱突立て、夜も日もすがらに勉め勵しみ、遂には妙に奇しき顯幽の道の奥所も殆んど學び究めて、惟一向に神の道の衰へよりして、種種なる外國の説等の參入來て、朝廷の大御稜威も、古のやうには坐しまさぬを朝暮に歎き慨み、あはれ斯道の明り行きて、古の大御代の大御手振に挽回さむ折もがなと、深く志願してぞ有ける。故福井の里はもとよりにて、越の國内に物習ひする人々の、次次多くなりて、後には然らぬ儕輩までも、皇國の尊さを、かつ〳〵辨へ知るも出來にけり。然して歌をも廢ずて、其よみざま漸漸に思ひ上り、尋常の風を拔出て、最上世の心ばへを主とし、世間に有のことごと、意衷に思ふ隈隈を、只其儘に打出られしが、此集の歌にて、類なく宮比やかにぞ有ける。いつも鬢そそげ、鬚も剃りやらず、做れ垢づける衣着て、綾錦の中に立交れど、恥らふ面持もなく、元來家貧しかりければ、米など乏しき折折もあれど、露ばかり心とせず。余は始の程こそ先達めきて物しつれ、暇なき官路に老朽果にたるを、翁はたゆまふ事なく、鋭意に高峰の雲路に分け登られたれば、今はしも仰ぎ瞻るさへ目ばゆかるを、云云。

嘉永七年、大患に罹り死に瀕せられしが、からうじて癒えぬ。此時自ら曙覽と改め名づけられたり。あけみは赤實にて、其橘姓の緣に由れるなり。

師賢の行狀に、或年宰相の君、春嶽公御獵の折もて、此家を顧はせたまひ、何くれと御問答の序に、曙覽とい

へる名の緣を尋ねさせ給ひけるに、其姓の橘の實によれる由を聞え奉りたりといへり。

藩主松平慶永侯、亦其名を聞き、時時侍臣を遣して道を聞き、學を講ぜしめらる。安政の大獄起るに及び、慶永侯幕府の譴を蒙り、江戸靈岸島の邸に幽居す。先子に命じて萬葉集中の秀歌數多を書せしめ、室の四壁に貼付せらる。卽ち同集に就き最も其撰を謹み、莊嚴方正、氣節慷慨の意味なるものを書して上る。是一は侯の幽鬱を慰し、一は暗に王室を思ふの念を鞏固にせむとの微衷なり。人其措置宜しきを得たるを稱す。

文久元年九月、伊勢の神宮に參拜し、歸路山室山に登りて、本居翁の墓に詣で「おくれても生れしわれか同じ世にあらば沓をも取らまし翁に」と詠ぜられたり。それより大和を經て大坂に至り、中島廣足の僑居を訪ひ、京師に出でて皇居を拜し、太田垣蓮月尼に面會す。尼、大に其歌論に服し、先子も亦、尼は學問深からねど其歌の眞相を得たることは、世の歌人を以て自ら居る者の、をさをさ企及ばざる所なりと感稱せられたり。此時の旅行日記を榊薰といふ。

慶應元年二月、慶永侯特に狩獵に托して、先子の草廬を訪ひ「宮比男を見まくほりする心よりふりはへて問ふ蓬生のやど」の歌を賜ふ。卽ち「賤夫もいけるしるしのありてけふ君來ましけり伏屋のうちに」と詠て答へられたり。此時の光景は、慶永侯の自らものせられし、曙覽の家に至るの詞、及志濃夫廼舍歌集に詳なり。抑此事たる、今の世となりては、ことわけて主張するばかりの談にあらねど、封建の世、武門專權の時にありては、規制嚴格、苟くも堂堂たる一大藩主にして、躬自ら一介の處士を草廬に顧訪するが如さことは、曾て其例なき所にして、人皆其異數なるに驚くと同時に、始めて先子の尋常人に非るを知り、併せて侯の權貴を狹まず、賢を愛し士に下るの謙德に感ぜざる者なし。後侯亦侍臣川崎致高を使として、時時城中に

伺候して、隨意、古典又は物語文等の講義を進めむことを求めらる。然れども「花めきてしばし見ゆるもすず菜その田伏の廬にさけばなりけり」とて固辭せり。侯も亦「鈴菜園田伏の廬に咲く花を強ては折らじさもあらばあれ」と、返して止まられたり。爾後侍臣の往復はますます頻繁を加へたり。或る時侯又烟草を贈りて「安御代はかまどの烟のみならでけぶりくゆらせ賤が伏屋に」とよまれければ、「烟草賤が伏屋にくゆらせて君のめぐみにむせぶ朝夕」と答へられたり。蓋侯の安御代といひ、賤が伏屋といひ、かまどの烟といふ、皆暗に普天率土、王土王臣ならざるは無きの深慮を含めるにて、侯は是等の事には經意最も周到なり。淺薄に解釋すべからず。

同三年六月、藩主松平茂昭侯、先子の年來斯道に志篤く、且清貧に甘んじ、節操を保ちつつあるを嘉(よみ)すとて、年年廩米若干を賜ふべき旨を傳へらる。此時「御めぐみの露いただかむ片葉だに具へぬものを杜の下草」「我うへにかかるあやしや民草をうるひ洩さぬ露にはあらめど」など詠ぜられたり。

此年幕府大政を返上し、萬機御親裁に出づるに定まりければ、先子喜悦限り無く、天にも昇りし心地にて、「新しくなる天地を思ひきや我が眼くらまぬうちに見むとは」「百千とせとの曇りのみしつる空きよく晴ゆく時片まけぬ」と詠ぜられたり。同四年(明治元年)正月伏見の役に、皇軍大捷、皇威大に張り、諸道の鎭撫使、續續發向、北陸道鎭撫使の福井城を過ぎらるるに際し、先子之を路傍に拜觀して、「天皇の大御使ときくからに遂にをがむ膝をりふせて」と詠まれたり。此年春の頃より、心地例ならざりしが、當時諸藩は、奥羽の叛徒追討の爲め兵を出して皆之に赴き、福井藩亦同じく朝命を奉ず。然るに軍人中、ややもすれば方向に迷へる者なきに非ず。先子病蓐に在りて深く之を憂ひ、病を強めて百方忠告、折には奮激のあまり之を詠歌に洩された

り。「古書のかつかつ物をいひ出る御世をつぶやく死眼人」「天下清く拂ひて上古の御まつりごとに復るよろこべ」「太刀はくは何の爲ぞも天皇の勅のさきを畏むため」「負氣なく勅に背く奴等を罰めつくして歸れ日を經ず」など皆此時の詠なり。

同年八月二十八日、病大に革まり遂に簀を易ふ。享年五十七。此日早且自ら起たざるを知り、一二後事を遺命し、且、如斯古來未曾有の大御代に遭ひながら、眼前復古の盛儀大典を見奉るに至らず、況やかねての抱負も將に達するに向むとして、今日はかなく世を去るこそ返す返すも口惜しけれとて切齒瞑目せられたり。聞く人其志のほどを悲まざる者なかりき。慶永侯「敷島の道のしるべは絶えにけり今より何をたづきにはせむ」と嘆かれたり。柩は生前最風景を愛し居られし、大安寺村の萬松山に葬れり。子三人あり今滋、菊藏、早成。室直子資性貞淑、先子の曩に家產を弟に讓りて退隱せらるるに方りて、親戚等、其前途甚だ覺束なきを慮り、頻りに離婚を勸めしに直子笑ひて、院本堀川の段、「人の憂き目を見捨つるは、里の恥辱となる哩な」の條を引き以て決意を示す。親戚强ふること能はず。遂に終始艱苦を共にし以て內助の功を全うす。今年（明治三十七年）齡九十に至るも、健康昔日に減ぜず。

先子性恬澹にして寡欲、氣宇高邁風丰俗を凌ぐ。人以て神仙の姿ありと爲す。博覽强記にして、能く和漢の書に通じ、子史百家、稗史小説に至る迄、涉獵せざること無し、而して最も意を歌詞文藻に注ぐ。曾て人に語て曰く、杜少陵の詩に、爲レ人性癖耽二佳句一、語不レ驚レ人死不レ休の句あり。是最吾が心を得たりと。其抱負知るべし。依田百川、墓碣銘を撰す。簡にして盡せり。

先子夙に自ら、其禀性の家業に適せざるを知り、父祖傳來の家業財產を擧げ、悉く之を家弟に讓與し、身

を挺して家を去れり。爾來三十年赤貧洗ふが如しと雖も、親戚に對し、未だ曾て一言の、貧を訴ふるに及ぶことなし。故に其家弟の如きも、先子に讓受けたる父祖の餘澤に浴し、現に市内屈指の商家たるにも拘はらず、未だ曾て先子より補助の請求を受けしことあらずといふ。而して歿するに及び、親戚皆其儋石無きに驚けり。其純正潔白概ね此の如し。人誰か貧の避くべく富の求むべきを知らざらむ。唯時の非にして、富の求むべからざるを悟る。故に寧ろ清貧に安むずるの、愈れるに如かずとするのみ。其三子に與ふる遺訓、三條に外ならず。曰く、うそいふな、ものほしがるな、からだいたはるな。

先子少壯の時、漢書を讀み、梁竦の傳に、大丈夫居レ世、生當ニ封侯一、死當ニ廟食一如其不レ然、閒居可ニ以養一レ志、詩書可ニ以自娛一とあるを見て、大に感ずる所ありしと云。其性の謙恭なる、前半は敢て自ら當られたるには非ず。其後半自ら期する所ありしならむ。又時に、法華經譬喩品の、如來已離ニ三界火宅一、寂然閑居、安ニ處林野一、の語を誦し、佛亦此妙境を有す、我が甚だ好みする所なり、と語られたり。

先子の性行を意味せむには、唯至誠の二字、以て之を蔽ふを得べきか。詞藻の推敲に方りては、精神を籠め、精練を盡し、其極處に至るを期す。常に曰く、易經に思レ之思レ之、思レ之不レ已、則鬼神助レ之、者是なりと。著書數多あるが中に、歌集、文集、隨筆、日記等の類、既に稿を脫す。其他日本書紀、萬葉集、古今集等に註釋を加へむとして、未だ業を卒へざる者あり。又言語通といへるを編するの抱負ありて、材料の蒐集に着手せられたりしが、天年を假さず宿志を果されざりしは限りなき遺憾なり。

歌集は、往年既に上梓して、世に公にせり。

「志濃夫廼舍歌集」は明治十一年に刊行したもので、板下は曙覽の自筆である。本書にはそれを用ひた。

賀茂翁家集之六

賀茂翁家集のおほよそ

一此の翁の歌、早き時に書きつめおかれたるがありしは、まだしき程のわざなりとて、後に自らやかれにけり。其の中頃よりこなたのは、更に記し置かれにたるを、翁なくなり給ひて後、その家かぐつちのあらびにあへりし時にうせにければ、今は傳はらずなむ。こゝに今書き集へたるは、翁に物學びたる人の、これかれしるしおけると、又あひ知れりける人の家に、かつがつ散り殘れるを求め得たるなり。さるは洩れたるも多かるべし。又此のかきつめたる中には、かの自らやかれにけむ歌も有りぬべけれど、今はた撰み捨つべきならねば、得るに任せて載せつ。

一今書きつめたるには、早き時の歌を後に載せ、又後なるが前に出でたるも有りぬべし。さるはちりぢりなるを拾ひつるが、委しくついでの知り難ければ、題のついでにのみ從へり。

一同じ歌にて、彼と是と詞の異なるあるは、疑はしきを、猥りに定むべきならねば、一本とてかたへに記せり。

一長歌は、多くは眞名もて書かれたるあり。されど今は皆平假名に改めつ。眞名は後の人の讀み誤まるべき物なればなり。さて題を眞名にかゝれたるをば改めず。

一文も書きつめおかれたるが失せつるを、今は得るに任せたれば、洩れたるも多かりなむ。さて文に早き時作られしと、後に記されしと有れば、其論じいはれたる事の、彼と是とあひそむける類もあり。見む人疑ふ事なかれ。

一祝詞碑文のたぐひは、眞名にて記されたれど、見む人の讀み易からむ爲に皆平假名に改めたり。

一書札はいと多かりつらむを、今は往かひせし人も多く失せにしかば、求むべき由なし。されば僅に殘れるを擧げつるなり。是は假初の業にて、心もせで筆に任せられし物なめれば、殊更に傳ふべき業ならねど猶捨難くてなむ。

一やむごとなき仰言を承り、或は人の疑はしき事共問へるふしなどに、考へて答へられたる類をば、對問と云ひ、いさゝかづゝかうがへ置れたるもののはしばしなるをば雜考とてあげたり。すべて十卷、名づけて賀茂翁の家集となむいふ。

寛政三とせのしも月　　平春海記

賀茂翁家集の序

いそのかみふりにし世の事は、くもり夜のたどきも知られざりしを、いなのめのあけゆく如くなれるは、僅に百年あまりになむありける。しかはあれど、猶もののけぢめ覺束なかりしを、朝日子の豐さかのぼりて、八十の隈路の隈もおちず明らかにしも成りにたるは、吾が縣居の大人をはじめとすべし。その中にも奈良の葉の名におふ宮の古言や〻辨まへ知らる〻ことになりても、その心を得、その言の葉を拾ひて、歌にも文にもまねび用ふることはあらざりしを、吾が大人古言をやがてわが物になして、よきをとりあしきをすて〻、歌にも文にも作られしより、千載の昔の言ぐさを、今の世にまねびうるたぐひもいで來にけり。千蔭いと若かりしより大人にしたがひて、常のみありさま、のたまへりしことを親しく見もしき〻もしつるに、大人は今の世の人とはことにして、うち見にはさかしきかたはおくれて、心おそきさまに思はれしかど、たまさかにいひいで給へることに、敷島の大和心をあらはし、一言としてみやびならざることなかりき。筆とりて物かき給ふを見るに、五百とせも經にけむ筆の跡の如くなむありける。こは、あまた年夜晝となく古言をのみ心にしめて、家居より調度に至るまで、古へによりて、いさ〻めにも後の世の事を耳にふれ心にとめ給はざりしかば、おのづから古へ人の心に成りもてゆきて、其の心よりいひいでもし、物かきもし給ひしによりてこそしかありけるならめ。かく古へにつとめ給ひし中にも、歌をば殊に心高くもてつけて物せられたれば、歌一つよみいで給へるにも、深くかうがへあまたたび味はへて、によひいでられしなり。歌のさまは始と中

頃と末と三つのきざみありき。始の程は物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまに通ひて、花やぎたよわきさまなりしを、中頃よりみづからの一つの姿となりて、みやびにしてしらべたかく、しかも雄々しきすぢを詠みいだされ、齡の末にいたりては、いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、誰も心の及びがたきふしをのみ作られき。其の始のほどなるも、藍よりも靑しとか、宿禰よりも立まさりてぞ聞えし。折にふれては古言文のいとあがれる世のさまなる、又古への祝詞ごとになずらへたる、あるは中つ世の催馬樂のうたひものをまねびたる、あるは物語文によりたるなどは、其の世々の人のいひいだせるに異なる事なくなむありける。さるをひととせ火のわざはひにあひて、多くうせぬるこそ悲しむべき事の限りなりけれ。こゝに平の春海のをぢ、童より大人にしたがへりしによりて、大人の身まかられし後、家の集どもはたくさぐさの散りぼへる文らを、此のをぢが家にをさめおけるを、書きつめて板にゑりなむとせしに、さはらふ事ありて年月へにけるを、更に思ひおこして、歌に文にくさぐさのとひこたへをさへにとりとゝのへて、十巻とはなしぬ。大人の遠つおやよりして、現身の世にませしほどの事は、江戸の南荏原の郡品川の東海寺なる少林院のおくつきの傍の石文にしるしたれば、こゝには省けり。眞淵といへるみ名は、敷智(ふち)の郡の名より思ひよりてつきたまへりとぞ。縣居(あがたゐ)とは、庭を田居のさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、みづから家の名におほせられたるなりけり。今よりをち、古への學び世にひろごりなば、いよゝこの大人を尊み、かつ此の書をたゝへなむものぞとて其のことわりを述ぶるになむありける。

享和元年十月二十日　　　橘　千　蔭

賀茂翁家集

賀茂眞淵

春歌

春の始の歌

を筑波も遠つあしほも霞むなり嶺(ね)こし山こし春やきぬらむ

のどかなる春はきにけり玉くしげふたらのやまのあくる光に

ことにけさ珍しきかな春の來る方にむかふる春とおもへば

年月のくれぬと何かをしみけむ春にしなれば春ぞたのしき

年たてば野邊の遊びのゆかしきを今日こむ友にまづや契らむ

梅が枝の花のゑまひを朝ぼらけとしの始のさかえにぞ見る

世の人の花鳥にしもならひせば昔にかへるときもあらまし

元日に春たちけるに

武藏野を霞みそめたるけさ見れば昨日ぞこぞの限りなりける

けふしこそ睦月も春もたちにけれ天(あめ)にかなへるみ代のしるしに

年の始によめる　春は去年早くたちぬ

春はとく來ぬとはいへど大君の年たちてこそ長閑なりけれ

春たちける日　去年から人の貢の舟つきたりといふ

東路(あづまぢ)に春たちにけりから船のつしまの波ものどけかるらし

春の始に　大御日嗣しろしめしゝあくる年の春なり

新らしき御世の始に年たちて影のどかなる春日なるかも

ふるさとへ文のはしに

み吉野のかりの住家に春たちぬいつ故里へわれもゆかまし

春たちける日遠江なる人々を思ひて

こえゆかばわれ事なしと甲斐がねのあなたに告げよ春の初風

正月三日陸奥の殿の姫命歌をとのたまふに詠みて參らせける

み冬つき春たちけらしひさかたの日(ひ)高見(たかみ)の國に霞たなびく

正月十四日に春のたちける日よめる

東路にありてふ關のなこそともとゞめぬ春のなどおくれけむ

家に歌よみけるに春日望山といふことを

見渡せば天の香具山うねび山あらそ
ひたてる春がすみかな

　其のむしろに名所若菜を

春日野の雪間の若菜つむ時はみどり
の袖もよしぞありける

　朝霞

山高みいづる日影をまちとりて四方(よも)
ににほへる朝がすみかな

　霞を

紫の目もはるばるといづる日に霞い
ろこきむさし野のはら

　海邊早春

みちのくのちかの鹽がま春來れば煙
よりこそかすみそめけれ

　春水

春風に氷ながるゝみぎはには水のこ
ころのゆくも見えけり

　天中川

諏訪の海や氷とくらし遠つあふみ天(あま)
の中川みぎはまされり

　春風春水一時來

筑波山雫のつらゝ今日とけて枯生(かれふ)の
すゝき春風ぞ吹く

　春色浮水

こほりゐし志賀の浦波たちかへり白(しら)
木綿花(ゆふはな)に春は來にけり

　うぐひすを

うちわたす竹田の原のゆきのうちに
鶯なきぬ春のはつこゑ

　春鶯呼客といふことを

花のもとにさそはれ來てぞ知られけ
る人をはからぬ鶯の音(ね)を

　正月家に歌よみけるに春神祇
を

大王(おほきみ)の園のまつりにとる弓のはる日
たのしき神あそびかな

　そのむしろに贈答の歌よまむ
とて縣召の頃人にといふこと
を

高きにもうつるためしをよそに見て
谷の古巣の鶯ぞなく

　かへし　　枝直

日の光いたらぬ谷もあらなくになに
鶯のいでがてにする

　蹈歌の夜人にといふ事を
　　　　　　枝直

來ぬ人を橋のつめにもまちて見む霰
ばしりの夜はふけぬとも

　かへし

あやなしや竹川うたふ歌垣に君もこ
もらば手もとらましを

　賭弓(のりゆみ)

わしといひ鷹とわかれて渡るかなけ
ふのいく羽の雲の上人

　殘の雪

珍らしと見そめし程になりにけり遠
山のまにのこるしら雪

かけまくも畏き下野の國二荒(ふたら)
山にいはれます大神の、昔
遠江の國曳馬の城をしきまし

し御時、御狩のをり〳〵竹山
が家の梅こそおもしろけれと
てその庭に御馬よせさせ給ひ、
薫りさかえたる枝に御鷹をす
ゑおかせ給ひて、御酒きこし
をしめでましゝを、今は百ま
り多くの年を經ぬれど、その
梅のみづ枝さしつぎて春毎に
にほひをまし、此の家もたぐ
ひ廣く榮ゆることを、おのれ
しも母刀自のゆかりありて忝
けなく御ゆゑよしを傳へ承は
りよろこぼひて、ふるきしら
べをうたふ

むかし君み袖ふれけむ梅が枝の今も
かをるかあはれその花

庭落梅

とふ人の笛もきこえて垣の内に梅ち
る風のおもしろきかな

水郷柳

六田川風ものどかにゆく水のみどり
によどむ柳かげかな

柳ある家に人きたれるかたを

春風のあわをによれる柳もてとひく
る人をとめむとぞ思ふ

む月の末津輕爲春の許に始め
てゆきけるに、酒肴とりまか
なひ物語したるついでに、多
がれの垣ねもけふこそ初花の
かをり覺ゆれなど歌よみてい
だしけるに

初花の折から君をとひつるはわれこ
そ春にあへるなりけれ

早蕨

いざけふは荻のやけ原かきわけて手
折りてを來むはるの早蕨

題しらず

菅の根の長き春日になりぬれば心ず
さみぞ暇なかりける

家に歌よみけるに二月餘寒を

きさらぎやまだ雪さゆる伊駒山花の
はやしは空めのみして

同じ題を在滿が家にて

二月の空さえかへる山かぜは冬にま
されるこゝちこそすれ

また森鶯を

春ふかき老そのもりの鶯は人もすさ
めぬ音をやなくらむ

二月梅

色も香もとりならべたる梅の花さく
こそ春の最中なりけれ

きさらぎの末つ方櫻の花もや
や盛りなるころ、伊久米の君
のおはしたるに庭を畑に作れ
りしが、鈴菜の花の盛りにさ
きたりければ詠みて出しける

春されば鈴菜花さくあがた見に君き
まさむと思ひかけきや

二月晦日延享三年本所といふ所に
火おこりて家ども多くやけに

けり、その夕つ方風もあらく空のけしきあかくちりだちてこゝにしも火あるかと覺えたるを、其の夜亥の初ばかり十町ばかり南よりまた火いできて程なくおのが家もやけぬ、昔より心盡して考へつゝ物多く書きそへたる書どものあれば、是をば倉にもいれじ、いかで便よからむ所へ渡しやりてむ、今はとて逃れいでなむ時、從者の手毎にもたせむとかまへて、先づその事をとりしたゝむる程に、調度どもは心にも入れず、たゞ倉の戸口にひぢりこ塗りまかなはせてたち出でぬ、程なく皆烟にこもりにければ源の簡が許へ行きて夜をあかしぬ、何ばかりの家ならねばなごりもさしもあらねど、また草の庵むすばむまでは人によりてあらむもくるしかるべし

春の野の燒野の雲雀床を無みけぶりのよそに迷ひてぞ鳴く

おのがあたりより火いよゝ盛りになりて明日のひるまでもつゞく燒けゆきにけり、いく千萬の家々か烟となりけむ、人なども死にけりといふなり、また今年は所々に火あるはぬす人のわざも多しとてからめてかうがへらるなどもいふ

田にもあらぬ千町の家をやきすてゝ造れる罪の程ぞ知られぬ

春の山ぶみ

山越えて霞む梢を見渡せば繪によく似たる物にぞありける

春三河の縣をおくるといふことを

宮道山はるゆく袖の深みどり秋はあけにも染めざらめやは

遲日

菅の根の長見の濱の春の日にむれたつ鶴のゆたに見えけり

桃

賤の男が園生の桃の花ざかりやぶしもわかぬ春の色かな

吉野の山の花盛を見やりて

世の中に吉野の山の花ばかり聞きしにまさるものはありけり

花の歌とて

咲きちるは變らぬ花の春をへてあはれと思ふことぞ添ひゆく

雲とのみまがふ櫻のさかりには心もそらになりにけるかな

山櫻さくと見しより吉野がはながるる花もかつぞたえせぬ

大路ゆく人のたもとも櫻色に染むるぞ花のさかりなりける

うら〳〵とのどけき春の心よりにほひいでたる山ざくら花

花のもとに弓いるかた

櫻花はな見がてらに弓いればとものひゞきに花ぞちりける

關路花

山深みおもひのほかに花を見てこゝろぞとまる足がらの關

關花を人にかはりて

ふく風をなこその關の山ざくら心づからぞちらばちらまし

不破關花といふことを

さくら咲く不破の山路は關守のすまずなりても人をとめけり

花下送日といふことを

山櫻ちれば咲きつぐ陰とめておほかた春は花にくらせり

谷中の柿本社にて歌よみけるに社頭花といふ事を

言の葉の色香にあける神ながら猶みづがきの花やめづらむ

上野の花ざかりに

かげろふのもゆる春日の山櫻あるかなきかの風にかをれり

長門守の東の比叡の花見に福壽院に遊び給ひける日、題をさぐりて風靜花芳といふことを　よべ雨ふりて今朝はれたり

よるの雨の露だにちらず櫻花にほふばかりのけふの春風

ある人にさそはれて山里に到れりけるに柴の戸の花ざかりいと心のとまりて覺えければ

思ひきやうき世の人にさそはれて塵のほかなる花を見むとは

伊久米の君の許より櫻の枝にそへて　よしや花ちるともいかで惜しむべき色香をさそへ庭の春風　とあるかへし

君がけふ教へしものを今よりは花さそふとも風はうらみじ

山里へ花見にまかりたる心を人々と共に

山里はいはほの中と聞きつるを花にこもれるところなりけり

遠つあふみの引馬(ひくま)の大城は昔二荒(ふたら)の大神のふとしきましゝ城なり、其のかたへに坂あり、引馬野へのぼる所なり、その坂の上に今は坂本のぬしすみ給ふ垣の内に、昔の大神のめで給へる櫻の今もひこばえさはにしみさびてあるを、今年ことのついでにとひけるに、歌よめとありければ詠みける

あか駒を引馬(ひくま)の坂のもと櫻このもところをわすれでぞ咲く

童遊に竹の葉もて作れる舟に櫻の花をつみて流したるを見て戯に人々と共に

すくな神つくれる舟に木の花の咲く
や姫こそのりていづらめ

　ふる郷に櫻のちるを見るといふ心を

み吉野をわが見にくれば落ちたぎつ
瀧の都にはなちりみだる

　志賀山越

花をふく嵐のそらは雪ながらたもと
ぞかをる志賀の山ごえ

　春山の旅のこゝろを

信濃路のおぎその山のやま櫻またも
きて見むものならなくに

　三月枝直が家にて歌よみけるに
　霧中花を

霞たつながき春日にながめして花に
も物をおもふ旅かな

　櫻の花のちりたるを

菅の根の永き春日に袖たれて見むと
思ひし花ちりにけり

　上野にて

ちる花の都のふじやいかならむ東の
比叡はゆきとこそふれ

　菫を

故里の野べ見にくれば昔わが妹とす
みれの花さきにけり

　雲雀

霞たつ春野の雲雀なにしかも思ひあ
がりてねをばなくらむ

　國原

雲雀あがる春の朝けに見渡せばをち
の國ばら霞たなびく

　苗代

苗代の水口まつりしめはへて賤がわ
ざこそむかしおぼゆれ

　河山吹を人にかはりて

山吹は下ゆく水も花なるを心してさ
せ春の河ふね

　山吹さきたり見る人あり

故郷は春のくれこそあはれなれ妹に
似るてふ山ぶきのはな

　春の暮に春道がなり所をとひて唐棣花を

この園はまたもきて見む宮人の袂お
ぼえてはねず咲くころ

　殘春

花のみな散りての後は春さへに殘る
日なくも思ほゆるかな

　春のはて

ひだちには田をこそつくれしめはへ（行く春を）
（しめひきはへてィ）
てけふ行く春を誰かとゞむる

夏歌

　山家首夏

庵ながら昨日の春の花もみつさてこ
そ聞かめ山ほとゝぎす

山里は夏のはじめぞたゞならぬ花の
人めもすぎぬと思へば

　思餘花といふ事を

いかならむ熊野の奥を尋ねてか夏に
ものこる花にあはまし

遅櫻を

おくれては物すさまじく見ゆる世に今も櫻のめづらしきかな

足柄の關の山路をこえくれば夏ぞさくらはさかりなりける

新樹

夏の來て昔にかへる玉柏とるともつきじにひかゞみ葉は

枝直が家にて庭樹結葉といふことを

かげふかむ青葉の櫻わか楓なつによりてもあかぬ庭かな

春道がなり所に友だちかいつらねいきて

くたに咲く園生の木々の若みどり夏このましき宿にもあるかな

あかなくにあすもさね來む鳰鳥のかつしか小田の苗も見がてら

賀茂祭

年ごとにけふの葵をかけまくもかたじけなしや賀茂の氏人

かみゑに早苗植うるかたかけるを

いそぎてぞさ苗はうゑむ足びきの山時鳥なきにしものを

屛風に雨ふるに人多く早苗とる所

大御田のみなわも泥もかきたれてとるやさ苗は我が君の爲

五月雨ふるに山下の田うゝるかた

さ苗草うゝる時とて五月雨の雲も山田におりたちにけり

採早苗

きのふけふ時來にけりと時鳥とば田の面に早苗とるなり

郭公まつ心を

初こゑをみやこにいそげ時鳥やまがつならぬ人こそはまて

題しらず

なかざらむ物とはなしに郭公つらき時こそ猶またれけれ

郭公の歌あまたよみける中に

たちばなのかをれる宿のゆふぐれに二こゑなきてゆく時鳥

市郭公

しのび音をあらぬ名のりにまがへとや市路になきてゆく時鳥

故郷郭公

たちばなの島の宮居のあととめて鳴くはむかしの郭公かも

夏の頃人々と共にふりにし世を忍ぶ歌よみけるに時鳥を

君ましゝむかしの花の藤原を時鳥こそいまもとひけれ

京にて物習ひし頃親しかりける人の今は伊勢國にあるが許に文の端に

鈴鹿がは早く聞きつる時鳥いせまで今もおもひやるかな

山里へ時鳥きゝにまかりて
うの花を手ごとに折りて歸らまし山
ほとゝぎす聞きししるしに
五月家に歌よみけるに船の中
なる人郭公きくかたを人々と
共に
郭公おのがさつきの山がはを聲にの
りてもさしくだすかな
名所郭公
つくば山はなたち花のさきしより鳴
くこゑしげき時鳥かな
郭公頻
この里は更にしたひもあへぬまで過
ぐれば來なく時鳥かな
家に歌よみけるに山家五月雨
といふことを
五月雨はをやむもわかず谷の庵に雲
よりおつる眞木の下露
そのむしろに夏鳥を
みじか夜のはかなさつげて鳴く空の
折あはれなる朝がらすかな
又夏祝を
ふる雨にさ苗をうゑて國の名のみづ
ほの秋をまつぞ樂しき
五月宴三菅原氏家一時作歌
橘のもとに道ふみゆきかへりもとつ
人にも逢ひにけるかも
あし引の岩根菅はらいくつ夏しげり
ゆくらむ岩根すがはら
夏虫
庭の面にそこはかとなき虫のねも折
あはれなる夏の夕暮
故郷螢
ふるさとのみかきが原の夏草による
はもえつゝ飛ぶ螢かな
紀伊宰相の君のもとめ給ふに
よみて參らせける三首の歌
樹陰納涼
すゞしさの大路の柳かげごとにうま
も車もいこはぬぞなき
里蚊遣火
夕されば蚊遣火たかぬ宿もなしこの
里びとは月や見ざらむ
晩夏
ゆく雲も螢のかげもかろげなり來む
秋ちかき夕風の空
夕立をよめる
にひた山うき雲さわぐ夕立にとねの
川水うはにごりせり
夏風を
立すなり粟津野のはら
大びえやをびえの雲のめぐりきて夕
ふく風の心は常にあらめども夏こそ
人にしたしまれけれ
水無月初の六日に、葛飾の西
にある秋葉の社にて歌よまむ
とて、その別當の求めけるに、
友達かいつらねて舟よりぞゆ
く樹陰避暑といふことをかね
て詠みて出しける

風やどる夕べの森の下すゞみ秋の葉そよぐこゝちこそすれ

水邊納涼

たちよれば山陰すゞし夏見川夏てふことやなみのぬれぎぬ

高殿にすゞめるかた

高き屋は涼しかりけり荒金(あらがね)の土てふものし夏にやあるらむ・

家に歌よみけるに晩夏といふことを

空高くほたるをさそふ夕風の身にしむまでになれる夏かな

同じむしろに大井川の夏を

大井川わか葉涼しき山かげの緑をわくる水のしらなみ

わが宿をしも

葎(むぐら)はふわが宿をしも叩くなる水雞(くひな)や夜半のなさけしるらむ

夏と秋との

吉野川みそぎに流す麻の葉やなつと秋とのなかにおつらむ

陸奥の岩城の君の許にて物がたり聞えける時、夜ふけぬべしまかでなむといふを、今宵は六月つごもりなり秋のおそき年の水無月はらへの心をよまむとて主人もよみたまふに、おのれも筆をはしらしめて

國つ罪はらふ心の涼しきはあめにしられぬ秋にぞありける

夏はらへするかたかける繪を

よろづ代とひがしも西もとなふなりはらへ殘せる罪やなからむ

枝直が家にて六月祓を

天(あま)つ罪はらふ夕べは雲井ふく風も涼しくなりにけるかな

同じむしろに夏日といふことを

わたの原豐さかのぼる朝日子のみかげかしこき六月(みなづき)の空

秋歌

山べの庵に秋の來たる心を

今朝はしも竹の林ぞそよぐなる世は秋風の立ちやしぬらむ

早秋

うきものと思ひもいれで秋風をうら珍しみすぐすころかな

殘暑

宮城野や秋なほ暑き木のもとの露なき草に風をまつかな

秋も猶あつき夕べ人々と共に角田川の下つかたの大川てふあたり舟こぎわたりけるにいと涼しかりければ

からろとる大川のべの涼しさは初雁がねも聞くばかりなる

秋の歌とて

秋風は立ちにけらしな更科やをばすて山のゆふ月の空

大伴のみつの浦なみ吹きよせて松原こゆる秋のゆふかぜ

源之眞おもき病おこたりて後つかへを返しける頃、主の惠み深きことなどこまやかにいひおこせて、さて七夕の歌ども見せけるを、其の歌かへしやるとて傍に書きてつかはしける

天の川かいの雫を身にうけて今宵やいかに涼しかるらん

七月なぬかの夜

たなばたのあふ夜となれば世の中の人のこゝろもなまめきにけり

こよひまで今宵をまちて今宵あけば又の今宵をまたむとすらむ

七月七日家に人々きて祭のかたするにおの〳〵よむ

たなばたの天つ妹せのことをだにこちたく誰かいひつたへけむ

七日の夜のうた

天の原とほき川との夕なみに今やこぐらむともしきをぶね

たなばたのあふ夜の秋の初風に男をみなのはなも咲くらし

天の川見つゝしをれば白妙のわがころも手に露ぞおきにける

七日の夜雨のふりければ

夕月夜そらもあやなくふる雨にこぎなまどひそ天の川をさ

枝直の子生れける頃、文月十三夜に人々集まりてよろこびいふに、月のおもしろかりければ

この宿にさゝらえをとこ生ひさきの光こもれる千代のはつ秋

わかの浦の蘆して造れりとて人の御許より賜はりたる扇に書ける、文月ばかり

紀の海は涼しかりけりあしべより波うちはふる秋のはつ風

遠つあふみの佐益の中山の西につゞきて今はあはが嶽とて高き山あり、延喜式に安波波神社とあるこれなり、そのかた繪にかきたるにその麓に旅人あり、それが心をよみつ、時は秋のはじめつ方なり

東路は衣手さむし白雲のあははがだけの秋のはつかぜ

人の柿本社に奉るとてもとめけるは初秋風といふことを

風のおとのいく代雲井にきこえあげて高つの山に秋はきぬらむ

秋風

松のひゞき荻のさやぎのさま〴〵に聞えてたえぬ夜半のあき風

荻

百草の多かる中にわきてなどうたて吹くらむ荻のうはかぜ

萩漸盛

鹿もやゝ戀の盛となりぬらし野邊の
こはぎの色まさりゆく

萩

を鹿ふす野邊の秋風ふき初めてほこ
ろびにけり萩の花づま

萩に對ふといふ心を

萩が花垣ねもたわにさく時は野邊も
思はぬ物にぞありける

旅人鹿の音きくかたを

さを鹿の妻とふ宵の岡のべに眞萩か
たしきひとりかもねむ
旅衣わがつまならぬ萩原に鹿のね聞
きてひとりかもねむ

月の歌とて

とほつあふみ濱名の橋の秋風に月す
む浦をむかし見しかな
住の江の浦わにたちて月見れば難波
の方にたづぞ鳴くなる
さゞなみの比良の大わだ秋たけてよ
どめる淀に月ぞすみける
播磨路や夕霧はれて久かたの月おし
てれりいなみ野のはら
大舟に小舟ひきそへますかゞみすみ
田河原に月をみるかな

十五夜くもりけるに

天の原八重棚雲をふきわくるいぶき
もがもな（がなやィ）月のかげ見む

八月十六日永昌がなり所に人
人集りて、屛風に川邊なる家
に月みるにまらうどの來るか
たあるを、所につけたる繪な
れば此の心よまむとて共によ
みける、主人のところに

さゞら波よるしもかくてとはるゝは
月こそ宿のあるじなりけれ

まらうどの所に

淸らなる秋の川べにすむ宿のきみこ
そ月のあるじなりけれ

山家月

秋の夜の月淸ければ猶もあらずいで
てこそ見れ杉たてる門

夕月

萩原や庭の夕露うつろひてくれあへ（くれぬ）
ぬ影（光はィ）は月にぞありける

枝直が家にて松間月といふこ
とを

都にもまつの木のまの月見れば山の
秋のこゝちこそすれ

水上月

たつ鴫の影ばかりをやくまと見む野
澤の水のふかき夜の月

明石浦秋

明石潟有明の月をしたふまにあはれ
をそふる波の朝霧

八月廣澤池眺望といふことを

都人見ぬ海山のおもかげも月にうか
べる廣澤の池
月見れば都のうちも海山のありける
ものを廣澤のいけ

秋水郷

蘆がちる難波の里の夕ぐれはいづくもおなじあき風ぞふく

秋神祇

秋風のたつ田の使たちしより世はゆたかなる穂波こそよれ

雁を

見渡せば穂の上きりあふ櫻田へ雁なきわたる秋のゆふぐれ

田づらの庵にて

露さむき門田のをしね月照りて雁なきわたる秋のよなよな

九月十三夜縣居にて

秋の夜のほがら〱と天の原てる月影に雁なきわたる

こほろきの鳴くやあがたの我が宿に月かげ清しとふ人もがも

あがた居のちふの露原かきわけて月見に來つる都びとかも

こほろぎのまち喜べる長月の清き月夜は更けずもあらなむ

鳰鳥の葛飾早稻のにひしぼりくみつつをれば月傾きぬ

九月十三夜知陳が家に月見ける時、洲濱に紙もて鶴のかたを造り松の葉をしきてかひこを多くおきたり、祝ふ心をよめとすゝむれば

鶴の子のよを長月のかげなれば見るかひもある宿の秋かな

新むろにて

眞木柱ほめてつくれる高き屋に千秋の月を見そめつるかな

野分せしあしたに

野分して縣の宿はあれにけり月見に來よと誰につげまし

九月ばかり犬上衞が家にて初紅葉を

心とくきても見しかな山しなの石田の森のもみぢそめしを

紅葉

世の常の色ならめやはさがの山もみづる秋のいでましどころ

詠菊

あたら代のたひらの宮にめでそめて菊は千種になりにけるかも

菊の花を折りて人のおこせたりければ

よはひをものぶべき君が宿の花かざすに老ぞまづかくれける

惜秋

おのづからもろき木の葉の秋なれば暮るゝを何にかこちだにせむ

秋のはて

さを鹿のたち野の原に秋くれて今いく夜とかつまを戀ふらむ

冬歌

神無月の一日に衣宮のふたをひらきて

神無月またも春としいふめればさく（今しも春とイ）
ら色なる袖やかさねむ

伊久米の君の許にて十月更衣
を

かふれどもいとゞあやなき衣手に紅
葉だにちれ翁（おきな）さびせむ

神無月の紅葉をよめる

かみな月かた山あらしのどかにて紅
葉みるべき今日にもあるかも

ちゝの木のちゝぶの山の薄紅葉うす
きながらにちれる冬かな

十月はかり人に山づとをおく
るといふ事を茂樹が家にて人
人と共に

冬たつや嵐の落す椎がもと山にも身
こそやどしわびぬれ

十月ばかり山里に宿るといふ
心を

くれ行けば籬に鹿ぞそよぐなるたゞ
かくながら秋やなきけむ

時雨をよめる

高鴨ははやく時雨ぞふりにけるかつ
らぎ山の峯のうき雲

神無月たちにし日より雲のゐるあふ（さがみなるイ）
りの山ぞまづしぐれける（はれくもりするイ）

時雨陰晴といふことを

かみな月けふもしぐれのはれにけり
曇りにけりといひて暮しつ

朝時雨

けふもまたかくて幾たびしぐれまし
峯の朝日に雲かゝるなり

かみな月軒端の露のおきいでゝけふ
もしぐるといはぬ日ぞなき

寒蘆をよめる

津の國の難波のあしの枯れぬればこ
と浦よりも寂しかりけり

寒草

かれにける草は中々やすげなり殘る
小（を）笹（ささ）の霜さやぐころ

よの中はゆふ霜さやぐ翁ぐさ枯れて
もやすき時なかりけり

枯野

筑波ねの緑ばかりを武藏野の草のは
つかにのこす冬かな

寒樹

日をさへし大河のべのくぬぎ原冬は
風だにたまらざりけり

冬枯に里のわらやのあらはれてむら
鳥すだく梢さびしも

夜落葉

山風のふく夜の月に音はしてくもる
ともなく散る木の葉かな

名所落葉

佐保すぎてたがとる幣（ぬさ）と亂るらむ奈
良の手向（たむけ）の風のもみぢ葉

冬月

さよ中と夜はふけぬらし我が宿の庭
に霜おきてさゆる月かげ

湖上冬月

諏訪の海や雪げの空の雲間より氷を

てらす月のさやけさ
ふゞきせし伊吹おろしのさえくれて
月にしづまる余吾の浦なみ

千鳥を

鎌倉のよるの山おろし寒ければみな
のせ川に千鳥なくなり

楫取魚彦が許につどひてその
所の歌とて

ゆふさればうなかみがたの沖つ風雲
井にふきて千鳥なくなり

霰

有馬山うきたつ雲に風そひてあられ
たばしるいなみ野の原

雪のふりけるあした枝直の許
より人おこせたるに、何事を
もいはで歸りにけるは心もえ
ず、この人は朝霜ををかしき
ものにいひければ

朝ごとの霜をあはれといふ君はけふ
の雪をばいかゞ見るらむ

といひやりつれば、例の朝い
を驚かしつるなりけり、それ
がかへしに曉の程こそをかし
かりけれ、今朝ふるものとや
おぼすらむ　朝いして霜をだ
に見ぬ君はしも夜の雪をばい
かでしるべき　とあれば又

おもひ寢の夢にまさらぬ初雪を夜半
にふりぬと誰かいふらむ

またある日よべより雪のふり
けるに、枝直のこなたよりも
消息せざるをにくむなるべし
詞はなくて　白雪のふりとふ
るとも心なき人をばまたじと
はむともせじ　とあるかへし

しら雪のふりとふりなば心なき人も
やとふと待ちにしものを

また枝直　ふる雪の思はむこ
とを思はずば人をもまたじ人
もまたじを　かへし

人やこむ我やとはむと思ふまにわく
る心は雪ぞしるらむ

また枝直　とひとはず君が心
をいかにぞと問へども雪は答
へざりけり　かへし

物をこそ答へずあらめふりはへて今
朝は心のゆきとやは見ぬ

同じ日正房が許より　跡をし
もいとはぬ君が宿ならばとは
ましものを今朝の白雪　とあ
るに戯れてこたふ

昔たれ雪には跡をいとひそめて君が
かごととけふなりにけむ

詠雪

はしだて（ぬばたまのィ）のくらはし山に雲きらひ（合ひてィ）高（たけ）
市國原（ちくにはら）雪ふりにけり

雪の朝遠き里を望むといふ心
を

けさ見れば（朝ぼらけィ）麓（山ィ）の里はわかねどもけぶ
りぞ雪の上にたなびく

すゝきにかゝれる雪のをかしかりければ友の許へ
おもひやれ枯生のすゝきうち靡き友まちがほの雪のかきねを
ことし伏屋をしめて竹などうゑけるにしはすばかり雪のふりければ
しめおきし籬になびく吳竹のよにめづらしく見ゆる雪かな
隱家に雪のふりたる心を
わが庵の庭にはあともなかりけり落葉がうへにふれるしら雪
題しらず
思ふ人こてふに似たる夕べかな初雪なびくしのゝをすゝき
屏風に雪のふりたるに人々舟にのりて見るかた
花ならばこぎよせてこそたをらまし入江の松にかゝる白雪
杜雪
身のよそにいつまでか見む東路のおいその杜にふれる白雪
閑居雪
冬ごもる庵のとぼそを稀にあけて竹にかゝれる雪を見るかな
山舘見雪
雪ふればさくや梅津の山里ににほはぬ花はひともとひ來ず
雪中遊興
野も山も冬はさびしと思ひけり雪に心のうかるゝものを
雪中眺望
雪はるゝ朝けに見れば富士のねの麓なりけり武藏野の原
雪のあした
初み雪はれたる朝に見わたせば里のけぶりもめづらしきかな
おきいでゝ曉ふかく見し雪のけさまで月にまがふ庭かな
冬遠情
たちかへり今もみてしが遠つあふみ濱名の橋にふれる白雪
うちきらしみ雪ふるなり吉野山いりにし人やいかにすむらむ
家に歌詠みけるに冬眺望を
ふる雪のしらふの鷹を手にすゑて武藏野の原に出にけるかな
同じ時贈答の歌人々も詠みけるに神樂の夜人にといふ事を
枝　直
宮人の弓といへばと歌ふ夜もひかれぬ身こそしななかりけれ
かへし
四方山のまもりなりてふ梓弓ひきみひかずみうらみやはする
遠江の國磐田の祉の神主菅原信幸が母の八十の賀の屏風の歌十二月神樂する所
殿守の白くたくなる大御火のよにおもろしき神あそびかも

新嘗會

齋きやすべらみことは神ながら神をまつらすけふのにひなへ

まだきに咲ける梅

大かたは春だに花のまたるゝを年のうちにもにほふ梅かな

年の暮に友をとふ

年たゝば春野の若菜まづ摘まむかねごとしにぞけふは來にける

年の暮に祓すかたを

もろ共につもり來にける天つ罪雪より先にまづやきゆらむ

歳暮雪

野も山もみ雪ふれどもゆづる葉の春の設はをりもまどはず

年のとく暮るゝ心を躬恒が冬の長歌によりて

けさよりはしくると見えし冬の日の傾くまゝに年ぞくれゆく

としのくれに

暮れてゆく年の早瀬のみなかみは白き筋こそ落ちまさりけれ

これは櫛けづりければ白髪のまじりてけづられけるに驚きて詠めるなり

年ふりてもとの身ならぬ心には春もむかしの春をやはまつ

驚けどかひなきものを今よりは月日もよまじ年もかぞへじ

春をまち年を惜しみていづ方によるとしもなくよぞふけにける

しはすに閏ありける年の暮に

加はれる冬をもたゞに過ごし來ておろかなる身を今年こそしれ

都のかたへに住まへど人なみなみなる身にしもあらねば、春を迎ふる業とて何事をも設けず、さるは門さしてなどもあらねば、のどやかにのみもあらず、木にもあらぬ呉竹のよの中には法師ばらといひけむも覺えて、我だにいひしらずなむ、人々のまで來て語らへる歌を聞けばとりぐにをかしかれど、もとより己が心をやるわざなれば人にならふべきにもあらず、よしとて美むべきことわりもなし、たゞ心やりに

年くれて松をもたてぬ住家にはおのづからなる春や迎へむ

戀歌

はじめてあへる

初尾花結びそめける（そむなるィ）夕露にあきてふ風は吹かずもあらなむ

あひおもふ

おもはぬを思ひし程にくらぶれば思ふを思ふことぞすくなき

わすらる

風のこゑ虫のねをだにきかじやはな
どみし秋を忘れはてぬる

しらぬ人

思ひつゝぬればあやしなそれとだに
しらぬ人をも夢にみてけり

舊戀

かれしその昔ばかりはしたはぬや我
さへうとく今はなりけむ

逢戀

かりそめのたのめと人や思ふらむな
きて渡りしみ吉野の里

思高戀

わが戀はくもゐに高きあしびきの山
のしづくを袖にかけつゝ

知身戀

これぞ此のうき身しらるゝつまなる
をつらしと人を思ひけるかな
つらき身にあるべきかはと思ひしる
おなじ心のいかでこふらむ

待空戀

殘る夜も鳥より後にまちえたる習な
ければなく／＼ぞぬる

寄瀧戀

岩ばしる瀧つ山川とこなめにたゆる
ことなくあふよしもがな

寄霞戀

はるくべき方こそなけれねぬる夜の
夢より霞む春のあけぼの

おきてわかれし

今はたゞ袖の氷となりにけりおきて
わかれしをふのした露

春の暮に人を思ふ

今もかも小島が崎に匂ふらむ君に似
るてふ山吹の花

哀傷歌

卯月のはじめつかた茂子のせ
の身まかりつと聞きて花など
贈りけるにさしたる歌

世の中のはかなきときは郭公なくね
もことにうらぶれにけり

美樹が父の身まかりたる後人
人夕郭公といふ題をかの家に
よむとてその歌みせたるつい
でに詠みておくる

藤衣ふかくそむてふすみの色の夕ぐ
れにとふほゝとぎすかな

あるもの、師の忌とて名所懐
舊といふことを人の求めける
に、四月の末なりければ

ほとゝぎす今きの岡にこゑきけばた
だなき人のたよりなりけり

五月の頃いときなき子をうし
なひける人の許へ

五月雨のふるにますらむ泪川せくべ
きよしもあらじとぞ思ふ

六月十四日は去年暉昌が身ま
かりし日なれば、年頃のむつ
び忘れがたきに、便につけて
いひ遣しける

天の原ふじの高ねの白雪のきえぬる
ときと聞くぞかなしき
利秋としごろわづらひて久し
く逢はざりけるに、七月七日
に友古がまで來て、いにし水
無月になむ身まかりにける、
今は三七日ばかりにやなりぬ
らむといふを聞くに、心しれ
る友なりければかへすぐも
悲しく思へどかひなし、年頃
好みつることにて今はの際に
も歌よみつるなど語るを聞き
て、いと哀のすゝむに、くち
すさめるかぎりかきて友古の
許まで送りつ、露の手向草に
もとなり
大かたも驚かれぬる秋風につねなき
こゑのそふぞかなしき
なき人はいく七日にかなりぬらむ彦
星ならばまたも見ましを
きくからに悔しき事の悔しきはあは
でふるまの別なりけり
今は世になしと聞くこそ悲しけれあ
るにもあはで年はへぬれど
秋風のそらに今はとゆく螢見る／＼
消ゆる世にもあるかな
是はかの終の日に螢の曉に影き
ゆるよしを詠みし故にそれにな
ぞらへたるなり
荷田在滿にはかに身まかりけ
る後、橫瀨侍從貞隆の許より
藤袴にさして　世の中はあだ
なるものとしりつゝもかゝら
むとしも思ひきや君　あたら
しや露にしをれし藤袴かぐは
しき名は世に殘れども　秋風
にあれにし宿の女郎花こ萩が
上もいかゞとぞおもふ　答へ
とりあへず書きて萩につけて
やがてその使にやる
みよし野のかりの命はさだめねどお
のが後こそ賴むべきもの
風を荒みにはかにちりし藤袴香だに
や多く殘らざるらむ
今よりはいかにこ萩が花妻のをじか
なき野にちりまどひなむ
宮城野の露にしをるゝ秋萩は君がみ
かさのかげたのむなり
父のおもひにてありける頃
浪の上をこぎゆく舟の跡もなき人を
みぬめのうらぞ悲しき
茂松庵といふ寺の森の陰にお
くつきあり
茂りあふ松かげに君をおきしより風
の音こそ悲しかりけれ
故鄕にまうできて又程なく東
に歸らむとするを、母はらか
らめこは更なり、誰かれ別れ
惜しみ泪おとすを見聞くに、
いはむ方なう悲しくて

わかれをしむその人々の袖の露をあつめてしぼる我がなみだかな

母君むなしくなり給ひぬと聞くに、七年こなた夢にのみ見習ひつるまゝに現(うつゝ)としも覺えねど、しらするものは涙にぞありける、いかで今しばしすぎばこゝにもかしこにもゆきかひて、共にすみてむとのみ老(おい)の頼みをかけわたりしを、かひなく悲しき世にもありけるかな、今はいかにせむ

雁がねのよりあふことを頼みしも空しかりけりみよし野の里

今はとも人を見はてぬ悔しさはわが身のつひの世にも忘れじ

妻の身まかりけるに

我がのちを頼みし人は先だちてふりにける身をいかにしてまし

あるゆふべ

色かはる萩の下葉をながめつゝ獨りある身となりにけるかも

夜をふかして

から衣たちぬふ人もあらなくに秋は夜寒になりまさりけり

こゝかしこありきつゝ家に歸りて

妹が門いで入るごとにはやゆきて早かへりことといひし人はも

八月十五夜には尾花など瓶にさして月めでつるを、さるわざもなし

さきだちしひとの袂か花薄いまはそれだに見えずなりにき

横瀬侍従のめ君の身まかり給ひし折に詠みて參らせける

を鹿なく岡邊の萩にうらぶれていにけむ君をいつとかまたむ

かぎりありて深くはそめぬあらたへの袂の露やちゞにおくらむ（まそてをくたす露やしげけむイ）

ある人の十七年の忌にかの詠みたる歌を句の上に分ち置きて三十一人に歌求めけるに、てをかみにて悲しみの心しらひして遠擣衣といふこと詠めとあるに

照る月に衣うつなる里とほみ天がけるらむこゑかとぞ聞く

ある人の妻うせて後、題を分ちてかなしみの歌こひけるに、九月盡を

秋くれて野風たつなり白露の玉のありかもあすやたどらむ

ある人のいたみに、夕落葉を人に代りて

何となく人の心もみだるゝはもろき木の葉の終(つひ)のゆふかぜ

望月三英の父草庵が一周忌に題をわかちて歌もとめけるに、我もいと親しき友なりければ

寒草霜といふことをよめとあるに

かぎりあればつひにかれ野の翁草いたゞく霜のすゑぞかなしき

神無月の頃井上河内守の母君身まかり給へり、守は陸奥の岩城におはすほどなり、たよりあればみけしきとぶらひ参らすついでに、檜わりご一かさねついがさねにおきて、内に一つには五菓、一つにはつばいもちひ入れて遣しける、それが中に松子は韓のなれば、わりこのふたの裏にちひさき紙にかきておしたる歌

常ならぬ嵐をいたみうつ蝉のからの木の實もちりにけるかな

河津長夫はすめら御國の書の學びをわが導きつるに、もとより唐の書をもよくよみつれば、いと才ことにして、古にかへる心ざし深かりつるを、わづらひて十月十七日に身まかりぬといひおこせたるを聞くに、いと口をし、其の後とぶらひ遣すついでに美樹が許へ

わが道もさそはむ人をぬば玉のよみに送りてまどふころかな

となむ、又長夫が今はの時、

ますらをは空しくなりて父母のなげきをのみや世に殘さまし　といひて、又我は心ざしとげざるを、つぎて名をもあらはしてよなど美樹にいひおきしとぞ、此の歌は憶良の大夫の　ますらをや空しかるべき萬世に語りつぐべき名はたたずして　といふを思へるなるべし、いと哀にこそ、又菊の花を送るとて

白菊は冬だにかくてあるものをまだき消えにし露の悲しさ

ほかながらほかならずしも悲しきにうちのうちこそ思ひやられれ

雑歌

嵐

信濃なるすがの荒野をとぶ鷲のつばさもたわにふく嵐かな

山

下野や神のしづめし二荒山ふたゝびとだに御世は動かじ

瀧

天なるやおとたなばたのおるはたの手玉みだるゝ山の瀧つ瀬

杣

陰高き高根の檜原杣たてゝとるや雲ゐの宮木なるらむ

道

いにしへのならの御世よりふみわけ

し木曾のかけぢのあれずもあるかなイ
し木曾の坂路のなれずもあるかも

磯

百くまの荒き箱根路越え來ればこよ
ろぎの磯に波のよる見ゆ

船

沖つ風ふきにけらしな武藏の海みと（大江）
もせき迄いづ手舟よる（の水門にイ）

釣舟

大魚つる相模の海の夕なぎにみだれ
ていづる海士小舟かも

琴

あふさかやあづまてふ名のつま琴は
淸水に聲のかよふなりけり

笛

うら安のくにぶりしるく萬世にくだ
てふ笛はねをたえにけり

皷

うた舞の五つのふしも皷てふものゝ
音なくばうちもわかれじ

歌

そのかみはいつぬき河としらねども
歌は絶えずぞありけるイ
流れて絶えぬ歌にぞありける

書

見渡せば下つ此の世のくまもなしふ（千里イ）
りぬる書や高嶺なるらむ

倭文

いにしへのしづはた衣きし世こそお
りたちてのみしのばれにけれ

まことが家に布引の瀧の巖の
くだけをするおきたるを見て

布引の瀧のたぎつ瀬音にきく山のい
はほを今日見つるかも

磯巖といふことを

沖つ舟手向すらしも岩波のたてる荒
磯にかゝるしら木綿

四月枝直が家にて韓使といふ
ことを（これは五月韓人の來
べきにて此の題を出しつ、昔
はかく東まで來たる事なきに、
近き御世には珍らかなればな
む）

東路のふじの高ねの高しらす君が世
あふぐみつのからびと

御嶽まうでせる心を

世の中に何をむさぼることもなし金
のみたけの神ぞしるらむ

世の中はとあるにもかゝるに
もなづまずば何か難からむ
などいひあへりける時詠める

かた山のやまべうつ木綿うらせばく
誰かこの世をゆきそむくらむ

題しらず

眞柴たくはしばの里のうす瓦思ひく
だくる世にもあるかな（こそありけれ）

伊久米の君へ赤き木のみを奉
るにつけて

千早ぶるあけの玉垣そをだにも越え
てぞとりし君がみために

山本のをぢはあが母の住みけ
る岡部の宿の前わたりするご

とに必ずとひたうびたる人なり、今はかくて海山を隔てゝあれどいかでか忘れむ、さるをいにし年其の國わたり過ぎつれど急ぐことありてえとはざりしこそ口をしけれ、今はかたみにしらぬ翁となりにてあるらめど、心をしるべとして今一度昔のことあひ聞えむとて、猶思ひわたる

雲のゐる遠つあふみのあはゝ山ふる
里人にあはでやまめや

飛驒人といふことを

墨繩のまさしき筋を傳へなばあらぬ
たくみをなすな飛驒人

こくすゐ（曲水）のえに（宴）のかた（みイ）を

岩ばしる水の玉うきよどをなみ心お
そさの見えにけるかな

枝直の家にて紙繪の屛風に雪のふりたるに人々舟にのりて見るかた書けるを

白雲の中にながるゝ天の川浮木にの
れるけふにやはあらぬ

魚彥がもとに集ひて其のところの歌とて詠める

かとり潟千重の潮瀨をせきあげて浪
穗にたてる神のみとかも

紅子が久しうわづらひたるを、親の悲しう思ひて、宮づかへはかたへの人くるしければとて、御暇をしひて申しこひてければ、御けしきあしうて御暇たびつるを、ひとりなげきて秋のころ　やつれゆく袂のつゆの上までも思ふくまなき月はとひけり　といへるを聞きて

ゆきめぐり慰む時もあるものを思ひ
ぐまなく月な眺めそ

岩水寺　此の寺の洞につらら石といふあり

岩水のしづくの洞のつらゝ石幾つら
つらの世をか經ぬらむ

屋代山

四方も皆かべたちのぼるやしろ山大
國玉やつくりましけむ

鹽屋煙を

鹽屋だに稀なるうらのよそめには煙
のすゑもさびしかりけり

海眺望

播磨潟せとの入日のすゑはれて空よ
りかへる沖のつりふね

山館雨

しがらきの外山（とやま）のよるの雨のおとを
都の人にきかせてしがな

田家鳥

なるこひく門田の稻のほどもなくた
ちてはかへるむら雀かな

松平備後守の秋葉社に奉るとてすゝめらるゝに、社頭杉といふことを

いく代經ぬ祈るしるしもいちはやき
國つ社にたてる神杉

　古寺鐘

吉野山いりにし人は音せねど夕べの
かねにありかをぞしる

よそにきゝて思ひいるこそ哀なれみ
山の寺のゆふぐれの鐘

　釋敎

流れきてあづまに深き法の水このゆ
く末はいづちなるらむ

　述懷

たま〳〵に人とある世をうき時はそ
むかまほしく思ふはかなさ

　獨述懷

思ふ友あらばうれしき身ならましあ
りのすさみはある世ながらに

　寄風無常

花紅葉さそふ色香を惜しむまに身の
春あきも終の夕かぜ

　神山元廣が年頃吹きたりしひ
ちりきのしたのいと多かるを、
牛が島の長命寺のうちに埋み
て、その上にしるしの石たて
て、人々に歌よませけるに詠
める、其の石は大なる椎の下
にたてりけり

岩がねの椎が下風ふきつたへいくよ
ろづ世か音にきこえむ

　稻垣求已齋冬の歌ども書きて
筆加へてよとておこせたるを、
物の上に置きつるに夜さり雨
のもりてしみつきたりければ、
戯によみてかたへに書きつけ
て返しける

もる山のしづえをのみと思ひしに人
の言葉も雨はそめけり

　茂樹が天の橋立を見て松の枝
を折りてもてかへりつる、そ
れが歌よめといひければ

わたつみの浪もてゆへる橋立の松を
かざしに手をりつるかな

　十二月の始つ方傳通院の室に
まうでたるに、あけむ年は增
上寺へ移りて大僧正と聞えむ
まうけうち〳〵ありときゝて

朝日かげにほへる山に紫の雲たちわ（ぞたつ）
（なるイ）たる春ちかみかも

　枝直の二郎のうまれて始めて
神詣せさせけるに詠みける

とこ世もの世に薫るべき種なれば梅
の宮居の神ぞしるらむ

　やむごとなき御前にまうす

みたみわれ生けるかひありて刺竹（さすたけ）の
君がみ言を今日きけるかも

　寶曆四年霜月殿の四十の御賀
の宴に侍りけるに、夜ふけて
入らせ給ふ折、御衣ぬがせ給
ひて眞淵にとて給はせるは、
いと多かる人々の中にていと
おもだゝしく侍るもおもほえ

ず忝なきに、言いみをしもえ
しあへぬまゝに

あふひてふ綾のみぞをも氏人のかづ
かむ物と神やしりけむ

おのが遠つ祖は山城の賀茂よりいてゝ、文永の頃には遠江の岡部の郷をたまはれる綸旨などもありけり、其の後二荒の宮の大神濱松にましゝ頃、御軍にいそしとておほん太刀をしもたまはせしを、其の後はさるさまの事もあらざりしに、おのれ覺えず御紋の御衣をたまはれるかたじけなさいはむかたなし

羇旅歌

ふるさとにあからさまに歸らむとするを、総にはいかに定めむとするぞといふ人に

ふる里にとまりもはてず天雲のゆき
かひてのみ世をばへぬべし

故郷へ歸らむとする時人にわかるとて

別れゆきてまた初雁と共にこむめづ
らしと思ふ人もありやと

よの子が信濃路をへて紀の國へゆくに、たちにし後思ひやりてよめる

けふもかもわけゆくらしも大ぎそや
をぎその山の峯の白雲

紅のひきもの神もまもらなむ旅ゆき
しらぬきみがゆくへを

難波へゆく人を送る

百づたふいその驛になる鈴のおとづ
れをだに絶えずせよ君

旅ゆく人を送りて

よくゆきてよく歸りきてたらちねの
變らぬみまへはや拜みませ

紀量が豐後の國にかへるを、幣代とおぼしくて色々にそめたる紙を贈る、包紙に書いつけける

たらちねのいはひてまたむ木綿の山
こえむ日迄の手向にはせよ

ある人七月なぬかにまで來て、こたび難波にいきて來む年の秋なむかへりきぬべきといふに

たなばたにいかにならへる君なれば
久しき程をまてといふらむ

大神垣守が土佐國に歸るにわかるとて

武藏野の夏野のしげく思ふことといふ
べき人にけふや別れむ

信益が美濃へ歸らむとする別に

信益は松平能登守の家臣にて美濃國岩村の城を守れり

天とぶやつるの郡を幾千代のゆきか
ひぢとか君ならすらむ

旅歌とて

足がらの關の山ぢを北ゆけば空もを
ぐらきこゝちこそすれ

羇中關

都べのたよりなりけり白川の關ゆく
ほどの秋のはつかぜ

羇中海

はりま潟いかで都のつとにせむ繪島
の波よかくよしもがな

羇中時雨

都いでゝ露をいかにと思ひしにしぐ
れ降るなり宮城野の原

物名

しもつふさ

神代より弓矢は手にぞならしもつふ
さはしからぬ人やなからむ

茂樹が家にて歌詠みけるに、
あらぞめを

えぞの海や千島のあらそめを多みあ
らはれぬべき我が思ひかな

賀歌

いでゐを古へざまに造りける
に、九月二十六日人々つどひ
てほぎ歌よみけるに詠める

寳暦五年の秋なり

飛驒たくみほめてつくれる眞木柱た
てし心は動かざらまし

これはけふ集へるは、我が古の
書の學びの道つたふる人々なれ
ばかくいへり

十一月十九日殿の大姫君へみ
ちのくの守殿よりむすびの物
まゐらせらるゝに、おのれも
御文御手習の事つかうまつれ
ば、大方なるべからねば、洲
濱たてまつれり、其のさまか
きの貝ながらなるを島にて造
れる松をたてゝ、笹など本に
有り、又鏡二つを水のかたに
して、その鏡にしろいものし
て鶴のならびて飛ぶかたを書
けり、歌もちひさくて波のか
たに書きつ、その歌

大空にはねを並べてとぶ鶴の千とせ
の影はけふよりぞ見む

とぞいと興ぜさせ給ひて、こが
ねなどたうびつ

長門殿のおほば芳林院尼君の
七十の賀に、養壽尼が檜破子
調じて、盞とみに鶴と龜とを
數おほく書きたるをまゐるに、
歌よめと殿のおまへの仰せご
とありければ

天地に千年のためし多かるは君祝ふ
けふのしるしなるらむ

とて青きうすやうをいとちひ
さく切りて、松のつくり枝に
つけてそへたり、此のわりこ
などは、殿の御前にきこしめ
して、調ぜさせて養壽にたま
へるをおくりたり、又わりこ

に松の實いるべきにて
君が身に籠れる千代はあるものを松のみとしも思ひけるかな

　吉田の家の母とじの賀に秋の祝といふことをよめとあるに
ことぶきをよし田の里にかゝる稲のちちの年ある人ぞたのしき

　同じ賀をみほ子のするに、洲濱杖など調じてよといひおこせつれば、調じて遣しける、その杖の歌もとむれば、ふるき例によりて靈壽杖を造れる、
　其の袋にぬひつけたる歌
玉ちはふ命ありてふこの杖はきみこそつかめよろづ世までに
　杖の長さ三尺六寸五分、よこのはしともとゝを銀してさいはひびしに造りてはる、同じ菱の紋をゐりつけたり、又鳩はよこの上のかたへにつく、かしら背尾などうす青に黃をまじへ、むね鳩の色なり、採桑老の樂の杖の樣にならへり、昔のさまなればなり、中頃の世よりは古今集に白金にて竹の杖をつくりたるよしあるにのみよりて、竹の形に銀にて同じ葉をつくり、又鳩をば横木のかはりにやがてそれを握りてつくやうに造るめれど、古今集なるは珍らしく歌にもかなへむとてのわざにして、させるのりあるにはあらざなり、賀には靈壽杖こそ唐にもやまとにもあとある事なれ、又袋の形も今の世にすなるはいかにぞや、寶劍の袋のかたこそかゝる物の袋の古きかたなれ、さればそれにならへり、洲濱は菊小松笹などを造れり、赤がねの板を鏡にとがせて下水の流をなせり、花の影おもしろく見ゆ、足はさぎ足にてあしゆひの紅の組あげまきゆひてたれたり、臺はごふんみがき、上によきすなごかむすゐ石などをおきつ

　松平備後守の七十の賀にきくに寄せてほぎうたよめとあるに、かづけわたにそへてまゐらす
萬代を君伴ふときくなれば花の眉しもひらく秋かな

　あるやむごとなきわたりの賀に菊をもてよめとあるに
武藏野の一本菊を生したてゝかぎりなき秋の露をまて君

　松平遠江守の六十の賀に鶴千年友といふ事を　此主津國尼崎の城をしれり
この殿になにはのことの千代はあれど契りしるきは馴るゝ蘆たづ

　意成院權僧正おこなひのしるかれば、今年おほやけより御寺造らしめ給ふ、僧正七十にしもおはするを、さぶらふ人

の言ほがひするに、歌よめと
すゝむれば
とぶさたて祝ひて造るこの寺のほと
けのよはひ君もへぬべし
おく山のよ川の杉にしるしえて世を
祈る君は千代もへぬべし
くすし津軽季詮が父の五十の
賀に
龜山のいく藥ある宿にしもいはふよ
はひぞかぎり知られぬ
ある人の賀に松延齡友といふ
ことを
世の中の友にはあゆるならひあれば
松をしたしむ齡しるしも
陸奥なる人の五十の賀に松延
齡友といふことを人に代りて
契りてはま垣が島の松が枝も思ひへ
だてぬ千代をこそへめ
ある女の五十の賀に春祝とい
ふことを
十かへりをまつ程遠く若えつゝいく
らの春か花かづらせむ
源の敏樹が母の七十の齡を、
芝といふ所の海のつらの家に
てことほぎすめるに、歌よめ
とあれば
わたつみの常世の波をよるべにて祝
ふよはひは數もしられず
遠江の山の奥なる浦川といふ
所を廣くしめてすまふ雛島ま
さちかといふ翁、今年七十な
るを我も遠きゆかりあれば、
ことぶきてよと遠々にいひお
こせしかば、よみて送る
まさか山奥山つみをいはひつゝ榮え
む世々は限りしられず
人の賀に杖をおくるとて
山人の桃のしもとのたづか杖君こそ
つかめもゝといふ世も
人の七十の賀に橘によせて
橘のかげに道ふみちらとへば千代ゆ
く末はまさしかりけり
しはすのはじめ秋田泰林の六
十の齡をその子泰因が祝ふに、
竹不改色といふこと詠めとあ
れば
くれ竹の雪かきわけて契るには千代
の色こそことに見えけれ
年寒き嵐にかれぬ宿の竹はいでそよ
千代の友にぞありける
わが友を竹の友とも祝ひおきて風に
ゆきにもかれじとぞ思ふ
こゝのそぢまり八なる人を祝
ふむしろに、竹をよめとある
に
吳竹の世の長人のすまふなる千ひろ
ある陰に我は來にけり
平春道が父の賀に竹によせて
ほぎ歌よめと求めければ
人の子の千代もと祝ふ誠には竹のこ

ころもさぞなびくらむ

まき田永正母の六十の賀しけり、歌よみてよとあるに、さることなり睦じき近隣なれば、大かたにやはとて竹の杖につけて遣しける

祝ふなる心へだてぬ中がきはこなたの竹の千代もゆづらむ

ある人の七十の賀のむしろにて、月前竹といふことを

よろづ世にすむべき庭の月なれば竹をうゑてやかげやどすらむ

義陳が母の六十の賀の屏風に十二月竹多き宿に雪ふるかたを

わが宿の竹のは山にふる雪はしらね（こしの）（しらねかイ）なればや消ゆる世もなき

武算が母の五十の賀の月次の屏風に、八月十五夜のかたかける所に

長きよの（よも長きイ）秋のなかばにいとゞしく暮るれば出づる月ぞたのしき

又十二月松竹ある庭に雪ふれる所

松が枝も竹もけぢめのさま〴〵に千代をこめたる宿の雪かな

人の賀の屏風に十二月松に雪つもれるかたを

雪つもるいつはの松のいつも〳〵變らぬ年はくれぬともよし

永正が許にて枝直周武など歌よみけるに、この近き程主人の母の賀しける名殘にとて、猶祝の心をそへて見ゆるものを題にて、早く咲きたる梅を瓶にさせるを

萬代の春まつ宿の梅なればいとはやかめのうへに咲きけり

まきを

奥山のおく霜八たび重ぬとも眞木のみどりは千代に變らじ

永世が六十の齢を其の子千國がいはふ時よめる

みはかしを玉まき田ゐの五百代に千五百の秋の初風ぞふく

とよ國の小笠原氏の家人の六十の賀に、歌ひとつと白猪のぬしのせちにいふに、かゝることを世に多きをうとき人のはかたくいなび遁るゝを、この人の稀にもとむるにはいかがはせむとて、とりあへず

豊國のかゞみの山の松にかけてかみの緑も千代にこそ見め

阿波守國滿おほやけにまうす事ありて、わが家にある頃人人とひきて歌よみけるに、寄神祝といふことを

君が世に神のめぐみの露そへて御謝山もとのうみぞたえせぬ

この國滿は遠江濱松の諏訪社の大祝なり、さて信濃國なるこの大神の社わたりに、月池星池といふ池あり、御謝山の麓なり、其の池のほとりに天つ露日毎にふれば、この池の水たえず流れうるびて諏訪の海に入る、その海の流れ遠江の天の中川におつとなむいふ

鶴千年友といふことを人に代りて

三島江の玉江に千代をしめしより蘆べの鶴ぞきみが友なる

藤原常香のすゝめけるある女房の五十の賀に、松樹契久といふことを

たをやめの同じ操を契りきて經ぬべき千世も松ぞしるらむ

わかゆべき契りをまつの花かづら幾千代かけて少女さびせむ

牧野駿河守の許にて寄名所祝といふことを　此守越後國長岡の城をしる故に此ところをいふ

かすみつゝ彌彦山にふる雨の　いやますますに家ぞさかえむ

寶曆四年殿の四十の御賀の宴に侍りてよみて奉りける

大君のまもりとなれる君なれば君がよはひは神ぞまもらむ

枝直が七十の賀の屛風に三月櫻のもとに弓いるかた

葛城の襲彦まゆみひきつゝもますらをのともの花を見るかも

擬神樂催馬樂歌

寶曆の始つ頃にや翁のかきつめられし物の中に、神樂催馬樂になぞらへて作られたるあるを見いでたれば、こゝにのせぬ、思ふに、こはやむごとなき殿の岡のかたちつくれる所に、もがさのうれへを守らひます神をいはひ給へりしことありて、その神の祭せさせ給ふとき、たはむれに作りて奉られしにやとおぼゆ、そのことわりもありつらむを、失せにしかばおしはかりに書いつくるになむ

玉籬をつげとてしもや昔より神さびけらしをかのまつが枝　枝もしみゝに

昔べのためしにならふ瑞垣はつくる日よりぞ神さびにける　昔おぼえて

すめ國の上代のことはうら安しならひてあれな安きためしに　末の世迄も

しめはふる岡の司の淸ければいもひも安しぬさもやすけし　神のまに〳〵

君が代の長月こそは嬉しけれ今日皇神をまつりはじめて　たえじと思へば

萬代の長づきにさく菊の花かみのみまへにかざしつるかも　かざしにしつゝ遊ぶなるかもイ　神のみ前にイ神あそびして

白菊の花をかざしにさしつれば袖は返せどちらじとぞ思ふ　秋てふごとに

御園生(このそのにィ)に祝ひてまきし山あゐをけふの袂にすりあへにけり　色もしみゝに

浦安のたやすの秋の初穂もてあなうら安のけふのみにへや　平らかにして

さい玉の里のとねらが作る木綿(ゆふ)神のみてぐらをゆひてけるかも　清きしらゆふ

この岡の松の木のまゆ見渡せば海もせきまでうくたからかも　ともへならべて

しなが鳥安房につぎたるすゑの山末もさやけしけふの日影は

いり江どの大門の入洲の芦はらも君ししむれば都となりぬ　野山かけつゝィ　萬代までに

酒飲

神のかうみき、たべゑうて、ようべもすんがら、舞ふよひぞ、鳥はなくとも、舞ふよひぞ、長なきどりや、とこ世鳥

同

あはれ尊さ、あなたふと、今日の長月に、あふ人よ、神のまつりに、あふ人よ、とるみてぐらは、尊きろ

老鼠

此の岡の、老ざかき、若ざかき、ちんよつんづ、年つんづ、としつんづ、くうげ(公家)にまうさむ、けにまうせ、くうげのおほため、けのまうけ(御饌)

同

西じろの、初みとしえり、みとしもはも、つんづなも、つんづなも、つんづ大(おほ)に、へまうさん、みべまうせ、大にへまうさむ、みべまうせ

紀の國

この島は、常世の島ぞ、ま常世の、しまによすがら、あそぶはれなぞ、もといへや

二段

笛しも、吹いたれば、みことしも、あへたれば、常世の、鳥のはれ、その鳥となふ

同

武藏野や、としまのはたに、まとしまの、畑にいもひく、翁はれ、そのいもたばれ

二段

ひくしも、やすければ、まゐるこそ、やすけれ、いももる、神もはれ、そのやすみあへ

同

いにしへゆ、めでてしものゝ、みめづらし、ものとさかぶく、尾花はれ、そのかりみほ(御庵)を

二段

まくさし、葺いたれば、み竹もて、つくれば、神こそめでめ、この中島は　黒木のかはりに竹を柱とし尾花をふきたり

とりものゝ歌　ほこ

八千矛の神のゆづりし大君のみ代のまもりのほこぞ此のほこ

長歌

殿の御賀に御杖たてまつる歌

葛城(かつらぎ)や、ひと言ぬしの、神のます、森のさか木を、うじ(鵜)もの、うなね(頸)つき(突)ぬき(貫)、しづはた(倭文機)の、幣(ぬさ)とり向けて、わが君の、み杖にとりき、けふの日の、みほぎ(御賀)の庭の、庭雀、うずゝま(蹲)りゐて、百ちゞの、言も何せむ、萬代に、いませ吾君と、ひと言まを(申)さも、ひと言まをさも、よき言を一言ぬしのおほ神のさちはひまさむ杖たてまつる

奉賀新田家大夫人歌一首并短歌

上つけや、にひ田の山は、いでたちの、よろしき眞山、いりたちの、くはしき嶺(ね)かも、いでたてば、君をも(守)る山、入りたてば、家をもる山、この家の、世々に傳へて、さつ(幸)弓の、さちある山ぞ、常磐なす、よはひもがもと、たらちねを、萬代までに、百づたふ、五十路の冬に、言ほぎし、酒ほぎなして、いははせる、ことぞよろしき、今よりは、新田の山の、にひ(新)さち(幸)も、いよゝ重ねむ、この家の、母のみことの、ちとせもる山、

反歌

たらちねをとはにもる山しめおきていはふ齢はかぎりしられず

侍從貞隆朝臣の京に御使し給ふをおくる長歌短歌

みぬの山、おきその山は、なびか(靡)へと、つけど(衝)靡かず、かくよ(依)れと、踏めどもよらず、よしゑやし、靡かずありとも、よしゑやし、よらずとふとも、かけまくも、いともかしこき、あらた(新)世を、言ほぎまゐる、み言をし、もちてゆく君、ひきゐ(率)ます、八十とものを(らたけをがイ)の、駒の爪、岩根ふみさくみ、鈴が音は、山ゆきとほし、たひらけく、安けくこえむ、おきそ山、みぬの山、

大きそやをきその山の岩がね(むらイ)もなびきよるべき旅にやはあらぬ

右は寶暦十二年九月、皇女御位をつきませる御よろこびを、東(あづま)よりまうし給ふに、横瀬侍從のこの御使にさゝれて信濃路より上らるゝを、親しき人々に歌もとめらるれば詠みつ、京のことなどは人々皆つくせればかくのみいへり

詠松有榮色賀大木老人八十算歌一首並短歌　老人善圍碁

松かげに、山人あそび、常盤なる、

齢はしるし、御代の名の、ゆたにのぶてふ、新しき、はじめの年を、去年といひて、今年の春は、いづこにも、杖つきまゐり、あしびきの、山にも遊ぶ、手束杖、斧の柄すらは、朽ちぬとも、くちせぬものと、松の花、さかむごも見む、このぬしは、山人のごと、山松のごと、

反歌

山人の千世のはじめのはるとてや松のみどりもことに見ゆらむ

僧祐逵編旨まうしに都にのぼるを送る　時は正月十一日なり この日春たちぬ

東より、春こそたてれ、都べに、花こそさけれ、その春に、君さそはれて、その花の　都にゆくや、おのづから、み法の花の、ひらくべき、春なりけらし、春の日も、かぎりこそあれ、さく花も、うつろふものを、常盤なす、み法の花の、末々も、たえぬかをりを、つゝみもて、霞の袖の、たちかへり、早おほはなむ、世の人のため、

東より春にともなふゆくへこそ法の花さく都なりけれ、

大和の國を思ひてよめる

神ろぎの、御のみ代より、天つ嗣、日つぎしらしゝ、御まのみこと、わが大王の、とつ事は、雄々しく猛く、うちらをば、直く平らに、見し賜ひ、聞こし給へば、八十國も、いよゝま廣く、百のおみも、いやさかはえき、空みつ、大和の國は、白雲の、とにたち渡り、山見れば、山いや高し、里見れば、里たひらけし、春花の、うらぐはし國ぞ、こゝをしも、うべしきましき、八十國は、うべも榮えつ、古への、そのいづみ世の、たり御代を　今も見るかも、日高みの國、

大だから吾がこゝろさへゆたけしも大和國原はるみてしより

吉野山の花を見て詠める

言さへぐ、人の國にも、聞え來ず、吾がみかどにも、たぐひなき、吉野高ねの、櫻花、さきの盛りは、馬なべて、遠くも見さけ、杖つきて、峯にものぼり、見る人の、かたりにすれば、きく人の、いひもつがひて、天雲の、むか伏すきはみ、谷ぐゝの、さ渡るかぎり、めでぬ人、こひぬ人しも、なかりけり、しかはあれども、世の中に、さかしらをすと、誇らへる、翁がともは、八百萬、よろづの事ら、きゝしより、見のおとるぞと、いひつらひ、ありなみするを、峯見れば、八重白雲か、谷見れば、大雪ふると、天地に、心おどろき、世の中に、言もたえつゝ、ゆく牛の、お

そき翁が、うつゆふの、さかりし心、くいもくいたる、

もろこしの人に見せばや三吉野のよし野の山のやまざくら花

夏日東海道中望富士山作歌一首幷短歌

磯間より、そがひに見ゆる、駿河の海、沖つ波路は、せばきかも、ふりさけ見れば、さがみねの、八重山みねは、低きかも、天の原なる、不二のねの、麓をいでゝ、風のまに、横ほる雲に、するがの海、沖もかくろひ、さがみねの、峯も雨ふり、時のまに、神もなりゆけど、六月の、てる日の空に、あらはれて、くもるともなく、常夏に、雪ぞふりける、富士の高ねは、

反歌

するがなる不二の高ねはいかづちの音する雲の上にこそ見れ

不二のねの麓をいでゝゆく雲はあしがら山のみねにかゝれり

橘永世が屋を高く作りて其の見ゆるさまを詠みてよとこひけるに

東なる、とほのみかどに、百千里、家はあれども、とりよろふ、山は見ゆれど、天の原、不二の高ねを、宿ながら朝夕見つゝ、百千たる、心はしりぬ、とりよろふ、家にもあるか、百千々の、時はゆけども、常夏に、めづらしきかも、不二の白雪、

みな月の末つ頃高き屋にのぼりてよめる

おいが身は、人こそいとへ、ふる人は、世にこそすつれ、わたつみや、いとはざるらむ、山つみは、すてやたまはぬ、見渡せば、浪をきよらせ、ひもとけば、風をかよはし、世の人の、いとふてふなる、夏の日の、てる日もしらず、高き屋に、つどひてうたふ、ふる人のとも、

浦びとの鯛つりかへる伊豆手舟はやくすゞしき夏にもあるかな

七日の夜縣居の翁が戯歌

ふみ月の、七日の夜らは、七とりの、机をたて、七種の、もの奉り、筑波ねの、にひ桑まゆの、初ひきを、七はりぬきたれ、天にます、棚機づ女の、五百機たて、其のせの君が、七重かり、八重かるきぬを、おりもあへ、ぬひもあへなも、おるわざに、あえてもがも、縫ふ手に、あえてもがもと、春日なる、高圓野邊に、にほふちふ、七くさの花の、花かづら、今する子らの、みめづ兒の、しかぞまけする、みめづ子の、かくぞ言あげする、うむかしみ、我も思ひて、

ま白なる、七束髯を、かきなでゝ、
を琴を遊び、歌によ(吟)ひ、わら(童)はそび(遊)
すも、ぬば玉の、か黒き髪の、をは(垂)
なり(髫)に、なりてしもがも、あ(背)えなも
あえなも、

權禰宜度會大夫二大御神の御
池のぬなはに歌そへて遠くお
くられたり、八月十五夜しも
來たりければこたふ

高知るや、天のみ影、天知るや、日
の御影の、水に生ふる、ぬなは(蓴)をく
りて、ぬば玉の、よるのをす(食)くに(國)、
しきませる、月よみのみかげ、滉ふ
なる、八月の今夜、かき向くる、こ
とのよろしさ、日のみ影、月のみ影
を、かくしつゝ、みまし(汝)も吾も、ぬ
なはなす、ながく仰がな、ながくあ
ふがな、

百千ひろ千尋のぬなは結びあげて神
の御池の心をぞしる

獻三河國高次新墾之無時歌一
首幷短歌

名ぐはしき、三河の國の、にひばり(新墾)
の、にひ御世すらを、そこにしも、
開き給ひし、大君の、惠みのひろに、
大御名を、高すの濱の、にひばりに、
つくる青なは、久方の、天はさゆれ
ど、荒金の、つちはこぼれど、いや
生ひに、生ひしみ(茂)にけり、大君の、
同じみ末の、吾が君の、みけ(御食)につみ
來て、冬ごもる、時には(しィ)あれど、み
心を、春のみまけと、みさかえも、
千世の若菜と、けふ奉る、

反歌

天ぎらしみ雪ふれども三河なるしか
すがにこそなは榮えけれ

岡邊の家にて詠める　寶曆十三年の六月なり

とし〴〵(月ィ)に、しぬびまつれば、古里
に、いますが如く、常はしも、思ひ
てしものを、何しかも、もとな(無由)かへ
りて、あふ人に、言問ぬれば、ちゝ
の實(み)の、父はいまさず、はゝそ葉の、
母もいまさず、しかはあれど、吾が
妹なねの、かしらには、しらかみお
ひて、かな戸より、いづるを見れば、
母とじは、いましにけりと、立ちは
しり、入りてし見れば、おもてには、
皺かきたりて、よろぼへる、吾をし
も見て、妹なねは、父來ましぬと、
いぶか(許)しみ、思ひたりけり、かたみ(互)
に、言をもとはず、白玉の、涙かき
たり、向ひ居て、昔へしぬぶ、こと
ぞさ(實)ね多き、

倭文子をかなしめる歌

ちゝのみの、父にもあらず、はゝそ
ばの、母ならなくに、なく子なす、
我をしたひて、いつくしみ、思ひつ

る子は、初秋の、露に匂へる、眞萩原、衣するとや、まねくなる、尾花とふとや、鹿子じもの、一人いでたち、うらぶれて、野べにいにきと、聞きしより、日にけにまてど、うつたへに、言もきこえず、父ならぬ、我とやとはぬ、母ならぬ、身とてやうとき、こひしきものを、初風の、ふきうらがへす、秋の野の、葛のうら葉の、うらぶれて、いにしその子は、萩見にと、ゆきやはしつる、霧わくと、まどひやはせし、うつし身は、悲しきかもよ、かへりこぬ、道に過ぬと、家人の、告げつるものを、老いらくは、おぼしきことを、ひたぶるに、思ふがまゝに、忘るべき、わざならぬをも、たつ霧の、まどひけらしな、まどひつゝ、あらばあらまし、何すとか、まさかをしりて、さらぐ\に、にひものごとも、なげきしぬらむ、

萩が花見ればかなしないにし人かへらぬ野邊に匂ふとおもへば

あらきする新喪の秋はたつ霧の思ひまどひて過ごしだにせじ

小野古道が妻の身まかりてあくる年の秋、かなしみの歌よめとこひけるに詠める

うつしみの、ことをもとはず、うらぶれて、いにしなにもが、さねどこは、こともなありそ、疊はも、ゆめよあやまち、なくもがと、いはひまもらひ、天行かば、天路やすけく、下行かば、下べことなく、八十の隈、もゝのくまぢを、いゆきへて、かへらむものと、春べまち、夏をも過ごし、もみぢ葉の、過ぎにし秋の、立ちかへる、時になりぬと、眞袖もて、塵うちはらひ、そむきぬる、枕とれども、朝床に、妹は起きゐず、夕庭に、妻は來まさず 去にしより、歸らぬ道を、今しはも、思ひ知りつつ、こいまろび、ひづちなくらむ、君が悲しさ、

夜を寒みつゞりさせてふきりぎりすいたづらに鳴く秋にもあるかな

詠筥根山歌四首短歌

あしがりの、はこねの山は、大名持ち、その大神の、八尺瓊を、戯めたまふと、やまとなす、少彦名の、御神やも、つくり給ひし、千早ぶる、神のみさかの、白雲を、わけてのぼれば、雲のへに、ひでたるねこそ、玉くしげ、筥形なせれ、立ち並ぶ、二つの峯は、ふたとすら、かけごとすらも、とりよろひ、開きたちなみ、萬代に、名にしおひくる、はこね山、

ふたごの山ぞ、神さびにける、

反歌

久かたの天つ御寶をさむとかはこねの山はつくりけらしも（つくらせりけむイ）

神さぶる、筥根の山は、わたる日の、天をやへだつ、あらかねの、土をかわかつ、手向する、御坂の上に、のぼりたち、西に向へば、夕け（影）しも、朝けの如く、鳥がなく、東を見れば、朝けすら、夕けとぞもふ（思）、夕べなす、雲霧がくり（隈）、はかりなき、千尋の谷に、下（くだ）りたち、かへり見すれば、古里は、空だにみえず、大君の、ふとしきませる、くぬち（國内）とも、思ひ忘れて、足引の、山のしづくに、そぼちつゝ、東に下る、都がた人、

反歌

やほによしたひらの宮のあたら代に開きし道のなれずもあるかも

東路の、筥根の山の、山のへ（上）に、湛ふる海は、黒き海に、白き波たち、青雲の、ゐる空近み、月讀みの、水か湛ふる、天の川、流れか通ふ、久方の、あめ尾羽張の、みことかも、塞（せ）きたゝへけむ、神代より、かれせぬ海に、わたつみの、宮べにありとふ、ゆつ（五百）かつら（桂）、それならなくに、千尋杉、生ひたちながら、水底に、埋（うづ）もれにつゝ、八百世にも、千世にもうせず、朽ちもせず、今のをづゝ（現）に、見るがあやしさ、

鳥が鳴く、東の國の、道のはてに、なみ（並）たつ（立）山は、とつ國の、國の堺と、みすゞかる、信濃ゆ甲斐ゆ、遠長く、伊豆の岬まで、なみたてる、百の高ねは、をす（食）國の、中の隔てと、八千矛の、神のみことの、造らしゝ、山にぞありける、日のよこ（緯）の、これの百山、日のたて（經）に、ゆきかふ人の、多ければ、岩きりとほし、足柄の、秋なの山に、道をはり（墾）、關をもすゑて、君が世を、まもらひこしを、駿河なる、不二の高ねの、かぐつちの、神のみ心、あらびたる、ことしありければ、八百によし、たひらの宮の、あたら世の、始の時ゆ、玉くしげ、開きそめつる、はこねぢの、道のをちこち、千早ぶる、人をなごす（和）と、いやひろに、國を治むと、武蔵野の、野のへ（上）さき（狭）まで、我が君の、ふとしきませば、都人、ひな人さは（多）に、ゆきかひて、しもと（柴）おしなみ（押靡）、岩むらを、ふみならしつゝ、時となく（非時）、雨はふりつゝ、ときじくに、雪のふるとふ、あら山も、やすくしこゆる、

とほの都路、

反歌

君が代のまもりなれとて神の世には
これの山はつくりけらしも

詠蝦夷島歌四首幷短歌

やすみしゝ、我が大君の、神のまに、
しきます國の、鳥がなく、東の國の、
みちのくに、すめるえみしは、昔へ
の、ふみにしるして、みくさある、そ
れが中にも、にぎたへの、にぎえぞ
とふは、いではなる、秋田をぐにに、
すまひつゝ、まつろひたるぞ、ふぢ
衣、あらえぞとふは、ぬしろより、
やゝ道さかり、うとかりし、えぞな
りけらし、遠えぞと、いふははるけ
き、都賀留ちふ、を國にありて、し
じもの、木の根にふせり、土蛛の、
穴にも居つゝ、ちはやぶる、事をし
なせば、そこばくの、御軍たゝし、
こゝばくの、もりべをおかし、多賀
の城や、かみの城こえて、荒蝦夷が、
ひらぼこ山に、御軍は、いばみたけ
べど、遠えぞの、限りをしらに、道
をはり、岩ねさぐゝみ、ものゝふの、
ちゞの猛夫の、駒の爪、つがるをぐ
にに、せまれゝば、まつろはましを、
心おそき、えみしがともは、うなの
への、離小島に、舟のまに、漕ぎか
隱れし、そこもへば、昔へえぞと、
聞えしは、津輕ぞとほき、きはみに
て、今いふえぞは、その世には、空
し島にも、ありやしつらむ、
皇の、神のみくには、船かぢの い
かよふかぎり、駒の爪、つるがのうら
の、えびすめの、ひろめのなびく、
いやひろに、百年あまり、うちなび
き、おほまつりごと、東にて、まを
し給へば、波のむた、よらぬ物なみ、
共のえぞが、今すむ島も、ひろめな
す、廣しといへど、雲のゐる、山の
み高く、浪の振る、いそこそあらく、
ありければ、つがるに向ふ、わたの
底、いくりに生ふる、松前の、浦か
たつきて、かきかぞふ、五つのたね
を、おほすべき、地の限りは、司ま
け、守部置かせば、えみしはし、お
のが幸なる、けものとり、魚とりを
して、この島の、北にさかれる、ま
かちぐに、そがあはひなる、ことさ
やぐ、からふと島に、けものもち、
魚もて行けば、わたどなる、まかち
の人は、青玉も、きぬもも來て、
あひかへて、通ふとすれど、まかち
人、えぞへしもこず、えぞ人も、ま

かちはゆかず、あるこそは、よろしかりけれ、しかれども、まかちの人も、えみしらが、なつくを見ては、かくばかり、かしこき國と、日の本の、やまとの國を、仰がざらめや、

此の長歌四首なるが、末の二首はうつしあやまり多く、詞のおちたる所もありて、讀みがたければのぞけり、重ねて善本を得たらむ時に補ひ載すべし

反歌

駒の爪つがるのをちのえぞが島そをさへなつく君がのりかも

津輕舟北ふく風にこゝろせよえぞが浦回(うらは)は浪たゝずとも

いざ子ども心あらなむみちのくの千島のえぞもやさしとぞきく

うま酒の歌

うまらに(美飲)、を(喫)やらふるかね(哉)や、ひと(一)つき(杯)ふたつき(二杯)、ゑら／＼(樂)に(悦)、たなそこ(掌底)うちあぐる(拍擧)かねや、みつきよつき(三杯四杯)、ことなほし(言直)、こゝろなほし(心直)もよ、いつつき(五杯)むつき(六杯)、あまたらし(天足)、くにたらす(國足)もよ、なゝつき(七杯)やつき(八杯)、

旋頭歌

この冬はいと寒からねば梅のとくさきて早く散るもあり、後の十二月十五日に春の立ちけるを、廿一日の朝雪いと深くふりければ

梅のはな、ちりしく庭に、雪はふりにけり、春の來て消えなむのちも、消えずやあらまし、

賀茂翁家集終

歌意考

賀茂眞淵

歌意考序

高山に登りて短山を見る時は、峯のたをり、谷の隈々も見明らむべく、短山より高山を見放けんには、おぼゝしく眞分明ならじをや。こゝに吾師縣居の大人の五の意とて、古事學を案内なひ給へる文あり。其れが中なる此の歌の意は草案のまゝ傳へて飽かぬ心地すめれど、古の歌の直く厚きと、後の歌の狹く苦しきとの區別を論らひ、ひたぶるに古に據るべき由を諭し置かれしは、高き昇らん山口覓むる栞とも成るべきを、近き年頃、此學する徒も歌は後を善しとすと世に諂へる敎に引かされて、古風はいよよ廢れ行くが憂はしく可惜しくて、猶あやにくに師の敎を世に知らせまほしくて、此の一冊を板に彫らせ(ママ)る事には成りにたり。

寛政十二年文月

從四位下荒木田ノ神主久老

うたのこゝろのうち

あはれ、あはれ、上つ代には、人の心ひたぶるに直くなん有りける。心しひたぶるなれば、爲す業も少なく、事し少なければ、云ふ言の葉も多ならざりけり。然か有りて、心に思ふ事ある時は、言に擧げて歌ふ、こを歌と云ふめり。斯く歌ふも、ひたぶるに一つ心に歌ひ、言葉も直き常の言葉もて續くれば、續くとも思はで續き、調ふとも無くて、調はりけり。斯くしつゝ、歌はたゞ一つ心を云ひ出づる物にし有りければ、古は、特と詠むてふ人も、詠まぬてふ人さへ有らざりき。遠つ神、吾が天皇の、大御繼々、限り無く、千五百代を知ろしをす餘りには、言佐敝ぐ唐、日の入る國人の、心詞しも、こき交ぜに來交はりつゝ、物多にのみ成りもて行ければ、此國に直かりつる人の心も、隈出る風の横しまに渡り、云ふ言の葉も、巷の塵の亂れ行きて、數知らず、くさ〴〵になん成りにたる。故、いと末の世と成りにては、歌の心言葉も、常の心言葉しも、異なる物と成りて、歌とし云へば、然かるべき心を曲げ、言葉を求め取り、古りぬる跡を追ひて、我が心を心ともせず詠むなりけり。其れはた塵の居われる鏡の、影の曇らぬ無く、芥に交れる花の蕋の、穢しからぬ有らざるが如、さしも曇り穢れにし後の人の心もて、覓め撰びて、云ひ續けしが、汚からじやは。然からば打泣きて止みぬべきにやと云ふに、然かは有らず。抑も石凝登邊の作れる鏡の形も、五十猛の尊の生せし木の花も、今しも傳はれるをば、忘らえ置き、塵芥にも馴るれば馴れて、穢しとも知らず有りつゝ、思ひ起す心の無きになん有りける。いでや天地の變らふこと無きまにまに、鳥も獸も草も木も、古の如ならぬし無きを思へば、人の限りしも何ぞや古今と異なるべき。人てふものは、憂たて賢ら心もて、互に爭ふ程に、自ら横しまに習ひ來て、世の中も移ろふめり。そを一度惡ろしと思はん人、何ぞやよき方に移ろひ返らざらん。然か心を起して、古の八咫鏡に朝なさな向ひ、陰高き千本の花に、ひとしく交りつゝ、其の形、其の色に似てしがもと乞ひ（ィ思ひ）つゝ、歌をも文をも取り成して見よ。もとの身の、昔人に同じき

人にし有るからは、然か習ふ程に、心は磨ぎ出でたる鏡如し、詞は藪原を過ぎて、隈無き山の花とこそ成りなめ。萬づの事の古に復らふをば、主變り行く唐國にしも愛づるてふを、同じ天つ日嗣知ろしをす此の御國にして、御盛なりし皇大御祖の天皇の定めまし〻、天雲の高き御世振に復らで、山川の下れる時をのみ守るべきや。歌は其の時の姿に由りて詠む事ぞなど云ふ者は、私の心の甚しきにぞ有りける。斯くしも下ちぬと云へど、畏き吾が遠つ御神の國の手振は猶も著くて、古を慕ぶる人も、はた少なからず。されども大空の高き世の文を見るに、高山の嶮しく道も絶え、青海原の恐くして奥所も知らず、春の月の中空の霞に隔て、秋の風の外の木の葉も吹き交へつらんと覺ゆる事あり。下れる世人は、其の霞に迷ひて有らぬ方に至り、或るは言さへぐ外の國の風に誘はれて、本立を忘る〻類ひぞ多なる。こ〻に古の歌こそ、千年の前つ人の詠めりける心詞も、月日と共に全く變らで、花紅葉如す、昔今同じき物は有めれ。濃紫名高く聞えたる藤原、寧樂などの宮振に心を遣りて、山賤の橡 怪しの色を忘れつ〻、年月に我も詠む程

こそ有れ、自ら我が心肝に染み通りなん。然る時ぞ古人の心直く、詞雅びかに、いさ〻かなる汚らはしき塵も居ず、高くはた雄々しき心習ひも思ひ取りぬべし。斯くて後に、萬づの古き文どもをも見んに、終には深き山を越えて里に出で、遠き海を渡りて國に至らんが如く、世の中てふ物は、物無く事無く、徒らなる心をも悟らへ、設けず、作らず、誣ひず、教へず、天地に適ひて、政ちませし古の安國の、安らけき上つ大道の、神の御代をも知り明らめてん物は、古人の歌なるかも、己が詠む歌なるかも。己れいと若かりける時、母刀自の前に古き人の書ける物どもの有るが中に（かぐ山を）「古の事は知らぬを我れ見ても久しく成りぬあめの香具山」、（子のもろこしへ行くを其の母）「旅人の宿りせん野に霜降らば吾子はぐくめあまの鶴群」、（つまの伊勢のみゆきの大御供なるを「長らふるつま吹く風の寒き夜に我が背の君は獨りか寢らん」、（筑紫より上る時女に別るとて）「丈夫と思へる我れや水ぐきの水城のうへに涙のごはん」、（題知らず）「下にのみ戀ふれば苦し紅の末摘花の色に出でぬべし」、（ものがたり）「在る時は有りのすさみ

に語らはで戀しきものと別れてぞ知る」、（たび〻名ぐはしきいなみの海の沖つ波千重に隱りぬやまと島根は」、「あはぢのぬしまが崎の濱風に妹が結びし紐吹き返す」など（イ猶アリ）いと多かり。こを打詠むに、刀自の述給へらく、近頃其許たちの手習ふとて云ひ合へる歌どもは、我がえ詠まぬ愚かさには、何ぞの心なるらんも分かぬに、此の古なるは、然こそとは知られて、心にも沁み、唱ふるにも安らけく、雅びかに聞ゆるは、如何なるべき事とか聞きつやと。己れも此の問はするに付けては、げにと思はずしも有らねど、下れる世ながら、名高き人達のひねり出だし給へるなるからは、然る由こそ有らめと思ひて、默し居る程に、父の差し覗きて、誰も然こそ思へ、いで物習ふ人は、古に復りつゝ學ぶぞと、賢き人達も教へ置かれつれなどぞ有りし。我かに心行くとしも有らねど、承りぬとて去りにき。とても斯くても、其の道に入り給はざりけるけにや有らんなど覺えて過ぎにたれど、さすがに親の言なれば、況して身まかり給ひては、文見歌詠む每に思ひ出でられて、古き萬づの書の心を、人にも問ひ、おぢなき心にも心を遣りて見るに、自ら古こそと眞に思ひ成りつゝ、年月に然る方になん入り立ちたれ。然か有りて思へば、先に立ちたる賢しら人にまとはれて、遠く惡ろき道に惑ひつるかな、知らぬどちも、心靜かに覓め行かば、なか〳〵に善き道にも行きなまし。歌詠まぬ人こそ、直き古歌と、苦しげなる後のをしも、區別めぬるものなれと、今ぞ迷はし神の離れたらん心地しける。

物の始め惡ろく入り立ちにしこそ苦しけれ。萬づ橫しまにも習へば、心と成るものにて、本の大和魂を失へりければ、偶善き筋の事は聞けども、直く清き千代の古道には、行き立ち難てになん有る。こを譬へば、高き山に登るが如し。本繁き山口を押分けて、木の根巖が根い行きさぐゝみ、汗もしとゞに、息も喘ぎつゝ、辛くして峰に到りぬ。斯く到りては、仰ぎて向ひてし山々をも見下し行きて、見ぬ國の奧所も見明らめられつゝ、今こそ心の雲霧も晴けく、世に廣く暗からざめりと覺ゆ。さてしも有らぬは人の心にて、いでや雲風にもなどか乘らざらんと思ひ進まるれば躍り上り、飛び上り習はすに、怪しきわざしも習はゞ、

習ひつと覺えて、二無く誇らしく、獨笑まひをしつゝ經るなりけり。然か有る程に、ある時、ゆくりなく雲に飛ばんも、下らずやは有らん。風に乘らんも、行方こそ極み有なれ。怪しのわざやてふ心の出で來ぬれば、いつと無く其の高嶺をも下りまがりて、本の麓に歸りぬめり。然て靜心に成りては、怪しき心ずさみにも有りつるかなと思ひ成れゝば、萬づ夢の覺めたらん曉の如ぞ覺えける。此の時に至りて、また古き書を見、歌をも唱へ試みれば　彼の怪しくすすめる亂りわさは無くて、唯此の麓へ歸り下りたる心にぞ有りける。然かしてこそ古人の心は、善く貴かりける物と思ひ知らえぬれ。斯くて掛けまくも畏き吾が皇神の道の、一つの筋を崇むに付けて、千五百代も安らに治れる、古の心をも、心に深く得つべし。次いでには、言喋ぐ國々の、上つ代のさまを善く知れる人に向ふにも、直き筋の違はぬも多かりけり。然かは有れど、斯くする程に、殘りの齡無く成り行くこそあやなけれ。如何で若き時より、自ら心肝を定めて、唯古き書、古き歌を唱へて、我も然る方に詠みも書きもせよ。身もいたづかで習ひ得つべし、思ひ得つべし。萬葉集は今二十卷有めれど、彼の橘の諸兄のおほまうちぎみの撰び給ひけんは、たゞ一つの卷、二つの卷こそさだかにそれと見ゆれ。それはた字の違ひ、訓みの誤れるなん多き。また十まり一つ、二つ、三つ、四つの卷も、右に次ぎて、撰び給へるにやと思しき事あり。何ぞと云はば一の卷、二の卷は、凡そ詠み人知られて、且つ宮ぶりなり。十一、十二、十三は、皆詠める人知らえぬ古き歌の、はた都人のなり。是れを古歌集とも云へる事あれば、他人の集めつらんとも思へど、猶一つ二つの卷の、詠み人知らえしのみを撰むべくも有らずと思ふ事あり。さらば十三と有るこそ、いと古き歌にて、古の雅びごと著く、はた長き歌多ければ、此れを三の卷とし、十一、十二を四五とし、さて十四は東歌にて、多くの國ぶりなり。唐國の古の歌にも國ぶりを集めしにも由り、固よりも歌は人の心を述ぶるものにて、其れに付けて、いとやんごとなき邊りに、食國人の心をも知らする物なれば、何ぞや大宮風のみを云はん。斯かるからに、東歌をも、末に付けて撰びつべし。今の二十の卷なる東歌は、大伴の家持ぬしの取り集めし物、

この十四の巻なるは、それより古き東歌にて、必ず上に續きて撰び添へられし物と見ゆ。また三の巻よりは、多くは家持ぬしの歌集なり。五は山上憶良の集、七と十とは、事のさま等しくて、また誰その人の家に書き集めし物、斯くさま〴〵なれば、善く撰び調へたる巻は少なし。由りて戯れたるも、はたよく本末の調ほらぬも、また本は宜ろしくて末の詞の惡ろきも有り。然かれば今かたとして取らんには、更に撰びて取るべし。其の撰びはた難ければ、誰かは是れに當らん。唯詞の滯らず、理明らけく、雅びて優しと覺ゆる心言葉なるを取るべし。少しも聞きにくゝ苦しげなるをば、先づは惡しと思ひたれ。四千まり三百ばかりの歌なるが中に、其のなだらかなるをのみ取らんも少なからぬなり。此の事を善く心得ずて、二十巻共に皆同じと思ひ、萬葉風とて、後にかなはずなど云ふなり。右の如く心得て、然かも調ひたる姿心をよく取りたるは、鎌倉の大まうち君なり。其の中にも、始と中と末と見ゆ。末によく取り得られたるをもて思ひ合すべし。されど女の歌には心すべし。古今歌集の中に、詠み人知らずてふ歌こそ、萬葉に續きたる奈良人より、今の京の始までの有り。此れを彼の延喜の頃の歌と、善く唱へ比べ見るに、彼れは事廣く、心雅びかに豐けくして、萬葉に繼げる物の、然かもなだらかに匂ひやかなれば、眞に女の歌とすべし。古は丈夫は、猛く雄々しきを旨とすれば、歌も然かり。さるを古今歌集の頃となりては、男も女ぶりに詠みしかば、男女の分ち無くなりぬ。然らば女は、たゞ古今歌集にて足りなんと云ふべけれど、其は今少し下ち行きたる世にて、人の心に巧み多く、言に誠は失せて、歌を作爲としたれば、自ら宜しからず、心にむつかしき事あり。古人の直くして心高く雅びたるを、萬葉に得て、後に古今歌集へ下りて學ぶべし。此の理を忘れて、代々の人、古今歌集を事の本として學ぶからに、一人として古今歌集に似たる歌詠み得し人も聞えず。はた其の古今歌集の心をも、深く悟れる人無し。物は末より上を見れば、雲霞隔たりて明らかならず。其の上へ昇らん階をだに得ば、いち早く高く昇りて、上を明らめて後に末を見よ。既に云ひし如く、高山より世間を見わたさん如く一目に見ゆべし。物の心も、下なる人、上なる人の

心は計り難く、上なる人、下の人の心は計り易きが如し。由りて學びは、上より下すをよしとする事、唐國人も然か云へりき。

明和の初めつかた、賀茂の眞淵が老の筆に任せて書けるなり。

此一冊は、師の自らの手して書かれしを寫し置きつるなり。或る人の持たるは、初めは是れに同じくて末に事多く添はりて、紙の枚も多く、いと異なり。今つらく考へ見るに、其の異なる條々は新學に云はれし趣に如何ばかりも違はねば、後に除かれしものなるべし。故、その異本は捨てゝ玆に擧げず。

五十槻園藏板

物皆は新しき善しといへるを、學びの道こそ古りぬる善きとて、吾が師加茂の大人の教へさとし給へる書の巻々多かるが中に「にひまなび」といふ一綴の有なるを、難波人の世に廣くなし置きねと催さるゝにより て、此度板に彫らしむる事にはなりにたり。まことや、この學のみ盛りに榮えて、是ればかりの物すら人皆の持てはやせる事となりぬるは、喜ばしく嬉しくて、

咲く花の愛での盛りと古言は開け滿ちぬよ時の行ければ

寛政十年やよひのもちのころ

従四位下荒木田神主久老

にひまなび

古の歌は調を專とせり。うたふ物なればなり。その調の大よそは、のどにも、あきらに、も、さやにも、遠くらにも、己がじし得たるまに〳〵なる物の、貫くに、高く直き心をもてす。且つその高き中に雅びあり。直き中に雄々しき心はあるなり。何ぞといへば、萬づの物の父母なる天地は春夏秋冬をなしぬ。そが中に生るゝ物、こを分ち得るからに、うたひ出づる歌の調もしか也。また春と夏と交り、秋と冬と交れるがごと、彼れ是れを兼ねたるも有りて、種々なれど、各それに付けつゝ宜しき調は有るめり。然れば古の事を知る上に、今その調の狀をも見るに、大和國は丈夫國にして、古は女も丈夫に習へり。故、萬葉集の歌は、凡そ丈夫の手振なり。山背國は手弱女國にして、丈夫も手弱女を習ひぬ。故、古今歌集の歌は、專ら手弱女の姿なり。仍りてかの古今歌集に、六人の歌を判るに、長閑にさやかなるを、姿を得たりとし、强く堅きを鄙びたりと云へるは、その國、その時の姿を姿として、廣く古をかへり見ざるものなり。物は四つの時のさま〴〵有るなるを、しかのみ判らば、只春の長閑なるをのみ取りて、夏冬を捨て、手弱女ぶりによりて、丈夫すさみを忌むに似たり。抑も上つ御代〳〵、その大和の國に宮敷きましゝ時は、顯には建けき御威稜をもて、內には寬き和をなして、天の下を服へましゝからに、いや榮えに榮えまし、民もひたぶるに上を貴みて、己れも直く傳はれりしを、山背の國に遷しましゝゆ、畏き御稜威のやゝ劣りに劣り給ひ、民も彼れに附き是れに阿りて、心邪に成

○歌の事を先づ云ふは我國ぶりなれば、入るにたやすく且つ歌を得ざれば皇朝のまなび萬づにかなはざればなり。其由は下にいふ。

○直きと云ふ中に邪に向ふと、思ふ心の强ひて雄々しきと、心に思ふ事をすさび云ふとの三つ有り。そは事に從ひて取るべし、其中に古人は思ふ事ひがわざにても隱さず歌に詠める、此直きにぞ歌は哀れと覺ゆる事あるなる。

○歌の調てふ物は玆に云ふ幾樣々なれど各其の難きにつきて善き惡しきあり。凡そを云はゞ共に打唱ふに滯りなくて何となく心高く聞ゆるを專らとす。にひ學びの程には調などには心も寄らず、一ふし有る所にのみ目の着く物なり。そのふし有る所をばおきて何と無く續けし所に心を寄せて見よ。古人はそこに心を用ひしなり。此事を思ひて古歌を見れば久しからず思ひ得べし。

り行きにしは、何ぞの故と思ふらんや。其の丈夫の道を用ゐ給はず、手弱女の姿をうるはしむ國振と成り、それが上に唐の國ぶり行はれて、民、上を畏まず、奸す心の出で來し故ぞ。然れば、春の長閑に、夏のかしこく、秋のいち早く、冬の潜まれる、種々無くては、萬づ足らはざるなり。古今歌集出でてよりは、和びたるを歌といふと覺えて、雄々しく強きを賤しとするは、甚じき僻事なり。これらの心を知らんには、萬葉集を常に見よ、且つ我が歌もそれに似ばやと思ひて、年月に詠む程に、其の調も心も、心に染みぬべし。さるが中に萬葉は撰みぬる卷は少なくて、多くは家々の歌集なれば、惡しき歌、惡しき言もあり。いで今摸とし學ばんには、よきをとるべし。そのよきを撰むは難かれど、既にいへる調を思ひてとるべし。また本はいと愛でたくて、末惡しきもあり。そは本を學びて末を捨つべし。是れを善くとれるは、鎌倉のおほまうち君なり。その歌どもを多く見て思へ。しかすがに、又古今歌集を見るべし。こは凡そ女の姿なる中に、詠み人知らえぬ歌には、奈良の朝の歌もあり。且つそを後の言して唱へ變へたるも有り。今の都なるも、始め三嗣ばかりの御代は、萬づ古の手振ありて、歌も半は古を兼ねたり。よりて此の集には、詠み人知らずてふにこそ勝れたる歌は多けれ。それより後なる中には、細かに巧みて心深げなるを去るべし。本撰める物といへど、古に復らんとする時は、などか更に撰みの有らざらん。斯く意得たる後には、後撰、拾遺の歌集、古今六帖、古き物語書らをも見よ。かくて立かへり、古事記、日本紀を讀み、續日本紀の宣命、延喜式の祝詞の卷などを善く見ば、歌のみかは、自ら古き樣の文をも綴らるべきなり。

○女の歌はしも、古は萬づの事丈夫に倣はひしかば、萬葉の女歌は、男歌にいとも異な

○古の歌集てふに他し人々の歌を専ら集めその中に我がをも書き交へたり。是を知らぬ人たとへば人麻呂の歌集に出づてふ歌を皆人麻呂の歌と思ひ誤りぬ。其集の中に名を擧げぬ他人の歌にこそあれ。

○末を捨つとは其の如く短歌に詠みうつさぬを云ふ。其の言短歌には惡しけれど長歌にはよろしきもあり。又古言は歌にはよろしからぬ有るも知りおくからに古意を明らむる事あり。

○鎌倉公の歌集には初と中と末を交へ載せたり。その初めなるは云ふに足らず、中頃の内には取り取らぬ分かち有るべし。末に心を得給へるにこそ類ひ無きはあれ。

○萬葉を詠み移さんよしは、後世古歌を取るべき事を云ふ

如きさゝき定めは皆用ゐず。いかにも心にまかせて詠み移すべし。其外後世いふ所のせき定めどもは皆古無き事なり。心せばくては古の風雅に移りがたし。されど又古は古の定め有りて漫にいふ事あらぬ由は古歌を年月に見る中にみづから知らるべし。

らず。そが中に善く唱へみれば、おのづからやはらびたる事あるは、本よりしか有るべきなり。（大伴の坂の上の郎女の雄々しく、石川の郎女の艶ひやか成るはおきて惣てをいふ）男は荒魂、女は和魂を得て生るればなり。然かは有れど、この國の女は他國に異なれば、其の高く直き心を萬葉に得て、艶へる姿を古今歌集の如く詠む時は、眞に女の宜ろしき歌とすべし。其の姿もまた今の京の始つ方なるに由るべきなり。かくて古今歌集をのみまねぶ人あれど、彼れには心迫く巧みに過ぎたる多ければ、下れる世人の癖にて、その言狹く巧めるに心寄りて、高く直き大和魂を忘るめり、とりてそれが下に降ちに降ちつゝ、終に心狂ほしく、言狹小き手振となん成りぬる。此の間を思へ。たゞに古今歌集をまねべる人、今に至りて幾十人か有りけんを、一人だにそれに似たる歌よみのなければ、後に立ちてま學は甲斐もなし。上より下さばなどか得ざらん。こは大かたの女の上を云へり。茲に皇朝の古の女の手振をいはん。かけまくも畏き、伊邪那美の大御神は、男の御神と並びて、國土、萬づの物を造り始め給ひ、後に事あるに及びては、黃泉つ軍を起して、男の御神に向ひて理を立てまし、天照大御神も、事ある時は、大御身に矢串を帶ばし、大御手に弓取りまし、丈夫なす雄叫をなして、惡しき大神を和し給ひ、平けき時は、凡の禍事をば見直し聞き直しまして、遂に天つ日嗣の千五百秋の御法を定め給ひ、御孫命の御女木花之開耶姫の命は、空室に火を放ちて、明らけき心を明し、五十狹茅天皇の皇后は、焰燃え來る稻城の内を出でまさずして、義を立て給ひ、息長足姫命は、三つの韓國をしも征服へ給ひ、廣野姫の皇后は、御軍を助けまして、神功を立て給ひ、橘姫の命は皇子に代りて海に入り、山邊の皇女の御夫と同じく罪なはれ給ひしなど、また平け

き時、幡梭皇后は、善言もて建き天皇の御怒を和し、重日足姫天皇は、御自ら祈りて雨を降らせ給ひしなど、かくやんごとなきにすら、立てたる御勢然かおはしゝかば、臣民には、夫は雄軍を引ゐれば、妻は雌軍を率ゐて敵に向ひ、女にして其の國を知りて、人の犯しを入れず。此の外、理を立て、赤き心を顯はせしなど、數へも敢へんや。末の世にも、女にして家を立て、鄙つ女にして仇を討ちしなど少なからず。かゝれば、此の大和魂は、女も何か劣れるや。まして武夫といはるゝ者の妻、常に忘るまじき事なり。皇朝の古、萬づに母を本として貴めり。兒を育すより始めて、その功父に勝れゝばなり。しか有りて平けき時には、和びて事を執るを專らとすべく、天地の母父のなしのまにまに、女は姿の荒びぬものにし有れば、いひ出づる言葉も和びたる事などかなからん。さはあれど、後の世には、すべてぬえ草のしなひうらぶるを、わざのごと思ひ誤り、それが上も所狹く習はするまゝに、果ては曲々しくさへ成り行きぬるは、本の大和魂を、我も忘れ行きしなり。今、萬葉集を學びて其の心を知り、古今歌集を兼ねてその姿を得ば、誰か追及無き物とせん。古の歌は萬づの人の眞心なり。その眞心をいふ故由を知る時は、何か如く物あらん。教の道もあれど、常にしも習はし難ければ、時過ぎて知れ易きを、歌は暇ある時に、自ら詠むものからに、教へずして直く眞心になりぬめり。是れぞ此れかしこき神皇の道なりける。

○後の世人、萬葉をかつ〳〵見て、えも心得ぬまゝに、こは古りにし物にして、今に協はずといふよ。大和も唐も、古こそ萬づに宜しければ、古事をこそ尊めれ、何處にか古を捨てゝ、下れる世振に就けてふ教の有らんや。そはおのれがえ知らぬことを、飾らん

○唐國も上つ代はこゝにひとしかりしを、周といふ代より萬づを强ひ改めて父を尊しとす。こは人の理といふものにて天地の心にあらず。故に理は理の如くして世の治らさるなり。

○歌を業の如く思へるは後の世のひが心得なり。

○歌はたとひ戯れがましき男女の相聞えを聞きても、聞く人の心に深く哀れとは思はれてみづからの戯れ心は起らず。是れぞ唐國の面を善くして、內きたなきとは異にして、うらうへ無き皇朝の古の習はしなればなり。

とてうるけ人をあざむくなり。凡そ古き史に依りて、古き代々は知るれど、その史には、古の事、或は洩れ、或は傳へ違ひ、或るは書く人の補ひ、或は漢文の體に書きしかば、古の言を、惑はれなどして、ひたぶるに受け難き事あるを、古歌てふ物の言を、よく正し唱ふる時は、千年前なる、黒人、人麻呂など、目の邊りにありて、詠めるを聞くにひとしくて、古の直ちに知らるゝ物は古の歌なり。且つ古人の歌は、時に從ひて思ふ事を隱さず詠めれば、その人々の心顯なり。さる歌を幾百も常に唱ふるまゝに、古の心は然かなりてふ事を、よく知り得らる。且つ言も漢文ざまに書きし史などは、左も訓み右もよまるゝ所多なるを、歌は聊けの言も違ひては、歌をなさねば、かれを問ひ是れを考へて、善く唱へ得る時は、古言定まれり。然かれば、古言をよく知るべきものも古き歌なり。天の下には事多かれど、心と詞の外無し。此の二つをよく知りて後こそ、上つ代々の人の上をもよく知るべく、古き史をもその言を誤らず、その意をさとりつべけれ。また後世の人、萬葉は歌なり、歌は女の弄ぶ戯の事ぞと思ひ誤れるまゝに、古歌を心得ず、古書を知らず、なまじひに唐文を見て、此國の神代の事をいはんとする賢しら人多し。よりてそのいふ事虚理にして、皇朝の古の道に協へるは惣べてなし。先づ古の歌を學びて、古風の歌を詠み、次に古の文を學びて、古風の文をつらね、次に古事記をよく讀み、次に日本紀をよく讀み、續日本紀ゆ下御代繼の史らを讀み、式、儀式など、或ひは諸の記錄をも見、(西宮、北山、江家次第等までにいたる。)假字に書ける物をも見て、古事、古言の殘れるをとり、古の琴、笛、衣のたぐひ、器などの事をも考へ、其の外種々の事どもは、右の史等を見思ふ間に知らるべし。かく皇朝の古を盡して後に、神代の事をば窺ひつべし。

○後世神代の事を知らまくする人は、古歌古言を學ばず、中々に唐ことを見學びて空言もて漫りなる考をなし、また歌文を好む人も古の歌文を知らず、流れ下れると、家々に私せる歌どもを誠とする故に誤れる事限り無し。又古の事を好む人々、書の誠いつはりあることを知らで、僞の書にまどはされて誤る事限り無し。此の意を深く思ひたらん人こそ多からね。

○衣の類と器物は、させる學びの方にあらねど、今の世の中、見る物聞く物皆鄙しければ、心の風流ゆかん由無し。故、家の調度も古を好む時は心おのづから雅びかになれ

り。まして衣の類ひは己が着ずと云へども其の事を知る時は心鄙びざるなり。

○是れより前に古事記、日本紀の神代の巻をもあまたたび見つゝ其の言をよく讀み得て後に意を解くに至るを云ふなり。惣べての書を始より意を得んとする時は、私の後世意となりぬ。訓をよく〳〵知りて後に古言に從ひて意をいふ時は古にかなへり。後人は其の本の言をば傍にして空に考へたる意を見る故にかなへる事なきなり。

○五十音の延約、或は喉音、舌音などの事は、知らぬ人無し。たゞ皇朝の會に用ひて種種の例ある事をば强ひて知る人無きなり。其の音の別のみ云ひて用ゐし例を知らでは其の言に用無し。そを知らぬ人漫に唐天竺のみをもて其の言をも云ひはかる故に違ふ事多きなり。

○いさゝか古言を好めばやがて古言を解きなんとして、未だしき心もて考へ云ふ人あ

さてこそ天地に合ひて御代を治めませし、古の神皇の道をも知り得べきなれ。

○古言は必ず考へて解くべきなれど、是れを解くこと甚だ難し。先づ五十音をよく知るべし。そは後世絶えて知る人無ければ、其の言の分ち、用ふるさまなど、我が語意てふ物を書きたるを見て思へ。此の五十音の事、他の國の悉曇、韻經などいふをもて、皇朝の言の音をもいふ人あるは、皆我が國を知らぬ故なり。わが國の言は、いと異なりと思ひ得ん事は、古風の歌文などを意得ん人知るべし。さて古の假字をよく覺えよ。假字は言の本にて、假字によりて言を釋くものなれば、是れを定かに覺ゆるを專らの事とす。その假字は、古事記、日本紀、萬葉、その外の古の書どもよりして、和名抄まで皆同じければ、それらをよく見る時は定まれり。それ少し過ぎて、拾遺歌集などには誤あり。その頃より皇朝の學のふつに絶えし故なり。後世人、他國の字音にいへる事をもて、皇朝の假字を思へるはすべて誤れり。

○令、律をも學ぶべし。こは唐國の唐の令、律を以て皇朝の習はしを兼ねて立てられし物にて、專らは我が國の意にあらずといへども、大寶令は近江大津朝の令を本とせられしと聞ゆれば、是れも久しき世の定めなり。知らでは中比の世を意得る由無し。かく嚴か細かに、唐風を用ゐられしより、表は宜しきに似て裏惡しくなりぬ。よりて遂に大御稜威も薄くなりましゝなり。上つ代を慕ふ者、同じく是れをよしとはせねど、はた後の史などを見んに、この學せでは有るべからず。

○後の世に、歌の體、十を擧げたる物の中に、器量體とて、古今歌集にある、「梅の花それとも見えず久方の天霧る雪のなべて降れゝば」てふを擧げつるは、其の頃までも猶歌の

傳ばかりは殘れりけり。こは奈良人の歌にて、人麻呂の歌の心も調も得たる歌なり。此の聊か細かなる事をいはずして、調の高きに、丈夫の高く廣き心顯れたり。同じ集に面白く聞ゆる梅の歌多かるを、そは狭き心を潜めて作れる物なる事を、是れをもて悟りて、奈良の朝までの人の心の高きを思へ。鎌倉の大まうち君の歌をも對へ見よ。人麻呂の歌は、勢ひはみ空行く龍の如く、言は海潮の涌くが如し。調は葛城の襲彦、眞弓を引き鳴らさんが如し。赤人の歌の詞は、吉野川如す清冷に、心は富士の嶺のごと、準り無く高し。人麻呂とは天地の違ひ有れど、共に古の勝れたる歌とせり。是等より前に、此の人々より勝れたる言も有れど、詠み人の名の聞えぬはこゝに云はず。

○鎌倉の大まうち君の歌は、今の京此方の一人なり。其の體、古に協ひたれば、たまたま古今歌集の言を交へ用ゐ給ひしすら、似つかず聞ゆるにつけて、本の心も調も勝れて高き事知られたり。さて此の公、「筥根道を吾が越え來れば」、「もの丶ふの矢並つくろふ」などの、世に勝れたる多かるは更にもいはず。事も無く聞ゆるに、「此の寢ぬる朝けの風に薫るなり軒端の梅の春の初花」、「玉藻刈る井手の柵春かけて咲くや河邊の山吹の花」などの本のいひなし、且つ常ある事をわざといはれつる、末の調の心高きを見よ。また梅開脈雨てふ題にて、「吾が宿の梅の花咲けり春雨はいたくな降りそ散らまくも惜し」と詠まれしを思ふに、其の頃京に歌詠む人、皆進心もて巧みに屈しつゝぞ在らん。いで古風詠みて見せんよとて、天の下の歌詠みを見下したる心も自ら見ゆ。此の雄々しき心をもたらぬ人、少しも先だてる人の、巧みなる歌を聞きては、背き難く離れ得ぬは、いしくなき心なる事を思へ。世の常のわざこそあれ、學の道に上下は無し。たゞよき人の、よ

り。其の據など、右にも左くにも有る物にて我は考へ得つと思ふべけれど皆僻事のみぞ有りける。仍りて強ひて解く事を恐れて學長けて後に事に觸れて思ひ寄れる事を云ふ時は當る事有るべし。先づは百を解きて一つ二つのみならではかなはずと思ひたれ。

○和名抄は誤れる事多けれど、假字は誤らざるなり。惣べて萬葉などにも今本には疑はしき假字もあれど古例を推して見れば專ら後世書手の誤なり。

○皇朝は言葉を本にて、意は其れに付けて別つ例なり。唐國は音を本にて字を一つ〳〵に作りて目じるしとせり。然れば事の本甚だ異なり。かくて皇朝には唐文字を借りてその言のしるしとするのみなり。天竺は天竺、唐は唐、大和は大和各別なりと思ひてあれ、その中に、こゝと天竺にはうはべ似たる如き事も有れど深く心得る時はひとしからず。

○此の歌の古注に人麻呂がなりと云へるは、ひが事なり。されど人麻呂の歌の體には侍り。

○後世の集どもに人麻呂の歌とて入りしは多くはひが事なり。此の人は唯だ萬葉にて見るべし。且つ人麻呂は長歌を專らとし赤人は短歌を得たるなり。こゝに云ふも是れに由れり。

○春かけててふ言は用ひ誤られしかど、こゝには一首の心と調とをいふ。

○花山の御撰など云ふは甚しきひがことぞ、よく見ば必ず然からぬ事見ゆべし。

○此の二集に人麻呂など云ひて歌あれど多くはよみ誤りて入りたり。人麻呂の歌はたゞ萬葉にて見よ。

○萬葉の如く端詞を文字にて書かば歌も然か書くべし。歌をば後世ぶりの草に書きて、題のみ文字の意に書くこと見苦し。夫萬葉に詠レ天、詠レ花など書けるは歌に依りて後に書きし物なり。後には文字の題を設けて詠むからに、古の雅意は失せて細かに狹き俗情をせめて詠むなればいよ〱いやしくなりぬ。やむ事無くば同じ事も假字にて書きたれ、されども心に思ふ事目に見耳に聞くものは皆歌の題となりぬ。その時歌をば詠みて後に其の有りし事を端に書く

しとよく見て、よしといはんを待つべけれど、後世さる人し有らねば、古人を友とするに如く事無し。なま〱なる人の褒めんによきは無しと思へ。

○古今歌集は、專らは女振なれど、さすがに古歌も多かれば、上にいへる如き、心高く雄々しきも交り、惣べての撰も、さる方に心高きなり。後撰集は、古今集に劣れる事、同じ日に論らふべくもあらず。古歌を取りしにも誤れる多し。拾遺集は、何處の傍への人か書き集めつらん。殊に萬葉をよみ誤り、古き詠み人を違へなどせし事、數へ難し。されど此の二集に、今京此かた、延喜の頃までの後につけて、よき歌もあれば、たまたまは見るべし。古今六帖、はた萬葉を讀み誤れる多かれど、後の歌に優しげなるもあり。題などは、六帖ぞよき。中に雜の思ひてふ條に書ける題の言葉ども面白し。後世人は、文字題にて詠むからに、歌の姿頑しく低し。同じ言をも、假字に書きたる時は、詠む歌も自ら豐かに雅びて出で來めり。また端の詞は、古今歌集、いと〱心して書きしものなり。その詞と歌と、相照して、理りあるさまなど、よく見心得て、さて詞面白く、短くて、然かも理聞ゆるを旨とすべし。同じ事をも書き流せば、拙く長きを、言を上下にして書き、又は歌に有る事を詞には略きなどせし味を意得よ。是れも文の一つなり。凡そ文は事の多きをば約めて云ひとり、事もなきをば飾り廣めぬる二つにあり。此の約めかざる事、上つ代ぞ妙なる中つ代には劣れり。下つ代には惣べて僻事有り。此の境を意得べし。端の詞には、鎊を成さず。如何に約めても、しかも理ある程をはかりて書くものなり。仍りて打見るには事も無げなれど、いと書きがたきものぞ。

○長歌こそ多く續け習ふべきなれ。こは古事記、日本紀にも多かれど、種々の體を擧げ

時は歌おのづからゆたかなり。其の事を先づ書きて後歌詠む事は古人は無かりき。

○古今歌集の長歌はいと弱くして、作りざまも未だしければ取らず。まして其の後なるは云ふにも足らず。

○かくの如く古言は今と異にて、思ひ取り難きが如くなれど萬葉を善く知りて古言の意を得る時は、思の外に詠みも心得もせらるゝなり。學ばずして今はえ知るべからぬ事と思へるはおのが賤しき心を心として物を疎むなり。

たるは萬葉なり。そのくさ〴〵を見て學ぶべし。短歌はたゞ心高く、調豐けきを貴めば、言も撰まではかなはず。長歌は様々なる中に、強く、古く、雅びたるをよしとす。よりて言もそれに付けたるを用ゐ、短歌には鄙びて聞ゆるも是れに用ゐて、中々に古く面白き有り。さて古は、思ふ事多き時は、長歌を詠めり。また短歌も數多く云ひて、心を果せしも有り。後の人多くの事を、短歌一つにいひ入るめれば、小き餌袋に物多く籠めたらん如くして、心卑しく、調べ歌の如くもあらずなり行きぬ。

○序歌てふ體をも詠み習ふべし。本に種々の事を擧げ、末にはたゞ一つ心をいふなれば、卽ち古の意なり。旋頭歌の句は、五七七を本とし、五七七を末とする事、萬葉に百餘り有るをもて知れ。古今歌集にて今唱ふるは僻事ぞ。其の歌は「遠方人に物申す我」を本とし、「そのそこに云々」を末とす。「見れどあかぬ花」といふまでを本、「まひなしに云々」を末とする事、右に同じ。

○文には殊に男女の體あり。先づ男の雅文書く事、古き學び無くてはかなはず。それも古事記、日本紀、萬葉、宣命、祝詞、其の外古き書を讀む事、歌にいへるに異ならず。その中に、古事記は全く皇朝の文なり。日本紀も本は然か有るを、多くの古書をもて、奈良朝にて撰びぬる時、唐さまに字を植ゑしかば、古のよみは失へり。今は三つが一つばかりぞ殘りぬる。その外は後人字を追ひてよめる物なれば、古言のみにあらず。顯神明憑談を、歌牟鵜可梨、また美飫喫哉を、于魔羅儞、烏野羅甫屢柯倭也などの如く訓までは、古の訓みに非ずと知るべし。古の宣命、祝詞などは、全く古の文なり。その體を得て何事にも移し書くべし。また萬葉の長歌をむかへて、古言を知り、且つ人麻呂その外

の長歌の巧み、或は延べつゞめたる言の體など、文に異ならず。下りては、伊勢物語など、かな文の中に、古文に用ふべき言を、廣く撰りて取るべし。是等を漫りにとらば、古今交はりて、拙く卑しくなりなん。それはた執成に依りて、古文になれる事もあれど、そは得て後自ら知る事なり。また田舍人の言にこそ古言は殘りたれ。よく撰みなば文の半ばかりは此の言にて云はるべし。後世は源氏物語の言などをもて書く人あれど、かれは女文なり、物語文なり、古き雅文にはかなはず、此の別ちをよく思ひ知れ。古今歌集の序は皇朝の歌の古意をば深くも辿らず、本の意、唐の四六の文體と、凡その唐文の意を假り、言は其の比の歌によみ習へる、女振の言を用ゐて書きしものにて、後につけてはめでたく書きし所もあり。又僻事も數多なり。よりてこは古文の樣にはあらず。同じ人の書きつれど、土佐日記はかの序より勝れり。かれは强ひて書き、是れは有る事を直に書きしなればなり。抑も文には、いと種々の體あり。古事記より祝詞までをよく見れば、自ら知らるべし。女の文は、是れも、きとせし事書かんには、さる方に古き文もて、女振に書きぬべし。その入り立たん初めには、女は源氏物語などをまねばゞ、自ら書き得べし。されど、是れに留まれりとおもふ事なかれ。後に古きさまに登るべき心じらひして學ばゞ、終に宜しく成り行きなん。遠き國の人の、此の道慕ふなれば、知らせまく思へど、詳なる由は、え盡さず。此の心をもて文どもを見、歌、文をもなして、さて問はんまに〳〵答へなば、思ひ至る人も有りなんとてなり。すべて古き文は、知るべしてあり。そを心得ん事は、自らする事と、先づは思ひ居り。しかはあれど、世の中は道知るべてふ事もあるならひにて、ひとり行き難きを思ひ開かんとて問ふと心得べし。さては文を讀むに心からならずして至りやすし。

明和二年七月十六日に　　賀茂眞淵　しるしぬ

○物語は物語の體にて雅文に取るべき言は、いと稀なり。

○後世人は其の時の師の傳へのみ守りて物を善く古にたくらべず。かゝる人は心を人に預くるが如し。そも新學の間こそ有れ、少し物心得て後はみづからの心をおこして古言にて理りを立て、後みだりにかたくなにせず、さるべき人にも問ひて善し惡しを正すべし。然かする事あまたになりてこそみづから善き事をも云ひ出で、思ひも得べきなれ。

天降言

天降言はしがき

八十ひらはゆきくれど、猶し忘らえぬは、みさかりなりける昔なりけり。まづ空かぞふ大城の君をみことほぎまつらすとては、七月十五日に御漁をみふなでせさせり。その折しも御かたはらにさもらへりて、歌つかうまつれと令言をうけまつりて詠みて奉り、猶さぶらふ人等己がじゝ村肝の心々にほぎ奉り、大御酒給ひ、御前も寛かにうたげせさせし折々につけ、あるは人にもたまひ、物にふらし歌はせしには、桃櫻に姫御子を教へ示

さひたまひ、夏山の白雨をみそなはして歌はせるには暑さを忘らひ、佃島邊の月にめでましては、ふせやの蜑人をあはれと見給ひ、雪の夕べのみうたげにいやつこをめでますみいつ[イ本ナシ]くしみ、[とイ]心の奥かも知らえ[イ本ナシ]ぬ御歌の數々そはりにたれど、またく[イ本ナシ]つどへ書いつけ侍らむはかしこかれば、うつしみのうつしき折にふれて、己れが恐れみおそれみも口ずさみ、あるは人の聞えさせしをおろ〳〵書いつけ侍るになむ。

天降言

田安宗武

山家鶯

山ざとはまだ消えやらぬゆきの中に鶯のみぞ春を知らする

白菊如雪

ませ垣に咲きかゝりたる白菊はよそにつもらぬ雪かとぞ見る

将軍家の御庭の紅葉のいろいろ染めたるを見侍りて

うすく濃く色づく庭のもみぢ葉は時雨もことに心あるらし

平尾てふ所にて夕照をよめる

亂れ咲くちぐさの花の色まして歸るさ惜しき野路の夕ばえ

寄夢戀

あだなりと思ひながらも假初(かりそめ)の夢にも人を見まくほしさよ(にィ)

寄風戀

ひたすらに羨ましくも秋風の思ふ方まで吹きかよふらむ

屏風の繪を見て

おりゐつる蘆邊を渡る朝風に鷺はみの毛の亂れてぞたつ

九月二十三日田安に家作りいでゝ今日なんうつりすみて

わが宿のかきほの松よけふよりは幾(いく)萬代(よろづよ)をもろともに經む

小朝拜の繪を近衛家久公より給はりけるゐやまひによみて奉りける

見てを知る千代の初春雲の上に裾をつらねて君仰ぐとは

一位照子の君二のまろの殿に御わたましの日、將軍家よりの御使に參り侍りけるに祝ひ奉りて詠める

この殿の軒端の松の緑までいくよろづ代の色をみるなり

三月の末の頃上の御前の遣水の邊にて曲水の宴のありけるを聞きて

いつしかと春も暮れ行く水の面に散りてぞ浮かむ花の盃

おとにのみ聞きし昔もかくこそとみかはの水にうかぶ盃

武藏の國飛鳥山といふ所に仰ごとにて櫻あまた植ゑさせ給ひぬれば、春ごとにいみじき盛りなれば、遠つ浦の海人、深き山の賤夫だに、雲をわけ波を凌ぎてつどふめるに、蘆垣

のまぢかき程にて今までおそなはりたることのいと本意なくて、今年はと思ひて春雨のはれま求めてまかり侍りき

櫻花さくと聞きつゝ行きてみればただ白雲の峰にたなびく

こゝにまた千本(ちもと)の櫻うつし植ゑていく萬世か君ぞながめむ

七月中の五日君を祝ひ奉るとて海邊に漁に出で侍りて

君がため今日を待ち得て幾度(いくたび)か浦こぎ出でゝ釣をこそせめ

あざみ草かきたる繪を見て詠める

花の上の露も光をそへにけむあさみるごとに色の増れる

瑞春院の尼君のませし殿の廢れぬる後そのかみを思ひいでて

見るたびに袖をぞぬらす古への面影もなき庭の草むら

題しらず

假初(かりそめ)に積る心のちりひぢもよしあし引(ひき)の山となりなむ

鏡だにすつれば曇ることわりや思ひてみがけおのが心を

五十の賀し侍りける人に詠みて遣しける

ことしよりまづ此の宿に杖つきてゆけらん末はよろづよ迄も

六十の賀し侍りける人のもとへ竹たてたる盃の臺に小袖をそへて遣はすとて

榮え行く色こそしるし竹の下(もと)に千代をこめたる鶴の毛衣

山居梅

梅の花まだき匂はぬ山里は雪ふみわけて誰かとふべき

うめの花盛りすぐれど山里は霰ばしりの聲も聞えず

廣度院暮雪　此の八景のうち夕照一首は前に平尾てふ所にて夕照をよめるとてあそばしけり

みよしのゝ花もかくやと白雪の梢々をうづむゆふぐれ

赤羽橋歸帆

追風に力もいれで舟人の帆かけて歸るけしきのどけき

新堀夜雨

住む人の稀なる野邊の物うきにあはれをそふる夜はの村雨

祥雲寺晩鐘

夕暮は數ひゞきそふ中にわきて此の野邊近き鐘ぞ異(こと)なる

衣干岡晴嵐

つよかりし夜半のあらしも知られけり衣ほす岡の今朝の景色に

水車秋月

秋も早廻りてこゝに水車たてるほとりに月はさやけき

小田落雁

あはれなり霧間に見ゆる山陰の小田
にと落つる雁のひと連

右の御歌は享保より寛延まで
のうち詠ませ給へるが中を誦
しおぼえてしるしぬ

春の歌

我が宿の杜の木の間に百千鳥きなく
春べは心のどけき

目黒といふ所へ行き侍りし
に、歸さの道のほとりに菜の
花のいみじく咲けるを見て詠
める

いぶかしなやゝ春立ちしに女郎花咲
きぬと思ふは菜の花ぞこれ

郭公をきゝてよめる

心よげに草木繁れる夏山に煩はしく
もほとゝぎす鳴く

夏の歌

惜むべき事にしあれど暑き日は秋立
つほどを待たれつるかも

夕立

涼しくも降りくる雨か夏山の茂きこ
の間に露のたばしる

かたはらにつかふる人のさゞ
波をと申しければ

秋されば水底きよみさゞら浪更にぞ
たてる風吹くごとに

七夕風

星合の空靜けしな久方のあまつ河風
すゞしくあるらし

七夕霧

ほしあふを見まくほりまつ人のため
に天つ河霧立ちな隔てそ

七夕契久

人皆は星の契りとあぢきなめど天と
共にしをへむ契ぞ

七夕船

今はしも天つ川せに彦星のつまむか
へ舟漕ぎて行くらむ

七月十五日漁りに出て

君がためすなどりせむと漕ぎ行けば
萬代の橋の松ぞ見えぬる

又の七月中の五日漁に出づ、
去年の冬　將軍家御こゝち例
ならずおはしませしも、今は
よろしうわたらせ給ふ

去年の冬のかしこかりしを思へれば
今年の今日ぞわきて樂しき

またの文月なかの五日

永き代の橋を行きかふ諸人はおのづ
からにや姿ゆたけき

洲崎邊に漕ぎ出でゝみれば安房の山
の雲居なしつゝ遙けく見ゆも

小松川をいこぎ廻るに、邊つ
方に小松並うゑたるを見て

小松川小松結びて木だるをも今日の
遊びに見むとし契らむ

七月中の五日、例のごと深川
てふ所に漁りに出で侍りて

鰭の狭物さはに獲られよ大君のおほ
饌にあへん今日の漁

又の年文月佃島にて

むら松のそがひを登る月よみのなか
ばにわたる雲さへうれし

眞帆引きてよせ來る舟に月照れり樂
しくぞあらむその舟人は

八月十五夜

こぞよりも今宵の月を見まくほり待
ちつる物を雲な隔てそ

雨空の晴間もあれな我が戀ふる今宵
の月をはつかにも見む

夕ぐれになるまに〳〵雲晴れ
ていとさやけき月のさし出で
しをみて

うかゝつる雲はれ行きてほりしごと
さやけき月を見るぞ嬉しき

千早ふる神寶てふ玉纒の太刀のさや
けき今日の月かも

延享元年八月十五夜盃たび
たびめぐり、祐賢拍子、正度
笙のふえ、正繩横笛、長賴箏
箏などし遊びけるに

いそのかみふりにし唐の笛竹を吹き
立て遊ぶ今宵たのしも

同じ夜

かくしあれど去年より欲りし我が心
今宵の月と共に晴れけり

またの八月望の夜

立ちおほふ雲間〳〵に影さえて雲間
雲間にあらたにぞめづ

旅のこゝろを

夕づく日はや隱ろひて旅衣ころも手
さむく秋風ぞふく

仕ふる人の萩の花末になりけ
るをと申ければ

昨日まで盛りをみんと思ひつる萩の
花ちれり今日の嵐に

仕ふる人の萩の下にたたある
石をと申しければ

萩咲ける山べの石は心ありと人やみ
るらん假におきしを

九月十三夜

空に滿つやまとの國の風なれや今宵
の月に圓居すること

うや〳〵しき大みことのりを
うけて今日なむ吹上の御園に
まうで來ぬるに、まとゐさへ
給はれる、其のかしこまりを
今日のまとゐの司達に聞ゆる
ついでに

大君のみことをうけて弟も吾も御園
に遊ぶ今日の尊とさ

あらかじめ定め給へる今日はしも空
さへ晴れて紅葉照り添ふ

富士の山みそなはすうてなに
參りて木々のもみぢせるを見
て

ふるごとに聞きしのみにて未だ見ぬ
紅葉の錦今日見つるかも

寄螢戀

音になかで身をのみ焦す螢はもけだし吾がごと物思ふとか

紅葉を

もみぢ葉を見ればめづるぞいぶかしき枯れぬる色と我が知りにつゝ

さくらの紅葉を

雨ふれば青みいやます常磐木の木の間をよそふ櫻葉の色

雪のいたう降り積りぬる夕べ酒のみつゝ庭のさま見侍りけるによめりける

酒のみて見ればこそあれこの夕べ雪ふみ分けて往きかふ人は

享保十八年正月廿一日將軍家の五十の御賀に御盃の臺に添へて奉りける

鶴龜の齡なりとも何ならじわが君が世の數にくらべば

寛延三年正月廿一日將軍家の六十の御賀によみて奉る

天が下いやさかゆらし今年既に君が御耳の順ひませば

年ごとに今日は我が君の生れさせ給ひし日なれば祝ひ奉るに、まいて今年なん甲子に周り合へるに、日さへ同じ干支に當りぬ、きのえ子にこそてもひらけぬると聞くに、誠に君の榮えましまさむことの限りあらじとおぼして

吾が君の榮ゆくことは玉松のきのえ根ざしの廣ごるがごと

つかふる人の含雪亭をと申しければ

富士の山みんとしほりて山のべに作りし庵に入日さす見ゆ

御衝立の障子の畫に濱邊に千鳥のありけるを見て

五百重浪よする浦わに何をかもあさる千鳥の群れゐる見ゆも

九十の賀し侍りける人をほぎて

吾や妹や子等はいましにあえぬべし汝はなほも松にあえてよ

松竹增春色といふことを

この春は園の松竹色まして今し千代經ん祥を見すらむ

仕ふる人の熊笹の間の石をと申しければ

唐人の繪にも似たるかさゝ原のかたへに立てる石の形は

衝立さうじの繪を見て

千鳥すら友呼びかはし遊ぶなりなどてや人のひとり樂しむ

勸學のこゝろをよめる

書もよまで遊びわたるは網の中にあつまる魚の樂しむが如

學ばざる人をうれへてよめる

天よりもうけしたまもの徒らに知ら

ずて過ぐる人のはかなさ

春秋を判せる歌

枯れ渡る秋をもえ出る春にしはたくらぶるだに愚かなりけり

藺相如の繪を見てよめる

城に代る璧をかへせし其の人を我はその玉にかへまく思ほゆ

學ばざる人をうれへてよめる

學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれ猶し學ぶ

天地のめぐみに生るゝ人なれば天の命のまに〳〵をへや

人の道を我が家の業としながらも學ぶ心のおこたりぞする

宇喜田といふ所に狩にものするとて舟に乘りて行きけるに、松かげに眞帆ひく舟の往きかふを見て人々歌よみ侍りけるついでに

何事も眞帆にせよとて示す吾が心にあへる今日のにはかも

舟はてにならんとほせり今一つ酒たうべつゝ遊べとぞ思ふ

濁りなく浪さへもなく行く水は物知らぬ吾もかつ見つるかも

庭に飼ひし鶴を

子を思ふ物てふなれど此の鶴は妻さへ持たず乏しくあるらし

右御歌享保より寶暦の頃までの御作なり

立春

打ちなびく春きたれるか久方の天の香具山霞みそめたる

宮人の袖つけ衣ふりはへて心のどけきはるは來にけり

子日

今日はしも子日なりけり茜さす紫野邊に我も行かまし

をとめらが赤裳引きつれ小松原緑にまじる今日は來にけり

霞

春霞たな引くからに白雪のつもれる梢花のごと見ゆ

ともし火のあかしの門より見渡せばやまと嶋邊は霞かをれり

鶯

たかむらに家居やせまし鶯の鳴くなる聲を聞きもあかんがに

かげろふのたつなる岡に梅咲きて心ののどけく鶯なくも

若菜

いざ子ども若菜摘みてむ霞ゐる春日の野邊の若菜摘みてむ

宮人はあを馬ひけり少女らは雪間の若菜いまや摘むらむ

殘雪

春されど雪消えやらぬ山里は猶ふる年の心地するかも

去年はさも思はざりしが青みます岩間の雪の淸く見ゆかも

梅

くさ〴〵の花はあれども宮人のうずにしせるは梅が花かも

匂さへ花さへ實さへ若葉さへ冬木のほども梅はことなる

柳

春雨はしば〴〵ふれり佐保川の岸の青柳色まさるらし

春風の吹くとはなけど青柳の姿にしるく知られぬるかも

早蕨

春霞かをれる野邊に少女らし早蕨折ると群れつゝ行くも

わか草の緑が中のさわらびは紫ふかく尋ねてぞ折る

櫻

櫻ちる山路は知らに白雪の寒からなくに降るかとぞみる

みよし野の山の白雪消えぬると見しまに花の雪ぞ積れる

春雨

み冬野の枯生のまゝの淺茅原そぼふる雨に萠え出でにけり

春雨は音靜けしも妹が家にい行き語らひ此の日くらさむ

春駒

信濃なる大野の御牧春されば小草もゆらし駒勇むなり

春雨の晴れにしからに笠原の露うち散らし駒あがくかも

歸鴈

さゞ浪のひらの山べに花咲けばかた田にむれし鴈歸るなり

霞わけて鴈歸る見ゆ行く先の遙けきもへばあはれむ吾は

喚子鳥

うちのぼる佐保の山べの呼子鳥よべど答ふる人もあらなくに

霧かをり月影くらきまきむくの檜原の山に呼子鳥なく

苗代

苗代にしめ引きはへて引く水の豐かなるにも年はしるしも

しめはふる小田の苗代奥山の雪消の水に水まさりけり

菫

櫻花散りしく野邊のつぼ菫色うちさえて摘みなんも惜し

はるの日の春日の野邊に今日もかも里の少女ら菫摘むらむ

燕子花

かきつばた咲くなる池に風吹けば濃き紫にさゞ浪ぞよる

名にも似ず淺澤沼の杜若ふかむらさきの花ぞ咲きぬる

藤花

時つ風いたくな吹きそ田子の浦に咲ける藤波散らまくも惜し

住の江の藤さきにけり香をとめて沖こぐ舟もこゝら集へり

山吹

あが駒に水はほらねど打寄りて井手の山吹見てや過ぎなむ

山しろの井手の玉川水清みさやにうつらふ山吹のはな

三月盡

春はしも今日のみなれば綺の櫻のきぬもぬがで寐ななん

今日のみと限れる春を春風よいぶきに吹きて返せこの春

更衣

大宮に縵の衣のしり引きてつどふをみれば夏はしるしも

今朝も猶空は昨日にかはらぬを衣に夏はまづぞ立ちぬる

早苗

ほとゝぎす里なれにけりうま酒を三輪の山田は早苗とるらし

をとめ等が行合のわせを植うるなり立田の神に風祈りつゝ

照射

益荒男がともしすらしも小倉山暗き夜毎に星の影みゆ

晝だにもかしこき山に我がせこが暗き夜毎に照射するかも

五月雨

五月雨の晴れ間も知らに白眞弓ひだの細江も海をなすかも

ますかたの姿の池の五月雨あやめも見えず浪ぞ立てける

盧橘

たまにぬきて花橘を佩く人を見れば昔のおもほゆるかも

御階邊の橘さけりたちならす右の舍人ら弓な觸れそね

螢

茂りあふあしまの池に影みえて螢飛びかふ宵は涼しも

ま玉つくをちのすがはら夕露に光をそへて飛ぶ螢かも

卯花

稻荷山祭ちかみか我が宿のかきほのうつぎ花咲きにけり

いなり山けふ祭るらし諸人の卯の花かざし群れて行きぬる

葵

何故と事はしらぬをあふひ草かもの祭に吾ぞかざせる

皇神のかざしにせよと神山に葵ぐさをし植ゑそめぬらし

杜鵑

降る雨にしぬゝにぬれて杜鵑五月の山を鳴きぞとよもす

杜鵑つまをとひつゝ血あゆまで啼くなる聲を聞けば悲しも

菖蒲

昨日まで須兒の刈りつるあやめ草豐の明りの蘰となりぬ

長き根をえらまくほしみ諸人の沼にまどひて菖蒲引くかも

蚊遣火

夕日影匂へる雲のうつろへばかやり火くゆる山もとの里

飛火守見かもとがめむ蚊遣火の煙たちたつ遠方の里

蓮

しゞに生ふる池の蓮の花みれば風も吹かなくに心すゞしも

はちすおふる池の汀にたゝずめば衣にほはし清き風吹く

氷室

水無月の十五日にしあれど氷室山衣手寒く風冴えにけり

夏來より秋果つるまで緋幡のたえぬ氷室の山はさむしも

泉

足引の石間をしぬぎわく水の落ちたぎち行く風のすゞしさ

風をなみ照りはたゝける夏の日も泉のみこそ涼しかりけれ

荒和祓

さくゝしろいすゞの川にいぐし立て夏祓すと人つどふかも

切麻にみのさがなさをなでつけて祓ひ果つれば風の涼しも

立秋

琴の緒をさ渡る風の響かすに秋さり來ぬと今はしるしも

今はしも秋は來ぬらし白妙の衣手うすみ風の寒しも

七夕

天の河いむき立てりて戀ひにける心はるけんよひは來にけり

この夕べ空にたなびく白雲は君がまうけの天つとばりか

萩

妻こふる鹿の音聞ゆ今もかも眞野の萩原咲きたちぬらむ

秋はぎの匂へる野邊は草枕たび行く人も立ちとまりつゝ

女郎花

わが戀ふる妹が垣ねの女郎花白露重みかたむくもよし

狩人も情しあればか女郎花しゞ咲く野邊をみつゝ過ぎにき

薄

み吉野のとつ宮所とめくればそことも知らに薄生ひにけり

武藏野を人は廣しとふ吾は唯尾花分け過ぐる道とし思ひき

露

萩が枝をかざしにせんと思へれど露の散らまく惜しき萩原

たかまとの萩をおしなみ置く露に玉しく宮の音おもほゆ

霧

待乳山今朝越え來れば霧こめて隅田川原は見れど分ぬかも

名ぐはしきいなみの海も朝霧に見せず過ぎにき旅は憂きかも

朝顔

我妹子と相ふしながら朝な〳〵珍らしみ見ぬ朝顔のよさ

あした昇り夕べまかづる宮人の家によろしき朝がほの花

駒迎

望月のみまきの駒は今もかも霧をわけてやあまのぼるらん

ひだりみぎり馬の寮のさわぐなり貢の駒の今や來ぬらん

月

かぐ山に生ふる眞榮木枝さやに冴えたる月は神もめづらむ

松浦がた限りも知らず照る月に唐土までも思ほゆるかも

苅萱

紙屋川（神イ）岸にみだるゝかるかやは紙戸（勢イ）の人の簀にや苅るらむ

ねぢけたる人にし見せん苅萱のそよ吹く風に打亂れしを

蘭

鶉なくふりにし里の藤袴もとつかをりの懷かしきかも

吾が衣にかほりはとめつ藤ばかま咲きつる野邊を分けてこしかば

荻

夏過ぎて秋さりくれば我が宿の荻の葉そよぐ音のさびしも

荻はそもいかなる氣よりなり出でしそよげる音の悲しくあるは

雁

射部人の多かるこゝに秋といへば何をたのめて雁渡るらん

春さればきそひていにし雁がねは心細げに啼きて來にけり

鹿

朝もよし木人ともしも眞土山ゆふ越え行けばさをしかなくも

くだら野の萩の花ちる夕風に花妻こふるしかの音聞ゆ

擣衣

さが風の寒く吹くなべをちの里の衣うつなるこゑ聞ゆなり

松かぜにたぐへてさびし玉川の里のをとめが衣うつおと

蟲

秋ふかみ萩の花ちる夕風に聲うらぶれて蟲の鳴くかも

白菅のま野の萩原ちりしけばすだける蟲もこゑ衰へぬ

菊

この夜らはわたかもおほひ眞白菊豊のあかりに奉らばや

吹上の濱邊はしらず白菊を風のふければ浪きよるかと

紅葉

風祭る龍田の山のもみち葉は散らでしあれや雪ふるまでに

東の山の紅葉は夕日にはいよ〳〵紅くいつくしきかも

九月盡

秋は今日盡きぬと知るにいとゞしく虫の啼く音ぞ哀れなりける
この夕べ置ける白露夜のあけば霜となりなん秋しいぬれば

初冬

今朝よりは冬さり來るとしればにや外山の梢風荒くみゆ
けさよりは風ぞ寒けき白重(しらがさね)かさね着ぬれど風ぞ寒けき

時雨

人皆は秋を惜めりその心空にかよひてしぐれけんかも
もみぢ葉を染むるはほせり然れども時雨しば降る頃はわびしも

霜

をし鴨のすだく入江の村蘆にむらむら白く霜置きにけり
霜はたゞ白しと思ふに霜おけば白菊あかく匂はすやなぞ

霞

松の葉のふる葉も降れり住吉のあら松原霞ふれゝば
神さぶる伊駒がだけは雲とぢて霞降りくる音ぞ恐(かし)こき

雪

皇(すべらぎ)に奉るなるむらさきのみかさの山に雪はふりけり
天ぎらひみゆきふれゝば卷向(まきむく)の檜原もわかず今はなりぬる

寒蘆

難波江のほり江の蘆の霜枯れて汀あらはに浪のよるみゆ
風冴ゆる池の汀の枯蘆の亂れふすなる冬はさびしも

千鳥

白浪の來よる浦わの月清みこの夜ら更けてあそぶ千鳥みゆ
難波潟鹽干(しほひ)の名殘夜はたけて淡路の島ゆ千鳥さ渡る

氷

よし野川清き汀に氷りゐていよ〳〵清くおもほゆるかも
妹が手をとろしの池の氷れゝば水を戀ひてや鴨しなくらし

水鳥

泡雪の降りし敷ければをし鴨の心ゆるびて岸にすだけり
冬さればい臥(ふ)し亂るゝ蘆むらにあぢむらさわぎあさりするなり

網代

網代打つ浪の音聞ゆさ夜嵐にもみぢ葉ごめに氷魚(ひを)やよるらむ
夜半毎に網代もるなり篝火を氷魚は好みてよるにやあるらん

神樂

風はやみ庭火のかげも寒けきにまことみ山は霰降るらし
天ぎらひ雪うちちれど諸人の星うたふなる聲さやけしも

鷹狩

降る雪にきそひ狩する狩人の熊のむかはぎ眞白になりぬ

ふる雪に御笠もめさず皇子(みこ)達(たち)のみ狩せすなりみ鷹勉めよ

炭竈

雪まだき冬木の山は炭竈の烟ならでは見らくものなし

炭竈の煙の末を見わたせば雪げの空にわかれざりけり

爐火

おいらくの獨りあるなるわびしらを埋火(うづみび)なくばいかで明さん

み雪ふる夜半は殊更埋火(うづみび)のほとりに人のさはに集(つど)へり

除夜

かくしつゝ吾が身の老(おい)は増れども春さり來(く)なる事ぞ嬉しき

この夜らの寒(かどイ)けくもあるか主水(もひとり)のまづくむ(イ)つらん氷いよゝ厚けむ

初戀

春の日の春日(かすが)の野邊のさ蕨のもえで(ぞイ)そめぬるわが思ひかも

玉ぼこの道行きぶりに見し人は行末知らぬ戀となりなむ

人不知戀

水たまる池の玉藻の下にのみ吾こそ戀ふれ知る人なしに

山深み人もすさめぬもみぢ葉は我ごとあだに色増るらん

不逢戀

道もなき荒山櫻めにのみしうつくしみ見て折りがてぬかも

我はやもふみをしもたぬ旅人か相坂山を越えがてにする

初逢戀

くれなゐに染めし長紐(ゆ)氣ながくも戀せし心今宵解けにけり

恨みわび月も經につゝ夏衣うらなく今宵着てふしぬかも

後朝戀

道芝の露踏みしだき歸りにし吾が裳裾ゆもわが袖濡れぬ

語らむと思ひしことの殘れゝば今日をいかでか吾が暮してん

逢不逢戀

中々に逢はざらましをそれよりに日にけに人の戀しさましぬ

かへらむと我がせし時にわが紐を結びし姿いつかわすれん

旅戀

常にみて安らにありし吾妹子(わぎもこ)を旅をしすれば戀佗るかも(わたるかもイ)

大君のみことかしこみうつくしき妹をふり捨て旅する我は

思

わたつ海(み)の底し知らまくほりせなば吾を尋ねよおもひ語らむ

思ひ餘りいめにもがもと敷妙の枕しすれど目もあはぬかも

戀イ

片思

吾はこへど汝は背くかも汝を背く人をこはせて我よそに見ん

おく霜をかたみに拂ふをし鴨もやさしみするか片戀ふ我を

恨

秋風の吹きしく野邊の葛の葉のうらみ渡るを人知らじやも

相思はぬ人は恨みじ四十餘り七つへにける吾が年をのみ

曉

ひむがしに向へる家は朝あけに明け行く空を見つゝ樂しき

うきものとせし曉をかきかぞふ老いてはたゞに待たれぬるかも

松

住の江の岸の松の木ものいはゞ神代の事を我が聞かましを

すみの江の苔むす松は玉ちはふ神の御代ゆか生ひ初めぬらん

竹

淸らけく涼しき宮の吳竹は豐しさやがな夜なさやぎそ

百世ふる翁の舞のたちつ居つをがむおまへの竹なびくなり

苔

み吉野の靑根が峯の苔むしろ八重敷けるごとむしにけらしも

苔莚常に似ぬかも年ふればいよ〳〵靑くいろまさるなり

鶴

淸きかも白浪來よる住の江の岸に群れゐる鶴をしみれば

千年かねて遊ぶてふこと誠かもむしろ田に今も鶴遊ぶなり

山

二つなき富士の高根のあやしかも甲斐にも在りとふ駿河にも在りとふ

神代ゆも好せる山は空にみつやまとに立てる天の香具山

河

いよゝ淸く成りにしといひし象川は今いかならん見まほしきかも

唐衣たてぬき川に風吹けばさゞらがたなし浪の寄るかも

野

武藏野をい行く旅人つとにとかうけらの花を折りてかざせり

楯並めてとよみあひにし武士の小手指原は今はさびしも

關

いにしへに行きはゞかりし不破の山關の關屋は跡だにもなし

逢坂の關は名のみか過ぎにける世をば止めず又も逢はぬかも

橋

春されば霞たなびく久方の天の橋立ゆたに見ゆるかも

せきつゝぞ水引くらんかさゝがねの蜘手に渡すこれの八橋

右の御歌は寶暦の年の中に堀川初度の百首の題にて遊ばしたるなり、されど今十題殘り(たるはイ)侍りたるをば、殿の炎燒の事ありてよみのこさせ給ひたるなり

寶暦五年正月十四日に園の松の下の社に詣でゝの(イ本ナシ)歸るさに、日なみのいとうらゝなりしかば詠める

いつしかに池の氷の解け初めて心のどけき春は來にけり

梅

雪よ霜よ降りにふるとも咲く梅の花のあたりはよきてふらさね

去年植ゑし柳のいとよくしげれるを見てよめる

植ゑし時は枯るべく見えし我が庭のしだり柳のめでたくなりぬ

園柳を

古への慕はしきかもかづらせでたゞに見むかもこれの柳を

九月十三夜　旋頭歌

いかさまに思ほしめせか遠つ御神のやゝ寒きこの夜の月に宴(うたげ)そめしか

明和六年七月七日

この夕べさやけき星は織女(たなばた)の君來ますぞと敷ける玉かも

おなじ九月十三夜

青雲の白肩(しらかた)の津は見ざれども今宵の月に思ほゆるかも

きくの花折りかざしつゝ諸人(もろびと)の遊ぶ今宵ぞ月照りにつゝ

まつのへの神まつる年のはの十一月二十三日といふに、ぬさの樂とて舞樂をなん供し奉りける(イ本ナシ)、そが中五常樂の序と破のあはひに詠をなさせけるに詠めりける歌

瑞垣のかゝれとてしも昔より神さびけらしこの岡の松

しめはふる岡の齋垣(いがき)の清ければいもひも安し幣(ぬさ)も安けし

奉る安御幣(みてくら)のやすらかに守らひたまへ此のもろ〳〵を

もろ〳〵もいよりつかへよこの祭わぎへのみかは諸々(もろ〳〵)の爲

鳥取の侍從の庭のさまえもいはずおもしろきが中に、大御神の賜はせ給へるてふ五十まりの木の、わきてめでたう榮えぬるに、實にこの遠つ祖の朝臣は御惠のこよなかりしぞかしと思ひ出でゝ

大神のいつくしみ深くませりとは庭の面(つら)にも著(いちじる)く見ゆ

仲子のもとより櫻に桃を折り添へておこせて歌をこひければ

櫻花はなにのみなもつかへそよ桃の

實になる事を思ほせ

梧桐鳳凰

み國生の青桐咲けり香をとめてうづのさが鳥今か來啼かむ

時雨を

時雨ふる時はうけれど木々の葉の染まるともへば樂しくありけり

氷

長月に閏あればか神無月なかばにもたらず氷りゐにけり

ながめがしはを

ものゝふのかぶとに立つる鍬形のながめ柏は見れどあかずけり

いはふことありて宴せし頃

人も我も心のどけしかれこそ萬代經らむ事の本なる

祈年祭

岩ばしる淡海の白猪ひこづりて神の御贄と今日祭りけり

春日祭

稻津實を春日の祭齋女のたえてゆ神はうまうけまさむ

孔雀

たまとりの八尋のたり尾開きたてめぐる姿は見もあかずけり

嘯鳥

いづこより籠ぬけ來にけんうそ鳥の吾家のつまの梅に遊べる

蔣澤雞

藪かげに浮かむさはかけそのこもにとさかの匂ひはえていつしき

太平雀

さゞら浪をしばうつらへようづ雀汝が打つ尾羽を吾がみはやさん

紫雲英、椋鳥

かも草の咲ける岡邊にむく鳥の群れてあさるは何得るとかも

蒲公英、河原弱鳥

花散れるふちなか草をすく鶸のいたはめつゝも其の實はむしも

鴻　旋頭歌

吾背子が門たゝく哉と出でし見れば前の沼におほかりすだく聲にざりける

宿木鷺

古寺の垣ほの杉に夕さればさはにすだけりこゐ鷺はこれ

篦喙鷺

物もなさで世にふる人はへら鷺のむなゐざりすに猶劣りけり

鶺鴒によする

から國にありと聞くなるおもひ鳥思ふ心を妹に知ればや

白雁

古へにめづらしみせし白雁の今は東にさはにし來なり

乞雨鳥

けさいたく雨乞鳥のなけりしぞさ少女まけて早苗とらさね

長尾鳥に寄する

天ざかるひなに多かるしなが鳥長き此の夜を獨りか寢らむ

安鳥

百鳥のそこばく啼けるそが中に安鳥の聲の著るきかも

都鳥

なが名をば誰かおほせし都鳥都には住まで鄙に住めるを

橿鳥

吾が宿のそがひに立てる橿の木に橿鳥來啼く頃ははや來ぬ

佃嶋にいきける頃

かく來ては珍らしみきけど此の波の夜な〳〵響く蜑人の伏屋は

鴨鵜の佃のしまにしばし居て浪より出でし月を見しかも

葺狩に木下川わたりに行きけるとき小松川にて

名にぞおふ小松川邊に誰が植ゑし小松の色は見れど飽かぬかも

葺とりて詠める

わらうづをぬぎ捨てし君が慰めと木の下川邊葺摘みてけり

中川を過ぐるほど

秋深き龍田の川はかくぞあらむ入日さす雲のうつる川面

歸さなれど景色いとことに見えければ

晝行きし川にしあれど夕されば靜けくゆたに新らしきごと

（異寫本あとがき）

三百九首

この一卷は田安中納言宗武卿のみ歌也誰撰みたるにはあらず移しあやまれるさへあれば猥に人に傳ふべからずこゝろしれる人の爲に斯くしるしぬ。

寛政二とせといふ年のかみな月の中のころ難波の花堀わたりに有てとみに寫し侍りぬる。海量

[illegible]

かけまくもかしこきいにしへより、わが大御國ぶりのまたく傳はれるは、歌にのみなむ有りける。しかはあれどくだれる世となりては、いにしへのしらべをうしなひもてゆけるを、常世物橘の大人（うし）は、いとわかゝりしころより、縣居の翁のをしへをうけて、歌のこころを得られたれば、おのづから

上つ代のすなはにしてあつくみやびなるすがたをなむよみ出給ぬる。年ころおほやけのいとまなかりつれど、歌はちゝのみの父のこのめるわざなれば、いさゝめにもわすれじとて、いとまある時はよみ出られき。此十とせあまりさきにつかへをしぞきしより、かゝる大御世に逢てこの大御恵にあけるを、誰かは歡び

たのしまざるべきとて、ひたぶるに歌の道にのみ遊びて、春の花のあした秋の月の夜、をりにふれ時につけつつよみ出られたるが、濱の眞さどの數おほくつもりにけり。こたみ大人、其父翁の歌に文に書いつめて、子むまごに傳へ、うからやからにもあかちてむとて、板にゑらるるにつけて、われとおなじく大人に名つぎおくれる人、大人の

歌をも文をもともにゑりなむ事をこふに、後の世に殘さむ事はいとしもおふけなきわざなりとてゆるされざるを、今は多摩河の水のながれをくむ人、むさし野の千くさの露よりもしげく成りにたれば、堀兼の井のふかくもとめ出ておのがじゝうつしとりなむはわづらはしければとて、われも人もしひてこひつるに、稲ふねのいなみあへず、歌に文に自らえ

り出られつるをかくなせるなり。そも〳〵此集の名は、さきつ年みやこのやむごなときわたりより、大人のよみおかれたるうたをまゐらせよと有りしに、えりてまゐらせられつる時、花數ならぬうけらさへつまるゝ世にあひぬるよしをよみ出られしより、みづから宇氣良我波奈と名をおほせられたる也けり。そのわ

きいさゝか巻のはしにしるしつ。享和のはじめのとし長月
日向守巨勢朝臣利和

おのが歌をしもみづからえらびて世に残せるためし、いにしへなきにしもあらねど、そもきはことなるあたりにこそさることはあらめ、わがともがらのまねばむはおふけなきわざなればおもひもかけざりしを、おのれすでにとしたかくなりにたれば、みづからよくえらびおきてよなど、やむごとなきかた〴〵よりねもごろにそそのかしのたまふを、いなみなむも中々にて えらび出むこゝろとはなりぬ。わ

かかりしほどのはとし經ぬることとなればうせにけるを、縣居(あがたゐ)の大人(うし)のつばらにふむでくはへたまへるうたにふみに、いさゝかものゝそこより見いだしぬ。はた身さかりなりしほどはおほやけのいとまなくて、かきつむることもせでたゞひとひらの紙にかいつけたるなむ、こゝらみちのくがみの袋に入れおきぬる。一とせあるひと其うたども書あつめむとこふまゝに、かの袋のまゝにてものしつ

れば、その人も仕ふるみちにいとなくて、いさゝかのいとまのほどにうつしかいつめて、おのれがかけるをばかしこにとゞめつ。のちに見ればうつしおとしたるもおほかりけり。おのれつかへをしぞきてよりこなた、みづからさうしにかきとめたれば、これかれをあはせては數おほかるを、こたみ父翁の集をうつしをへてののち、かくはえらびいでつるなり。されどおのがうたのよしあしをみること、ひと

のうたをあげつらふごとくならざれば、ひが歌や多からむとかつはおそりかつはやさしみおもふものから、たゞかしこくさとしすゝめしたまふにしたがへるなりけり。かへすがへすも人わらへにやあらむかし。

享和のふたとせといふとしのみな月

たちばなの千蔭しるす

宇家良歌波奈巻一

橘千蔭

春歌

年の内に春立ちければ

あら玉のとしにふたゝび二荒山立ち
かさねたる春霞かな

年のはじめに

小笹原一よのほどにくる春や嬉しき
ふしの始めなるらむ

世は春になりにけらしも窓の内にむ
かふ硯の氷とけゆく

百鳥の春にけふしもあふものをきの
ふは老を何なげきけむ

年毎にかきもつくさぬ言の葉を硯の
海のさちといはまし

霞立つ野のへの若菜つみつゝも鶯き
かむ春は來にけり

あづま路にまづくる春の日のかげを
雪に待ちとる富士のしば山

かしこきやわが浦安を出づる日に春
知りそめよあだし國人

むつ月ついたち鶯の鳴きければ

かきこもる竹の垣穂もうぐひすの聲
をしるべに春やこえこし

つかへを退きけるまた
のとしのはじめに

天の原出づる日影ののどけさも去年
にまされる春べなりけり

むつ月のついたちに去年のしは
す妙法院一品の宮より賜はり
ける御硯にはじめてむかひて

雲ゐより春の日かげもうつるなる硯
の海にあさりするかも

立春天

天の原春立つらしも朝がすみ浦安の
名に立ちみちにけり

元日宴

萬代の旗手なびかし大庭にけふより
春の初風ぞふく

春風來㆓海上㆒

あけわたる春の潮路の時つ風東路に
こそ先づかよひけれ

棚倉の君の家にて初春祝㆑道
といふ事を

新らしき春の光も浦安の國ぶりしる
き道ぞこの道

早春山

春立つやたなびき初むる霞さへまだ
うす機のきぬかさの山

都初春

うちひさす都大路のたてぬきに霞の
ころもたちそめにけり

氷解

春の日の光のどけみ御心を廣田の池
や氷とくらむ

春到氷釋

さくら河汀の氷とけそめて春を寄せ
くる浪の初花

春風解レ氷

薄氷松吹く風にうちとけて千世の影
見る春の池水

風光日々新

嶺のかすみ野べの小草のわか緑きの
ふにけふぞ深さまされる

雪消春水來

筑波嶺のみ雪消ゆらしみなの川みな
わさかまきけさぞ流るゝ

春到二管絃中一

鶯の囀といふしらべより世は春べに
もなりにけるかな

む月ついたち子日なりければ

む月たつけふの初子の小松原霞こそ
先づたな引きにけれ

長枝が家の子日にまかりて

鶯の初ねにはやくとひ馴れて春知り
そむるやどぞ此やど

子日女出でたり、例けさうす
る男きあひて消息すといふを
題にて

初春のはつねの小松はやくよりわが
しめゆひし心知りきや

む月十一日節分子日なりければ

淺緑小松ひく野に一夜ねて都に春を
いざといはまし

戸澤家の大刀自君より子日に
小松にそへて、枝高き陰にな
らひていく春もみさをかはら
ず立ちや馴れまし　といひお
こせ給ふ返しに

御園生のけふの小松にひかれつゝ君
が八千代を我もかぞへむ

正月十五日雪ふりけるに、春
海、みつるなど訪ひ來て歌よ
むに子日に引きうゑし松に雪
つもれりといふ事を

姫小松むつまじみせよ生ひそめし野
末の雪を誰かはらはむ

霞中子日

春がすみ眞袖にわけて標野行き紫野
ゆき子日するかも

山子日

君が代の千世のふる道ふりはへて引
くや子日の嵯峨の山松

屏風に正月子日する家

うなゐ子が引くや園生の姫小松とも
にはるけきよはひとぞ見る

山居子日を

吾山の古巣を出づる鶯もけふを初ね
とおどろかしけり

山里に住む人子日す

わが門の小松ひきけり尋ねこし都の
人にいざといはれて

子日松

みゆきせし北野の春の姫小松ひくも
畏きためしなりけり
　腹赤御贄
大ぎみの千世の例とまごゝろを筑紫
のあまが釣れるみにへか
　藥兒の繪に
ことしよりおひ先こもる藥兒にあゑ
なむ春ぞ限りしられぬ
　姫路の侍從殿の家にて霞を
高砂の尾上に春の立ちそめて霞の衣
松がさねせり
　初春霞
との曇り碓日の御坂霞みゐてあづま
の國ぞはやく春なる
すみだ河きしのうすらひ解けそめて
水上かすむ春は來にけり
　霞知ㇾ春
しま山は雪げながらに八汐路の霞ぞ
はやく立ちわたりける
　霞添ニ山色一

富士のねも麓につゞくむら山もなべ
て綠にかすむ春かな
　霞藏ニ遠山一
をとめ子が黒髪山の山眉をうたても
かくす春のかすみか
　霞隔ニ遠樹一
をちかたの堤の柳春さればおのがけ
ぶりにうち霞むらむ
　嶺上霞
足柄や嶺にたなびくかすみだに立ち
もおよばぬ富士の芝山
　海邊霞
あまの子が磯菜摘むなるま袖より八
十島かけて霞こめけり
水馴棹なれても春はたどるらむおの
がうら／＼霞こめつゝ
いかばかりわけ迷ふらむ名にたてる
春のかすみの浦曲こぐ舟
　松上霞
いつの世の子日の小松としふりて春

は霞にたなびかるらむ
　富士の山かすめり帆かけたる
　舟行くかた
うら／＼と富士のしば山霞む日に田
子の浦舟ゆたにこぐ見ゆ
　芳野山に霞立てり川に舟あり
春霞み船の山をたちこめて吉野の川
に梶の音する
　南枝暖待ㇾ鶯
うぐひすの聲待ちかねて露ぬるむ片
枝ににほふ梅のはつ花
　鶯の初音きゝつやと人の問ひ
　ければ
人とはぬ竹の中みちなか／＼に先づ
うぐひすの初音きゝけり
　鶯告ㇾ春
なべて世に春を知れとや鶯のこと先
だつる今朝のはつこゑ
　鶯聲和ㇾ琴
うぐひすも聲あはせけり小簾のうち

の春を喜ぶ琴のしらべに

霞裏聞レ鶯

春がすみ五百重がおくの篁に千世をこめたる鶯のこゑ

雪中鶯聲

花とちる園生の春の白雪のにほひを添ふるうぐひすの聲

春情有レ鶯

青柳を絲によるてふうぐひすの音にのみ春は心ひかれつ

鶯の聲をきゝて女の家に男來たりたる所

吾妹子が垣根に馴るゝうぐひすの聲にのみやは心ひかれし

田井に若菜つむ

つくばねの雪消にぬるゝをとめ子が裾わの田井の若菜つまばや

多春採ニ若菜一

武藏野にあまたの春を摘める身は若菜ぞ殊におもふどちなる

早春雪

葛飾や千代の早稻田春立ちて豐年しるくふれる雪かな

ひととせの月と花との面かげを春たつそらの雪に見るかな

春のはじめ雪はれたるあした

松の葉の夜のまの雪のとけ初むる雫ににほふ朝日子のかげ

雪消山色靜

ふる年のみ雪消えつゝ東人の春知りそむるをつくばの山

二月雪落レ衣といふ心を

春もいま中空にちるしら雪をはらへば袖に殘る梅が香

殘雪

甲斐がねや霞ふきとく春風にのこれる雪ぞさやに見えける

春はまだ淺野の雪のむら消えにあさるきゞすの跡は見えけり

初瀬女がつくる木綿花ちるばかり檜原がもとに殘る雪かな

山に雪殘れり

しろたへに殘るみ雪を春の日のひかりにみがく玉の横やま

いさゝめに梢の花のちるばかり外山のかひに殘る雪かな

殘雪半藏レ梅

雪は猶むすぼほれたる片枝より細解く梅のめづらしきかな

二月餘寒

などてかく花おそげにも見えぬらむ春ひと月はさても過ぎしを

杉田といふ所へまかりて

磯山の梅のさかりをとめくればたゞ白雲のかをるなりけり

葛飾の里の梅見にまかりて

さとごとに梅は咲けどもこの里の梅こそ春のひかりなりけれ

毎春玩レ梅

年のはにめづらしきかなおもふどち

梅をかざさぬ春しなけれど
朝梅
朝日かげさすや軒端の梅咲きて垂氷
の雫先づかをるなり
月照二梅花一
梅が香はあやなきやみもあるものを
月の影そふ夜半ぞことなる
梅の花かをるあたりを過ぎがてに空
行く月も影とゞむらむ
月の夜梅かをれり
かすむ夜の月見よとてや枕つく妻屋
の軒の梅かをるらむ
女簾のもとに立ちて梅を見る
訪はるやと小簾のかをりにはかられ
て咲き初めし梅の花をこそ見れ
水のほとりに梅花見えたる所
うち出づるみ谷の浪にあらそひてに
ほふや梅の春のはつ花
春風先發二苑中梅一
こゝろおそき花の木ごとに梅が香の
春をつたふる園の朝風
梅花風靜
春風は吹きにけらしなうすはたの霞
の袖をもるゝ梅が香
梅が枝をおほふ霞の袖だにも迷はぬ
ほどの風ぞかをれる
梅遠薫
うめかをる霞のおくをとめゆけば猶
木のもとは遙けかりけり
梅薫レ袖
ふるさとの古木の梅の花の香をま袖
にしめて翁さびせむ
梅香留レ袖
紅の梅のはつ花さきしより香さへふ
かくぞ袖にしみける
社頭梅
名もしるく先づこそかをれ春されば
咲くや梅津の神のみやしろ
南よりまづ咲きそめて日かずふる北
野の梅ぞさかりひさしき
葛飾の郷の香取の大神いはひ
まつれる社にまうでけるに梅
あまた咲きたり
春風のかをるまに／＼とめくれば梅
の香取の宮居なりけり
山家梅
咲きしより霞こめつゝ梅が香をよそ
にもらさぬ春の山里
山家皆梅花
みやこにて霞と見しは山ざとをつゝ
める梅のにほひなりけり
梅紅白
梅の花あさしとや見む白妙もこぞめ
もなべてあはれと思はゞ
紙繪に紅梅のもとにかたみに
蕨折り入れたる所
さ蕨のもえいづる野べの梅の花こが
るばかりに咲きにけるかな
梅に雀の飛ぶかたかける繪に
梅が香をつばさにしむる心もて羽風

を花になどやいとはぬ

梅交レ松芳

梅が香を松の葉毎にとゞめてば千世
もかをらむ軒の春風

梅の花ちれり

鶯も春のながめをいかにせむ笠に縫
ふてふ花し散れゝば

梅花飛二琴上一

たをやめのゆの手もあやにかをるめ
り琴ぢにうめの散りかゝりつゝ

屏風に水のほとりに柳ある所

春ごとの水のかゞみに影うつす柳の
眉は老せざりけり

柳を

春のきる霞のころも織りなせる高機
なれや青柳のいと

柳辨二春色一

日にそひてうらゝなるべき春の色を
かどの柳の姿にぞ知る

家にて青柳風靜といふ事を

わがかどの青柳の絲くる人を招くば
かりの風は吹くらむ

柳多かる所

春されば六田の淀の柳はらみどりに
見ゆる風の色かな

柳おほかる家に人來る

玉すだれかゝげし軒と見えつるは白
露ぬける柳なりけり

女柳の枝をひかへて立てり

青柳のいとくりためていにしへの賤
機帯を織るよしもがな

水邊春草

ぬるみゆく水のけぶりは隅田河つゝ
みの草の萌ゆるなりけり

行路春草

くれなゐの裾ひく道に色はえて萌ゆ
るみどりの春の若草

三吉野の郷の穗積恭がもとよ
り武藏野の若草摘みておこせ
ければ

武藏野やおなじめぐみの露の身はも
ゆる小草もむつまじきかな

樵路早蕨

たきゞこるこのもかのもの初わらび
折々たゆる山たづの音

霞隔レ月

かすむ夜の月にはまほにむかはれて
秋見しよりもむつまじきかな

山春月

眞木立てる荒山なかもかすむ夜の月
にぞ春の色は見えける

江春月

眞間の江や玉藻刈りけむ面かげもほ
のかにうかぶ春の夜の月

春の夜はたま江の水の名にも似ずみ
がかぬ月の影ぞうかべる

那波尚興が深川の家にて人々
と題をわかちて江春月を

春なれや浪の音さへのどかにて月影
かすむなはのつぶら江

故郷春月

ふるさとの板井の水にうつろふもお
ぼつかなしや春の夜の月

浦春曙

いつはあれど春のあけぼの見し人や
浦を霞の名にはたてけむ

水郷春曙

下にごる刀根の川とのあけぼのは霞
める空のうつるなりけり

夜をこめて水脈ひきのぼる舟の帆の
霞にしらむ刀根の河面

閑中春曙

おのづから夜の間の花の露落ちて芝
生に薫る春のあけぼの

名所春曙

ほの〴〵と明けゆく空も紫ににほふ
や春の武蔵野の原

霞中春雨

隅田河蓑きてくだす筏士に霞むあし
たの雨をこそ知れ

山家春雨

蕨をるたよりにとひし里人のおとづ
れもなき春雨の頃

のきばより雲もかすみも立ちそひて
小雨そぼふる春の山里

やまざとの軒のかすみのひまもれて
落つる雫に雨を知るかな

幽栖春雨

世にふるも人にしられぬ住家にはよ
きたぐひなる春の雨かな

草菴春雨

あしぶきやかすむ軒端の苫の露まな
くもおつる春雨の頃

菴春雨

八重霞かすみながらにうちしめり野
づらの庵に春雨ぞふる

霞中歸雁

かぢの音にかよへる聲はさだかにて
霞の澪に消ゆるかりがね

月前歸雁

行く雁の影だにしばし見るべきをう
たてもかすむ夜半の月かな

月の夜雁歸る

ゆく雁よ苗代水に影かすむ月をあは
れとみよし野の郷

くらき空に雁歸る

かすむ夜の月も入りにしまくらがの
こがのわたりをかへる雁がね

道行く人の歸る雁のわたるを
見たる所

花見にと袖ふりはへて行くものをあ
ふさきるさに歸る雁かな

牧春駒

さえかへり猶ふる雪に牧の名の尾駮
にみゆる春の若ごま

雲雀落

うちむれて菫摘むなるをとめ子が袖
に落ちくる夕ひばりかな

根芹つむ野ざはの水にかげ見えてひ
ばり落ち來る春の夕ぐれ

林喚子鳥

花ちらふ片山ばやしいまさらにかひなき音をもよぶこどりかな

屛風に二月初午稲荷詣するかた

いろ〳〵の袖こそ見ゆれねぎごともいなりの山の杉の木の間に

おもふ事成らざらめやもろ人の今日うちたゝく三つの神垣

櫻をよめる

山櫻いつの世にしも咲きそめて人の心を花になすらむ

よの人の心を春になすものは野山ににほふ櫻なりけり

さくら花心にふかくしめおかばひととせながらのどけからまし

人の家に植ゑたりける櫻の花咲きはじめけるを見てよめる

この春をなが世の春のはじめにて千とせもにほへ初ざくら花

女簾のもとにゐたるに男ものいふ、櫻の花咲けり

さくら色の衣のにほひもさく花もおもかげにのみあすやたゝまし

道行く人櫻のもとにとまれる

花の香は麻も錦もへだてねばいざ立ちよりて袖にしめてむ

櫻をもてあそぶ

唐國におひぬ櫻の陰にして群れつゝうたふ大和言の葉

櫻のもとに人々あそぶ

さくら花めづるあまりに散るをさへ杯にまつをりもありけり

なべて世に春てふ時のなくばこそ契りかれせめ花の木のもと

末つひに散るてふことも今日ばかり忘れてけりな花の木のもと

旅人さくらを折る

あしがらの八重雲分くる旅ならで高嶺の花にたぶさ觸れめや

櫻の木のもとにて弓射る所

みちのくの安達の眞弓あたに散ろしづ枝の花をよきて引かなむ

山櫻

蛙なくしづくの田ゐに庵してつくば高嶺の花を見るかな

磯邊櫻

わたつみの神のをとめが花かづらかけて散らすな磯による浪

瀧上櫻

瀧の上の御船の山に宮人の昔かざしし花咲きにけり

雨はれて後櫻を見る

はつ櫻露ににほへりきのふまで雨づつみして咲かずや有りけむ

隅田川の堤の櫻さかりなる頃石濱のかたより見をりて

かげろふの夕日ににほふ花の香をかどはむ春のかは風もがな

彌生なかば人々と共に角田川に花見にまかりて、そこの川

邊なる成林禪尼がもとにて歌
よむに、舟中見ㇾ花といふこと
を
さす棹のしづくも香にやにほふらむ
堤の花の影うつるころ
紀迪が吉野へ行きつとて櫻の
花をつゝみておこせければ
思ひきやよし野の山の櫻花分けぬた
もとに散らむものとは
季鷹縣主の家にて、櫻を人に
おくり侍るとていふ題に、
扇へ櫻の花すきこませて歌は
その扇にかけり、櫻がさねの
紙もて扇をつゝみて、うへに
風のやどりと書いつけたり
吹く風をうらみはてじ吹けばこそ
とめて折りつれ山櫻花
櫻の散るを見て
をしとおもひあはれと見つゝ二しへ
に心さへちる花のかげかな
石井のもとに立ちて櫻の散る
を見て
眞間の井に立ちならしけむをとめ子
がおもかげ見せてちる櫻かな
八重櫻の繪に
八重櫻花にふれけむ古衣きならの人
の袖やこふらし
春櫻と松とのもとに到る所
松風のこゑをとめきてとこしへに散
るべくもあらぬ花を見るかな
人の家に櫻柳あり
をすの外にほひ出でたる袖くちを
柳さくらに見する宿かな
花
世の人のあかぬ心を空に知りて花さ
く時や日永かるらむ
咲くを待ち散るを惜むとおほかたの
春の心は花にぞありける
妙法院宮のおほせにて月次の
御題をたまはりて花をよみ侍
る
あだなりと誰かいひけむ千よろづの
世々にふりせぬ山櫻花
望ㇾ山待ㇾ花
咲きぬやとむかふ外山の春霞立ちて
見ゐて見みぬ時もなし
野山に花の木掘れり
さくらばな都へいざといふ人を野山
の末に待ちやわびけむ
花を植う
ことしよりむつまじみせよ櫻花われ
世を經なむ春のかぎりは
稻荷の社に奉るとて初花を
ねぎ事もみつのやしろの神垣にまづ
咲き初むる花をこそ見れ
山初花
神路山木綿かけたりと見るばかりや
や咲きそめし峯の初花
山花始開
漕ぎ出でし唐艫の浪の花かともみ船

の山は咲きそめにけり

　雨ふる日花をたづぬといふ事を

いたづらに歸らむものか春雨の花のしづくを袖にかけずば

春の雨にぬれつゝ花をたづね見む七日し降らばうつろひぬべし

　家の花見る所

しら雲にまがふばかりの花はあれど馴れしひと木をあはれとぞ見る

　河づらの宿に花を見る

こゝもとに波うち寄せよ櫻花うつろふ影を手にむすびてむ

　馬をとゞめて花を見るかた

折らでしも幾たび花をかざすらむ木のもとごとに駒をとゞめて

　仕へをしぞきたる又の年こゝかしこの花見にまかりて

中々にいとなかりけりこの春は花より花を水うまやにて

　隅田河の花見にまかりけるにさかりなりければ

春はたゞ都鳥にも身をかへて散るとも花の浪にかづかむ

　山里へ花見にまかりて

山ざとに我が世は經なむ世の春のならひにもれて花し散らずば

　彌生七日因幡の國知り給へる君の竹芝のなり所へまかりて花を見侍りて

よゝを經し松のみどりに枝かはす花も常磐の色ぞ見えける

咲く花の梢によする百船のほのかにかをる春のうら風

　閏二月末つかた隅田川のほとりへ花見にまかりけるに疾く咲けるは、やゝ散りはじめければ

春風にちらふ櫻を河ぞひのを田の蛙も鳴きてとゞめよ

　こゝは荒川の下つ瀬なれば

吹く風のあら河の瀬に雪とちり浪とよせくる山櫻かな

　孝標の女のあすた川といひけむ此川なり

東路のあすた川邊の櫻花あすさへとはむ散りなみだれそ

　この川の西は長井の庄石濱となむいふ、そこにいこひて

さとの名のながゐしぬべし石濱や川よりをちのさくら散る頃

　暮れなむとすれどなほ石濱より遙かに花を見居りて

かつしかの花にゆふべを殘しつゝ豐島の方に日は入りにけり

　雄風が香取に住みける時、歌よみて見せけるついでに、隅田河の花をば見きやといひおこせける返しごとに

すみだがは春さりくれば咲く花の香取あがたの人をこそ思へ

羇中見レ花

あしがらや峯の岩ねにやすらひて八重山遠き花を見るかな

靜見レ花

かくながら千世もへぬべし見る人の散らぬ心に花しならはゞ

よる花をおもふ

ことならばわれ百鳥に身をかへて花に塒を占めましものを

翫レ花

世の中に花見てくらす春ばかり思ふ事なき時はありけり

馴レ花

いつしかと待ちしほどより立ちなれて櫻がもとに幾日經にけむ

月前折花

けふもまた狩りつくしつゝ朧夜の月にぞ手折る花のひと枝

月入レ花灘暗

あらし山花よりおくに月は入りて戸無瀬の水に香のみのこれり

風靜花芳

花におく露だにちらぬ春風に心とかをる山ざくらかな

姫路侍從殿の家にて柿本の大人の影供に風靜花芳といふことを

春風もしづけかる世に薫るなる高角山の山櫻花

仙臺中將殿の家にて風靜花盛といふ事を

風ふかぬ花のさかりにあひにける今日をいくよの思ひ出にせむ

風靜花香

ふく風は小簾もうごかぬ春の日に思ひかけずも花の香ぞする

霞中花

宮姫の面がくしおもかげに瀧のみやこの花ぞかすめる

さく花をへだてもはへてず中々にほひを添ふるうす霞かな

雨中花

たかねよりあわ立つ雲は花なればそぼ降る雨ぞ香に匂ひける

彌生六日雨いみじう降りたるに、花もちりがたになりぬと聞きて、舟にてすみだ河へまかりてよめる

すみだ河堤のさくら人ならば笠きせましを蓑かさましを

花下忘レ歸

斧の柄もくたすべきかなひととせにあふご稀なる花のさかりは

花下送レ日

けふ幾日花より花の草まくら結ぶも蝶のゆめばかりなる

花映レ日

かげろふの夕日にさらすみよしの瀧つ河内の花櫻かな

夕花

百鳥のねぐらもとむる羽風にも散らまく惜しき山櫻かな

阿波の西尾安道の旅ゐのつぼの中に櫻をうゑて人々つどひけるに春夕花を

こゝろありて花も夕べを殘すらむたまく惜しき春のまとゐに

花の頃山里をとふ

咲くとしも告げぬものから心あてに分け入る雲は花にぞありける

花添二山景色一

ふた神のかざしの櫻咲き初めて山さびいますをつくばの山

都花

うら〳〵と大路かすめる春の日は櫻かざさぬ人しもぞなき

宮人のかざしの爲と咲きにほふ都の春の花ぞことなる

くれはとり綾に錦になれてこそ咲けるかひあれ山櫻ばな

ふりはへて行くも櫻の衣なれば大路は花のくまだにもなし

彌生ばかり安道が阿波の國へ歸らむとするに、旅のやどりにてこれかれあつまりて歌よむに關路花を

關こえて歸らむ人を待ち顔に咲くや箱根の山ざくら花

樵路花

柴人のこるやくろ木に折りそへし花にみ山の春を見るかな

瀧邊花

咲く花の雲の五百重を分けて落つる瀧の水沫も香ににほふらし

田家花

五百代や千代の田づらかへす〴〵見れども花に飽く時ぞなき

女の家に櫻咲きたり、男きたりて物いふ

こよひだにひと夜は寝なむ移り香を咲くや軒ばの花におほせて

隣花

中垣のすきまもれ來る花の香に散るさへもはた待たれぬるかな

名所花

花ざくら霞の袖ぞおほふなる誰がきぬぎぬの朝妻の山

花有二喜色一

くれ竹の世を隔てたるませの内にうきふし知らぬ花の色かな

花慰レ老

さくらばなにほふ春べにあまたたびあへるを老のおもひ出にして

咲く花にうかるゝのみぞうなゐ子の昔の春の心なりける

咲き匂ふ花見る時はいやしきもよきもさかりの心ちこそすれ

志賀山越

みやびとのにほひ殘れる志賀の山花に越えゆく袖ぞやさしき

落花

うしと思ふ心よいかに山櫻散るこそ
花のさかりなりけれ

月前落花

春風の霞吹きとく折々は散りかふ花
に月ぞくもれる

後のきさらぎ花の散りたるを
見てといふ事を

やよしばし散らずて殘れ櫻花はな鎭
めする月もこなくに

山ざとびたる家に花の散るを見
ていひ入るゝ

ちらぬ間を都に告げぬうらみさへつ
もるや花の雪の山ざと

花ちりて後古寺に遊ぶ

春深み櫻は雪とふりにけるゆふべの
寺をよそに過ぎめや

屏風の繪に花のちる所に雁とぶ

ふるさとへ別るゝ雁の聲きゝて梢の
花も根にかへるらむ

菱花蝶飛去

とぶ蝶の羽風にとがはおはじとやう
つろふ花を返り見もせぬ

散りてのち花をおもふ

見し花のなごりわすれぬ曙にうたて
あやしき袖のうつりが

春の野に遊ぶ

しろたへの袖ふりはへてかげろふの
もゆる芝生に菫摘むなり

人々春の野に遊ぶ所

春の野に翁さびせむ若菜つむこゝ野
の子らも我によるべく

をとこ女野にいでゝ菫つむ

いくとせの春か摘みけむ同じ世にす
みれの草の名のみたのみて

縫子の家の贈答の會に、春の
野よりかへりて人のもとへ

君がため交野(かたの)の櫻折りてけり淀の河
風ふかば吹かなむ

閑中日長

菅(すが)の根の長してふ日も世のほかの宿
とひてこそ思ひしらるれ

桃の繪に

今も猶ゆきて見てしが桃の花咲くや
み谷の水のみなかみ

桃の花咲きたるを人折れり

三千歳(みちとせ)に咲くてふ花と聞くからに折
りてをゆかむ老人(おいびと)のため

つばくらめ

としのはにむれつゝ問ふやつばくら
め都の家のみつばよつばに

桃の花を女どもの折る所

ひとごとのしげかる世にも物いはぬ
花とし聞けばなつかしきかな

田舍の家に田かへす蛙なく

垣津田(かきつだ)をあらすき返すかたへよりせ
き入る水になく蛙かな

苗代

ちまち田の苗代水にひく注連(しめ)の長く
も秋をたのみかけゝり

雨中苗代

をつくばの山かきくもり葛飾や苗代小田に小雨ふりきぬ

雨後苗代

けさ見れば夜のまの雨にひく注連のしづくの田ゐの名さへしるしも

河苗代

ゆく河の水をくもでにせきわけて苗代いそぐ時は來にけり

あら田うつ所

心してあらすきかへせつくばねの雫の田ゐに櫻ちるころ

山吹露ふかし

行く春もやどりとるべく夕露にしなふまがきの山吹の花

石井のもとに山吹咲けり

底澄める石井の水をかゞみにて立ちよそひたる山吹の花

名所山吹

神南備の岸の山ぶき咲きにけり御室の嵐ふかずもあらなむ

松上藤

藤さくや松の梢を高機に誰れうま人のみけし織るらむ

池上藤

藤の花うつろふからに紫のゆはたに見ゆる池のさゞなみ

人船に乘りて藤の花見たる所

咲きにほふ藤に心をまつはしておなじ汀を行きめぐりつゝ

弟橘媛の御靈齋へりといへる吾妻の森にまうでけるに御社のかたへに藤のいみじうさかりなりければ

藤波の名さへかしこし走水荒かりし代のむかししのべば

彌生ばかり人をとふ

住む人はまちもまたずも呼子鳥聞きすてがたき夕まぐれかな

山家暮春

花も皆ちりての後ぞしづけさをもとめし山のかひはありける

春ををしむ

春よなど夏かけて咲く藤なみの心ながさにならはざるらむ

留レ春不レ駐

木がくれに殘れる花はあるものをあひも思はぬ春ぞつれなき

惜レ春不レ留

待ててふにいつかは春のとまりにしと思へど猶も惜まるゝかな

殘春

花ゆゑに待ちこし春のいかなれば散りての後に惜まれぬらむ

三月盡

けふのみに暮れさらめやはあづさ弓春よしばしと鳥は鳴くとも

彌生つくる日

春の日の今日としなれば萱の根の長かりしとは思はざりけり

石濱にて彌生のつごもりに

花をしも見るより外になすこともな
くて暮せし春ぞ樂しき

春星

けふの日ものどけさしるくしのゝめ
の霞ににほふあかぼしのかげ

春雲

山の端もさくらのきぬの色見えてう
すくれなゐににほふ横雲

春木

吹くとなき朝の風にうちなびく柳ぞ
春の姿なりける

泉響添二春風一

早蕨のもゆる山路の春風につたふた
るみの音ぞ添ひゆく

春富士の山を見て

大かたの霞は立ちもおよばねど春の
光ににほふ富士のね

山家春興

いはつゝじ山ぶきにほふ眞淸水に春
せきとむる柴の庵かな

春の山ぶみ

花見むと分け入る山のみちもせにふ
りすてがたきはつ蕨かな

あらしやまのふもとの春のけ
しき書ける繪に

嵐山花より明くる春の色を杉の庵に
寢ても見てしが

江上春興多

みなと江の岸の柳もいとゆふも心ひ
かるゝ綱手なりけり

春色浮レ水

霞たつ青香久山の山まゆのみどりを
うつす埴安の池

松有二春色一

うつろはぬのどけさ添ひて松が枝の
花に先だつ春の色かな

衣はるさめ

野べは皆若草ずりになりにけり衣は
るさめ日數へぬれば

心靜酌二春酒一

のどけさは汲みてこそ知れ酒の名も
聖の御世の春にあひつゝ

春旅泊

梅咲くや室の泊のかぢまくらふるさ
とびとの袖の香ぞする

春神祇

九重の神のつかさの花しづめ世のう
き事もちりて往ぬめり

春日山神の心もなびくらむ大宮人の
藤のかざしに

但馬の國出石しりたまへる君の
大刀自君のもとにて春祝言を

ひとしほの色そふ松の春風も千代を
しらぶる琴ひきの濱

家々翫レ春

里つゞきさへづりかはす百千鳥なれ
さへ御世の春やたのしき

萬物感二陽和一

大路行く車のおとも百鳥の聲のにほ
ひも春めきにけり

春風春水一時來

いなむしろ川ぞひ柳うちなびき氷なかれて春は來にけり

春水滿二四澤一

春の日に氷とけゆく澤水のけぶりやよもにかすみ初むらむ

知直が妻を迎へし頃人々つどひて歌よむに春江花月夜といふを題にて

いく千々の春をふる江の水のおもに月と花との影は老いせじ

志賀浦　春

唐崎や霞にこもる松の色ををりをり見する志賀の浦風

志賀花園　春

大宮をこゝとし聞けば花園にあやなき袖をふれむものかは

浮島　春

かすみ立つ春の汐路を見ぬ人や浮島の名はおほせたりけむ

香取浦　春

浪をたて霞をぬきに織る機のかとりの浦の春はしよしも

うけらが花　巻二

夏　歌

竹亭夏來

をしみこし春もいつしかくれ竹の陰には夏の好ましきかな

ころもがへ

白がさねきるてふ今日ぞ花の雪きえずもあれな麻の袂に

朝更衣

雪と見し昨日の花の色にだによそへて今朝や白がさねせむ

孟夏旬

刺竹の大宮人のけふこそは雲ゐの風を手にならすらめ

大神祭の使

御神衣につけし績麻のうちはへて今もたえせぬ今日のみてぐら

おそ櫻を

うち群れてとはるゝ春を過ごしつゝひとりしづけき遲櫻かな

山餘花

夏山の茂みが奥のしづけさに心のちらぬ花もありけり

ほとゝぎすたづぬる山のおそ櫻思ひのほかに春ぞ殘れる

松陰餘花

松かげや下枝にかけし木綿ばかり花こそのこれ神祭る頃

木がくれに花こそ殘れありて世のはてもうからぬ松にならひて

餘花何在

夏山のしげみに花や殘るらむそこは

かとなく風のかをれる
　鳥思二残花枝一
花は猶のこれる枝に夏來ても古巣お
もはぬ百千鳥かな
　雨中新樹
むらさめにぬるゝみづ枝のあはれさ
も昨日の花におとりやはする
　深山新樹
都人きても折らねば若葉さへみ山ざ
くらぞおのがまゝなる
いく代々の宮木にもれてみ山木の老
木ながらに若葉さすらむ
　林新樹
若葉さす片山ばやし露ちりぬ花にい
とひし風のなごりに
　卯月はじめ利根河のほとり妙
　意尼がいほりへまかりて歌よ
　みけるに夏木立を
風わたる利根の河邊の若くぬぎ若葉
さすなる陰ぞすゞしき

　卯月はじめつかた隅田河の西
　にあからさまにうつろひて
きのふかも河よりをちに見し花のな
ごり忘れぬ夏木立かな
　首夏藤
こと花の春を過ごしてあらそはぬこ
ずゑの藤のこゝろ高さよ
宮人のふたあゐのきぬにかよへばぞ
夏來て藤は盛りなりける
　雨中卯花
世の中をあなうの花の咲くころは空
さへことにながめがちなり
　卯の花おほかる家
しろたへに卯の花咲けりみ越路の雪
にうもるゝ宿と見るまで
　山家卯花
ふみわけて訪ひ來し雪のおもかげに
卯の花咲けるをのゝ山ざと
卯の花は咲きにけらしな稀にとふ都
の人の袖と見るまで

　卯花隣をへだつ
人ごゝろあなうの花の咲きしよりか
いまみさへもまかせざりけり
　うの花さけり月あかし
秋をおきて月のあはれは卯の花の咲
き散る庭の更くる夜のかげ
　卯花垣に月を見るといふ事を
月をさへ花かとぞ見るうつぎ垣まが
へし夜半のこゝろならひに
　卯花咲きたる宿に訪ふ人あり
卯の花のやゝ散りそむる頃しもや跡
いとふらむ雪ならずとも
　卯の花さける家に郭公を待つ
ことさらにうつぎ垣して誰をしも待
つとか思ふ山ほとゝぎす
　佃島といふ所に咲きたる卯の
　花を人におくるとて
沖つ鳥鷗つくだの島ひゞきうちよす
る浪と見ゆる卯の花
　灌佛

ひんがしにながれて久しあれ出でし
佛にそゝぐ今日の眞淸水

葵露

あふひ草今日しもかざすもろ人に神
の惠の露かゝるらむ

簾葵

神山の朝露ながらかけわたす小簾の
あふひの色ぞすゞしき

每年懸葵

かみやまのふた葉のあふひいくとせ
の今日をかけつゝ根ざしそめけむ

ぬひ子が家の贈答の會に祭の
日人のもとへ

もろかづらこゝろにかけてわすれめ
や糸毛の車引きわかるとも

神まつるところ

玉がしは若葉さしけり皇神(すべがみ)にひもろ
ぎまつる時し來ぬれば
露結ぶすゞの若葉をたてながら八十(やそ)
玉(たま)ぐしと神にまつらむ

郭公

すみだがは堤にたちて船まてば水上(みなかみ)
遠く鳴くほとゝぎす

人の賀の屛風に四月ほとゝぎす

今よりのいくよの夏をかさぬとも聲
はふりせじ山ほとゝぎす

遠尋郭公

ほとゝぎすたづぬる山のかひなくば
都の人にいかゞ語らむ

待郭公

卯の花に月こそ殘れほとゝぎすこの
曙を過ごすべしやは

對月待郭公

夏の夜や霞へだてぬ月にだにもの思
はするほとゝぎすかな

人傳子規

ほとゝぎす寢ざめにたどる夢よりも
人づてのみぞいやはかなゝる

年々郭公

年のはに待ちえし人はふりぬれどふ
りせでなのる郭公かな

月前郭公

夕月のなかばかくるゝ山の端を鳴き
て過ぎ行くほとゝぎすかな

千え子がりいきて月あかき夜
ほとゝぎすを聞くといふこと
を

月影もこゝを瀨にすむ宿なればほと
とぎすさへ過ぎがてに鳴く

郭公月を待つにまされり

ほとゝぎす今もなかなむ月かげのい
さよふほどはかぎり有りけり

雲間子規

曙の嶺(みね)立ちわかれ行く雲に聲は殘れ
るやまほとゝぎす

雨中郭公

橘の花ちる暮のむら雨にをりあはれ
なるほとゝぎすかな

雨後郭公

雨すぎてあやめ露ちる軒端より鳴く

音もかをる郭公かな

暁子規

夕月のはしゐながらにほと丶ぎすかはたれ時の聲を聞くかな

遠霍公鳥

ほと丶ぎすさだかなる音を夕暮の雲井のよそに誰か聞くらむ

子規未ㇾ遍

さのみやはうらみはつべき子規聞きつる人のかずぞすくなき

神の社にほと丶ぎす鳴く

朝倉の聲すみ渡る神垣にほと丶ぎすさへなのりてぞ行く

驛路にてほと丶ぎすを聞く

子規なくひとこゑに旅路行くいくその人の袖ぬらすらむ

海の邊にてほと丶ぎすを聞く

ふる里へ言傳はせよ妹が島さして過ぎ行く山ほと丶ぎす

山寺にこもりて時鳥を聞く

都べにことづてやらむ比叡の山ふもとの雲に鳴くほと丶ぎす

古寺にこもりてほと丶ぎすを聞く

初瀬山みのりの文にこゑそへて夜ただとなふるほと丶ぎすかな

故郷郭公

子規しのび音もらせ宮人の袖のゆかりの藤原のさと

ふる衣きならの郷のほと丶ぎす聞きならしけむ人や戀しき

山里にほと丶ぎす聞く

花散りて茂みにこもる奥山の里をもかれず訪ふほと丶ぎす

今しばしかたらひなれよ郭公都にいざと人はいふとも

世の中に住みわびぬとはなけれどもほと丶ぎす聞くたよりとを知れ

山家霍公鳥

吾が山にふりいで丶鳴け郭公こひしき人のかずならずとも

ほと丶ぎす鳴きぞとよむる都人わが山彦にまひはしてきけ

閑中郭公

あふち散り時鳥鳴くゆふぐれは心よわくも戸ぼそあけけり

船中子規

ほと丶ぎす鳴くひとこゑを綱手にて水脈引きのぼる利根の川船

人の家雲井にほと丶ぎすあり

東屋のまやの蔀を明けがたの雲路過ぎ行くほと丶ぎすかな

寝覺にほと丶ぎすを聞きて

ひとこゑによその寝ざめの袖をさへ思ふもあやな山ほと丶ぎす

名所郭公

ほと丶ぎすあくよあらめやあまた年ならしの岡に鳴きふるせども

淀のわたりに舟あり、ほと丶ぎす鳴く

よど河や下す夜船の枕よりあとより
名のるほとゝぎすかな
　隅田河のほとりの庵にて雨ふ
　る日ほとゝぎすを聞きて
遠かたやあしたの雨にうちけぶる梢
すぎ行く山ほとゝぎす
　ほとゝぎす鳴く山道に女車
ゆく
卯の花の雪に車の跡とめてまたもと
はまし山ほとゝぎす
をちかへり鳴けや車のあふひ草かゝ
る山路を訪ふは誰がため
　人の月まちて歸らむといひけ
　るほどにほとゝぎす聲しばし
　ば聞ゆ
ほとゝぎす夜たゞかたらへ月待ちて
かへらむ人もたちとまるがに
　卯月初つかた隅田河のわたり
　なる庵に日ごろこもりゐける
　を濱田の君聞き給ひて、過ぎ
　し年おのれが、水上遠く鳴く
　ほとゝぎす　とよめりし歌を
　おぼし出でつとて、けふいく
　か隅田河原をたもとほり、水
　上とほき聲きくらしも　とよ
　みて給へりければ、返しに
ほとゝぎす水上遠き聲よりも君がみ
言ぞうらめづらなる
　卯月ばかり山ぶみして
郭公鳴くひと聲にさそはれて卯の花
山を分けくらしけり
　田植うる所
ちまち田におりたつ田子の諸聲も植
ゑつくせばや遠ざかり行く
　川そひ小田に早苗とる
きのふかも花をせきいれし河そひや
早苗とる子が袖かをるらむ
　急早苗
ほとゝぎす鳥羽田の早苗いそぐらむ
數こそまされしづが菅笠
朝しめりかわかぬ袖に夕月のかげを
やどして植うるわか苗
　牡丹をよめる
見し春の千々の色香をひともとに取
りあつめたる深見草かな
　菖蒲
花の香は立ちかへてける袖の上にあ
やめぞかをる軒の朝露
　淀のわたりに菰刈る
いさゝめにすだく螢の宿ばかり淀野
の眞菰かり殘してよ
　菖蒲とる所またかざせるもあ
　り
あるはかざしあるは引きつゝ世の中
のうきに生ふてふ根ざしともなし
　五月五日菖蒲にさして人に
千代までといはひて引けるながき根
をけふ葺きそへよ三つば四つばに
　五月五日藥玉てうじてやむご
　となきわたりへまゐらすとて

あづまやの槇の柱に千代かけていはひまつれる藥玉ぞこれ

五月五日駒くらべする處

若駒をあやめの草に引きそへて今日中の重の眞手つがひする

騎射

かうぶりにかくるあやめも馬弓も古きためしを引くにぞありける

藥獵する所

露ふかきうけらが花に入りみだれくすりがりする武藏野の原

盧橘薫レ風

上つ代に常世の風をつたへ來て今國もせにかをるたちばな

風靜盧橘芳

たちばなを玉に貫きたる絲にだにしられぬ風も香ににほひけり

雨中盧橘

ほとゝぎすかさやどりせよ夕暮の雨うちそゝぐ庭のたち花

家にて橘を

わが園に常世のたねをおほしつゝいにしへしのぶ友をこそ待て

閑庭橘

たちばなの花散るころは吾が宿の苔路に人の跡も見えけり

庭の橘を折りて人のもとへ

ふりはへて訪はれむ袖を待ちがほに咲くや伏屋の軒のたちばな

橘をうゑて

うつしうゑし花たちばなに卷向の珠城の宮の昔とはゞや

あぢさゐ

宮人の夏のよそひの二藍にかよふもすゞしあぢさゐの花

節雨初入レ梅

卯の花をくたすながめのさながらにいぶせさそはる五月雨の空

山家五月雨

さびしさに馴れずば堪へじ山たづの音だにきかぬ五月雨の頃

名所五月雨

水まさる檜の隈河の五月雨にかりにも月の影をだに見ず

梅雨留レ客

我が宿に雨つゝみせよさみだれのふりにしことも語りつくさむ

五月雨降るころ人のもとへ

久かたの雨つゝみして來ぬ人をいつとか待たむ五月雨の空

五月雨晴

さみだれもかぎりあればや棟散る岡邊の庵に夕日さしける

さみだれにぬれつゝ植ゑし小山田の畦こす水に月ぞうつろふ

五月廿日出石の君の青山の館へまかりけるに、このごろの雨はれて月さし出でたり

さみだれの雲もいつしか杉が枝をはつかにのぼる月もめづらし

月あかき夜水雞の鳴くを聞き
て

槇の戸もさゝで人待つ月の夜に何を
水雞のたゝくなるらむ

夏の夜月あかし

大空を霞も霧もへだてねば夏こそ月
は見るべかりけれ

瑞枝さす葉ひろ熊樫露ちりて月おも
しろき夜半にもあるかな

雨後夏月

よひの雨にぬるゝ瑞枝をもれ出づる
月の花こそなまめきにけれ

玉がしは夕立過ぐる鏡葉をみがきそ
へたる夏の夜の月

江上夏月

徒人もわたるばかりに月かげの夏さ
へこほる諏訪の湖面

さゝなみの比良の大わだ淀めども淀
みもやらぬ短夜の月

水上夏月

夏の夜やうつろふ月の桂河影ながら
こそせき入れにけれ

みなせ河流るゝ水のうたかたにやど
るもはかな夏の夜の月

名所夏月

いせじまや浦の名に負ふ大淀にしば
しはよどめ夏の夜の月

竹亭夏月

夏の夜の月の霜にもたわむらむまだ
うらわかき窓のなよ竹

くれ竹のよながき陰は夏の夜ものど
かに見ゆる月の色かな

縫子の家の贈答の會に六月ば
かり月あかき夜人のもとへ

みじか夜の月を清水にせきとめてさ
さぬ板戸のまつと知らずや

夏の月あかき夜女の家に男き
たれり

訪はれむとおもはぬ閨の夏の月まほ
にむかひしことぞくやしき

泉に月の影うつりたるを女ど
も見るほどに、大路を笛吹き
て行く人あり

影とむる月にもならへ笛の音をきゝ
しらずとやよそに過ぐらむ

水無月十日あまり八日、曉よ
り雨風はげしかりしを夕さり
つかた晴れわたりて、月はな
やかにさし出でたり、人々と
ひ來て歌よむに

秋近みまだ音たてぬ荻の葉の露にや
どれる月ぞしづけき

五月ばかり隅田河のほとりに
やどりて

夕やみにともす螢の影きえて月にな
りゆく川瀬すゞしも

雨後瞿麥

なでしこの露こそことにあはれなれ
心ありける宵の雨から

夏の草

夏の野もさゆりなでしこ咲くころは
秋の錦にたちまさりけり

路夏草

行くさきも道はありけり夏草のしげ
みが奥に見ゆる菅笠(すがゞさ)

野草秋近

眞葛原(まくずはら)葉びろになりぬ秋風の吹きう
らがへす時近みかも

鵜舟多

鵜かひぶね所せきまでうかぶ夜は闇
としもなきしら河の水

鵜河篝

さみだれに鵜河の水や早からし淀み
もあへぬかゞり火のかげ

鵜舟のかゞりを見て

かつら人鵜河立つらし五月闇(さつきやみ)つらゝ
に浮ける篝火のかげ

名所鵜河

名にしおふ月の桂の川瀬にも闇を時
なる鵜飼ぶねかな

玉河へまかりて鵜つかふわざ
を見て

たらし姫若鮎(わかゆ)つらしゝ玉島の名にか
よひたる里ぞこの里

照射欲レ明

消えがたの嶺の火串(ほぐし)にあらそひて雲
間をいづるあかぼしのかげ

雨中螢

東屋(あづまや)の雨のしづくもかず見えて軒の
しのぶに飛ぶ螢かな

澤螢

人ごゝろあさ澤水のうき草に思ひみ
だれて飛ぶ螢かな

草の螢を

草むらの螢よいかにさく花の秋をば
またずならひそめけむ

水草しげれる所に螢多かり

吾が門の板井なくみそ夜もすがら水(み)
草(くさ)にすだく螢すゞしも

賤が家に夕顔さけり

かはほりの飛びかふ軒は暮れそめて
猶くれやらぬ夕顔のはな

蚊遣火たく處

をちかたやしげみが奥のかやり火に
賤が家居のかずも見えけり

里のかやり火

行く水にゆふべの月はすみながら蚊
遣にくもる河づらの里

氷室

夏の日も大御光にけたるらむ去年の
み雪もけふを待ちけり
氷さへ消えせでけふをまつが崎千年
かはらぬみつぎなりけり

遠夕立

足柄に入日の影はさしながら海上(うなかみ)か
けてゆふだちぞする

遠山に夕立ふれり

さがみ路は夕立すらし久かたのあふ
りの嶺に雲ぞおほへる

蟬

松が根の岩間にむせぶ眞清水に梢の
蟬のこゑぞあらそふ

蟬群夏深

夏もはやこずゑの蟬のこゑにちるゆ
ふ露すゞし杉のしたみち

隣のいづみ

中垣をしのびにもるゝ眞清水によそ
の秋をも袖にかすめつ

松下納涼

こずゑよりかゝるひかげの露おちて
袂すゞしき松の下風

水風夜涼

氷魚のよる河瀬の風や夏の夜のいさ
よふ浪になほ殘るらむ

水風如レ秋

水の音松のひゞきは秋ながら夏をこ
とわる蟬の聲かな

水檻風涼

西河やせき入れし水のおばしまにし
ばしば秋の風ぞかよへる

風來二水樹間一

水きよき岸の桂の追風にゆふ露かを
る袖ぞすゞしき

池浪にしづえをあらふ青柳のおきふ
す風ぞ袖にすゞしき

樹陰隣レ秋

夏と秋はたゞ葦垣の一重にて瑞枝す
ずしき庭の面かな

澗路甚清涼

とめくれば心さへこそすゞしけれ水
草きよき谷のほそ道

納涼

いはばしるたるみの水に影うつす月
をもむすぶ夜半ぞすゞしき

姫路侍従殿の河邊のなり所に
て納涼をよめる

夏そ引く海上がたの夕風もま袖にか
よふやどりなりけり

水無月の二日人々と共に舟に
てすゞみするに、納涼といふ
題を

隅田河河瀬すゞしも風にちる棹のし
づくを袖にかけつゝ

名所納涼

こよろぎのいその浪わけまだきより
秋きにけらし風のすゞしき

家々納涼

やみもなほ螢とびかふ宵の間は伊豫
簾かゝげぬ宿しもぞなき

西河やおなじながれをせき入れし宿
てふ宿に秋やかよへる

越の姫君の月次の題水邊納涼

池ひろみやかたびむすぶ雫にもにご
らぬ水の色ぞすゞしき

うま人涼する

玉だれの小簾かゝげてよ高殿に富士
の高嶺の風かよふまで

河づらの家に涼する

秋さへも波にたぐひてよせくらむ夕
しほのぼる河づらの宿

雨はるゝゆふべ高どのに涼す
る人あり
高殿に月をこそ待て雨過ぐるこずゑ
の露を袖にかけつゝ
あし間にすゞみする舟あり
夕しほになかばかくるゝ蘆の葉の露
ちるかたに小舟寄せてよ
夏のゆふべ隅田河へ舟をうか
べて
わたつみの沖よりかよふ夕風にすみ
だ河原のまこもなみよる
つくばねの瑞枝吹きこす夕風にこぎ
ゆく船の棹のつゆ散る
六月十日あまり、すゞみせむ
とて隅田河に船をうかべて綾
瀬へさかのぼれば、がふか咲
きたり
ほの見ゆるうすくれなゐのひとむら
は綾瀬の岸のねむの花かも
旅人木のかげにすゞむかた

岩が根のかしこかりしも忘られつゝ
しがら山の杉の下風
野亭秋近
都人千ぐさ見にくる秋近み露より先
にむすぶ庵かな
秋ひとよをへだてたりといふ
こゝろを
きのふしも垣根に生ひしくれ竹のひ
とよを秋のへだてなりけり
生ひしげる庭の夏草かくてしも明日
こむ秋の露を待たまし
六月祓したり
まごゝろのにごりはあらじ隅田河か
はせの菅そさきはらひてば
杜夏祓
さきはらふ天つ菅そに露ちりて心も
きよき杜のしたかぜ
おのづから眞菅とる手に風すぎて露
うちそゝぐ衣手の森
河邊夏祓

うき事もうれしき瀬にやかはるらむ
飛鳥の河にみそぎしつれば
名所夏祓
諸人はけふぞ都の西河に秋まちがて
らみそぎしにける
くる秋をまつの下陰風清みみそぎす
ずしき滋賀の唐崎
隅田河へはらへにまかりて
眞心を隅田河原の中つ瀬に神世のま
まのみそぎしてけり
うき事のなき世ながらも清き瀬にみ
そぎしつれば涼しかりけり
家々夏祓
はらへせぬ家しなければ罪といふ罪
は殘らじ天の益人
男女はらへす
おほぬさのつひのよる瀬をたのみに
ていくとし浪にみそぎしつらむ
河のほとりに神樂する
あきつばの袂にぬさの露ちりて河瀬

すゞしき神あそびかな
琴の音に浪のおとそへて菰枕高瀬の
淀とうたふすゞしさ
　夏日
きのふけふ照る日かしこし早苗とる
田づらの水沫ぬるみ行くまで
　夏雲
ひとすぢのけぶりと見しも時のまに
ちさとをわたる夕立の雲
夏來てはしづが狹衣ほさぬ日も雲こ
そかゝれ天の香久山
　會津山　夏
紐ときて旅寢やせまし吾妹子にあひ
づの山の夏陰もよし
　那須野夏獵
草深き那須のしの原しのびつゝ聲だ
にたてぬ男鹿狩るはや
　夏旅
大木曾や麓をすぐる夕立のなごりす
ずしき峯のかけはし

逢坂の山路こえゆく夏の日は關の淸
水ぞ人をとゞむる
　夏野を旅人ゆく
みなれこし笠をかたみのしるべにて
こと問ひかはす野路の旅人
　夏鐘
夏の夜は端居ながらにをちかたの鐘
に驚くあかつきの雲
　夏眺望
やしほ路は夕立すゞし島山の雲行く
かたにさわぐ舟人

草山和歌集卷三

秋歌

　文月七日秋立ちければ
時しもあれ今日立ち初むる秋をさへ
かけて渡せしかさゝぎの橋

　野亭秋來
わが庵のまがきの萩をみかり人きぬ
にするべき秋は來にけり
　荒れたる宿に秋きたる
秋なれや葎にとぢし半蔀を今朝打ち
たゝく風ぞあやしき
　はじめの秋
秋も猶きのふのまゝのあきつばの袖
におぼゆる今朝の初風
　新秋露
しら露の玉しき滿てゝ來る秋をあし
たの原に誰か待ち得し
おき初むるみぎりの露に心せよ伴の
みやつこ春ならずとも
朝戸出の茅生の白露いちじろく秋の
色こそ見えわたりけれ
　山里初秋
山里のあはれいかにと問ふ人に見せ
ばやけさの淺茅生の露
　七夕月

たなばたの心を汲みて天の河月もこよひやはれわたるらむ

野外七夕

野べ見れば紐ときにけり文月の七の夕べのなゝくさの花

海邊七夕

たなばたのかざしやちらふ夕浪に白玉よするほし合の濱

代ニ牛女ニ言レ志

天地と絶えぬ契りをおもふには年にひと夜の恨だになし

織女契レ久

天なるや安の川水あせばこそ逢ふてふ星のちぎり絶えせめ

七夕別

ひく牛のおそき歩みをかごとにてかへり見がちに君は往ぬらむ

羈中七夕

やつるとも今宵かさまし秋萩の初花ずりの旅のさごろも

烏鵲成レ橋

かさゝぎのつばさ重ねて安の河やすらにわたせそのともしづま

七月七日たらひにかげ見る所

影見るもうれしかりけり今宵しも逢ふてふ星のこゝろたらひに

棚倉の君の家にて七日の夜萩薄にいろ／＼の絲かけたるところ

皆人のこゝろ／＼のねぎごとを千ぐさにかけし絲にこそ見れ

七日の夜の曉によめる

たなばたのおもひきゆらむほど見えて影しらみ行く庭のともし火

二星期レ秋

こよひより夜長かるらむ神の代に秋とちぎりし天人のため

七夕催レ興

天の河とわたる舟の梶の葉に書きもつくさぬ千々の言の葉

山家七夕

あやにしきあかぬ事なきたなばたに麻ぎぬかさむ木曾の山ずみ

星河落レ簷

天の河櫂のしづくも高どのゝ軒端にちると見ゆる夜半かな

七夕濱

このゆふべ天の河原にかよはなむ待つらむ妹を早見濱風

七夕薄

たなばたのひれふる宵の初風になびきそめたる野べの小薄

七夕馬

天の川淺瀬ふむらむ彦星に月毛の駒を今宵かさまし

七夕蛛

いかならむ身のねぎ事ぞ今宵しもささにかくる蛛の絲すぢ

七夕梶

いかばかり神さびにけむたなばたの

待ちこしほどの玉の小櫛は
　七夕雲
たなばたのひれふる宵は中空に立ち
まふ雲もながめられけり
　七夕橋
雲鳥のあやに戀しみ機もの丶ふみ木
を橋にわたしそめけむ
　七夕衣
人なみに今宵かさまし嬉しさをつ丶
むばかりの袖ならずとも
　七夕後朝
たなばたの思ひみだる丶玉かづら今
朝しも庭の露とおくらむ
　二星適逢
機もの丶ふみ木の橋をひととせにひ
と夜とはなどかけてちぎりし
　文月七日家々の集どもの題を
ひろひで丶よめる歌七つ
　七日女郎花を植ゑよとて人の
おこせたれば
あふ星をためしにはしてこよひより
千秋にほはむ女郎花かな
　七日けふの空のけしきいかゞ
　見るといひければ
けふといへばその數ならぬか丶せ男
もいかゞは暮を待たざらめかも
　たなばたまつりしたる所に籬
　のもとに男立てり
神代より契たがへぬ彦星にたぐへむ
ものかごよひとふとも
　七日の夜琴ひく女あり
たなばたのあふ夜の庭の琴の音を雲
井にさそふ松風もがな
　七日の夕べ男あまた居て天河
　を見たり
久かたの天つ契をうつせみのこ丶ろ
ご丶ろになぞへてぞ見る
　七日女ども空を見る
夕月もくまなきよひの天の河思ふあ
たりにいかゞ見ゆらむ
　七日夜の曉を惜む
天人のま袖もりてや世の中のあかつ
き露は置き初めぬらむ
　七夕秋の七草をよめる
たなばたの紐とくよひやさ丶らがた
錦に似たる萩も咲くらむ
天の河川邊に立ちてまねくらむ領巾
かと見ゆるはつ尾花かな
彦星のあかぬ別にまつはりて引きて
とゞめよ庭の葛花
たなばたの五百つ集ひの白玉の散り
か亂る丶なでしこの露
天の河あかで別れし移り香をしばし
とゞむる藤ばかまかな
たなばたの心を汲みてこの朝け露重
げなるをみなへしかな
たなばたのおもなさ見えて霧深き籬
ににほふ朝顔の花
　閏月七夕
いたづらに逢ふ夜の名のみ重なりて

重ねぬ袖や猶しをるらむ

盂蘭盆

いにしへの飛鳥の寺のすみの山世々の御法のためしなりけり

荻を栽ゑて

風のおとを聞かむ便にうゑし荻思ひのほかに人招きけり

荻聲驚ㇾ夢

夢にのみ昔にかへる夜な〳〵のあはれ知らずや荻のうは風

幽栖荻風

中々におとなふものゝさびしきは伏屋の軒の荻の上風

穂に出でたる荻にさして人に

我のみやあはれと聞かむ秋更けてとはれぬ宿の荻の葉風を

栽ㇾ萩

今よりは我が宿をとへ秋萩の花づまかれし野べのさを鹿

月前萩

露分くる野路のさを鹿心せよ月をやどせる萩が花づま

萩の露おもし

朝ごとの露のよすがと植ゑし萩折るともよしやはらはでを見む

萩漸盛

たなばたの五百機たつる頃しもや萩の錦も織りはじむらむ

閑庭萩

おのが野と思ひなすらむ住む人もあるかなきかの庭の秋萩

崎萩

こ萩さく野じまが崎の朝風に夜半に結びし露ぞこぼるゝ

高圓野萩

高圓の野べの秋萩宮人の袖つけごろもふれていくよぞ

忠賢がせざいの萩をうつし植ゑたりけるに、雨風いみじうはげしかりしつとめて、忠賢がもとより、おもひやりて夢もむすばぬなどいひおこせけるに、思ひのほかに花の散らざりければ返事に

夜嵐に思ひおこせし心こそ花におほへる袖となりけめ

七月家にて秋の花ども植ゑたる所を

おのづから秋の野守となりぬめり千草の花を庭におほして

野の花ざかりにひらけて人々集り見る、またかりとるも有り

きぬにすりつとに折りつゝ秋の野は人の心もちぐさなりけり

花野を過ぐとてと云ふことを

秋の野は千ぐさの花の唐錦おりたちて行く人ぞ多かる

草花交ㇾ色

咲きと咲く花野を見れば世の人の染

めなす色はかぎりありけり
野花留レ客
眞葛原花さく秋は野べごとに人の心
のひかれぬるかな
秋の暁花見る所
別れこし妹が心やたぐへけむはひま
つはるゝ野路の葛花
嵯峨野にせざい掘る
あすよりは嵯峨野の風をとはにきゝ
露をも見むと千草ほるなり
きちかう
七くさにもれし恨やはれやらぬ霧の
籬のきちかうの花
槿
はかなしと誰かいひけむ夕陰に咲き
まさりたる花のあさがほ
鴨跖草
おく露の色こそことにさやかなれ秋
を時なる月草の花
大和の國のたねの月草をえて
植ゑおきけるが花咲きたれば
靑によし奈良の都の宮人の衣に摺り
けむつきくさの花
小鷹狩
栗栖野やあしたの風も隼の手ばなれ
にちる秋萩の花
新秋風
をざさ原けさ置きそはるしら露にあ
らそひ立てる秋の初風
家にて初秋朝露を
來る秋の爲とてやどはあらさねどと
ころ得がほの今朝の露かな
人のもとにて庭上露
あだものと誰かいひけむ庭ひろみ露
も千年の數にとるべく
故郷露
住みすてし宿をもとひて見るべきは
淺茅が露の秋にさりける
相思夕上ニ松臺一立、蛬思蟬聲
滿レ耳秋
こぬ人をまつのうてなの夕ぐれにう
たても鳴くか蟲のこゑ〴〵
蟲聲幽
野分せし籬がもとのやちぐさととも
に枯れ行く蟲のこゑかな
秋更けて草枕ゆふうまやちにふり行
くものはすゞむしの聲
蟲聲非レ一
時しもあれ妻まつ蟲もはたおりも星
のあふてふ秋にこそ鳴け
松蟲
夕ぐれの風にきほへる松蟲は誰が爪
琴の音にかよふらむ
きり〴〵す
おく露も霜になり行くあさぢ生をか
れなでも鳴くきり〴〵すかな
鈴蟲
ふりいでゝなく蟲のねやおのが名の
すゞろに秋のあはれそふらむ
こほろぎ

秋さればかるかやまじる淺茅生にお
のれ亂れてこほろぎの鳴く

秋風入ㇾ簾

わび人のをすのやつれのひまとめて
露吹きいるゝ荻のうは風

越の姫君の海べの御館(みたち)の月次
の題海邊秋風を

八汐路の秋吹く風を百舟(もゝふね)の眞帆に見
せたる海づらのやど

故郷秋風

鶉なくふりにし郷のあすか風尾花が
袖や吹きかへすらむ

秋の夜月いとあかきに鹿のこ
ゑを聞く

萩原やうつろふ露の月を へしがら
みふせて男鹿鳴くらむ

山陰に雨ふる、鹿たてるかた

雨過ぐる山の雫に立ちぬれて妻や待
つらむ小男鹿(さをしか)の聲

霧深き野づらに鹿なく

妻こふるおのがなげきの夕霧を分け
迷ふらむ野路の小男鹿

外山鹿

秋篠や外山(とやま)の雨の笠やどり鹿のなく
音に袖ぬらしけり

夜泊鹿

高砂の鹿の音きゝて明石潟うきねの
床に涙おとしつ

をとこ、旅のやどりに鹿の鳴
くを聞く

おなじ野に妻こふ鹿のたぐひかはち
さとの外に旅寢する身は

いとゞしく都こひしもさを鹿の入野(いるの)
の草の枕ゆふ夜は

鹿交二草花一

秋の野に住めるかひよと鹿ぞ鳴く花
の錦に立ちまじりつゝ

棚倉の君の家にて山里に住む
女鹿の聲を聞く

塵つもるまくらの山の鹿の聲あはれ
都に聞く人もがな

秋眺望

雁がねのつばさの風に霧はれてたえ
だえ見ゆる嶺のもみぢば

九月末つかた感應寺にて秋眺
望

見渡せば雲井はるかに雁鳴きて千町
のをしね色付きにけり

水郷秋望

網代木におりゐる鷺のみの毛のみ一
むら白き宇治の川ぎり

水邊秋夕

夕風にきよる渚のさゝら浪水にも秋
のこゑはありけり

いなづまのいそがしきを見て

露の間に露を見ながらもらさじとし
づ心なくかよふ稲妻

秋雨

桐の葉のつもるがうへにうちそゝぐ
あしたの雨ぞ秋の聲なる

新秋雨涼
桐の葉のかつちりかゝるおばしまに
村雨そゝぐ夕べすゞしも
月をよめる
照る月はあやしきものかかなしとも
面白しとも人に見えつゝ
妙法院宮の月次の御題月を
ながめきて老となりにし恨さへ忘る
る秋の夜半の月かな
初秋月
夕月のひかりほのめく西山や秋の越
えこし方に有るらむ
弓はりの影をし見れば月にのみ心ひ
かれむ秋は來にけり
閑居見ㇾ月
誰か知る拂はぬ苔の夕霧にうつろふ
月を夜たゞ見るとは
緇素見ㇾ月
花ずりの袖につらなるつゞりさへあ
はれへだてぬ露の月かげ

野宿見ㇾ月
秋の野にをばなさかふき一夜ねて千
ぐさににほふ月をこそ見れ
閑山見ㇾ月
立ちまよふ雲は端山にをさまりてみ
山の月に隈だにもなし
女ども月を見る
照る月はふたつなきものを見る人の
思ふ思ひや千ぐさなるらむ
家に女月を見る
端居して夜な〳〵月に馴れて見むき
ぬともよしや露のぬれぎぬ
七月十四日の夜月いとあかゝ
りければ
きのふしもあひ見し星の光さへけた
るゝ夜半の月の影かな
同じ月十七日石濱にて人々と
共に月を見て
木の間よりほのめくと見し月影をや
がてよせくる秋の河水

七月月いとあかきに池にうつ
ろへる影を見をりて
水清みひれふる魚にさわがれてやど
りさだめぬ月のかげかな
釣どのに人々あつまりて月見
る所
月すめば澄みまさりけりまとゐする
人の心も池のこゝろも
照る月をくもらぬ池の底に見て天つ
み空に遊ぶ夜半かな
舟をうかべて月を見る
夜と共に棹さすかたへながれつゝと
むればよどむ水の月かげ
越の姫君の十五夜の題川づら
の月を見てといふ事を
わたつみのうしほと共にさしのぼる
月にぞむかふ河づらの宿
終夜翫ㇾ月
武藏の海沖よりいでゝ秩父嶺にわた
らふ月のあかずも有るかな

さかづきも千たびめぐるや出づるよりかたぶくまでの月をうかべて

毎秋馴ㇾ月

秋をあまた馴れてむかへばうきふしもうれしきふしも月ぞしるらむ

貴賤憐ㇾ月

絲竹も砧の音もおのがにゝ月にいをねぬすさみなるらむ

武藏野に尾花あり、月出でたる所

武藏野の尾花が露に影見えて月もほに出づる秋の夜半かな

月を見すてゝ人のかへらむといひければ

君まちて月をやどせる蓬生の露ばかりだにあはれとは見よ

停午月

立つ杉の影さへもなし中空によどめるほどの月のさかりは

入後慕ㇾ月

すむ月の入りにし後も山松の梢に殘る影をしぞおもふ

有明月

朝顏のやゝ咲き出でし露の上にしはしやどる有明の月

朝鳥の羽風にはるゝ薄ぎりの絕えまに見ゆる有明の月

長月ばかり有明の月を見て

馴れ來つる秋の哀も長月の有明の月ぞとぢめなりける

曉月厭ㇾ雲

雲だにも心あらなむ山のはに入りがた近き望の夜の月

曇る夜の月

大空を八重立ちこむる霧の海に月の御舟の行くへ知らずも

八月十五夜

玉くしげ明くるまで見むまそ鏡みがける秋の望月の影

八月十五夜空いとはれわたりたるに人々とひ來てともによめる十五首

なべて世の人の心もすむ月も空にみちぬる夜半にも有るかな

夕しほに浮べる月のかつらかぢ大江のみとに今ぞよすなる

わが園のこ萩の上の露すらも名におふ夜半の月をまちけむ

露ふかき軒ばにはへるつたかづらくる秋ごとに月ぞやどれる

かずならぬ庭の苔路の露をさへとめてやどれる夜半の月かな

さだめなき秋のみ空の雲さへも今宵は月に心ありけり

こよひしも筏の床に浮寢してすみだ河原の月を見てしが

玉すだれかゝぐる宿も何かせむ軒端のつたの露の月かげ

さはるべき山のはもなき武藏野は月見るための所なりけり

ことわりの夜半ながらかくばかり隈なき月の影は見ざりき

あすも見む月とは思へどおなじくは今宵ながらに明けずもあらなむ

いつはあれど秋のなかばの中空に隈なくすめる月を見るかな

あはれ知る今宵の月のかげのみぞ八重葎をもへだてざりける

訪へかしと思へば人のとひ來つゝ同じ心を月に見るかな

名に負へるこよひの月の隈なさに千たびあふとも飽くよあらめや

八月十五夜越の姫君の月宴の題十五夜翫レ月

をすまけば月のかつらのおひ風もまほにかをると思ふ夜半かな

やむごとなきわたりに月の宴有るに、洲濱に水をゑがきて、鏡を月のかげとおもはせて、鏡のひもを藻にむすびて、水の上へ金泥(こんでい)もて歌をかけり

君見よと最中の秋の月かげもこゝをせにすむ庭の池水

八月十五夜人々とひ來て宴せしに蟲をよめる

この夜らの月と君とをよもぎふに待ちよろこべる蟲の聲かな

十五夜人々とひ來たりけるに夜一よ曇りたりければ

こよひしも訪はれしのみを光にて月はつれなき蓬生の宿

さもあらばあれ影見せずとも隈もなく語りあかさむ秋の望(もち)の夜

八月十五夜前栽うゑたる所

いつはあれど今宵の月をやどさむと植ゑしちぐさは細ときにけり

松の絕間よりはつかに月の影のかげろひて見えけるを

いつのまに月は梢をのぼりけむ松の葉ごしに光ほのめく

秋の月に山に鹿なく

月影のくまなき夜半も小倉山つままきかねて男鹿鳴くらむ

夜の雲をさまりて月行くことおそし

ちりばかり雲の浪なき大空の月のみ舟はこぐとしもなし

月瀧をてらす

御幸せし布留(ふる)の瀧つ瀬ふりぬれど月のみ影はいまもやどれり

秋の月面白きに池有る家

大空に光みちぬる月をしもわがものに見る池のおもかな

あれたる宿の月

古へをしのぶの露に影とめて月のみすめる奈良のふるさと

旅の宿りに月を見る

おくれゐて戀ふる袖にもやどるらむ草の枕の秋の月影

しづかに月を見る

とこしへにとざせる門の杉が枝に思
ひあがれる月を見るかな

　月の山の端に入らむとするを

三日(みか)の夜のほのかに見えし影ばかり
山のはつかに殘る月はも

　山里にひぐらしの聲をきゝて

杣人の斧のひゞきは絶えてしも猶ひ
ぐらしの聲ぞのこれる

　女の家に男いたりて籬の尾花
　のもとに立てり

人はいさしら露むすぶ絲すゝきほに
出でて我をまねくとぞ見し

　山里に侍りし夜鹿の鳴くを

秋深み山田のひたになれてしも枕に
近きさを鹿の聲

　八月十六日夜人々つどひて歌
　よみけるに、有明の月あかき
　に鴫たてりといふ心を

いねがてに鴫ぞはねかく有明の月影
淸き猪名(ゐな)のふし原

　廿日月

杉立てる山のはつかの月かげのさし
のぼるほどぞしづけかりける

　月前苫

古鄕のかやが軒ばの苫の露あはれい
くよの月やどるらむ

　狂雲妬佳月

詠(なが)めつゝ月をねたしと見る人の心や
浮ける雲となりけむ

　雲間月

行く雲も秋のさがとて早ければしば
しば見する月のかげかな

　山家月

さを鹿の籬(まがき)になるゝ宿の月かく見む
とてぞ世をばのがれし

　月の夜山里を訪ふ

山里の月にとひきて大かたの秋のあ
はれのかぎりをぞ見し

　山里にて月の夜都をおもふ

あはれしる都の友のこひしきはを鹿
鳴くなる月の秋の夜

　山月入簾

をすの中の空だきものや山の端(は)の月
を待ちとる隈にはあるらむ

　野月

秋の月あくまで見つゝ武藏野の廣き
惠をあふぐ民草

　野月露深

むさしのや露分け行かむかたもなし
草は皆がら月になりつゝ

　秋の月面白き池有り家有る所

こゝを瀨に月も澄むらむ島好むある
じがらなる池のこゝろに

　池月久明

年ふれどくもらぬ池の鏡には月の面
わもおいせざりけり

　月照河水

むさし嶺(ね)に雲をさまりてさゞれ石も
月にみがける玉川の水

　山川に月のうつるを見て

いく千々の玉か散るらむ秋の夜の淸
瀧川の浪にてる月

江上月

都鳥うきねの數もあらはなる難波堀
江の秋の夜の月

浦月

繼橋の百夜つぎても見てしがな眞間
の浦わの浪にてる月

古寺月

なべて世の秋はものかははつせ山檜
原がおくにすめる月かげ

信濃の國なる玄澄法師とまと
ゐしける夜、古寺月といふ題
を得てよめる

秋更けて夜な〳〵すめる月影や瓦の
松の雪となるらむ

古寺殘月

曉をまつの戸さゝで誰か見る高野の
おくの有明の月

樵夫歸レ月

秋深みゆふ露おもる椎柴に月かげそ
へてくだる山人

田家見レ月

をしねかる田ぶせの秋の月の夜に都
の人をとゞめてしがな

故郷月

古里の月にとひきて水草ゐし板井の
淸水さし汲まれけり

名所月

大原やおぼろの淸水名のみして秋は
月こそ澄みわたりけれ

月下遠鐘

澄む月にあはれをそへて心ある遠山
寺の鐘のこゑかな

月前旅行

古郷の人に見せばや尾花葺く宇治の
かりほの秋の夜の月

月前神祇

男山神のみゆきの事はてゝ嶺さし出
づる月ぞしづけき

月前遠情

象潟や秋すむ水の月影をあまのいそ
やに誰か見るらむ

月を先づ待ちとる國に住みなれてか
たぶくかたの都をぞ思ふ

月前眺望

しら鷺のつばさと見しは月夜よみ安
房の遠山かけて漕ぐ舟

玉川や千村五百村手作りをさらしそ
ふると見ゆる月かな

月前祝言

八束穗の瑞穗の上に千五百秋國のほ
見せて照れる月かも

九月十三夜家にて人々と共に
歌よむに月前祝レ君

筑波山千秋くもらぬ月をしも君がみ
陰にたぐふべらなり

九月十三夜曇りければ

天雲もかくさふべしや照る月をめで
そめませし昔おもへば

十三夜人々つどひて歌よむに、
海のほとりなる人の家に月の
入るを見たるといふ事を
なにはがた蘆火たく屋にやどらずば
波間にしづむ月を見ましや
九月十七日忠賢の家の會に、
上野の岡より月の出づるを見
て
織りかくる秋の錦をたち待ちの月か
げにほふ岡の邊のやど
暮秋月
霜のうへに影はとゞめよ秋の月馴れ
にし露のなごり思はゞ
駒むかへ
唐錦立野の駒はあづまぢのちさとの
秋の花やわけてし
駒むかへを見る女車あり
うき名のみ立野の駒もあふさかの關
路こえぬと聞けばむつまじ
初鴈を聞きて
聲きけば先ぞうれしき三吉野の田面
の鴈のよりもよらずも
道行く人初かりを聞く
あがた見に朝立ちゆけば遠つ人初か
りがねも空に鳴くなり
月前雁來
雲霧を翅の風にうちはらひ月見よと
てや鴈わたるらむ
紙繪に帆かけたる舟あり、雁
わたる所
海原やおき行く舟のをちこちに聲を
ほにあげて鴈渡る見ゆ
薄暮初雁
夕附日入間のかたのいほしろの穂の
へにおつる初かりの聲
妹がり行く道にて鴈を聞くと
いふを題にて
ふりはへて行くなるわれを遠つ人か
りにのみとな妹に告げそよ
馬上聞レ鴈
秋の野に尾花あしげの駒とめて空行
く鴈のこゑを聞くかな
雄風が葛飾の里の家をとひて、
古今集の句題をよめる、鴈ぞ
鳴くなる
秋風はうべ寒からしかつしかや千町
のをしねかりぞ鳴くなる
水鄕鴈
雲路行く天つ雁がね澄む月の桂の里
に中やどりせよ
月前鴫
露深き猪名のふし原たつ鴫の羽風に
月の影ぞこぼるゝ
河霧
百くまや千くまの河と霧こめぬ舟わ
たせをと呼ぶ聲はして
湖上曉霧
松風もかぎりあればや霧こめて有明
くらき滋賀の辛崎
月前擣衣

つくばねのすそわの田ゐに月澄みて
にひくはまゆの衣うつなり
千萬の砧の聲ぞきこゆなる都の空の
秋の夜の月

月夜聞ㇾ砧

物思ふすさみと聞けば月清みたゆむ
砧もあはれなりけり

擣衣驚ㇾ夢

わび人の砧の音のかよへばやさむる
枕の露けかるらむ
夢のわた百舟人や寢さむらむ吉野の
さとに衣うつころ

南北擣衣

ひんがしに流るゝ水のかなたこなた
衣うつなり玉河の里

名所擣衣

千たびうつ砧の音ぞきこゆなる身に
しむ風の秋篠の郷
更けぬるか月は外山に入間路の里の
砧の聲たゆみ行く

夕菊

村ぎくの露分けごろも日も入りぬ今
日や山路に千年經にけむ
たそがれの妹が垣根の菊の花われを
待つらむ袖かとぞ見る

月照二菊花一

淵となる行末かけて秋の月やどり馴
れなむ菊の上の露

秋の夜月あかし、籬のもとに
菊さけり

隈もなき月にけたるゝ夕づゝの光を
殘すませの白菊

菊の花咲きたる所に夜泊りて
人々見る

そのかみの山路の種ときくからに一
夜の宿も千代や經なまし

旅宿翫ㇾ菊

古郷のおとづれをだにきくの花名も
なつかしみ折りてけるかな

伴ㇾ菊延ㇾ齡

あし引の山路の菊や仙人の千世のさ
かゆくしをりなるらむ

ぬひ子が贈答の會に菊を折りて
人のもとへと云ふ事を

君とわが語らむこともつもりては淵
となるべき菊の上の露

川づらに菊咲けり、もみぢ多
かり

田のつらに柞もみぢせり

きくの露つもれるよどにかげうつす
木々のもみぢも常磐ならなむ
秋更けて色こきいねの中にしも立て
る柞のうすくも有るかな

月照二紅葉一

月の船さすにまかせて夜さへもこが
ると見ゆるもみぢ葉の色

遠紅葉

けさ見れば都の外の露霜の深さしら
るゝ峯のもみぢ葉

紅葉留ㇾ客

こゝろさへ色にそみぬる木のもとを
誰かへる手と名づけそめけむ

山皆紅葉

このごろはもみぢぬ山もなければや
くれなゐにほふ四方の朝霧

古今集句題、いはがきもみぢ

龍田彦風なふかせそかぎろひの岩が
きもみぢ今盛りなり

繪に宇津の山の紅葉を人々分
けてのぼる所

つたかへで下照る秋は陰しげきうつ
の山路も誰かたどらむ

田舎の家にもみぢ染めたるに
田刈りたる所

をしねかる田づらのいほのうすもみ
ぢ色付く秋になりにけるかな

水郷紅葉

かつら人散るをやいかにいそぐらむ
嵐の山の嶺のもみぢ葉

網代にもみぢよせたり

水上のもみぢ葉よせてあじろ木に猶
もいさよふ秋の色かな

河にもみぢ流るゝを見る

さゝらがた錦の帯と見るばかり細谷
川にもみぢながれぬ

川づらのもみぢを見て

百舟のかよふ川べのもみぢ葉はこが
るばかりに染めてけるかな

川をへだてゝもみぢの散るを
見る

木がらしの吹くや川との渡守ちるも
みぢ葉もこゝらつまなむ

田子の浦もみぢ有り、富士見
ゆるかた

田子の浦や秋はもみぢぞこがれける
ふじの烟のたゝずなる世も

明石の浦もみぢ有り、帆かけ
たる舟行くかた

明石潟浦こぐ舟のほにいでゝにほふ
紅葉はあかずも有るかも

もみぢやゝ散りがたなり

花よりもつれなかりけりもみぢ葉は
袖にしむべき香さへとめねば

紅葉殘レ梢

暮れぬとて何をしみけむ秋の色は梢
にのこる神無月かな

越中國柿本の社に楓あまた植
ゑて、それに歌そへて奉ると
て人のすゝめければ

古への手ぶりに猶やかへる手もいや
照りそはむ神のまに〳〵

人の山ぶみしたりとてかへで
のもみぢおこせたりければ

秋霧を分けゝむ山の深さをも染めし
もみぢの色に見るかな

鐘聲送レ秋

けふのみに秋をとぢむる山寺のしゞ
まの鐘の夕ぐれの聲

うら枯るゝ野寺の鐘の入相のひとこ

ゑごとに秋ぞ暮れゆく

山寺秋暮

しぐれつゝ秋も過ぐめる山寺にうつぶし色の袖ぞさむけき

羇旅暮秋

古郷を別れし袖に置きそめしあしたの露ぞ霜となりける

暮秋雲

あしがらや關の村山秋更けてしぐれもよほす峯のうきぐも

庭を秋の野につくりて

うつし植ゑてちぐさの花ぞ咲きにける大堰(おほゐ)嵯峨野はとはずともよし

野色混二秋光一

おきわたす露もちぐさににほひつゝいづらを花とわきぞかねつる

人々秋の野に遊ぶ

秋の野はにほふ絲はぎ葛の花誰も心のひかれてぞ來る

山路秋行

さを鹿の妻こふ山を秋ゆけば袖に先づしる初しぐれかな

八月の末、田ばたといへる所の西行庵へ人々と共に行きて秋山寺に遊ぶといふ事を

たきものゝ煙にかへて立つ霧のはれぬ山べに今日はくらしつ

秋雜

時わかぬ峯の岩ほもはふ蔦のもみづる色に秋は見えけり

八月十四日景雄が扇台しける時、紫苑(しをん)のかさねのきぬしてはりたる扇に、紅の紐をぬきてみなむすびして垂れたるを出して、それにそへける歌

露深み紫苑咲く野の秋の月うつろふ影もうす色にして

殘る日かずもはや二日三日(ふつかみか)となりぬるを、玉づさかけてくる聲だにせず、楓はなほ染めがてなるは、心おそき秋にもありけるかな、されど柿の葉のいやしげなるものから、うら山吹の袖おぼゆるまで染めなしたるが、文机(ふづくゑ)のもとに散りくるにおどろきて見いたせば、晴れにたる空いつしかかたへくもりて、しぐれさと降りきぬ、うらがれたる荻の葉もしづ心なく、萩の下葉の色附きたるがほろ〳〵と池水に散りてながるゝもをかし、ここらあせ行く芝生にわれもかうのはかなげなる、りんだうの我はがほなる、すべて哀れふかし、すいがいのもとより軒のつまではひかゝれるつたは、やゝ下ぞめして、さすがにをり知りがほなり

初しぐれあはれ知れとか秋の色に人

の心をそめて行くらむ

こは長月廿七日心地そこなひてたれこめけるをりのことになむ

長月つごもり田舍わたらひして

鴈鳴きて紅葉いろこき里をしもなど今日のみと秋はてぬらむ

浮舟長家波集巻四

冬歌

背面(そとも)なるいちしば原のいちじろく冬來にけりと吹く嵐かな

秋くれてはやくも冬は龍田彦うらさびませるけさの嵐か

秋暮れて殘る木の葉も有るものをうたてはげしき峯の嵐か

山家初冬

山里の雲の行きかひいとなきは都も今朝やしぐれそむらむ

十月更衣

あきつ羽の袖ぬぎかへて今日よりや朽(くち)葉(ば)の色の衣かさねむ

冬のはじめ山里をとふ

散りてだにあせぬもみぢの霜の上をふみわけて來し跡なとがめそ

冬立ちておく霜寒(さむ)み焚く柴のしば〳〵とはむ山陰(やまかげ)の宿

初冬時雨

きのふしも月にうかりし浮雲の行くへや今朝の時雨(しぐれ)なるらむ

十月二十九日東海寺の少林院なる縣居(あがたゐ)の大人(うし)のおくつきのもとに、人々つどひて時雨をよめる

秋くれしみ山の里ぞあはれなる落葉がうへに時雨降りつゝ

神無月しぐれの雲をしるべにて落葉の山を分けも迷はじ

時雨晴陰

木の葉散る山路こゆれば時雨行くあとよりにほふゆふづく日かな

あかつきのしぐれ

あけたゝば色そはるべきもみぢ葉にねさめ嬉しきむらしぐれかな

山路時雨

大木曾(おほきそ)はけふも時雨や降りぬらむ麻ぎぬぬれてくだる山人(やまびと)

むらしぐれ紅葉こきまぜ降るころは山分け衣ほさで歸らむ

行路時雨

しぐるゝや道のゆく手の笠やどり立ち寄るほどももみぢ散りつゝ

海邊時雨

礒山(いそやま)の松の嵐に聞きなれて今日も時雨に袖ぬらしけり

山家時雨

わが岡の落葉まじりのむらしぐれさとの梢を今やそむらむ

田家時雨
五百代の田づらのひつぢうちなびき伏屋の軒に時雨降りきぬ
十月十一日春海道別などとひけるに、しぐれ降る夜とふ人ありといふ事を
うれしくも降りくる夜半の時雨かな笠やどりとは思ふ物から
殘紅葉を見る
神無月春おぼえたるのどけさに殘る紅葉を花かとぞ見る
雨岡の家にて神無月ばかりもみぢを見てといふ事を
神無月み山のもみぢ散り過ぎては山の里にさかりなりけり
神無月の八日の日安濃津の君の染井の莊へまかりて紅葉を見てよめる
世の秋の色をやこゝにとゞめけむ千入染井のさとのもみぢ葉

御園生は春おぼえけり飛ぶ蝶のおもかげ見せて木の葉散りつゝ
かんなづきばかり山ざとにやどりて
散り殘る木々のもみぢをたづね來てしぐれの雲とあひやどりせり
初冬落葉
冬立つといひしばかりに染め盡すは山しげ山散りそめにけり
月の夜木の葉のちるを見て
おく霜にうつろふ月の影ながら散るもみぢ葉は夜さへぞてる
月あかき夜木の葉ちる
天つ空鏡と見ゆる月かげにちりかゝるものは木の葉なりけり
關路落葉
關こゆるにひさきもりが麻ぎぬに散るはゝそばの名さへなつかし
紅葉のいたく散りたる山をこえたる所

おく山の梢の秋やいかなりし八尺つもれる色を見るにも
瀧落葉
いかばかり紅葉ちればかくれなゐに漲りおつる峯の瀧つ瀬
河上落葉
朝日山峯のもみぢ葉散りぬめりしがらみかけよ宇治の河長
落葉浮レ水
飛鳥風きのふもけふも吹きにけり七瀬によどむ木々のもみぢ葉
山ざとびたる所に木の葉ちる
夕月のかげさやかなる槇の戸に木の葉の吹雪音の寒けき
閑庭落葉
むら時雨ふるごとしのぶすさみには梢の落葉もかきぞはらはぬ
庭もせに散るもみぢ葉やせきぬらむ筧の水の音だにもなし
十月ばかり物へまかりて

しぐれふり木の葉みだるゝみ山ぢは涙
さへこそもろく散りけれ

殘菊

うつろふをいとふならひの露霜もゆる
し色なるませの白菊

殘菊映レ水

大澤やひともとの名はしら菊のうつろ
ひのこる色にこそ知れ

霜

百くさの名殘もとめぬ枯野さへふみわ
けがたき霜の初花

朝霜

有明の消えにし影を松の葉にしばし殘
せる霜の色かな

金地院に遊びて霜夜聞レ鐘とい
ふ事を

置きそはる瓦の松の夜の霜を更け行く
かねの聲に知るかな

杉路霜

三輪山の杉のした道おく霜にひもろぎ
まつる跡は見えけり

閑庭霜

別れにしきのふの秋の白露やはらはぬ
庭の霜となりけむ

春海の家の會に卷頭閑庭霜を

日をさふる松の下庵朝ごとの霜の花さ
へさかり久しも

人跡板橋霜

朝なく／＼おく霜白き棚橋に誰が別路の
あとを見すらむ

人のなり所にて六帖の題をさ
ぐりて霜月を

冬だにも人め枯れせぬ園なれやあした
の霜も花をなしつゝ

木枯

この頃はいをねざりけり木枯に木の實
おちくる山かげの庵

初冬木枯

立ちこめしきのふのくれの霧はれて嶺
あらはなる木枯の風

寒松風

岩かどに立つやひと木の松にのみ殘る
嵐の音もすさまじ

嵐吹ニ寒草一

霜寒み音だにたてぬ荻の葉をしをりに
しをり吹く嵐かな

寒草帶レ霜

朝なさなおく霜白き翁草いたくも年の
老いにけるかな

蘆飛似レ雪

白鷺のつばさの風に散るあしの吹雪も
さむき冬の河づら

氷

筑波嶺の二をの嵐さえ／＼て鳥羽のあ
ふみは氷りゐにけり

河上氷

ながるめる紅葉をしばしとめむとて河
とや早く氷りゐにけむ

氷留ニ水聲一

をし鴨のつばさにかくる浪の音も此ご

ろ絶えてこほる池水

冬月

風さむみ夕霜こほる楢の葉の落葉が上
をてらす月かげ

大空は嶺の嵐にさえ〳〵て軒の垂氷に
月ぞうつろふ

暁寒月

きのふこそ寝ざめとひしか音たてぬ荻
のかれ葉の霜の月影

大御門ひらく鼓の音すみてみ橋の霜に
月ぞうつろふ

霜夜月

さを鹿のしがらみふせし萩原や古枝の
霜を照す月影

寒山月

聲たてぬ嶺の男鹿の跡見ゆる霜に更け
行く冬の夜の月

海冬月

箱根路や關の夜嵐さえ〳〵て月影こほ
る伊豆の海づら

寒流帯レ月

冬の夜もこほらぬみをの一すぢをよす
がにやどる月ぞ寒けき

家にて十一月閑庭冬月を

枯れわたる庭の芝生の霜の上に更け行
ゝ月を見む友もがな

冬の夜月あかきに加茂にまう
でゝといふを題にて

山藍にすれる袂の霜さえて月影こほ
る加茂のみたらし

霜ふり月九日金地院に遊びて
かへらむとしける時庭のもみ
ぢ散りて月いとあかし

もみぢ葉のちる木のもとに弓張の月の
かげさへ引きぞとゞむる

神無月に閏ありければ

更に猶神無月とし聞くなれどわかれし
秋は遠くもあるかな

椎葉

木枯にたへぬ木の葉をよそに見て殘る
もさびし嶺の椎柴

山ざとに椎ひろふ

今朝見れば我がゐる山の木枯に落ち椎
ひろふ里のあげまき

尋二千鳥一

浦づたひとめつゝ行けど大淀の松より
つらき友ちどりかな

夜千鳥

いづて舟今やよすらむ小夜更けて入江
のかたに千鳥しばなく

泊千鳥

百舟のはつるとまりの友千鳥立居いと
なき聲ぞ聞ゆる

旅のとまりに千鳥を聞く

難波津をこぎ出でし日の友千鳥幾夜ね
さめをとひ馴れにけむ

水鳥

山河ははやく氷やとぢぬらむ里わの水
に鴨ぞ群れゐる

網代

大君のみけにそなふる氷魚なれば網代守るをぢが業ぞかしこき

網代寒

あじろ人衣手寒し川上の田上山にあらし吹くころ

落葉留二網代一

もみぢ葉のよるなる時は里の名を身にはしらじな網代守る人

網代にもみぢ寄りたるかた

橋姫のこがるゝ袖の色なれや瀬々の網代に寄するもみぢ葉

賀茂臨時祭

さゆる夜に大ひれうたふ宮人の袖吹きかへす加茂の河風

霜さやぐ御階の竹のませのもとよにおもしろき神遊かな

千はやぶる加茂の御手洗音そへて東遊の聲のさやけさ

きのふかも葵かざしゝ宮人の山藍の袖に霜ぞおきける

霰

刈り殘すおくての稲葉打ちなびき田の面遙に霰ふる見ゆ

雪いさゝか降れり

いさゝめにはだれ降りけり春鳥の羽風にちらふ花と見るまで

朝に初雪を見る

けさ見ればねぐらを出づるむら鳥のつばさまだらに初雪ぞふる

朝戸あけて見れば嬉しも橋のした照る庭にみ雪ふりけり

十二月十五日初雪降りけるに鶯の來たりければ

春かけてかれずかたらへ初雪に跡つけそむる庭の鶯

嶺初雪

箱根路や雲の絶間に見渡せば初雪ふれり峯の岩角

越の姫君の會に橋上初雪を

初み雪またあさむづの橋の上に今朝しも誰か跡つけぬべき

雪のあした

かた山の槇の葉しのぎ降る雪を翅にかけて立つ鴉かな

雪似二白雲一

箱根山所もさらぬ白雲はこの頃つもる雪にざりける

遠山見レ雪

見渡せば降りつむ雪を有明の月にみがける多摩の横山

雪滿二群山一

出づる日のひかりにむかふ武藏嶺やをみねことごと雪ぞさやけさ

關路に雪ちれり

見渡せば須磨のうしろの山風に雪うち散れる關のあらがき

關路朝雪

朝ぼらけ關路こえ行く東人の荷前の箱に雪ぞつもれる

樵路雪

山がつの春のまうけの爪木には降る雪
さへも花と見えけり

雪みちをうづむ

あはれしる人やわけけむやさか積むゆ
ふべの雪に跡もありけり

古渡雪

まくらがの古河のわたりを朝わたり河
瀬にふれる雪を見るかな

孤島雪

伊豆の海にひとむら消えぬうたかたや
み雪つもれる浦の初島

禁中雪

かさゝぎの御橋の雪にあとつけて雲井
にのぼる心地こそすれ

禁庭雪

もゝしきや御階の櫻春またで咲くかと
見ゆる今朝の雪かな

神社雪

鹿島潟神のみむろにうちよせてかへら
ぬ浪は雪にざりける

武蔵なる氷川の森に雪つもり八重垣こ
もる神の御社

古寺雪

さゝ浪や比良山風のはやければ横河の
寺にみ雪散るなり

遠村雪

今朝見れば里はありけり遠かたの雪に
折れふす篁の奥

里雪

生駒山嶺のこがらし音絶えて雪しづか
なる秋篠の郷

市雪

朝ぼらけ何に換へましひんがしの市の
植木につもる白雪

山家雪

わが岡にみ雪降りけり玉だれの小簾か
かぐらむ都方びと

山里に住む人雪の降れるを見る

花見むと入りにし物を降りつもる雪も
世に以ぬみ吉野の奥

雪のふる日山里をとふ

いざとはむ今日降る雪に吉野山入りに
し人も待たずやはある
待つらむと來しかひありや信楽の外山
の雪に戸ぼそあけたり

山里の雪のあしたまらうど門
に有る處

立つ松のこずゑの雪をしをりにて跡つ
けそめし三輪の山本

田家雪

東路の荷前も過ぎて年深き田ぶせの雪
ぞしづけかりける

ぬひ子が家にて閑居雪を

立ちよれば猶柴の戸はさしながらかご
とがましき松の雪かな

名所雪

みし花の面影さらぬよしの山かをるば
かりの雪のあけぼの

滋賀の山越に雪の降りたりけ
れば

小車のあとだにもなし白雪のふるき宮路の志賀の山ごえ。

車中雪

たそがれのしのび車のすき影もおもなきばかりつもる雪かな

花とちる大路の雪を小車の小簾かゝげつゝ見る人や誰

うち日さす宮路の雪にあぢまさの車靜けきあさぼらけかな

馬上雪

花ならば蹄も香にやにほはまし雪ふみわくる甲斐の黒駒

雪を見てしづかに行くに馬のおそきにまかせたり

花とめで月と見つゝぞあくがれぬいそがぬ駒のゆきのまに〳〵

雪降りたるに人々舟にのりて行く

隅田川夕こぎ渡り筑波嶺の端山につゞく雪を見るかな

月雪の夜舟に乘りて人のもとを訪ふ

明けぬとてこぎはかへらじ月雪にまさりて思ふ友を訪ふ夜は

雪中遠情

橋立や聞きわたりこしおもかげも心にかゝる今日の雪かな

雪の中に遠かたをおもふ

ちゝぶ山かひが嶺かけて降る雪を隅田河べに誰か見るらむ

雪朝眺望

すみだ河くだすいかだをよすがにてみ雪ながるゝあさぼらけかな

雪朝遠望

眞柴たく畑のみこそ埋もれぬ河よりをちの雪のあけぼの

雪の山をつくりて

春かけてあらそひ殘れわが園に雪もてつくるうねび耳なし

竹に雪の降りかゝれる所

たかむらやねぐらの鳥の立つかたにこぼるゝ雪もおもしろきかな

雪の木に降りかゝりけるを

白妙にみ雪ふりけりをちかたの野守が門の葉びろ熊樫

見渡せばこと木より先づ枝たれて雪重げなる庭のゆづる葉

ぬひ子が家の贈答會に竹に雪のかゝれるを折りて人に

君訪はゞまがきの竹のよと共に雪とつもれる言つくさまし

人の家に女すだれのもとに立ちいでゝ雪の木に降りかゝれるを見る

冬ごもり人待つ閨の空だきを梢の雪の花にかさまし

杣山に雪ふれり、柴人かへるかた

折りそへし高ねの花と見るばかりしづが爪木につもる雪かな

雪高う降りたるに蓑きたる人
ひとり柴橋わたらむとする所
雪深み今日こむ人をあはれとて河より
をちに誰か待つらむ
雪のあした入江に釣する人あ
り
花とのみ入江の松に散る雪は思はぬ今
日の幸にぞ有りける
火桶のもとに人々ゐて雪のい
と高く降れるを見る
白雪はやさか降りけり埋火のおきゐて
つもる物語せむ
頭白き翁ある所に雪降る
はやくより頭にふれる白雪を梢にのみ
と思ひけるかな
しはす十六日雪ふりける日く
め子が故郷を思ひ出でゝ、な
にはがたあしのまろやのはい
ならむやへに降りつむ今日の
しら雪　とよみしといひおこ
せければ
なにはがた蘆屋の雪も君見ずてふるか
ひなしと世をやわぶらむ
雪中待レ春
厭くよなき人の心の花と散る雪にも花
の春をまちつゝ
晴雪落二長松一
梢よりたるひのしづく落ちそめてやが
てこぼるゝ松の雪かな
野行幸
雪ふればあけもみどりもおしなべてむ
らごに見ゆるみ野の狩人
大野にみかりするかた
大空に紅葉ふきまく鷹すゑて狩るや交
野のみ野の朝風
鷹狩
衣手にきのふは摺りし小萩原朝立ちな
らしとがりするかな
はなちやる手なれの鷹にさき立ちて心
空なるますらをの友
雪のあした鷹狩したる所
宇陀の野やとだちもわかずはだれ降る
あしたの雪にきそふ狩人
女の家に狩する男來たれり
玉かづらかゝらざりせばまれにだに逢
ひもかたのゝみ野のかり人
連日鷹狩
かり衣冬立ちしより宇陀の野の時雨に
雪にぬれぬ日もなし
炭竈雪
炭竈や雪のした折り中々に烟となりて
あらはれにけり
冬ごもりしたる家
人訪はゞやどの埋火かきおこし思ひお
こして昔かたらむ
爐火似レ春
小野山やまだきかすめる炭竈のなごり
のどけき閨の埋火
山家如レ春
冬ごもり焚くや眞柴のゆふけぶりかす

む軒端に梅も咲きつゝ

神樂

榊葉にうち散る雪も皇神のみそなはすがに御火白くたけ

奥山の榊が枝を雪ながら手草にとりて神あそびせり

汲みてしも神ぞ知るらむ大原やせがゐの水の淸き心を

禁中神樂

宮人の豐のあそびは更けにけりとるや手草に霜のおくまで

佛名

ひとゝせの罪もこよひにつくし綿かづきつれつゝかへる法の師

降り積る雪を分けこし山伏の春おぼゆらむ柏梨の酒

佛名おこなふ家

木々もみな綿かづけけりみほとけの名を唱ふなる庭のしら雪

佛名のあした別るゝ空に

北山の室の戸ぼそをあけたゝば霞やいとゞよそにへだてむ

年內早梅

世の外の宿にも梅の花のみぞよそのいそぎにさそはれにける

歲暮近

とし月もいつしか春にゆづるはを折りもてはこぶ遠のさと人

年のくれに

とし浪のよどまねばこそ立ちかへる春をもあまた待ちなれにけれ

春を待ち年を惜むもひとゝせの心ずさみのとぢめなりけり

來るを待ち行くを惜みて昔より思ひさだめぬ年の暮かな

海邊歲暮

年浪は立ちかへるとも來む春をはやうち寄せよ沖つ汐風

ま帆かけて風にまかする浦舟のたゞ過ぎにのみ過ぐる月日か

都歲暮

海山の千々の貢もおのづからつどふ都の年の暮かな

家々歲暮

家ごとに春待つ色の梅やなぎきぬもてはこぶ時は來にけり

閑中歲暮

とく過ぐる大かたの世の年月にいはほの中はならはずもがな

こと更におくりむかへぬ宿にしも行きかふものは年にざりける

歲暮松

舟岡やふりし子日の老木さへみ雪の下に春を待つらむ

とよ年のしるしの雪をつみそへて遠山松をはこぶ頃かな

年くれて竹ある家

くれ竹のしげみが奥に鶯と共に春待つやどりなりけり

年の暮に山より爪木こりて出

でたる所
雪ふかきみ山にこれる爪木まで明日
や都に春を知るらむ
　年の暮に友をとふ
月にとはれ雪にとひつゝ年くれぬ明
日は子日にいざといはまし
　年のはて雪
白雪は八尺積むとも行く年の跡だに
見えば追ひしかましを
　年の暮に人のもとへ
行く年を同じ心にをしまなむむかし
の花の春ならずとも
　年の暮に女のもとへ衣調じて
　やるとて
花鳥の春にあひ見む嬉しさをつゝむ
ばかりにたてる衣なり
　しづけき所にうつろひし年の
　暮に
世の中のいそぎにもるゝ人とはゞ柴
の戸あけむ年のとぢめに

　つかへをしぞきしよりかく世
の外にありふるは、いくらば
かりの年月にかおくりむかふ
るわざもなければたゞ
かへるとも行くとも年を思はねば心
はとはに老いせざるらむ
　身をおのがものとなしつるよ
りかゝる大御代にあひてしづ
かにこゝらの年をふるたのし
さをおもへば、暮れ行くきは
みとてさらによはひのつもる
をわびしとしも思ひたらず、
とれど人まねに歌よまずやは
　さてかくなむ
花もみぢあくまでめでし年月をたゞ
に過ぎぬと思ひけるかな
　きさらぎに閏ありける年の暮
　に
としとのみ思ひけるかな花ちれる河
瀬に春のよどもありしを

歳暮祝
うき事も知らでふる世に何をかもた
やらふ聲の四方にきこゆる
　山家冬深
吾門の眞榊折りてくだるなり今ぞ都
に里神樂する
　春漸近
たかむらにつばさならはす鶯も春待
ちがほに見ゆるころかな
　ぬひ子が贈答の會に五節の夜
　人のもとへ
をとめ子がけふ髪あげのからを櫛さ
して誰をか思ふとは知る
　追儺
宮人のけふ引く桃のたつか弓花さく
春にいるにぞありける
　ぬひ子が家の贈答會に節分の
　夜方たがへに來る人に
めぐりあふ今宵ひと夜をかぎりにて
明日やわが身もふるされぬべき

家にて歌よみけるに家々除夜を

來る春をほどにつけつゝ待つ夜かな玉しかましと思ふばかりに

冬星

東屋の軒の垂氷にうつろへる光も寒きあかぼしの影

冬夜山

箱根山夜半に越え行くはゆまぢの鈴の音さゆる木枯の風

東人の荷前やいそぐ夜をこめて駒引きすぐる足柄の山

冬野やく所

さを鹿の花づまかれし思ひもや野路の畑に立ちそはるらむ

冬海

見渡せば霰降りけりわたつみのかざしにさせる玉も散るがに

冬田

おしなべてひつち生ひつゝ冬淺き田の面は今もみどりなりけり

松子のもとにて冬の田を

しづけさに心をよせば小山田の秋くれてこそとふべかりけれ

この庵はにひほりの田の面にむかひたればなり

田づらにひつち生ひたり

ほに出ねば刈る人をなみ中々に小田のひつちぞうらやすげなる

屏風の繪に冬武藏野に旅人立てり

いづこにかゆかりもどめむ紫の根はふ大野も枯れわたるころ

刀禰川　冬

伊香保風いかに吹けばか刀禰川の瀬にすむ鳥の聲の寒けき

冬木

夜もすがら嵐吹きしく椎がもと落つる木の實の音ぞひまなき

花の春もみぢの秋も白橿の知らで幾冬みどりなるらむ

冬禽

霜寒き萩の古枝にうち羽ぶき春待ちがほの野路の鶯

冬獸

雪に訪ふ庵まぢかくなりぬとは門守る犬の跡にこそ知れ

大比叡や檜原の吹雪寒ければ横川のほらにましら鳴くなり

冬玉

主しらぬかざしの玉と思ふまで散るや霰もあはれとぞ見る

冬筵

橋姫の袂やいとゞさむしろに吹きかよふらむ宇治の河風

冬眺望

隅田河岸のむらあし枯れふして甲斐が嶺遠き雪を見るかな

人のもとにて冬祝

武藏の海沖つ洲先に住む千鳥群れつ

つ千代をよぶや誰がため

宇計良我波奈巻五

戀歌

初戀

露しぐれ染むるもみぢの初しほやこがれはつべきはじめなるらむ

岩がねのこゞしき山をふみ初めて苦しかるべきわが行くへかな

忍戀

とことはに絶えじとぞ思ふ水無瀬河した行く水の人しれずして

互忍戀

もらさじの心くらべも月日經ばいづれか先に色に出でまし

見戀

秋風の立つや野末のはたすゝきほの見しよりもみだれ初めてき

聲をきく戀

夕ひばり聲のみ聞きて戀ふるともうはの空にや思ひなすらむ

白地戀

染めつくす峯の紅葉をいづる日のあからさまにし逢ふは逢ふかは

通レ書戀

なかく\に淺しと人に見ゆやとて思ふ心はつくさざりけり

忍通レ書戀

みちのくのしのぶの浦の濱千鳥あとなとゞめそ寄する白浪

見レ書戀

我が中は木曾のかけ路にあらなくにふみみるさへもかしこかりけり

返レ書戀

とにかくに人の心のあら小田はかへす文にも思ひ知られつ

別無レ書戀

沖つ浪立ちわかれても濱千鳥あとだに見えば何かなげかむ

新戀

今はたゞ思はじと思ふ心にもなりねと神に祈るばかりぞ

祈經レ年戀

葉がへせぬ柏の社に年へてもつれなかれとは祈りやはせし

祈不レ逢戀

まれにだに逢ふ夜なきかな木綿だすきかけても神にさやは祈りし

馴不レ逢戀

逢ひがたきしらべよいかに爪琴の馴るゝばかりを息の緒にして

遇不レ逢戀

露けさは同じあしたのきぬぐ\を我のみかくぞくたしはてぬる

船中馴戀

河舟のうきたる中も水馴棹見馴れて

後やこがるべらなる

疑ふ戀

思ふてふ人の心のあらましを見はてむ世まで在りへてしがな

互疑戀

白雪の花とあざむくならはしに花をも雪と思ひけつらむ

疑二眞僞一戀

花は散り雲は消えなむ後までもそれかあらぬと猶や辿らむ

あるときはあらじと思ひさのみはとたどるやつひのほだしなるらむ

來不レ留戀

人ごゝろうきたる雲や吾が山にかゝると見るもとまらざるらむ

逢レ約戀

たのめずてあふよあらなむ契りしにたがふを常のならひなりせば

待戀

かひなさに思ひやまずて山寺の幾夜の鐘をかぞへ來ぬらむ

待空明戀

しのゝめの明けずばいつを限りとかたのめしまゝに待ちわたるべき

逢戀

今宵しもあふくま河の埋れ木の朽ちせぬかひはありとこそ知れ

さゝなみの志賀の大わたよどめりし恨もなしや今宵あふみは

うつゝとは思はざりけり夢にのみあひ見しほどのこゝろならひに

契戀

きのふまであふにかへつる命もてゆく末とほくなどちぎるらむ

飛鳥河あすの淵瀬もしらなくにながれての世を猶たのむかな

山松の千とせまでこそかたからめ葉がへぬ色を猶やちぎらむ

契逢戀

ちぎりしにたがはぬ夜半はなか〳〵にかたみにいはむ言の葉もなし

互契逢戀

待つらむと思ふもしるき空だきをかたみにしめし夜を忘れめや

契二來世一戀

目に見えぬ來む世をかくる愚さも知られぬばかり思ひなりにき

稀逢戀

くまもなく月澄む夜半の星なれや稀なる中に思ひ消ゆらむ

夢逢戀

逢ふと見し夢のたゞぢをとありけむかく有りけむと思ふはかなさ

夢中逢戀

逢ふと見て夢路にかわく袖の露さめてぞ更に置きまさりける

ことならばかたみにかへむよしもがな逢ふてふ夢と逢はぬうつゝと

竊中逢戀

あぶくまの名を頼みこしかひ有りて

心の奥も今宵こそ見れ

誓戀

妹と背の中に流るゝ河水の絶えむ世にこそ君とかれなめ

欲レ別戀

別路の野路のをささも分けなくにまだきに濡るゝ袖ぞあやしき

人のもとより曉に歸りてといふを題にて

有明の月に問はゞや殘れるもかばかり袖は露けかるやと

後朝戀

稀にあひてあかず別れしあしたより露をあはれと思ひ知りぬる

あひ見ても殘れることの多かりき物いひかはせ袖のうつり香

とゞめおきし心もおのがこゝろにてなげくや何の心なるらむ

名立戀

憂しとてもいかゞはすべき共に名の立たば絶えむと契りやはせし

おのが名は霞と共に立ちみちて思ひはるけむよしのなきかな

すまずなりにける女の人に名立ちければつかはしけるといふ心を

昔わが入りにし山と思ふよりうきたる雲もよそにだに見ず

無き名立ちける人にといふこころを

白雪を花ぞと人のいふめればいざこころみに手折りてぞ見む

歎ニ無名一戀

立たなむ名は千名の五百名もなげかめや逢ふてふ事のまさしかりせば

忍レ涙戀

昔なしに落つる涙の瀧つせもながれて人に汲みや知られむ

顯戀

末かけてしのびはてむのあらましも馴るゝにつけて弱りもやせし

馴戀

つらかりし昔を更にいひ出でゝ馴れてもかこつふしはありけり

依レ忍増戀

年經とも忍びはてむの心にはあふさきるさの袖の色かな

憑戀

僞のなき世とおもひ定めつゝひとつ心にわれはたのまむ

逐レ日増戀

日にそひておもひ入江のみをつくしみがくるゝまで成りやはてなむ

冬來増戀

神無月しぐれに染みし袖を見よ昨日の露の秋は物かは

切戀

死ぬばかり思ひしまめや立たむ名をいとひし程の心なりせば

朝厭戀

いとはるゝ身を知れとしも朝ごとの
鏡の神や影に見すらむ

顯戀

谷陰の一木のさくら何しかも風にし
られてうつろひぬらむ

俄戀

末の松待つらむとのみたのみつゝよ
がれせしまに浪越えぬとか

臨レ期變レ約戀

今宵しもあはむといひていなみ妻辛
荷のさきのからき悔しつ

かならずといひしに違ふつらさより
おぼつかなさはたのみありけり

風聲催レ戀

爪琴の下樋にかよふ風のおとを聞く
我さへに音に立てつべし

隔戀

隔てある人の心のうき雲や絶えぬな
みだの雨となるなむ

毎夜他行戀

つれなさもさすがに思ひ捨てやらで
よその夜がれを待ちわたりつゝ

難レ忘戀

わすれむとしひて思はじ忘られぬ思
ひのみこそかたみなりけれ

怨戀

思へども思はぬ人はにくからで思は
れぬ身の恨めしきかな

欲レ絶戀

ともすればわりなく人を恨むるや絶
えはてぬべきかごとならまし

琴の緒の絶えなむとてか松風のおと
づれさへも遠ざかるらむ

絶戀

今更に思へばあやしかりそめに絶え
しやいつのすさびなりけむ

互恨絶戀

難波なるうらみうらまれたく繩の絶
えむとまでは思ひかけきや

月前戀

我が袖にやどりなれぬる月のみぞ絶
えぬ思ひを空に知るらむ

逢はぬ夜は思ふあたりの袖の露とふ
らむ月の影もむつまじ

經レ月戀

逢はで夜にふるの早稻田の若苗を刈
るまでとやはかけて契りし

經レ年戀

二もとのすぎし契をたのみつゝなが
れても世に布留川の水

をり／＼は忘れむとのみ思ひつゝ忘
れずながら年ぞ經にける

舊戀

人とはゞふる川のべに年經つる過ぎ
にしことといひてやみなむ

故鄕戀

住みすてゝかへりみもせぬ人をなど
しのぶの草よひとり露けき

羇中戀

わくらはに戀しき人を水驛かたみに

今朝はさしぐまれつゝ

旅泊戀

室の海浪にうきねの枕にも心のとま
るふしはありけり

老後初戀

今はたゞ駒もすさめず成りぬれど猶
初草の萌えざらめやは

春戀

春されば身をうぐひすの音になれて
こぞめの梅の色に出でぬる
初草のしたに萌えつゝ戀ふる間に春
の霞と名は立ちにけり

夏戀

うき人の秋にあはずて我もしかとも
しに消ゆる命ともがな
大かたの思ひなりせば蚊遣火のいぶ
せき門に車よせめや
あひ見てもあやめの枕根ながさにな
らはぬ夏の夜をかこつかな
遠方の墟生の小屋にたく蚊火のかひ
なくてのみこがるとを知れ

七夕戀

こよひしも手向くる絲のうちはへて
長き契をむすびてしがな

秋題戀

瀧つ瀬にちるや紅葉の唐錦あらはれ
てこそ戀ひまさりけれ

冬戀

かつ亂れかつ碎けつゝ物思ふ身のた
ぐひなる玉霰かな
わび人の袖のしら露秋くれて霜とな
りても消えかへりつゝ
氷りゐしいつぬき河のいつとかもと
けてぬる夜を待ちわたるべき

冬契といふ事を

東人の荷前の荷の緒むかしより結び
しまゝのちぎりともがな

雪中戀レ人

待ちわびて袖うち拂ふ面影もゆき見
まほしき妹が門かな

雪の日人を戀ふる

かくとしも人は知らじな白雪にかよ
ふ心のあとし見えねば

遠戀

いとせめて忘れずとのみ告げやらむ
たよりからすな心あひの風

名所戀

新治の鳥羽のあふみのとはにのみ戀
しき人にあひ見てしがな

非レ心離戀

逢はで世に在りはてめやも心さへか
れぬと人の思はずもがな

艶女遇ニ他人ニ戀

しめゆひし庭の橘われならぬ袖にか
をれとおほしやはせし

竝レ面戀

人目おほみ言問ひかはすよしぞなき
物見車の立ちならべども

戀雲

箱根山峯にあはだつ浮雲のうきたる

戀ぞよるべ知られぬ
　戀のこゝろを
いつはりと思ひはてなばまことをも
まことゝ知らで過ぎぬべらなり
　寄レ月待戀
待つからにかならず月はとふものを
頼みがたきは人の心か
　寄レ月契戀
槇の戸もさゝでや寢らむ月の夜とか
けし契を忘れざりせば
　寄レ月逢戀
玉の緒のながらへてこそ月影も心も
はるゝ夜半も有りけれ
　寄レ月別戀
惜めどもあかで隱るゝ月かげを人の
上にはなどうつしけむ
入る月に人の別れをたぐへなばかな
らず明日の夜をしたのまむ
おき別れ行くもとまるもあはれとて
月や袂に影をわくらむ

　寄レ月恨戀
今はたゞ忘られはてし身を秋の袖に
夜がれぬ月も恨めし
憂き人のつらさに曇るをり〳〵を月
におほせて恨みつるかな
　寄レ風戀
あはれとも思はぬ風の心ゆゑ終に消
えなむ露の玉の緒
　寄レ水戀
山のべのみ井の眞清水ふりぬれどす
みわたり來し妹は忘れず
　寄レ田逢戀
秋の田のかりそめぶしも日をかさね
こひぢにたちしかひとこそ見れ
　寄レ江戀
つれもなき人に心をつくま江や刈ら
ぬみくりに袖ぞぬれける
　寄レ河戀
いかなれば河と見ながらこがれつゝ
渡らぬ袖に浪はかくらむ

　寄二禁中一戀
いつまでか人の心は荒海のかた戀の
みに世をわたるらむ
もゝしきや近き衞の名のりにもかひ
なく更くる夜を歎きつゝ
　寄レ花逢戀
袖ふるゝ一夜の花のうつり香をわが
身散りなむ後も忘れじ
折りえても猶こそあかね櫻花雲と見
しよの憂さは思はで
　寄レ草戀
戀ふれども引く人ぞなき谷陰にねは
ふ眞葛やわが身なるらむ
　寄レ椿戀
逢ふ事はかた山椿せめてなほ葉がへ
ぬ色をたのみわたらむ
　寄二埋木一戀
ながれてはあふくま河を命にていく
年浪に埋れきぬらむ
　寄レ獸戀

思ふ事やまとことひのくび木には堪へぬばかりにつもるとをしれ

寄レ猪戀

奥山の岩ほの中に住みぬとも妹と臥(ふす)猪の名をやたのまむ

寄レ猿稀戀

たまさかに人をみ山のかひなさに戀をましらの音(ね)をのみぞ啼く

寄レ蟲戀

秋の夜は尾花がもとの機織女(はたおりめ)あやに戀しき音(ね)をこそは泣け

寄レ玉戀

いにしへにありてふ玉のみすまるの見ずば心にかゝらましやは

寄レ衣戀

あきつばの名さへゆゝしもをとめごがすゞしのきぬのうすきのみかは

逢ふ事を遠山摺(とほやまずり)の狩衣かくめづらしき妹にも有るかな

つれなさを猶まつはしのうへの衣深(きぬ)くも人を思ひ初めつゝ

寄レ蓑戀

春雨の晴れにし後はかけてだに思はれぬ身の果ぞ悲しき

寄レ鼎變戀

かゝりせば鼎(かなへ)の足のみづはさす世までと人に契りおかじを

寄レ鐘戀

鐘つきてとぢめむとしも契らぬをなど憂き人のいらへだにせぬ

物思ふころひとりごとにといふを題にて

もの思ふもおのが心の外ならずいさ思はじと思ひなりなむ

かくとだに人にはえこそ岩代(いはしろ)の野中の松のむすぼほれつゝ

いかでと思へども色に出でがたき女にといふを題にて

いはずして年へぬる身をあはれとはあらさらむ世に思ひ出でゝよ

女にいきて物いはむといひければきても何事をかといひけるにといふを題にて

老いぬとてすさめぬころの鶯も音(ね)にし立てなば聞かずやはある

よしさらばいらへせずとも荻の葉におとなふ風をあはれとは聞け

久しく來ずとてふすべて出でぬ人にといふを題にて

待つらむと來(こ)しかひぞなきまつら河七瀬(なゝせ)のよどもあれば有る世に

われを知りがほにないひそと有りければといふを題にて

知るといふ枕は言(こと)に出でぬとも吾やはいはむ人の名だてに

我を知りがほに人にいふなといひ侍りける女にといふを題にて

月日へばおのづからにも立たむ名をかごとになして絶えむとかする

忘れぬなめりと見えし人にと
いふを
橋柱ふみかよはねば今はたゞ昔なが
らのこゝろとは見ず
あり所しらせぬ女にといふを
栲縄のくるしかれとやあさりする蜑
の子とのみいらへしつらむ
簾ごしに物がたりし侍るとて
といふを
かりそめにかけし伊豫簾を一重山隔
てゝすめる思ひなりけり
月のもとに女琴ひく男來りて
懸想すといふ事をその女に代
りて
ひとかたにやどり定めてさす月の影
ならばこそ引きもとゞめゝ
しのびたる男雨の降る夜まで
來てぬれたるよし歸りていひ
おこせばといふを題にて
心しる雨にもあるか人とはゞぬれ衣
きつと君こたへてよ
思ふ人を今は見じなといひて
といふを題にて
うつろふを見てこそ鹿の音にはなけ
霧立ちこめよ萩が花妻
うき戀をしかまの市に立たむよりい
なみじとまでおもひ成りにき
人づてにいひやるといふ事を
たゞひとめ梢のもみぢ見るばかり霧
吹き分けよ峯の秋風
思ひあまりしのぶに堪へぬひとことと
を百言にしもなして傳へよ
今は待たじと思ふにとはれた
るといふを
今はとて槇の板戸をさしながら心よ
わさや人に見えけむ
懸想し侍りける人の家の前を
わたるとていひ入れけるとい
ふを題にて
物いはぬ花はしばしとゞめねば鳴
きつゝ鴈の過ぐるなりけり
けさうし侍りける女の更に返
事し侍らざりければといふを
最上河流れてを見む稲舟のいなとも
人のいはぬたのみに
女のもとより文はなくて忘草
の花おこせたるにといふを
今日よりはわが下紐につけつゝも忘
れやするといざこゝろみむ
文かよはしていとひさしく成
りぬれどつれなき人にといふ
を
蘆根はふうきにもこりずいくそたび
鴫の羽がきかきつくしけむ
文やりけるにつれなかりけれ
ばといふを
山彦のこたへぬ山に分け入りてなげ
きこるとも人知るらめや
日にひとたびは文おこせむと
いひける人のとはざりければ

といふを題にて

いづこにかねぐらしめけむ霜の上に
今日のみ鳥の跡をしも見ず

文ちらすと聞きて文かへさむ
と女のいひけるにと云ふを

白雲(しらくも)のかさなる山の岩根ふみかへす
がへすもなげきたれとか

歌によりてまさる戀

人ごゝろ花になりけることの葉もか
つ見るからに思ひこそ添へ

はじめは思はで後に思ふ戀の
こゝろを

今更につらしと人の思ひけむ昔にか
へるこゝろともがな

つらかりしおのが心のはやながらあ
らましかばと思ふわりなさ

門さして入れざる戀といふ事
を

清見潟浪の關守ゆるさねばうらみて
のみや立ちかへらまし

雨降るとてとはぬ人の降らぬ
にも見えねばといふを

いそのかみふるとて人のとはざりし
恨をそふる月の夜半(よは)かな

今宵と契りて人の來ざりけれ
ばといふを

たのめつゝ來ぬ夜をいかでたへぬべ
き待つにならへる身ならざりせば

五月雨(さみだれ)ふるころ人を戀ふ

五月雨に水こす池のなびき藻の人に
知られでよりも逢はなむ

しはすばかり人のもとへ

み雪さへ年さへ深く成りぬるをいつ
まであさき人の心ぞ

あひ見て後(のち)ぞ

玉ゆらにあひ見て後ぞ小篠原(をささはら)朝おく
露の消えかへりぬる

僞りてありかを敎ふる戀

ほとゝぎすたづねぞわぶる山彦のあ
らぬみ谷にこたへせしより

かたこひ

あはれとも誰かは聞かむ吾が戀は片(かた)
山(やま)きゞす音(ね)にたてつとも

うらむ

水草(みくさ)ゐる板井の清水ふるされて涙の
みこそさしぐまれけれ

うらみず

つれもなき人の心をかにかくに恨み
しほどはたのみ有りしを

やちまたにとふやゆふけのしるしな
み恨みじとこそ思ひなりぬれ

ないがしろ

紅のあらそめ衣あさらかに思ひそめ
つゝなど着なれけむ

しらぬ人

わたつ海の千ひろの底は知らねども
見まくぞほしきしづく白玉

いひはじむ

やさしとていはでやみなばいはばし
るたぎつ心をいかゞせくべき

あした
かへりてぞ袖はひぢぬる別れにはし
のぶあまりにもらさざりしを
　あひおもふ
いはねどもこふとはしるや問はねど
も思はれぬとはしるき物ゆゑ
夢のうちもかたみに思ひたゆまねば
逢ふと見る夜や逢ふと見るらむ
問はるゝも問ふもあやなきすさびか
なかたみに思ふ深さ淺さを
　いはでおもふ
言にいでゝいはねの松の二葉より下
に戀ひつゝ神さびにけり
ねぬなはのくるしくもあるか埼玉の
小崎の池のいひも出でねば
いはじたゞ引佐細江のいなといはゞ
身をつくしてしかひやなからむ
いはずして人に心をつくし見むおの
づからにもそれと知るまで
　ひと夜へだてたる
馴れぬればひと夜ばかりのよがれに
も明け行くほどを待ちわびにけり
　ふた夜へだてたる
難波なる蘆のひとよは堪へにしをふ
た夜ながらや逢はじとはする
望にあひて結びしひもを居待月待ち
えてとかむ夜半ぞこの夜半
　三夜へだてたる
逢はずしてけふ三日月の眉引くを妹
が面わに見むよしもがな
　近くてあはず
さゝなみや近つあふみは名のみにて
みるめも刈らぬ浦の蜑人
　人を待たず
岩代やむかし結びし契さへ忘れぬる
身はまつとしもなし
　人づて
あふみの海みるめなければあつらへ
て打出の濱のうち出でなまし
　思ひいづ
忘られず思ふが中に思ひ出づる心や
何のこゝろなるらむ
人もかく思ひはいづや思ひ出でゝな
がむる空に面影ぞたつ
　かくれづま
逢はぬ間は木の葉にうづむ谷水のし
のびにむせぶこもりづまかも
　になきおもひ
かばかりはかどはむ風のつてもがな
及ばぬ峯の花の白雲
　年へて逢へる
見し世にはあらずなれども語らへば
心ぞもとの心なりける
いたづらに絶えやはてなむ昔より思
ひよわらぬ心ならずば
　後撰集の木の葉ちる山の下水
埋れてながれもやらぬ物をこ
そ思へといふ歌の返しの心を
おぼろげの水のながれやいさゝめに
散る木の葉にもよどむなるらむ

同じくあだに見え侍りける男に、こりずまの浦のしら浪立ち出でゝ見るほどもなく歸るばかりぞ　とある歌の返しのこゝろを

須磨の浦の松の嵐のはやければよどみもやらでかへる波かな

同じく、今はてふ心つくばの山見れば梢よりこそ色かはりけれ　といふ歌の返しの心を

筑波嶺のしづくてふ名は涙にてかはるは袖の色にさりける

後拾遺集の、しのびつゝやみなむよりはおもふ事ありけるとだに人に知らせむ　といふ歌のかへしの心を

山の井のやまむよりはと聞くからに淺き心を汲みてこそ知れ

宇計良我波奈巻六

雑歌

嶺上雲深

立ちのぼる雲より奥に音するは箱根の海の岸のしら浪

朝雲出㆓馬鞍

旅人の朝行く駒のひづめより雲たちのぼる足柄の山

田家煙

筑波嶺(つくばね)の茂き恵はしるきかなすそわの田ゐに立つけぶりにも

民戸烟

おし照るや難波高津(たかつ)の昔より絶ゆる世もなき民のけぶりか

山家烟

折々は柴といふものゝ煙だにあはれとは見よ都かた人

海邊烟幽

葦荻のしげみに立てる烟にぞ蜑(あま)の苫(とま)屋(や)の數は見えける

夕陽映㆑島

夕づく日浪ににほひて紅のゆはたに見ゆる笠縫(かさぬひ)の島

閑曉

鳥が音(ね)はふもとの雲にひゞきつゝ軒端に落つる有明の月

山ぶしの曉おきの聲さへも雲のよそなる谷陰のいほ

幽夕

大路(おほぢ)行く人のおとなひ絶えはてゝ軒(のき)端(ば)にかへる家鳩のこゑ

山

足柄の神の御坂(みさか)を越えてしもなほ富士のねは雲ゐなりけり

山家

山ざとのおのづからなる花に馴れ紅葉にあきて吾が世へなまし

山家積㆑年

うつぼ木に年へし世さへおもほえて
嶺のましらぞなれてとひける
我山の峯の落椎生ひ出でゝ陰たのむ
べくなりにけるかな

山畑

をちかたの畑やく煙打ちかすみ春お
もほゆる深山べの里

曉關路

家に在りて聞きしに似たるとりの音
にいく曉の關路こゆらむ

道

靫かくる八十伴の雄の行きならしつ
かへならさむ大路なるかも

瀧のほとりに人來て見る

水上は雲ゐる山の雫にて岩が根ゆす
る瀧つ白波
み吉野の瀧の白絲くり返し猶しのば
るゝとつ宮どころ
音にのみ聞きわたりにし山姫のさら
せる布をきて見つるかな

井

藤原のみ井の眞清水たづねても昔を
汲みて知るよしもがな

名所湖

雲のゐる嶺の雫のいくよ經て箱根の
海はたゝへたるらむ

海路

昨日まで雲井に見えし山の端も浪路
にきゆる舟の道かな

海のほとりに風吹き浪立つ

風をいたみ沖つ島山かつかくれかつ
あらはれて浪立てる見ゆ

荒磯に浪のよるのを見て

わたつみはあやしき物か荒磯に花と
雪とをとはに見せつゝ

干潟に貝拾ふ

あやはとり舟漕ぎよせし住のえの錦
貝をや我はひろはむ

嵐山

花に恨み紅葉にいとふ名はおへど猶
なつかしき嵐山かな

贈答の會にしがの山越にて人
にあひてといふことを

思ふ事なるとやいはむ瓜生坂こえて
戀しき人にあひけり

入間

梓弓末ふりおこしさつ人の入間わた
りにを鹿鳴くなり

ふるき東歌にならひて武藏國
の歌を

武藏なる都筑の原の八十つゞき仕へ
まつらむますらをの伴
東なる國榮えけり橘樹の郷のたちば
ないや常葉にて

妙意尼が小松川の宿りにて刀
禰歸帆といふ事をよませける

夕汐も今やさすらむ百舟のほのかに
歸る刀禰の川づら

ふるさと

かざし折る人もあらじをさゝなみや

志賀の古郷花さきにけり
咲く花のさかえし代より千年へてに
ほひ殘れる奈良の古郷
いにしへの藤原が上里ふりて三井の
眞清水汲む人もなし
　妙法院一品の宮の宮所の廿四
景の題賜はりて歌奉れとおほ
せ事有りければよみて奉りけ
る
十二景
　陀峯彩霞
おしなべて世を照しますみ佛の名に
負ふ峯や先づかすむらむ
　平林春花
立ちつゞくしげみの櫻咲きしより花
ならぬ木も花の香ぞする
　青田亂蛙
春深み綠にかすむ苗代の小田のをち
こち蛙なくなり
　西山夏雲
愛宕山雲のあはたつそなたより村雨
そゝぐ夕べすゞしも
　喬松啼鵑
木高かる御園の松をしをりにてかれ
すも問ふか山ほとゝぎす
　茅檐明月
いにしへの手ぶりおぼゆる茅が軒神
代ながらの月や澄むらむ
　曲塢秋草
御園生に小田の畦道うつしては千種
の花も所えて咲く
　虹橋丹楓
染めわたす岸のもみぢの散る頃はみ
池のみ橋虹をなしけり
　曉園積雪
見渡せばみ園の雪に明けそめて四方
の村山ましろなりけり
　翠池浮鴨
水清きみ池に馴るゝあし鴨はうき事
しらで世を渡るらむ
　蕭寺清鐘
なべて世の現の夢もさますらむ夕べ
の寺の鐘のひゞきに
　竹窓夜雨
宵の雨の笹の葉つたふ雫をもよむば
かりなる窓のうちかな
自適菴六勝
　菜花經鳥雉
春されば咲くやすゞなの陰さらずす
ずろに音をも鳴くきゞすかな
　稗苗田流螢
早稻苗のほに出でぬほどの夕露やあ
はれ螢の命なるらむ
　露萩籬吟蟲
秋萩の花のしづくのしげければま垣
にすだく蟲のこゑ〲
　枯草原晨霜
入りて猶草の枯生に影のこる月かと
ばかり見ゆる朝霜
　風松溪樵歌

なげきこる業とはいはじ松風の聲に
きそひてうたふ柴人

淪茶亭閑話

栂の尾の源きよき眞清水のあかぬま
とゐは樂しかりけり

生白樓六勝

花林朧月

咲きつゞく花のにほひにつゝまれて
影さへかをる春の夜の月

竹岡涼月

風わたる岡邊の竹のふし待の月さし
出づるほどぞ涼しき

孤松皎月

ひとつ松あはれとてこそ幾千秋月も
さやけき影とゞむらめ

雪峯寒月

打ちむかふ高嶺の雪をよもすがらみ
がきそへたる有明の月

樹抄佛閣

千年へし松の緑に大寺の瓦の苔のい
ろぞあらそふ

鳳闕瑞雲

久かたの天の御蔭のみあらかにたな
びく雲も世に似ざりけり

同じ宮の橫翠園十景の內君子
樹といへる事をよめとおほせ
ごとありて短冊を賜へりけれ
ば（此君子樹といへるは、御園のうちのいほりにて、賞二君子之花一、爭二君子之藝一、名レ樹以二君子一云と書ける御額ありとぞ）

よき人のこゝろ高さにたぐへ見む稍
の花も月の光も

鎌倉鶴が岡莊嚴院の奥の猿踞
峯の上に昇仙臺とてあづまや
有り、伊豆相模の海山目の前
に見えわたる、其の屋の額に
歌よみて書きてよと莊嚴院僧
都の請ふによりてよめる

東路の遠つ海山こゝもとに八十綱は
へて引きやよせけむ

高野山なる鳳存阿闍梨が其の
山にをさむるとて歌こひけれ
ば

水莖の跡の名さへも高野山入りにし
人ぞしのばれにける

富士の山かける繪に

大かたの山てふ山の君としもあふぐ
み山や富士の芝山

富士の麓にあなる白絲の瀧を
繪がきて歌書きてよと人のこ
ひければ

富士のねの霞のきぬの五百機を誰か
織るらむ白絲の瀧

屛風の繪に越の白山のかたか
けるを

白山を越路のをちに問はでしもとは
に消えせぬ雪を見るかな

住吉の繪に

千とせ經し岸の松原二葉より見そな
はしけむ住の江の神

宇治河に柴流すかたかける繪

に歌書きてよと雪岡大德に乞
はれて
宇治河を下すま柴のしばらくも淀瀨
なきをば見ずや世の人
　蘆多かる方に釣人あるかた
絲たれていを待つほどは津の國のな
にはのことも思はざるらむ
　竹に山鳩かけるかた
色かへぬ千ひろの竹にふしなれて同
じみどりの山ばとの聲
　岩ねに小松生ひたり龜あそぶ
所
岩がねに根ざす小松の生ひ先はよろ
づ代ふべき龜ぞ知るらむ
　京の小澤蘆庵がもとへ千里を
隔て侍れどこゝらの年月まの
あたり語らひかはし侍る心地
せらるゝまゝに、うちつけな
るものから立ちかへる春のほ
ぎごときこえ侍る、
君もあれも百世をへつゝ花鳥にあく
やあかずやいざ試みむ
　　ものみなはとか
　妙法院宮のおほせにてよめる
繪の歌のうち七首墨がきの梅
を
見ればかつかをるばかりにおもほえ
て散る恨なき梅の花かも
　竹のもとに鶴たてり
くれ竹の千よにわがよをとりそへて
君にゆづるの聲ものどけし
　巣父の牛牽けるかた
上つ瀨をいざとめゆかむ世の塵に濁
れる水はかはまくもうし
　松かさといふものかけるに
おのづから落ちし木の實のおひのぼ
り雲かゝる世を待つぞ久しき
　竹深留ㇾ客處といふ詩の心を
くれ竹の夕陰もよしすなほなる代の
ふるごとも語りあかさむ
　もみぢ散りたる所鹿の跡見ゆ
妻ごひに立ちならしけむ小男鹿の跡
見るさへもあはれなりけり
　宮の書かせ給へる富士の繪に
神代より高く貴きこの山をうつす
御筆のすさびにぞ見る
　萬葉集にあなる憶良太夫が松
浦の玉島川の鮎つるをとめに
　言問ひけるさまかける繪に
松浦なる玉島川に住むあゆののぼり
ける世のみやび思ほゆ
　基泉法師の繪に
曉の雲にあへりし有明の月の行くへ
を猶しのぶかな
　道風朝臣のかたに
かしこきや南の殿に七かへりふみで
の跡をとめし人はも
　空穗の俊蔭が孔雀にのりて川
　渡るところに
花園のたへなる琴のしらべには天つ

をとめも心ひかれつ
もろこしの莊周が眠れるかた
かきたる繪に
咲く花の香をなつかしみぬるまさへ
野べの胡蝶に身をやかへけむ
梅園院にて長瀨眞幸が肥後へ
かへるうまのはなけむすとて
古今集別の歌の句をおの〳〵
さぐりて、こひしきものをと
いふを
相見ねばこひしきものを濱千鳥跡に
のみやはしのびあへまし
二月ばかり京へ行く人をお
くる
嵐山たかねのさくら折りかざしかへ
れわがせこ花散らぬまに
越の君のくすし安田征盛さ月
はじめ伊香保の出で湯へ行く
を送るとて
うつせ身の人を助くる人をこそ伊香
保の山の神も守らめ
日をさふる繁みが奥の伊香保風涼し
かるべき旅寝をぞ思ふ
上毛や伊香保のみ湯のわく子なす若
がへりつゝ歸りませ君
越後のやすしが古鄕へ歸るを
おくる
神のますいや彥の山いや千度行き返
りてもあはむ君かも
中津の君豐國へ旅立ち給ふ時
によみてまゐらす
豐國の企玖の濱松吹く風も君待ちつ
けて千代呼ばふらし
梅の宮の神司橘經亮が京へ歸
るを送る
あすよりは千里のよそにかぐはしき
名をのみきかむ梅の宮人
そのかみは常世の種といふめれば下
枝をだにもうるはしみせに
黑川盛隆がみちのく南部へ歸
るを送る
君がよも吾がよも共に常磐にてあひ
見む時をまつが浦島
やよひばかり賚明が豐後國へ
かへるを送るとて春海の家に
つどひて人々歌よみける時
別れては野山の霞へだつとも言だに
つてよ速水濱風
同じ時に後撰集の句題たつ日
をよそに
鴈がねも共にかへるか君が今朝おも
ひ立つ日をよそに見ずして
やよひばかり南禪寺の僧巨海
が京へ歸るを送る
都べは春の錦と聞くからにたち歸る
をばいかでとゞめむ
七月二十八日濱臣が熱海へゆ
あみに行くを送る
いかばかり心行くらむ伊豆の海や浪
にうつろふ月の夜頃は

いつはあれど伊豆の磯間(いそま)に出づる湯
のわきてをかしき旅寢ならまし
伊豆の海や沖にむかへる走湯(はしりゆ)のはや
歸りませつゝみなくして

きさらぎばかり京の小野勝義
が歸るに遠山摺(とほやまずり)の形すりたる
紙をおくるとて

都路は遠山ずりの旅衣かさねてをゆ
け冴えかへるころ

物へまかりける人に扇やると
て

別れ路に身をこそわけぬ心あひの風
を千里(ちさと)にたぐへてぞやる

西尾安道の古郷阿波の國へ歸
るに筆船にそへてつかはす

古郷は神の御面(みおも)と聞くからに鳴戸(なると)の
沖もうしろ安しや

鶴のかたにぬさいるゝものを
して

天(あま)とぶやつるの郡に行く人はよを長
ちはの神もまもらむ

ちえ子が子の律師の都へ登り
たるころ、ちえ子がもとにて
卯月ばかり都へ行きたる人を
思ひてといふを題にて

君がいにし都をわれも忍び音の山ほ
とゝぎすつばさかさなむ

贈答會に田舍へ行く女にさう
ぞくやるとてといふを題にて

夢にだにおくれじものをから衣旅寢
の床にうちかへしてよ

羇中懷レ都

しばしだに都のかたを思はずばかは
る野山や心ゆかまし

殘月越レ關

逢坂(あふさか)や清水(しみづ)にうつる有明の月を見す
てゝ過ぐるたび人

芝

數ならぬ庭の芝生のうへにだに春と
秋との色は見えけり

武藏野の紫草を得て人にやる
とて

武藏野の千ぐさの秋のあはれさを此
のひともとにこめてけるかな

濱ゆふ

かぎりなき南の海の五百重(いほへ)浪(なみ)幾重よ
すらむ浦の濱ゆふ

岩苔

川上のゆつ岩むらの苔むしろむかし
を今もしきしのぶかな

苔爲二石衣一

位山(くらゐやま)峯のいはほの苔ごろも綠ながら
に年へしやなぞ

松にかゝれる苔を見る

山松の幾代をへてか神わざにかくる
日蔭のかつら生ひけむ

竹

鶯のねぐらながらの聲をしも聞くべ
かりける宿の竹むら

窓前竹

すなほなる心の友か上つ代の書(ふみ)巻き
かへす窓のくれ竹

砌下裁レ竹

嬉しさの一ふしごとに今よりは色そ
はるべき園のくれ竹

松

あはれてふ御言(みこと)を松にとゞめしや異(こと)
木(き)にまさるためしなるらむ

岡松

秋更けてしぐれ降るなる舟岡(ふなをか)も松は
こがるゝ色なかりけり

社頭松

神のます北野の森の一夜松一夜に春
の色やそふらむ

松年久

辛崎の一木の松に高人(うまびと)の舟待ちつけ
し昔とはゞや

松歴レ年

松島や松のむらだち岩がねにねざし
そめしは神の御世かも

嶺松年久

さゝれ石のむかしよりこそ契りけめ
嶺のいはほに立てる松が枝

松契二多年一

契り置きてふた葉よりしも天雲の梢
にかゝる代をや待つらむ

いのち長き人の前に松竹有る
家といふことを

住む人の千世のどちとやいつの世に
松と竹とをおほし立てけむ
昔うゑし松と竹との陰見ればわが世
も高くなりにけらしも

桐

聲知らむたがつま琴となりなましみ
山の奥の桐のひともと

水郷鳥

おしてるや堀江の水に住む鳥のなに
は都の跡ぞのこれる
高島のあと河浪のおともせで寄する
は鷺のあさるなりけり

暮林鳥宿

河上の一むら林暮れがてに見ゆるは
鷺のねぐらなりけり

鶴立レ洲

君が代にいく世へぬらむうな上(がみ)や沖
つ洲崎に立てるあし鶴(たづ)

浦鶴鳴レ月

眞(ま)なご路(ぢ)を月にみがける玉の浦やは
なれ小鳥にたづ鳴きわたる

名所鶴

よる浪に八千年(やちとせ)馴れてあしわかのう
ら安げにも見ゆるたづかな

雨中鷺

かきくらし雨もふる江の夕ぐれにみ
の毛ぬれつゝ鷺たてる見ゆ

曉更鶏

またるべき物とも知らず庭つ鳥かけ
てうらみし昔をぞ思ふ

わし

沖つ浪千(ち)たびくだくる岩角におりゐ

ろ鶯の聲もすさまじ
う
風荒く夕浪よするはなれ磯にあなう
とおのが名にやわぶらむ
をし鳥を籠に入れておこせけ
るに
中々に八重垣こもる心地にてならべ
る鶯ぞ羨まれける
猪
千よろづの仇にむかひて走り猪のか
へり見せぬを心ともがな
龍
かくるれば硯の水を住みかにて雲井
をわたる龍ぞあやしき
藥
いく藥富士の煙にたぐへずは其の代
の人に今もあはましを
言の葉
葦かびのもえし神代の古ごとも言の
葉にこそ迹に傳へけれ

ふみ
かくぞとも人はしらゝの濱千鳥跡見
るごとに袖ぞぬれける
大木曾や木曾のかけはしふみ見ずば
かしこかる世の事を知らめや
ふみ見ればたのしかりけり石上ふり
にし世々の友をあまたに
鏡
たをやめの櫛笥の鏡心さへうつらば
いかにやさしからまし
弓
ふりにけるてぶりうたはむ梓弓本つ
御世にも引きかへしつゝ
冠
淨見原ひじりの御代のみことのりい
たゞきまつるかうぶりぞこれ
ぬの
神わざの麻ぬの衣神の世のてぶりお
ぼゆるよそひなりけり
南部の盛隆がみちのくの鹿角
郷といへる所より出せる紫に
て染めたる布をおこせて、武
藏野の若紫にめなれては色も
あはれもふかゝらずこそ　と
いひおこせければ
むらさきのねもごろ君がおもひこそ
心の色の深さをぞ知る
名取川の埋木もてつくれる櫛
に歌書きてよと乞はれて
宮人のよゝの詞に名とり河名はあら
はれし底のうもれ木
琴をかりて返すとてと云ふを
題にて
玉琴よひきはなるとも明日よりは下
樋にかよふ風となりなむ
倭琴
大八洲國の名おへる琴にこそ神代の
まゝの音は残りけれ
いかり
大船をとむるいかりのつな手縄こゝ

ろ強くも見ゆる君かな
　はかり
おふけなく心にかけてしのぶかなは
かり知られぬ千代のふるごと
　笭箐
紫の根ばふよこ野のはつ若菜かたみ
につむもゆかりならずや
　人のもとむるによりて硯のふ
　たに
おのづから靜けきものゝ世々をへて
盡きぬ例を見る石ぞこれ
　やむごとなきわたりのよろこ
　びごとに文車まゐらするにそ
　ふる歌
めぐりくる千代の春秋言の葉をなほ
積みそへむ文車ぞこれ
　阿武隈河の埋木して文臺作り
　てそれに歌書きてよと杉田氏
　がこへるに
言の葉の花咲き出でつかゝる代にあ
ふくま河の底のうもれ木
　人の乞ふまゝに書きてあたへ
　けるものを、いとよくよそひ
　なしてそれが箱のふたに歌書
　きてよといへりければ
上つ瀬をとめつゝ見れど水ぐきの底
ひをえやは汲みてしるべき
　閑居
里人のとふもかならずいとはねど葎
ぞ門をとぢはてにける
一すぢのかけひの水とわれのみぞ此
の山陰にすみはてぬべき
　眺望
葛飾の國府より見れば一むらの布ひ
きはへし刀禰河の水
あはとみる安房の海吹く汐風にうか
ぶ木の葉やあまのつり舟
伊勢じまや汐干のなごり見渡せばた
ふしの崎に玉藻刈るなり
橋立や松風遠く音づれて與謝のあま
人袖かへる見ゆ
　湖水眺望
布施の海や小舟よせけむ宮人の面か
げうかぶ垂姫の崎
　述懐
いたづらに身は老いぬともかくばか
りうき事もなき世をばうらみじ
しづけかる時にあひつゝ花にあき月
にあくがれ我が世つくさむ
水沫なすはかなきが世に多かるをう
れしくも身は老いにけるかな
名をさへに草の原にはくたさじのあ
らまし事もおふけなの身や
花やうき月やわびしき月花のあらむ
限りは世をばかこたじ
天の下しづけかる世にあへる身はさ
らにみ山の奥ももとめじ
　寄レ月述懐
月をのみなど惜むらむいたづらにわ
がよ更け行く身をば思はで

寄レ花述懐

谷陰の老木のさくら風だにも知らで
中々のどけかりけり

むかしをこふ

いたづらに過ぐる月日はをしからで
昔の遠くなるがわびしさ

敷妙のふりし枕にとありけむかくあ
りけむといふがはかなさ

人の三年の忌に春懐舊

天がけるたまの行くへをしたひわび
あがる雲雀のねをや鳴くらむ

牧村刀自が越前の國にてみま
かりて三年に成りけるに春懐
舊を

雁がねのこしぢへ歸る聲きけばこと
づてやりし人ぞ戀しき

人の一めぐりに夏懐舊

見し人は面影もなしめぐり來てけふ
にあふちの花は咲けども

高辻少納言殿の百年の忌に夏
懐舊といふ事を

今も猶花たちばなや思ふらむ昔ふれ
にし君がみ袖を

人の廿三年の忌に秋懐舊

昔おもふ眞袖の露にいくめぐり秋の
なかばの月はとふらむ

季鷹縣主の遠つ祖山本永久縣
主代々賀茂の大神のみやつこ
なるが百年の忌に秋の懐舊と
いふ事を

百年のむかしおぼえて神山のやまも
とてらす月ぞくまなき

人のめのみまかりて七年に成
りぬるに寄レ藤懐舊といふ事
を

今も猶花こそにほへ藤浪の色にかよ
ひし人はなき世に

父君のおもひにこもり侍りけ
るに、こぞのこのごろなむ荷
田御風がみまかりぬる事をお
もひて、御風が叔母なるたみ
子へよみておくりける

こぞをしのび今年の秋をなげきつゝ
ぬるゝが上にぬるゝ袖かな

人の一めぐりに寄レ風懐舊

桐の葉のひと葉散りにし夕べより秋
てふ秋の風ぞ身にしむ

寄二時雨一懐舊

村しぐれいくたび袖にかよふらむそ
ら定めなき世を思ふ頃

八月なかば諸鳥がみまかりけ
れば

ひとりのみ鳴きやわたらむ秋霧に友
まどはせる天つ雁がね

同じ人の三年の忌に寄書懐舊

ふみ見ても袖ぞぬれけるふりし世に
心をよせし友をしのべば

人の子のみまかりけるに秋無
常を

立ちまよふ峯の浮雲野べの露さだめ

なき世の秋を知れとか
錦なす花野はあせて花と見し露も消
え行く秋のくれかな
岩倉入道殿のみむすめ勝子越
の君のみたちにありてみまか
られしに寄レ露無常といふ事
を
かぎりなき名は空しくて武蔵野の露
やあだなるたぐひなるらむ
知直が母のみまかりける頃春
無常といふ事を
來む秋と契りもおかで別れ行く雁は
この世のならひなるらむ
人の七年の忌に秋無常
夕ぐれの雲のはたてをながむればか
りは七たび音づれにけり
東下野守常縁ぬしの三百年の
忌に寄レ道釋敎といふ事を人
のよませけるに
雲のはの薫りを道のしをりにて御法
の花を今や見るらむ
たみ子が十三回に花のもとに
昔をしのぶといふ事を縫子が
よませけるに
春ごとにしのぶもあやな朽ちぬ名は
あだなる花のたぐひならめや
去にし年花散りしよりさくら木のも
との心を知る人ぞなき
仙臺中納言政宗卿百五十年の
忌に盧橘懷レ昔といふ事をよ
ませられける
いにしへを問ふもかしこしその香さ
へ世々に殘れる軒のたちばな
知春尼が身まかりしに菊にそ
へて手向けける
思ひきや折る白菊の末の露かけても
君に手向せむとは
知春尼が一めぐりにこその秋
を忍びてといふ事を
さめなばと思ひしこその夢よりもう
つゝの秋ぞ更に露けき
荷田御風が七年の忌に月に對
ひて昔を思ふといふ心を
月見れば涙ぐましも天がけり去にけ
む秋はこゝらへぬるを
父君うせ給ひて十あまり三年
に成りぬる、八月の十三日人
人をつどへて、月の前に昔を
しのぶといふを題にて歌よみ
て手向け奉るによめる
面影をあふぎてしのび古ごとをふし
ては思ふ袖の月かな
荷田在滿が五十年の忌に月催ニ
舊情一といふ事を
秋の夜の月を見つゝも其の名のみさ
やかに殘る人をしぞ思ふ
父君の十七年の忌に八月十三
日人々をつどへて月似レ古と
いふ事を
昔おもふ袖にとひくる秋の夜の月は

その世の月にぞ有りける
　同じ時眺望を
漕ぐ舟の雲井に消ゆる沖見れば見し
世もかくとあはれなりけり
　同じ時おくつきに詣でゝ
在りし世の惠みの露を思ふには朽ち
てもあかぬ袖の上かな
　人の七年の忌に暮天鴈を
ゆふぐれの霧のまよひにいにし人歸
らぬ空に雁は來にけり
　中村一鄰が遠つ祖の百五十年
　の忌に山雪を
ちゝのみの秩父の山の嶺の雪かくて
幾とせ積みか添ふらむ
　人の遠つ親の百年の忌に池水
　久澄
百年の今日よりをちの千々の世もか
くてすむべき庭の池水
　姉君桂芳尼睦月二十四日みま
　かり給ひてけぶりとなしつる
　からをさめ奉るとて
かたみともせめて思はむ煙だに消え
にしからを見るぞ悲しき
　靜子は（もとみへ子といへるなり）いわけなかり
しより難波津も何もをしへも
のしつるに、歌も文もいとよ
う作り出でゝことに常の心お
きて人にまさりて、おのれを
父としたしみつるがやよひ十
日ばかりに病みて、十二日と
いふ曉にむなしくなりぬるよ
し靜子がつかへまつる植村の
君の北の方より告げおこせた
まひ、あはれなるうたなど見
せたまへりければなみだせき
あへずなむ
おのが身の老い行くことをなげきて
し人ぞ中々はかなかりける
ちゝのみの父としたはれわが子ぞと
思ひし事の今はくやしき
身こそ先づもとの雫と思ひしか葉末
の露のなにのこるらむ
あはれわがあらざらむ世に歎くべき
人を歎かむものとやは見し
なく子なす慕ひし人のいかなればわ
がなき跡をとはむともせぬ
　縫子が夫の十七年の忌によみ
　ておくる
あまた年もとの雫を歎き來ぬ誰も葉
末の露の身にして
　縫子がにはかにみまかりぬと
　聞きて
うつゝある物とはかねてたのまねど
夢の中なる夢ぞはかなき
　むこ三村親雄がはつ子五月廿
　日あまり一日あつしく病みて
　みまかりける七日にあたれる
　日に手向けける
忘れては猶ありとのみ思はれてなき
をなげかぬ時も有りけり

六月ばかりみまかりける人に
なでしこを手向くるとて
かくばかり消えなむとてやなでしこ
の露をあはれと思ひおきけむ
嘯月がにはかに病みて六月の
十七日にみまかりければ
語らひし昨日やうつゝ今日や夢おも
ひさだめぬ世にも有るかな
七月ばかり自寛のよめのみま
かりけるに槿に付けて
立ちならぶ松にはあえで何に此の夕
かげ待たぬ花にならひし
人の子の七月四日の日にはか
に病みてみまかりければ
はかなさを思ひ知ればや秋立ちて露
置きそめぬ草の葉もなき
八月の末土佐の國しらせる君
かの國にしてみまかり給ひつ
るに、御いらつこの御かたへ
よみてまゐらせける
海原や雲井のをちに影消えてふた度
すまぬ月をしぞ思ふ
香取のみくにが妻長月の末み
まかりけると聞きて、みくに
がもとへよみて遣しける
今よりのしぐれよ霜よいかばかりつ
まなき床にさえまさるらむ
本居宣長長月のなかばより病
みて廿日あまり九日になむみ
まかりぬると聞きて、かたみ
に年高くなりぬるものから今
更のやうに驚かれて
伊勢の海や二見の浦の二つなき玉に
たぐへし人をしぞ思ふ
わくらはに同じ世にしも立ちへつゝ
あひも見ざりし事のくやしさ
古ごとの道明らめしいさをこそ萬代
までのかたみなりけれ
宣長もおのれも遠つ祖は伊勢
の國北畠の家より出でゝ、か
つ學の事も縣居の大人に共に
ことゝひたりしを思へば、大
方ならず思ひなげかれて
枯れやらで殘るさ枝ぞたづきなき同
じ根ざしをかつ思ふにも
十一月ばかり倉持宗壽がみま
かりて七日によみてその家へ
おくりける
百世とも思ひし松の雪消えてしづく
にぬるゝ人ぞおほかる
從純が父にはかに病みてしは
すの七日にみまかりければ從
純がもとへ
老人のためにをしみし年浪を今はか
ひなく袖にかくらむ
片山誠之がみまかりければ
いかなればかた山椿八千世もと思ひ
し人のはかなかるらむ
はやく相知れりける人の身ま
かりけるころ世のはかなきを

おもひて
誰も世は日影待つまの夜の霜残ると
見るも消えずやはある
同じ瀬によらざらめやは流るゝも淀
むも水のうたかたぞかし
　牧村刀自がおのれへつとにと
て、かねてこしの國紙をおこ
せおきたりとて、かの刀自が
みまかりてのち同じみ御館な
る人よりおこせければ、其の
紙に書いつく
かへる山歸らぬ旅の手向草かきつめ
よとは思はざりけむ
　みつるの弟清照の三十ぢあま
りにてみまかりて荼毘のとこ
ろにて、世の外のけぶりとな
りて目に見えぬ花のうてなに
立ちやのぼれる　とよみしと
みつるがいひおこせければ
立ちのぼる煙の末は跡なくておもひ
をのみや世にとゞむらむ
　其母刀自が、三十あまり過ぎ
こし年をはかなくも軒端に消
ゆる霜と見すらむ　とよみし
があはれなれば
老いにける松を千代もと思ひ置きて
朝の霜と消えし人はも
　圓位大徳の忌日に雨岡の家に
つどひて
さくら咲く青根が嶺の苔むしろかぐ
はしき名をしき忍ぶかな
　雪岡大徳の師京南禪寺に住め
るがこぞの霜月身まかりぬと
聞きて、二月ばかり雪岡のも
とへよみて遣はす
世の中に心とゞめぬ法の師もおもひ
おきけむ君がゆく末
　豊國岡の君一めぐりの御忌日
に壽量品の惠光照無量のこゝ
ろを
とこしへに空行く月はくまなきを雲
隠れぬと思ひけるかな
　姉君こぞの正月末うせ給ひつ
るがはや一めぐりになりけれ
ば
春がすみ立つを見つゝも去年の今日
消えし煙のしのばるゝかな
　貞樹がみまかりし又の年の五
月在りし世を思ひいでゝ
たちばなに昔しのびし人もはた今年
は人にしのばれにけり
　人のめの、う月ばかりみまか
りけるが三年になりけるう月
になむつかはしける
立ちぬるゝ袖やいかなるあづまやの
軒のつまなし瑞枝さすころ
　人の父の七めぐりに
手向する涙の露も置きそふや過ぎこ
し秋も七くさの花
　姫路の侍從殿うせ給ひしは七

年さきの七月十四日になむ有りける、その日にあたりてその御妹戸澤家の大刀自君へ御手向の料にとてたきものを結び机にのせて歌そへてまゐらせける

いつしかも過ぎにし秋は七くさの花の香のみぞ世に殘りける

七とせの今日よりしもや印南野の千草の露は置きまさりけむ

世の中はしかぞ常なき飾磨河みなわにやどる秋の夜の月

母君うせ給ひて十三年になりけるやよひ十七日に

春ごとにかへらぬ春をしのびつゝ十まり三つの春はすぎけり

たらちねの母のかたみと思ひこしおのが身さへも老いにけるかな

明阿彌陀佛の十三年の忌にその男萩原氏へよみておくりける

おくるゝもしばしばかりと思ひしにこゝらの年をふりにけるかな

いはひ

筑波嶺のしづくの田ゐを返すぐしげき御蔭をあふぐ諸人

祝言

大御世はしづけかりけり丈夫が手にまく鞆の音も絶えつゝ

社頭祝

葉がへせぬ柏の社に幣まつり常磐に君が代を祈るかな

安濃の津知り給へる君の染井の庄の八幡の大神に八月十五日十五首の歌奉らるゝに、おれも社頭祝といふ事をよめとありければ

君が代は千代も絶えめや岩清水いはひまつれる神のまに〳〵

寄レ日祝

天の原よざしまつれる日の御神照さむかぎり國は動かじ

寄レ都祝

古への野中古道よろづ代に榮えむとてぞあらたまりける

寄レ杉祝

すなほなるてぶりを見せて神代より立ち榮えたる布留の杉村

寄レ龜祝

松が枝の影さへうつる池水のみどりの龜に代をくらべなむ

寄レ道祝

小車のかよふ大路の末とほくいや平らけき御代にもあるかな

人の時うしなへりしが四月のはじめにつかさすゝみけるをほぎて

春霞はれ行く峯に松が枝の千年の色はあらはれにけり

人の五十の賀に

しらま弓いそべに立てる岩がねに寄るなる浪や人の代のかず

比叡の大僧都崇純の六十の賀に

千代も猶ときはなるべし大比叡や横川の杉と君がよはひは

伊勢の國人七十の賀に

伊勢の海や寄する白玉ひろふともよむともつきぬ人のよはひか

今年六十ぢになりにければほぎ事せむと五百子直蔭らのいふに、かく數にもあらぬ身に賀などいはむもおふけなくおぼゆるものから、昔より人の子のすめるわざにておのれもはた父君を九十ぢのよはひまでいさゝか祝ひまゐらせつるなれば、それにしもあえなむとていふまゝにものし侍れば、したしき友かきよりやむごとなきわたりまで、春の祝といふを題にてほぎ歌たうびぬるはまことに生けるかひありていと嬉しくなむ、さてよみける

ながらへていざ試みむ花鳥の色にも音にもあく世ありやと

皆人のいはふよごとに言靈のたすけまさなむことはしるしも

都に住める雪岡大德の師の七十の賀に霞をよめる

春さればかすみ流るゝ大井川君こそくまめ千々といふ世も

岩村の君の御母君の七十の賀に檜破子を洲濱のさまにして、桃の花のもとに水流るゝかた作りて、それに添へける

桃咲くや水上とめて住む人の千代のよはひも君にとてこそ

人の八十の賀に春祝

子日する野べの小松の千年へて雲かかる世も君こそは見め

越前の高野納が父の八十の賀に春祝を

やしほ路の浪路かすめる氣比の海のいや遙かなる君がよはひか

人の七十賀に夏祝

としごとにぬくやさ月の玉の緒に長きよはひをかけて契らむ

人の八十の賀に秋祝を

八束穗の足穗の稻置ことしよりなほやちとせを積まむとぞ思ふ

人の七十賀秋祝言

五百しろの秋の足穗のいなかつらかけて千年もたのもしきかな

人の六十賀の屛風に十月池に氷あるかた

この宿の池の氷のひもかゞみ千年をかねてむすびそむらむ

幸子が母の六十の賀に竹に雪

の降つたるといふ事を
呉竹の千ひろのうへに降る雪の高き
よはひをつまむ君かな
人の六十の賀に寄レ松祝を
雲か丶るをのへの松の梢より高きよ
はひを經なむ君かも
子日する野邊の小松のうれごとに日
かげのかつら千代かけて見む
豐後の人の六十の賀寄レ松祝
を
八千代まで神ぞ守らむねぎかくる木
綿山松の常磐かきはに
人の六十賀に松有二歡聲一
こととはに千代をとなふる聲すなり
こや仙人の軒の松風
人の七十賀に松有二歡聲一
かぎりなきよはひをもたる松が枝は
風の音にも千代ぞこもれる
松代の君の六十賀に檜松有二
嘉色一といふ事を
千世までのよはひに富める色なれや
みつばよつばの軒の松が枝
苅屋の致仕の君の五十の賀に
飛鳥井家の出題とて、松によ
せて老をいはふといふ事を
春ごとに色そふ松と君が代はいく千
年をか老といはまし
又同じ時に寄レ竹祝を
千尋ある竹の林の陰しめて限りなき
世をへなむ君かも
自寛の七十の賀に、松の作り
枝に盃を松がさねの紙して包
みて日かげと思はせて、みど
りの絲もてゆひつけて絲のは
しを枝にうちかけたり、其の
包める紙に書いつけける歌
松が枝の日陰のかづら繰りかへしい
く春汲まん今日のさかづき
人の八十の賀に椿壽八千春を
うき事も白玉椿八千代まで榮えむ宿
の末ぞはるけき
龜契二萬年一
仙人の住むやよもぎが島山を負ふて
ふ龜に世をくらべなむ
人の親の七十の賀に寄レ竹祝
といふことを
榮えよやみぎりの竹のふして思ひお
きては千代と祝ふ子の爲
伊勢の荒木田久老神主が五十
の賀に竹不レ改レ色といふ事を
色かへぬ竹のみやこに千代かけて千
ひろの陰をしめむ君かも
日向守利和君の御母刀自の四
十賀寄レ鶴祝を
今年より君がへむ世の行く末はむれ
ゐるたづや空に知るらむ
甲斐守景衞君の七十の賀に鶴
千年友といふ事を
名にし負ふ都留の郡に住む鶴も君に
馴れつ丶千代を經なまし

人の七十の賀に心靜延レ壽と
いふ事を
おほかたの春秋知らぬ松のとに忘れ
て經なむ千代や幾千代
伊勢の國人の七十賀に其の國
の地の名をわけてよみけるに
忘井を
春秋も忘れてへなむ忘井の淸きみも
ひの千代もあかずて
人の八十の賀に壽の字書きた
る盃を五葉の枝につけて
動きなき南の山の影うけて千代も汲
まなむけふの盃
季鷹縣主の許にて神代紀の竟
宴しける時に木花開耶姫を得
て
村あしの一よのからにうけひてしま
ことはほにぞあはれにける
將軍
弓張の光りし空に淸ければ鳥のねぐ
らのあらそひもなし
ほうし
松の聲谷の淸水の音聞きて横川の洞
に年ぞへにける
僧侶歸レ暮
眞柴とり眞淸水汲みて歸るらむ横河
の暮の鐘のひゞきに
谷樵夫
いくとせかなげきこるらむ朝夕に影
見る谷のみづはぐむまで
岸頭傀儡
しら浪のよるべなぎさに浮寢して新
手枕をまかぬ夜もなし
朗詠の題を分ちて妓女を
あやにしき立ち舞ふ袖の追風になび
くを妹が心ともがな
老人
今はたゞむかふもやさし年をへて面
がはりせぬ月と花とに
伊勢
五十鈴川高がや葺けるみあらかに神
代の手ぶりいちじるきかも
鹿島神宮
大君のみ笠の山もありといへど鹿島
が崎のもとつみやしろ
下總國にまかりける時海上郡
荒野村白幡宮によみて奉る、
こは味耜高彦根命をいはひ奉
れるなり
東路の國やすかれと海上にしづまり
ませる白はたの宮
本居宣長が古事記の竟宴に事
代主神を得て
葦原の國さかりつゝ萬代に神の御尾
さきつかへまつらす
神あそびの歌になぞらふ
さか木葉に散るや霰をうちはらひ神
の御前に立てる人長
さつをらがひくや槻弓本末の歌遊び
する面白の夜や

小齋衣大みの衣袖たれて神の御前に
とよのあそびする

神祇

御劍をいはひそめてし昔より代を守
ります布留のみ社

いはふなる神の御名さへかぐはしき
春の梅津に幣まつらばや

家に歌よみける時神祇を

武藏なる磐井の森の國つ神常磐堅磐
に世を守るらむ

曉神祇

ちはやぶる神代おぼえてあかつきの
長鳴鳥に明くる御戸かな

四海淸

筑紫の海蝦夷の千島の沖かけて浪た
たぬ世は濁るともなし

披レ書逢レ昔

かしこきや奈良の都の宮人と語らふ
ものはふみにざりける

行路待レ人

椿市の路の行く手の歌垣にばひあひ
がたき人もあはなむ

幸逢二太平代一

大御代はのどけかりけり春霞二荒の
山に立ちそめしより

關山月といへるから歌の題を

あげまきがかへる山路の笛の音も月
もすみわたる足柄の關

かざし

神さぶる三輪の檜原に立ちまじりか
ざし折りけむ昔とはゞや

しづく

妹まつと人や見るらむかりそめにや
すらふほどの山のしづくも

高

香久山の峯のさか木の上つ枝にかけ
し鏡とてれる月かも

近

きのふまではるかにこそは思ひしか
袖さしかへてぬる夜ありけり

山の井に影をうつせば久かたの雲井
の月を手にむすびけり

みどり

位山嶺の若葉のみどりさへあけにう
つろふ秋をこそ待て

あもりづく青かく山の眞さか木は神
代よりこそ綠なりけれ

人々五色の歌よみけるに黑を

わたの原夕浪黑く立ちくめり熊野の
沖に鯨寄るころ

妙法院の宮の月次の御題に心
といふ事を

雪をしのぎ風にまかせておのがじゝ
松も柳も心ありけり

同じく思ひといふ事を

思はじと思へどものを思ふこそ心の
外の心なりけれ

同じ宮より關といふ文字書き
て雛をゑがけるに歌書きてよ
とおほせごと有りければ

古への長鳴鳥や今も世に關の戸あくるはじめなるらし

同じみうちの人に乞はれて墨がきの芭蕉をよめる

忘れてはあしたの雨の音を聞き夕べの風に招くとぞ見る

君恩如二雨露一

武藏野のおどろがもとの小草すら惠みの露にもれずぞ有りける

六月ばかり雨岡がもとにて樂所の人々調樂しけるに、淸風入二管絃一といふ事を

いと竹の聲や雲井にひゞくらむまだきかよへる天の河風

林下幽閑氣味深

人とはゞいかゞこたへむ奥山のしげみがもとに住める心を

草堂深鎖白雲閑

よの常のひえを外山に住む庵はたゞ白雲にとざゝれにけり

とこしへにとざせる門をたどらずて夕べはかへる軒の白雲

長恨歌の句をさぐりてよみけるに養在二深閨一人未レ識といふこゝろを

しるらめや賤がかふこのまゆごもり恐き御衣に織りあへむとは

在レ天願作二比翼鳥一といふ事を

夜と共にかはす眞袖をそのまゝに翼となして天がけりなむ

雪月花時最憶レ君

入るを恨み消ゆるを惜みうつろふを歎くや同じ心なるらむ

白寛の觀音の入佛供養するにまかりておの／＼普門品の心をよめるに衆怨悉退散の心を

やぶしわかぬ春の光に雪消えて草はこと／＼萌えいでにけり

神代の事も

かしこきや神代の事もますらをが手わざにすなる天の櫨弓

門さしてあけざりける所にて

松の嵐たゝく水鷄の音にのみはかられにける宿にしあるらし

松に露のかゝれるをおとさず折りて

かりそめにまつと告げこす言の葉も露ちらさじと思ふばかりぞ

春に心よせたる人のもとに

花にのみ心をよせば唐錦ころも立田の袖や恨みむ

同じ題にて長枝、さやかなる月の夜頃のあはれさも知らでや人の春をめづらむ といへる返し

秋にのみよるとは知らでかすむ夜の月と花とに君をまたれし

世のはかなき事をいひて法師にやなりましと思へど思ひす

てぬ事といひてといふを題に
て
朝顔に置くしら露やはかなさを思へ
どかれぬたぐひなるらむ
棚倉の君の贈答會にかしら白
き女にといふ題にて雨岡、昔
誰が初子にしめしはてならむ
白雲かゝる松の老木は　とあ
る返し
われながら梢の雲ぞむつまじき昔ふ
れけむ袖のなごりに
箒木の巻の心をよめる
くまもなく語りつくせし宵の雨のふ
りぬる事を誰かつたへし
夕霧の巻の讀經の聲かすかに
といふ心を
風あらき山のまほらに籠りゐて讀む
らむ法の文のこゑする
源氏物語の竟宴しけるに夢の
浮橋を得て
谷陰にむかしおぼえて飛ぶ螢おもひ
消ゆともよそにしられじ
富小路三位貞直卿おのれが著
はせる萬葉集略解を得まほし
とのたまへるよしを、季鷹縣
主より聞けるまゝに參らせけ
ればよろこばせ給ひて御消息
のはしに、陰あふぐ心のはて
もなきぞとはくまなくみえむ
武藏野の月　と書きて賜へり
ければ御返しに
武藏野のを草が上も雲井よりもらさ
ぬ月の影あふぐかな
妙法院一品の宮より長月ばか
り刑部卿法印寬常をみ使にて
さきに歌奉れるをめでさせ給
ひてろく賜はりける時、寬常
の、音にのみ遠くもきくの香
をとめてえならぬ花の色をこ
そ見れ　とよみて出しければ
返しに
見るめなき荒野の菊に宮人の袖ふれ
むとはおもひかけきや
京の小澤蘆庵に物學べる小野
勝義おほやけごとにてむ月の
はじめこゝにまゐりけるにこ
とつけて蘆庵がもとより、立
ちよらばたちもよらせよ橘の
かげふむ人は道まどひせじ
といひおこせければ返しに
たぐひなき言葉の花の香をしめて立
ちよる人の袖もなつかし
躬絃のもとより年のくれに消
息のはしに、年のはに五百枝
さしそふ橘のもとに道ふみい
ゆき通はむ　といひおこせけ
る返し
かぐはしき數ならずともあし引の山
橘のやまずとはなむ
京の蒿蹊が消息にしはす四日

夜難波の四天王寺へ雷おちて
諸堂皆やけぬとて、天の火に
もえて名ごりも難波寺龜井の
水の有るに有るかは　とよみ
たりとて書いつけおこせける
返事にいひやりける

時の間の煙となれば萬代の龜井の名
さへたのまれもせず

何事もかぎりある世を思ふにぞ龜井
の水のさしぐまれける

保田正永が故ありて年頃近江
の膳所にこもり居けるが五十
ぢに成りぬる年の暮に消息す
とて

わがせこを千代もともなへ近江の海
八十の湊のたづのむらどり

かゞみ山とぎし心をさゝなみの國つ
御神も守らさらめや

さち子はわが父君に物まなび
て女ながらかどある人なるが
年老いてかしらおろしければ
よみておくる

はかりなき世をもへなゝむ茜さす日
の入る國の神のまに／＼

貞直卿より季鷹縣主へ消息に
おのれがよみ歌のうち二首殊
にめでたまへるよしにて、み
づから書きてまゐらせよとあ
りければ書きてまゐらすとて

武藏野や花かずならぬうけらさへつ
まるゝ世にも逢ひにけるかな

伊豆國熊坂の村菊池武敎とい
へるがむすめ袖子は、いわけ
なかりしよりふみ見歌よむこ
とを好みて、十四になりける
年はじめてよみ歌あまたおこ
せて筆くはへてよとこふまゝ
に、いさゝか引きなほしてな
むやりつる、そのはしに書い
つけゝる

色も香も日にけにそはむ花ぞとはふ
ふめりしよりしるくもあるかな

鎌倉の長溫がうからやからの
書ける物をあつめて慕親帖と
名づけて家につたへむとす、
其の中にはおのれがかぞいろ
はの書き給へるゆきかひなど
もまじれり、おのれにも歌よ
みてよと乞ふまゝによめる

鎌倉や磯間の千鳥千世かけてとゞめ
む跡の數にいらばや

母がたのおほぢ新井秀元ぬし
はもと鶴見氏にして、遠つ祖
より傳へたりし甲冑をおのれ
ひめおきたりしが、こたびむ
こなる三村親雄にあたふると
てよめる

天とぶや鶴見の家の丈夫がかわらは
堅し千年傳へよ

古き形の倭琴の柱袋を大和錦

して縫はせて根こじたる小松
　につけて人のもとへやるとて
玉琴に千代もかよはむ春風を松にち
ぎりて今日ぞひきつる
　伊勢の宣長がもとへ驛路の鈴
　の形にすゞりがめを鑄させて
　おくるとて
はゆまぢのすゞろにこふる君があた
り音づれをだに絶えじとてこそ
　忠賢がまだ老にもいたらざれ
　ど、よし有りて杖ゆるされけ
　る時、宮城野の萩の五尺ばか
　りなるにつけて
君が代は行末とほき宮城野のもとあ
らの萩を杖にこそきれ
　人のもとに炭やるとて
枕づく妻屋さゆらむ夜半だにもおも
ひおこせと思ふばかりぞ
　棚倉の君狩り獲給へる猿の皮
　をたびければかしこまり申す
　とて
このごろの寒さましらの皮ごろも取
りかさねつゝ春を待たまし
　棚倉の君の家にて柿本大人の
　影供せられけるに水樹多ニ佳
　趣一といふ事を
榮ゆべき千々の言葉の玉がしは影も
くもらぬ宿の池水
　ちひさき子のもとに貝を人の
　おこせ侍りしにといふを題に
　て
みめぐみに飽等の濱の蜑の子もおぼ
したつめるかひはありなむ
　近江の岡村有義千々の松原を
　住みかとせりければ
一木だに千代はもたるを千々の松し
めつる君はかぎりあらめやも
　雨岡の家にて庭を松原に作り
　てといふ事を
陰しげき庭はさながら末の松風にも
浪のこゑはありけり
　藤原重忠といへる人のゆくり
　なく訪ひきて、聞くに今千と
　せの陰も住吉の松にひとしき
　名こそ高けれ　といひ入れけ
　るに
おのづから名やふりにけむいたづら
に年をつもりの浦のあま人
　海上の信太正慶がもとにて
海上や磯山松の陰しめて千とせ榮え
むやどにもあるかな
　香取の躬國がもとにやどりて
刀禰河に來よる白浪しば〳〵も問は
まくほしきやどりなりけり
　出石の君のなり所にて人々歌
　よみし時花多春友を
入佐山にほふ櫻を千々の春老いせぬ
友と君のますらむ
　刀禰川をわたりて眞間にいた
　りて所々見ありきて

繼橋のいひつぎにけるあはれさを汲
みても知るや眞間の井の水

文月廿日隅田川の菴へ夕さり
つかた行きてよめる

隅田河岸のはり原暮れそめてねぐら
の鷺ぞなほましろなる

雜體

物名

かには櫻

花の枝に何そのひとか袖ふれてよに
懐しきかにはさくらむ

さうび

鶯のあさうひごゑを鳴きつるは昨日
と思ふに春ぞくれ行く

たちばな

東路の國むけませし草薙のたちはな
のみもかしこかりけり

きちかう

おもしろき妹がかきちかうき秋も忘
るゝばかりちぐさ咲きつゝ

かりをみな

やちぐさの花のさかりも過ぎぬるを
みなれかねてもなく蟲の聲

ひともとぎく

誰かこよひともときくらむ古鄉の軒
ばを過ぐる山ほとゝぎす

もちひ

不知火の筑紫の國のみこともちひの
入るかたのまもりなりけり

諸成がかつみを物の名にして
秋の心をよめといひければ

白雪はいくかつみけむと思ふまで野
にも山にもすめる月かな

ぶどう

わびぬれば物や思ふとうちつけにと
ふ人さへもむつまじきかな

うづみび

衣うつみひとりのみか聞く人もいを
寝ぬ秋の月の夜な〳〵

ひをけ

み雪降る外山のかひをけさ見れば春
にしられぬ花ぞ散りける

あられ　さゝ

浮世にはあられざりけり今よりはい
ささと遠き山路求めむ

ころも　はかま

あひみれどこころもとけずこの頃は
よそにぬればかまどほなるらむ

もみぢしてころもへなくに散りしけ
ばはかまく惜しき庭の面かな

ひむがし

友をこひむかしを忍びさま〳〵に思
ふおもひもふかき山里

しもつけ

咲くとしもつげなば行きてみはやさ
む君が垣ねの秋草の花

折句

空也寺の僧空阿が書ける鉢た

たきの繪にはちたゝきといふ
事を句のかしらにすゑて秋無
常の心を

はては皆ちぐさの露のたまなれやた
れかは終にきえのこるべき

旋頭歌

相聞

忘れむと思へばいとゞ忘られぬ君試
みに忘れじとのみ思ひわたらむ

沖つ鳥鵜の住む磯によする白浪かつ
くだけかつみだれつゝ物思ふわれ

契沖阿闍梨が百年の忌に春の
懐舊といふ事を人のよませけ
れば

春霞八重立ちこめし八十の隈路を人
皆のたどらぬばかりしをりせし君

片山誠之が去年の霜月二十日
あまりみまかりけるに其の子
そのしるしの石ぶみを春海に
こひ、おのれに歌をこひけれ
ばよめる

片山に立つ杉が枝をさしのぼる月雲
りなく思ひあがりてありし人はも

躬絃が伊勢の國へ赴く馬のは
なむけによめる

伊勢の海や清き渚によする白玉眞玉
なす言の葉さへに書きつめよ君

うけらが花巻七

長歌

子日の遊をよめる歌竝短歌

青丹よし　奈良の都の　大宮に　百
のつかさを　召しつどへ　つどへ給
ひて　豐明　きこしめしつゝ　初春
の　初子の今日の　玉はゝき　とる
手もゆらに　賜へりし　昔思ほし
玉敷の　たひらの宮の　そともなる
北野の野べに　みゆきまし　小松が
原に　大御輿　とゞめ給ひて　君も
臣も　酒みづきして　遊ばしゝ　古
き例は　かけまくも　ゆゝしきかも
よ　今の世に　今日としいへば　う
ち日さす　都の外の　天ざかる　ひ
な人すらに　白妙の　袖ふりはへて
かしこきや　君が御代々々は　十つ
づき　都筑が原に　八百萬　よろず
世かけて　君をほぎ　吾身をいはひ
ものゝふの　八十氏人も　はく太刀
の　組の緒しでゝ　遊ぶなる　今日
の子の日は　世々にたえせじ

反歌

むさし野のつゞきが原にうちむれて
小松引くなるけふの樂しさ

櫻をよめる歌

あら玉の　年の一とせ　百千々の
花は咲けども　花ぐはし　櫻の花は
あづさ弓　春の光の　浦安の　大御

國にし　神代より　根ざしそめてぞ　おのづから　わが國ぶりの　ゆほびかに　のどけきさまを　木だちにも　花の色にも　あらはして　きさらぎ　やよひ　うらゝなる　時を待ちえて　天雲の　あはだつごとく　白雪の　つもれるごとく　國もせに　をゝりにをゝり　白たへに　咲きみちにける　しかれこそ　遠き御代々々　わきがみの　むろ山櫻　大みきに　浮べりしより　宮の名に　櫻をおほせ　宮姫を　さくらのめでと　たゝへつつ　うたひたまへれ　おしなべて　大御くぬちに　あれいづる　たかき賤しき　此の花を　めでざらめやも　あはれ此の花

　葉月なかば病に臥したりけるころ庭の萩さかりなりければよめる歌竝短歌

秋風の　立ちにし日より　遠方(をちかた)の　野べの八千草(やちくさ)　咲きみだれ　蟲の音きそひ　五百(いほ)しろや　千しろの田のも　ほにいでゝ　鴈わたるらし　面白き　時のさかりを　おしてるや　難波の海の　あしのけに　なびきこいふし　飛ぶ鳥の　つばさしあらねば　いたづらに　せむすべをなみ　こもりゐて　なげかひくらし　床のべに　いぬるあひだに　さにづらふ　少女(をとめ)のともが　白玉の　玉かづらかけ　紫の　綾ごろもきて　高麗錦(こまにしき)　ひもをゆひたり　手にまける　玉もゆらゝに　敷たへの　わが枕べに　つどひ來て　しかなげきそ　うら若き　昔よりしも　むつみせし　事忘れめや　今よりは　かたへさらずて　朝よひに　われなぐさめむ　しるしなき　物なもひそと　をとめらが　かたらひをると　見しいめの　さめつゝ見れば　にしきあやに　つつめる子らは　ませのうちの　露にあらそふ　秋萩の花

　反うた

しるしなき物はおもはじ秋はぎの花の錦に立ちまじりてば

　横瀬侍従貞隆主ひめみこ踐祚の御ほぎごと申したてまつらせたまふみ使として都へのぼりたまふを送りまゐらするうた竝短歌

高ひかる　吾が日のみこは　天傳ふ　ひめみこながら　すめ神の　かん御心に　かんはかり　はかり給ひし　あとのまに　天つ日つぎと　神ながら　敷きましにけり　東なる　遠のみかどゆ　みことほぎ　まをしまさまく　思ほして　遠つ神おやゆ　すめろぎを　まもりたまひし　其の氏と　選(えら)ませたまひ　天雲の　いたゞしませば　いはねふみ　こゞしき道

の　百たらず　八十くまごとに　手向ぐさ　幣とりむけて　玉しきの　たひらの都　たひらかに　いたり給はむ　いはまくも　かしこきかもよ　百しきの　大みあらかに　とよのあかり　きこしたまひて　大君の　よしとのたまふ　大みことと　いたゞき持ちて　青駒の　あがきを早み　明日のごと　歸りきまさむ　事のよろしさ

反歌

木曾の山八十くまごとに玉ぼこのやちまた彥の神や守らむ

鎌倉の鄕、鈴木富長が六十になりけるを、まな子長溫がいはひごとしける時、鶴宿二松樹一といふを題にてよめる歌竝短歌

八束穗の　たりほの稻の　みしねかる　鎌倉の里に　五百しろや　千しろ垣つ田　かげともに　しめゆひなして　ときは木の　しゞにおひたる　高山を　そともにおひて　眞木ばしら　立ちさかえたる　家をさが　うからはらから　しげ樹なす　來よりつどひて　百傳ふ　六十ちよりしも　千世までと　ほぎきとよもし　うたげする　けふのむしろに　山松の　梢にすめる　あしたづも　庭におりたち　家をさに　おのがよはひの　萬世を　ゆづるとこそは　聲よばふめれ

反歌

鎌倉やをのへにこだる松が枝のたづこそ君が千代の友なれ

豐後國岡知りたまへる君の六十の賀に六くさのたを物を橘のうち枝につけてまゐらする歌竝短歌

まきむくの　珠城の宮に　常世べゆ　八さをもてこし　時じくの　かぐのこのみの　其の種は　大御くぬちの　國もせに　かをりみちけれ　青によし　奈良の都に　とよのあかり　きこしめつゝ　香ぐはしき　大みことも　めでたまひ　たゝへましつる　とこ世もの　花たち花に　よそへつつ　いやとこしへに　百世ませ　千世ませ君と　いはふ今日かも

反うた

君と共にときはなるべし五百枝さし千枝さしおほふ殿のたち花

萬葉集略解書きをへけるころ、人々と共に題を分ちて、陸奥國より金を出せる詔書を賀する歌に追ひなぞらふる心をよめる歌竝みじか歌

かけまくも　あやにかしこし　千はやぶる　神の大御世の　みはかしの　十つかのつるぎ　八さかにの　みつ

のまがたま　それをしも　國つ寶の始にて　天つ日つぎと　しらしくる神のみよ〳〵　み寶は　たらひませども　あれ出づる　人のこと〴〵たぬしけく　やすかれとしも　おもほせる　大御心を　神ろぎの　うづなひませか　穴門なる　豊浦の宮に天のした　まうしたまひし　たらしひめ　神の尊の　むけませる　三の韓國　そがなかに　内つみやけと仕へ來る　百濟のこきし　とりが鳴く　あづまの國の　みちのくの　小田なる山ゆ　くがねをし　ほりてまつれり　昔より　皇御國に　あらはれぬ　み寶さへに　備はりし　事をかしこみ　神ながら　天にます神國にます　神に告げまし　もろ〳〵を　惠み給ひき　しかれこそ　たふとみねがふ　み寶も　ましたらひつつ　大たから　いやたぬしけく　みをす國　いや安らなれ　萬世までに

反歌

大君のみたまのふゆに咲き出づる金の花は千代にあせめや

妙法院一品宮のおほせにて山居閑居などの歌書きて奉れとて色紙十ひら賜はれるを、こたみ一條右大臣殿の御ともにてまゐれる賀茂保考縣主のもとよりおほせごと傳へければ、書きてたてまつれりける時に、そへてたてまつれるうた竝みじかうた

ゆく水の　隅田河原の　下つ瀬に住むなる鳥の　み空ゆく　つばさなければ　おのが名の　都こひつゝあら玉の　年をあまたに　過しきぬいでやむかしべ　鳥が啼く　あづまのはての　鄙にして　其の國ぶりをうたへりし　ためしあればと　武藏野の　あら野の末に　かりつめし言の葉草の　いかなれば　天つ雲井の　あなたまで　きこえあげけむしづたまき　賤しき身をも　すてまさぬ　おほせかしこみ　逃水の　にげかくるべき　よしなくて　堀兼の井の　深くしも　おもひめぐらしふづくゑに　よるとはすれど　おのが身の　老のさがさへ　くはゝればわなゝかれぬる　みづぐきの　おぼつかなさも　こづみよる　汀になれて　玉かづく　淵だにしらぬ　すさびをば　いかゞはせまし　しかはあれど　かゝる御世にし　ながらへて此の一ふしに　あひにける　わが身のさちを　何にたぐへむ

反歌

かゝる瀬もあれば有る世に隅田河ながらふる身を何かこちけむ

大和國添上郡櫟本村治道のも

り柿本寺といふに、柿本の大人のみ墓ありて歌塚となむとなふる、其の寺の僧舜叟御社の修理せむとてこゝに來りけるにつけて、幣代にたてまつれる歌竝短歌

千はやぶる　神の御代より　言だまの　たすくる國と　いひつげる　神の御國は　うつせみの　世の人毎にいひ出づる　一言すらも　言靈のみたまそはりて　くすはしき　み國にしあれば　うき時も　うれしき時も　眞心に　思ふまに〱　歌ふなる　言の葉にこそ　久かたの　天をとよもし　あらがねの　つちをうごかせ　そこもへば　あやにかしこき言の葉の　道にも有るかも　國はしも　さはにあれども　里はしも　あまたあれども　すめろぎの　遠き御代々々　うち日さす　大宮所　しめさして　定めたまへる　しきしまの大和の國の　くぬちなる　治道のもりに　廿日より　いはひまつれる言の葉の　大き聖は　飛鳥の　淸見の原の　大御代ゆ　藤原の宮に　其の御名を　あらはしまして　八千年の　今のをづゝに　國もせに　たゝへまつれり　かくしつゝ　いや遠長に　天地の　よりあひのきはみ　此の道を　さきはひまさむ　治道の大きひじりの　神ぞたふとき

反歌

誰しかもあふがざるべき治道の神のはりたる道ぞこの道

良峯貞樹がこふまゝによめる
ふづくゑの銘のうた

くしきかも　いましとわれは　たまあへば　あひぬるものと　晝はも日のこと〱　窓のちに　たゞむかひをり　夜はも　夜のこと〱　ともし火の　もとによそりゐ　むつまじみ　思ふ心を　かたみに　言葉とはねど　おのづから　いましは知るや　われはしも　いましを知れりしづけくて　事なきからに　常磐なす　すみすりのよに　いましは　ひとしきものぞ　いまよりは　われによりてな　われもはた　わが世のかぎり　なれによりなも

棚倉知りたまへる小笠原の君、一とせ勿來關の櫻木のなれる石を賜ひけるが、今年またかの櫻の花を扇におして歌そへてたまへりけるにつけて、いさゝかおもひをのぶるうた竝短歌

鳥がなく　あづまの國の　ちみやぶる　人をなごせと　大王の　みことかしこみ　御軍を　あともひ立てゝみちのくに　い行きいたりて　春秋を　あまたへにつゝ　そのあだをむ

け平らけて　かぐはしく　たけき共の名を　語りつぐ　ますらたけをの眞玉なす　言の葉をしも　残してしなこその關の　櫻木の　朽ちし木の根は　常磐なす　いはほとなりて關の名の　今ものこれる　高山の嶺のたむけに　あら金の　つちにうもれて　ありとこそ　人はいひつれ今もなほ　老木の櫻　をちこちに立ち榮えつゝ　梓弓　春べになればたへのほに　咲きにほへりと　音のみに　聞きわたりつゝ　忍べども道をた遠み　たれもみな　せむすべなきを　白河や　棚倉(たなくら)の城を　知りませる　君きこしつゝ　み心に　ふりにし事を　深くしも　しのばすあまり　棚倉と　なこそは同じ　みちのくの　くぬちながらも　岩がねのかしこき眞山　八十隈(やそくま)の　道へなれるを　いそしくも　求め給ひき　そがうへに　其の花をしも　見まほしみ　世の人すらも　見まくほり　思はむものと　事はかり　はかりたまひて　花をさへ　こゝら得つゝも大江戸に　のぼりたまひて　人皆にしめし給ひぬ　其の國の　來る春毎に　匂へるは　色にも香にも　武士の　ますらたけをの　和魂(にぎたま)の　みやび心を　今の世に　あらはさむとかさくら木の　このねのなれそ　いはほこそ　たけくをゝしき　荒魂の千歳の後に　朽ちせざる　しるしなるらめ　しかはあれど　ふりし世しのぶ　この君の　めぐみしなくば其の岩も　うもれかはてむ　其の花も　まさめにたれか　見つゝはやさむ

反歌

もの丶ふのその名と共に千々の春にほひ残れる山ざくらはも

肥後國熊本の長瀬眞幸やよひばかり古郷へ歸るを送る歌二首竝短うた二首

天地の　はじめの時ゆ　ちはやぶる神の御面(みおも)と　たゝへこし　肥(ひ)の國はしも　神がらか　國さかゆとふ　國がらか　人ぞさはなる　そが中にはしき吾がせは　かしこきや　すめら御國の　上つ代の　書(ふみ)まなびすと其の君の　きこし給ひて　いやひろに　ましたらはせと　ねもごろによさし給へれ　葦北の　野坂のうらゆ　押照(おしてる)や　難波のみ津に　たゞ渡り　天傳ふ日の　たてぬきに　い行きめぐらひ　まつぶさに　とひ明(あき)らめて　天の下　つどひまつれる　大江戸に　まゐり來まして　玉鉾の道行きぶりに　おもはずも　わがふせ庵(いほ)の　まげいほを　とひませしより　たまあへば　あひぬる物と　朝

よひに　馴れにしものを　今更に
歸りいなむと　きゝしなべ　心ぞい
たき　しかはあれど　古郷にしも
家人の　いはひべすゑて　あめつち
の　神にこひのみ　またすらむ　事
をし思へば　とゞむべき　旅ならな
くに　つゝみなく　歸りいまさぬ
阿蘇山に　うしはき坐す　大神も
まもらひたまひ　不知火の　筑紫の
くにの　國もせに　香ぐばしき名を
立てむ君はも

返歌

わかるとも何かなげかむ君が名は千
里のをちにかをらざらめや

吾はもよ　入江のす鳥　君はもよ
雲井ゆくたづ　春がすみ　翅にわけ
て　足引の　高ねの花に　うちはぶ
き　行きこむ日すら　おくれゐて
うらなげをらむ　千里ゆく　つばさ
にしあれば　あすのごと　天つ雲路
を　飛びかけり　またも來まさね
待ちつゝをらむ

反うた

高く飛ぶつばさしあらばさくらさく
あら山中もおひしかましを

下總國海上郡へまかりし時飯
沼の丘にのぼりて浪を見てよ
める歌竝反うた

夏衣ひく　海上がたの　飯沼の　岡
にのぼりて　見渡せば　常陸の國と
下つふさの　中に流るゝ　刀禰川は
河とほじろみ　みをはやみ　千里の
をちゆ　落ちたぎち　ながれ來につ
つ　ひんがしの　み空の極み　たゝ
へたる　大海原の　潮さゐに　いゆ
きむかひて　あらそへば　沖波高し
其の波は　雪かもふれる　さ綿かも
つかねてあると　見るがうちに　千
ひろ百ひろ　白たへの　布はへしご
と　ひろごりて　より來るさまは
あま雲に　乘りて空ゆく　わたつみ
の　龍といふ神か　其の海の　あり
そのさきに　島なして　立てる岩ほ
に　さく浪は　千々にくだけて　天
にとび　あられとみだれ　其の岩を
越えゆく浪は　眞白なる　駒か走る
と　おもふまで　見のあやしく　そ
の音の　きゝのかしこく　天地の
そくへの波を　ひとかたに　つどへ
てよする　是れの波崎

反歌

久かたのみ空につゞく潮路より寄せ
くる浪をけふ見つるかも

この波崎は、飯沼の岡にむかひたる常陸の崎なり。今はさきととなふれど、もとなみさきといひしならむ、そのをりの日記にくはしくいへり。

もろこしへつかはさるゝみ使
人の別をしみてよめるになぞ

らへてよめる歌竝みじかうた

靫かくる　伴のをひろき　家の子と　えらびたまひて　から國に　い行きわたれと　大君の　うつの御手もて　たまはせる　大御しるしの　みはかしを　そびらに負ひて　いでたてる　たびにしあれば　ますらわが　いただきもたる　大御言　到らむ極み　行くさくさ　事しもあらめや　さきだてる　浪穗のうへも　岩橋を　い渡るごとく　うづ汐の　かしこき海も　ひたつちを　いゆくなしつゝ　明日のごと　歸りまゐこむ　またせわがせこ

反うた

おほろかに思はむものか大君のみたま賜へるわれにやはあらぬ

下總國海上がたの宗筠が四月ばかりみまかりけると聞きてよめるうた竝短歌

東路の　利根の川原の　曙に　朝びらきせし　舟こそは　跡もとゞめね　霰ふり　廣島の埼の　夕暮に　よせては歸る　浪こそは　行方しられね　昔より　かしまの埼に　たゞ向ふ　とねの河べの　夏そ引く　うなかみがたに　家居して　住めるわがせは　石の上　ふりにし書を　朝よひの　友となしつゝ　よみ出づる　吾が國ぶりも　落ち瀧つ　下れる世々の　言の葉に　心をそめず　天ざかる　鄙にはあれど　白雲の　思ひあがりて　たまあへば　あひぬるものと　山河を　へなりてあれど　玉づさの　便からさず　あまた年　在り經しものを　あづさ弓　春しきたらば　とね川を　みを引きのぼり　吾が宿を　とぶらひ來むと　かねてより　契りしものを　其の河の　水かもかれし　こぐ舟の　かぢかもたえし　春まけて　言かよはねば　朝がすみ　おぼつかなくも　片待ちて　有りしあひだに　卯の花の　咲く月立ちて　ほとゝぎす　鳴くなる時に　みなわなす　君は消えぬと　風のとの　とほとに聞けど　現とは　おもひ定めず　ぬば玉の　夢にかあらむと　こゝら夜を　かさぬとすれど　さめざらなくに

反歌

とね河の水のうたかたかつ消えてかつあらはれぬ人のかなしさ

土佐の國しらせる君のうせ給ひて三年になり給ひぬるに、月の前に過ぎにし秋をしのぶ心をよめるうた竝みじか歌

照る月は　あやしきものか　月見れば　あやにかなしも　秋はしも　いかなる時ぞ　秋といへば　わきてさびしも　常にだに　うたて有る秋を

をとゝしの　秋のなかばの　中空の
雲井のをちに　玉かづら　おもひか
けずも　てる月の　み影と共に　久
かたの　天路しらせり　しかしあれ
ば　こぞもことしも　秋立ちて　月
はさやかに　すめれども　歸り來ま
さぬ　君ゆゑに　限りしられぬ　秋
の野の　七くさの花の　花數に　あ
らぬを草の　うへすらも　露置きそ
ひて　よとともに　しなひうらぶれ
なげきするかも

　反うた

月をのみながめられけり中空に影か
くしてし秋をしのびて

　京の小澤蘆庵春よりやみて、
七月十日あまり一日によはひ
七十ぢあまり九にてみまかり
ぬるよし、雪岡大德よりいひ
おこせければよみける歌竝み
じかうた

ちはやぶる　神の御世より　傳へこ
し　吾が國ぶりは　うつせみの　世
の人ごとに　誰も皆　うたひ出づれ
ど　長道磐の　神の守らす　すなほ
なる　大路はゆかず　八十くまの
さき道をしも　かにかくに　たどり
たどりて　大かたは　ありふる中に
天雲に　思ひあがりて　眞心を　立
てつる人と　風の音の　遠音に聞き
て　相見まく　思ふ物から　岩がね
の　こゞしきみ山　落ちたぎつ　か
しこき海を　三栗の　中にへだてゝ
老の身の　せむすべをなみ　下にの
み　しのべる心　おのづから　かよ
ひやしつる　はゆまぢの　驛のをすゞ
ふりはへて　言傳しより　まそ鏡
むかひゐつゝも　かたみに　言はと
はねど　其の人の　面影をしも　見
るばかり　思ひなりにて　玉あへば
あひぬるものと　むつまじみ　思へ
るわがせ　初秋の　露どけぬると
玉づさの　便に聞きて　現とも　い
めともわかず　麻ぎぬの　そでしを
りつゝ　たゞ泣きに　なきなげかれ
つ　しかれども　年をあまたに　わ
がせこが　ひろひ集めし　玉の聲
世にひゞきつゝ　五百千々の　年は
經ぬとも　かぐはしき　名は國もせ
に　殘らざらめや

　反歌三つ

限りある世をばなげかじ埋もれぬ名
こそ千とせのかたみなりけれ

世々かけて朽ちぬその名もわが爲は
しばしばかりのかたみならずや

君をおきて聲しる人はなき物を言問
はざりし事ぞくやしき

　縣居大人みうせまして三十ぢ
まり三とせになりたまひける、
神無月の晦日に竹芝のおくつ
きのもとにつどひて、ふるき

をおもひてよめる歌竝短歌

四方山の 護りにすとふ 梓弓 末の中頃 いそのかみ ふりにし世々の てぶりをば 忘れいにつゝ もとつ世に 引きもかへさず あまた年 經にけることを ますらをの 弓末ふりおこし いそしくも 思ひおこして 菅の根の ねもころ〴〵に さとはせる 世の人皆を わが大人の 道びきたまひ 弓弦なす たゞ一すぢに すなほなる すめらみ國の 古ごとを 傳へたまへれ あら玉の 年もへなくに 古への 學びの道に 村ぎもの 心をよする 人さはに 成りにけるかも かくしつゝ 五百千々の世に 天傳ふ 日のたて日のぬき 隈も落ちず 行きたらはして いにしへに 立ち歸る 世を 松が根の 遠く久しく 竹芝の 磯山寺の おくつきを あふがさらめや あづさ弓 もとつ世しのぶ ますらをのとも

反歌

今よりの千とせの後に世の人のしきしのぶべきおくつきどころ

紀伊の殿の姫君越の君の江戸の御館におはしてみうせたまひける又の年、御法のわざせさせたまふ時によみて奉りける歌竝短歌

言にいでゝ いはゞかしこし 磐代の 濱松が枝の 八千年も あくらの濱の あくよなみ 和歌の浦わの わかえつゝ 萬代ませと 世の人の いはふ心は しら神の 磯によるてふ かひなくて 千さとのをちの 武藏野の 野のべにつめる 白雪の けぬるが如く 秩父山 嶺にてらせる 夕月の 隱るゝなして 隅田川 流るゝ水と とこしへに 歸りまさねば 荒妙の きぬきる人は 藤白の み坂の名さへ うらめしく 名草の山の なぐさめに よしもあらじを 年月は 紀の關守も とゞめあへず こぞの今日にし めぐりくる み法のことを 聞けばかなしも

反歌

むさしねや雪げの雲にかくろひて二たびてらぬ月の影はも

下總のくに香取の永澤躬國が幼子の七月の末つかたみまかりつとて、みくにが母刀自をはじめ家こぞりてなげきあへりと、聞きてよみてつかはしける歌竝短歌

時しもあれ また初秋の しめし野に おほしたててし なでしこの 花だに咲かで 何しかも 根さへかれけむ およびをり かきかぞふれば 七くさの 數こそたらね よそにし

て　聞くだに物は　かなしきを　しめ野守る人　秋風の　立ちてもゐても　忘らえず　しのびやすらむ　秋霧の　思ひまどひて　朝よひに　なげきやすらむ　しかはあれど　もみづる秋の　はゝそ原　露おきそへて　うつろはむ　事をゆゝしみ　心して　いたくな泣きそ　しめ野もる人

反うた

はかなさを何にたとへむ白露はけぬと見るまに置くなる物を

村田春郷がみまかりて廿(はた)とせあまり七年になりける、長月ばかりよみて手向(たむ)けける歌竝みじかうた

梓弓　春のさとわの　いほしろを　あらすき返し　かへしつゝ　おもひ出づれば　若苗の　若かりし時　縣(あがた)居(ゐ)の　田づらのいほに　もろともに　あそばへをりし　友垣は　多かる中に　眞玉なす　淸き眞心　吳竹の　直かるみさを　世の人に　似ざりし上に　古への　書見(ふみ)歌よみ　庭まりの　おもひあがれる　其のわざの　世にたぐひなく　妙にしも　ありける吾がせ　春べには　上野の岡の　さくら花　ひとしくかざし　秋たてば　すみだ河原に　すむ月を　ともにめでつゝ　うるはしみ　ありしあひだに　うつし身の　世を長月の　名にも似ず　秋の木の葉に　先だちて　散り過ぎしより　年毎の　花のあしたも　月の夜も　共に見し世を　しのび來て　別れし時は　きのふかも　をとゝひかもと　おもひつゝ　有りつるものを　その秋ゆ　廿年(はたとせ)あまり　七(なゝ)とせの　秋をへにきと　聞くはまことか

反歌

老いにける身をも忘れてなき人に遠ざかる世をおどろかれつゝ

荷田在滿みまかりて三十(みそ)ぢあまりみとせになりにける、葉月ばかり秋ふるきを思ふといふことを題にて、在滿が妹(いもうと)たみ子が乞ふまゝによめる歌竝短歌

玉敷の　たひらの都　神のます　稻荷の山に　おひ出でゝ　遠のみかどの　あづまぢに　移しうゑてし　二本(ふたもと)の　杉の梢は　久方の　雲かゝるまで　おひのぼり　陰をしみゝに　ものゝふの　八十氏人(やそうぢびと)も　此の杉の　二木の蔭に　立ちつどひ　きそひよれるを　いかなれや　一木の杉は　過ぎにける　なかばの秋の　露霜に　あへず枯れぬる　しかはあれど　殘る一木の　陰をしも　いやなつかしみ　もろ人の　來よりつどひて　かたり

つぎ　いひつぎゆかむ　ありし世の
事

反うた

名は世々の秋をふるとも朽ちせじを
なぞや置くらむ袖の上の露

土佐の國知りたまへる君の十
あまり三年の忌に、御むすめ
君の御法のわざしたまふとて、
秋懐舊といふ事を御みづらも
よみ人々にもよませられし時
に、よみてまゐらせける歌竝
みじかうた

土佐の海　おましの浦の　敷浪の
いやしき〳〵に　代々の秋　いや榮
えつゝ　鳥がなく　あづま大城に
八千たびも　行きかひまして　とこ
しへに　いまさむものと　大舟の
思ひたのみて　誰も皆　在りこしも
のを　いかさまに　おもほしめせか
久かたの　あめ行く月の　天雲に
かくろふ如く　岩がくれ　かくれい
まして　をとめ子が　櫛笥(くしげ)にのする
鏡河　二たびとだに　在りし世の
み影見えねば　現とも　夢ともわか
ず　をちこちに　うれへさまよひ
人皆の　ありしあひだに　十といひ
て　三年(みとせ)に成りぬ　かくしあれば
過ぎにし君が　わたつみの　手にま
きもたる　眞玉なす　いつきまし
る　みめづ子の　めづ子の君は　ち
ちのみの　父のみことを　今も猶
いませる如く　まめにしも　つかへ
ましつゝ　昔より　父のみことの
み心に　たふとみませし　しき島の
我が國ぶりの　歌よみし　手向(たむ)けた
まへる　言の葉を　天がけりつゝ
見そなはし　うれしびまさむ　事の
かしこさ

反歌

土佐の海や君がおましの浦波に秋は
月のみ影とゞむらむ

享和元年の春、陸奥國牡鹿郡
石の卷蛇田(へみた)の村より、靈蛇田(た)
道(ち)公墳とゑりたる石ぶみを掘
り出せりとて、かの國人其の
いしぶみをうつしてもて來り
けるを見て、聊おもひをのぶ
る歌竝短歌

押照(おしてる)や　難波高津に　宮柱　太(ふと)知り
まして　天の下　しらしめしける
すめろぎの　聖の御代に　天雲の
むか伏すきはみ　谷ぐゝの　さ渡る
限り　まつろはぬ　かたしもあらぬ
を　ひんがしの　えみしのともが
おふけなく　叛きまつると　すめろ
ぎの　きかしたまひて　竹葉瀬が
いろとの田道は　たくぶすま　新羅
の仇を　鎭めてし　いさをしあれば
えみしらを　言(こと)あげもせず　はき清
め　むけ平らげて　あすの如(ごと)　歸ら

むものと　すめろぎの　よさしのまにま　出でたてる　ますら健男が　いかなれや　えみしが仇に　たへずして　伊寺水門の　水泡なす　消えてうせけむ　從へる　臣の子どもは　せむすべの　たつきをしらに　其の主の　手纏を解きて　持ち歸り　其の妻の子に　故よしを　かくと告ぐれば　たゞ泣きに　泣き歎きつゝ　わがせこが　たまきをとりて　かきむだき　いのち死にきと　聞く人は　袖しをりけり　えみしらは　勝のすさびに　又更に　襲ひ來りて　うれたきや　田道をうづめし　墓をさへ　ほりうがてれば　その墓ゆ　をろちあれいでゝ　吐き出づる　いぶきの風に　立ち向ふ　えみしこと〴〵　冬の野の　草葉のもころ　たちまちに　こやしうせけり　其の御世ゆ　千五百に近き　年を經て　あづまの國の　みちのくの　牡鹿の郡　石の卷　竹の林を　賤男らが　あらすきかへす　時にしも　現れ出でし　石ぶみは　み靈のをろち　田道ぎみと　ゐりたるあとの　いちじろく　石のみなとに　鎭めつゝ　いはへる事も　明らかに　今ぞしりぬる　いはまくも　かしこきかもよ　大江戸の　遠のみかどに　まつりごと　まをし給ひて　八十國の　大みたからを　撫で給ふ　惠のあまり　今も猶　千島のおくの　山のくき　荒磯のくまに　わくらはに　人とあれ出でゝ　人の道　しれらぬえみし　千々萬　ありとふ事を　きこしめし　憐みたまひ　そこばくの　臣の健雄を　その島に　渡したまひて　日の本の　神をたふとみ　大君を　かしこむみのり　ねもごろに　をしへたまひて　國開き　ひらきたまへば　潮なわの　とゞまる限り　まつろへる　時にあひつゝ　おむかしみ　現れにけむ　をろちづか　今のをづゝの　牡鹿なる　石の卷こそ　古への　伊寺の永門と　誰も皆　明らめにけれ　くしきかも　たふときろかも　これのいしぶみ

反歌

ときはなす石のみなとの石ぶみは動きなき世のためしなるらし

文詞

那波何がしが家にて紅梅をめづる辭

咲く花のにほふが如くといひけむ、奈良のおほん時不知火の筑紫の大みこともちの館に、下つ司人らをつどへて、梅のうたげしたまへりしを古きためしにて、世々この花をなむめ

であへりける。おほよそ草木の花の、天地のなしのまに／＼咲出づるにくさ／＼の色ありといへど、白たへなると紅なるにまされるしもあらざりけり。そが中にもけぢめありて、百しほ千入に色こきは、こちたくうたてありて、かしこききはのきぬの色めにさへかよへばにや、たはぶれにくし。あら染の淺らかなるは、下が下のみじかき袖おぼえて、品おくるるかたになむおもはるゝ。たゞ梅のゆるしいろなるが、おのづから花びらごとに光こもりて、その香さへこよなきに如くものやはあるべき。ここに紅の梅をうゑて、年のはに花のさかりには、みやびをのともをつどへて、其の花めづる人なむありける。今年きさらぎなかば過ぐる頃、いざといふまゝに、かのやどりをとふに、ひろらかなるつぼのうちに、一もと立てるが、高きやの軒のつままでおひのぼりて、その枝はしみゝにひろごり、其の花はをゝりにをゝり、おもふ事なげに咲きみちつゝ、おばしまによりゐる人々の面わにてり、衣手にくゆりかゝれり。かの筑紫の館には、紅なるやなかりけむ、たゞ雪にまがへるをのみめであへるは、あかぬすさびにこそおぼゆれ。ひねもすあからめもせでうたひづらく、

すがのねの長き春日もくれなゐ
の梅さく宿は立ちうかりけり

川づらなる家にほとゝぎすを聞くといふことを題にてつくれる文

大伴氏の家は、代々佐保河のほとりになむありける。其の主は大ぎみのよさしのまゝに、天さかる鄙に年へませしが、うち日さす都にまうのぼりたまひて、卯月ばかりに、うるはしみおもほす人々を、佐保の家につどはしめて、うたげをなむしたまひける。われわくらはに其のつらにかずまへられて行けるに、門には馬くるまさはに立ち竝み、母屋に小簾かけわたし、壁代を垂れて、麻もよし紀氏なる、あしびきの山の上なる、あらたへの藤井なる、これかれ玉だれの小瓶を中にすゑて、あまたゝび汲みかはせり。いでや佐保の内の柳かづらくより、三笠の山にもみぢをかざすゆふべ、阿騎の大野に鳥狩するあしたも、いまさざりし程は、にほひうすき心地しつるを、あら玉の年の五とせ經て、まさきくてまうのぼりたまひ、かくしもろともにうたげする事よと、よろこびにたへずして、さかみづきするに、あるじの君も、面やめづらしなどうたひ出した

まへり。人々醉のすさびに、河づらにかまへたる高殿にのぼりて見わたせば、佐保の山に竝みたてる松の梢に、夕月ほのかに見えて、にごりなき河水にうつろへるに、ほとゝぎすさへしば／＼名のりて過ぎぬるは、人皆の思ひたらへる夜のさまなりけり。そが中に或る人盃をとりて、

うるはしき友にあふ夜をなれすら
も空にしりてかこよ鳴きわたる

我等そのむしろのはしつかたにさもらひて、

うちのぼる佐保の河浪立ちかへり
なく音めづらしもとほとゝぎす

とぞうたへりける。

隅田河に船を浮ぶといふを題にて

玉くしげふた國の橋よりもこなた、さき草のみつまたの江に舟よそひして、隅田河原に漕ぎのぼらむとす。そも／＼このあづまの遠のみかどは、古へのおしてる難波高津の宮の御津なして、日の經なる日の緯なる八十のみ國ゆ、千々の大船のつどへる入江にかたつきて大城を、しめたまへれば、大江門としもいふなりけり。いでや赤駒のはらばふ田ゐ、水鳥のすだくみぬまも、都なさぬ方しもなければ、蘆荻しげれる隅田河原も、百舟きほふ川ととなりてゆ、今いく世にかもなりぬらむ。かくていや河のぼりて見わたせば、ひんがしの里には、八束穗つめる稻置のもとに、國風うたふ聲たえず。西の岸には、家竝みしきて、かまどのけぶり千里に滿ちぬ。三とせまでおほんたからがえだちを、ゆるさせたまひし大御世や、かくこそありけめ。ふりさけ見れば、狹衣のを筑波高ねたゞ此の水上に神さびたち、かへり見すれば、夏麻引く海上がたの沖つ浪にぞつゞくなる。やがて月のみ舟とともに、かよりかくより木の葉なすみだれ出づめる舟屋形に、百の物の音ならしたつれば、月の光もいやてりまさりて、水の面は櫛笥にのする鏡の如し。げに橋の名をふた國といへるは、武藏と下總とのあはひなればなり。河の名をすみだ河とおほせしば、月の影と物の音とによれりとこそいふべかりけれなどいひあへり。かゝれば人々歌よみしつゝ、かけまくもかしこけれど、古へをおもひ今をあふぐはや、ころは葉月なかばの事なりけり。

水上の遠つ筑波の高ねより海原か
けて照れる月かも

人の世も吾が世も常にあらませば
八千代もこゝに月を見てまし

藤原濱臣が泊洦舍にて蓮を見る辭

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水のほとりにさゝなみや志賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。白妙の富士のみ雪もきえ、あらがねの土さへさくといふなるころ、人皆涼みせむとて其のやどりにつどひて、高きやにのぼりて見わたせば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにてはありける。おひたてる葉のひろごりたるは、宮路ゆくうまびとのきぬがさの如く、浮きたるは、大庭に百の司のわらふだ敷き竝べたる如く、葉に置ける露は、白玉の五百つ集ひを解きみだしたるになむ似たりける。池の水淸らに澄みて、あそぶいろくづ思ふ事なげなり。人々衣の紐を解きさけ、おばしまに寄りゐて、酒汲みかはす程、彼の岡の木高かる瑞枝吹きこす風のすゞしきに、えならぬ香のかをりくるもたとしへなしや。彼方の岸より中島まで、長き堤をつきて、石もて作れる橋かけわたせるは、もろこしの西の湖とかいふめる所のさまかけるかたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖のにほひさへなつかしく見ゆ。あるじは吾が國ぶりの歌つくり、書見ることをしも好めるが上に、ことくにの書をさへに、朝夕べの友とせりければ、さるかたの友垣にしも乏しからず。唐歌好める何がしの博士は、さにぬりの小舟にからをとめ載せて、此の花折らせまくおもひ、日の入るくにのますらをの法に心をよするは、これぞこの上の品のうてなに生れ出でたらむ心地するなどいひあへりけり。人々心心に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで住む人の友と見るべき花ぞこの花

かくて上野の岡の入相の鐘、木の間しのぎてひゞきわたれば、み盛りに開けたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりたるも、あはれふかゝるものから、遠方の梢の鷺すらねぐらもとむるものをとて、人々あがれかへりぬ。

初雁を聞く辭

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、ひとり高き屋にのぼりて、七つをのを琴をかきならしつゝ、秋の風の言葉をうそぶき出せるをりしも、遠つ人初鴈がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ見さくれば、姿は雲路になむ消え失せぬ

る。いでや白雪の舊年よりしも、はねならはしつゝ、かげろふの春立ちそむるあした、日影うら／＼とうち霞めるに、軒近き篁にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより、笠にぬふてふ花のかをり滿てる枝に來ゐつゝ、ほこりかにさへづるは、めでたき物から、雲にたぐへし櫻も散り過ぎて、青葉しげき木の間を立ちくゝ聲のむくつけきには、待たるゝ物はといひしに行きたがへてぞおぼゆるかし。池の藤なみ夏かけてにほへる頃、ほとゝぎすの、それかあらぬかとたどらるる一聲より、花橘のゆくりなく香ににほへる曙、あり明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過ぎ行くは更なり、小雨そぼふるゆふべ、物思ひにいを寢ずして更け過ぐる夜半に、をち返り鳴くを、誰やし人かあはれとおもはざらむ。然はあれど、山かたつけるわたりには、こちたきまで飛びかひつゝ、梢にしもおりゐて高やかに鳴きとよめるなどは、今一聲のといふべくもあらずうれたきや。そも／＼鴈は、常世の國をや出でけむ、三越路よりや來ぬらむ、ある時は眞木立てる荒山のあしたの霧にむせび、ある時はみるめ刈るやしほぢの夕べの浪をつばさにかけて、草の枕だに結びあへず、天路はるかにおもひあがりて、夕暮の雲のはたてに、聲はを舟漕ぐ唐艣にかよひ、姿は薄墨にかける文字に似て、一つら過ぎ行きつゝ、遠方の田づらに落ちくるさまさへ、おほどかにして、其の時しも荻の葉におとなふ風、萩が枝に亂るゝ露、くまなき夜半の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たび打ちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなるをりに逢ひぬるが、限りなくめでたくなむ。また別けていぬる春べには花を見捨つるなどとがむめれど、しづけかるみ山の花をつばさにしめむとて、都の空をいそぐならむと思へば、そもはたにくからずこそ。鴈よ／＼、なれこそはわがおもふどちなりけれ。

われもいざ秋をあはれぶ友どちの
つらにはもれじ天つかりがね

蟲撰の詞

秋のあはれは蟲の音ばかりなるぞなき。いで武藏野の原にしもきゝてむ、家づとにもしなむとて、葉月の廿日ばかり、白妙の袖ふりはへ、ぬば玉の駒並めつゝなむゆきゆく。ふぐし持たるをとめに問へば、こゝなむ武藏野の原なりといふ。かぎりも知らぬ淺茅生のうへに、たゞ富士のねの

みぞいちじるき。かくて見わたせば、夕べの霧はものゝふの小手指原にたち、入日の影は赤駒の足柄山にかくろひぬ。やがて野づかさにおりたちつゝ、つい松ふきたてゝ、さかなまうぼり、汲みかはすほどに、月はるばるとすみのぼれば、置ける露原みな玉をしきなせり。此の野らのさまは、人のかたれるよりもげにかぎりなく、鳴く蟲の聲は都にて聞きつるよりもいとことにて、ますらをとおもへる人々らも、えたへぬなげきをなむしける。うけら、かるかや、はぎ、すゝき、分けに分けて、をちもこのもゝあさるまゝに、千々の蟲はかず／＼の籠にもみちにたり。そもそもこと狹きつぼのうちの草むらに聞きて、秋のおもひをやらむよりも、かく大野の心もひろに出でたゝむこそ、まことにますらをのあそびなりけれ。かくしつゝ秋てふ秋はとひ來たらむと、野守のをぢにいひて、うちつれて歸りぬ。

むらさきの根はふ萱原入りみだれ
秋なく蟲の聲をきくかな

隅田川のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文

葉月はつかあまり、秋のけはひのなつかしくて、例のすみだ河のほとり、石濱のいほりに行きてやどりぬ。有明の月のにほひも、霧立ちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱ふけるいほりなれば、音だになくて、軒のしづくの三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色付きたるが、ほろほろと散るもあはれなり。水のおもてはうごくともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらで、とはに花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞淸水の落ち來るならむ。うち向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるはさすがにほのかに見えて、其のひま／＼より、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう／＼にうす墨もてかきけちたらむ如く、いとしもはるけきは、たゞなびかぬけぶりとのみぞ見ゆる。こゝかしこより、烏の飛び行きつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげにおき出でゝ、河の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より

筏師の蓑笠きて、棹を筏の上によこたへ、おのれたむだきて、おもふ事なげにてをり、いかだは水のまにまに流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり行く人の、やがて堤をあるくさまも繪によく似たり。すべてひと日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、限りなき青海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてやゝ夕ぐれ近く成りゆけば、むら鳥のおのがじゝねぐらもとむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはむかたなし。暮れはてゝも猶行く水の色のみ遠白くのこりて、川添小田にいはへるみくまりの神のみ火の、海人のいさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田河たが
　墨がきのすさびなるらむ

秋の山ぶみといふを題にて作れる文

名のみ聞きわたりて、見まくほしき山河はしも限りなきものから、先づ隅田川の北に聳えて、とはに目なれぬる、ころも手の常陸の國二並の筑波の山の、かけまくもかしこき朋神のうしはきいますみ山にして、いにしへ日本武の御子の命、あづまの國むけませし時其のあたり過ぎ給ひて、いくよか寢つるとうたひ給へる大御言の葉さへ世々に傳はり、その後丹遲比の眞人此の山にのぼり、また大伴の宿禰ぬしをみち引きのぼれる人の歌にもいちじろければ、かのみ山に登らまく思ひつゝ年經ぬるを、年毎ににひ桑まゆの絹もてひさぐをなりはひとせるもの、みやび事好めるが、しば／＼まで來て、秋のなかば過ぐるころ、國へ歸りぬべし、いかで思ひ起したまへ、名だゝる嶺にも從ひ侍りなむなどいへるまゝに、年ごろしたに思へりし事も、今なむはるくべく思ひなりて、二人三人あともひつれて出で行く。かのひさぎ人は、尾花ちるしづくの田居を垣つ田にしめて、家居つき／＼しく住みなしたり。其の家に憩ひて、共にみ山に登らむとす。あしたの霧の絶間より、木々の紅葉このもかのもに匂ひ、分け行く山路はやゝうら枯れにたれど、八千草の花猶色をつくせり。蟲の聲もそこはかとなく聞えて、げに春見ましよりといひけむもうべなりけり。やう／＼登り行くほど、み山おろしに霧晴れわたりて、

國のまほらもつばらに見わたさる。足穂の山はそがひにしみさび立ち、みなの河は源二をのかひより湧きいづる眞淸水にて、末遠白く流れいぬめり。すそわの田居遙に色付きて、鴈雲井よりおち、端山のしもと陰しげくして、鹿の聲かすかなり。かくてわれも人と紐ときさけて、酒汲みかはしつゝ、岩根に尻かけてうたへらく、

つくばねの嶺の秋霧しのぎ來て昔の人のあともふみ見つ

八月十五夜家にておのおの題を分ちて文作れるに山里の月といふを題にて

耳になり弭のおとを聞かず、目に旗手のなびきをしも見ぬおほん時代に逢ひては、何事につけても憂しとわびしと怨みかこつべき事やはある。されば世を避くとしもあらねど、あきじこる市のちまたに近き賑はしさをいとひて、此の山ざとにはうつろひ住めるになむありける。秋こそ殊にといへるもうべなるかな。籬のもとにたゝずめる小鹿、松に木づたふましらの聲も、ひとりある人をなぐさむるに似てあはれなるに、茜さす日も入りはて、そまびとの斧の響絕えて、端山のかひより月さしのぼれば、そがひの嶺よりおつる瀧つ瀬は、こがねの色の絲引きはへたらむ如く、岩に碎くる水は、白玉をこきちらすとぞ疑はる。とこしへに淸らにして、物にとゞこほる事なきを、吾が心とはせんとおもふに、たぐへてむものはなぞ、たゞ月と瀧つ瀬とのみ。

雨岡がり行きて黃葉をめづる辭

古へより人のわきかねたる、春と秋とのけぢめは、末の世に明らめはつまじければ、たゞ春は春をめで、秋は秋をこそあはれむべけれ。久かたの星の逢ふてふころ、荻の上風身にしみそめてより、さを鹿の妻とすなる萩が花に眞袖をにほはし、遠つ人、はつかりがねに玉章の便をかこち、中ばの秋の月の光には、千里の外をおもひじに、はや峯の柞野べの淺茅のうつろひゆくより、草木ことごとくただならぬぞ秋のあはれのとぢめなりける。こゝに大城のとのへの北に近つあふみの比叡をまねばれたるみ山あり。其の麓はかしこになずらへて、坂本となむいひける。そこよりも奥まりたるあたりは、殊にいと淸らに、しづけさいはむかたなし。いざこゝに我が世はへなむとて、はやく住家求めつる人ありけり。この頃の時雨

だつ雲のけはひに、布留の山ざといかならむと、心しれる人々かきつらねつゝとふに、木高き松に枝かはせる楓の、色こがるばかりにそめなせるは、まことにもろこしの淸き入江にさらせる錦も及ぶまじくて、さらでだに憂してふ事は聞きも見もせぬわたりには、斧の柄もくたしつべくおぼゆるを、ましてかく染めつくせる木のもとをば、いかゞは立ちうからざらむ。臥待の月やゝ梢を登り、淺茅が露玉を敷きたらむ如く見えわたるに、名に負へる長月の夜を長しともおぼえず、語らひあかしつ。色色のもみぢの中より、青海の波てふ舞をかゞやかし、あるは秋の川瀨に、もみぢふける舟を浮べては、わたつみの神のしらべをとゝのふるなどこそ、心行くわざならめど、うま人はうま人どち、やいつこはやいつこどちてふ古言の如く、これの庵の今日の遊びぞ、吾がともがらのたのしみのきはみなりけるはや。

うき秋といひつる人は山さとのもみぢの色を見ずやありけむ

雪を見る辭

あら玉の年の一とせ、ありとある心ずさみのとぢめに、雪こそ猶おもしろく心ゆくものはあれ。籬の千草も殘る色なく、軒のもみぢも散りはてて、たゞ龍田彦のうらさびませる、嵐の音のみはげしかりしを、いつしか風の音もしづまりて、雲のたゝずまひのどかになれるみ空より、いづこともなく落ちくめるは、風のさそはぬ櫻花の、心づから打散るなして、小笹が上にはたれふりたるは、霜の置けるさまに見えわたるを、やゝ降りまさりつゝ、千萬の鷺のとびかけるが如く見ゆれば、忽ちにあらはなりし梢には、隱口のはつせをとめが造りなせる白ゆふ花を咲かせ、常磐なる木々には不知火の筑紫の綿をかづけつゝ、見わたさるゝ檜皮屋も藁屋もひとつ色になりぬ。しかすがに松につもれるはをゝしく、柳にかゝれるはたをやかにして、くさ〴〵のけぢめ見ゆるもあはれなり。かけまくもかしこき九重には、雪の山をつくらしめ給ひ、百の宮人朱雀の大路をねりてまうのぼり、あるは摺衣きよそひ、駒にのりて、白斑の鷹を手にすゑて、交野の御野にきそひ出で、あるは網代車走らせて、道すがら笛吹きすさびつゝ、思ふ方をや訪ふらむ。あるは男女棚無し小舟漕がれ出でゝは、袖さゆるをしも忘るらむなど、目の前に見るごとおもはれて、面影にうかぶばかりなるもあやしき

や。入相の鐘の聲に爭ひて、猶暮れなむともせぬを見はやすほど、雪やみて、おほひふたがりし雲跡なくはれわたりて、月さしのぼれゝば、天つちの限り、おのごり戸邊が鑄なせる鏡をかけなべ、天の明玉が作れる玉を敷きみてたりとも、かくやはと思ふばかりてりかゞやける、はたいふべくもあらずなむ。

かくながら心のゆかぬくまもなし
月にてりそふ雪の光に

おなじ詞　唐うたの閨怨になずらふ

つれ〴〵とながめがちなる夕暮の空より、花にまがへて打散れるを、あな嬉しと見るほどに、小笹が枝もうち撓みて物思ひ顔に、ねぐらもとむる村鳥の羽風に、ほろ〳〵と亂るゝ雪さへ袖の涙にひとしう、しばし寒さも忘れて猶眺めゐつゝ、過ぎこしかたの事どもかきつめて思へば、かかるをりには必ず小簾のうちに空だき物くゆらせつゝ待つに、小車の音して中門の廊より入りおはして、ともに火桶に寄りゐて、雪とつもれる事ども語らひあかし、かたへ氷れる池水に、住みなれし鴛鴦のかたみにうは毛の雪をうちはらふをも、よそにやは見すぐしつる。格子おろしこめ、おほとなぶら影しづまりて、ともにふすま引きかづきては、窓の前の下折の音をかすかにおぼえ、後夜の鐘のひゞきを、物の庇に聞くらむやうに、おもはれし夜もありつるを、かくふるされし身は跡つけむ人もなきや、中々なるものゝいとさう〴〵しうなむ。あはれうなゐ子の昔、おまへの雪におりたちて、あこめしどけなう著ならしつゝ、童どち思ふ事なくて、まろばしあひしをりの心ながらあらましかば、かゝる物思ひはせざらむものを、白たへの雪の光に暮れがたきをかこち、早うしらみゆく曙を怨みこしより、はて〳〵は枕の氷とけむ期もなく、人やりならぬ思ひにのみしづむも、心なき雪にさへぬれぎぬきせつる罪のつもりにもやあるらむかし。いでやしら雪もあはれ世にふるたぐひぞと思へば、いとゞむつまじきかな。われさへ共にと思ふもかひなくて。

山水のかたうつしたる繪を見るといふを題にて

文机によりゐつゝ、程なき壺の中の草木をのみ憐みて、思ひ足らはせるにしもあらず、名ぐはしき吉野の山の奥をとめ、久かたの天の橋立をたづね、常磐なる松が浦島にわたりてぞ、心ゆくかぎりなるべきを、遠く

出でたゝむもいたつがはしくものうければ、いぶせき庵のうちに籠らひをるよ、ますらをのとごゝろなしとやいはむ。そもまた己がさがなればいかゞはせまし。いでや山田の曾富騰といへる神の　足ゆかずして、千里の外まで、心をはなちやりてむわざもがなと思ひめぐらして、山と水とのすがたを壁にゑがゝせて、心をしづめてうち對ふに、岩がねのこゞしき嶺より、漲りおつる瀧つ瀬あり、かたへのを岫より、横ぎりわたる白雲になかば絶えて、麓に落ちくるはそのひゞき聞きつべく、そが末つかたは道の面に造り出せる檜皮屋のもとまで流れたり。すだれ高く巻きて、三人四人思ふ事なげに語らふさまを見れば、我も其の人々にまじらひ居る心地す。木高き松に日蔭生ひたれて、梢にはましら群れゐつゝ、木の實もりはむなどもをかしきや。つゞら折なる山路を、手束杖曳きてのぼり行く人あり。童子琴をいだきて随へり。いづこへ行くならむと見れば、山のなからばかりの平らかなるに、黒木もてあづまや造りて、ひとり笛吹きすさべる人のもとをさして訪ふなめり。はるかに木立うちけぶれるひまくに、小さき家居見えて、細き棚橋わたしたるを駒に乗りて行くあれば、みなぎはの蘆間に、を舟浮べてさでさしおろし、あるは釣たるるなども見ゆ。朝な夕なこを見れどあかれぬあまりに、かの瀧のもとなる人の心をよみける。

心さへ澄みわたりけりとこしへにみなぎる瀧の音になれつゝ

笛吹きゐたる奥山人の心を、

吾が山の松の嵐よ世の中に笛の音をだに誘はずもがな

千足の眞言が古郷へ行くを送る詞

吾が友千足氏、舟きはふ津の國なる、夕日てる西の宮といふ所に、父母をなむおきたりければ、年毎にまうでたりけるに、父の翁は、こぞなむ廣田の森の秋の葉と過ぎいにて、須磨の蜑の藤の衣をしをりつゝあるに、この大江戸の家はた事さりがたしとて、卯月になむまで來ぬる。しかしてこゝにしも、其の心ばへおろそげならぬ程に、また其の時にしもなれりけり。おくつきにもまうでなむ、母刀自妻子にもあはましとて、玉づさの文月廿日あまりあゆひとゝのへて、道立ちせむとす。いでや烏がなく八十のちまたに、遠き近きをいはず、國々より來たりつどへる人は、いく百千てふかずも知られねども、

眞心もてあひかたらふ人はしも、ただいくばくもあらねばとて、いつゝたりやたり相つらねて、此の別れをなむをしむめる。かくて麻の狹衣(さごろも)たち別れなば、杣木きる足柄山の山風はだへにしみ、いはばしる大ゐの河の川浪をま袖にかけ、空にとぶ鴈、野になく蟲の音にも、いかばかりかもこしかた行くさきをしのびなむ。しかはあれど、ちゝのみの爾の御靈(みたま)は、天がけりても、天のたづ村我が子はぐゝめとこそおぼさめ。はゝそばの母刀自は、いはひべ据ゑなべて、つゝみなかれとやいはひまたすらむ。こを思ふに、友どちの別れ惜むはいとしもわりなきわざになむある。

　眞木立てる足柄山の夕霧にしぬゝ
　にぬれてひとり越ゆらむ

藤原の宇萬伎(うまき)が難波へ行くを送る辭

荒妙の藤原のぬし、おしてる難波の大城まもりにまけたまふまうち君につきて、文月廿日あまりに道立ちせむとす。今も猶土さへさけぬべき暑さをもさけがてらに、舟をうかべてこそ馬のはなむけはせめとて、沖つ鳥賀茂の大人(うし)、空かぞふ大伴のぬし、おうとなる、いみきなる、さき草の三つまたの江よりともづなを解きてまそ鏡すみだ河原に漕ぎのぼるに、鷲の住む筑波の山の嵐、志長鳥(しながどり)安房につぎたる沖つ風も、たゞこゝもとには吹きつどひつゝ、なかばの秋の空なむおもほゆる。やがて月のみ船も、雲の波をこぎはなれ、久かたの空も、水のそこも、ひとつにのみ見ゆれば、常見る所としもおぼえず。かはらけもあまたゝびめぐらし、言の葉も千千のなさけをつくして、人々此の別をなむ惜むめる。抑今のおほん代には、とゝのふる鼓の音をも聞かず、さしあぐる旗のなびきをも見ねば、千萬(ちよろづ)の軍なりともとうたはむは更によしなかるべし。たゞ吾がせこは、旅行きしらぬ新防人(にひさきもり)なしぬ。山をこえば駒のかけなは道引きたまひ、海をわたらば舟のへにうしはきまして、なにはの浦のなにはの事なく、御津の濱松みつるゝ事もあらで、よく行かしめ、よくかへらせたまへと、住の江の大神にあふぎふして、こひのみまつるはや。即ちによび出づらく、

　玉ぼこのちぶりの神もたすけなん
　旅ゆく君がゆくさかへるさ
　いかにかも露のちらまし旅人の庵
　せん野の秋のはつ風

難波潟たづのつまよぶあかつきは
古里いかに戀しからまし

月の宴の歌の序になずらへたる文

はたばり廣き錦織りかくる、木々の葉月のなかば、十まり五たりのまうち君たち、おほやけのいとまありて、眞心を菅原の君の釣殿につどひて、月の宴をなんしたまひける。この夜らや、天の海に雲のこづみもよせず、星の林も刈りそけられて、月の舟のみ眞帆に浮べれば、池のさゝ浪こがねをのべたらん如く、渚のまなごぢ玉を敷きたるにひとし。千五百秋はありとし、かゝる足り夜にめぐりあひてん事のかたかめれば、たゞにやはあるべき、吾が大御國ぶりにも、言さへぐ唐國ぶりにも作り出でつべき題をおもひめぐらしてよと、人々のたまへるに、は山の眞柴負氣なきものから、門田の稻置いなみあへねば、月を望みて遠方をおもふといふ題をなむ奉れりける。かくて、みやびをたちをはじめとして、玉だれの小簾の中なるたをやめのともさへに、おの〳〵よみいでたまへることは天の香久山に、神代のまゝの鏡をかけ、姥捨山をおもひて、千里の外に心をすまし、須磨の海人の苫屋をうらやみて、はるけき汐路の海松をかり、あるは淸見潟をしのびて、富士のねの雪と月とを心にうつし、あるは弓槻が嶽にさしのぼる影を足痛の河に待ちとり、領巾振る山にのぼりては、唐土かけて思ひやれる、言の葉の玉の數々のたびはてゝ、りちの音をとゝのへ、秋風の調べをあそぶほど、月西の空にかたぶけり。今宵のみやびごとをしも書きつめて、後のおもひ出草にをとおほせたまふに、われら心は、をぐら山のふもとの鹿の、かゝるむしろに列れるは、いけるかひにと音に立てつべく、よろこぼしきあまりに、大かたの世のそしりをも、人皆のあざけりをもかへり見ずして、たゞ月よみの神のみかげを仰ぎつゝ、ふんでをくだせるになむありける。

ある人の七十の賀の序

御代の名をゆたかなる大御政といひて、四の時七たび立ちかへれる年、何がしの翁が七十ぢになん滿てりけるを、其の子むまごほぎごとするに、時はしも君が代を長月のなかば過ぐるほどなりければ、菊をめづといふ事を題にて、疎からぬ人々に、文作り歌よませける事なむありける。抑いにしへ、大みあらかに、臣たちつ

どはしめ給ひて、菊合をなさしめたまひし時、あるは吹上にたてる白菊を、浪の寄するかとうたがひ、あるは大澤の池水のうつろへる影をめで、あるはむらさい野に一もとにほへるをもてあそび、あるは田蓑の鳥の花の雫にぬれん事を思ひ、あるは白たへの袖かとたどり、あるは露の間に千年へぬるをおどろけるなど、くさ〴〵のみやびは、いとも〳〵かしこくて、まねび出でんきはにしもあらぬものから、かく鳥が鳴くあづまのはてより、不知火の筑紫のきはみまで、國津御神のうらさびなく、立つ波のさわぎ絶えて、靫かくる伴の雄より、秋田刈る賤男らさへに、みやびごとに心をよするおほん時にあひて、おふな〳〵其のおほん惠をしも悦ばさらめや、樂まさらめやとて、この翁が七十ぢの今日よりしも、百といふ代を經なむ事は、菊の下ゆく流れを汲みけむ唐人にしもあえなむといふことを、今日のよごとのほぎごとにぞしける。おのれそのつどひに加はりたれど、かの菊合にみやびは盡されたれば、今更何わざをかせん。しかはあれどたゞにやはとて、うちはらふにもといへる歌の心もて、しもとのむすび机を、ませとおもはせて、黄金色なる菊の花の枝に、きぬの袖うちかけたるさまを、おろそけなる洲濱につくりて、翁をぞいはひものし侍りける。其の時の歌、

仙人のおほせしたねの菊の露かけて千年のかざしにぞ折る

花を惜む詞　手習の君になずらふ

思はぬ山にと、のたまひおどろかしたまへるあはれさはさるものにて、をさなかりしより、うつくしとかたみに思ひまつはふる小君にさへ、ことだにかはさゞりしを、いかにうらめしうおもふらんとおもほすにも、いとゞせきあへたまはず。年かへりても、なほ殘れる雪は、春としもなき山かげながら、鶯のうら若きこゑは聞きすてがたくて、垂れこめがちなるいよすかゝげさせ給へば、嶺の霞のみぞさすがにのどけう見わたさるゝ。春のけはひもやう〳〵ねびまさりて、軒近き櫻のひもときそめしより、まぎるゝ事なく、しづかにうちむかふに、八重なるは、あまりにまばゆきまで花やぎて、うたてすきずきしう見ゆるものから、よになつかしきにほひは似るものなく、一重なるは、さまおくれたるに似たれど、こまかに見れば、いとらうたげにまめだちて、かをりことにふかう、いづれをいづれとわいだめがたくて、

ありし世の人々になずらへられて、われながらつみふかきまでおもひしみつゝ、露にぬれたるあけぼのより、かすめる月のかくるゝまで、あからめもし給はぬまゝに、御行ひもおのづから怠りがちにておはします。日数へてひとつふたつ散りそめしより、やがて風をだに待たで、心よわうみだるゝを見るには、あかで別るるおもひにひとしくて、常なさを思ひ知りたまふ御心さへいづちいにけん、涙のつきせず流るゝを、手習ひにまじりたる、二もとの杉に、たはぶれごといひあてられしに懲り給ひて、色には出でじとのみ、ひたやごもりにうちしのびおはさうず。御かたへさらぬ侍従こもきが、あやしと思ふらむさまを見るにつけても、昔の右近ならましかば、問はずがたりし出でつゝ、なぐさむわざもあらましものをと思へば、いとゞひがたきを、まぎらはして、文机にのみよりつゝ、珠数引きならしおはしますに、山風に散る花の、御袖にとまれるを、つくづくと見たまひて、

　今更に心とめじと思ふ身をうたて
　　も袖に散る櫻かな

昔はまたもと、御心のうちなりけんを、たがさがなさにか。

　春の山ぶみといふを題にて

ひと日のすき影は、なほ忘れたまはず、またなむ小野の山踏せむとのたまひて、御心しれるかぎり、四五人御ともにて、ことさらにやつしたまひて、しのゝめの空明けわたるほどに、御馬にて出でたゝせたまひぬ。頃はやよひのなかばなれば、一條の大路うらゝにて、加茂の川瀬の波のおとも、のどかに聞きなさる。はるかに歩ませたまふまゝに、田舎だつけはひもめづらかなり。八瀬とほりぬと口ずさみ給ふ御心のうちぞいとほしき。やゝのぼり行く道すがら、炭やくけぶりに立ちかへて、霞わたれるをちこちに、散るさくらあれば、今開け初むるなどもあはれに見ゆ。たえぬ涙といひけむ瀧の白絲は、くり返し見たまへども、猶あかずおぼしておりたゝせたまふ。かへり見すれば、はや都のかたは雲霞のみして、八重の潮路を見やる心地す。こなたかなた逍遥したまひて、苔をむしろにまとゐしつゝ、御わり子とうでゝ、人々にも御酒たまひなどす。黒木こる賤ならで、行きかふ人もなければ、所せき御身には、いとよき御遊び所なりけり。人々かしこまりければ、醉ひしれて、あるは岩ほにしりかけ、

あるは木の根によりゐて、青やぎつづしりうたふも有り。げにかた絲によるてふ鳥も、うしろやすげにさへづるは、都にて聞きしにまさるのどけさなり。君さくらの枝をけしきばかりおし折りたまひて、

なべて世の色香には似ぬ花の枝を
たれによせなむ春の山ぶみ

いとさう〲しうとてたまへりけり。かにかくに思しはなたせ給はぬなめりとおもへば、とりあへず、

山びめの君を待つらむ心をも世に
似ぬ花の色香にぞしる

などなぐさめまゐらせつ。はるけき木のもとに、山がつならで、清げなる童の蕨折るさまも、所がらにぞいと興ある。立ちよりて見れば、過ぎつる御山ぶみに、女車に添ひゐて、はかなき御返しもてこし童なれば、あこはいづこよりかく山深くはものしたまへると問へば、此山陰におはします御もとよりといらふるが嬉しくて、そはいかなる人のおはすにかと、かさねて問へば、あなむづかしとて、歸りなむとする袖をとらへて、せめて聞けば、故帥殿の姫君なむ、父君のもたまへりし御莊にこもり住みたまへるなる、あてにおはするものを、しり奉る人なくてと、まゝなどはわびあへり。遲しとや尋ねたまふらむといふ〳〵別れ行く。しりにたちてしばし行きて、この山もとに小柴ゆひわたしたる門より入るを見つつ、有りしかたへ立歸れば、君、ちるといふなる鐘の聲もしづ心なくて、今なむもとめさせつるとのたまふ。たそかりつるはかゝる事なむ侍りぬるときこえまゐらすれば、例のくまなきすき心かなとあざみたまふやうなれど、御心のうちはおしはかるべし。山蔭の花こそとてそゝのかし奉りて、やがており行きて見るに、門守もなし。中門のすいがいのもとまでいさなひ奉りて　しばしためらふほど、あづまをかきあはする聲いと艶なり。壺のうちにも、八重なる、一重なる、咲きみだれて、つばなまじりの菫は所せきまでにほひあへり。かの童の聲して、人のけはひす、いとあやしといふが、中々にうれしうおぼゆるに、やがており立ちて、すいがいのもとに來るを、ひそかに呼びて、遠き山路にいとこうじたまひぬ、簀の子をだにゆるしたまひてよといへば、中門をひらきて入れ奉りぬ。ふりたれどさすがにゆゑづきて、小簾のうちのかをり、むかしおぼえてなつかし。いかでまほならずとも見せ奉らまほしけれど、簾のうちに几帳たてわたしたれば、見ゆべ

うもなし。あづまは引きさして、やをら身じろきたまふきぬのおとなひ、よし有るさまなるにも、遠山鳥のおもひやしたまふらむかし。童いかにいひけむ、年のほど四十ぢあまりにやあらむ、いとなれたるさましたるが出で來て、君を見奉りて、ゆくりなくきこえ奉らむは、もつしとやおぼすらむ、されどかゝる御よすがならでは、きこえまゐらするたよりも侍らねば、念じあへで、しのびてものし侍るなり。過ぎし御山ぶみに、消息せさせたまひつるは、後にうけたまはれば、殿の三の君にておはしますとか、御母君にわらはにて仕へ奉りて、なれきと呼ばせたまひしが、さる事によりて、久しうあがたわたらひし侍りて、後に故師殿につかうまつりしなり。姫君いわけなくおはせしより、まつはしたまひて、今なむ御後見だつ人も侍らぬば、かひなけれど、玉の緒のかぎりは、かくてさぶらはむとてなむ。蕨折りつるわらはは、わが子にて侍るが、こも今はよるべなくてこの御館になむさぶらはせ侍りけれ。姫君いかで御宿世あらばと、たのみをかけぬ神しも侍らずなむなど、いとこまやかにくづし出でたり。かくうちつけならむもかたじけなきわざに侍るめれど、春の錦になれたまふとも、み山の花をなおぼしすて給ひそとよとて、うち泣くをあはれとおぼして、

雲かすみ千重にへだつる花の香を
袖にをうつせ春の山風

とのたまへば、いと口とく、

袖の香にけたれもやせむ奥山のいはほの中の花のにほひは

時うつりぬ、あやしとやおぼすらむとて、すべり入りなんとするを、いかで御聲をだに聞かせてよとのたまへば、などしかにはかには、いまなむおどろかい奉らば、よづきたまはぬ御心には、かへりて疎みたまはむと、いとゆゝしうぞおぼえ侍る。後瀬しづかにおぼしのどめたまへかしといふ。君はおぼつかなかりし山中に、よぶこ鳥のたづきを得たまへるは、さすがに嬉しうおぼしめすべし。月もやゝ更けゆくまゝに霞みわたりて、所からなる朧の清水さしぐまれつゝ、立ち別れたまひぬ。

寛政七年四月三日二荒の宮の御前の舞樂を見侍りし時、宮のおもと人岸本土佐守利貞主のもとめによりて書きておくりけるふみ

一木二木の軒の櫻も、いつしか跡な

く散りはてゝ、所えがほなる八重むぐらにとぢられつゝ、いともいぶせき菴のうちに、明けわたるをも知らで朝いせるを、今は人もすさめぬ鶯のなきごゑに驚かされて、やをら起き出づれば、柴の戸おし明けて入り來る人あり。こたび宮の御前に樂所の人々をも召して、樂せさせたまふを、よそながら見奉る事をなむ許させ給ふといふ。かけまくもかしこきみぎりををがみ奉らむことだにあるを、かゝるおほん時に逢ひ奉る事よと、たゞ泣きに泣きぬばかりおぼえて、手を折りて待つに、はや其の日になりぬ。たつか杖によりて、かのみ山によぢのぼりつゝ、人々と共に、御園に入りて、高やかなる木立の陰にかゞまりゐつゝ見わたせば、南面ははるかに山高く聳えて、東の方の谷陰に橋かけわたされたり。山のふもとに、かうけちの幕引きわたして、大鼓鉦鼓を据ゑ置かれ、鉾立てならべたるが、青葉の山に映え、夕日の光にかゞやけるは、夢の中に天つみ空にのぼりて遊べらん心地して、うつゝとしもおぼえず、たゞあからめもせでまもり居るに、橋のあなたの木だち茂れる陰より、物の音かすかに聞ゆるは、まゐりくる音聲にてなむ有りける。おのづからなる山路と見ゆるわたりより、裹頭樂を遊びつゝゆるらかに歩み出づ。色々の綾錦こきまぜたるが、若葉さす木の間に、かつかくれかつあらはるゝさまは、暮れていにし春のふたゝび立ち歸り來て、梅も櫻もまた更ににほひ出でたらむやうに見ゆるに、やう〳〵御前に出でゝ、一の鼓を舞ひ、三つの笛を吹き合せ、三つのつゞみをうちならせるひゞきは、空ゆく雲もたゞよひぬべく、列なれる舞人の袖の夕風にふきかへさるゝさまは、聖の御代にあらはるてふ鳥のおり居てあそぶらむも、かくやあるべき。舞はてぬれば、狩衣姿の司人たち、御階をくだり、大庭に沓引きならしていでくるは、舞人にかづけものせさせたまふなめり。かくて萬歲樂、桃李花、散手破、陣樂など、すぎ〴〵に舞ひつゝ、しばしいこはしめたまふあひだも、御園のさま見すぐしがたくて、かたへの芝生のうへ立ちもはなれぬほどに、又なむ物の音のきこゆるにすゞろにあくがれ出でゝ、ありつる木のもとにうづくまりぬ。太平樂のおごそかなる、喜春樂のみやびなる、陵王のいかめしきなど、目もあやなり。

　よろづとし御世安かれと宮人の立ちまふ袖ぞのどけかりける

舞人のかざしの花のにほひにも春
　をよろこぶしらべとぞ知る
菖のねの長々し日も入りあやの袖
　のにほひはあかずもあるかな
などひとりごたるゝに、日もやゝかたぶきて、まかで音聲に長慶子を遊びながら、橋うちわたりて入りはつるまで、ひたぶるに夢とのみおぼめかれつ、かごかなる窓のうちに夜晝むかふ古きふみにも、物がたりぶみにも、かゝる事なむあるを見るたびに、いかで夢にだにこの御有様を伺ひ見奉らまほしく思へりし年頃のねぎ事を、神もあはれとおぼして、唐人の五十ぢの夢に似かよひたる夢をしも見せたまへるならむと、嬉しくおもふ〳〵、かの御園をあがれ出でて、いつしかもとの葎が門にかへりて後こそ、夢ならざりしことをおぼえ侍りしか。玉の緒の限り忘るべくもあらぬ物から、うがらやがらにもきこえまほしくて、かいつめむとはすれど、中々にふんでの及ぶべき事にあらずなん。さて彼の御園に入ることを許したまへるは、利貞朝臣が導きたまへるによれるなれば、かしこまりに堪へずて、よみ侍る。
　なべて世のたぐひとや見むくれ竹
　の御園にかへす舞の袂を

歌づかの記

歌塚なりぬ。その起れる事のよしは、豊國中津知りたまへる奥平の君昌古へを好みたまひ、人をうつくしみたまふあまり、香取の賤男、魚彦といへるものを召して、かたらひ給ふついで、魚彦がいへらく、抑文に歌に、古人の書きたるまゝに、千年の末に殘り侍らば、千年の先をしのぶ便なるべきを、今はた殘れるがいとまれらなるを、惜み侍らざるべけんや。今の古へを見る如く、千年の後に、今のをづゝのいかで殘らむ事を、ここらの年月思ひめぐらし侍るに、巖もて作れる櫃にをさめたる物の年をへて朽ちせぬたぐひあまた侍れば、しかしてひめおきなむ事をねぎおもひ侍るとまうす。君うべなひたまひて、やがてかたへの臣たちにおほせて、これをなむつくらせ給ひける。さて淸らなる所をえらび給ひて、竹芝のいそべなる、東海寺の眞珠院の壺のうちになむ、その櫃をこめられて、そがかたはらに石ぶみをたてゝ、歌塚てふ文字を君が御手して書かせ給へる。歌に文に、おの〳〵かの塚にこめよとてなりけり。百千々の代代をへぬとも、此の石ぶみのかけすくづれざらん如く、もろびとのみやびも朽ちせざらむかも。安永九年や

よひ橘の千蔭しるす。

上總國菊麻八幡大神の神主根本常陸介佳胤が碑の銘

于志名者佳胤姓者平朝臣奈留代々上總國市原郡菊麻郷八幡大神乃神主奈留我、父相武主身罷弖、後祖父胤滿主爾養波比生立奴、寶曆乃九年爾當年從五位下之位乎賜利常陸介爾任計奴、無程胤滿主身罷弖家乎繼利、此于志眞爾大神爾仕奉利弖御社乎修米理留久事不怠之弖、彌整保利整利保、益足良比足良比伎、又皇御國乃古留奴書乎觀、歌作留事乎好弖、吾縣居翁乎深久貴美、翁爾物學留多伊勢人本居宣長我學乃道乎、志奴毗、且自己思得留多事等少奈可良受佐留乎寛政乃七年爾當留年乃正月從病弖、同年乃七月八日毛奈爾齡五十萬里四爾之弖身罷給留比奴眞子邦胤其家乃法以弖葬乃業之弖、蒲萄山爾石構、奥都建天而、後名乎豐八尺瓊靈刀奈母稱閉計留、邦胤悲爾不堪之弖、碑爾記須信伎言乎宣長爾乞比計留、宣長諸那比弖歌作弖贈里計利、其歌、

無世爾母、由良玖奴那登乎、遠音爾聞弖、隱去之、豐八尺瓊乃、比加理志所思

故此于志乃常乃行狀乎記弖、自己書刀弖具於能禮爾乞、其名乎太爾永世爾不朽之米萬久念布波同自心奈留我郎弖筆乎執弖碑爾記都、寛政八年丙辰七月橘千蔭文幷書。

縣居翁の筆のあとをゑりて千歳筵と名づけたるそれが序

手かくわざは、古へ物のまじるしに出できはじまりたるなれば、よきあしきあげつらふべくもあらぬすぢなるものから、古へ人の書けるあとを見れば、心さへ清らにおぼゆるは、いかなる故にかと思ふに、其の古へ人のすなほなる眞心の、おのづからふみでにあらはるゝによりてなりけり。わが縣居の大人は、古への學びの道をしも導き給ふを眞心にて、手かくわざをむねとせられつるにはあらねど、書きたまへるあとの、おのづから古へ人のさまにかよひて、わがともがらの、人の跡をならひて、そのかたちをうつしうるたぐひにしもあらぬは、眞心の古へ人に等しかればなるべし。吾友藤原千任その書きたまへるをひろひ集めて、板にゑりて、世に傳へまくするよ。こもまた深く古學をたふとめるがあまりなりけり。かれ其のはしにしるしつ。

萬葉集佳調序

春山の花にふれては綾なき衣もその香にそみ、秋野の萩をわけてはやつるゝ袖さへ其の色に匂へり。されば

上つ世の歌を常に心にしめなば、くたれる世にあれ出でたりとも、おのづからその姿にうつらざらめや。ここに長瀬氏、しらぬ火の筑紫の海の八汐路をへて、このあづまの遠の御門にいたり、ねもごろにいにしへぶり語らふついで、旅のやどりの心なぐさに、萬葉集のうちのすぐれたるを、ながきもみじかきもえらび出で、朝よひに目馴れて、すなほにしてあつく、みやびにして雄々しきしらべをまなびなんたよりとせばやと事はかりす。さはいへ、故郷にかへらむ月日もほどとほからねばとて、とくよみはてゝ、ひろひ出せり。もれたらん後にもとてなん。さてかくひろひ出でたるを見れば、さながら春秋の野山のにしきにたちまじれる心地なんしける。かれそのはしつかたに書きつく。

蒼生子家集杉のしづえの序

花をこひ月を思ふにつけても、心々を見たまひけむ古へのためしは、かけまくもかしこきものから、そも猶事につけつゝ、いひ出づる歌にしも、人の心はあらはるゝものぞかし。荷田の刀自は、つぎねふ山城の稲荷のはふり、東麻呂翁の女なるが、よしありてこのあづまの大城のもとにまゐきて、年月をへにけり。ちゝのみの父の教を守りて、千代の古道ふりぬるふみどもよりして、後の物がたりぶみをさへによく見わたしつゝ、くらぶの山のたど／＼しきくまなく、朧の清水おぼつかなからねば、やむごとなきわたりにも、春の梅津のかぐはしき名をきこえあげて、鳥羽のわたりのとはに召しまつはしき。刀自の歌のさま、男山のをゝしきもあなるは、常の心おきて、いさゝめにもたをやめのくね／＼しきならはしなくて、賀茂のみたらし底きよく、淀の河水よどめるすぢしもあらぬ心から、おのづからいひ出づることもしかなめり。されば音羽山の音にきゝて、栗栖野のくる人多く、鞆岡の友垣にしも乏しからずなむありける。おのれのいわけなかりしより物學べりし水鳥の賀茂の大人は、彼の荷田の翁によりて、ふるきふみらも明められつれば、刀自がいろせ在麻呂、甥の御風らともに、武蔵野のゆかりあるが中に、刀自は殊に、深草の里の深くむつびかはしにけり。縫子は刀自に年頃物學びたりけるが、殘れる言の葉の、山の名に負ふ嵐の風にちりぼひなむことを、小鹽の山の惜みなげきて、さくら木にゑりて、長岡の

長く傳へなむとするに、此の集に名を記して、其のわき書いつけてよと請へり。刀自のおひたち、常の有樣は、淺草の金龍といへる寺のおくつきの石ぶみにくはしければいはず。抑荷田の翁よりしも、其のいろせ在麻呂此の刀自まで、稻荷山をのへに立てるすぎ〳〵に、其の名高かるは、いとしもめづらかに、めでたきわざならずや。かれこの集の名を、杉のしづ枝とおほするなりけり。

賀茂翁家集の序

石の上ふりにし世の事は、曇り夜のたどきも知られざりしを、いなのめの明け行く如くなれるは、わづかに百とせあまりになん有りける。しかはあれど、なほ物のけぢめ覺束なかりしを、朝日子の豐榮昇りて、八十の隈路のくまもおちず、明らかにしも成りにたるは、吾が縣居の大人をはじめとすべし。そが中にも、ならの葉の名に負ふ宮の古言、やゝわきまへ知らるゝ事になりても、其の心を得、その言の葉をひろひて、歌にも文にもまねびもちふる事はあらざりしを、わが大人、古言をやがて我が物になして、よきを取り、あしきを捨てゝ、歌にも文にも作られしより、千年の昔の言草を今の世にまねび得るたぐひも出できにけり。千蔭いと若かりしより、大人に從ひて、常の御有樣、のたまへりし事を、親しく見もし、聞きもしつるに、大人は今の世の人とは異にして、うち見にはさかしきかたはおくれて、心おそきさまに思はれしかど、たまさかにいひ出でたまへることに敷島の大和心をあらはし、一言としてみやびならざることなかりき。筆とりてもの書きたまふを見るに、五百年も經にけむ筆の跡の如くなむありける。こはあまた年、夜晝となく、古言をのみ心にしめて、家居より調度に至るまで、古へによりて、いさゝめにも後の世の事を耳にふれ、心にとめたまはざりしかば、おのづから古人の心に成りもてゆきて、其の心よりいひ出でもし、物書きもし給ひしによりてこそ、しかありけるならめ。かく古へにつとめ給ひし中にも、歌をば殊に心高くもてつけてものせられたれば、歌一つよみ出でたまへるにも深くかうがへ、あまた度あぢはへて、によび出でられしなり。歌のさまは、始と、中ごろと、末と、三つのきざみ有りき。始のほどは、物學びたまへる荷田の東麻呂宿禰の歌のさまにかよひて、花やぎ手弱きさまなりしを、中ごろより自らの一つ

の姿となりて、みやびにしてしらべ高く、しかもをゝしきすぢをよみ出だされ、齢の末に至りては、いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、誰も心の及びがたきふしをのみ作られき。その始のほどなるも、藍より靑しとか、宿禰よりも立ちまさりてぞ聞えし。をりにふれては、古事ぶみのいとあがれる世のさまなる、又古へののりとごとになずらへたる、あるは中つ世の催馬樂の謡ひものをまねびたる、あるは物がたりぶみによりたるなどは、其の代々の人のいひ出だせるに異なることとなくなむありける。さるを、一とせ加具土の神のあらびに、多くうせぬることそ、かなしむべきことのかぎりなりけれ。こゝに平の春海の翁、童時より大人にしたがへりしによりて、大人のみまかられし後、家の集ども、はたくさ〴〵のちりぼへる文らを、この翁が家にをさめおけるをかきつめて、板にゑりなむとせしに、さはらふ事ありて年月經にけるを、更に思ひ起して、歌に文にくさ〴〵の問答をさへにとりとゝのへて、十卷とはなしぬ。そも大人の遠つ祖をたづぬるに、賀茂の縣主成助のすゑにて、世世山城の國、相樂の郡、賀茂の大神のみやつこなりしを、師朝といひし世に、文永の十一年、遠つ淡海の國敷智の郡、濱松の庄岡部の郷なる、賀茂の新宮をいつきまつるべきよしのみことのりをかゝぶりて、彼の郷を賜はり、即ちその新宮の神主となりて、世々を經て、政定といひしは、引馬の原の御軍に從ひたてまつり、いさをありて、みはかしの太刀、甲を賜はりぬ。大人はかの政定より四つぎのむま子家信といへるが子にて、元祿の十年、岡部の郷にて生れたまひて、享保の十八年に、京に上りて、荷田の宿禰の教をうけたまひ、寛保の三年に、江戸にまゐ來たまひしを、延享の三年に、田安の殿より召さげたまひて、古への書の道の博士として、殊にめでさせたまへりき。大人よはひ老いて申文奉り、寶暦の十年に仕へをしぞきて、明和の六年十月晦日に、七十あまり三のよはひにてみまかりたまひ、江戸の南荏原の郡、品川の東海寺なる少林院の山にはふりぬ。眞淵といへる御名は、敷智の村の名より思ひよりてつきたまへりとぞ。縣居とはうつせみの世にませし時、庭を田居のさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、自ら家の名におほせられたるなりけり。今よりをち古への學び世にひろごりなば、いよゝ此の大人をたふとみ、且つ此のふみをたゝへなむものぞとて、そのことわりをのぶるになんありける。

[illegible]

椿園藏版

享和二年壬戌十二月發行

文化九年壬申九月再版

江戸大傳馬町二町目

製本所

瑞玉堂大和田安兵衛

琴後集

琴後集 一
琴後集 二
琴後集 三
琴後集 四
琴後集 五
琴後集 六
琴後集 七

琴後集序

和歌は詩也。短歌は絶句の類也。長歌は歌行の類也。六義既に備はり、抑揚頓挫亦詩の如く然り。余獨り藤式部の源氏傳を讀み、左氏莊周司馬遷の文、和言を以て之を爲るべきを知る。源氏傳以上何ぞ其れ聞く無きや。源氏傳以後何ぞ其れ之を繼ぐ者無きや。和文既に左氏莊周司馬遷の文有り。安ぞ唐宋八家の文無きを得んや。之を古へに求めて得ず、之

琴後集序

和歌詩也、短歌絶句之類也、長歌歌行之類也、六義既備、抑揚頓挫而如詩然、余獨讀藤式部源氏傳、知左氏莊周司馬遷之文、可以和言爲之、源氏傳以上、何其無聞也、源氏傳以後、何其無繼之者也、和文既有左氏莊周司馬遷之文、安

を今に求め、而して之を平春海先生に得たり。先生に琴後集如干巻有り。其の歌は則ちまた論ぜず、余獨り其の文を論じて曰く、記廿一首、序十八首、題跋十二首、書牘廿三首、雜文三首、墓碑二首、祭文一首、外に卅八首を集め、編文此の諸體を具ふ。唐宋八家別集の制に非ずや。升降前却分寸を失はず。文は其れ歩驟也。抑揚開闔、操縱起伏。文は其れ變化也。整齊にし

得無唐宋八家之文哉、求之於古而不得、求之於今、而得之於平春海先生、先生有琴後集如干巻、其歌則不復論、余獨論其文、曰、記廿一首、序十八首、題跋十二首、書牘廿三首、雜文三首、墓碑二首、祭文一首、外集卅八首、編文具此諸體非唐宋八家別集之制乎、升降前

て錯落、勃窣にして婉曲。文は其れ辭氣也。前提後襯、回抱初に接し、留筍後に待つ。奇峰突起、横雲山を斷つ。文は其れ形勢也。截然界有るは段落の文也。綿然相屬するは、過接の文也。上を承けて下を起すは、轉捩の文也。文を作つて此の數法を具ふ。唐宋八家の筆に非ずや。先生は獨り其の文に於けるのみに非ず。其の道を論ずるに於ても亦云く、我邦

却、不失分寸、文其步驟也、抑揚開闔、操縱起伏、文其變化也、整齊而錯落、勃窣而婉曲、文其辭氣也、前提後襯、回抱接初、留筍待後、奇峰突起、横雲斷山、文其形勢也、截然有界、段落之文也、綿然相屬、過接之文也、承上起下、轉捩之文也、作文具此數法、非唐宋八家之筆乎、

の道とする所は、周公孔子の道なり。周公孔子の道を舎て丶、別に道を我太古に取るは、吾未だ之を聞かざる也。故に和字は我が字に非ず。漢字を假りて我が音に充つる也。衣服冠冕、皆隋唐の制度也。百官有司、皆唐制を學んで稍之を變ずる也。律令格式、皆唐制を摹倣する也。博士は、明經文章、天文陰陽、律算音の諸家を立て丶、和學歌學の

先生非獨其於文尓、其於論道亦
云、我邦之所道、周公孔子之道、舍
周公孔子之道、而別取道於我太
古、吾未之聞也、故和字非我字假
漢字充我音也、衣服冠冕、皆隋唐
制度也、百官有司、皆學唐制稍變
之也、律令格式、皆摹倣唐制也、博
士立明經文章天文陰陽律算音

博士を立てず。所謂和歌博士は江匡房の戯稱より出づ。和學歌學の名は、之を古へに考ふるも、未だ之れ有らざる也。和學なる者は、儒者の本朝典故に通ずるの言辭なる已。歌學なる者は儒者にして歌を作るなる已。周公孔子の道を舍てゝ別に道を建つる者は、吾未だ之を聞かざる也。天笠に釋氏の道有り。後漢之を傳へて隋唐に盛なり。唐の詩人には

諸科、不立和學歌學博士、所謂和
歌博士者、出自江匡房戯称、和學
歌學之名、考之古未之有也、和學
也者、儒者之通
本朝典故言辭也已、歌學也者、儒者
而作歌也已、舍周公孔子之道、而
別建道者、吾未之聞也、天竺有釋
氏之道後漢傳之、而盛於隋唐、唐

儒有り、俗有り。李白杜甫韓愈は儒也。王維白居易は内佛にして外儒也。其の詩は風雅の音に非ざれば、則ち釋氏の偈也。宮人工女、亦二家の風に浴する者也。吾儕庸陋なりと雖も亦儒也。儒にして歌ふ者也。本朝の制度文物、已に皆周公孔子の遺法を奉じて、其の佛を信ずる者亦多し。故に本朝の俗は少くして儒、老にして佛、中古より以來盡く然り。是に由つて之を觀れば、儒に非

之詩人有儒有僧、李白杜甫韓愈、儒也、王維白居易、内佛外儒也、其詩非風雅之音、則釋氏之偈也、宮人工女、亦浴二家風者也、吾儕雖庸陋亦儒也、儒而歌者也、本朝制度文物、已皆奉周公孔子遺法、而其信佛者亦多、故本朝之俗、少而儒、老而佛、自中古以

ざれば則ち佛、此の二道を舍てゝ別に道を建つるは、吾未だ之を聞かざる也。今の和學者は我が邦別に道無きを恥ぢ、牽强傳會妄に我が古史を引きて、人を欺き己を欺く。吾安ぞ之を辨ぜざるを得んや。質、先生の持論、世の所謂和學者流に超ゆること有るを賢とす。宜なる乎先生の文、卓異偶傑、唐宋八家の風有り矣。

日本百二十世天皇文化七年秋九月

陸奥葛質序

来盡然、由是觀之、非儒則佛、舍此二道而別建道、吾未之聞也、今之和學者、耻我邦別無道、牽强傅會、妄引我古史、欺人欺已、吾安得不辨之哉、質賢先生之持論有超於世所謂和學者流、宜乎、先生之文、卓異偶傑、有唐宋八家之風矣、

日本百二十世天皇文化七年秋九月

陸奥葛質序

自序

昔父の世にいますがりし時は、遊の道にふから心よせたまへりしまゝに、吹きもの弾きもの何くれの器ども家にあまたつたへたるを、としごろたび／＼の火にあひて、いまはおほく失せもてゆきて、たゞあづま一つなむ、これをのみ昔しのぶるくさはひには思ひたる。ことし草の庵をあらためつくりて、小さきふせやを、おのがつねに住みならさむ所とさだむる

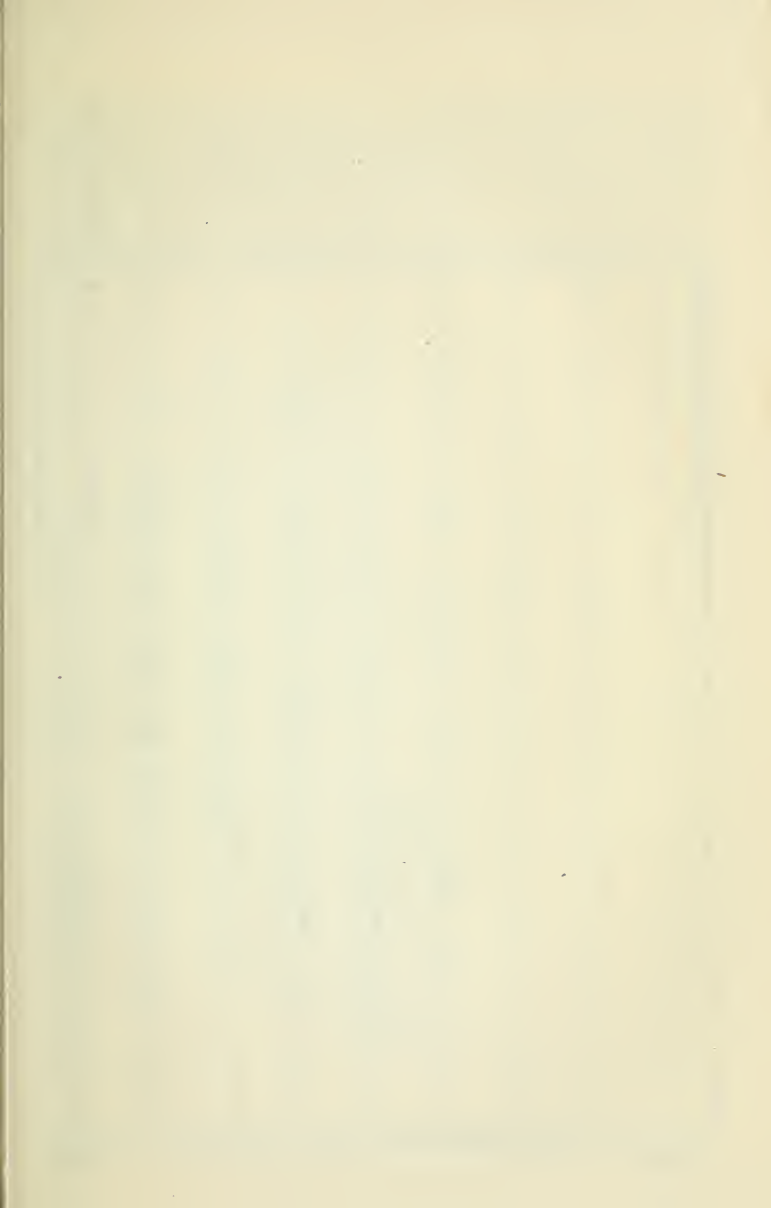
につけて、おもひけるは、かのあづまこそおのが家の寶なれ、いかでこれに所得させて、そのかたはらにこそおきふしすべけれ、われ琴ひく事はならはねど、絲なきをまさぐりて思をやりしためしもあればとて、これをわがかたらひ人にて、さてことがみに、硯一つ火とり一つ琴じりに、づし一よろひをすゑて、年ごろの言の葉どもを入れたり。此ごろおのが心しりの人々詣來(まできて)ていひけらく、

年頃のもし給へる言の葉どもはいかにしたまふぞ、かきあつめ給はましかば、われら筆たすけ參らせむといふ。そはうれしき事なり、さるはつたなき言の葉を、人なみに世にのこし侍らむ事は、はづかしきわざには侍れど、あまた年おもひをよせ、心をこめしものを、いたづらになしはて侍らむはほいなし。ともかくもしかるべからむやうにとりなし給はむこそ嬉しけれと、答へければ、人々かの

づしよりとうで
て、書きあつめ
てもつてゆく。
さて名をばいか
にといふ、すな
はち琴後(ことじり)とこそ
いふべけれとて、
そのまきのはし
つかたにぞ、書
きつけさせたる。
文化の七とせ
かみな月つい
たちの日

琴じりの翁

琴後集巻一

春歌

年内立春

おほかたの花待つ人にいそがれて年のうちより春や來ぬらむ

いそぎたつ春ぞうれしき老いぬとてよそには聞かぬ心ならひに

元日

む月たつ今日より梅をかざしつゝ今年も春は花にくらさむ

珍らしと春を待ちとる心こそ年はふれどもかはらざりけれ

春たつや今日ははなにもなして見む朽木に似たる老のこゝろも

朝日子のひかりまちとる若水(わかみづ)にくまばや千世のはるの心を

元日雪の降りければ

平春海

雪ながらあくる朝戸にさく花の面影みせて春は來にけり

元日雪の降りけるに人のまで來ければ

庭の雪の跡もめづらし今朝は先づ春とともにし訪はると思へば

禁中立春

衞士のたくひかり霞みてほの〴〵とあくる御門(みかど)に春たちにけり

春のはじめに

つくばねの高嶺のみゆき霞みつゝ隅田河原に春たちにけり

百司馬(もゝつかさ)も車もつどふなり君がみかどに春たつらしも

貴賤迎レ春

綾のきぬ布の袂もあらためて春來にけりと見ゆる今朝かな

心地そこなひて久しうわづらひけるに、春立ちてよりおこたりざまに覺えければ

霜雪にあへじと思ひし老の身のまたしも花の春に逢ひにけり

くち木ぞとなに思ひけむさく花にまた伴はむ春にあふ身を

早春海

淡路しまあはとも見えず朝がすみしきつの浦にはる立ちしより

氷解

こほりゐしかけ樋(ひ)のつらゝうちとけてしづくの田ゐに春たちにけり

泉響滴ニ春風一

逢坂(あふさか)や岩間の清水おとすなり氷ふきとく春の山風

風光日々新

難波江やこほり流るゝ朝ごとにつの

ぐむ蘆の數ぞそひゆく

江上春興多

よる浪もにほふ入江の梅柳いづれの
かげに舟はつながむ

春色浮レ水

ほの〲と霞む河とのあさ風に春た
ちかへる浪のはつ花

毎山有二春色一

うら〲と出づる日影にさそはれて
霞にほはぬ山の端もなし

春日

うちかすむ千里の波を光にて朝日に
ほへる春の河づら

春日望レ山

をつくばの高嶺は雪にあらはれて霞
にまがふは山しげ山

大ひえやをひえの山の朝がすみたち
かさねたる春のいろかな

かひがねの高嶺のみ雪かつ消えて下
つ群山かすみたなびく

春生二人意中一

春といへば人の心ぞたゞならぬ世は
花鳥のあはれのみかは

白河少將殿に歌めしける時陽
春布レ德といふ事を

雪も消えわかなも萌えて武藏野のは
るの光ぞかぎり知られぬ

泉暖草色春

氷ゐし岩垣しみづ音たてゝ雪間の小
菅はるめきにけり

家々翫レ春

都人はるはいとなし花鳥のすさみに
誰もとひとはれつゝ

春風夜芳

梅が香を風さそふ夜はなか〱にあ
やなき闇もよしぞ有りける

子日

子の日する今日のためしと引く松に
ひかれて千世の春やかさねむ

子の日すと引くや小松の褶衣袖のみ
どりぞ千世のいろなる

船岡やまつとみゆきの跡をこそ千世
の子の日のためしには引け

長枝が家の子日に

松も引き我もひかれて千世やへむ初
子をいはふ宿に來ぬれば

かくしつゝ千世にならさむ宿なれば
子の日の松も睦じきかな

忘れめやいはふ初子の玉はゝき塵だ
にすゑぬ宿のまとゐは

引くたびにめづらしきかな宿の松あ
またの春になれて訪へども

かくしつゝ松のおもはむ年までもあ
り經てこゝに子の日をばせむ

百首歌の中に正朔子日

うれしさを引き重ねよと春の立つけ
ふに子の日やめぐり來ぬらむ

梅がやに子日しにまかりて

梅さかばつぎても訪はむ初春の松に
ひかるゝ今日ばかりかは

賭弓

ためしとて鷲と鷹との猟矢とり今日たちならす百敷の庭

此の殿のかへりあるじやしるからむ射手のつかさの袖つどふなり

霞

みわたせば端山茂山おしなべて霞をもるゝ色なかりけり

富士のねの雪さへ春の色みえて霞みそめたる朝ぼらけかな

初春霞

春いまだあさまの山のうすがすみ煙にまがふ色としもなし

山霞

春がすみ八重たつ時は三笠山さしてそこともわかたざりけり

霞添二山色一

うら〱と霞みそめたるあしたより日影にほはぬ山の端もなし

暮山霞

立ちならぶ高嶺の檜原かげくれて霞にのこる夕づく日かな

嶺上霞

みよしのゝ雪のふるさと春くれば青根が嶽ぞまづ霞みける

遙峯帯二晩霞一

夕日さす神のみさかはあらはれて霞にへだつあしがらの關

ゆふ鴉歸る翅はかつ消えて霞にのこる遠方の山

浦霞

住の江のうらの松風こゑたえてかすみにこもる沖つ白浪

江霞

なにはえや波の上なる澪標はるは霞の底にこそみれ

行路霞

紅緑ゆきかふ袖もほの〲とかすむ宮路の春ぞのどけき

檜原霞

檜原より先づうづもれて三輪山をしかもかくせる夕霞かな

湖上霞

布施の海や春深からし垂姫のかすみの袖もおもがくしせり

春烟

入日さす遠山もとの里みえてかすみを漏るゝ夕烟かな

鶯

花おそきかた山里のうぐひすやわれはがほにも春を告ぐらむ

うぐひすの聲いちはやき山ざとを春うとしとは誰かいひけむ

いさゝめにいさゝむら竹植ゑしより鳴く鶯の聲ぞかれせぬ

早春鶯

鶯も年のさかえを今日よりともゝよろこびの初音をぞ鳴く

南枝暖待レ鶯

うめ柳はるにいり江の南にははつ鶯

の音も待たれけり
　鶯の初音をきゝつやと人のと
　ひければ
かくて世の春をよそなる宿なれば
鶯の音もうとくぞありける
　春鶯呼レ客
うぐひすの聲にひかれて花もなき
宿とは知れど人ぞとひける
　司得たる人のもとへ鶯の歡聲
　といふ事を
鶯の初音ぞ千代をよばふなるたかき
にうつる春を待ちえて
　竹裡鶯
春來ぬと今日告げそむる鶯のこゑも
奥あるそのゝくれ竹
　うめに鶯なく
ほの〴〵と明くる夜つぐるうぐひす
の聲にしらめる園の梅が枝
　窓鶯
なれてこそ友とも聞かめくれ竹に臥(ふし)
處(ど)さだめよまどの鶯
　閑居鶯
世の人は春のすさみやおほからむ我
とかたらへ軒のうぐひす
　里鶯
かきこもる竹田のさとをとひしかば
はつ鶯の音をぞ聞きつる
うぐひすの聲のにほひにさそはれて
花なき里もはるや知るらむ
　雨後鶯
雨はるゝゆふくれ竹のおくしめてし
めやかに鳴く鶯のこゑ
　若菜
摘めばかつ千世のためしのうれしさ
も袂にあまる若菜なりけり
　多春摘二若菜一
今日ごとに祝ふわかなの若返りあま
たの春を摘むぞうれしき
　雪中求二若菜一
かき分けて見れども雪のふかぜりは
心あてにぞ摘むべかりける
　人にわかなやるとて
初春の今日のわかなをはじめにて嬉
しきことの數をつまなむ
　女どもわかな摘むを見て
たをやめの手ごとに摘むといふめれ
ば若菜をさへにねたしとぞ見る
　春雪
見るがうちにはかなく消ゆる沫雪(あわゆき)は
もゆるはる野にふればなりけり
　殘雪
忘れては花かとぞおもふ山の端に春
も日を經てのこるしら雪
　雪消山色靜
雪きえて花まつ程の山の端はかすみ
ばかりぞ春のいろなる
　梅
高瀬さすしづが袖さへかをるなりは
るの梅津の花のさかりは
なつかしき花のゑまひをみし夢の面

影うかぶ梅の下かげ

春風はうれしかりけり木のもとに梅
が香ならぬ袖やたれなる

いろに香におごれる花のこゝろより
みやびたりとは人につげけむ

梅花風靜

吹く風はあるかなきかの梢よりおの
れとかをる梅の初花

露ながらかをれる梅のはつ花にこゝ
ろおかれぬ朝風ぞ吹く

隣梅

中垣のこなたもにほふ梅の花われさ
へ春はあるじがほなる

一もとの梅をかたみに友としてなら
ぶる軒の睦じきかな

里梅

うめが香に夢のなごりやとゞむらむ
ねざめの里の春の曙

梅の花ざかりに山里をとふ

山里はうめ咲く宿のあまたあれば主
さだめずとふべかりけり

梅近衣香

舟よする衣手いたくかをるなり咲く
や梅津のはるの川風

夕梅

おのづから花の光にくれかねて梅の
はやしは夕闇もなし

月前梅

梅の花かをるやそれとみし夢のおも
かげたどる春の夜の月

影もにほひ花も光をそへてけり月と
梅とやおもふどちなる

月夜に梅の花をりてと人のい
ひければ折るとていふ事を

さく梅の花の光やとめてまし梢の月
はよし霞むとも

月の夜梅かをれり

月夜よし梅の香清しいざさらばこの
下かげに枕からまし

かつしかの梅見にまかりて

おのづから千本のうめを垣根にてか
をれる雪にこもる宿かな

梅浮レ水

花の香は波にながれてゆく水に影を
とゞむる岸の梅が枝

皆川翁源應擧などともなひて
ふしみの梅谷のうめ見にまか
りて

散る梅になか〳〵春もおもほえず雪
のなかゆく心ちのみして

紅梅

たきものゝかをりおぼゆる梅の花う
べも夕日に色こがれけり

一枝はゆるしの色に咲くめれば折り
てかざゝむこのやどの梅

雨のうちの紅梅

春雨にひもとく梅のくれなゐはふり
出でゝこそ色まさりけれ

梅紅白

たをやめがかさぬる袖と見るばかり

色わく梅のなつかしき哉

紅梅白梅にほひことならずと
いふことを

にほひ香はへだてぬ梅のいかなれば
色のみ花のけぢめ見すらむ

落梅浮レ水

水上のさとやいづこぞたづね見むう
めが香おくる春のかは波

柳

吹くとなき風にまかする青柳(あをやぎ)はかす
みながらにかたよりにけり

よりかけし柳の絲ぞみどりなる霞の
衣たちそめてより

柳辨二春色一

宵の雨のなごりかすめる柳原ほのか
に見する春の色かな

柳絲緑新

うちたるゝ柳の絲のあさみどり春く
るごとに珍しきかな

垂柳藏レ水

青柳(あをやぎ)はいとたれにけり藻(も)刈人(かりびと)そのふ
ねちゞめ春の河づら

垂柳臨レ水

青柳のうちたれ髮をけづるには下行
く水や鏡なるらむ

柳池の水を拂ふ

水引(みづひき)の絲かと見しは波あらふ岸のや
なぎのしづ枝(え)なりけり

水邊柳

青柳の下枝(しづえ)なみこす河づらははなだ
の絲を洗ふとぞ見る

水鄕柳

かげうつす波もにほひて青柳のいと
よりけぶる河づらの里

河邊柳

ゆく川の底の玉藻と見るばかりきし
ねの柳影ぞうつろふ

雨中柳

春雨は降るとも見えず柳原あるかな
きかにかげ霞みつゝ

柳露

あさみどり露や染むると見るばかり
濡れて色そふ青柳の絲

柳の雪のかゝれるを

とけやすき雪にはありともあわにだ
に結びも止めよ青柳のいと

柳似レ烟

春風のかすみ吹きとく河づらにはれ
ぬけぶりや柳なるらむ

草のいと青やかなるを

春雨は七日ふりけりおしなべてにゝ
草がちに野べの見ゆるは

磯春草

打ちよする浪もみどりの色そへて春
をしるはの磯の若草

蕨

袖つれて遊ぶ春のゝ手すさみにをり
あはれなる初わらび哉

百首歌の中岡邊早蕨

絶えやらぬゆきゝの岡のはつわらび

萌えあへぬ間に人もこそ摘め

初午いなりまうで

稲荷山杉のもとつ葉をりかざしゆふこえ行くは都人かも

稲荷山みねの神杉かみさびついくよの人か折りかざしけむ

かざしをる今日のしるしといつの世に稲荷の杉は生(お)ふし初めけむ

思ふこと三つのやしろのみしめ縄たれもひかれつ神の心に

峯とほくのぼりも行くかいなり坂幣(ぬさ)とる袖も霞むばかりに

いなり山杉生(すぎふ)の木立ほの〴〵と霞にこもるみつのともし火

春日祭

藤浪の花のしなひのながき世にためしかはらぬ神まつり哉

舞人の立ち舞ふそでも霞むなり三笠の山の山かげにして

春神祇

きさらぎやけふ祈年(としごひ)の祭とて千々の社にぬさたてまつる

岩清水臨時祭

みな人にかざしの花ぞたまふなるうてなの竹の昔おぼえて

雲の上のかさね土器(かはらけ)たちかさね栄えむ御代は汲みてこそしれ

春月

霜と見ば花にこゝろの置かれなむ霞むもうれし春の夜の月

霞中月

霞む夜の月にも老をたどるかな我のみ晴れぬながめなりやと

江上春月

住の江や堀江の波のかすむ夜は有るかなきかに月ぞ宿れる

浦春月

すくも焚くけぶりもたてず霞む夜の月やあはれとみつの浦人

故郷春月

故郷のしがの花ぞのあれにけり月や昔の春をしるらむ

幽栖春月

いくとせの春をふるやの板庇(いたびさし)かすむとすれど月ぞもれくる

春月幽

さし下す船は波路に跡たえて水上(みなかみ)かすむ春の夜の月

月入ㇾ花灘暗

上つ瀬は花にへだてゝ入る月のなどか霞める春の川づら

暁更春月

明けゆくや霞にしらむ山みえてほのぼの残る春の夜の月

春曙

しらみゆく尾上の櫻いろ見えてかた山くらき春のあけぼの

水郷春曙

青柳の下かげかすむ六田川(むつだがは)月もよどめる春のあけぼの

閑中春曙

散りつもる花にやまだきしらむらむ
拂(はら)はぬ庭の春の曙

暮山春望

花の色は霞のうちになほ見えて松よ
りくるゝ春の山もと

春秋のあはれをあらそふ心を

秋の水に月をまちとる夜半はあれど
花よりしらむ曙のそら

夕春雨

春雨に梢あやなくなりにけりさらで
も霞む夕ぐれの山

菴春雨

春雨も音しのぶなり山かげにかくて
世をふる心しりきや

幽栖春雨

おとしのぶ春の雨こそ哀なれ我が身
世にふるたぐひと思へば

百首歌の中閑中春雨

をり／＼は訪はれまほしき宿なるを
音だにたてよ軒の春雨

春野

こゝにのみ枕からまし春はたゞ心ひ
くまの野べのわか草

そことなく野べにくらしつ花をとひ
鳥をあはれむ心々に

歸鴈

山櫻雪とも見えよゆく鴈のこゝを越(こし)
路(ぢ)と立ちとまるべく

霞む夜の月な見捨てそかへる鴈花に
はうときならひなりとも

霞中歸鴈

花にうき心を人に見えじとや霞がく
れに鴈の行くらむ

百首歌の中澤邊春駒

寢よげなる野澤(のざは)の草になれてなど駒
の心のあれまさるらむ

雉

明けぬとて啼くやきゞすの聲のうち
にほの／＼しらむ春の山畑

雲雀

空遠くあがりも行くか夕ひばり野澤
の水にかげの霞める

雲雀落

春の野の菫の床におち來つゝ聲もに
ほへる夕雲雀かな

大空はそこはかとなく霞む野に聲の
みおつる夕ひばかりかな

喚子鳥の鳴くを

はるかなる深山(みやま)の杣(そま)の斧の音(おと)にこた
へても鳴くよぶこどりかな

百首歌の中に谷中喚子鳥

山彦のこたふる聲にしられけりみ谷
のそこに鳴くよぶこどり

春蟲

うら／＼と霞む春野はとぶ蝶のつば
さにのみや風の見ゆらむ

打ちとけむものとも見えず春かけて
古枝(ふるえ)にのこる雪のみの蟲

春獸

狩人の手飼ひの犬の綱手縄ながき春日をくらす野べかな

春園獸

山賤(やまがつ)のそのふの花の雪の上に聲なき鹿の跡も見えけり

春日

忘れては今朝を昨日とたどるこそ日長き春のならひなりけれ

春日遲

朝鳥の花になれゆく春の日はねぐらにかへる程ぞ遙けき

遲日

あくまでも花の木かげになれよとや春の日影の暮れがてにする

雨岡の家にて閑中日長といふことを

鶯のかたらふ聲もわくばかり靜けき窓に聞きやならへる

心靜酌二春酒一

日ながさを思ひなぐさむ老(おい)の盃(つき)にいく度花を泛べては見し

みかの日

よるべをば波に任せて散る花の香ごめにめぐる春の盃

桃

かくしつゝみなもと遠くさく花のもも世もこゝに住み習へとや

賤の男の畑うつ袖もにほふまでくぬぎのもとに桃の花さく

ものいはぬ花とし知れど木の本を心ありげに人ぞとひける

梨

たをやめの姿を今もしのべとや雨に匂へる山梨のはな

花

咲き咲かぬほどをあはれと思ふかな春もおくある花の日數に

詠るを惜む心ぞ年にまさりける老をわするゝ花ぞと思へば

あくまでも花見るたびに嬉しきは世に營みのなき身なりけり

春ごとのちぎりかはらず咲く花にあだなる名をば立てずもあらなむ

なべて世の人の心もはなにのみ染むるや春のさかりなるらむ

咲き散るをしたふ櫻の花ゆゑに夢とすぐさぬ春はなかりき

はなにのみ暮さぬ春はなけれどもいづれの年かあく迄は見し

みよしのゝ奥も淺しと見はてまし花ゆゑ深く思ひ入るには

咲く花を雲と見しよりわが心かゝらぬ山も春はなかりき

とはゞやとおもふ山路や殘らまし花の日數のかぎりある世に

けふいく日(か)山分衣(やまわけごろも)きならして花にやつるゝ袖ぞうれしき

待つ程の憂さは日數をかさね來て咲けばかつ散る花や何なり

待レ花

春の日の遅してふ名は我がごとく花
まつ人やいひはじめけむ

望レ山待レ花

いつかまた咲くらむ花のかゝらばと
思ひなぐさむ峰のしら雲

閑中待レ花

いつしかと待つに心をなぐさめて花
さかぬ間の春ぞのどけき

閑居待レ花

春ごとの花より外は世の中に待つこ
ともなきすみかなりけり

花盛

櫻ばなさかりとなれば散るうさも待
ちしつらさも何か思はむ

人ごゝろ空になればや櫻ばな咲きの
さかりは雲と見ゆらむ

處々花盛

さくら咲く大井の里に一夜ねて明日
はをぐらの花も分け見む

よしの山の花のさかりを見て
かへり來て人のかたるを聞き
て

花はみな雲とぞかたる一言におもか
げうかぶみよしのゝ山

花のさかりに山里をとふ

かくしつゝ花し散らずば我もまた山
里人となりぬべきかな

見レ花

はな見ればあかで暮れゆく春の日を
おそしと誰かいひはじめけむ

靜見レ花

露をだに散らさぬ花のかげなれば誰
かは風に心おくべき

見レ花延レ齢

のどかなる春の心にひかれなば花ゆ
ゑ千代も經ぬべかりけり

見レ花想レ友

見せばやと人をぞしのぶ山櫻あかぬ
心のへだてなければ

小金井の花見にまかりて

春風に香をとめ來れば水上のうきた
つ雲は花にぞ有りけり

水をへだてゝ花を見る

きしかげや折られぬ花のにほひをも
波によせ來る春の河水

瀧河やあさ瀬しら波たどるとも岩も
と櫻をりて歸らむ

河づらの宿に花を見る

前川に船漕ぐ袖もかをるなり渚のや
どに櫻さくころ

舟中見レ花

こゝろひく渚の花にあくがれて下(くだ)し
もはてぬ春の河舟

花下忘レ歸

行きくれてやどりはしめつよしの山
おくある花は明日さへも見む

山ざとにあるじを誰とさだめねど花
のかげこそ長居せらるれ

花下暮レ日

暮るゝまで花にそはむと思ひきや道

行きぶりのすさみなりしを

花下送ㇾ日

故郷に今日もくらしつあすか風さそ
はむまでは花にやどらむらむ

花下言ㇾ志

日數なき花もうらみじあまたたび春
にあへるを思ひ出にして

思ふこと花見るたびに忘られきうき
世のさがよさもあらばあれ

花如ㇾ舊

あはれ世の人もかくこそ老木(おいき)だには
なは匂のかはらざりけり

風靜花芳

をりをりに霞をもれてかをらずば吹
くとも知らじ花のした風

花添二山景色一

朝ごとにかすみ色そふ初瀬山檜原の
おくも花になる比(ころ)

毎年愛ㇾ花

春ごとに咲きまさればや櫻花あかぬ
こゝろの年に添ふらむ

花忘ㇾ老

花にそむ心は年にかはらねば春は老(おい)
をもおもはざりけり

花自有ㇾ情

ひたすらに憂きを見せじと散ればか
つおくれて匂ふ花も有りけり

千蔭の石濱のやどりにて歌よ
みける時花錦を

隅田河つゝみの花のからにしき春は
きて見ぬ人やなからむ

花未ㇾ飽

咲く花をおもふばかりはいつか見む
心のゆかぬ里はなけれど

奥までも分けずはやまじ山口の花に
一夜のまくらかるとも

折ㇾ花

山櫻かた枝まばらになりぬるは我よ
り先に誰か手折(たを)りし

はなを折りて

折る花を人なとがめそ老をだにかく
すばかりの心ずさみは

馴ㇾ花

日を經てもうす紅のはなよなど人の
心を深くそむらむ

散るわかれ有りと知りつゝ咲く花に
馴れしや何の心なるらむ

千蔭がもとによしの山の櫻の
若木をうつしうゑたるを見て

よしの山名高き花の種なれば雲と見
るまでおほしたてなむ

惜ㇾ花

あだに散るうさをばかねて知りなが
ら今年もいたく花に馴れにき

依ㇾ花待ㇾ友

おもふ友來むとは花にたのめども待
たでちりなばいかにしてまし

花ゆゑに人を待つといふこと
を

柴の戸の花な忘れそ都人われにはう
とき心なりとも

年經て花のもとにてあへり
なつかしき花の色香をわすれめや春
よ昔の春ならずとも

花留レ客

櫻ばなあだにうつろふ心もて道ゆく
人をなどとゞむらむ

花のもとに歸らむことを忘る

故鄕の人やは待たむ花みつゝ春は旅
寐に馴れし身なれば

古寺花

朽ちのこる閼伽井の水を鏡にて花は
いくよの影かうつせし

霞中花

たちかくす霞の袖もさく花もほころ
びそめて匂ふ春かぜ

雨後花

春雨のなごりに匂ふ花もよし降るを
涙と誰かいひけむ

嶺花

待つ程の雲にまどひしひがめをも思
ひさたむる嶺の初花

志賀花園花

ことの葉の色香も世々にそへ來てぞ
今もにほへるしがの花園

名所花

かぐ山や高嶺のさくら咲く時は底さ
へにほふ埴安の池

あけぼのや霞がくれの岩門もはなよ
り開く逢坂のせき

みよしのゝ瀧の都の跡とへば昔忘れ
ず花咲きにけり

水邊櫻

櫻さく春の河とをみわたせば雲の中
ゆく水の白浪

關花

吹く風にあらさぬ不破の山ざくら春
は關守る神やますらむ

春情寄レ花

花にのみ心ひかれて春はたゞ身を鶯
にかへぬばかりぞ

寄レ花祝言

思ふどちかくしも花をかざしつゝ千
年の春ぞ待つべかりける

寄レ花夢

暮れてゆく春をうつゝと何かみむ夢
ばかりなる花のちぎりに

露の間の夢さへ花にあくがれつ胡蝶
に身をもかへしばかりに

花衣におつといふことを

櫻狩わが袖ながら散る花をはらはで
今日の山づとにせむ

落花

のどけさを思ひつゞくる春の日にな
ど咲く花の一さかりなる

をしめども人には花のつれなくて風
の心になどまかすらむ

風さそふ瀬々の岩波音たてゝ瀧のみ
やこにさくら花ちる

葛城のみねのうき雲ひま見えて豐浦
の寺に櫻はなちる

花のちるを見て

雪と降る花はたぐひもなきものを散
らばをしとはなど思ひけむ

山櫻ちりゆく方をしたひ來て我さへ
風にまかせつるかな

月前落花

月なくばいとゞあだにや見はてまし
霞がくれにちる櫻ばな

雨後落花

春雨のなごりおぼえてちる露にもろ
さあらそふ山ざくらかな

海邊落花

風こゆるいそ山ざくら散りにけり雪
をのせ來る須磨の浦舟

名所落花

比良の嶺の花を嵐の吹くからに波の
したゆく志賀の浦舟

古宮落花

花は雪とふり行く宮の庭ざくらいづ
れの春か朝ぎよめせし

閑庭落花

うき世をばそむきし宿にちる花の誰
にならひてしづ心なき

後のきさらぎ花のちるを

やよひだに待たでうつろふ花みれば
加はる春もかひなかりけり

八重ざくら

一さかりありて散りぬる花の後に春
をとゞめし八重櫻かな

ちりて後花をしたふ

馴るゝ間もあらで散りにし花ながら
慕ふ心ははてなかりけり

すみれ

いざさらば春の野守にやどからむと
もにすみれの花になれつゝ

菫つみに出でたつとて

紫のゆかりおぼゆるすみれ草たゞわ
れのみは摘まじとぞ思ふ

閑居菫

あれにけるまがきも春は結ひそへむ
菫摘みにと來む人のため

古砌菫菜

朽ちのこるみはしの苔も色はえてよ
をふる宮にすみれ咲くなり

菜の花を

花見てもつまゝほしきを初春の雪間
にのみとなに思ひけむ

園の菜の花を

此の園の春に胡蝶やあくがれむ朝な
ゆふなの花にほふ比

かげろふ

川よどの水もながると見えつるは立
つ炎陽のうつるなりけり

のどかにもひもとく花にまつはれて
絲かと見ゆる野べのかげろふ

蛙

雨そゝぐ小田の水口水ましてところ
えがほに鳴くかはづ哉

汝もまた春をやをしむちりまがふ山
吹の瀬に蛙なくなり

苗代

苗代の水口祭しめはへて秋のたのみ
やかけて祈らむ

燕來

つばくらめ門田に今ぞ聲すなる種お
ろすべき時や來ぬらむ

つゝじ

咲きにほふ磯山もとのしらつゝじし
らずよ波にまがふものとは

水邊躑躅

池水にうつろふ時は白つゝじとはに
より來る波かとぞ見る

百首歌の中巖上躑躅

あらましき巖にはなど咲きつらむ妹
が赤裳につゝじの花

所々山吹

妹脊山中ゆく河に影みえてにほひか
はせる岸の山ぶき

雨ふる日八重山吹を人のもと
へつかはすとて

春雨は七日ふれども山吹のやへさく
色はあせずぞ有りける

池杜若

花のいろに波もにほひて池水をむら
濃になせるかきつばた哉

藤

老いにける松にかゝりていつまでか
若紫の藤浪のはな

浦藤

世の常のいろとやは見むむらさきの
名だかの浦に匂ふ藤浪

藤懸レ松

咲きそめて手にさへかゝる藤浪に松
は木高きかげとしも見ず

暮春藤

日をかさね咲きそふ藤の紫ははる深
くしも染むるなりけり

濱田君の庭に牡丹をおほくう
ゑ給へるに歌よめとありけれ
ば

大君の名をしもおへる花みればうべ
も世に似ぬ色香なりけり

志賀山越

ふみそめし人の心を春ごとの花に忘
れぬ志賀の山ごえ

夕かけて猶こえはてぬ志賀の山たれ
も心や花にひかれし

雪とのみ花のふる道ふみ分けて昔お
ぼゆる志賀の山越え

正臣が家の贈答會に志賀山越
といふことを助丁が　ちぎら
ねど心あふみのしがの山ちる
花をさへともにこそみれ　と
よめる返しに

あかでちる花のなごりも心あひの風
のとがとは何おもはまし

春のはて

春もとく暮れざらましを大かたに散
るをし花のいそがざりせば

鶯も老をやなげく此の園にはねなら

はせし折も有りしを

浦暮春

花ははや須磨も明石も散りにけり浦傳ひして春やくれゆく

なごりなく春はくれゆく浦浪の何いたづらに立ちかへるらむ

湊暮春

沫とちる波間のはなは色もなし比良の湊の春のくれがた

山家暮春

日ながさも訪はれぬまゝに知られけり花より後のはるの山ざと

暮春雨

ちる花を夜の間の雨にくたしなば春のかたみも明日やたどらむ

暮春花

あだなりと何かおもはむ暮れて行く春に爭ふ花もありけり

よそへては春の日數ををしむかな殘り少き花をみるにも

暮春鶯

ちり殘る花にや老をわするらむなほ鶯はものうげもなし

惜レ春

ゆく春は夢とのみこそたどらるれいつかは花をあくまでは見し

惜レ春不レ駐

山河や春はよどせもなきものをかひなくかけし花の白浪

琴後集巻二

夏歌

首夏

みし春のなごりわするゝ夏衣花のか
とりは名のみなりけり

木の下(もと)に散りのこる花やかきつめむ
昨日の春のわすれがたみに

首夏朝

なつ山やきのふの花の雲きえて若葉
ににほふ朝日影かな

山家首夏

山里は古巣にかへる鳥が音にあはれ
をそへて夏は來にけり

山里のはらはぬ庭は夏ながら苔路に
まじる花も有りけり

更衣

くやしくも深くぞ花になれ衣そでの
わかれのあるを忘れて

櫻いろの袖ぬぎかへて卯の花にかさ
ぬる衣(きぬ)もめづらしきかな

きならせし春の衣をぬぎかへて又し
も花に別れぬるかな

貴賤更レ衣

ぬぎかふる袖もやさしな麻衣(あさごろも)しらが
さねせし人もある世に

殘鶯

散りのこる花にたぐへてをしむかな
若葉がくれの鶯の聲

遲櫻

折りとらばにほひをうつせ遲櫻はな
のかとりの袖うすくとも

山餘花

手向山(たむけやま)はるの越えゆく跡とへば今も
さくらの幣(ぬさ)とこそちれ

谷餘花

世をいとふたにの庵のおそ櫻ときに
きそはぬ心をや知る

卯月ばかり山ぶみして

なつ山や若葉にうづむかげとへば花
のしをりの跡も殘らず

殘りの花を惜む

あかぬ間にわかれし春のかたみぞと
思ふ花さへちらんとやする

林新樹

三輪山や花より後のかげもよししげ
きがもとに若葉さす比

雨中新樹

雨そゝぐかた山かげの夏木立いまひ
としほの緑をぞみる

新樹妨レ月

夏蔭や花に手折りし梢のみたま〳〵
月の影もらしけり

わか楓を

色はゆる青葉のもとの若楓しもに匂
へる秋はものかは

夏陰ににほふ楓のくれなゐは花の錦
のなごりとぞみる

夏山里にまかりて
瑞枝さし清水ながるゝ山里を花にの
みなど訪ひならしけむ
卯花
咲きしよりつもる日數のほど見えて
うのはな垣は雪になり行く
卯花藏レ水
うの花のかげ行く川ぞかすかなる雪
の下水もれしばかりに
山家卯花
山賤(やまがつ)のかきほはまたも訪ひてみむ卯
の花くたす雨ふらぬまに
卯花似レ雪
うつぎ咲くかた山里の明ぼのは雪に
しらめる心ちこそすれ
卯花がきに月をみる
卯の花をさながらかこふまがきには
月の光もへだてざりけり
神まつり
夏たてば森のまさかき茂るなりゆふ
とる袖もかをるばかりに
大みわのまつりの使
神さぶる杉のした道幾歳(いくとせ)か大宮人の
たちならしけむ
みわの山杉の下みちふみ分けてぬさ
とりゆくは使ざねかも
神まつるあすはうの日とみわの山み
てぐら使けふよりぞ立つ
灌佛
御佛のあらはれそめし法(のり)の水ながれ
て世々の人もくみけり
もろ人のけふのためしの舟(ふな)づゝみつ
どふや法(のり)の湊なるらむ
葵
小車にあふひのかつらかけてけり神
まつるけふにめぐり來ぬれば
毎年懸レ葵
年ごとにかけていく代かたのまゝし
今日のみあれにあふひてふ名は
卯月ばかり香取へ行きけるに
かまがやの野にて鹿のむれゆ
くをみて
眞萩原まだうらわかしゆく鹿の胸分(むなわけ)
くばかりいつかなりなむ
郭公
待ちあかす心くらべにまけにけり有
明の月になくほとゝぎす
さやかにもなのるか月の玉すだれか
かぐる軒の山ほとゝぎす
しのび音はなか〳〵つらし郭公した
待つほどのこゝろいられに
きくたびにねぬ夜ぞおほき時鳥いま
一聲とまちならひつゝ
なれゆけば厭くをならひの人の世に
猶めづらしき郭公かな
郭公うひだちしつと山人(やまびと)のかたるを
きけばいやまたれつゝ
めづらしとおもふこゝろに時鳥はつ
音を夢となほたどるかな
ほとゝぎすたゞ一聲に見し春のはな

のなごりも忘られにけり

橘の花ちるさとのほとゝぎすなく音
もかをる心ちこそすれ

待二郭公一

時鳥かくていく夜のむらさめを空だ
のめにはなして過ぐべき

人傳(ひとづて)にきゝそめにけり郭公まちよわ
るともまたやたのまむ

初聞二郭公一

ほとゝぎす聞きつとかたる人もなし
初音やわれに先づもらしけむ

はじめてほとゝぎすをきゝて

郭公さやかになのる一聲をきゝそめ
てこそいやまたれけれ

月におもひ雨にまつよの數を經ては
つ音うれしきほとゝぎすかな

郭公をきゝて

かくしつゝをちかへり來て我がため
に昔かたらへもとほとゝぎす

郭公一聲

いく度のかたらひぐさにいひ出でむ
たゞ一聲の山郭公

郭公幽

きゝつとも思ひさだめずほとゝぎす
今一聲はしのばずもがな

山里にほとゝぎす聞きにまか
りて

一こゑは都にもきくほとゝぎす山路
のかひにをちかへりなけ

海のほとりにて時鳥をきく

ほとゝぎすいはしたかげの一聲はひ
ろへる玉の心ちこそすれ

おもふことある頃郭公を聞き
て

郭公よたゞなく音にならへとや物思
ふ宿を過ぎがてにする

郭公遍

ほとゝぎすうとかる里はあらずとも
この橘を宿とさだめよ

兩方聞二郭公一

峯に尾に中のやしろをへだてつゝな
くやいなりの山時鳥

雲間郭公

村雨のなごりあしとくゆく雲に聲も
おくれぬほとゝぎすかな

月おそきゆふべの雲のたえまより先
づ聲もらす郭公かな

閑中郭公

友もなき宿とのみやはいひはてむ山
ほとゝぎす月になく夜は

樵路子規

ほとゝぎすとばの山柴とりならしな
れてや賤が聞きふるすらむ

曉に時鳥をきく

郭公をりしりがほに鳴きぬめりもの
おもふ宿の曉のそら

曙郭公

玉くしげ箱根の山の明ぼのにふた聲
なのる郭公かな

深夜子規

ほとゝぎすよぶかき雲の絶え間より
おちゆく月をしたひてぞ鳴く

夢後郭公

おもほえず聞くぞうれしき時鳥をり
あはれなる老のねざめに

郭公入ニ夜琴ー

待ちよわり引きたゆむ夜のつま琴に
なく音そへよと訪ふ郭公
よひ〳〵のかたらひ人となりにけり
琴の音さそふ山ほとゝぎす

早苗

たに河の水せきいるゝ麓田は雨も待
ちあへず早苗とりけり

採ニ早苗ー

早苗草はこぶたもとや朽ちぬらむし
づくの田居の五月雨の比

つるの郡の早苗を

早苗とるつるの郡のさと人は千世の
はつ穂の秋や待つらむ

なぎ

垣つ田のさなへと共にうゑこなぎ花
に咲きなば又もとひ來む

刈ニ菖蒲ー

菖蒲葺くけふのためしを過ぐさじと
賤はよどのにおり立ちにけり
君が代のながらの濱のあやめ草命つ
ぐてふためしにぞ引く

雨中菖蒲

五月雨にぬるともひかむあやめ草あ
やなくけふを過ぐさましやは

節後菖蒲

こもり江におふるあやめの根をふか
み千世のためとや引き殘しけむ

夏夜

夏の夜はむすぶあやめの枕だにねな
がき名をばかるかひもなし

たちばな

そことなくかをるもうれし橘のはな
ちるさとの明ぐれの空
橘のはなちる比は木のもとの苔路の
露も香ににほひけり

盧橘薫レ風

おもほえずすだれうごかす夕風に袖
の香たどる軒のたち花

風誘ニ盧橘芳ー

たちばなのにほふ軒端は吹きたゆむ
風のひまさへたどならぬかな

橘薫レ袖

もゝしきや花たちばなのおひ風に右
のつかさの袖かをるなり

夜橘

橘のはなちる宿に一夜ねむしのぶ昔
の夢やむすぶと

曉更盧橘

たちばなにかたしく袖ぞかをるなる
いつも寢覺のかゝらましかば

盧橘子低

橘のはなの露そふ葉がくれに實さへ
かをれる雨の夕ぐれ

夏船

橘の小島が崎のおひ風に棹さす袖も
香にぞにほへる

あふち

村雨のなごりの露もにほひつゝ散る
やあふちの花の下かげ

薬獵

いめたつる夏野の若葉ふみしだきき
そひかりする武夫のとも

霖

さみだれにつま木の道も絶えにけり
谷の岩ばし水こえしより

閑中五月雨

訪はれぬにならひし宿は五月雨のあ
まゝありとて誰をまつべき

旅泊五月雨

五月雨に日數ふるえのむやひ舟棹さ
へなみのしたに朽ちにき

さみだれの雨につなでも朽ちはてゝ
みを引きわぶるよどの川船

五月雨はれ間なき比友だちの
詣でこぬをうらみて

つれ/\を何にすさめむ五月雨のふ
りはへてとふ人しなければ

五月雨晴

さみだれに板井の水はましにけりこ
よひや月のかげをやどさむ

五月ばかり梅がやにまかりて

花さかむ春をぞちぎる五月雨のあめ
の名におふうめの下かげ

水鷄

あやめ草おふる野澤のみこもりに聲
あらはれて鳴くくひなかな

水鷄何方

柴の戸は明けながらねし夏の夜にた
たく水鷄やいづこなるらむ

曉水鷄

まきの戸をたゝけばやがて明くる夜
の水鷄は人をはからざりけり

夏月

暑さをもわするゝつまとなりにけり
軒にまちとる夏の夜の月

山の端は霞もきりもへだてねど若葉
にくもる夏の夜の月

短夜月

さらぬだに明けやすき夜を月影の待
たれて出づる事なくもがな

水上夏月

ゆく水によどむ間もなき夏の夜の月
は氷といかで見ゆらむ

山家夏月

涼しさのいづこはあれど山里はしみ
づに月のかげやどる比

竹亭夏月

くれゆけば月と風とをやどしつゝ夏
をわするゝ窓のむら竹

夏月涼

棹させば夏をわするゝ夕河にこほり
をくだく波の月かげ

夏の夜月あかし

心さへはれゆく夜のすゞしさは風こ

そ月の光なりけれ

なでしこ

賤のをが草にやつるゝまがきにもあ
はれは添へつなでしこの花

なでしこの花咲きそめたり

かつ〳〵も咲きそめしより常夏(とこなつ)にに
ほはむ花は朝にけにみむ

なでしこの花さかりなるを見
て

常夏のたゞ一時に春秋のはなのにほ
ひをあつめてぞ咲く

愛㆓瞿麥㆒

宵の雨のなごりいかにと露にさへ心
おかるゝ常夏のはな

なでしこのさけるを人の許へ
やるとて

ちらぬ間を見つゝすさめよ常夏のと
こめづらしき花ならずとも

夏草

なつ草に野中の水はうづもれぬもと
の心をたどるばかりに

秋ちかきのぢの草むら露さへもむす
ぶばかりに早なりにけり

草花先㆑秋

いつしかと秋のちぐさの花かずもな
かばみえ行く夏の野邊かな

千古(ちふる)のもとより末利花一もと
おこせたるをよろこびて

めづらしなたゞ一もとのまりのはな
あまりなるまで香こそにほへれ

蓼

からきにもなるればなれて過す世に
たではむ蟲を何かとがめむ

百合

なつの野に誰をやさしとしのぶらむ
葉がくれに咲く姫ゆりの花

鵜河

かつら人鵜河たつとや波のうへにみ
だれて見ゆる瀬々の篝火

折こそあれ月のかつらの里人もやみ
をぞたのむ鵜河たつとて

峯照射

かた分けて鹿のたちどや尋ぬらむみ
ねにほぐしの影そはり行く

所々照射

明けやすき夜をやあらそふ五月山ほ
ぐしの光ところせきまで

夏蟲

おろかなる身にはたぐへむ夏蟲のむ
すぶ氷もしらぬならひは

螢

風さそふしのゝを笹にちる露のなご
りおぼえてとぶ螢かな

澤螢

なつ蟲のかげはあまたになりゆくや
淺澤水(あささはみづ)のそこ見ゆるまで

瀧邊螢

落ち瀧つながるゝ水のしら玉に光を
そへて飛ぶほたるかな

くさむらのほたる

風さそふ夏野の草のたもとよりつゝみもあへずとぶ螢かな

螢似レ露

とぶほたるはかなき露と見えながら何ゆゑ消えぬ思ひなるらむ

深夜螢

うきことをますだの池にとぶ螢よただおもひにこがれもぞする

晩夏螢

みそぎ河しのにをりはへほす袖の露とみだれてとぶ螢かな

ある曹司のまへをわたりけるによるは螢のなどいひ出しければといへることを

玉だれの光へだつる夏むしは誰ゆゑ身よりあまる思ひぞ

大ゐ河の夏

とぶほたる瀧つ岩間をながれ來てとなせの波に影ぞくだくる

蚊遣火

いぶせさをよそのみるめもくるしとや絶え〳〵たつる賤が蚊遣火

明けゆけどまだもをりたく蚊遣火に猶夜をのこす賤がさゝぶき

かやり火を見て

をり〳〵に蚊遣のけぶりたきけつや賤も心を月によすらむ

蚊遣火に賤はふせやのいぶせさをおもひくらべて夜やあかすらむ

蓮

はちす葉の上とのみやはあだにみむ露こそ人の世のたぐひなれ

地上蓮

池水のこゝろきよさもあらはれつ濁にしまぬ花のさかりは

池の蓮をよめる

影うつす池の鏡のきよければ葉がくれにさく花もみえけり

氷室

大君の御代なが坂の氷室もりいくとせ夏をよそに住むらむ

千世かけて消えぬためしと氷室もり松が崎には住みならしけむ

夕立

二子山みねに北行く雲見えてゆふだちすなり蘆の海づら

夕立晴

かくながら月ややどさむ夕だちのなごりとゞむる玉ざさの露

蟬

吹きおろす松のあらしにたぐひ來て秋おもほゆる蟬のもろ聲

瀧邊蟬

落たきつ早瀬の波にこたへつゝ稍にむせぶせみのもろ聲

たき川の岩こす波にさそはれて峰より落つる蟬のもろ聲

あふぎ

うちもおかずとるや扇のこむらさき誰がゆかりとて袖にならせる

秋はとくあふぎの風にかよひけり袂
に月のかげをやどして

閨扇風

なつかしき香にこそ風もにほふなれ
誰にこがれし閨の扇ぞ

泉

袖ひぢてむすぶいさらゐさら〳〵に
夏とはえこそ思はざりけれ

泉のまへのすゞみ

すゞみすと山井の水をいくむすび結
べどもなほあかぬ今日かな

但有泉聲洗我心

おく山の岩垣しみづ聲なくばこゝろ
の友となにをきかまし

水風晩涼

夕風のさそはざりせば池水のこゝろ
に友をわするべしやは

近水微涼生

蓮葉の露ばかりふく夕風もなぎさの
宿は先づぞすゞしき

納涼

風さやぐ葉廣がしはの下すゞみ露ち
る袖はぬれぬともよし

樹陰納涼

すゞしさを待ちとる袖に露ちりて苔
のむしろを拂ふ松風

百首歌の中におなじ題を

涼しさのいづこはあれど夏はたゞ夕
風そよぐならの下かげ

松下追涼

山松のひゞきぞ波にまがふなるあつ
さをあらふ心地のみして

すみだ河に舟をうかべて

夕川のすゞしさとめてこぐ舟は水の
こゝろのゆくにまかせむ

棚倉の君の深川のみたちにて

風すぐる楓がしはの下露にぬるゝた
もとは夏なかりけり

樹陰夏風

衣手もぬるゝばかりにおぼゆるやみ
づえ吹きおろす木々の下風

夏神樂

なつかぐらあなおもしろし椎柴の下
ゆく水に月もやどれり

荒和祓

御秡河瀬々にながるゝすがの葉のあ
なすが〳〵し水の白波

秡麻

つかさ人きよきなぎさにぬさ取るや
やがていつきの宮うつりとて

はらひすとま袖に波をかけてけり瀬
瀬にみだるゝぬさの追風

琴後集巻三

秋歌

山家立秋

松のあらし谷のかけひも今朝よりは秋たちぬとや音かはり行く

田家立秋

けさ見れば色づきそむる我が門のわさ田よりこそ秋はおぼゆれ

幽栖秋來

跡たえし庭のをざゝの露ばかり秋をつげ來て初風ぞ吹く

あれたるやどりに秋來る

おきそむる露をよすがに秋は今朝むぐらの門を先づぞ問ひける

杜初秋

みたらしの岩うつ波も音かへつたゞすの森の秋の初風

秋來㆓水邊㆒

吹く風も聲うちそへて西河や秋に入江の波のすゞしさ

初秋風

今朝ははや軒のした荻うちさやぎ穗にあらはれて秋風ぞ吹く

初秋木

散りそむる桐の一葉に秋來ぬとつぐるや風の心なるらむ

早秋

秋たつやまだうらわかき荻原は風の音のみ穗に出でにけり

秋たてばものかなしきを憂きことはみそぎにすつと何思ひけむ

早秋風

けさよりは瑞穗のあきのはじめとや稻葉よりまづ風そよぐらむ

早涼

信樂の外山のあさけすゞしきは夜の間の雨や秋をさそへる

夕かげに露ふきむすぶをざゝ原よは秋なれや風のすゞしき

山家秋

月すまばまたも問ひ來む山里の稻葉にやどる露もみがてら

兼待㆓七夕㆒

天の河月のみふねもよそひせよ星の逢ふ夜はちかづきにけり

いは床のちりを拂はぬ夜はもなし天の河とに秋立ちしより

久待㆓七夕㆒

いつしかとさく七草の花かずをよみてや星のあふ夜しのばむ

七夕

あまの川やそ瀬の月はくまもなしはやこぎ出でよ妻むかへ船

なぬかの夜

棚機にこよひやかさむ七くさをみながらうつせ花ずりの袖

二星適逢

うらもなくあふとはすれど棚機の雲
の衣よなどま遠なる

星河秋久

天の河とほき神代のむかしより秋を
せにこそ名はながれけれ

七夕濱

あまの子がかりしみるめの濱づとも
今宵やほしに先づ手向くらむ

七夕橋

今宵あけばもみぢの橋もいたづらに
かけはなれてや戀ひ渡らまし

七夕馬

こよひしも雲井にかける駒もがなふ
ね待ちかぬる天の河とに

七夕管絃

絲竹のつまおもふてふしらべさへ星
のあふよはあはれそへけり

海邊七夕

星合の濱の海士人(あまびと)うちつけにみるめ
や今宵先づ手向くらむ

七夕薄

こひ〳〵てあふよの星にならへばや
尾花の袖も露けかるらむ

七夕櫛

たなばたの今宵とりみむさし櫛のさ
しもたがはじ絶えぬ契は

織女雲爲レ衣

雨となる袖のわかれに棚機の雲の衣
もうしとやは見ぬ

乞巧奠

棚機の秋くるからによりあはむ心と
りてぞ絲は手向(たむ)くる

七夕七首

七日女郎花をうゑよとて人の
おこせたれば

をりにあふ名もなつかしき女郎花た
なばたつめにたぐへてを見む

七日けふの空のけしきいかゞ
見るといひければ

天の河ゆふゐる雲もうちつけにたな
ばたつめの袖かとぞ見る

たなばた祭りしたる所に雛の
もとに男たてり

たなばたに今宵手向くるから絲のよ
りあふ末や誰むすぶらむ

なぬかの夜琴ひく女あり

棚機の心をくみてひく琴やつまおも
ふてふしらべなるらむ

七日のゆふべをとこあまたゐ
て天の河をみたり

もろともにゆきて見ましを天の河う
きゞのかよふ道したえずば

七日女ども空を見る

たなばたのあふ夜はれ行く空の月よ
そに見るさへおもなかりけり

七日の夜曉を惜む

曉の空かきくもれあまの川あさ瀬た
どらば君かへらめや

七首

七日の夜秋の七くさをよめる

たなばたに今宵やかさむ秋萩の花ずり衣いろあせぬ間に

天の河かはべの尾花かたよりになびくもほしの心をやとる

たなばたの袂おぼえて秋風のふきうらがへす庭のくずはら

たなばたの袖のにしきもかくこそと見るめもあやに匂ふなでしこ

今宵しもたなばたの手にあえよとて誰たちぬへる藤ばかまぞも

棚機のおもかげ見せて澤水にすがたをうつす女郎花かな

ほし合のなごりをそれとしのべとや露にしをれし朝がほの花

なぬかの夜あかつきによめる

天の川ふけゆく夜はを見つゝゐて曉露に袖ぬらしけり

七夕戀

あふことのまれなる中よいとせめて天つ妹脊にたぐはましかば

七夕別

別れてはこともかよはぬ天の川ふみ月の名ぞそらだのめなる

わかれをしむおきその風に霧たゝばせめてやすらへ天の河船

ふみ月八日

棚機のわかれよなどか年に待つ心長さにならはざるらむ

閏月七夕

いたづらに袖ぬらせとや棚機のあふ夜の名のみ立ちかさぬらむ

荻

山里はいこそねられね松の聲をやむとすればをぎの上風

袖のうへに今朝めづらしき秋風のなど荻の葉にならし顔なる

よひ〳〵になれていをねぬ妻なれや秋風やどるのきの下荻

荻風

契りおく人しもならへ秋といへばぬる夜もおちぬをぎの上風

秋風荻の葉をふく

あはれとも憂しとも人の心より荻ふく風の身にやしむらむ

萩

宮人の袖のなごりやとゞむらむ今もにほへりまのゝ萩はら

閑庭萩

山里やとはれぬ庭のま萩はらせめてをじかの跡だにもがな

さをしかもとひ來ぬべくぞなりにける荒るゝもうれし庭の萩原

雨にぬれて萩の花を見る

よしさらば衣にほはせ眞萩はら分けゆく袖は雨にぬるとも

千蔭の家に歌よみける時萩露を

萩はぎの名におふそのゝ夕露に袖にほはせてけふは遊ばむ

萩の露おもし

故郷のよもぎがもとの小はぎ原はら
はぬ露を哀とぞ見る

をみなへし

人ごとのさが野にたてる女郎花風さ
そふともなびきだにすな

薄

旅まくらかりねのなごり跡見えてい
るのゝすゝき結ぼほれつゝ

をばなさへ心ありげに見ゆるかな秋
としいへば袖の露けき

庭薄

かくながら月をもやどせ庭のおもの
をばなが袖に露おもるなり

朝顔

露の間にうつろふ花よさもあらばあ
れ松も薪(たきぎ)となる世なりけり

朝がほを見て

朝がほのうつろひやすき花にしもは
かなかる世をたぐへてぞ見る

草花色々

いろ〳〵にかさぬる袖かをとめ子が
すがたの野邊の花のちぐさは

栽二秋花一

うつし植ゑて野邊のちぐさの花かず
を思ひ殘さぬやどの秋かな

蟲の音も小はぎが花も夕露を待ちえ
がほなるませのうち哉

月照二草花一

すむ月をあらはなりとやをみなへし
を花が袖におもがくしせる

野花留レ客

秋の野にとまるこゝろはさをしかに
われおとらめや萩が花妻

をみなへしなまめく野べにあくがれ
て誰もこゝろを花になすらむ

人々秋の野に遊ぶ

からにしきたゝまくをしみ秋の野の
萩のあそびにこの日くらしつ

おもふどち秋野の花にたちまじりく
れなば蟲の音をも尋ねむ

小鷹狩

眞萩ちりを花みだれて狩人の袖ふき
かへす秋の夕風

いなづまのいそがしきを見て

稻妻(いなづま)のひかりにも見よやどるまはた
だしばしなる露の此世を

露

花ににほひ月をやどして秋の野の哀
そへよとおける白露

風をまつ草葉の露よいつまでか我身
のよそにおもひおくべき

蜘のいに露のかゝれるを

いとすゝきなびくと見しはさゝがに
のすがきに露のおもるなりけり

蟲聲

ほのかなる末野の月になく蟲はいづ
こに草のまくらをかとふ

蟲の音いとしげし

露おもるむぐらよもぎの夕かげにと
ころせきまで蟲の音ぞする

寺静にして蟲をきく

とはれぬをこゝろとすめるむろのと
に人まつ蟲やたれにならへる

雨中蟲

よもすがら窓うつ雨にこたへつゝし
めやかに鳴くきり〴〵す哉

床蛬

おきそはる霜の夜床になく聲もむす
ぼほれゆくきり〴〵す哉

松蟲

あはれさのいづれはあれど故郷に人
まつ蟲の月になく聲

鹿

夕風に眞萩ちる野のかり枕しかの音
きけばいこそねられね

野鹿交レ萩

眞萩はら花ちる頃はさをしかの鳴く
音さそはぬ夕風もなし

鹿聲近

わがやどのものときくこそあはれな
れ枕の山になく鹿の聲

秋田

心とくかりし早田のひつぢさへ穗に
出でぬべく見ゆる秋かな

山田もる賤のかりほにおくかびの煙
とともにたちあかすらむ

穗に出でぬをだのひつぢやうしと
見むおろか老なる身のたぐひとて

田家興

月きよきあら田の原のふせ庵にしか
の音きゝて今宵あかさむ

田家秋晩

人かへる夕べをおのが時とてや落穗
たづぬるを田のかしどり

稻舟を

みなと田に朝夕かよふいなぶねはた
だかりしほにまかせてぞ漕ぐ

秋眺望

たかまどの野邊のうき霧とだえして
尾花につゞく松の村立

旅宿秋曉

夢さむるさゝのしのやのかり枕あか
つき露にぬれぬ夜もなし

みやこ人とはゞかたらむ有明の月に
ふしみの里のかりねを

秋烟

かりすてし山田にのこるもくづ火の
煙さびしき秋の夕暮

秋聲

あしの葉も聲うちそへて難波がた夕
しほさわぐ浦の秋風

秋夕

くれぬ間はむしの音うとき淺茅生に
月待つほどぞ秋は淋しき

秋夕風

吹く風はいつとなけれど荻の葉の夕
べぞわきてこたへがほなる

秋夕思

大かたに秋をしらする夕露のなどわ
が袖をおき所なる

秋夜

とりの音にまたおどろきつ秋の夜のいくむすびせし夢のなごりを

秋夢

村雨の音にねざむる秋の夜はいくたび夢をむすびかへけむ

秋雨

塵の世の人は知らじなばせを葉に雨の音きくあきの哀を

月

世のうさもわするゝたねとなるものを老をば月になど歎くらむ

秋といへばかはらぬ友となれがほにとひくる月を哀とぞ見る

わきてしもあはれとぞみる山里に月も我が身もすみかへてより

やちまたに塵をなたてそを車のわれとは月のくもらぬものを

おのづから須磨も明石もおもかげにうかぶは月の夜頃なりけり

くもる夜の月

もれ出づる月やいづことゆく雲にあからめもせぬ秋のそら哉

對レ水待レ月

いつしかと月待つほどの池水にまづすむものは心なりけり

見レ月

ながしとて秋をばたれのいとひけむ月にこゝろの慰むものを

思レ月

あはれとは月も知らなむしるべなき闇にいくよかたどり來し身を

あらし山の月

山の名のあらしにはるゝ月みればとなせの波に影ぞくだくる

月出レ山

床の上にかたしく霜とかつ見れば枕の山に月ぞ出でぬる

初昇月

たちのぼる雲におくれて山のはにかつ見えそむる秋の夜の月

暮天月

木の間よりもるゝ夕べの月見れば先づこゝろこそときめきにけれ

深夜月

更くる夜と知らで月をば見つれどもいつしか袖は露にぬれぬる

曉更月

傾ける影をあはれと見つるかな身のたぐひなる山のはの月

夜々見レ月

照るをめで曇るを惜みよひ〳〵の月に心をつくす頃かな

舟をうかべて月を見る

はるゝ夜の波にうかぶる河ふねは月のゆくへにまかせたらなむ

河なみに月のゆくへをしたふ夜はつながぬ舟もうれしかりけり

すむ月にこぎゆくかいの雫をばかつらの花の散るかとぞ見る

山館見レ月

人とはぬ深山の庵の秋はたゞ月こそ
ともと住みならひけれ

かくてのみ月をし友と住みなれむ麓
のちりの世をのがれ來て

霧中月

深き夜のあはれは添へつうす霧に光
をさまる山のはの月

きりの海を出で來る月や水底にしづ
める玉の影と見ゆらむ

海邊月

あし火たく煙を空に吹き消ちて月を
見せたるうらの秋風

難波のうらの月

月見つゝなにはのあしをかりそめの
海士となるまで浦馴れにけり

たちかへり難波のことを人とはゞ月
のみみつの浦とこたへむ

江月

波にあらふ光を霜と見つるかな太刀
つくり江の秋の夜の月

名所月

飛鳥河あすも來てみむ秋の月七瀬の
よどにかげやどる比

播磨がたゑじまが崎にすむ月は影を
波間にうつしてぞ見る

舟とめて今宵はこゝにあかしがた名
だたるうみの月をこそ見め

さくら河の月

みし春のおもかげかへて櫻川あきは
かつらの花ぞながるゝ

橋月

すむ月のよどの繼橋もゝよつぎかく
ても見ばや波にてる影

舟の路の有明の月

ゆく舟はきりたちこむる波の上にほ
の〴〵のこる有明の月

夜やふかきながれやはやき有明の月
もおち行くよどの河舟

やむごとなき殿の月の宴に侍
りて

玉だれのを簾のひまもる月影も所せ
きまで照す夜半かな

月あかき夜人の家のいづみを
見て

すむ人のこゝろきよさもくまれけり
月をやどせる庭の池水

幽栖秋月

おもふ友なしとないひそむぐらにも
さはらず月の影はとひけり

故郷月

故郷は板井のしみづうづもれてしの
ぶが露に月やどりけり

山家月

かくて世をあきのすさみと人やみむ
月ゆゑ山に住みなれにけり

山里にて月の夜都をおもふ

昔みし都のともゝ月にこそ我すむ山
のあきをしのばめ

玉すだれかゝぐる宿と松の戸とあは

れやいづれ秋の夜の月

都月

やちまたにすみゆく月の玉すだれ今
宵かゝげぬ高殿もなし

貴賤憐レ月

ちまたにも夜よしとうたふ聲すなり
雲井に月をめづるのみかは

緇素見レ月

のがるゝものがれえぬ身も塵の世を
わすれてむかふ秋の夜の月

秋月勝二春花一

秋といへばいく夜もともと見る月を
あだなる花に何たぐへまし

十五夜月

世のことはあかぬならひの埴生にも
みちたらはせる秋の夜の月

としごとのくもるならひも忘られし
今宵の月よ入るまでは見む

かげやどすいつはの松のいつはあれ
と秋をなかばにすめる夜の月

わがごとく今宵の月にあくがれてい
く里人かいを寝ざるらむ

心なきうらわの海士も山がつも今宵
の月をたれか見ざらむ

白河少將君のめしける時よみ
て奉れる十五首の中

こよひとも知らで今宵の月見れば驚
かるべきかげにやはあらぬ

かぎりなきちゞの秋にもあかれじと
ひと夜を分きて月のすむらむ

よしや月かくるならひはあらずとも
いつを今宵にたぐへては見む

としといひおそしと待たむ秋もなし
月のかつらの花のさかりは

くまもなく思ひこそやれから人もこ
よひの月をかくやめづると

なれがほに見るものながら老が身も
今宵の月はめづらしき哉

賤がやも光ことなるあきの月玉のう
てなやいかにさやけき

いかばかり言葉の玉をみがくらむこ
よひくまなき月の光に

年毎に八月もちの夜半はあや
にくに雲のたゝずまひのここ
ろねたきを、今宵はちりばか
りの隈もあらず、さるはまづ
芳宜園のけはひいかにとて淺
茅がもとの露ふみわくれば、
はやく延年千古など來あひて
うそぶきあへるに、あるじの
翁は澄みのぼる影をわがもの
顏にてうちまもれるも、折を
かしき夜のさまなり、家とじ
を始めてふみ子ちえ子などの
さやかなる空にあくがれ出で
て、伊豫簾かゝげながらはし居
のあらはなるも今宵は罪なう
こそおぼゆれ、夜更けゆけば
聞中大德の玉もしかずとうた
ひながらゆくりなうまうで來

ぬるも、世の外の光そへたる
心地してこゝろゆくまとゐに
なむ
とこしへにかくてぞみまし橘のかげ
ふむ庭にすめる月影

十五首

十五夜月
月夜よし夜よしといひしふるごとは
かゝる夜半にやうたひ初めけむ

月前風
おのづから月の光となりにけり雲ふ
きはらふ夜半の秋風

月前露
今宵しも月やどれとや萱(かや)の軒草のま
がきも露おもるらむ

山月
塵ひぢのなれる山より出でゝなどか
ばかり月のかげはすむらむ

野月
よの常のたぐひとは見じ名にしおふ
玉の横野にすめる夜の月

浦月
あしの葉に夕しほたゆる難波がたう
らわのたづも月に鳴くなり

花洛月
月にとひ月にとはれてこよひしもす
さみおほかる都人かな

寄レ月逢レ戀
おもなさも思ひわすれてあふことを
月にとはなど契りおきけむ

寄レ月恨レ戀
はれやらぬ空ならうらみそ我からのな
みだに月はくもる習ひを

寄レ月別レ戀
いかにしていひなぐさめむ今宵とて
月にひかふる袖のわかれは

月下旅泊
袖のうへに苫もる月をかたしきてい
くよあかしの磯枕せし

月下眺望
六田川(むつだがは)きしねの柳散りそめて七瀬(なゝせ)の
よどに月もへだてず

月下述懐
ともすれば袂の露をそへてけりかた
ぶく老を月にたぐへて

月下懐舊
月をおもふ友こそ稀になりにけれむ
かしの秋を誰とかたらむ

月下交友
隔てじとともにまとゐをすがむしろ
くまなき月を心にはして

月前紅葉
もみぢばに今一しほをそへよとや月
さへかげを霜になすらむ

月前萩
月みにと訪ふ人あれや夕庭に露もみ
だれて萩が花散る

月下葛
葉がくれににほふ眞葛の花も見むう
ら吹きかへせ月のした風

月前遠鐘
はるかなる鐘もなにかまぎれまし月も心もすみわたる夜は
月前遠情
月にこそおもかげうかべ昔みしまゝの入江の秋のうら波
月前幽情
あはれとやうしとや見ましあばらやのしのぶが露にやどる月影
十三夜月
一とせの花のとぢめと咲く菊にこよひの月をたゝへてぞ見る
久かたの月のかつらの花みればうつろふ秋にならはざりけり
九月十三夜月をもてあそぶと
いふことを
おもふどちまがきの菊を折りかざし月みる夜半は更けずもあらなむ
駒迎
ふみならすせたの長橋きりはれて波の上ゆく望月の駒
駒引
雲のうへにみまきの駒をむかへ來てけふ引きわけの使たつらし
みちのくのあら野の駒もなつき來てみよのためしにあふ坂の關
雁
山風のさそふ木の葉とみるばかり麓の小田に落つるかりがね
薄暮初雁
秋風のわきて身にしむゆふべかなはつ雁がねの聲聞きしより
ゆふぎりのたえまもり來る初雁のはつかなる音もめづらしき哉
月前雁來
塵ばかり雲もかゝらぬ山のはに落ち來る雁ぞ月のくまなる
すみわたる月のみふねにおくれじと聲をほに上げて雁は來にけり
霧
ゆくふねはほのかに見えて朝河のあけぬや霧のまよひなるらむ
秋といへば神のいぶきの名もしるく先たちそめつ峰のうき霧
いかにして身のうき秋をわすれまし霧のまがきは世を隔つとも
霧底筏
あすか河ふち瀬も見えず立つ霧にくだす筏やいかにたどれる
野分
野分せしみすゞ高かや影ふして下葉にまじる秋はぎの花
擣衣
世をうぢの河風さむく更くる夜に衣うつなりまきのしま人
名所擣衣
さよ更けて聞けばさびしないめ人のふしみの田居に衣うつ聲
更くる夜のとほよる波に聲添へて衣うつなり須磨の浦人

月の夜に衣うつを聞く
さよぎぬたひゞきは空にかよへばや
月にあはれのうちそはるらむ

鶉
うらがれし秋のすゑ野ぞ哀なるしも
をうづらのなく音のみかは

鴫
旅まくら夢もむすばであかさましも
のこひしぎの聲をきゝつゝ

重陽宴
さかづきはくむともあかじ今日をし
も待ちえし菊の花のむしろに
宮人のかざしの菊の花の色もかよひ
てにほふ袖のむらさき

菊花待レ開
下露もかをるばかりに咲きなばと心
を菊のうへにこそおけ

菊
千世ふれど老をも知らぬしら菊の花
のおもてに君あえぬべし
なづさへば老もわかゆときくの花い
ざこゝろみに折りてかざさむ

折レ菊
移ろはむためしもさらにしら菊は折
るとも香さへあせずやあらまし

人のもとより、君とわが語
らむことのつもりては淵とな
るべき菊の上の露　とあるか
へし
下露をふちとたのまば菊の花霜にう
つろふことな習ひそ

閑庭菊
おのづからしづけき宿の手ずさみに
つくろひ添へつ菊のきせわた

菊閑中友
世をいとふ人のたぐひときくの花う
ゑて心の友としも見む
この宿に千世をもちぎれ世のうさは
いざしら菊の花に馴れつゝ

月の夜きくを見て
見れどあかぬにほひなりけり長月の
光そへたるしら菊のはな

月照二菊花一
さまざまの色ににほへるむら菊はよ
るさへみよと月やてらせる
照る月の光はしもと見えながら老い
せずにほふ白ぎくの花

菊契二多秋一
山人の住むてふ宿のきくのはな千秋
もいろはかはらざらまし

東海寺の山ぶみに菊もみぢさ
かりなる頃山里をとふといふ
ことを
いざとはゞ又も來て見むもみぢば
も菊もえならぬ秋の山里

蔦
染めわたす梢のつたの村もみぢ秋は
まつさへ色になりつゝ

紅葉
しぐれするみふねの山はもみぢ葉の

色こき秋にまづこがれけり
かさとりの山のもみぢば色ぞこきい
つかしぐれの雨はもらせし
しぐれする雲にくもれる鏡山下てる
いろはもみぢなりけり

紅葉淺

一枝はまづこそたをれ薄もみぢ青き
をおきてかへる山路に
そめのこす千入(ちしほ)のをかの薄もみぢ秋
もおくある心地こそすれ

紅葉淺深

一むらのたかねのもみぢまづそめて
麓ぞ秋におくれがほなる

林葉漸紅

紅ににほふ林も下かげはみどりをの
こす秋のこのごろ

黃葉

露をだにもらさぬ松の下もみぢうす
きながらに秋を見せけり

紅葉深

檜原(ひはら)さへにほふばかりになりにけり
もみぢ色こきをはつせの山

山皆紅葉

峯も尾ももみぢ照りそふかゞみ山く
まなく見ゆる秋のいろかな

紅葉勝レ花

花よりもあはれはふかしみ山木のお
のがいろ〳〵紅葉する頃

紅葉留レ客

もみぢ葉のちらぬかぎりは山里に秋
はつましきこゝちこそすれ
家路をも誰かおもはむもみぢばに心
をそめぬ人しなければ
山里にまくらからずばむらもみぢ昨
日にまさる色を見ましや

松間紅葉

染めわたす色をもみぢにゆづりてや
松は聲のみなほ時雨るらむ
散らぬ間を折りてかざさむむらもみ
ぢ松の嵐のうしろめたさに

森紅葉

秋のいろはあさかの森のむらもみぢ
しぐれの後ぞ又も來て見む

林紅葉

そめわたすかた山ばやししげけれど
露ももらさぬ秋のいろかな

故鄕紅葉

あれにける志賀の都のむら紅葉にし
きだにはれ昔しのばむ

箱根紅葉

箱根路はもみぢしにけり旅人の山わ
けごろも袖にほふまで

行路紅葉

散りしけるそはのもみぢに跡つけて
霜の上ゆくみねの柴人
みゆきせしむかしの秋のあととめて
紅葉を分くる千世の古道
木々の色も山路もふかくなりにけり
はゝそにつゞくはじのむらだち
家路をも何かいそがむもみぢばの下

照るかげは暮れぬともよし

江紅葉

大堰河入江ににほふもみぢばのこがるゝかたに舟はとゞめむ

社邊紅葉

露しものいかにもりてか神のますみかさの山はもみぢしぬらむ

朝熊やかゞみのみやのむら紅葉下照るかげぞ世にはことなる

神のやしろのあたりをまかりけるにいがきのうちのもみぢを見て

行く秋をひきとゞめたるしめのうちに匂ふ紅葉はあかずもあるかな

月前紅葉

梢よりもり來るかげの霜なれば月も紅葉をそむるとぞ見る

瀧紅葉

布引のたきのしら絲それをだに村濃に染めて散る紅葉かな

長月なかば島このみ給ふ家にあそびて

ふねよせて誰も見よとや中島のもみぢも波にこがれ出づらむ

關路秋風

ゆく秋の梢をさそふ山風にもみぢ吹きこす足柄の關

秋霜

おく霜にうらがれわたる草の原かくていくよの秋かすぐせし

朝しもの光や月にそへて見む秋もなごりの有明のころ

くれの秋

しぐるとも露も散らすなもみぢ葉にけふゆく秋をかけてとゞめむ

さをしかも聲なをしみそ花づまに別れむ秋は今日にやはあらぬ

眞はぎ原鹿の音うとくなりにけりなが花妻を秋はてぬとか

暮秋朝

のこりなく染むる梢の朝しもに更け行く秋のほどをこそ知れ

暮秋興

厭くよなき山路の菊の花も見つゝもみぢをつとに折れるのみかは

晩秋鹿

眞萩散りもみぢ亂るゝ山ざとに秋ををじかの音にたてゝ鳴く

長月つごもり山里をとひて

山里は秋のなごりぞあはれなる落葉まじりに尾花散る頃

琴後集巻四

冬歌

十月ついたち秋のなごりなき心を

木々はみな色なきのみか今日よりはあらぬ朽葉を袖にかさねむ

もみぢ散り鹿の音たゆる山里は秋をきのふとおもはざりけり

神無月ばかり山里にやどりて

木の葉ふるかた山かげのかり枕こゝろすむにぞいを寢かねつる

冬の衣かへ

きならし〻露分衣ぬぎかへてけふよりしもの白重せむ

うらもなく月をば又もやどさまし時雨にぬる〻袖のくち葉に

深草の里を冬によせて

とふ人もあらしにいとゞ門さしつ野となる里の冬枯の比

時雨

雲過ぐるみねは夕日のかげ見えて麓のさとに時雨ふるなり

神無月ばかり縣居の翁のみまかり給へる日に、みはかにまうでゝ少林院にて人々と歌よみけるに、しぐれといふことを題にて

としごとに山分衣きてを見む時雨の雲にいざなはれつゝ

ふることは世にあらはれつならの葉にさしも時雨の音たてしより

夕風のなごりしぐるゝ峯の松たかきしらべをうたふとぞ聞く

かへるさにじぐるゝ袖はほさできむ山のしづくをかたみと思へば

初冬時雨

むら紅葉なほ散りのこるかずとめて今一しほと時雨きにけり

朝風のさそふもみぢにあらそひて梢にさわぐ初時雨かな

山路時雨

もみぢ葉を袖につゝまぬ人もなし時雨と共に山めぐりして

樵路時雨

袖ぬれてかへる木こりにことゝへば高嶺の雲はしぐれなりけり

山中時雨

箱根路は時雨來にけり富士の根を雲立ちはなれ行くとみしまに

山家時雨

山かげやならの葉ならで音もなしかやの軒ばにしぐれふる頃

閑居時雨

木の葉ふる音を軒ばに先だてゝやがて時雨をさそふ山風

世をよそにふる身をだにもらさじとさゝの篠屋をとふ時雨かな

閨時雨

なか〳〵に友と聞くこそ哀なれねざめがちなる夜半の時雨を

行路時雨

おくるゝもおなじ木陰を尋ね來て野路の時雨にあひやどりせり

里時雨

一しきりはるゝ跡よりしぐれ來てまたさしかざす衣手の里

時雨陰晴

はるゝかと見ればしぐるゝ空の月雲のやどりやさだめかぬらむ

述子の君の御もとよりもみぢにつけて、　神無月しぐれに染みしもみぢばの散りうせぬ間を君にとぞおもふ　とのたまふかへし

もみぢ葉も君にひかれてわが爲にきのふの秋のいろやとゞめし

かみな月五日、人々と共に少林院にまうでけるに、芳宜園の翁いまはのきはまでもけふの山ぶみの事いひつゞけられしを思ひ出でゝ、殘る紅葉を

誰が爲にのこるもみぢぞ契りおきし人は秋だに見はてざりしを

殘るもみぢを尋ぬ

道かへてまたや尋ねむきのふ見し端山は秋の色ものこらず

殘菊

散りのこる菊も我身にたぐへ見むいたゞく霜やいづれ増ると

殘菊ねやにかをる

なごりぞとかをる枕もあはれなりふせやの菊の秋におくれて

山家殘菊

のがれすむ身のたぐひとて世の秋におくるゝ菊も哀とぞ見る

神無月ばかりにうつろひたる菊に霜おけり

みながらはうつろひはてぬしら菊に猶まがへてや霜の置くらむ

霜

朝まだき門田の鳥やあさりけむ霜に跡あるまへの棚はし

霜夜聞レ鐘

置きそはる軒ばの霜の深き夜に聞きもまどはぬ鐘の音かな

露結爲レ霜

日影うときかたへは霜となりにけり夕風さゆる岡の露はら

落葉

木枯のたえず音する山里は苔路によそのもみぢをぞ見る

大比叡や小比叡おろしの音さえて木の葉ふきまく志賀の辛崎

落葉浮レ水

もみぢ葉を波もてはこぶ貴船河きのふの秋やこゝによどめる

河水にもみぢ流る

落ちたぎち水泡さかまく谷河にもみぢみだるゝ夕あらしかな

庭落葉

かき拂ふことを惜しとて日をふれば道さへ絶えつ庭のもみぢば

車中落葉

もみぢ葉を風のさそへる小車はさらに錦の下すだれせり

月の夜木の葉の散るを見て

月かげのはれ行く空にさりげなくしぐるゝものは木の葉なりけり

散りまがふ紅葉に月もくもる夜はすさまじげなる影としもなし

冬朝

日影さす淺茅が原の朝じめり夜の間の霜のなごりなるらむ

山家冬朝

山がつのさゝのしのやに朝餉たくけぶりや夜半の落葉なるらむ

寒草

たゞしばし冬田にのこるそば麥の霜にまがへる色もめづらし

冬の野のをばなは霜に枯れふしてまねかぬ袖を拂ふ夕風

あはれにも殘るか春をおもひ草しもの尾花にまじるみどりば

野徑寒草

行く人もすさめぬ野路に枯れ立ちてつれなく見ゆる女郎花かな

岡寒草

霜のうへの路さへ絶えて冬はたゞかるゝゆきゝの岡のかや原

庭寒草

吹く風にみだれし庭の絲すゝき今朝は霜にぞむすぼほれ行く

枯野を行くとて

霜やたびふるのゝ千草枯れふして花に分け來し面影もなし

枯れたる荻につけて人につかはしける

冬されば音づれ絶ゆるをぎの葉に君ならはむと思ひかけきや

寒菊

霜の後に咲くてふ菊の花ながら下葉は秋の色やのこせる

池寒蘆

朝氷むすぶや波の音絶えて霜にしづまる池のむら蘆

濱邊寒蘆

よる波も蘆のかれ葉に音そへて夕風さわぐ大よどの濱

冬嶺秀二孤松一

もみぢ葉は風にまかせぬ木々もなしひとり尾上の松をのこして

椎柴

冬ごもる峯のしひ柴しひてだに寒さわすれむよすがにぞ刈る

冬はまた朽葉まじりの落椎を紅葉の後の山づとにせむ

曉殘鴈

霜けぶる有明の月に空はれてまれな
る鴈の數ぞ知らるゝ

氷

くみすてし跡よりやがてこほるなり
片山もとのいさらゐの水

氷始結

たきの絲はよどみも見えぬ山河にあ
さ瀨の氷まづぞむすべる

氷留二水聲一

氷ゐて落葉にとづるいさら水けさは
聲さへ埋もれにけり

夜の間にや氷り果つらむ更け行けば
軒のかけひの音絶えにけり

湖氷

つくばねの雪になり行くあしたより
氷りそめたる鳥羽の海づら

しがの浦や蘆間の氷むすぶ日は鳰(にほ)の
浮巢も流れざりけり

氷駐レ舟

みぞれ降る比良の大わださえ暮れて
氷によどむ志賀のうら舟

冬月

冬の夜は霜にくもれる月よりも嵐に
更けし影の寒けさ

閑庭冬月

淺茅生のしもには跡もなかりけり月
のみひとり訪ひならしつゝ

世の人に見せましものを霜むすぶ淺
茅がもとの冬の夜の月

寒閨月

敷妙(しきたへ)のそでの氷となりにけり閨のひ
まもる冬の夜の月

故鄕冬月

里は荒れてくまぬ古井の氷る夜は月
さへかげをとゞめざりけり

破林霜後月

いつしかと霜を落葉にふりかへて梢
くまなき冬の夜の月

冬月水にうかべり

下折れの枯れ葉は波にうづもれて月
にさはらぬ池の村蘆

寒流帶レ月

霜氷るあしの枯れ葉に風さえて月す
さまじき淀の川なみ

浦千鳥

よる波にみだるとすれど浦なれてま
た立ちかへるむら千鳥かな

曉天千鳥

沖つ風雲井に吹きて有明の月にみだ
るゝ村千鳥かな

よるの千鳥

舟とむる磯山かげのむら千鳥なみの
よるこそ哀添へけれ

波の音にうきねの枕夢さめて心すむ
夜をとぶ千鳥かな

月前千鳥

うきものと何おもはまし磯まくら夕
なみちどり月に鳴く比

すむかげのくもると見ればかつはれ

て月に横ぎるむら千鳥かな

河千鳥

河島によるかとすれば立歸るちどり
や波とおもふどちなる

水鳥

水鳥のところさだめぬやどりをもう
き身のうへにたぐへてぞ見る

水鳥知レ主

巣だちせし池のかりの子年をへてぬ
しわくばかりなるが哀さ

澤水鳥

こすげかる人もやかよふ澤水にとこ
ろさだめぬかものむら鳥

河瀬にをし啼く

夜を寒みつがはぬ鴛鴦の聲すなり岩
ねの水や氷りそめけむ

あじろ

波のうへの網代のかゞりしらむ夜に
猶こがるゝは紅葉なりけり

あられ

かきくらし降るやあられの玉笹にた
まると見ればかつくだけつゝ

山家霙

雪になる高根ははやくましろにて麓
のさとにみぞれ降るなり

雪

み山木といひなくたしぞ花ならぬ陰
やはいづれ今朝のしら雪
老が身のかゝらましかばふる雪にく
ち木も花のさくをこそ見れ
もゝしきや玉の砌にあとつけてけふ
初雪をいはふもろ人

初雪

色ながら木の葉散りしく苔の上に見
そむる雪のめづらしきかな
けふよりやみやこの人も待ちてみむ
初雪降れり宇治の山里

初雪降りける日

はつ雪はうれしかりけりいさゝめに
降るも友待つよすがと思へば

水路新雪

とまり舟苫のしづくの音絶えて夜半
のしぐれぞ雪になりゆく

淺雪

庭の面の苔路ばかりはうづもれて枯
生のすゝき雪にさやげり

竹雪

色かへぬたけの緑もうづもれて千世
をこめたる園の雪かな

松竹に雪つもれり

消ゆる世はあらじとぞおもふ松竹に
ちとせをかけてふれる白雪

松に雪の降りかゝりたるを

ふりはへて雪おもしろき宿とへば友
まつがえの陰ぞたがはぬ

雪の木に降りかゝれるを

いろもなく見はてし風の梢をもふり
すてがたき今朝の雪かな
散りかゝる梢の雪の花なるは今日よ
りはるの心知れとか

足柄山雪

旅ごろも衣手さむしあしがらの關吹
きこゆる雪のあさ風

足柄關雪

たび衣雪にきほひて出でたつやむち
うつ駒のあしがらの關

田家雪

朽ちのこる門田の鳴子音さへもうづ
もれはてし今朝の雪かな

山家雪

山里に雪みる日こそ世の外にふるか
ひありと思ひ知らるれ

山里に雪降れり

來む人は思ひもかけぬ山ざとに友ま
つ雪や誰にならへる

遠山見レ雪

かひがねの今朝より白く見ゆめるは
夜半のしぐれや雪となりけむ
すみのえの浦わの波にまがふまで雪
かすかなる淡路しま山

志賀山越に雪の降りたりけれ
ば

御佛の法にあふ身をたのみつゝ雪の
山ゆく今日にやはあらぬ

杜雪

風吹けばゆるぎの森に散る雪をねぐ
らの鷺のたつかとぞ見る

杣雪

おしなべて梢の雪となるときはくち
木の杣も花咲きにけり

島雪

眞楫とるたもとに雪をはらひつゝさ
して漕ぎよる笠縫の島

閑居雪

訪ひ來べき人しなければ庭の雪にこ
ころおかれぬ草の庵かな
たま〳〵に人も訪ふとおもりゆく
松の雪をも拂はでぞ見る
世にそむく宿とや雪も隔つらむ今朝
はとなりも道見えぬ迄

やむごとなき殿に雪の山つく
らせ給ひけるを見よとてめし
たりければ簀子に侍りける
に、簾のうちより祝のこゝろ
をこめて歌よめとおほせごと
有りければ

この殿につくれる雪の山にこそ千世
をつむべきためしをも見れ

千陰がもとにやどりけるあし
た雪の降りたりければ

かきこもる小笹がもとにやどらずば
よにおもしろき雪を見ましや

市中雪

ゆきかよふ里の市女が笠のはにはら
ひもあへず積る雪かな

河雪

とね河や消えせで波にながれゆく雪
にも今朝はうはにごりせり

名所雪

宮姫のむかしおぼえて大原のふりて

し里に雪ぞつもれる
あしがらやあしの海づら氷る日ぞ神のみさかに雪は降りける

社頭雪

みたらしの岩うつ波もうづもれて雪しづかなる加茂のみやしろ

禁中雪

もゝしきや雪うち拂ふ朝風にみはしの櫻散るかとぞ見る

曙雪

雲はるゝをのへは雪にあらはれてまだ明けはてぬ山もとの里

雪中眺望

見わたせばやその湊もくまぞなき雪に明けゆく鳰の海づら

雪中遊興

雪山の消えむ消えじをいつしかとおぼつかなくもふる日數かな

雪の中におもひをのぶ

花さかむ春にあふよや待ちて見むとしふる雪のうづもれし身も

鷹狩

狩人の朝たつ袖のしのぶずりみだるる雪にきほひてぞ行く
のる駒のあがきをはやみ大雪のみだれていづる御狩野の原

大鷹狩

みかり野は朝風寒し雪つもる遠山ずりの袖こほるまで

獵場風

御狩野のかぜをはげしみますらをが空とる鷹やあはせわぶらむ

遠近炭竈

いかばかり炭やくとてか遠近のみねに樵りつむ眞柴ならしば

人のもとに炭やるとて

みやこ人わが山ずみをいかにぞと思ひおこさばうれしからまし
大原の賤が手わざをせめて君夜ぶかき冬の友とだに見よ
雪霜の寒さもたへて草の庵にすみならすべきよすがにはせよ

老人さむさをいとふ

おもほえず寢ざめの袖ぞこほるなる昔はかくはならはざりしを

埋火

灰がちの色をも霜と見つるかな更くる夜寒きねやの埋火
時しあらばまたかきおこせ埋火の灰となりゆく老のこゝろも

爐邊閑談

もろともにむかふ火とりのいり炭のおもひいりてや昔かたらむ

爐邊懷舊

うづみ火のうづもれし身よいかにして昔を今にかきおこさまし

豐明節會

をとめ子が衣にかくるあかひものあかぬは舞のすがたなりけり

五節

みこゝろをよしのゝ宮のためしとや
袖かへすらむ今日の舞姫

臨時祭

夕さればみはしの雪に跡つけてかへ
りだちする雲のうへ人

荷前使

みてぐらを君が御門にはこぶなり今
ぞ荷前の使たつらし

神樂

はふり子が手にとり持ちてあそぶな
りわがにはあらぬ神の御杖を

ゆふだすきかたにとりかけとる枝も
あなたふとしや神の宮人

から神のかみのみまへによもすがら
大和の琴の音もすみにけり

朝倉やあづまの琴の音もそひて霜に
すむ夜のおもしろきかな

榊とり鉾とる袖もしら〳〵と霜うち
拂ふ神のみやつこ

佛名

身につもる罪をつくしのわたなれば
けふ法の師にかづけ初めけむ

佛名の導師にかづけものする

ためしとてかづくるわたにとり添へ
て醉ひをすゝむる栢梨の酒

佛名のあしたわかるゝ僧に

白雪のふりすてゝけふわかるとも山
たち出でばまたもとへ君

冬日

世のさがも知らで春待つすみかには
暮れやすき日も長閑なりけり

冬至の日に

咲きそむる梅の色香に知られけり春
に先だつはるの心は

依レ花待レ春

身にそはることも思はで來む春を花
ゆゑいそぐ年の暮かな

としのくれに

ふりにける身にも春こそいそがるれ
老いかくるてふ花を待つとて

歳暮松

山人の市路にはこぶ松の葉のかはら
ぬ春を明日やむかへむ

閑中歳暮

ゆく年もかくはをしまじ世の事に思
ひまぎるゝ昔なりせば

海邊歳暮

こりはこぶ鹽木と共につむとしやい
づれかからき浦の海士人

ま帆かけてなだ越す舟とゆく年とい
づれかはやき浦のあま人

老少送レ年

我もまた花のためにぞ春またむ老を
なげかぬ人にならひて

學者惜レ年

たのみこし三つのあまりも何ならず
けふ一年のくれぬと思へば

うかれめ年を惜む

ながれゆく年にまかせてあだ波をい
つまで袖にかけむとすらむ

雪與レ年深

暮れて行くとしの日數をふる雪は我が身につもるものとやは見ぬ

年のはての雪

跡をしもとゞめだにせでゆく年のつもるや雪になどならふらむ

年のくれに雪の降りければ

降る雪はとしの關ともなりななむひまゆく駒も立ちとまるべく

こゝちそこなひてわづらひける年のくれに

行く年はとゞめまほしく思ふかなかへらむ春をまつ身なれども

世のさかえもとむべき身にしもあらず、むなしき名を人に知られむのすさみもなければ、わがおきふしこそいと心やすけれ、やうく＼かたぶき行くよはひの、今はむそぢにもあまりぬれど、もとよりあめつちのことわりを知れゝば、今さらに年の暮るゝもおどろかれず

のどかにも過ぐる月日をこゝろからとしとは人の何名づけけむ

追儺

雲の上になやらふ時や來にけらし四つの御門(みかど)につどふ宮人

なやらふ雪ふる

伴のをがためしとて射る蘆の矢は御門の雪にみだれあひにけり

琴後集巻五

恋歌

戀

やよいかにますらたけをの心すら戀
にはあへぬならひなるらむ

　むさしうたとて相聞の心を

玉河にしづくしら玉みえずともとら
ではやまじしづく白玉

水鳥のをさきの池のあつ氷つひには
解くるをりもあらまし

さき玉の津にすむ鳥の馴れゐつゝ人
になるべき妹ならなくに

初戀

戀ひそむる心ばかりは嬉しとも憂し
ともえこそ思ひさだめね

わけ初むるみをの杣山おくまではお
もひもいらでこふる頃かな

不レ言戀

木がくれて人に知られぬ口なしの花
にうき身をたぐへてや見む

　身を觀じていひ出でぬ戀

はまの名のうち出でむことも思はめ
やかひなき海と身を歎きつゝ

身のほどを思ひ知らずばいとふとも
したふと人につげまし物を

思不レ言戀

おもへどもえぞいはしろのむすび松
とけぬ心をいかにしてまし

　いはでおもふ

言に出でゝいひも盡さむものならば
人に心をもらさゞらめや

色に出でむ時しなければ木がくれて
人に知られぬ口なしの花

たき河の音にたてゝはいはずとも下
にむせぶと知られてしがな

言始戀

人はよしいなさ細江のみをつくしつ
くす心をいはでやまめや

　いひはじむ

つま琴の音にたてそめてもらすとも
ひかれざりせばいかにしてまし

　有るまじき人を思ひかけて

いひ出でむ身のたぐひかは思ふぞと
知られむだにもやさしきものを

　童より見ける人を心かけて

はねかづらなつかしと見し面影をか
けてや今に戀ひわたらまし

さかぬ間も心にかけしはつ櫻あだに
なときそ花の下ひも

　しらぬ人

散りてこそよそにもしのべことの葉
は我に見よとのすさみならねど

　五節の夜人に

ためしあれば天津をとめも見るもの
を世にあひがたき人や何なり

忍戀

くるしとて言にな出でそねぬ繩のう

きにしづみて年はへぬとも
もらさじとしのぶ泪のいつよりか我
心にはそむき初めけむ

互忍戀

うきふしはおのがさま／＼ありとい
へどしのぶ心はかはらざりけり

聞戀

音にのみきくの濱邊にひろふてふか
ひなく人を戀ひやわたらむ

見戀

今ぞ知る見ざりし程にしたひしは數
にもあらぬ思ひなりけり

稀見戀

ほの見つるをりわすれめや花ざくら
霞のよそに身をへだてつゝ

われにとけなむ

よそに君うとくなるをぞたのまゝし
我にとけなむをりも有りやと

白地戀（あからさまのこひ）

あふも又なげきかさねむふし柴のし
ばしばかりの中のちぎりは
梓弓おきふしになどしのぶらんとる
てばかりの契りなりしを

通レ書戀

逢ふことは世にうど積のはま千鳥か
よふ跡こそ今はたのまめ

見レ書戀

とだえせしくめの岩ばしいたづらに
ふみ見てのみも思ふころかな

被レ返レ書戀

玉づさはよしかへすともむすびめの
かはらばせめて見つと思はむ

度々返事せぬ女に

いくしほと染めしやいづらなれ衣た
だ口なしの色ふかくして

ふみかよはして久しくなりぬ
れどつれなき人に

いたづらに心はそらに月日經ぬ雲の
うはがきかきも絶えなで

祈經レ年戀

祈ることいつかかひあるみしめ縄た
えぬ思ひに年をかさねて

契レ久戀

こがるべき程やしのばむ貴船河（きぶねがは）なが
れてするの世をたのみつゝ
逢ひみての後せの山のみねの松かは
らぬ色をちぎりともがな

年月をへだてゝ契りながらさ
もあらぬ人に

うらもなくたのみて年をふる衣いろ
かはらむと思ひかけきや

馴戀

おもひ出でゝかたるも悔しなれぬ間
の心くらべにすぎし昔を
馴れ顏に人に見えじと思ふより隔て
なきにも心こそおけ

馴不レ逢戀

思ふとはさすがにいはぬ中なればな
るゝにつけてつゝましきかな

憑レ媒戀

よそながら我がしめゆひし園の梅なりぬと聞くもうれしかりけり

人にうたがはるゝ女にかはりて

一すぢにおもひかけひのいさら水よそにはわけぬ心とを知れ

不レ逢戀

あふまでとたのむ命をともすればたえねと思ふをりも有りけり

神垣にかくる小鈴のしめ朽ちてならぬ戀にも年をふるかな

いとせめて逢ふにしかへばと思ふ身も只いたづらに消えむとやする

詞和不レ逢戀

つらからぬことばぞつらき中々におもひこりよといひもはなたで

不レ逢歸戀

いたづらに歸るこゝろのうす衣うらなくきたるかひだにもなし

雨ふるとて來ぬ人の降らぬにも見えねば

はるゝ夜の空だのめなる月もうし昨日の雨を袖にやどして

待レ使戀

逢ふことはかたしの濱のはま千鳥かよふ跡さへおぼめかれつゝ

逢戀

とけぬ間のうさをうつゝに馴れし身は逢ふ夜も夢と猶たどりつゝ

初逢戀

つれもなくながらふる身と思ひしもおもひわすれし今宵なりけり

戀ひ〱ておなじ心にいれひものむすびそめつる今日ぞうれしき

うれしさをつゝまむものを昨日までほさぬ袂と何かこちけむ

はじめてあへる

あふまでの心はちゞにくだき來ぬ一夜の夢と見はてずもがな

逢增戀

露ばかりかはす枕のほどなさに中々袖ぞひぢまさりける

あはぬ間の心なりせばおもかげの身にそふばかり思はましやは

祈レ逢戀

なか〱に逢ひみてこそはをしまるれ命にかへていのりこし身も

年頃あはぬ人に逢ひて後つかはしける

いたづらに經にける年のくやしさも逢ひみてこそは思ひ知らるれ

曉別戀

曉の露をもともにしぼれとや袖のわかれにふる涙かな

兼惜レ別戀

宵の間のかねにもうさは先だちぬこやあかつきをつぐるてふもの

月あかき夜人の歸りて又のあしたおとづれければ

かたぶくをうしと見つゝもあかしに

き待つ夜の月のたぐひならねど

後朝戀

またも來む程やちぎらむ別れ路にあしたおもなみたちかくるとも

一夜へだてたる

人心かはるならひのありといへばうしろめたしやあはぬひと夜も

打なびきいこそ寢られねなよ竹のひと夜もかれしならひなければ

二夜へだてたる

ふた夜をばやみのうつゝに過してき待たずば夢にあはましものを

遇不レ逢戀

今はたゞ塵のみつもる菅ごもの七ふも三ふもたれかかぞへむ

契りおく事を命にながらへつまたもあふべき此身ならねど

中絶えし身はなか〳〵にいとひつるうき名をだにも思ひ出にせむ

鳥のねをなどさばかりはいとひけむ今はかぎりのわかれなりしを

あふせをばいつと契らむうかれめのつながぬ舟を身のたぐひにて

與レ君後會知二何日一

なき名

種をだにまかぬなき名のいかなればかくまで人のつみはやすらむ

なき名たてたる人に

君ゆゑにいひさわがるゝ人言もなき名ならずばうれしからまし

ぬれぎぬ

さらぬだにうき身にきするぬれ衣はしぼる袂をまたくたせとや

名をしむ

あひ思ふ中とな人にいはし水つひにはもれむうき名なりとも

悔戀

もろともにとくるにつけて悔しきはつれなく過ぎし昔なりけり

身をすてゝ何もとめけむとりえてもつひにこやすのかひしなければ

占戀

あふことはかたやく鹿のこがれつゝ占とふ度に音にやたてまし

舊戀

なつかしとみし世をのみやしのぶらむうかりし節は思ひ忘れて

ふるくものいひ侍りける人に

わすれめや過ぎゆく年の後背山わけまよはじと契りおきしを

草ふかき野中の清水とだえしてもとの心にまどひけるかな

年經ていふ

おもひ出でよたなばたつめの逢ふせだにうらやまれつゝいく秋か經し

あひ思ふ

花もみぢはかなきふしのすさみにも思ひかはせし色は見えけり

われも見つ人にも見えつ春の夢あひ思はずばかゝらましやは

思二三人一戀

山吹にまたも心やひかれなむ梅もさ
くらもあかぬものから

おもひやす

人を思ふこゝろはいかでよわるべき
影となるまで身はやせぬとも

ものおもふ身はとやごもる鷹なれや
たゞやせ〴〵になりまさりぬる

忘戀

我ばかりねになけとてやみよしのゝ
かりにも人の音づれもせぬ

恨レ身戀

ゆるされぬ中のつらさも我からとみ
どりの袖のうらめしきかな

恨レ久戀

つれなさにたへても年をふる衣うら
むとだにも知られてしがな

秋恨戀

葛の葉にあらぬこゝろのいかなれば
秋てふからにまづさわぐらむ

さらぬだに露そふ袖の月かげをいか
に見よとか人のつれなき

絶戀

絶えはつる人のこゝろはつらからで
思ひそめしぞ今はくやしき

絶不レ逢戀

僞のことの葉ながらとり出でゝ絶え
にし人をまたやしのばむ

人のつらくなる比

一夜だにあかしかねしをいつよりか
またじと君をかこち馴れけむ

人ごゝろかはるならひをたのむかな
またうとからぬ折もありやと

思ひかけず絶えたる人の來り
ければ

うきものとおもひ知りぬる玉の緒の
つれなかりしぞ今はうれしき

ふたゝび絶えたる戀

水まさる谷の棚橋またさらにわたす
とせしもたゞしばしなり

くり返しものはおもはじかた絲の絶
えしながらのうき身なりせば

變戀

ともすればかばるを常の人の世に我
のみやなどかくたのみけむ

人ごゝろかはりにければ

おもふてふことの葉だにもかれはて
てかはる心のおくも見えけり

色かはる袖はあやしな紫のふかゝれ
とこそ思ひそめしか

おどろく

しのぶれば我によそなる人ごともう
き身のうへとおどろかれつゝ

艶女遇二他人一戀

咲きしよりめかれぬ花よあた人に折
られむものと思ひかけきや

泣レ面戀

おもかげをともにうつせばつゝ井づ
つゐづゝの水もむつまじきかな

山家戀

世をよそに住みなす山のかひしあら
ば人めいとはで逢ふよしもがな

戀里

うつり來てなれぬ大井の里住みに君
まつ風を聞くぞわびしき

水郷戀

澄みかへりおもふ心をいかにせむ小
島がさきのゆきのなごりに

めぐりあふ我ぞやさしき難波江のあ
しかるわざに年をかさねて

戀關

名のみたゞあふさか山のかひもなし
ゆるさぬ關を中にへだてゝ

舟路戀

かぢ枕みやこにかよふ夢しあらば妹
をみぬめに舟はとゞめじ

旅戀

たちかへりいつわぎも子にあふくま
の松ときくにもぬるゝ袖かな

ある曹司のまへを通りけるに
よるは螢のなどいひ出しけれ
ば

飛ぶほたるおもひは誰もあるものを
身よりあまるといはゞたのまむ

枕塵

ふたり寢てうちも拂はゞ木まくらの
ちりとたつ名もいとはざらまし

寄レ月戀

秋の夜のながき思ひのはてもなしこ
ころを月の空になしつゝ

うき事を思ひつゞけて月みればいつ
しか袖に影のやどれる

恨みわびなみだに月はくもれどもな
ほおもかげの立ちそはりつゝ

寄レ塵戀

いつよりか空になき名の立ちぬらむ
ちりもつかじと思ひける身を

戀の山のぼるにしなはなきものを何
ちりの身とおもひやむべき

寄レ河戀

染むれども薄花いろの紙屋河すくて
ふ名のみたつぞあだなる

寄レ瀧戀

おもひあまる心は瀧の絲なれやむす
ぼほれつゝせくよしもなし

寄レ野戀

はてもなくおもふ心にくらぶれば猶
むさしのもかぎり有りけり

寄レ關戀

ゆるされぬへだてよ不破の關ならば
もりすてむ世も有りとたのまむ

寄二海松一戀

みるめかるわざもかひなしいたづら
にあひねの濱をこと浦にして

寄レ鳥戀

いたづらにまだあらはれぬすもり子
のかひなく人を戀ひやわたらむ

寄レ鷹戀

をぶさとり手なれぬものをあら鷹の
すゞろに人の戀しきやなぞ

身を露のおきどころとは

寄レ貝戀

いたづらに拾ふ人なきやれ貝をふる
されし身のたぐひとぞ見る

寄レ灯戀

いかにせむ秋のなが夜のともし火は
かゝげつくせど盡きぬ思ひを

寄レ金戀

たゝらたて吹くやみ山の岩こがねう
ちとけてぬる中としもがな

寄レ鼓恨戀

かくしつゝ袖になみだのふりつゞみ
音にのゝなくも恨めしの身や

寄レ鼎變戀

人はなど有りしにも似ずなりぬらむ
鼎のあしのたつ名ばかりに

寄レ秋戀

身の秋に絶えぬつらさは數そへどつ
れなき露のいのち何なり

寄二秋露一戀

いかなりし契なるらむ秋ごとにうき

琴後集巻六

雑歌

天

動きなき日嗣の位たかしるや天の御
かげを世々につたへて

月のあゆみ星のやどりも行きめぐる
天の道こそときをたがへね

雑地儀

盡きもせず動きもやらぬ君が代は山
と川とを例(ためし)にぞ見る

風

やま松にしらぶる琴の聲たてゝたち
まふ雲の袖かへすなり

花もみぢ心づからも散るものをとが
をば風になどおほすらむ

古寺嵐

かねの音を峰のあらしのさそはずば
世にふる寺もありと知らめや

雲

ゆくへなきものとや雲をわきていは
む有りはつまじき人の此世に

夕ぐれに雲のたゞよふを見て

さだめなき世のすがたぞと見る雲も
ゆふべはわきて悲(かな)しかりけり

泊り船むやひわするな沖つ洲にたゞ
よふ雲は風はやみかも

雲埋二山路一

はるかなるうまやの鈴をしるべにて
雲の中ゆくあしがらの山

深山雨

たちのぼる谷のうき雲みね越えて檜
原がおくに村雨ぞ降る

雨中待レ友

つれづれのながめよいかにくらさま
し笠やどりにも人はとはなむ

夕やみ

夕やみにあさぢがもとはたどるとも
月待ちがてらとふ人もがな

山

山としもならばこの身をかくさなむ
うき世の塵よよしつもれかし

やまとのみつもるを何のかひとてか
詞のちりの數そはるらむ

名所山

旅人のぬさも手向くるゆふの山たが
越えそめて名にはおひけむ

天香山

日の經(たて)にふりさけみれば大君の御門(みかど)
おぼゆる天のかぐやま

富士の山に雲のはるゝを見て

心あてに見ししら雲は麓にておもは
ぬ空にはるゝ富士のね

山彦

あしがらの山のやまびことよむなり
いづれの峯に舟木(ふなぎ)きるらむ

山畑

たまたまにはたうつ人のあるをこそ

知らぬ山路のよすがともみれ
なづな咲く花のにほひにくれかねて
霞にのこる春のやま畑
　晴後遠水
水上(みなかみ)や雨のなごりの山見えてゆふ日
にうかぶうぢの河ふね
　名所瀧
大君の御代の名にしもおひくるや老
もわかえし瀧のまし水
　淵
浪風のさがしき世には住むともさ
わがぬ淵をこゝろともがな
　瀬
世の中はおきつ汐瀬をゆく舟のから
くや誰もうみわたるらむ
　海路朝
いさり火のかげは島わにのこりつゝ
波にしらめる沖つ百(もゝ)ぶね
　みやこ
移りゆく世のすがたをも見るものは
都の人の手ぶりなりけり
　古郷
ふる畑に苔むすかはらいく世經て野
となる里のむかし見すらむ
　にはたづみ
有りはてぬ世にぞたぐへむにはたづ
みたゞしばしなる雨の名殘を
　うたかた
うたかたを何はかなしと分きていは
む消えをあらそふ人のこの世に
　ほりかねの井
汲みそめし人はたが世の爲にとてな
ほほりかねの井をばのこせし
　仙家
とこしへに散らぬ花ある宿なれや霞
のいろもくれなゐにして
　閑居
身をかくすたぐひとな見そ草の庵に
ことなくて世を過すばかりぞ
とはれぬを何かなげかむ引く琴もむ
かふ硯も友なるものを
世のことは思ひわすれつ今日もまた
筆のすさみに日をくらすとて
　閑居燈
よのことはそむきはてたる窓のうち
になど燈火の花を見すらむ
　鏡山のふもとに世をのがれた
　る法師のもとへ
くまもなき心の月のかゞみ山うき世
のちりをはらひてやすむ
　林下幽閑
村まつのおのづからなる琴の音に苔
のむしろの塵はらふなり
　隣
子をおもふ心知れとやならはしの移
りやすさにうつすとなりは
宿かさでかへせるものをみやびをの
隣しめつとなどたのみけむ
　窓
風きよき南のまどのうたゝねにあが

りたる世の心をぞ知る

きさらきばかり柏木如亭の都にのぼるをおくる

花散らばとく歸り來てわが爲にみやこの春のことかたらなむ

大堀正輔の彦根へかへるをおくる

ちぎりおきてまたばや床の山ざくら散りなばまたも思ひたつ日を

清原雄風が香取へのぼるをおくりて

もろともにゆかましものをかとりがた鹿嶋の崎の花も見がてら

豐後の國にかへる人のうまのはなむけしける時

みな人のこと葉のはなもそへて見よゆふ山ざくら折りてかざさば

卯月はじめつかた上柳孝思が木曾路より都へのぼるにわかるとて

今もなほ木曾山ざくら散らずあらばはなの香うつせ旅の衣に

う月ばかり土田延年がふたら山にのぼるをおくりて

なつ山にひらくみのりの花にこそさかりなる世のためしをば見め

八月の末つかた長尾景隆が都にのぼりける時よみておくりける歌

いとまあらば月にまづとて秋の夜のいづこはあれど廣澤のいけ

もみぢ葉にむかししのばゞさがの山みゆきのあとも尋ねてを見よ

心してとひ見よ賤がしわざにも都はふるき手ぶり有りけり

ことの葉の色もまさましおのづから都の人に立ちまじりなば

しはすの二十日あまり七日の日勘解由判官正邦が都にかへり行くをおくる

ゆき氷みなぎりおつる富士河のはや瀬わたらば君こゝろせよ

ことのまゝのやしろを過ぎば我が爲にまたも逢ひみむねぎごとはせよ

山口至言が母とじをともなひて身延山にまうづるに、元政上人のふるきためしも思ひ出でられてなむいひやりける

世をへてもかげや澄むらむ法の月むかしの跡をてらしても見よ

小澤なにがしが香取にかへるをおくりて

いざさらばとねの河ふね行きかへりまたとひ來ませ波のよるべを

賀茂季鷹が父のこゝちわづらふと聞きて、とく都へのぼるに、わかるとてあふぎに添へて

ゆき〱てはやくあふぎの風しあれば身のあつしさも君や忘れむ

つくしへ下らむとする人に鹿
毛なる馬をおくるといふこと
を題にて

つくしがた月のゆくへは遠けれど心
をかけにたぐへてぞやる

ものへまかる人に、扇やると
て

君にまたあふぎてふ名をたのむ間は
風のたよりをわすれずもがな

手ならさばおもひも出でよかはほり
のこがるばかりにそへし匂を

かたらふ人の遠き國へまかる
に鏡をとらすとて

いのちあらばさらにも君ともろかゞ
み向はむまでのかたみには見よ

難波へゆき侍らむとしける時
よみて友だちのもとへおくり
ける

おしてるや難波ほり江のあき風にす
むらん月をひとりかも見む

旅宿夢

ぬるがうちはわすれむものを海山の
うきをまた見る夢ぞわりなき

山家

をさまれる世とて岩ほの中にだにな
ほ人ざとの數そはりゆく

此里にかくれそめしはいつの世と花
にぞとはむ桃のみなもと

山家雲

見るがうちに庭の木だちもうづもれ
て谷よりのぼる峰のしら雲

山家夕烟

みねの庵に焚くやましばの夕けぶり
心ぼそさを空にしらせて

山家夢

をり／＼にかよふ夢こそあはれなれ
憂しとそむきし都なれども

山家待ㇾ人

我山のもみぢ色こき秋はたゞ世にほ
こらしきをりも有りけり

山家送ㇾ年

花になれもみぢにあきて山里に世の
さが知らで年を經しかな

田家

いとまある年のあまりと賤のをがま
たをりかくるをだの竹がき

濱ゆふ

みくまのゝ浦のはまゆふ咲くときは
もゝへの波のよるかとぞ見る

岡篠

とだえなくゆきゝのをかのをざさ原
玉もなしあへず露ぞみだるゝ

江松老

すみの江の松や神代のたねならむ老
いぬてふ名も千年へにけり

大井河入江のまつはそのかみに昔を
とひし蔭にやはあらぬ

榊

はふり子がゆふとりかくる玉串に神
代のあとは今ものこれり

ゆづる葉

ゆづる葉のゆづる常磐の色に見む立ちさかゆべき宿のためしは

しきみ

明けくれのつとめたゆまぬ法(のり)の身につみのこさめや峰のしきみを

鶴立レ洲

あしたづの立てるなりけり澄む月のあかしのと波よると見えしは

曉鶏

曉のうきをつげしはむかしにて寢ざめなぐさむとりの聲かな

牛

引くうしのたぐひならずや小車のわれとうき世につながるゝ身は

猿

谷ふかみ霜に色そふ木の葉ざる秋はにしきをかづかぬもなし

瑠璃貝

青海のいろにまがへるいさら貝波かきわけてたれか拾ひし

書

天地(あめつち)のとほきはじめも見てぞ知る神代の書(ふみ)を今につたへて

よしやその千世のふる道ふりぬともふみ見て遠き跡は尋ねむ

引くうしのあせあゆるまでつみ添へてふりぬるふみの數ぞ知られぬ

披レ書知レ昔

くだち行く此世のさがも知らざらむふみ見て遠き跡をとはずば

神代山陵考を見てよめる

ふみ見ずばいかで知らまし神の代にいはと立ちけむその跡どころ

文

しるしおく文はあやしな見ればかつむかしの人に逢ふこゝちして

石王寺の石もて作れる硯をうすらひと名づけてその硯のうらにほりつけたる　石に白くうすらひの文あり

世をわたる人もかくこそうすらひをふむはかしこき心わするな

越の君の北方のおほせ事にてうもれ木の硯のふたに

うもれ木も今より世にぞさかゆべきこと葉の花の春に逢ひなば

弓

をさまれるみ世の守りの梓弓引きなゆるべそものゝふの道

やしま國今もむかしの跡とめてゆはずの貢たゆる世もなし

笠

うちむれて賤がゝりとるあし間より見えがくれする難波菅がさ

やよひばかり自寛の家火にあひてよろづのもの焼けうせぬと聞きて、硯筆など調じておくる包紙に

散らしけむこと葉の花を木のもとに

またかきつめよ見む人の爲め

筆

おのづから心の見ゆるわざなれば筆
とることのはづかしきかな

櫛

さし櫛やさしも久しきためしとてい
つきの宮にけふたまふなり

もとゆひ

もとゆひの霜はあやしなこむらさき
結びそめつる時も有りしを

すだれ

かりそめにすきまおほかるいよすだ
れ月もれとてや作り初めけむ

かは衣

なか〳〵にとりも出でずばかは衣や
くるおもひはそへざらましを

袋

きならせるとのゐの衣(きぬ)の袋こそあく
る人めをつゝむなりけれ

帶

紫もみどりもにほふみや姫のゆはた
の帶ぞ世にたぐひなき

あや

雲鳥のあやをさながらあらはすやこ
はたが機におればなるらむ

車

行きめぐる千里(ちさと)のはても小車の跡は
かはらぬ君が御代かな

帆

風先(かざさき)に鳴戸すぎ行く沖つ舟つくる帆
なはやいく手なるらむ

たく繩

海士の子が千ひろたく繩ながく世を
くるしとのみやうみわたるらむ

火とり

つれ〴〵の友となぐさむたきものに
ひとりとのみは思はざりけり

つと

あかしがた波間の月の玉ならば拾ひ
てこよひ濱づとにせむ

かたみ

みほとけにたつる朝なのかたみにも
つみおかさじとたのみつる哉

梁

梓弓いるよりはやく見ゆる哉やなせ
におつる水のしら波

魚梁

梁(やな)うちし昔がたりやつみのえのなが
れて世々にしのび出でまし

古壁苔　以下卅二首詩題

雨もるゝ軒のひはだのつま朽ちて苔
むすかはらいくよ經ぬらむ

垂洞藤

世にそむくかた山ほらの青つゞらす
む人あれどくる人はなし

嶺上雲

心ありてたつとも見えぬみねの雲な
に朝ゆふに行きかへるらむ

幽徑石

むかしたれ島このむとて路のべに千(ち)

引の石はひき殘しけむ

臨軒桂

風きよきあきを軒ばに待ちとりて月のかつらの花もにほへり

林中翠

雨はるゝ楓がしはの夏木立風もみどりになびくとぞ見る

棲烟鳥

靑柳のゆふかげけぶる枝ごとにねぐらさだむるむら烏かな

寒溪草

溪ふかき雪のした草さながらに春にもあはで年をつむらむ

陰崖竹

世にうときかた山ぎしに生ふる竹さしもむなしき心をぞ見る

姬人怨レ服レ散

ひとり身を千世もとなどかねがふらん誰が爲にとて惜む命ぞ

愛妾換レ馬

植ゑおきし花をばをらでよそ人の手がひの駒になど心ひく

銅雀伎

かたみぞといふもわりなしかくしつつ立ちまふ袖を君みましやは

宮人斜

秋風の露ふきむすぶ草のはら今もかざしの玉をこそ見れ

孟門行

なげきこる世のへがたさにくらぶれば岩根ふむてふ山はものかは

閨怨

春の夜の夢のまさかやたのむらむ塵となる身のゆくへ知らずて

舊宮人

むかしべや今もわすれぬ宮姬のなほふりがたき花のかざしは

短歌行

ながしてふ春も一時さく花に心をやらでいつを待たまし

小遊仙

三千とせになるてふ桃をくひもてる翅やほしのつかひなるらむ

花も咲きもみぢもそめて春秋を常にとゞむるわだつみの宮

雲のうへに袖をつらぬるあまをとめ月のみやこに住むやいつまで

たに水の淵となる世を誰かしるいはもと菊の露はらふまに

時の間に波穗ふみわけいく千里蓬が島にかへる山人

このゆふべ雲のうてなにのぼりたち霞をすきてつどへるやたれ

水の江が心おぞさやわらふらむ常世にすめる島のしま守

すぎ來つる世の名をだにもいく千とせ霞にこめし桃のみなもと

雲の上は花にあくべき里もあれや世のもゝとせを一春にして

鏤白

おく霜をはらふもはかな翁草(おきなぐさ)みどり
にかへる春を待つとて

玉樹後庭花

常にかくありとや花にうたひけむ世
は露の間に移らふものを

陵園妾

松の門さしもいく世か經にけらしも
ろき木の葉を身のたぐひにて

上陽人

花にとぢ紅葉にうづむ宮のうちにい
く春秋をあはれとは見し

王昭君

まそかゞみむかふもうしとしのぶら
む筆のすさみのさがにくき世に

いかにして心はやらむ四つの緒の引
きとゞむべきたびぢならぬを

浦島子

たちかへり誰にとひけむ故郷は見し
にもあらずなりはてし世を

法師

雲水をおのがこゝろとおもへばや木
のもとにだに跡をとゞめぬ

海人

宿をだにさだめぬ蜑が釣の絲のこゝ
ろぼそくや世を渡るらむ

樵夫

山がつといひなくたしそ世にふれば
誰もなげきをこる身なりけり

心

うしといひ哀とおもふ程なくば世に
ことの葉もしげらざらまし

思

よしあしをいにしへ今とたどるには
いはぬ思もある世なりけり

天橋立

神の世に神のかよひし跡なれや雲井
につゞく天のはし立

千世古道

ふみ見なば千世の古道たどらめや心
のさかによしまよふとも

日本紀竟宴に天武天皇を

いかづちのひゞきも絶えて天地にう
けひしことぞまさしかりける

本居宣長が古事記傳書きはて
て竟宴のうたこひけるに神直
日神を

まがつびのあらびあらせじと神直日(かんなほび)
神のみたまやあれましにけむ

ぬひ子が家にて人々枕草子よ
みはてつる日ちかくてとほき
ものといふことを

年たてばきのふを去年と思ふより心
づからやはるけかるらむ

萬葉集の武藏歌になずらへて
よめる

ちゝの實のちゝぶの山の春がすみは
るたちしよりあさな〳〵たつ

いささらば朝菜つまゝしむさしのゝ
をくきが雪も打ちとけにけり

時つ風沖吹くらしもむさしの海もゝ

舟人ぞふなよそひする
むさし野はしもと萱はらしげゝれば
さやにも見えぬ玉の横やま
春草はまだうらわかしむさし野のを
けら花さく秋まちて見む
いりまぢの廣瀬の森にぬさたてゝ大
屋が原に御祓しに行く
人のから歌つくりてと求むる
に久しうさるわざもせでおぼ
つかなければ
かぢをたえ年經ぬる身はからごとに
舟こぎよせむよしも知られず
やむごとなきおまへより歌か
かむ料にとてうるはしき紙ど
もあまた賜ひければ
今よりは波にあらさじもしほ草あさ
なゆふなにかきあつめつゝ
大窪天民のもとに土瓶をおく
るとて
冬ごもるまでのすさみに雪を煮てき
よきこゝろの友とせよ君
遠き國の人のもとにふみやる
とて
遠つ人かりしかよはゞ山河もおもふ
こゝろをへだてましやは
大學のかうのとのゝ谷中の荘
を見侍りて
おのづからふみのはやしの陰なれば
霜のにしきの色ぞことなる
述懐
月花に身をまかせてぞ過すべき世の
ことわざはさもあらばあれ
おなじ世におなじすさみの友もがな
ふるごとしのぶ心かたらむ
述懐非レ一
さまざまにおもひぞいづる憂しとい
ひ嬉しといひて過ぎし昔を
獨述懐
ともすればとはずがたりぞせられけ
る心ひとしき人しなければ
ことの葉の道はかたがたわかるとも
たゞわれのみや昔しのばむ
いざといひてともにそむかむ人もな
し世はうきものと思ひ知れども
海邊述懐
なげかめや礒のしら玉みがくれて人
に知られぬたぐひある世に
ものおもふ頃ひとりごとに
うきをだにあひかたらはむ人しあら
ばかくまで物は思はざらまし
懷舊
ともすればふりぬる世とてしたふ身
を老のさがとな思ひくたしそ
秋懷舊
むかしべをこふる涙と露しぐれいづ
れか秋にふりまさるらむ
月前懷舊
おもかげも見し世に似たる秋なれば
月のかゞみもむつまじきかな
いつとてもかはらでむかふ秋の月見

し世の人もかゝらましかば
有りし世をしのぶが露にかげやどす
月もむかしやわすれざりけむ

寄レ夢懷舊

人の世は夢にもがもなゆめならばさ
めて昔に立歸らまし

いかでわが身をといふ句をお
きて懷舊の心を

年ふればたゞ夢とのみたどる世にい
かでわが身をうつゝとも見む

夢

數知らず宵々ごとに見る夢をむつの
しなとは誰かさだめし

往事如レ夢

しげりあふ夏野の蝶もしのぶらむ花
にむつれし春を夢とは

月前無常

おもふどち月見るたびのくりごとに
あらましかばといふが悲しさ

蒼生子が身まかりて後七とせ
になりける頃、ぬひ子がもと
にて春雨ふる日むかしをしの
ぶといふことを

春雨はさびしかりけりつれ〴〵を訪
ひ訪はれつる人しなければ

標照が十三年の忌に夏懷舊

かくしつゝこゝらの年をふるものは
五月の雨となみだなりけり

貞樹がみまかりける又の年の
五月に有りし世を思ひ出でゝ

有りし世をしのびぞ出づる郭公なほ
ふる聲をきく心地して

みす子が一めぐりに吉澤臺卿
がもとめにて橘のもとに去年
をしのぶといふことを

誰がそでに今はよそへむ橘のこずゑ
はもとの香ににほふとも

枝直のみまかりぬる時千蔭が
もとへよみておくりける

世をへてもとこはなるてふ橘のあき
にあへじとおもはましやは

おなじ人の十三年の忌に月似レ
古といふことを

秋をへて人はふりにし宿ながら月は
むかしをわすれでぞすむ

紅葉を見てむかしをしのぶ

手向とてをる袖しぼるもみぢ葉にあ
またしぐれの秋はへにけり

長月すゑつかたむすめのきく
子みまかりて七日にあたりけ
る日そのはかにまうでゝ菊の
花など折りて手向くとて

はなつむもわりなきわざぞ先だちて
我こそかくはとはるべき身に

その頃ちえ子がもとより

物おもふ袂のひづやいかなら
むなべての世さへ時雨降るこ
ろ

とある返し

なべて世の露もしぐれもこの頃はた

もとのものとわびつゝぞふる
また千蔭がもとより神無月に
なりて殘れる菊にそへて
秋くれてのこれる菊も有るも
のをわすれがたみもなどやと
どめぬ
とある返し
秋くれしまがきの菊のそれならば花
は散るとも香や殘らまし
きく子は子をうみてうせけるが
その子もおほせずなりにければ
かくなむ
千蔭みまかりて七日にあたり
ける日菊花一枝おくるとて
おもひきや山路のきくを手折りもて
袖に泪のふちなさむとは
冬に成りて人々とともに芳宜(はぎ)
園(その)につどひて歌よみける時閑
庭霜といふことを
おもひきやかれ生(ふ)の霜をふみわけて
はぎのあそびの跡とはむとは
去月の秋芳宜園に梅をうつし
植ゑたりけるに、その秋翁み
まかりにけり、春になりてそ
の梅の咲きそめたるを、もせ
子の許より見よとて一枝をり
ておこせたるによみておくり
ける
花さかばつげむといひし園の梅かた
みに見むと思ひかけきや
千蔭なくなりて後ちえ子のも
とより歌ども書きつらねて見
せにおこせたる草子のはしつ
かたに
水かれしふる江にたてる草の
名にうらなく露のなさけかけ
てよ
とあるかへし
もろともにもとの心をくみて見むふ
る江の水はよしあせぬとも
おなじ頃ちえ子が石濱の莊に
てよめる歌を見てそのこゝろ
にこたへたる歌
つみはやす人やもいづこ誰が爲にか
きねのすみれ春をわすれぬ
なき人をこふるなぎさにかげうつす
花のおもてもそれかとや見し
いとゞ君おもひしるらむ川水の行き
てかへらぬ世をうきせとは
千蔭が一めぐりの忌に紅葉送レ
秋といふことを
もみぢばの過ぐるならひをなげきつ
つことしも秋に又や別れむ
また題をさぐりて暮春懷舊と
いふことを
とゞまらぬ秋はあはれといひ〳〵て
昔やいとゞ遠ざかりなむ
おなじ人の三とせの忌に月添二
秋思一といふことを
春秋のすさみはあまたあるが中に月

をあはれといひし君はも

神祇

神代より神のたからをとる弓をまもりとなせる國ぞこの國

天地の神やかためし萬代にたてゝうごかぬ國のみはしら

手くさとり瓮ほりすゑてたか玉のしじに神代の例をぞ見る

百千々の世にもうごかじ天地の神のかためし大和しまねは

寄レ榊神祇

かぐ山やみねのまさかきいく代經てしみさびけらし神の御前に

住吉

たぐひなき光にもあるか住の江の磯たちならす波の上の月

楫取神社

かとりがた百舟人のぬさたつる神のみやゐはいく世へにけむ

社頭榊

とこしへにみむろのさかきさかゆくは神代の種やいはひとゞめし

社頭水

ゆく河のきよきなぎさと萬代にいはひそめけむみくまりの神

人の賀によもぎが島をつくりたる洲濱に添へて

とこしへによもぎがしまの島山をありかよひつゝ君こそは見め

宗什が四十の賀に

かくしつゝ千世もへなまし松風の聲をともなる宿のあるじは

こは茶を好む人なるによりてかくなむ

原澄法師の四十の賀に

山まつのかげをしめたる宿なれば苔の袂ぞ千世のどちなる

白川少將君の五十賀に

をす國のしづめなれとて民ぐさも千世もと君をいのらぬはなし

濱田の君の五十の賀に

咲く花もさかゆく色を見するかな君が千とせの春を待つとて

佐賀の君の六十の賀に寄レ鶴祝

海原や千さとの波にとぶ鶴のはるかなる世は君ぞ知るらむ

寛齋市河翁の六十の賀に六種のものを題にてよめる歌

硯

君にこそたぐへては見め常磐なる硯のいしの命ながさを

筆

世に遠くかをらさらめや筆の上に生ひ出づる花はいろことにして

墨

おのづから老せぬ宿のすさみとて千世もにほはせ松のけぶりを

紙

市にうる紙もまれにやなりぬらむ君

がこと葉を世に傳へなば

琴

つま琴の玉のひゞきは聞きなれつ聲
しる人のたぐひならねど

盃

もろ人の君にすゝむるさかづきを我
もくみてぞ千世は契らむ

千蔭が六十の賀に磯山にさく
らの花咲きたるかたを洲濱に
つくりて、波にはなのうつれ
るかたを盃のまきゑにかきて
その櫻のもとにおけり

わたつみのとこよの波にかげうつす
磯山さくらあかずもあるかな

おなじ人の七十の賀に栗棚(くりかへ)の
賓鳥の子をもりたるらいしに
結びつけたる歌

くりかへし千世はよばなむ思ふどち
かひある春をいはふまとゐに

人の七十の賀に鶴を

天とぶや鶴の毛ごろも袖たれてきつ
つならさむ千世も八千世も

年のくれに人の七十の賀に

あたらしき春待ちつけむ宿なればわ
かゞへりつゝ千世もすめ君

人の八十の賀に

すゑ遠き千とせの坂にくらぶれば八(や)
十路(そぢ)は老のふもとなりけり

神原ぬしのあらたに司賜ひた
るをよろこびて

馬車引き入れつべくいまよりはいと
なみつくれ高き門をも

しはすばかり大久保忠陽ぬし
のつかさえ給へるを歡びて

袖のいろのみどりは春に先だてつあ
けにも染めよ秋またずして

人のむことりしたるをいはふ
とて浦鶴といふことを

しき波に千世のよはひやちぎるらむ
浦わの鶴の翅ならべて

祝

天地(あめつち)の神も知らじなかばかりに治り
にける御代のためしは

春祝

朝日さす高ねの松に千々の世をたち
かさねたる春霞かな

夏祝

かぎりなきいのちつぐてふあやめ草
君が爲にぞけふはひかまし

秋祝

あがた人つどふ市路にことゝへば年
ある秋とこたへぬはなし

秋ごとに賜ふつかきの數そふもをさ
まる御代のためしとぞ見る

秋祝言

宿ごとに千五百(ちいほ)のいねをかりつみて
足穗の秋をいはふ里かな

冬祝

霜ゆきにあせぬとこはの深みどり千
世まつがえの操をぞ見る

寄レ星祝

君が代はほしのやどりをいく千度行きめぐりてもつきせざるらむ

寄レ巖祝

きみが代は下つ岩根のかたければとはにうごかぬ宮ばしらかな

雲かゝる松さへおふる岩ほこそ動きなき世のたぐひにはせむ

寄レ弓祝

梓弓引きこゝろみてよも山の守りわすれぬ世こそ安けれ

寄レ龜祝

おのが身にいたゞく島の名もしるくかめのよはひや常世ならまし

寄レ松祝

しら雲に枝さしかはす峰の松とし高さもかゝれとぞ思れ

花有ニ喜色一

いづる日のひかりににほふ朝露をまちよろこべる花の色かな

竹遐年友

明くれにかはらぬともと君し見ば竹のこゝろも千代になびかむ

竹不レ改レ色

君がすむ宿のうゑ竹千世ふともあせぬみどりの色をこそ見め

多

きみが代のたひらの宮のやちまたに行きかふ人ぞ數も知られぬ

舊

日かげ草かづらにすなる手ぶりこそ神代のまゝのためしなりけれ

玉梓はとるもあやなし紫のはひおくれたる色と見しより

低

品ひくき身はつるばみの布衣袖のあさぎもおもひかけめや

後

われとわが身をしよそへど石の帚のうはてさすをば見るよしぞなき

釋教

世の塵につゆもけがすなこゝろもて心をあらふ法のもろ人

勸持品

たぐひなき薫を世々に傳へよと御法のはなやひらけ初めけむ

如是相

水の上にうつろふ月のおもかげはありと見ゆるも何かつねなる

自寛が家のうちの一間に觀音大士を安置して供養しける日、水晶の數珠をおくりけるに、その箱のふたに書きつけける

曇りなき思ひの玉を手ならさばたのむ誓やたがはざるらむ

おなじ時人々と共に題をさぐりて發大清淨願といふことを

人はみなひろき誓の海をへてにごらぬ法のこゝろともがな

ひじりの御代の

いにしへのひじりの御代のためしにも思ひくらべむ時ぞこのとき

かひやなからむ

したふともかひやなからむ今日わかれあすは野山を行き隔てなば

みやこの手ぶり

もろ人の昔をしのぶことばこそならの都の手ぶりなりけれ

かよふこゝろの

君にけさともなひつれて行く雁をかよふ心のしるべにはせむ

物名

うし

ひるの間のたへぬあつさにならひてや月のかげをもうしと見るらむ

こづみ

瀬をはやみそこつみくつもなかりけり岩間をあらふ瀧のしら波

うつせみ

堰棣うつせみの小河の清き瀬にゆふとりかけて夏はくらさむ

住家をばみ山にうつせみやこ人からきうきよのさがいとひなば

かにひのはな

一重きるきぬもうきまでいかにひのはなはだしくも照り増るらむ

やよひの末つ方人の家にゆきけるに、園にれんげ草といふくさの花あまた咲きたりけるを、歌よめとありければ

春ふかきそのふにたれもあくがれんけさうぐひすの聲老いぬとも

りうたん

苔むせるいさめのつゞみ誰が世よりうたんうたじもとはで過ぎけむ

あじろ人波におりたちさわぐなりうたんとやする瀬々の堰棣を

折句

こまむかへ

こぎまよふまの浦舟むやひしてかぢふりたてよへなみたかしも

あはのくに

あかずみむはるもさかりののづかさにくもかとばかりにほふ櫻は

旋頭歌

千蔭が家にて萬葉集竟宴しける時題をわかちて歌うたといふことを

かくしつゝゐひみわらひみ思ふ人どち橘のかげふむ庭は千世にならさむ

琴後集巻七

題画歌

井に朝日うつれりくむ人あり
朝日かげにほへる春のわか水に千世
のさかえやくみて知らまし

山里にすむ女子日する所
花葛かけてや千世も契らましわが住
む山のまつの二葉に

わか菜摘むところ
千世かけてちぎる小松のすり衣きて
こそつまめ野べのわか菜は

霞を分けて山寺にいる人あり
ゆくまゝに霞む山路ぞあはれなる跡
をしも世にへだつと思へば

梅のゑに
鶯もさそはれぬべし梅の花いろ香お
ぼゆる筆のにほひに

梅の花かけるあふぎに
おのづから風まつうめの香をそへて
袂にやどせ春の夜の月

籬の梅さきたり見る人あり
たちとまる袖さへ香にぞにほふなる
かきねの梅のはなの夕風

客あまた來りける庭にうめの
花咲きたる所
つくしがた梅さく宿にまとゐせし昔
おぼゆる今日にやはあらぬ

人々あそびしたる所の庭に梅
のはな咲けり
梅のはな咲く木のもとにふく笛は聲
もかをれる心地こそすれ

梅の花さけるに鷹をすゑて人
ゆく
夕風に雪とみだれて散る梅をたもと
にはらふ春の狩人

をとこすいがいのもとに笛ふ
く、梅の花散れり
庭もせに梅散るやどは笛竹のふきよ
る風も香にぞにほへる
うめ散らす風にきほひて吹く笛のよ
におもしろき宿の春かな

梅の花あり水鳥あそぶ
霜はらふをしの羽かぜにさそはれて
汀の梅の花ぞかをれる

紅梅に鶯
くれなゐの濃染の梅に一しほのにほ
ひをそへて鶯ぞなく

紅梅の梢の水に入りたるかた
を
下水にあらふ錦と見ゆるかなこずゑ
波こす梅のくれなゐ

初午いなりまうで男女おほく
行きかふ
いなり坂霞のうちに匂ふなりかざし
の杉も花のたもとも

わらびをる女かたみひさげな
どしてあり

とる手ぞと見ゆるすがたの初わらび
かたみにつむも心こそゆけ

わらびすみれのゑに

春の野をゆくてのすみれ下わらびつ
みてぞけふの家づとにせむ

つくづくしの繪に

つくづくし春野の筆といふめればか
すみも添へて家づとにせむ

女柳の枝をひかへて立てり

袖はへてとる手ぞまがふ靑柳のおな
じみどりをかさねきつれば

柳おほかる家に人來れり

とふ人の花のたもとぞたゞならぬ柳
にこもるやどの夕ぐれ

人の家にやなぎ櫻あり

にしきもてかこふ垣ねと見えつるは
柳櫻のかげにぞ有りける

人々花のもとにあそぶ

櫻ばなあすとだにやはたのむべきあ
かぬ心にけふはまかせむ

道ゆく人櫻のもとにとまれる

岩ねふむ道ならなくに春の野を行き
なづみたる花のかげかな
かへるさもかくて見るべき花ならば
誰かさくらに心おかまし
往來(ゆきき)をもとゞむる花のにほひこそ春
の旅路のほだしなりけれ

道ゆく人櫻の花を見て馬をと
どむ

駒とめてあくまでは見む山櫻たゞに
過ぐべき花のかげかは

人々花のもとにねたる所

おもふどち心へだてぬ花のもとにひ
もときさげて一夜あかさむ

山里の花咲きたり見る人あり

たちかへりかくとはつげむ山里の花
のたよりを人もこそ待て

山里に櫻の花の咲けるに道行
く人のいひいるゝ所

山守の心やいづら木の本ははなこそ
人をまづとゞめけれ
一枝はわれにまかせよ山さくら都の
つとに折りてかざゝむ

櫻の木のもとに弓射る所

さくら散るかげに眞弓を引きつれて
肩ぬぐ袖も香にぞ匂へる

鳥籠山(とこのやま)花ある所

散ることも知らじなとこの山櫻とこ
しへにのみ春をしめつゝ

大原女の黑木おひたるが花の
枝をり添へたるかた

春はまたやつるゝ袖も折る花にほ
はすや誰が妻木なるらむ

苗代水に櫻の散りうかびたる
所

散る花はせきもとめなで苗代の水の
こゝろにまかせつるかな

櫻の枝とつくづくしを籠に入
れたるかに

一枝の花にまじへて山づとのあはれ

を見するつく〳〵しかな

富士のゑに

咲きつゞく花のはやしを麓にて雲井ににほふ不二のしら雪

蝶のかたかける繪に

吹きさそふ風ものどかに散る花のすがたおぼえて飛ぶ胡蝶かな

山田うつ所にかへる雁などある所

すきかへす山田の原に引くしめの引きやはとむる春のかりがね

道ゆく人歸鴈を見たる所

鴈がねの行くかた遠きたかねこそわれも越ゆべき山路なりけれ

雲雀のおりゐたる繪に

あがるとも見えぬ春野の夕ひばりすみれの床やわすれかぬらむ

人々春の野にあそぶ

おもふどちすみれ摘みつゝむらさきの根はふ横野に今日はくらさむ

花をめで鳥をあはれむ春の野はこゝろ〳〵のすさみなりけり

曲水宴かきたる繪に

散りうかぶ波間の花のさかづきにふるきためしやくみて知らまし

花のもとにより來る波の盃はながれて遠きためしなりけり

もゝの花を女どもの折る所

紅のこぞめの袖と見ゆるかなとる手ににほふ桃の初花

海棠を

春の色を見よとかいたうにほふらむ錦をはれる花の梢は

山吹咲きたる家に人來て見る

ゆく春をこゝにとゞめよ山吹の花の籬をへだてにはして

よき女藤のはなをもてあそぶ

紫のいろににほへる藤のはなかさぬる袖にいざくらべ見む

白牡丹の繪に

月雪のきよきこゝろを一花のにほひにこむるふかみ草かな

神まつる所

神のます杜のまさかき夏たてばゆふしでかけぬ下つ枝もなし

卯の花さけり月あかし

うのはなのにほへる宿はおのづから月の光も世に似ざりけり

卯の花さけるやどをとふ人あり

たちかへり人にもつげむ卯の花のにほひよろしき玉河の里

うのはな咲ける家に郭公を待つ

卯の花ははや咲きにけりほとゝぎす初音もらさば吾が宿に鳴け

杉たてるかたに郭公なく所

ほとゝぎす鳴くや杉生の梢より三つのやしろに聲のおちくる

郭公なく山路を女ぐるま行く

郭公聲するかたにひかれなばならは
ぬ山のおくも分けまし
　淀のわたりに舟ありほとゝぎ
す鳴く
舟よばふ聲にこたへて郭公よどのわ
たりにをちかへり鳴く
　あやめふく家に時鳥なく
あやめ草下露かをる曙に鳴くやのき
ばの山ほとゝぎす
　雨ふる日人おほく早苗とる
早苗とるかたやいくしろ五月雨にみ
だれて出づる田子のすが笠
　さうぶとる所またかざせるも
あり
ふりはへてかざすよどのゝあやめ草
引きおくれたる人もありけり
かざす手もとる手もにほふあやめ草
千世をやちぎる心々に
　五月五日馬引き出でゝ見る所
あか駒にしづくらおきてよそへるや
ま手のつがひをいそぐなるらむ
　五月五日駒くらべする所
袖の香も駒の足並もかた分けて神の
御前にきそひ出でにけり
　たちばなの咲きたる所戀の心
を
袖の香に花たちばなをよそへつゝい
たづらぶしもあはれそふ頃
　蘭の繪に
草も木もこれにしく花なければやに
ほひのおやと人のいふらむ
　たかうな折る所
夏くればまづこそたをれなよ竹のこ
は生ひたゝぬ程を時とて
　すゞみする所
おばしまの下行く水はたれも皆おり
ゐてむすべ夏なかりけり
　河のほとりにすゞみする所
むすぶ手に波間の月をやどしつゝ夏
をわするゝ河づらの宿
　雨はるゝゆふべ高殿にすゞみ
する人あり
村雨のなごりすゞしき高殿に千さと
をかけてゆふ風ぞ吹く
　いづみに月の影うつりたるを
女ども見るほどに大路を笛吹
きて行く人あり
水のおもに月だにやどる宿をおきて
いづくに笛の音をすますらむ
　女のあふぎもたるかたを
なつかしき風のやどりと手ならすや
誰にあふぎの名を頼むらむ
　桐の葉の散りたるかた
もろく散るならひもうれしかゝらず
ばきりの廣葉や月にうからむ
　白萩の繪
夕月の影かと見しはしらはぎの露に
にほへるしづえなりけり
　七くさの花をかける繪に
からにしきひもとく花の七くさに秋

のあはれをあつめてぞ見る
　女郎花の繪に
いく秋も道しあせずばをみなへしな
に一時の花とやは見む
　馬にのりたる人秋の野を行く
かり衣秋野の露にぬれにけりをばな
あしげのこまにまかせて
　野の花さかりにひらけて人々
　あつまりて見る、又かりとる
　所もあり
おりたちて見るもたをるもやちぐさ
の花に心をひかれぬはなし
　秋の花どもをうゑたる所
いろ／＼の蟲の音ながら移しきて花
野の秋をしめし宿かな
　秋海棠の繪に
いかなれば秋野の露の下草に春のに
ほひを猶とゞむらむ
　野の宮のかたかける繪に
夕露をよすがに月もとひてけり秋野
のみやの花にほふころ
琴のねもすみやまさらむ秋の野の小
柴がもとに月やどる頃
　家に女月を見る
ふるされしうき身のともと見る月は
よもぎがもとの心しりきや
　月夜に女の家にをとこゐより
　て居たり
うちつけに人まつ蟲もなくものを月
をのみやは君やどすべき
　女車をたてゝ月を見出したる
玉すだれかげあらはなる小車におも
なきまでぞ月はすみける
　秋の月おもしろきに池ある家
すむ人のこゝろをさへにくみて見む
月おもしろき宿の池水
　は月ばかり雁の聲まつかた
かつしかのわさ田かる男にことゝは
む初雁がねの聲はきゝつや
　駒むかへ見る女車あり
月をさへへだつる松のしたすだれお
ぼつかなしやきり原の駒
　人の賀の屏風に海のほとりに
　人々月見たる所
わたつみのかざしの花と見ゆるかな
月ににほへる沖つしら浪
　鹿のひとり立てるかたを
たちあかす夜をやわぶらむ野べの鹿
ゆめかたらはむ妻しなければ
　大屋何がしの七十の賀に、菊
　の花の咲きたるかげに水のな
　がれたるかたかける繪をおく
　るとて、淺田ぬしのこれの歌
　よめと有りければ
かげさへもにほへる菊の下水に千と
せの秋をうつしてぞ見る
　稻ほしたり
里ごとにたりほの稻をかけほしてか
ひある秋のほどぞ見えける
　茱萸袋のかたかける繪に

山人のけふのためしのいく薬かけて
やちよの秋をちぎらむ

紅葉の折枝をかける繪に

一枝にみ山の秋をしらするやたが家
づとのすさみなるらむ

箱根山もみぢおほかる所

箱根路はもみぢしにけり旅人の山分
け衣袖にほふまで

山里にかりする人來れり

かりくらし一夜は寢なむ山里にのこ
るもみぢを明日も見がてら

網代に紅葉のよせたる所

散るもみぢ瀬々のあじろにかゝらず
ば昨日の秋を波に見ましや

あられ降る野をゆく人あり

旅人のしばしたちよるしもと原うち
しをるまでふる霰かな

女すだれのもとに立ちて雪の
木に降りかゝれるを見る

はなとのみ梢に雪は散るものをふり
すてゝやはたゞに過ぐべき

あがたの家に翁雪を見る、を
さなきもあり

はしりでに大雪ふれりいざ子どもほ
だ焚きそへよ翁さびせむ

高殿に雪見る人あり

雪ふれば千里もちかしおばしまのも
とよりつゞく不二の柴山

山里に住む人雪のふるを見る

雪つもる軒のむら竹うちふして道み
ぬ山もあらはれにけり

雪のあした鷹がりしたる所

みゆき降るあだの大野の朝狩にきほ
ひて出づる雲の上人

雪ふる日山里をとふ人あり

おもしろく降るしら雪のふりはへて
たが冬ごもる宿をとふらむ

雪の降りたるに人々舟に乗り
て見る

ゆく河のいづくはあれど雪つもるこ
の松かげにむやひして見む

雪つもる入江のとまやきしの松みど
ころおほき舟路なりけり

屛風の繪にこしの白山のかた
かけるを

はるかなるこしに有るてふしら山を
ゆき見て誰かかくはうつせし

月次の屛風の料　十二月小鹽山

大原や神のみやつこきよめすな玉し
くばかり雪のつもれる

神樂せる所

わざをぎの昔おぼえて人長(ひとをさ)がたちま
ふ袖も神さびにけり

年くれて竹ある家

かねてより春の色なる竹垣は年のさ
かひもへだてざりけり

松に朝日の繪

すみの江の波もにほひて朝日子が影
さしのぼる岸の松かさ

小倉の君の六十の賀に松の繪

に書きつけゝる
もろ人の千世にまさへとうたふにぞ
山松がえも聲あはせける
　道行く人きしのほとりなる松
のもとにやすみて波のよるを
見るかた
波あらふみなぎは淸しいざこゝに松
がねまくらしばし結ばむ
　松と竹と栽ゑたる所を女みる
繪に
おもふことかはらぬ中もならはゞや
千世のどちなる松と竹とに
　靈芝の繪に
たぐひなき種とこそ見れ石の上に千
とせをかけておふる初草
　岩の上に鶴たてり
岩のうへにむれゐるたづも夕しほの
さすにひかれて浦傳ひせり
　鷄の繪に
明けぬとて先づつげそむる初とりの
聲にこたへて鳴くやこゑかな
きぬ〴〵にうきをかこたむ鳥の音を
老はねざめの友とこそ聞け
　龜の繪に
うきにすむものとないひそ河かめの
にごりになるゝ身ぞやすげなる
　壽星の繪に
千世つまむためしに見よと此の神の
かしらの雪や高くかさねし
　うさぎの繪に
くれそむるを花がもとのしろうさぎ
月の影かと見ぞまがへつる
　桃花源の繪に
かくれがの春やいくよの名殘ぞと花
ものいはゞ問はましものを
　竹取の翁の繪に
あはれとて世にやつたへしなよ竹の
此の一ふしの昔がたりは
　碁うちたる所
何ゆゑのすさみなればかもろ共にあ
くごも知らでうちむかふらむ
　白川少將殿にて人々なみゐた
るさまを繪にかゝせ給ひて、
これに歌ひとつとあるに、お
のがかたもそのうちにあれば
をりにあふもうれしかりけりうつし
ゑに姿とゞむるけふのまとゐは
　女のつらづゑつきたる所
涙のみはらふおもてにつくつゑのか
ひなの世とや思ひしるらむ
　うかれめの舟に乘りたるかた
を
さだめなきよるべを波にまかせつゝ
つながぬ舟ぞ身のたぐひなる
　京の家に市女來り酒うる
もろともに醉をすゝめよ立ちまじり
おのがあがたのこと語るとて
　そぼつの繪に
大かたも田子はうきにぞたちならす
袂そぼつはなればかりかは

茶具いるゝうつはの繪に歌か
けと人のいひければ
雪をにるすさみもうれしかくれがの
松のあらしに心すむ夜は
ゆふの山の繪に
萬代に神さびたてるゆふの山そら行
く雲もふもとなりけり
あさま山の繪に
あさま山神のいぶきの霧はれて雲井
にたてる夕けぶりかな
二神の繪に
千萬のよにも動かじふた神のゆきめ
ぐらしゝあめの御柱
よもぎが島に玉のうてななど
あるかた
これやこの家路わすれて浦島の妻ど
ひしけむわたつみの宮
海のほとりに風ふき浪たつ
風をいたみ渚に舟ぞよせ來なる明石
の門浪音もとゞろに

瀧の繪に
誰がためにさらせる布ぞ春は花あき
は紅葉の色に染みつゝ
たつた河の繪に
もみぢ葉の流れて常にうかべるは水
の秋をやこゝにとゞめし
柴くだしの繪に
ながれ來る眞柴とるとや下つ瀬にあ
らそひ出づる宇治の河ふね
越の君の北方の御屛風の繪に
正月　子の日する家
引きうゝる子の日の松のかげごとに
千世をこめても見ゆる宿かな
二月　いなりまうで
けふごとに杉の葉かざすいなり山み
ねとよむまで人ぞつどへる
三月　馬車に乘りて人の花見
たる所
櫻ばな咲く木のもとは春霞たちやす
らはぬ人しもぞなき

四月　卯の花ある家に郭公過
ぐ
郭公鳴く音ぞたえぬ卯の花のにほふ
かきねを過ぎがてにして
五月　あやめ引くところ
澤水に根ながくおふるあやめ草まづ
こそ千世のためしには引け
六月　はらへする所
秋風を袖にやどして歸らまし夏をば
すてつ今日のみそぎに
七月　たなばたまつるところ
たなばたにかしつる琴のいとせめて
あかぬわかれを引きもとゞめよ
八月　つりどのに月を見る
ながむれば手にとるばかりおばしま
の下ゆく水にやどる月影
九月　人々菊を見る
老をしもかげとゞむとしきくなれば
ともにぞぬれむ花のしづくに
十月　女ども紅葉ひろふ所

いささらばひろふ紅葉を袖の色に匂
ひかはして今日はくらさむ

十一月　かぐらするところ

つま琴も笛もしらべをかへてけり朝(あさ)
倉(くら)うたふ聲を待ちえて

十二月　松竹に雪つもれり

降るがうへにいやふる雪やまつ竹に
こゝらの千世をこめて見すらむ

琴後集巻八

百二十首

春たつ日

朝風に氷流るゝ瀧のうへのみふねの山に春は來にけり

子日

いつともはつ子はあかず小松原こらの春にひかれ來ぬれど

わかな

都人ゆきかき分けて春もまだあさ澤ゑぐを摘むやたがため

白馬

あを馬の毛いろもはえて見ゆるかな今日引きわたす紫の庭

のこりの雪

霞たつすゑの松山はる越えて消えのこる雪や波と見ゆらむ

霞

のどけさのきのふにかはる空見れば年のへだては霞なりけり

かげろふ

かげろふのもゆるを絲といふめるは春のくる野にたてばなりけり

うぐひす

鶯の鳴く初聲を聞くときは老もわするゝこゝちこそすれ

いなり詣

神さぶるいなりの山のいはひ杉いくよの人かかざし折りけむ

春雨

春の海やこちふきたゆる夕なぎに霞むなごりぞ雨になり行く

紅梅

紅ににほへるうめやまづ春のいろをふかむる初めなるらむ

柳

光ありとうたふ朱雀の玉やなぎ露のかけたる名にこそ有りけれ

さくら

さかりなるみ山櫻を來て見れば花ゆゑ世をもそむくべきかな

三日の日

めづらしな今日しもぬさと散る花をみそぎにながす春の川水

春の田

賤の男は散りしく花をすきかへし雪におりたつ春のを山田

かへる鴈

鴈のゆく尾上の花は雪なるを一夜は旅のやどりからなむ

春月

かくてこそあはれもそはれほの〴〵と霞みながらに有明の月

すみれ

春はまた草にやつるゝ故郷もすみれ摘みにと人ぞとひける

藤

池水ににほへる色の深ければふちと
は花の名におほしけむ

春のはて

散り殘る花はなごりもあるものをつ
れなく暮るゝ春や何なり

衣がへ

ぬぎかふる夏のころもはうすくとも
花の香をだに移さましかば

ほとゝぎす

明けそむる箱根の關のほとゝぎす二
こゑ三聲まづなのるなり

神まつり

あふひ草引くはたが子ぞみあれ山し
げるかづらの夏影にして

五日

軒に葺く今日のあやめのそれならで
引きあらそふは眞弓なりけり

たちばな

たち花の花さく宿のいつはあれど雨
のゆふべぞ世に似ざりける

あふぎ

風を音にならす扇の三重ながらひと
へに夏はわすられにけり

なでしこ

からにしき色こき中にくれなゐのゆ
はたもまじるなでしこの花

あふち

入日さすかた山ばやしおく見えて散
るやあふちの花の夕かげ

ほたる

草ふかき野中のしみづそれをだに有
りと知らせて飛ぶ螢かな

鵜河

鵜飼舟さすや水棹に散る露もみだれ
て見ゆるかゞり火の影

蚊遣火

くれはてぬ宿にけぶりは先づたてつ
有るかなきかをいとふばかりに

氷むろ

消えぬ間と都へいそぐ氷室守みちな
がさかのほどやわぶらむ

藥がり

生ひしげる夏野のはらのくすり狩い
づこに鹿の跡はとむらむ

夕だち

ゆふだちに川となり行くいさら水わ
たりやわびむ野路の旅人

なごしの祓

國つ罪今はのこらじ大王の御門のは
らにはらへしつれば

初秋

をぎ原やまだ穗に出でぬ程ながらゆ
ふべは秋と初風ぞ吹く

なぬかの夜

棚ばたのこゝろも空にくみて見むた
らひの水にかげしうつらば

をぎ

風の音にくだけてものをおもへとや
露ふきむすぶ庭のをぎ原

はぎ

高まどやをのへの秋に宮人のむかし
かざしゝ萩の花散る

をみなへし

口なしの色に咲けどもをみなへしと
はで過ぐべき秋の野べかは

十五夜。

めなるれば心おどりのする世にも今
宵の月はあかずも有るかな

駒むかへ

あふさかの關のあらがきあらゝかに
山ふみならす岩ぶちの駒

露

さまぐ\の花になれにし袂にはかわ
かぬ露をあはれとぞ見る

霧

きりこむる峰のかけはし末消えて繪
によく似たる夕ぐれの山

松むし

住み荒れしむぐらの門に聲たてゝ人
まつ蟲ぞあるじがほなる

鈴蟲

夕されば露ちるをのゝ秋風にふり出
でゝ鳴く鈴蟲の聲

きりぐ\す

ねざめする霜夜の床のきりぐ\す有
るかなきかの音ぞあはれなる

鹿

山彥のかすかにつたふ鹿の音は幾重
の峯のおくに鳴くらむ

秋山

秋山ぞわれはといひし昔べもあかぬ
もみぢやかくこそ有りけめ

野分

もゝくさの花はさらでもうつり行く
秋のすゑ野に野分(のわき)吹くなり

紅葉

はゝそ原かつ散りそめて露霜のこゝ
ろあさゝや色に見すらむ

秋夜

とも火はかゝげつくせど殘る夜に
はてなき秋の思ひをぞ知る

衣うつ

よもすがら麻のさごろも手もすまに
うつや袂をまきの島人

菊

一もともあはれとは見よむらさきの
ゆかりわすれぬ菊のにほひを

くれの秋

うきときはうきをかこちて今日(けふ)はま
たとまらぬ秋を何うらむらむ

時雨

さがみねのいづれはあれど冬たてば
雨降の山ぞ先づしぐれける

氷

行きかよふすはのあふみの厚氷神の
をしへし道はまよはず

霜

木(こ)がくれや塒の鳥も出でがてに吹く
風さゆる庭の朝しも

あられ

やま風のにはかにさそふしもと原梢
みだれてあられ降るなり

網代

もりあかす夜床やわぶるあじろ人と
もすかゞりのひをたのみつゝ

落葉

日に添へて落葉ぞふかくなりにける
なれし妻木の道たどるまで

水鳥

世をわたる人しもならへ水鳥のやす
くぞ波にうきしづみする

鷹狩

狩人の袖吹きかへす朝風にかれふの
すゝき立つかげもなし

雪

すみぞめの夕の雲の絶え間よりなほ
くれのこる峰のしら雪

炭がま

冬ごもる程やいつまですみがまのけ
ぶりくゆらすをのゝ山人

埋火

おもふどちかたらひあかせ冬の夜を
火桶の灰のしらみ行くまで

五節

みや人はとよのあかりのなごりとて
肩ぬぐばかりゑひしれにけり

かぐら

やまとてふ玉ごとの名に引きかへて
からをぎせむとうたふ子やたれ

佛名

罪とがも佛の御名ものこさじと暁か
けて花たてまつる

としのくれ

くりかへしおもへばとほし年波をと
をはたとのみ數へてしよは

知らぬ人

まだ知らぬ人をあやなくこふるには
心のみこそしるべなりけれ

いひはじむ

けふまではおもひつゝみて日をぞへ
しいはでやむべき心ならねど

いはでおもふ

いたづらに袖やくちなむ思ふこと人
にいはての森のしづくに

はじめてゆへる

あふことははつ花ずりのかり衣うつ
ろふ色をみはてずもがな

あひおもふ

なか／＼にうらむるふしも多かりき
相思ふなかの心すさみに

相おもはぬ

うちとけぬ人に心をおくやまのそは
そはしくもなりまさるかな

こと人をおもふ

末つひにかくてや我をわすれ水なが
れてよそにひかれそめなば

よるひとりをり

ともし火のもとの心やたどるらむこ
れぞかたみとみづぐきの跡

ふたりをり

うらもなく語らふ時はもろともに千よを一夜とおもふばかりぞ

よひのま

世の人に寢よとのかねをとぢめにておきわかれなむ我や何なり

口かたむ

相おもふ中とや人のとがむらむわが名なかけそとはず語りに

一夜へだてたる

恨みわびぬ一よばかりの夜がれをもまたかゝらばと思ふ心に

二夜へだてたる

きのふといひけふの細布むねせばみあはで今宵も明けむとやする

ものへだてたる

かつみても猶したはれつを車におもがくしせし袖のなごりは

名をゝしむ

戀ひ死なむ命はさても有りぬべしせめてうき名の殘らずもがな

たのむる

君をのみたのむ心は深かりき世のいつはりに馴れし身なれど

よべどかへらぬ

とけがたき心くらべにまけじとやしばしといへど立ちもとまらぬ

ふみをみぬ

もしほ草かきやるかひもなかりけりひろふみるめもあらぬ渚に

おもひやす

下紐のしたこがれつゝおもへばや三重むすぶまで身はやせにけむ

おもひいづ

見し世にはたゞなほざりのひと言も思ひ出づればなつかしきかな

むかしあへる人

ことに出でゝしばし引き見むあづさ弓もとの心を人やたどると

年經ていふ

いひよるもやさしな年をふる鏡みむわが影を君たどりなば

いやしきをいとふ

契りあれば霞ならでも立ちのぼるためしを人のなどか思はぬ

人づま

いかなれば塵もすゑじと思ふらむわが床なつの花ならなくに

かくれ妻

しのぶればうきみな底の玉がしはあらはれてあふよしのなければ

山里

山ざとはかけひにうくる谷水のこゝろぼそくも年をこそふれ

そま

君がためとるともつきじ萬代にいづみの杣のまきのつまでは

ふるさと

故郷はとへどこたへぬ飛鳥風をのへの松にいたづらに吹く

井

山ざとのむかししのばむをとめ子が
おもかげうかべ御井(みゐ)のま清水

君が代は七つの道の國人も三つの關
をややすく越ゆらむ

淵

しら玉はありとも誰かかづくべきこ
の岩淵のそこひなければ

瀬

かくて身をうしとな思ひはつせ河う
れしき瀬をも待ちて見む世に

やな

せきとめてみなわさかまく六田河(むつだがは)や
なせの波は音もとゞろに

うたかた

一しきり降り來る雨に數そひて消え
てはむすぶ波のうたかた

釣

かくて身はふる江にたるゝ釣の絲の
世にひかれぬも心やすしや

翁

ともすればわかきが中にいとはれて
おきなさびたる身をいかにせむ

うなゐ

うなゐ子がはなりの髮をなづるかな
老(おい)にあえよと思ふ心に

法師

むらさきの雲まつ身こそやすげなれ
この世はかりにすみぞめの袖

車

かぞへつゝ見れば車もなきものを何
よしあしの名はさだむべき

舟

ちりうかぶ波の木の葉と見るばかり
沖になづさふしがのうら舟

使

〔原本缺之〕

玉

いとせめてとりえし玉の枝さへもお
もひくだくる種となりにき

錦

おりいづるこまもろこしの品はあれ
ど倭錦(やまとにしき)にしくはたはなし

布

たがためにさらせる布ぞ賤のめがゐ
れとはさらに身にもまとはで

琴

うきことをおもひつゞけて是をだに
かたらひ人となすよしもがな

弓

弓といへば眞弓つきゆみ品はあれど
玉まくゆみに心こそひけ

たち

〔原本缺之〕

鏡

神代より光くもらぬかゞみこそむべ
もひつぎのしるしなりけれ

もとゆひ

年ふりし我もとゆひのこむらさきい
つより霜にむすびかへけむ

こゝろざしをいふ

いけるまの心ひとつしたのしくばな
からむ後の千名(ちな)も何せむ

五十首　文化二年六月二日

春

山ざとを梅見がてらにとひしかばは
つ鶯の音をぞ聞きつる

雨にそめ風にさらせる青柳のいとは
日ごとにいろ添はりゆく

春はたゞ花のかばこそ慕はるれ胡蝶
に身をもかへしばかりに

なつかしきすみれの床をよそに見て
あがる雲雀ぞ心そらなる

山吹の花のしがらみにほふなり春せ
きとむる井出の玉水

夏

心ありて夏山かげにさくら花あかで
わかれし春を見よとか

むらさめのゆふべはあれどほとゝぎ
す有明の月になのる一聲

木のもとはかきなはらひそ紫をむら
ごになしてあふち散る比

咲きまじる野べは秋にもおとらめや
さゆりなでしこあぢさゐの花

藻かり人その舟ちゞめ夏河にわれも
うかびて夕すゞみせむ

秋

かくばかり殘るあつさにかはほりを
秋とて誰かうとみしもせむ

野べ見にと思ふ友にしつげやらむ萩
のあそびのをりは來にけり

月見つゝ今宵はこゝにうきねせむあ
きのかつらの河瀬こぐ舟

青きをばおきてなげかむ陰もなしそ
むる千入(ちしほ)の岡のもみぢ葉

たのみある秋をしめつと里人のかり
つむ稻のほこらしきかな

冬

秋の野の花ずりごろもぬぎかへて氷
を袖にけふやかさねむ

いこま山峰のこがらし音たてゝ霰ふ
るなり秋篠の里

鳥の音も松のあらしも埋れて雪にし
づまるみねの庵かな

もろともによせてはかへる村千鳥浦
わの浪やおもふどちなる

ことなくてことばの苑(その)に年くれぬま
た來む春もかゝらましかば

草

名にしおへば哀とぞおもふみゝな草
よのうきことも聞かずや有るらむ

春はもえ秋ははな咲くわすれ草をり
わすれぬぞ名に似ざりける

のがれ來て我すむ宿の影にこそ世に
はしのぶの草も生ひけれ

花にさく名をしもたてぬ翁ぐさいつ
かは人にすさめられたる

宮人のかつらにすなる日陰ぐさ遠つ
神代もかけてしのばむ

木

かたやきて誰うらとはむ神の世には
はかてふ木の生ひも出でずば
言のはにかけてぞ千世に聞ゆなるひ
とり名高きしがのうら松
下つえは波にくちぬる濱びさぎかく
て久しき世をやへにけむ
杣山に神さびたてるいはひ杉いつの
宮木に引きはもらせし
村雨のしづくももらぬほゝかしはい
さ下陰に笠やどりせむ

蟲

かぎりなき文のはやしにすむ蟲もあ
はれとや見む身のたぐひとて
葉がくれをおのがすみかと所えて絶
ゆればかゝるさゝがにの絲
なく蟲のたぐひならねば廣き野にあ
りとも人に知られでぞ住む
われと身をこがすならひはあるもの
を何夏むしのうへとのみ見む
さゆる夜は壁の底なるきり〴〵すあ
るかなきかに聲よわり行く

鳥

おくるゝは先だつ聲をしるべにて梢
にかへるむらがらすかな
浪の音もなるればなれて汐さゐに洲
さきの鷺の立ちもさわがぬ
跡絶えてとはれぬ宿は山鳩のともよ
ぶ聲もうらやまれつゝ
風あるゝ磯まの波や高からしあしべ
のたづの浦うつりする
人すまで年をふるやはあれにけりあ
やしき鳥の聲のみはして

戀

絶えせじのことの葉のみをたのみに
てあふことかたき我や何なり
これをだに君がかたみとしのぶかな
おきわかれにし床のうつり香
うき名のみなどか朽ちせぬ日をふれ
ば袖もまくらもたへぬ涙に
なみだのみ知らでや袖をぬらすらむ
つらしと人を思ひ絶えても
我爲にわが身をさらにをしまぬや戀
はわりなき物にぞ有りける

雜

月花もおもひわすれつ遠き世の跡を
ふみみる窓のすさみに
いやしかる身とてか人におくるべき
思ひあがらむ心ばかりは
なほざりにかきなすさめそ鳥の跡は
人の心も見ゆといふなり
なか〳〵に色どる筆ぞけたれけるた
だ墨がきの心たかさに
おのがじゝ心をたねとなすわざをい
にしへ今と何へだつべき

琴後集巻九

長歌

春たちけるあした硯を洗ひて
筆を試むとて

おいが身は　世にしもうとし　わびずみは　人もとひ來ず　しかれども　よの人なみに　あたらしき　年をかさぬと　ふせ庵の　塵かき拂ひ　きならせる　きぬぬぎかへて　朝日子の　かげまちとりて　春の來る　かたにむかへば　ひと木たつ　はひりの梅も　いつしかと　ひもときはじめ　むら竹の　をりかけ垣に　うぐひすも　はつ音もらして　おのづから　心のどけし　よしやさは　とはれぬもよし　老いぬとて　何なげかまし　うれしくも　ゆくら〳〵に　しづかなる　世にながらへて　むぐらにも　さはらぬ春を　またも迎へつ

かへし歌

うれしくも春はむかへつけふよりぞ
はな鶯をわがやどのとも

正月のむゆかばかりよべの雪の名殘見むとて隅田川に舟をうかべて

みをのぼる　すみだ河原の　河舟も　ゆくかたとほき　上つ瀬の　堤を見れば　しら雪に　猶うづもれて　下草の　みどりもわかず　たちならぶ　木々の梢は　春の日を　はやく待ち得て　うら〳〵と　けぶりそめたり　下つ瀬を　かへりみすれば　氷りゐし　あしべの洲鳥　波の上に　友よびかはし　をちかたや　霞のまより　夕虹の　たつかとばかり　久かたの　雲井にたかく　かゝる長橋

かへしうた

消えせずば明日もとひ來むすみだ河
かは遠白くふれる沫雪(あわゆき)

子日遊

はつ春の　初子(はつね)の野べに　みな人の　いざとしいへば　もろともに　われもゆき間の　小松原　二葉に千世を　引きそへて　まとゐをしつゝ　さかづきに　くむや霞の　そなたなる　をかべの梅も　あたらしき　年のさかえを　見せがほに　花のひもとき　をちかたの　一むら竹に　うぐひすも　百よろこびを　けふよりと　聲たてそめつ　のどかなる　御世の春とて　老いぬるも　わかきも共に　かくしつゝ　心ゆく野を　とふがうれしさ

かへし歌

花鳥にまたも野守(のもり)が宿とはむけふの
子の日をはじめにはして

八月十五夜宴ニ吉田氏家ニ歌

年月は いる矢のごとく 人の世は ひまゆく駒ぞ うきことは つねに添はれど ゑみさかえ わらふ日なしと いにしへの 人もいひけり いざさらば 時すぐさめや おもふどち 心やらむと たぐひなき 秋のも中の 月影に あくがれ出でゝ 此の宿に とぶらひ來つゝ 垣ごしに ことゝひすれば いつしかと 待ちよろこびて うれしくも 來ましにけりと 立ちはしり むかへ出できて かりそめの 竹のくみ戸を おしひらき を花かき分け 盛りなる 眞萩がもとの 苔むしろ 露うち拂ひ から衣 ひも解きかはし うらもなく まとゐをしつゝ 玉だれの をがめをすゑて もろともに ゑひみわらひみ ことのばへ を琴をあそび 澄む月に 夜たゞむかひて 世の事も わすらえにけり うき事も 何かそはらむ 人の世の たのしき道は かくこそと 思ひ知りにき 時へなば 思ひや出でむ 人きかば しのびやせまし 照る月は 世々のかたみと むかしより、いひつぎぬれば うつせみの いまの世のみか 今もまた 昔とならば、くちやらぬ けふのまとゐの ことの葉を 後みむ世にも しのび出づる 人こそあらめ いやとほき わがよの後の みやびをのとも

かへしうた

おもふどち心は月にあくがれつおいとなるてふことも忘れて

八月もちの夜芳宜園にて月を見て

秋の夜の いつはあれども 今宵こそ たぐひなき夜と 昔より 人もいひつげ 照る月の いづこはあれど 秋萩の 花にはほへる しら露に うつろふ影は 大かたの 世に似ぬ宿と もろともに 手たづさはりて 月見にと 人もとひ來ぬ 花見にと 我もおりゐて から衣 ひもときさけて うらもなく あそぶこの夜は 明けずもあらなむ

かへし歌

このそのに匂ふ眞萩のからにしきたつことやすき月の夜半かは

九月九日詠ニ花菊ニ歌一首竝短歌

ちはやぶる 神の御代にし きこえたる 種にはあらで やほによし たひらの宮の はじめより かぐはしき名を 傳へ來る かはらよもぎは から國の まつるみつぎと そのかみに ねこじや來つる 君が世の さかえむさがと おのづから なりや出でたる うつろはむ かぎりも知らず 年ごとに 秋をふかめ

て　咲きと咲く　花にしあれば　なが月の　けふをたり日と　久方の雲井の庭に　大御酒を　みちたらはして　此のはなに　あえてもがもと神ながら　おもほしめせば　さもらへる　もゝの司は　ことほがひ　酒ほがひして　この花の　咲きのをゝりに　から衣　たもとにほはし　折りかざし　老もわかきも　もろともに　こゝろをやりつ　たのしかる、わが君が世の　よろづ世の　ためしとなれる　はなぞこの花

反歌

千世もたる花のゑまひにあえよとや大宮人に御酒たまふらむ

山寺の秋のくれ

かた山や　よをふる寺の、苔むしろおりゐて見れば　とゞめえぬ　秋はかぎりと　もみぢ葉も　風にきほひて　おく霜に　あらそひかねて　しら菊も　色ぞうつろふ　空蟬の　世はかくこそと　瀧川の　はやく見しよを　くりかへし　しのび出でつゝかへるべき　家路もとはず　ゆふしぐれ　袂ぬらせば　塵の身の　夢さませとや　をかの上の　松にこたふる　入相のかね

かへし歌

かねの音に秋をとぢめて山寺の岩がき紅葉散りはてにけり

神無月のはじめ藤堂の君の染井の莊の紅葉を見て

なが月の　しぐれの秋を　こゝにのみ　なごりとゞむる　御園生を　けふとひ來つゝ　山みれば　呉のてびとが　おる機の　にしきか張れるいけ波の　來よるなぎさは　たをやめの　手染にくゝる　くれなゐのゆはたかさらす　おり立ちて　見るめもあやに　たもとほり　あく世も知らず　おもふどち　心をやりてことのばへ　あそぶこの日は　くれずもあらなむ

反歌

けふとはむ人のためとや御園生に木木のもみぢの秋をのこせる

山家雪

雪ふれば　岨のかけ道　ゆきかよふ路こそたゆれ　をりかこふ　まがきの竹の　いつしかも　山となりては隣さへ　ことも通はず　よしや世は隔てはつとも　とはるべき　友はなくとも　しづけさに　心やらむとさゝの戸を　ひらきて見れば　かきはかぬ　はひりの庭も　おもほえず玉しきわたし　枯れたてる　いちしば原も　春まで　花咲きにけりこれをしも　世に埋もるゝ　山住みの　身のかひよとて　ほだの火に獨りよりそひ　あつごえし　綿かづ

きゝて　かすゆ酒　くむ一杯(ひとつき)ぞ　おもふ友なる

反歌

かくぞとは都の人につげやらむかた山里に降れるしら雪

むそぢになりける年のくれに

とし月は　いる矢のごとく　老は身に　せめ來るものを　しれにたる　おぞの翁は　わかゝりし　昔よりして　思ふこと　なきにしもあらず　なす事の　ある身ながらに　あすありと　けふはたゆたひ　又も來む　年やはなきと　ひとゝせを　思ひのどめて　いそしかる　心はもたず　ともすれば　人にはおくれ　かくすれば　時をもすぐし　徒(いたづら)に　としはかさねつ　今さらに　悔いに悔ゆれど　老が身の　かひこそあらね　さらばまた　心つとめて　今よりと　おもひおこせど　山の端に　落つる日影の　かたぶける　よをいかにせむ　あはれこの　おぞの翁が　ゆく年を　惜むにつけて　かくばかり　なげくと人の　きかませば　心とどめて　おぼろかに　思はずもがも　ますらをや　むなしかるべきと　いにしへの　人もぞいへる　心あらむ　世の人みなよ　わすれても　ゆめなならひそ　おぞの翁に

かへし歌

世の人にいかゞこたへむ何をして老いにける身と問はれましかば

橘千蔭の家にて萬葉集竟宴に競二憐春山萬花之艶秋山千葉之彩一時以レ歌判レ之といふ歌の心を追和しける歌

百千鳥　さへづる春は　こちぐの花のさかりと　にほへるを　折りてはかざし　散り來るを　袖にこきれて　あし引の　山ゆきくらし　おもふどち　心をやりつ　長月の　しぐれの秋は　もみぢ葉の　下照るときと　やつをこえ　とほくも見さけ　木のもとに　おりゐ遊ばひ　家のごと　ひもときさけつ　春山は　しかもまぐはし　あき山は　かくぞたぬしき　いづれをか　わきてしぬばむ　春花の　散るはをしけど　時來なば　山郭公　いつしかも　つぎてなかむと　なつ山に　心ぞうつる　もみぢ葉の　時すぎゆかば　嵐のみ　いまきわたらむ　枯山を　何にすさめむ　そこをしも　あはれとぞ思ふ　秋やまを　うべもむかしゆ　しぬびけらしも

妙法院宮より橘千蔭が歌めしたまへるをよろこびてよめる歌竝序

妙法院宮は當今(たうきん)の御いろせのみこにおはしますなるが、古

へのみやびごと、深くこのませ給ふあまりに、橘千蔭が名高かるをきこしめし給ひて、ことしやよひ、大舍人岡本保考が一條のおとゞの御ともにまゐれるにおほせごと賜はりて、千蔭のよめる歌のなかに、山家閑居などの題なるをたてまつらせ給へり。そも〳〵此百年あまり、江戸の大城にして萬の政まうし給ふまゝに、今は天の下のにぎはゝしさをたゞこゝにしもつどへたれば、おのづからみち〳〵のかしこき人々も、おほく出て來て、言の葉に名高かるともがらも、これかれきこゆめれど、かゝるかしこきおほせごとをかうぶりて、世におもておこしなることは、更にためしなきわざになむ有りける。さるはその身のひとりたぐひなきほまれあるのみかは、かくて縣居翁がをしへのあらはれぬべき時いたれりとやいはむ。かれよろこばしさにたへずして、すなはちうたへらく

常世もの　名におふをぢは　言の葉の　ちよのふる道　ふみわけて　高き手ぶりを　眞心に　ふかくえしかば　しら玉は　われこそもたれ　光しる　人しもがもと　ほこらひて　年はへにけり　しかれども　ちひろの淵の　そこひをば　くみてだに見ず　淺き瀨に　立ちてたゆたひ　高山は　よぢも登らで　麓べに　ゆきかゝづらふ　よのつねの　人し知らねば　よしゑやし　見ぬ世の後に　あらはれむ　時こそあらめと　もだしゐて　ありふるほどに　いかなりし　神の心に　みちびかし　たまひけらしも　かけまくも　いともゆゝしき　久方の　とほつ雲井の　そなたより　きこえあげよと　ことさらに　おほせたまへば　年久に　袖につゝめる　白玉を　ひろひあつめて　御使に　さゝげまつりぬ　いにしへの　ためしは知らず　後の世に　たぐひやはある　かくばかり　まれなるふしに　あふことを　今のうつゝに　見るがうれしさ

かへし歌

みなぞこにかゝよふ玉のひかりこそ波かき分けてあらはれにけれ

おなじ宮の御まへにけふのほそ布にそへて奉れる歌

あづまぢの　道のおくなる　しづのめが　なれて手わざに　おるはたは　むかしもかくや　山河の　はやき世よりも　むねあはぬ　ものなりけりと　細布の　せばきためしを　言の

葉に いひつぎにけり これぞこの いやしき賤が 身にまとひ みゆきふる日の さむけさを 忘れむためと おり出づる 布にしあれば よき人は たれもすさめず しかれども 時にひかれて 物みなは かはるならひを すなほなる 賤がわざとて 移り行く 世にもうつらず いにしへの 手ぶりを今に 傳へ來る ことぞめでたき そこをしも あやにむかしみ いはまくも ゆゝしけれども ふりにける ことしのばする おほ君の みてにとらして はるかなる ひなの手わざに とほき世を 見そなはせとて 細布を さゝげもち來て かしこきや みはしのもとに けふたてまつる

みちのくのけふの細布せばけれどふるき手ぶりは今ものこれり

擬レ送ニ遣唐使ニ歌竝短歌

天雲の むかぶす空は 朝はふる 風こそいふけ 汐けのみ かをれる海は 夕はふる 浪こそさわげ よしゑやし 浪はたつとも よしゑやし 風は吹くとも あきつ神 我が大君の 大みこと いたゞきもちて こと國に いゆきむかはゞ あらしほの 汐の八百重に ありたゝし うしはきいます 秋津姫 神のみことの ともへをば まもらひたまひ 四つの船 もなくぞあらむ 倭文機の ぬさとりしでゝ わた中に 手向よくせよ 玉がきの うちつみ國の ますらをのとも

反歌

大王のみことかしこみあらしほのうづまく海に旅ねすらしも

丈夫は名をし立つべしこと國のふびとがとも ゝ記しつぐべく

擬レ送ニ留學生ニ歌竝短歌

日の本の 大和しまねは 天地の かためし國と むかしより いひつぎ來れど 吾大王 神のみことの たり御世を ましたらはして いや廣に ことしらさむと こと國の 大きひじりの 言たてし 道のことごと まつぶさに 見したまはむと 神ながら おもほしめして それをしも 今のをつゝに 問ひさけて 學ばひ來よと もの ゝふの 八十伴のをの 生れつげる わく子がともを とりえらび よさし給へば はしきやし 若子がともは 新代の み使たゝす 大船に いざなはれつつ かしこきや 父をもおきて たふときや 母が手はなれ わたとなる 國のそぎへに いやとほく 別れも行くか なほざりの 旅にしあらめや おほろかに 年なかさねそ 心せよゆめ

かへしうた

ことさへぐ國に七年としふともことはつたへよ父母のため

觀二琉球來聘使一作歌

下野や、ふたらの山に　みや柱　ふとしきいます　大神の　とほの御門に　大御世を　しらしゝ時ゆ　天皇の　まけのまに〱　天の下　守らひますと　いやひろに　國をなごすと　隼人の　さつまの國の　みやつこに　みことおほせて　ことさへぐ南のしまの　こきしらを　ことむけまして　をす國の　うちつみやけとことよさし　さだめ給ひぬ　しかれこそ　いやつぎ〱に　新代の　はじめの時と　國ほがひ　ことほがひすと　海原は　まかぢしゞぬき　あら山は　岩根ふみさくみ　はる〲に　今もまゐ來る　遠つ島人

詠二王昭君一歌

雪まじり　あられみだれて　夜もすがら　北吹く風の　あらましき　夜床の上に　つく〲と　枕そばだてきしかたを　思ひいづれば　人の世は　ゆめなりけりな　しづたまきいやしき我も　宮姫と　かずまへられて　をすのうちに　いつかれし世は　あや錦　袖にかさねて　白玉をかづらにしつゝ　ますかゞみ　見るおもかげの　かぐはしき　花のゑまひを　我ながら　われとたのみて大王の　めぐみの露し　あまねくは漏れじとこそは　思ひつゝ　有りけるものを　さがなきや　筆にまかする　うつし繪の　あらぬすさみのいつはりを　正しもあへぬ　うきふしは　せむすべをなみ　いひしらぬ國の界に　はる〲と　出でたつ道に　おきそはる　袂の露の　きえかへり　引きとゞめたる　駒の上にしばしかきなす　四つの緒の　絶えぬ恨を　はるけなむ　世こそ知られね　をしからぬ　命と思へど　塵の身の　ちりもうせなで　春たてど花もにほはず　秋來ても　紅葉も見えぬ　あら山の　岩かきこもる　ふせ庵に　われにもあらで　いたづらに　年はかさねつ　おもひきや　こともかよはぬ　國人を　つまとむつびて　たをやめの　まとひも馴れぬかは衣　袖さしかへて　もろねせむとは

反歌

春の日の光もうときふる塚に草のみどりやいかに殘せる

こだくみのつかさ紀朝臣をたたへまつる長歌

八雲たつ　いづもの國に　ありたゝし　妻とはしけむ　皇神の　神の御世より　言魂の　さきはふ國の　國

ぶりを 世々に傳へて あらたへの 藤原がうへに をすくにを しらしける世は 山ざくら さきのをゝりに いろも香も にほふがごとく 眞盛りの 時にぞ有りける かゝれこそ 聖とすらも たゝへ來る 人も有りけれ ならの葉の 名におふ宮の 中つ世と きこゆるまでは 名ぐはしく いひつぐ人も おひすがひ あれつぎにけり かくしもぞ めでたかりしを いかさまに おもほしけめか 玉しきの たひらの宮の 新世を みよつがしける 天皇の 神のみことの 神ながら 神さびせすと からにしき あやとるわざを うむかしみ おもほしめして かしこきや 大御手づから 織りも出で つくりも出でゝ めでたまひ すさび給へば うち日さす 宮のみや人 わが君の なしのまゝにと 高機に よぢものぼらひ さなはたの まねきふみたてゝ からはたに みもまがふがに とりまねび きそひにしかば 大野らや 風にもろむく はた薄 靡くか如く 月草の 初花ずりの 色に出でゝ きぬにつくなす なべて世に うつろひゆきて 皇神の 國つ手ぶりは こもりぬの 下にかくれて かた絲の たえばたゆがに とひ見べき ものとも知らで あまた年 へにぞへにたる しかれども 岩がき淵の あつ氷 春を待ちえて 音たつる ためしあればや、よろこびを のぶときこえし 大御世に 萬のことら いにしへの 跡しのばして おほゝしき ことあらせじと みこゝろに おもほすなべに 神代より 有りくるわざを よろづ代に 傳へもゆけと 紀の朝臣に みことのらして あまの子が 磯まのかるも かきつどへ えらせ給へば 水底に しづめる玉も 波の上に 光りかゞよひ 浮雲を いぶきはらひて 照る月の 影見るごとく ことだまの さきはふ手ぶり さら／＼に、世にあらはれつ ことに出でゝ 名づけも知らぬ この朝臣が おほきいさをぞ あやにたふとき

かへし歌

天つそらさやけき月をよろづ代にかけて仰がぬ人あらめやも

壽星のかたかける繪に

あめなるや 南の星の くしみたま いつの世よりか 此の世にし あもりいまして いひ知らぬ 神のすがたを うつそみの 人に見ゆらむ かしこしと まさめに見れば たなばたの いほはたたてゝ おるきぬを 身にまつはして 玉の緒の な

がきかしらに 眞しらがの 霜かきたりて 千世ふべき 神のをしへを 世の人に 傳へむためと 天つふみ 御手にとらせり 其のふみを 見むよしもがも 神ごとを 聞くよしもがも こひのみて たちゐをろがみ あふげもろ人

舜叟法師がはりみぢへ歸るを送る長歌

言の葉の 道のひじりと あふぎ來る 神の宮ゐを はりみぢや いちひが本の 山寺に いはひ初めけむ そのかみは いつとしらねど 中つ世に その名きこえし 歌人の こと葉の露を とゞめ置く 跡をし見れば はやき世の ことにぞあるらし 其の寺の いまのあるじは 墨染の 身にしもあれど しきしまの 大和手ぶりを、ま心に ふかくしたひて この神に つかふることを おのが身の さきはひありと よろこばひ 思ひわたれば 春秋に、花折り手向け 朝夕に いがきが本を、かきはらひ 清むとすれど 年深み ふりし宮ゐの みやばしら 朽ち行くまゝに おのづから 苔のみむして かたそぎの ゆきあひのまより をり／＼に 漏り來る雨は さゝふべき よしも知られず かくながら ありへむことは かしこしと 神の御爲に やすからず 思ひまどひて 里人に あひかたらへど 里人も せむすべ知らず とほ里に ことゝひすれど 誰しかも いかにかせまし よしやさは 我が身をちゞに くだきてと 思ひおこして 廣前に ねぎごとまうし ほとけにも ちかごとたてゝ 都べに ひとり出で來て かくこそと 人に告ぐれば 聞く人の いひつぎ行きて まことある あかき心の いそしさを 誰もめでつゝ ぬさ奉る 人こそおほく ありけらし しかはあれども かくのみに やみなましかば にひ宮を 造らむために なほあかぬ わざぞと思ひて ひたみちに 心ふりおこし 山も越え 海も渡りて はる／＼と 千里の遠の 江戸の城に さらにまゐ來て やちまたに か行きかく行き 日をかさね 月を重ねて こゝにしも かつやすらへり むかしべや 東の鄙と 世の人の いひしあら野も 今はまた いともかしこき おほとのゝ ふとしきませば やしまぐに もゝ國人も まゐり來て つかへまつりて 道々に 心さかしく みやびたる 人こそさはに つどひけれ それが中にも 言の葉の 道ふむ人は いやしきも 高きもなべて 多かれば 思ひ歎きて

御柱は　我こそたてめ　檜皮をば　我ふかましと　とりぐ＼に　あひあらそへば　おもふこと　あかぬことなく　ぬさしろも　山とつもりぬ　いざさらば　とく立ち歸り　新宮を　雲井に高く　造れ法の師

かへし歌

時を得てかゝぐる法のともし火にふたゝび照せあけの玉がき

雨岡のふたら山に詣づるを送る長歌みじか歌

神さぶる　ふたらの山は　朝日子の　たゞさす高嶺　しきませる　國のまほらぞ　常宮を　こゝとさだめて　天の下　まもらひませと　皇神の　よさしのまゝに　あらみ魂　しづまりいまし　萬代に　うしはきませば　もゝ敷の　大宮人は　天皇の　またす使と　年のはに　ちさとを越えて　翅なす　ありがよひつゝ　靫かくる　八十伴のをは　岩がねを　ふみ平らげて　とこしへに　いがきが本に　しゝじもの　いはひさもらひ　月にけに　八洲の國ゆ　まゐり來る　人し絶えねば　山ごもる　檜原が奥も　馬車　いゆきかへらひ　雲迷ふ　ちひろの谷も　家むらは　みちて有りけり　しかれこそ　神のみ山は　天皇の　御代のしづめと　世の人の　いひつぎきぬれ　倭文はたの　ぬさとりむけて　ふとまへに　うなねつきぬき　ゆふづゝの　かゆきかくゆき　とりよろふ　山の八百くま　隅もおちず　見て歸り來よ　かしこかれども、

かへし歌

朝日子のとよさかのぼる二荒山たゞさす影をあふげとぞ思ふ

海量法師のはじめてとひ來けるによみておくれる

春の日の　のどなる時に　ふせいほの　かなどをひらき　かすゆ酒　のみつゝをれば　はしりでに　くつの音きこゆ　いましはし　たれか來ぬると　たちむかひ　姿を見れば　霜やたび　おくと見るまで　眞しらがを　うなねに生し　みるのごと　わわけしひげを　むなさかに　長くしだれて　ぬの衣　ま袖もゆたに　たつか杖　こしにたがねつ　いづくより　來ますとゝへば　年ひさに　しが名をきゝて　いはばしの　あふみの國ゆ　はろぐ＼と　われは訪ひ來と　ねもごろに　君ぞのらせる　しかれども　おぞの我はも　なぞへなき　世のしれ人　ひがみたる　國のすて人　わが目らは　四つしもあらず　わが口は　ふたつもなきを　いかさまの　人ときかして　めづらしみ　われを訪はせる　いともぐ＼　あや

しきかもよ　ましらかのをぢ

よしの宮の跡を見てよめる

橿原の　日知の御世ゆ　百たらず　世つぎましける　天皇の　神のみことは　いはまくも　かしこけれども　天つ日の　くもりあらせず　天の下　照したまふと　食國を、さだめたまふと　神おもひ　おもほしめして　神はかり　はかりましけり　うべしこそ　天のます人　いやさはに　人はあれども　さかしとか　聞しめしけめ　うましとか　おぼしけめやも　橘の　ますらたけをに　御軍を　まけたまへれば　丈夫も　みことかしこみ　むらぎもの　心ふりおこし　大王に　つかへまつると　ぬば玉の　夜はすがらに　つるぎたち　腰にとりはき　あかねさす　ひるはしみらに　梓弓　手にとり持ちて　軍人　あともひつれて　まつろはぬ　國もなびかへ　ちはやぶる　人もなごしぬ　とこしへに　かくしもあらば　木綿花の　さかえましけむ　いにしへの　まさかりの世と　今の世も　さちはひまさむと　大船の　おもひたのみて　よの人は　有りけるものを　うき雲の　また立ちまよひ　ありそなみ　たちのさわぎに　かりごもの　みだれあひつゝ　思ふそら　やすからなくに　なげくそら　やすからなくに　いはむすべ　せむすべしらに　ますらをの　たけき心も　朝霜の　消なばけぬべく　ゆふ露の　ちりてうせぬれ　神ながら　神のみことの　みこゝろの　ゆたにまさでや　たむだきて　いましかねてや　やほによし　たひらの宮を　朝鳥の　出で立ちまして　み雪ふる　芳野の嶽の　しら雲を　八重かき分けて　たゝなはる　青垣山の　岩がきを　みかきとなして　岩ばしる　瀧つ河内は　外の重なる　みかはの水とみ給ひ　なぞらへまして　いでましの　とつ宮ならで　大宮を　こゝとさだめて　雲の上に　ふとしきましぬ　しかれども　いく世もあらで　山河の　神もつかへず　あまざかる　鄙となりきと　かたりつぎ　いひつぎにけり　大宮の　その跡どころ　見ればかなしも

かへし歌

ふりにける跡とひ來れば宮人のたもとわすれず花さきにけり

いにしへを汝もしのぶかよぶこ鳥うらなきをれり大宮所

しら雲の八重たつ山に大宮をいく世までとて造り初めけむ

たちばなは根さへかれてもとこしへにかぐはしき名ぞ今ものこれる

天地のかためし國といはめどもうつ

ろひ來ぬる世にこそ有りけれ

賀茂のうしと共に我はらから などかいつらねて大和の國へ いきける時によしのの大瀧を 見てよめる

かみろぎの　遠き御世より　かたりつぎ　いひつぐことを　ゆかしみと　思ひ立ちぬる　草枕　たびのながぢの　山川の　いづこはあれど　名ぐはしき　よしのの山の　雲きりを　八重かき分けて　大瀧の　川瀬を見れば　上つ瀬は　ゆつ岩むらに　落ちたぎち　水沫くだけて　大雪の　散りかふがごと　下つ瀬は　八十のくまわに　よる波の　うづなみまきて　天雲の　たゞよふなせり　神がらか　しかぞあやしき　國がらか　かくぞさやけき　かくしつゝ　やほ萬代に　ありがよひ　つねに見るとも　あきたらめやも

かへし歌

落ちたぎつゆつ岩むらに波ふりて山もとゞろにひゞきあひにけり

木曾のみたけを見さけてよめる

野つもちの　神の御世より　玉ぐしに　とらし來にける　みすゞかる　信濃の國に　たてる檜の　眞木のつまでを　もゝたらず　筏につくり　波のむた　うかべながせる　木曾川の　かはのをちこち　高山は　さはにあれども　むらやまの　つかさの山と　こちごちの　山のみなかゆ　雲井に　かたく尊き　おほきその　木曾の御嶽は　かしこくも　たゝせる山ぞ　あやしくも　いませる神の　神ながら　神さびせすと　みこゝろの　あらぶるときは　朝はふる　風こそいぶけ　夕はふる　風こそさわげ　そのかげに　いぶきはらはれ　たつ雲も　いゆきはゞかり　其の風の　さゆと冴ゆれば　六月の　つちさへさけて　照る日にも　雪ぞふりける　いはまくも　ゆゝしきかもや　木曾の神高嶺

かへしうた

雲井なるみたけ神さび風たちて木曾のむら山なりぞとよむる、

賀茂大人の御墓のもとに石文を立てける時に

こもりくの　泊瀬を國の　朝倉に　宮づくりして　天の下　しろしめしける　天皇の　其の大御世に　栖輕ちふ　ますらたけをを　をゝしとて　たゝはしき名を　石文の　柱に載せて　なべて世に　稱へにけりと　記しつぎ　いひつぎにけり　いにしへも　しかこそありけれ　それをしも　ためしに引きて、さしむしろ　賀茂の翁が　ふる言の　學びの道に　い

そしかる、其のゆゑよしを　岩の上にゑりてもがもと　翁をし　しぬぶ人どち　あひはかり　相かたらへば　もろ人は　誰もうづなひ　いで湯わく　伊豆の高嶺に　なみたてる　ゆつ岩むらの　いは垣を　やさかにきりて　諸手船（もろてぶね）　もろ手に載せて　荏原（えばら）の海　濱の磯間ゆ　百たらず　八十綱（やそつな）はへて　ひこづらひ　山ふみさくみ　さゝげ來て　その岩角を　鏡なす　たひらにみがき　常世麻呂（とこよまろ）　筆とりもちて　わが大人（うし）の　ありへつる世を　つばらかに　ことにのばへて　鳥のあとを　ふかくとゞめて　おくつきの　御前にたてつ　百世（もゝよ）にも　千々の年にも　かくながら　いやとこしへに　傳へゆかば　今のをづゝを　遠つ世と　見む世の人も　たちむかひ　讀みてをしぬべ　これのいしぶみ　（當世麻呂は千蔭が字なり）

反歌

君が名を千名のいほ名にひゞけとて
山もとゞろに石にゑりつく

賀茂大人みまかり給ひてより三十あまり三とせになりけるとし、少林院にまうでゝふるきをおもふといふことを人々と共によめる

わたつみの　千ひろの底に　あたひなき　玉こそ有りとへ　高山の　五（い）百重（ほへ）がおくに　世に知らぬ　花こそ咲くとへ　波間わけ　かづくとすれど　その玉は　ひろひもかねつ　岩手ふみ　のぼるとすれど　其の花は、をりもとられず　拾ひ得ぬ　其の玉のごと　たをり得ぬ　そのはなのごと　皆人の　得がてにしつゝ　むかしより　思ひまどひて　古言（ふるごと）の　ふかきおくがを　おほゝしく　いひつぎ來しを　沖つ鳥　賀茂の翁の　此の世にし　あらはれまして　人はよし　たづきをしらに　思へりし　ことには有りとも　言魂の　たすけもこそと　肝むかふ　心ふりおこし　あさ衣　あせあゆる日も　やすらへる　時の間もなく　皮ぎぬに　霜さゆる夜も　おきゐつゝ　うまいはなさず　月かさね　年もへにつゝ　眞心に　もとめてしより　くもり夜に　分くる山路を　松の火に　照すがごとく　辿りゆく　隈もあらはれ　谷陰に　ふりおける雪の　春來れば　消（け）ぬるがごとく　かくろひし　名殘なければ　世に知らぬ　花はわれ見つ　あたひなき　玉は得にきと　ほこらひて　有りしあひだに　おのづから　知らぬ國にも　世の人の　かたりつがひて　をちこちの　人もとひさけ　いはまくも　あやにゆゝしき　大殿に　其の名きかして　との

のうちに　つかへまつらせ　朝夕に　みことからさず　上つ代の　こと問はしつゝ　ねもごろに　思ほしめして　汝がごとき　人はあらじと　うつくしみ　めで給ひてゆ　かぐはしき　名をし傳へて　なべて世に　人ぞしぬべる　むかしべに　かもの翁が　有りし世を　思ひいづれば　かしこきろかも

反歌

しら玉の光はとほく照せどもとり得し人はいやとしさかる

香ぐはしき君がこと葉のにほひこそ千世にもあせぬ花には有りけれ

　棚倉のかうの殿の北の方うせ給ひての又の年の春、花のもとに去年(こぞ)をしのぶといふことを、人々によませ給ひける時によみて奉れる歌

年月は　ながるとすれど　立ちかへり　春こそ來ぬれ　咲く花は　散りぬと見しも　春くれば　またもにほへり　世のことは　かくこそ有りけれ　よしやさは　いにけむ人も　さらにあふ　時もやあると　すみれ咲く　御園の芝生　かき分けて　露ふみならし　朝戸出に　君はこふれど　八重霞　たちやへだつる　春鳥の　來なく梢を　をりかざし　陰にをりゐて　ゆふ庭に　君は待てども　入日さす　かげやをぐらき　面影に　たつとはすれど　まさかには　あひも見ましや　うつせみの　人のこの世は　はかなかる　ならひといへど　花よりも　あだなるものと　おもひきや君

　かへし歌

咲くはなに人しもあえむものならば散りても春にあはましものを

　ぬひ子が三年の忌に

過ぎにける　年のみとせは　昨日かと　ゆめごゝちして　しのびつゝ　いにしその子が　手ずさみは　かくやありしと　まねひ出でゝ　あやめのくさの　ながきねを　袂にかけて　かぐはしき　花たちばなを　玉にぬき　うらぶれをれば　さみだれの　ふるやの軒に　音づれて　山ほとゝぎす　あやなくも　なくね添へけり　たもとくたしに

反歌

わすれめや花たちばなを玉にぬき袖にほはせし人のむかしを

　眞乘院雪岡禪師をかなしめる歌　禪師の江戸にありける時は金地院の松月庵に住めり

人の世は　夢ともゆめと　はかなかる　ものにしありけり　墨染の　袂ふりはへ　都より　こゝにいまして　山松の　梢の月を　室(むろ)の名に　かけて住みにし　法(のり)の師の　ことをしお

もへば　さら〲に　なみだぞおつ
る　うつし身と　ありし其の世は
薪こり　水汲むわざの　いとまある
をり〲ごとに　月すめば　ともに
ひもとき　花さけば　手たづさはり
て　露ばかり　こゝろもおかず　こ
との葉の　友とむつびて　むら鳥の
ゆきかひしつゝ　うるはしみ　有り
けるものを　たちかへり　もとつ御
法の　庭草を　しばしふみわけ　さ
らにまた　行きても來まし　はやか
らば　ふたとせ三とせ　おそからば
六年いつとせ　七とせと　すぐしは
せじと　契りおきて　別れにしかば
いつしかと　待ちし間に　都べの
人のかたらく　君がまつ　その法の
師は　さきの世の　いかなる罪か
今の世に　むくい來にけむ　なにぞ
もの　故としらねど　おさかべの
つかさにめして　さつまがた　沖の
小島の　しまもりに　行きてをすめ
と　おほせごと　賜ひしまゝに　い
にし月　なにはの浦の　うら傳ひ
舟開きして　波風に　身をまかせぬ
と　つばらかに　われに語りつ　しか
れども　千里の外に　海山を　へだ
てゝをれば　まがごとか　人のいひ
つる　およづれか　人のつたへし
たゞかなる　便りもがもと　月に日
に　待ちつゝをれば　難波なる　わ
がともがきの　ことさらに　おもひ
おこして　天つ鴈　翅にかくる　玉
章の　たよりうれしと　ことの葉を
ひらきて見れば　さつまがた　沖の
小島に　ゆく舟の　ゆきもはてなで
法の師は　八重の汐ぢの　うたかた
に　身をたぐへつと　さだかにぞ
われに　告げつる　常もなき　世は
かくこそと　一たびは　立ちておど
ろき　一度は　ふしてもこよひ　い
きつぎて　なげきぞわがする　せむ
すべをなみ

反歌

かのきしに到らむことしたがはずば
なにくるしみの海となげかむ

ことじりぶみのはしことば

世に歌よむ人おほし。あるは短歌(みじかうた)にたくみに、あるは長歌にかしこく、あるはふみ書くわざにすぐる。世に古(いにしへ)學(まな)びする人おほし。あるは御世(みよ)御世の書(ふみ)をあきらめ、あるは四つのおきてぶみにくはしく、あるはあがれる世の古言(ふるごと)ぶみに心をふかめ、あるは後の世の物語ぶみを枕ごととす。その人々にとへば、かれにくはしきはこ

れにおろかに、こゝにおもひいりたるはかしこに心あさし。しかのみならず、大和册子(やまとさうし)のうへにはくちさきらきゝたるも、もろこしぶみにむかへば、爪くはるゝたぐひおほし。まことそれもことわり、たれやし人(びと)かは皆がらかねそなへたるあらむ。我が家の佛たふとぶとにはなけれど、うまくこの道々にゆきとほりて、よろづたどくしからぬは、ひとり我が師にしごりのや

の翁(おきな)のみなむおはしける。翁、こゝのことはすべて縣居(あがたゐ)の大人(うし)にとひきかれたるよしは、誰もよく知れることなればいはじ。もろこしまなびは、はじめ服部仲英ぬしに名簿(みやうぶ)おくられしを、仲英ぬし身まかられては、鵜殿士寧ぬしにしたがひ、中ごろ都にのぼりて、皆川伯恭ぬしに問ひきかれし事おほく、又後には佐々木學儒、安達文仲などいへる、世にすぐれたる博士たちに、

あしたゆふべむつびともなはれしかば、からうたにも其名きこえて、なま〱の博士口あかすまじくなむおはしける。翁世にもとむる心なくして、やむごとなき御前（おまへ）わたりに召さるゝ事好まれず、たゞ花にあくがれ、月にうかるゝほかには朝夕文机（ふづくゑ）のもと去らずおはして、筆とるわざにのみあかしくらされしかどともすれば物まなびする人のためにさまたげられ、かくすれば

病の床におきふしして、思ふ事いはで止まれたる事少なからず、かきさして事終へられざりしもの、數あまたなりき。歌をのみたて丶ものせられしとにはあらねど、おのづから此のうたにて世に知られ、人にもちひられつつやう〳〵天の下、たかきもみじかきも、老いたるも、若きもしるしらぬ歌よむ人とだにいへば、千蔭春海と口にいはざるものなきやうにはなりおはしにけり。その歌のす

がた、芳宜園の をぢはいきほひ雄々しく、詞はなやぎたるを好まれ、翁はさびたるさまのこまやかにしめやかなるふしを心とせられにけり。文詞は趣をもろこしにかり、言葉をこゝにうつし、ふるごとをもとめず、さと言をはぶきて、新しくひとつのさまを思ひかまへられて、わきてめでたくなむものせられける。世の人翁をたゞに歌よみとのみ思はむも、翁をしらぬなるべく、

又たゞに上つ代の學びするたぐひとのみ思はむも翁をしらぬなるべく、またたゞにからまなびのはかせなみにのみおもはむも、翁をしらぬなるべし。おきな若くしてなりはひの道にうとく、つひに家をはふらかして百千の寳をうしなひ、はてはことたらぬがちに年月をおくられしかど、老いてのち言の葉にとみ、まなびとまれたり。いでや百千の寳は、たゞしばしいけるがほどの

とみなり、言の葉と學とは、とこしへに亡きあとまでの富なり。翁たからにまづしくおはせしかど、言の葉とまなびとにとまれたり。誠に天の下のたからの王とは翁をこそいふべけれ。たれかはうらやまざらむ、たれかはしたはざらむ。今此の言の葉のふみ、世にあまねくひろごりて、あひだおかず學のふみども板にゑられゆかば、わが翁を天の下の寶の王なりといふことの、い

つはりならぬこと知られぬべし。そも此の集の名におふせられたる琴じりの詞は、古事記に琴がみといふことばのあるより思ひよられたるなりとぞ。

清水濱臣

かずしらず竝みたてる杣山の木も、たけたかく、もとだちすなほにして、はしらともなり、うつばりともなるべきは、いとまれなり。ことばの林にいりて、其陰をえらばむことも、またかくのごとくなるべし。うつせみの世に、ふみのそのに立ちまじり、言葉のかげにあそぶ人々、夏野の草のかずおほかめれど、おもわなす心々なれば、こゝにあまりあるも、かしこにたらはずして、山の井のこ

ころあききおのれらが、かしこきかげとたのむべきは、すくなくなむ有りける。こゝにわがにしごりの大人の、としごろ思ひをよせ、心をこめて、よみおきたまへることのはの、世をへては、あらぬことにうつしひがめもて行かむことのいとほいなきわざなればとて、こたび板に彫りなむといふ人のあるに、かのことじりなる厨子に、としごろこめおきたまひぬることのはの、秋野の花のいろ〳〵

につみわけたまひぬるを、ながきみじかきよりはじめて、くさぐさのふみをさへにとうでて、かきあつめたまふこと有りけり。まことにわがうしのことのはぞ、おのれらがたちなれてたのむべきかげには有りける。この大人(うし)のことばのそのにこそ、はしらともなり、うつばりともけづりて、いにしへにのぼりゆかむはしだてとなすべき木は有りぬべけれ。かくばかりことのはしげき大木のかげに、

ひるはひねもす立ちならし、よるはよもすがら居りあかしてこそ、みやびやかなることのはをもひろふべきことには有りけれ。かくて今よりは、ちとせの後も朽ちせざらむことのうれしきあまりに、いさゝかことあげするとかくなむ。

文化むとせ

長　月

片岡芳香

月雪はな、ほとゝぎすはさらなり、うきふしも、うれしきをりも、あはれなるも、かなしきも、をりにふれ、ことにあたりて、年比よみ出でられし歌どもの、厨子のうちにのみ埋もれなば、おのづからちりうせなむこともあらましなどある人々にそゝのかされて、此のちかきとしより、かきもあつめ、梓にものぼせてむなど思ひたちたまひて、おのれに清書のことまでをもあつらへられしが、ほ

どなくやまひの床にかゝらせ給ひて、目くるめくことを、ひたすらにうれへさせ給ひぬれば、何事もしさして、つひに身まかり給ひぬるは、いとほいなく、思ひ出づるも、今更なみだにくれてなむ。さるをこたび大人(うし)のみこゝろざしを繼ぎて、たせ子のものせられしが嬉しくて、おのれもちぎりしままに筆とりぬれど、拙さはなかなか人わろく、つめくはるゝわざになむ。さてなき御あとに、

うしの歌のうへを論ぜむは、おふけなく、ふかきむねはわがどちのしるべきにもあらねど、只おもひあがれるこゝろ高さと、いうなるおもむきとは、きはことに、世の歌人たちとおなじ日にかたるべきにはあらず。またかの秀歌一首もつはうたよみなり。二首は上手なり、三首はありがたしと長房卿の給ひしによらば、此集のぬしなどをばいかばかりめでぬべきものにか。

文化の十とせ
かみな月望の
後の一日
平務廉識

文化の十とせかみな月望の後の一日
平務廉識

此琴じり集は、父のおもひたち給ひしことなるが、ともかくもさだめたまはぬ程に、みまかり給ひしは、あかずかなしきを、その本意たがへぬさまにはいかにかしなさまし、かくさま〴〵に、しげき言の葉どもを、しがなきさまにはちらさずもがなと、朝なゆふなにかき集むとすれど、力なきをみなごゝろに、おもひあへねば、しどけなくのみもてなしつゝ、ほど經しを、務廉ぬしの、せちにこころくるしがりあつかはるゝに助けられ、かつは濱臣

ぬしにもかたらひあはせなどして、やう／＼かのみだれたりしくさ／＼を、つどりわけついでゝ、かく板にもゑりぬるは、うれしきわざになむ。しかはあれど、今これをなき人の見給ふものならましかば、御こゝろにかなはぬも有りぬべく、またおもひ入れ給へるふしおはしたらむも、おほくもれたるべければ、いかばかりかひなき事にかのたまはむと、たゞこれのみぞあかずおもはるゝ。

文化の十とせしもつき

むら田のたせ子

和書部　萬笈堂英遵藏板目録

月詣倭歌集　賀茂重保神主撰　橘千蔭大人序　清水浜臣大人標註　平春海大人跋　全四冊

此書は重保ぬしの撰にて時の歌人のうたをえらびたるにて平家いまだ世にひろからざりし程のものにて平氏の歌おほく入たれば千載集に漏たる人々の歌も入たるなど殊に世に稀なり　其の歌とも此集にもれたるもありてせらるゝ事は此時代の考となるべきもの多かるべく歌よむ人のこの世の稀様なるをさへ清水大人引書ものほどの詳様をつまびらかにせらる考證のくはしきも初学のよすがとなるべき書也

古今選　本居翁撰　村田春樹大人・本居大平大人同校　小本二冊　袖珍中本一冊

此書は鈴屋大人の古今よりことのためにて廿一代集の中より秀歌をえらびあつめられたる歌をえらびあつめ給ひて歌よまむ人のてびきとなる書にせよとなり　いと便よき書也

庚子道の記　白拍子武女記　清水浜臣大人標注　橘千蔭平春海大人序跋　全一冊

此ころの祝に享保の頃白松子武雄といふ人の尾張より江戸へのぼれる
おりの路の記也古文のめでたきこと和漢の学よくくれたる才識に
古人にまたらひとゝなき筆とさひ之清水大人倭漢の古事を引き
こまかに注釈をはまひらの不撰注して考へ置たるなり

百人一首新抄　石原正明大人注　全一冊

此は百人一首の注釈あまたあれども此はそのおふひろの所見ありて先一首ごとに句のあひだに注をくはへその末に一首の大意を傍注にて解なしたるおもしろき注釈なり

諸国名義考　藤原彦麿大人著　門人吉田豊足大人校　花樹大平南大人序　全二冊

此書は諸国の名義と和名抄にみえたるの古書によりて考たる也其の名義まで人てよくしられぬ事どもあるを古人未発の考をおこされたるなり

冠辞古今和歌集　本居大人遺説　並樹大人補考　全二冊

杉田日記　清水浜臣大人紀行　全一冊

此日記は清水大人翁出して蒲田杉田の梅見に旅だち給ひしをりの紀行なりこれは杉田にてよみ給ひし歌三十一首の外にして又翁が心ころの歌におもむきあるは人々にむかひてのたまへる如く杉田梅その地やさしくあるまじきはすきものにはあそびのよすがとていひくるこゝちせし又梅に人ふしく旅たつ人のたよりともなるべき書なり

荷田在満家歌合　賀茂真淵翁判　清水浜臣大人校　全一冊

此歌合も荷田在満大人の家にて催されしにて判者賀茂翁なり翁の歌合の判せられたるはこの外になしとて翁判詞の跋にも書かれたり奇絶也○附録にも真淵翁春海大人などのかゝれて歌の会ありしをりの人々この歌にも真淵翁の評せられたるをあつめて清水大人校訂して附刻せられたればこの評詞卓絶にして後世の評にふることをもなすべし此書をよみて翁の心を評せられし趣をしるべき也

縣門遺稿　清水濱臣大人集

第一集　村田春郷家集　全一冊

第二集　小野古道家集　全一冊

第三集　筑波子家集　全一冊

第四集　よの子家集　涼月遺草　全二冊

第五集　日下部高豊家集　全一冊

続き〱拾あつめてん

晩花集　下河邊長流隠士自撰家集

漫吟集　契沖阿闍梨自撰家集　合刻一冊

琴後集　平春海大人家集　初編六冊

後撰和歌集　契沖阿闍梨標註　清水濱臣大人補註　全四冊

後撰集附考　清水濱臣大人述　全二冊

文化癸酉冬發兌

本石町十軒店

萬笈堂英平吉

琴後集巻十

記

清水濱臣の泊洦舎の記

上野の岡のふもとに池あり。この池の西なる方を萱がまちとぞいひける。こゝに蘆原かりそけてつい建てたる伏屋あり。そはたゞに其池にのぞみたれば、名をささなみのやとなむいふなる。そも〳〵霞たなびく春のあしたは、むかつをの梢をうつして花の鏡にむかひ、鴈鳴きわたる秋のゆふべは、雲間の影をうかべて月のみふねをとゞめ、あるは蓮はな咲く夏の日、あるはみ雪ふる冬の夜、をりにつけ時にしたがひて、見るめのあはれなむつきざりける。あるじはふかくみやびこのめる人にて、四の時のあはれをすぐさず、こをいにしへさまのことの葉にのばへて思をやり、またもろこしぶりのしらべにならひて、心をしもなくさめけり。かれたまあへる人々、花にあくがれ月にたどるも、つねにこの伏屋をなむ問ひ來にける。一日あるじのいひけらく、世を經てたえざるものは鳥の跡なり。いで此の屋のたのしみをも、人々とあひむつばへる心をも、ながくうみの子のつぎ〳〵につたへて、わが名代とせむ。ことのゆゑよし記してよとあれば、すなはち筆さしぬらして、いさゝかものゝはしに書きつく。

寛政といふ年のなゝとせ神無月

蓬が杣の記

吾黨晃海は、はやくひたゝけたる巷の住家をいとひて、たゞ哥にのみ心をなぐさめ、山水の清きさかひになむ思をやりける。其の尾張の故鄕を出でゝより、甲斐の國にあそべること十年あまり、今また東の都に來りて、世の哥人にまじらへることこゝに二年、市が谷の里にかごかなる所をしめて、花にながめ月にうそぶくやどりとせり。おのれ一日其のやどりを訪へば、松の柱竹の編戸いと事そぎたるぞをかしき。あるじのいへらく、我こゝにわが世をへなむとにはあらず。たゞ時にとりたるかりそめのすさみなり。われ此のやどりを蓬が杣となむ名づくといふ。さるはみやびたる名にこそ有りけれ、蟲の音きかむ秋を待つよすがにやといへば、さりけり〳〵、さはいへどこれをとがむる人あり。あらぬえせ哥のこと葉にすがりたるこそ心ゆかね。かの長能の朝臣のそしりをば、いかにことわるべきぞといふとぞ、おのれこたへけらく、そはものに泥みたるぬしかな。かの朝臣のうけひかざるは、耳なれぬ詞をいとふにこそ有りけらし。されど必ずさる事とのみ

もさだめ難きよしあり。そも〳〵哥の詞にいひふりて跡ある事と、あらたにつくり出でゝいひそむる事との二つあり。蓬の杣とはあらたにいひそめたる詞にて、古き跡によりたるにはあらず。そは蓬の茂う立てるが、杣山の木のむれ立てるに似たれば、たとへていふなり。かの天つ星の數多きを仰ぎて星の林となづけ、みねの岩ほの竝み立てるを見て岩垣といふらむ、みな同じたぐひなるべし。かゝる言葉をあらたにいひ出でむも、哥人の一つのたくみにはあらずや。古くいひならひたるをば、善しとて必ずとり、新しく思ひよせたるをば、惡しとてあながちに捨てむは、中々にをこなるべし、まして彼の哥は、通俊の君のえらびにもとられ、また師大納言の難にもいらず。かゝればこの二人の君たちは、其のあらたなる詞をよしありとこそ思はれけめといへば、主手うちならして喜ぶこと限りなし。則ち筆とりてこの問答の詞をついでて、主の名にかけたる事のもとをあかし、かつは曾丹の翁のため、嘲りをとくになむ。

文化六とせの春

知足菴記

あはれ世のならはしこそはかなきものはあなれ。たかきいやしき品いとことなりといへども、おのがじゝ心ゆくばかりなるは稀にて、たゞたらはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢のあらしをうらみ、月をめづるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。林にやどるさゝぎは、わづかなるさ枝のかげをのみたのみ、ながれに水もとむるねずみは、たゞはらふくるゝにすぎずとこそ、いにしへ人もいひつれ。かゝることわりをだにわかたば、限りあるこの世に、かぎりなき事を思ふべきかは。こゝに中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒松のとぼそに心の月をすましめ、花をつむゆふべ、閼伽をくむあかつき、み佛につかふるいとまある時は、氷をくだき、雪を煮て、とがのをの昔をしのぶめる業にしも、心をなむなぐさめける。これや此の世にもとむべきすぢをも忘れ、また人をうらやむべきふしをも思はで、おのが心から事足る業にしもあれば、かのいにしへ人のいひけむことわりにこそかなはめ。いでやうつそみの世の、限りなきもとめあるきはとは、日をならべてあけつらふべくもあらざりけり。うべなうべな、この住家をしもたることを知るとは名づけしこと。

隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさま〴〵なれど、時にそむき折にあはで、つきづきしからざらむは、いみじきふし

なりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあたゝかなるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。いにしへの人も、春のあじろ八月のしらがさねをこそ、すさまじきことの例には引き出でたりけれ。かゝればはかなきすさみも、をりにあひたるはをかしく、見所なき木草も、時を得たるはめづらかになむおぼゆめる。しかはあれど、人ぐさしげき巷の、所せく門たち竝べたらむあたりには、時をすぐし、をりを失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山遙かにて、四つの時のゆきめぐるにしたがひて、心をやるべき住居は、いとも／＼かたしや。こゝに前田のぬしの高殿こそ、あやしく所得てはおぼゆれ。しりへは市路につゞくものから、前は世ばなれたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりを居ながら袂にしめ、夏はみなぎは清き池の蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月にうそぶき、冬は雪にうたふも、すべて山水のあはれをそへざるをりなむあらざりける。ましてあるじの言の葉もて、友にまじらふ事廣ければ、時にふれをりを過さず問ひ來る人々、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへにあく世もしらぬ高殿なればとて、聞中大悳の、ことさらに時にしたがふてふ事をもて名づけられたるは、ふかき心しらひにこそありけらし。

安田躬弦の家の文臺の記

よろづの調度、古の跡あるものは、よそほひありてうるはしかれど、けぢかくもてならし難し。今の世につくり出づるものは、ことそぎて見所なけれど、とりつかふに心やすし。この文臺は、ちかき世に桃靑法師が、はじめてつくり出でたる型なりとなむいふなる。法師は塵の世をのがれ出でゝ、かりのやどりに心とゞめざりし人なりとかいふめれば、古のよそほしき姿はまねばで、今の世の心やすきに從へるにこそ有りけらし。又こは神路の山の杉の古枝を、木造りなせるなりとなむ。そはゆくりなくなせしわざなめれど、これを思ふに、とりよそひうるはしからむは、大かたに人の世の手ぶりにて、事そぎてかざりなきは、中々に神代のすなほなる心しらひあれば、此の杉もてつくれるを似げなしともいひがたし。とまれかくまれ、物は事たらばさても有りぬべきを、あまりにえりとゝのへむとせば、失ふふしも出でくべし。我が友躬弦のぬしは、ふるきみやびごと好む人なるが、猶この古に跡なきさまなる物をも、有るにまかせて捨てざるは、心ありとやいはむ。椎の葉もひそくのつきも、ものをもるには心ひとしく、あじろの屏風も

錦のとばりも、身をへだつるに異なるけぢめなければ、すべて物はひとかたをとりて、かたへをいひけつべきわざにはあらぬにや。

燒畫記

よろづ何のわざにも、古より法となすしるべありて、それによらざらむは、まことの心を得がたく、其ののりを得たるは、まめやかなりとて、人もうべなふめり。こはもとよりことわりさる事ながら、ふかく事のもとを考ふるに、よろづの事、はじめに法をまうけ置きて、後に其のわざをなし出づるにはあらず。そのわざあるがうへにこそ、法てふ事はいで來めれ。かゝれば、わざは本にて、法は末なり。かれ何のわざにもよく心を深めて、其の道に入りたらむ人は、われより法をばはじめつべし。すべてくだりたる世人の心ぐせにて、法になづみ、あとにかゝづらひて、かへりてあらぬ方にひがみもて行くたぐひも多かるをや。もろこし人の詞に、法はのりなきがうちにありといへるは、其の詞味ひありとこそ覺ゆなれ。さはいへど、これは世のつねのなほ〳〵しききはの人のためには、たやすく言ひがたくやあらむ。こゝに燒繪といふわざあり。はやき世のすさみにて、中昔の書にも其の事見えたれど、今は世にたえて其のあとも殘らず、ましてその業得たる人とては誰かはあらむ。しがるを若狹のかうの君、稻垣の朝臣は、繪をふかくこのみ給ふあまりに、此のわざをふたゝび世にしいで給へり。そのものゝ形をうつしたまふを見るに、まがねをやきて筆とし、火をもて墨にかへて、筆づよにとりなしたまふ所は、紙のおもていたくこがれ、輕らかにかいやりたまふ方は、火の氣かすかににほひて、またく墨がきの心しらひにことならず。さるは水のながれ、山のたゝずまひ、木草、とりけだもの、人のよそほひ、家居のありさま、何くれのくさはひ、筆の心のいたらぬくま無くなむおはすなる。これぞこの古人の跡をもふまず、われとわが心をもて、法をさためてものし給ふなるは、いと〳〵珍らかにこそ。今よりして、此のわざをすぎすぎにまねび出でむ人、誰かは此の君をもて、此の道の親とめでたふとみ奉らざらむ。

文化の四とせかみな月ついたちの日

山水のかたかける繪を見る記

うつせみの世に人のことわざ多かめれど、しづけき窓のうち、幽かなる燈火のもとにひとり居て、よく〳〵なぐさむべきものは、たゞ繪と書との二つになむ有りける。糸竹のしらべに思ひをやり、盃を取りてうき世のさまを忘るゝたぐひ

は、折にふれ時にしたがひて、人の心をなんなぐさむるわざなれど、いかでかは常にしもなすべき。故くだれる世に生れ出でゝ、上つ世の人を心の友となすべきはふみなり、足は都のうちにのみ止まりて、人の國の遙かなる境をもたゞに見るべきものは、うつし繪のたくみになんありける。かゝれば、古の書どもくりかへし見るいとまには、名だたる山河のけはひを、うつし繪にしのび出でゝ、こを常に心やりぐさとぞなしける。かくおのが好める心をおもひはかりて、ある人の見よとておこせしを見るに、山をたゝめる事十まりいつゝ、たゞ墨がきにかきなしたるが、濃きは近く、薄きは遠し。そのまぢかく見わたさるゝは、大木しみゝに生ひ立ち、巖こゝら聳えて、道いとさかしともさかしく、かしこかる世の經がたきためしにいひけむ、から歌のこゝろこそおぼゆれ。又とほく見やらるゝは、あるかなきかに雲霧たちまよひて、群れゆく鳥の翅も末たゞきえ〴〵なるに、夕日ほのかににほへり。いにしへの書に眉引のごとしといひけむは、只かくぞと先づおもひ出でぬ。水のながれ一すぢ、その源をとむるに、幾千里の遠ともわかたず、又その落ちゆく末をのぞめば、いづこをはかとも知りがたし。その八十瀬のくまには、眞砂いと清らに、さゝら波よる渚あり、また岩うつ波高くたちて、おと聞くばかりなるに、舟いたくさしわつらへるあり、また岸のまに〳〵いりまがりて、水よどみて深きは、そこひも知らぬ淵なるべし。さて水をへだてゝ麓のかたに、大きなる屋ども甍をつらね、こと〴〵しき門おしひらきて、前には石をはしとせり、また水のこなたには、あやしき萱屋たち竝びて、おどろなる垣根ゆひわたせり。又こゝにかしこに人あり、あるは馬に乘れるも、あるはかちより行くも、あるは薪おへるも、あるは釣の竿もたるも、立ちたるも、居たるも、老いたるも、若きも、そのさまいひもつくし難し。まして木草何くれの物は、かぞへもあへむかは。かく遠じろき山川のすがたを、たゞ一ひらの紙のうちに、こまやかに心しらひしたるは、世になき筆の跡とぞいふべき。たゞかく珍らかなるを、いづくの國、いづれの所を、いつの世いかなる人のうつし置きけるなりとも知られぬこそをしけれ。これにむかへば、あからめもせず、うちまもられて、飽く世なけれど、さはいへ久しく止むべきならねばとて、そのおほよそをしるし置きて、返しやりつ。

二月ばかり山里の梅をめづる記

大伴の宿禰のぬし、今は塵の世のけがしきをのがれ、其の遠つおやなる、筑紫のみ

こともちの古をしのび出でゝ、もゝちゞの梅を砌にねこじうつし、そをもて清き心の友となむなしける。こゝにわがおもふともがき相ともなひつゝ、その花のさかりをもすぐさじ、世の外の春をも見むとて、ふりはへてとふことあり。頃はきさらぎの十日あまりなるに、かの見ゆる岡べの雪は、猶きえのこりながら、うちかすむ森の梢どもは、春の光うちわたりて、そこはかとなく聞ゆる鶯の聲も、人くといふにはあらで、我を呼ぶなるこゝちのすめるは、こゝろゆく夕べなり。所は東の比叡のふもとなれば、世ばなれてかごかに住ひなしたり。松のとぼそ萱の軒ども、いとことそぎたるに、おのづからなる竹むらをまがきに結ひわたして、堰きいるゝ水の流いさぎよく、石のたゝずまひことさらならずしなして、庭のつらいと廣らなるに、植ゑそへたる千本の陰は、色に香にとりならべて、露をねたみ霞にきほへるけはひ、この世のものとしもおぼえずなむある。かくてこそうき世をそむきはてぬるかひありけれとて、人々めでくつがへりつゝ、花のもとにまとゐすれば、あるじは酒さかなとりまかなひ、かはらけとりあげて、

　梅見にととはれもするか大伴の
　むかしおぼゆる宿ならなくに

とによび出でたるを、とりあへず一人が、

大伴の名も香ぐはしきやどの梅むかしの春をわすれやはする

かはらけたび〳〵めぐるほどに、月はれやかにさしのぼりて、木陰もくまなく見ゆるに、吹くとしもあらぬ下風ににほひみちたるは、醉をすゝむるばかりなるが、いはんかたなし。人々みなあざれあひて、あるは遣水に口うちそゝぎて、のみての後はとうたひ、あるは苔のむしろにおりゐて、雪をあざむくとくちずさび出づるもあり。また物の音吹きならしたるは、花にうしろめたき調の名なるも、をりにあひたる心々、いづれをかしからぬはあらざりけり。いでやかくあそびの道のたのしかるも、世のほだしなき人こそはとて、あるじのほこり顔なるを、花の心もしか思ふらむとぞおぼゆる。されば今宵のありさまをしも、けふ來ぬ友にもかたらまし、また後のおもひ出ぐさにもとて、月の光をともし火にて、かつ〳〵ものに書いつく。

山里に花を見る記

一夜のたびねは猶あかぬものから、散り散らずとか待つらむ人もあめれば、けふはたちかへらむとするを、花のたよりならでは、又かゝる人めをも見じなど、あるじは止めまほしげなれど、鶯に身をあひかへばとて、わかれにけり。柴だちた

る空のけはひうちくもりて、昨日はくまなく見わたされし梢どもも、霞のまよひおぼつかなく、なか／＼にふりすてがたきあしたなり。やゝおり來るまゝに、山ぎはあかり行きて、やう／＼さしのぼる日影に見やれば、小柴垣、萱が軒端は、そこといちじるく、まして立ちならぶ梢の雲は、いよゝ手にとるばかりなれば、ただかへり見がちなるに、風すこしうち吹きてそこはかとなく散り來なるが、見るがうちに道もはだれになりもてゆけば、あな心づくしの山ざくらよとて、人々おりゐぬ。

　ふりすてし人をとゞむる山櫻散るをも
　　花のなさけとぞ見る

山風にまかせなはてそさくら花夢に見
　しさへ散るはうかりき

とばかりやすらふほどに、峯より童がおり來るあり、なかば散りたる枝に文をさしたるをもて來て、都の人は猶こゝにこそおはしけれ、これをとて出すを、とりて見れば、

　花さそふ風はうらみじ散らぬ間を見す
　　てゝかへる人もある世に

とあるは、都までいひおこす使なるべし。とりあへず、

　またもとてちぎり置きしを山ざくら風
　　をかごとに待たじとやする

やがて懷なる硯とうでて、その童が袖にかきつけてやりつ。花にひかるゝ心のはてしなければ、なほ苔をむしろなるに、かしこより酒さかなにくれの物ども持て來て、また童していはせたるは、

　とはるゝをみ山のかひに住むやどの花
　　にうき名をおほせざらなむ

かへし、

　心から散るこそあだの名だてなれ我や
　　はきせし花のぬれぎぬ

かくはかなき事いひしらひて、人々酒たうべなどす。谷水のながれかすかにおとづれ、松の聲は遙かに響きて、散りのこる尾上の花は、猶わかれ惜みがほに匂ひ、霞をもるゝ鳥のさへづりは、さらに我をとゞむる心地のみして、うら／＼と永き春日も、今日はた晝間すぐるをだに知らざりけり。かくても斧の柄はくたしつべくなむあるや。あやなくおくる春の日數を花にのみ過ぐいなむよ、これにましたるこゝろやりはあらじ、わが世のかぎりは唯かくてのみもあらまほしきやなど、歸るそらもわすれて、われさかしらに言ひあへるは、醉をそへたる心のすさみなるべし。

　またさらに花にひと夜の宿からむ散り
　　のまがひは人もとがめじ

とぞおぼゆる。

　　春の山ぶみ

春雨そぼ降りてしめやかなるに、ひとり日ながき窓のうちに、なにくれと古き世のさうしどもとうでゝうち見るほど、しばし文机によりそひてまどろむとせしに、たちまち柴の戸うちたゝきて、帥どのの待ちかね給ふを、いかでまうで給はざなる、とく〳〵、といひさして走り行くを見れば、とのの舎人なるが、御とものつらよりふりはへておとづれけるなり。げに今日は嵯峨の山ぶみせさせ給ふなるに、歌よみの數にとて、かねて召させ給ふを、などかく忘れけむと、心もそらにて、やがてかりばかまに水干とりきて、いそぎいでつ。嵯峨野のかなたこなた見めぐらせば、山かたつける老木の松の陰に、あげばり高うはりて、幕なから引きわたしたるなむ とののおましなりける。また麓の芝生いと淸らなるに、今を盛りとにほひあひたる花の本をしめさせ給へるは、中務のみことぞ聞ゆなる。山風さと吹き來て、散りかふ花のけはひは、さながら雪をめぐらすとかいふばかりなるに、春庭花をおもしろく舞ひいでたる、うちふる袖のにほひもたゞならず、やをらこなたの御前うち過ぎてかへり入りぬるは、たとしへなくめでたしと、目とゞめられつ。殿はまちとり給ひて、あそびとくせよとのたまふ聲のしたより、わらは四人、たけだち姿ひとしきが、胡蝶のよそひうるはしく、霞のひまよりみだれ出でゝ、花のあたり飛びかひたる、えもいはずつき〴〵し。やがてそのわらは一人を召して、

いざさらばあそぶこてふにさそはれて
花の木陰にけふはくらさむ

ときこえ給へば、とりあへずこなたよりも、御かへりきこえ給ふ。

胡蝶にもわれおとらめや咲く花のあかぬ色香をしたふ心は

猶かた〴〵きそひあひて、春鶯囀、喜春樂 陵王 納蘇利など、すぎ〴〵にまはせ給ふ。けふは彼方にも此方にも、ものの上手どもをえらばせ給へれば、すべていひ知らぬ手どもをつくして、野山の木草もなびき、空行く雲をもとゞめつべくなむ有りける。さるはいとうるはしくむつび聞え給ふなるが、大かたのはかなきすさみごとには、かたみにおとらじといどみかはし給ふも、をかしき御なからひなりや。かくてみこに御酒たてまつらせ給ふ。山吹の花ながらなるをつくゑに結ひて、上にはこがねの杯をのせ、白かねの瓶子に櫻の枝をおもしろくとりよそひて、歌とくつかうまつらむものにとて、おのれに賜へり。いと心も得ねど、もてまゐりたるに、みこいと興ぜさせ給ひて、さかづきとらせ給ひぬ。おまへにはべり

瓶子とりながら、

わか櫻名におふ宮のいにしへの春おもほゆる花のさかづき

山吹のほそながに、三重の袴とりそへて賜りたるに、いともおふけなくこそおほえしか。みこよりの御つかひは、圖書助となむ聞えける。いと大きやかなるすゞりの蓋に、色こき菫をあまた植ゑて、くれなゐの絲をつがりにしたるこんるりの壺に、名だかき薫物どもを入れて、しろかねの火とり一つを添へて、その上におきたり。ふたあゐの象眼の地しきのはしに、歌をぞかゝれたる。

もろともに菫咲く野にやどりせば草の枕もうれしからまし

野をなつかしみとおもひとり給ふなるべし。この助は名高き博士なりければ、酒たうべて文つくらせ給ふ。今日の山ぶみのこゝろを、四韵の句におもしろくつくり出でたるを、その道の人々はうちかへし誦して、いたくも言へるかなとて、いみじくめであへりけり。祿どもかづけ給へば、ゑひの足どりたど〳〵しく、立ちよろぼひながらまかり出づるも、をりから罪ゆるされてをかしかりき。日影やゝ山の端ちかうなるまゝに、今はまかで音聲なるにやあらむ。左も右ももろごゑに吹き上げたるが、あまりに耳おどろくばかりおぼえたるに、ふとめさめたれば、ひねもす降りくらしたる雨の晴間なくて、軒の玉水こゑうち添へたるなりけり。さはゆめなりとおもふも、猶わすれがたくて。

花ををしむ記

つれ〴〵と降りくらしたる長雨も、やうやうはれ間おほゆるに、かゝるゆふべをたゞにやは過ぐすべき、春のゆくへをもしのばむ、花の名殘をも見ばや、いざとて、律生の門おどろかすなるは、我が相思ふ人々なりけり。さるはいづこの心ゆくかたならむといふに、かしこの御館、この御園生、此ごろのけはひ如何に見所あらむといふもあり、又なにの山里、それの河づら、猶散り殘る陰をや尋ねましなどもいふを、いでかのやむごとなききはの塵もすゑじとおきてたらむは、春風の心もたどらで、あながちに朝夕かき拂ひなどすめるが、所につけてはめやすきわざとも見ゆべけれど、かへりては情おくるゝかたやいかで無からむ、又かの世離れたるあたりは、暮れゆく春のあはれもさこそ多かめれど、霞へだつる道のそらも、いとはるかなるを、暮れかけてはなどか思ひたゝむ、さらばわれも人もあひむつばへる、羽生田のぬしの住居こそゆかしけれ、いざ給へとて、うちつらねて行くに、所せきちまたの塵は、たゞ中

垣の一重をへだてなれど、やゝおくまりてのどかなる方をしめつれば、木立ものふりて、霞のたゝずまひたゞならず、ましてあるじは古のみやびしたふ人にて、なべて世の島好てふ人の心ならひはまなばで、たゞおのづからなる山里の有様をうつしたれば、はひりの方をばさながら畑につくりなして、なづなの花など露にうち亂れたる、いとつきぐゝし。垣ねをめぐりては、田所廣くうちかへして、堰きいれたる水いと淸なるに、蛙の時知りがほに聲たてたるもをかしく、くろづたひの道かたぐゝにわかれたるには、花の木どもわざとならず植ゑわたせり。さるは夕日にもてはやされたる色香の、雨のなごりおほえて、心ありげに散り殘れる、今日こずばとぞ見えたる。あるじは待ちよろこべるけはひしるくて、年にまれなるなど口ずさみつゝ　風を待つまの木の下におりゐて打語へば、おのづからうき世に遠きこゝちせらるゝを、誰かは市の傍とは思はむ。かくて家路をさへ忘れぬべし。日入りはつれば塒にかへる鳥の音もわかれをしみ顔にきこえ、入相のこゑかすかにつたふるも、春を閉ぢむるこゝちして、夕やみの空も猶ふりすてがたしや。

かくながら花の木陰に月待ちていざもろともに散るまでは見む

おなじ題をすが子にかはりて

あはれ花の日數のはかなく過ぎ行く有様を思ふに、いとかく常なき人の世のためしこそ、あやしうよそへつべけれ。やうやうひもときそむるこずゑの猶ふゝめる方おほかめるは、おひたち行くまゝににほひ添れる人の、まだかたなりなる所ありて、さらにをさなき心ならひの殘れるやたぐふべからむ。おほかたにほころびもて行けど、猶さえかへる風の名殘おほえて、心行くばかりはゑまひ開かぬほどなるは、若々しきけはひけざやかにて、あえかに女しと見ゆるは、をかしきものから、今すこしよづきたらむふしを添へばやと思ふこころほひなるべし。散りもはじめず、咲きも殘らず、夕日にもてはやされて、霞のひまより長閑にこぼれ出でたるは、今はねびとゝのひて、あかぬ所なく、心ばへくまなくて、さしすぐいたる事なむあらぬが、猶おほどかにあてやかなるが如し。うるはしき薫は、日ごとにまさりゆけど、はやうつろふ色見えそめて、よそに過ぎ行く嵐のおとも、うしろめたうおほゆめるは、やゝさだすぎたるが、なほ今めきたる方によくもてつけて、めやすければ、心にくき所もうちそはりて、さまおくれぬたぐひなり。香もあせ色もうつろひながら、猶心きたなく

とゞまりて、暮れ行く春にもおくれまほしげに見ゆるは、あながちにとり粧ふとはすめれど、まみ口つきなどいつしかとおよずき、あしけさもそふめるを、おのが心にのみ昔忘れずして、ひとりふりがたく思ひとりたらむや、くらべつべからむ。かく人の身のあり經む世のあらましを、たゞ一時の花の上にうちながめつべきは、あはれにも、をかしうも、はかなうも、いひ知らぬわざなりや。さるは春ごとに散り行く陰を見れば、はかなきこの身の、あさましうすぐせし三十四十のこしかたをも、先づ思ひ出でられて、鏡の影のあらず口惜しうなりもていぬるも、かゞやかしさいはむ方なくぞおぼゆる。さはれ猶花の行くへよ、さながらにわが世のかぎりのしのびぐさとしもおぼゆるは、うたて如何なるちぎりとか。

うつろふを花の上とやよそに見むあだなる春を過ごしこし身に

萩をめづる記

老いてはものの興すくなき習なるに、いとゞ病がちなる身の、よろづにものうくて、たれこめてのみ日をふるを、ある人のまで來て、萩もやゝ盛りになりぬ、などか野遊見にとは思ひたゝざる、かしこの御寺、こゝの園生など、とり〲に人もあくがれ行くとぞいふなる、いざたまへ、かくてのみやはなどそゝのかせば、さすがに心は動けど、徒歩より行かむ境は、杖ひくほども遙なるべく、またあまりに人めしげからむも、むづかしかるべしといらふるを、いさや、わが誘ひまゐらするは　さるかたならず、君も知り給ふらむ、すみだ河をさかのぼることいくばくもあらで、入りぬる磯に棹さしとゞむる所なりといへば、さりけり〳〵、そは我も問ひなれたる宿ぞ、さるは人の往來のすくなきあたりにて、舟路のほどもたゞならぬをとて、ともなひ行く。舟よりおるれば、白鬚の森を左に、秋葉の社を右にて、秋の景色なか〳〵に世ばなれて見ゆるもをかし。門さし入れば、あるじ喜びて迎へ出づ。みさかなには何よけむなといふもつき〲しう、やがてあはびさだをにはあらぬ、芋ねぬなはなど、所につけたるもの調じ出でゝ、あるじしたり。酒たうべつゝうちながむるに、はたばり廣き庭を、いくむらの錦を敷きたらむやうに、植ゑわたしたるは、いと見所あり。此の萩は宮城野の種なりとぞいふ。げに花ぶさ大きやかにて、長く垂れたるは、世のつねのにほひならず。

さをしかもさそはれぬべし宮城野の秋をばこゝにうつし來にけり

あるじに盃さすとて、

いざさらば袖にほはして秋萩のひと花

ごろもきてやかへらむ

かへし、

いくたびも露分衣きてをみよなど一はなにおもひおくらむ

ある人、

花にそむ心ぞあかぬ夕かけてわれもひもとく萩のあそびは

またあるじ、

くれぬとも家路なとひそあき萩の色たる露に月やどらむ

よるの錦にはなさじと思ふあるじの心ばへも、たゝまくをしき夕べになむ。

月の宴の記

秋によりたる殿のおまへ、いろ〳〵にひもとく花の錦はさらにて、ことしは嵯峨野ちかきあたりのみさうより、さま〴〵の蟲をえり奉れるを、やがてはなたせ給へれば、ことさらに今宵の雲を待ち喜びて鳴き出でたるが、いみじさいはむかたなし。東のひさし五間を、格子とりはなち、御簾高う巻きあげて、御帳すゑたり。月はしたなきまでさし入りて、おもとに侍ふ人々は、あまりくまなきがかゞやかしさに、みじろきつゝましきまでぞ覺えける。御館の人々、今宵月めで給はむ料にとて、洲濱たてまつれり。とり〴〵月に名だたる所々の心ばへをつくり出でたるを、うへにきこしめして、いと興あるわざかな、たゞさてのみやは見む、方わけて勝負あらむこそをかしからめ、少納言のおもとやある、これことわれとて召し給ひぬ。左は大い君のかたうど、右は中の君となむ定めける。とみの事なれば、かずさし何くれの物もまうけず、たゞかたへの童ども、五人六人たちかはりて、おまへにかきいづるを、少納言待ちとりていひさだむ。このおもとは、故殿の御時よりあり經たるふる人にて、物つゝましげもなく、われは顔にさたしいふを、若き人々は、にくき者にさゞめきあへるもあり。

左。紫のむらごの絲もて脚結ひたる洲濱に、るりの海に白き砂をしきて、蜑の家どももあまたあり。歌は波打際に蘆手にかけり。

すまの浦の蜑の藻くづ火心して今宵は月にたきすてにけり

右。せんかうのあしつけたるだいに、絲してつくれる松を島にうゑて、海にのぞめる家あり。歌はしろき色紙に書きて、左のあしに結ひつく。

月ふくるをじまの蜑の苫やにも都の人をやどしてしがな

月に名だゝる浦人の心はさる事ながら、波にあらすなと言ひけむあはれさも思ひ出でらるればとて、持とせり。

左。水はとざまかうざまに流れたるに、橋八つを所々にわたして、橋のもとに秋の花どもをうゑたり。

八橋の下行く水のくもでにも月はかくれずすみわたりけり

右。里ばなれなる川づらに、所せきまで舟橋をわたして、道行く人をたゝせたり。

今宵のみさのの舟ばしとりはなし波にくまなき月を見てしが

水せく川にやどらむ影はあれど、舟ばしをも隈とおもはむこそ、こよひの心なれとて、右勝ちたり。

左。杉むらのもとに關屋を造りて、前に清水のながれあり。

逢坂の關のせきもりうちも寢ず月を淸水にとゞめてぞ見る

右。板びさしの朽ちのこりたるに、あらがきなどむぐらにとぢたるかたあり。

もりすてし不破の關屋の板びさし久しき世をも月にとはゞや

あれにし後はといひしも、今は遠きむかしなれば、いよゝ久しき世のとはまほしけれど、猶月にねぬ關守が心さぞとて、月をしみゞにと、うちかへし誦したり。

左。こがねをいさごとしたる濱に、白かねを波のかたとせり。

眞砂さへ光をそへつよる波のしらゝのはまの秋の夜の月

右。黑方侍從百和香をもて、島のかたち三つをつくれり。

名にも似ず影こそすめれをぐろ崎三つのこじまの波にてる月

月の影はあかく、所の名の白きと黑きは、めづらかなるつがひよと人々いひあへれば、おとりまさりもさだめず。

左。鏡をならべて川とし、波のかたをゑがきて、水のすめるこゝろとせり。

名とり川底さへ見えて澄む月にかくれもはてじ瀬々の埋木

右。山川のながれ廣く、所々に岩のかたをおほくつくりて、旅行く人あり。

立ちかへり人にも告げむ鈴鹿川八十瀬の波にやどる月影

八十瀬にうつろふ月はさぞあらむ。さはいへ埋木さへあらはれぬべき影のくまなさこそ。

左。山本の里に、はしるしたる人あり。

秋しのの里の月影すめる夜は伊駒がたけにたつ雲もなし

右。秋野のさまをつくりて、小家所々にあり。

深草や露のよすがを尋ね來て野となる

里に月やどりけり
里の名のあはれさは、いづれとわきがたかれど、左も、右も、あまりにいひふりたるとりなしやとて、次の番をまつ。

左。山松の風に吹きたわみたるかたあり。

時の間に夕ゐる雲も吹きはれて月をみせたる風越の峯

右。古宮に、上臈だつ人のあそべるかたをつくれり。

いにしへもかくや澄みけむ高圓の尾上のみやの秋の夜の月

雲吹きはらすらむは、月に心行く山の名なれど、猶宮人のむかしのしのばしさよ。

左。かなまりに水をくみて、人々見るかたあり。

かくしつゝやどりはすべし飛鳥井のみもひに月の影をうつして

右。井のもとに人たてり。老木の松などあり。

みや姫の昔しりきや山のべの御井の淸水にやどる月影

いつきの宮のふる事を、月におもひ出でたるもあはれに、また影もよしとうたふらむ、月の夜はましてさこそあらめ。いづれをかおとれりとせむ。

左。水干すがたなる男、木のもとに馬をとゞむ。

宮城野の木の下露に袖ぬれて月見に來しは都人かも

右。直衣きたる人、萩のはなを分くるかたあり。

またやみむ月澄みわたる秋風に露ふきむすぶしの萩原

雨にまさらむ下露よりも、花ににほへる袂をこそとて、右をかちとす。

左。たかき山に、木の間よりかたそぎのさま見ゆるかたあり。

朝熊や鏡のみやに照る月は神代のまゝの影にやはあらぬ

右。松の竝み立てるもとに、みたらしの水ながれて、しめなは引きはへたり。

わき出でしみなもと遠き岩淸水月もいく世か影やどすらむ

神代の光をあふぐも、岩淸水のみなもとをくむも、いづれかかしこからざらむ。

かくてつがひ終りぬれば、おまへに彈物どもまゐらす。うへには琴、大い君に箏の琴、中の君和琴、少納言琵琶つかうまつれり。また若き御達のなかに、こゑある人々をめして、伊勢の海などうたはせ給ふ。かきかへししらぶる響は、軒端の松にこたへ、をりかへしうたふ聲は、空行く雲をもとゞむべくなむあるを、久かたの月の都もかくこそと、人々いひあへり。あそびはてゝ、杯あまたたびめぐる程に、

月ははや入りかた近うなりぬ。今宵のいどみごと右一つ勝ちたれば、左がたのまけわざは、また明日の夜をとて、人々あがれぬ。

八月十五夜芳宜園にてくもる夜の月を見る記

芳宜園の月のまとゐは、年ごとのちぎりなれば、こてふにも似ぬよのさまなれど、こよひも例の人々まうで來にけり。さるは降りくらしたる雨の名殘、はれゆかむ空もおぼえず、ましてさやけき光まちいでむは、いとゞ心もとなきを、更けゆかばかくのみにはあらじを、こよひは寢で明してましなどいひつゝ、伊豫簾むなしうかゝげて、そらのみうちまもらるゝも、いとわりなしや。今宵は名におふ園生のはなも、いたづらに夜の錦にて淺茅がもとの松蟲のみ、やう／＼こゑ添はりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

はれ間なき月をいかにといひ／＼てそらながめにや今宵あかさむ

かきくらす雲間の影はうとくとも月まつ蟲よせめてかたらへ

秋の山ぶみ

都の旅居の久しうほどふるまゝに、おのづから住みなるゝこゝちのせられて、今はむつまじう語らふ人々もおほかるが中に、年比こゝろあひたる法師の、法輪にあるがもとより、秋もはやのこりすくなうなりにて侍り、山かたづけるあたりは、露霜の色もくまなう侍るを、あな心おそき主かなとそゝのかされて、時雨の雲とともにさそはれ行けば、あるじは待ちに待ちたるけはひしるくて、御堂の東のひさしかきはらひて、こゝにしばしやすらひ給へ、先づ山ぶみのまうけせむとて、わりごなにくれの物などとう出て、のゝしりあへり。いかでさはあわたゞしうは物し給ふぞ、世にかゝづらふ事もなき身にし侍れば、一日二日は猶こゝにありて、高嶺の秋のにほひも心しづかにこそたづね侍らめといへば、うたてさはなのたまひそ、山の名のあらしはたゞ時のまもうしろめたきを、あへなく夜の錦になしはて侍らば、いかにくちをしからまし、いざたまへとて伴ひいづ。しぼちの年まだ二十にはたらぬばかりなる一人、はしたなる程のわらはに、かの調じたるものなどになはせたり。けふは常の道にもよらじ、たゞ木ずゑの色をのみしるべとせむとて、木こりあけまきがふみ分けたる跡をたづねて、した照るかげをしたひ行けば、所せき木の根、いはかどなどの、いと歩み苦しきを、からうじて少し平かなるかたそばに出でぬ。こゝは木立もまばらにて、のぞみもくまなければ、苔のむ

しろにおりゐて見るに、けにも高嶺のかたは、只いくむらともなく、錦をはりたらむやうにて、日影にかゞやきあひたる、目もあやなり、麓を見やれば、大堰の河遠く流れて、はなだの布引きはへたらむやうなるに、ちりうかべる木の葉は、くれなゐのゆはたさらせるが如し、かの見ゆるむかひの山の、ことに色こきはといへば、法師のいひけらく、これなむ小倉のみねなる、ふるくは中務の親王の、かくれがしめ給へることもきこえ、またかの定家のまうち君の、きのふはうすきとよみ給ひけむも、かしこには侍れど、今はいづれも其の跡とてはさだかにはえ知られ侍らず、又二尊院とてたふとき御寺の侍るは、法然大徳の跡とゞめ給ひけるより、今にそのなごり忘れずなどいふ。さるはあはれなる御物語にも侍るなれ、ふるき世をかたるにつけても、この流の遠きむかしをくみ侍れば、かの延喜のみかどの秋のみゆきの事こそ、をりからことにしたはしうは覺え侍れ、そのかみ名高き歌人みな御ともにまゐりて、みことのりのまに〳〵うたひ出でたる言の葉どもの、秋の錦にもおとるまじう侍りつるは、たとしへなうをかしうこそは侍りけめ、物かはり時うつろひゆき侍りぬれど、たゞこの山河のむかしにかはる世もなければ、今もめのまへに見る心ちのし侍るなどいふを、かたはらなるわらはの聞きて、このみぎはの松のいとゞし深く見ゆるは、古きみゆきの事とひけむは、此木にはあらずやなどいへば、

みゆきせしむかしの秋をいかにぞとまたも入江の松にとはばや

とうたふを、法師のきゝて、松にのみやは問はむ、みねの紅葉もこゝろありげに見ゆるをとて、

小倉山いまもみゆきを待ちがほに峯の紅葉ぞにほひことなる

といひつゝ、かはらけとうでゝ酒たうべなどす。かのしぼちも、人なみにものいはむとにやあらむ、から歌ひとつ口ずさみいでたれど、まだかたなりなるが、文字のこゑうちあはねば、こゝには書かず。かくて日影やう〳〵かたぶき行きて、夕をつぐる鐘の音はるかに聞え來れば、猶分け見まほしき方も多かれど、うちつれて御堂にかへりぬ。たゞ今日の山ぶみの猶あかぬことなどいへば、あるじの、我もさこそはおぼゆれ、あすは大井より船さしのぼせむとあれば、さらばとなせの紅葉をも見ばやなどいひて、其夜は寢ぬ。

初鴈をきく記

秋のけはひのうつろひ行くまゝに、野づらのすまひぞ言はむかたなくをかしき。そともの小田の穗なみはかつ〳〵色づき

そめて、まがきの本の小萩は、をりえがほにほころびわたれる、露のにほひ、風のおとなひ、いづれあはれを添へざるなむなかりける。さるは夕月のおもしろきを、たゞにやは過さむとて、蓬生の露うちはらふなるは、わがたまあへる人々なりけり。いよゝ高う巻けば、むら雨の名残の雲は絶間がちなるに、そこはかとなき外山のたゝずまひも、月影にもてはやされて、やうやうあらはれ行きぬ。山を望めばかすかなる月と口ずさみ出づれば、をりしも峯飛びこゆる一行のこゑさだかなるは、このふもと田に落つるなるべし。けに萩のうは露もたゞならずなどいひしらふ程に、一人がいひけらく、霞みていにし雲路のなごりなくおぼえしを、秋霧のうへに聲きゝ初むるが、よにめづらかなる事はさらにもいはじ、すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのばへ、すゞろなる心を動かしつべきくさはひ多かる中に、世をうらみては、人の心の秋をかなしみ、うきをなげきては、中空に物をおもひ、遠づまをしたふとては、玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたゞへては、此世をかりとたどるも、折にふれ、事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。いでやこよひのなぐさめに、このくさぐさの心によそへて、おのおのことのばへ給はむなりとあれば、澄みのぼる月影にむかひて、うそぶきいでたるは、こゝろごゝろの引くかたなるべし。

世を秋となきて過ぐなる初鴈をわが身のよそに聞きやはつべき

となむあるは、世をあぢきなく思ふかたあるにや。

むねの雲いつかは晴れむ初鴈の聲もらすべきおもひならねば

いかなる人のうへならむ。

旅衣いくたび秋をかさねまた初鴈のこゑを聞きつゝ

こは、故郷をわすれぬ人なれば、

かりがねのおくれ先だつ一つらを定めなき世のたぐひとも見む

法師めきたる口つきやと、人々いひあへり。

山ざとの紅葉を見る記

都の旅居はおのづから心のとまりて、今年もいつしかと秋をさへすぐしにけり。降りみ降らずみ定めなき雲のけはひのただならぬにも、先づ西山のをかしさ思ひ出でらるれば、はやうあひしれりける、秋篠の朝臣のやどりをとて訪ひ來ぬ。この朝臣は、いまはもゝしきのつかさ位をしぞきて、嵯峨野のおくにうき世のちりをのがれ出でて、ひとり古のうま人のみさをになむならへりける。さるはあるじ

のおのづからなる心しらひもしろく、萱が軒端はたゞかたぶくまゝなるが、板間のしのぶのみ所を得て、おどろなる垣ねは、かたへたえぐ\なるを、ゆひだに添へねば、さらに野べのけぢめなむあらぬに、なほ野分のなごりおぼえて、萩薄の心まゝに枯れふしたる、今は男鹿の路さへ絶えにけりと見ゆるも、そゞろにあはれすゝまるゝ棲なり。くやしく過ぎし昔の事どもうちかたらふほどに、あるじのいひけらく、きのふ爪木のたよりに、あげまきが一枝もて來れるを見しに、露霜の色こそくまなくなりにけれ、いざたまへとあれば、うちつれて出でぬ。山ぎはたどり行くほど、大井の川水まぢかう見わたされて、波間をくだす瀬々のいかだは、たゞ錦をつむかと目とゞめらるれば、まてこととはむなど口ずさみつゝ行くに、やがて御幸橋とかいふなるをわたれば、嵐の山はたゞ手にとるばかり近きに、入日ほのかににほひて、空さへこがるばかりなるが、山風はるかに吹きおろして、道もさりあへぬまでちり來めるは、またたぐひやはとぞおぼゆめる。かくて朝臣が唐歌によび出でたるを、そのこゝろにこたへて、

ゆくかたは紅葉をはしにわたすなり天の河原に我や來にけむ

また、むかし亭子のみかどの御舟とゞめ給ひし渚は、こゝぞといへば、

大御舟つなぐ綱手のからにしきむかしおぼえて散る紅葉かな

橋のつめよりは北に、いらか古りたる寺あるに入りていこひぬ。わたどのなど物さびて、はらふ心なき嵐の庭は、苔路も見えぬばかりなるが、たゞこがねを敷けるやうなり。これなむきゝわたる麓寺なりける。やうぐ\暮れゆけば、今宵はこのみてらにこもりて、明日なむ高嶺の雲をわくべきとて、朝臣が、

いざさらば紅葉かたしき今宵もやしらねの雲にやどはからまし

とおもふも、世すて人の心やすしや。

縣居翁の御墓にまうでゝ秋を惜む

いつしかと今日にとぢむる秋のけはひの心細きに、しぐれそめたる空のもよほし顔なるや、御墓まうでの人々袖しぼらぬはなし。紅葉もいたく散り過ぎて、菊もうつろひがちなるを、これをだにとてみ墓のもとにたむけて、まとゐなれたる苔のむしろについゐて、例のむかしの事どもしきしのびいづるに、もろき木の葉のと宣ひけむは、いつの秋にかといふもあれば、また散るを何にと、めのまへにとりなすも、をりあはれにこそ。

年ごとに秋にわかるといひぐ\ていと

ど昔やとほざかりなむとて、うちながめをれば、松の陰はやう暮れそめて、ゆふべをつぐる鐘の聲かすかに聞ゆれど、誰も猶たち去りがてなるや。

のこりの菊をめづる記

おもふ友がき多かる中に、うつせみの世をのがれいでゝ、ちまたの塵の跡たえたるかたには、たれも先づ吉田のぬしをなむ、世にこよなきものにしも、常にいひあへりける。そも／＼此のぬしのすむなるかたは、月影のすみだ川よりは西、しぐれ行く上野の岡よりは北なりけり。ここをしも金杉の里とぞいふなる。これやこの橘の陰ふむ市の大路にも遠く、又杣木きるみ山のおくのたぐひならねば、我も人も往きかひつゝ、浮雲の常なき世のさがをも忘れ、ちりひぢのけがしき心のならはしをも、おもひはらすべきすみかになむ有りける。さるは花にとひ月にならせし園生のうち、冬たつけはひいかに見所ありなむとて、まうともむらじも、おなじ心にあひいざなひてぞ訪ひ來める。をりしも時しりがほなる空のけはひ、晴れみ曇りみ定めなきに、昨日の秋の紅葉は軒の露にあらそひて夕風にみだれ、冬かたまけたる花の光は、猶まがきの霜をしのぎて、入日になむにほひける。かくて人々苦をむしろにおり居て、古をしのび、今を語らふほどに　あるじのいひけらく、わがみかどに此菊をめづることは、たひらの宮のはじめにおこりてよりこなた、雲居のはしをのぼりては、天つ星かとうたがひ、山路の露を分けては、千年ふる思ひをなしけるたぐひ、ふるごとのためし世々に多かめれど、さるはおのがどちの思ふべき事ならねば、さらにもいはじ、たゞ千種の花の後にひらきて、過ぎにし秋のなごりをとゞめ、かつは世をのがれたる人の操になずらふべき花にしあれば、朝にけにあかずあひみむ友となすべきは、此のはなにしくものなむあらざりけらしとあれば、人々このことを喜ほひて、根さへ枯れめや、年ごとにまたかくてこそあひかたらはめとて、とりどりにうそぶき出でたり。

大かたの秋におくるゝ菊の花なれもうき世をのがれてや咲く

雪をめづる記

かきかぞふ四つの時につけて、むらぎもの心をやるわざなむ多かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよろこぶ、三つのならはしこそ、世にたぐひなきすさみとはすめれ。ことさへぐから人のためしにも、しきしまの大和の國ぶりにも、たかきもいやしきもへだつる事なく、古より今にかよはして、こゝを歌によび、文にしるしてめであへるは、いづれをお

とれりとも、いづれをまされりとも、品さだむべきたぐひならぬは、もとよりあげつらふべき事ならねど、所にしたがひ、人によりて、おのがじし心の引くかたなくてやはあらむ。梓弓はるのあした、うら〳〵とひもときそむる花の心をとはむには、まづかしこの野づかさ、こゝの山里、露をしのぎ、岩ほをたどりて、名ぐはしき陰をもとめてこそ、たぐひなきにほひをも見るべけれ。おどろなる垣ほのうち、あやしき伏屋の前に、ひと木ふた木をうつし植ゑたらむは、なか〳〵に花のおもてをぞふせつべき。また眞萩さく秋のさかり、くまなき月の光は、所をわかねど、あるは高殿のすだれをからげて、千里の空をのぞみ、あるは行く河の流にうかびて、水底の影をもてあそびてこそ、心の雲もはるくべけれ。小家しみゝに立ちならび、はたばりなきはひりの庭に、うづくまり居て見むには、塵あくたけがしさも、澄み渡る光にいよゝあらはれ行きて、かへりては月うとかれとぞおぼゆめる。かゝれば月と花とは、所がらこそあはれもうちそはるめれ。さるはかたゐ翁がたぐひの、しづたまき品賤しくして、うつゆふのさくるしき住家にかきこもり居つゝ、くさづつみやもひにのみかゝづらふ身は、かの高殿の望、やかたのすさみは、いかでかおもひもかけむ。又野山の遊びも、おのづから時におくれ、をりを過して、常に心にそむくふしなむ多かめる。かれ雪ばかりは此の二つにことなり、葎にとぢたる門のうちも、たゞ一夜のからに、玉しく庭とうつろひ、あばらなる板やが軒も、時の間に白がねをはやせるばかりに、すがたをかへもて行きて、朝夕のいぶせさもさらにおぼえず。またなめなれたる市のちまたも、たちまちに景色をそへて、いひ知らぬ山里のおもひをなし、行きかふあき人の蓑笠までも見所ありと覺え、はかなき木草よろづのものも、さながらめづらかなりとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境をうつし、所をかふるとやいふべからむ。かくてこそ心にたらはぬことなく、外にうらやむべきふしもあらね。されば此雪にのみ翁が心をよするも、所にしたがひ、人によりたる、老のすさみなるはや。

琴後集巻十一

序

烹茶樵書序

水をえらみて清きながれを汲み、品を分ちて宇治山の木の芽をにることは、はやくより事このめる人のもてあそびぐさにて、今はこのわざに心いるゝ人なむ多かめる。さるは世をのがれ老を忘れむすさみは、これに如くわざあらじかし。こゝに占春ぬしの、古いまと此の事あけつらひしるされたるは、かの世にことこのめる人々、こを見て今一きはみやびたるこゝろしらひをも添へよとてなむ。年はみづのとのゐ、さみだれふる頃、平春海かいつく。

舊蹟遺聞序

國郡のあるかたち、山河もろ〳〵の跡をたづねて、書に載せられたる事は、寧樂のみかどの御時、はじめて國々におほせごとたまはりて、しるさしめ給ひ、また延長の御時、ふたゝび其の事おこさせ給ひて さらにしるし添へさせ給ひつれば、六十あまりの國々のふるき跡ども、もらさず傳へ來にけるを、時うつり世へだゝりて、今はその書どももおほくは失せにけり。さてたま〳〵に散り殘れるが有るも、わづかにひと國ふた國にはすぎず。かゝれば、今にありて古へのくにこほりの大方を見るべきものは、たゞ民部の式、神名の帳、順朝臣の和名、東山のおとゞの拾芥のたぐひのみあり。されどこのくさ〳〵の書どもは、國をかぞへ郡をつらねたるのみにて、古の跡を考ふるには猶こと足らはず。しかるを四方の海なみ風をさまれる事二百年、おのづからよろづの事、其の道々に心ふかむる人々いでまうで來て、今はくに〴〵にふるき跡を考へあつめたる書ども、こゝにかしこにやう〳〵おほく聞えたり。みちのくには、仙臺の佐々木義和が聞老の志といふありて、くはしくとひ、廣くあつめたれど、をしきかな、其の君の知り給ふさかひにはくはしくて、あだしかたにはなほ漏したる事もおほかりき。こゝに盛岡の君は、その遠つ御祖の御時より、其の國しろしめす事今にいたり六百年、世をかさね給ふ事三十あまり六世繼になむおはすなる。さるは古の事をもわすれじ、又すたれたることをもおこさしめ給はむとて、よろづ思しいたらぬ方なくまつりごち給ふあまりに、このふるき跡の事どもしるせる書の、猶そなはらぬをあかずおもほしとりて、おもとにさぶらふ人々のなかに、其の事にたへたるをえらせ給ひ

て、その書つくらせたまふ。其の知り給ふ所は、郡の數十といひてなほ餘あれど、いにしへの世に聞えぬ所々をばおきて、ふるき書にあらはれたるかぎりを集めさせ給ふ。名をば舊蹟遺聞となむつけられたる。その書なりて後、春海に猶かへさひ讀みて、考へしらべよとてしめしたまふを見るに、其の書のさま、もとよりふるきふみに廣くわたれる事はさらにもいはじ、かたはら國のふる人の昔がたりをさへに載せられたるは、めづらかなりといふべし。かゝるをわがみじかき心に、なに事をかはたすけいはむ。そもそもこれはしも、知り給ふ國の寶なるのみかは、あまねく世にも傳へさせ給はゞ、いにしへを考へて今を見む人、たれかたふとみめでざらむ、とくとく板にゑらせ給へとまうせば、さらば其のゆゑよし記せと宣ふまゝに、身のいやしく、詞のつたなきをも忘れて、かしこみながら、はしつかたに書きつく。文化の四とせやよひはつかなぬか。

庚子道の記序

みなかみ澄みて流るゝ河も、おち行く末となりては、やうやうあらぬ塵あくたにけがれて、つひにもとの淸き姿をうしなふ事あり。詞の道も又かくのごとし。あがれる世のみやびかなりし手ぶりも、あまたの年なみをわたりては、いつしかとさとびたるならはしこそ多くは出で來にたれ。かれ古はみなもとなり、今は末なり、その源にありては、もとめずとも、おのづからにすみ行くながれに從はむ事はやすかるべきを、後にありては、あくたを拂ひて、ことさらに淸き瀬をたづぬるわざなれば、いとかたしともかたしや。わが友淸水濱臣は、詞の學びに廣く、文つくるみやびに心ふかき人なるが、この頃たけ女が道の記を得て、おのれにかたらく、女房の日記といふもの今の世にもやむごとなき殿のあたり、おくまりたる窓のうちなどよりもれつたへたるには、心にくき方に人のおもへる類もこれかれあれど、よく見もてゆけば、これはしもとり出でゝいふべきは猶少なし。しかるを此の道の記を見るに、いたくも書きけるかな、世のかいなでのたぐひにはあらずといふを、かへさひよみて味はふれば、げにも詞のみなもとをよく汲み知りて、淸き水莖の跡をぞとゞめたる。今このなずらひをいはむには、いにしへの女房のなかにこそもとむべけれ。さるは蜻蛉、紫のにほはしき筆ずさみにもはぢず、また更科十六夜のあてなる口つきにもおとらぬは、いとこそめづらかなれ。そもそもいかなりし人のむすめぞととふに、そはくはしくも知らねど、そのかみ

よるべなき露の世をかこちて、はかなき伏屋の月にうたへる、うかれめの流なりきとなむ聞きつるはといふ。さはいへ、葎にとぢられたらむあたりに、かくまでかぐはしき花はいかでか生ひいでけむ。もしはもとのねざし賤しからぬが、世にはふれたる、玉淵がむすめのたぐひにはあらぬにや。

若桂の序

みちのくにのはてに生ひたちて、よろづのことわざわいだめなき身ながら、なりはひのよすがありて、をり／＼都へ行きかひつるを、父のをしへ給へらく、都の人はいやしき下がしもゝ、ことゝひにならひたれば、田舍人の舌だみたる口つきをば、いとめざましきものにうとみあへり、かく賤しき身の、かたちよそひなどひなびたるは、もとよりとりつくろふよしもあらねど、せめてことばのよこなまりをば改めなむ、人わらへなること多きは、世のまじらひまばゆきわざなりとぞ宣ひける。此のことを常に思へば、いかで詞の道知らむたつきもとてもとむれど、かくいやしき商人の身にしあれば、誰によりてか問ひあきらむべき。さるを過ぎにし頃、難波の市にたちまじりつるに、いとふるくすゝけたる經文のうらに、おいさらぼへる法師の手して、何くれと書いつけたるものを、ゆくりなく得つるを、くりかへし見れば、いにしへのかなのあとあることをときしるせるが、いと心ゆくことのおほかれば、これになれもてゆくまゝに、やゝ言葉のゆゑよしをばわきまへにけり。また楫取のうらの海士が家につたへたるとて、人のもとより得つるあり。こも彼のなにはの法師がことによりて、さらにおほくいにしへの書どもを考へ添へつれば、そもおなじすぢのたすけとなる事ぞおほかりける。かくて年月にこの事を思ひめぐらすに、この二くさのふみのうへにも、猶いかにぞや覺ゆる事のあるを、これ考へきはめばやとおもへど、もとよりおのがかどなきのみかは、かくひなの末には、さるべきふみどもも乏しく、かつ窓の灯をだにかゝげあへぬ身の、のどかならぬ月日をのみおくれば、いかでかさる事をえむ。こゝに去年の冬、荷前のよぼろにめされて、都にのぼりぬるに、あひ知れるゆかりの有りけるが、ことしはこゝにて春をもむかへよとあれば、さらば花のをり過ぐしてと思ふほどに、卯月にもなりにけり。けふはとりの日なりとて、まつり見にいざなはれ行きしに、物見車のあまたおがれ行くが中に、いとわかやかなる桂の枝に、ちひさき草子をむすびつけたるを、簾のつまよりとりおとしつるに、かたはらの随身だつ人

もえ知らで、めもふれず行くを、やをらたちよりて、とりかくして歸りぬ。こは氏人のものせるを、やむごとなきあたりへまゐらせたるにて、いにしへの假字のことども記せるふみになむありける。これはしも都の人の心いたれるが上にて、誤をしも正しつれば、かの難波田舍の法師がたぐひにもあらじ、また楫取のあまがさへづりにぞまさりぬべき、さらばわが年月うたがひ思ひけることもはるけなむ、まだわけも見ぬ言葉の林のおくをも知らるべし、これなむあたひなき寶とおもへば、いとうれしくて、あづまにもてくだりて、いとまあるをりをりくはしく見るに、世にははじめ思ひかけしには似ず、見おとりするものこそあなれ。そのふみもはら難波の法師によれると見えて、法師がいひけることは、いにしへのあと有るも、また古によりどころなきをも、すべてあげたり。こはいかなるゆゑにかあらむ、ことのえらみなきこそ心得ね。法師がいへることとて、いかでか誤なからむ。また楫取のあまがしるせることをも、おほくとりたれど、海士が名をばはじめよりかくしていはず。都人の身にては、あまがこと葉をまねび出でむは、恥なりと思ひけるか。さらば其の事を取らでもありぬべきものを、其の事をよしと思はむに、その名をいみかくすべき事かは。學の道はおほやけなるものとこそ聞け、かく心にうへうらを置くべしや。すべてふみ一くさをつくり出でむには、おのがひとり思ひ得たるふしありて、人のたすけともなりぬべきすぢあらば、なしてもありなむ。はかばかしき心もあらで、たゞ人のいへることをのみ拾ひあつめつゝ、おのが思ひ得たらむさまにいひなさむは、いとしなおくれたるわざなり。なまなまなるうひまなびの人は、ことのゆゑよしをもよく知らねば、いちはやきわざなりとも思ひぬべし。されどこゝろある人の見ば、おのづからあなづりおとしむべき業にこそあなれ。あはれ都人は、かくはかなきわざをもするものよとむねつぶれて、寶えたりとおもひけるぞくちをしき。かくて爪木の道も雪に絶えもて行くまゝに、かきこもりてのみをれば、いとつれづれなるを、心しる人のひとりふたりまで來て、ほだの火のもとにより添ひつゝ物がたりするに、此のふみをとう出て、其のたがへる事どもぬきでつゝ、とりならべあげつらふを、父のかたはらよりきゝて、よしなの事や、をこの人々かな、さがにくきもののいひならへとはいさめぬものをとて、さいなみたまへば、猶あげつらふべきをも言ひさしてやみつ。やがてかたはらなる一人が、其のさ

うしの上に、
いかでかくまたきをりけむ若桂もみづる秋を待たましものを

東歌の序

いはまくもゆゝしき二荒の宮の大神、天の下むけ平らけ給ひて、まつろはぬ國もなく、まう來ぬえびすもあらず、おほみいつくしみ至らぬくまなむ無かりしより、うま人はから衣ひもときさけて、玉のうてなの宴に飽き、民くさは高瓶のかしこき響をわすれて、八十のちまたにうたひ、おのがじしたのしかる月日をよろこび、のどかなる春秋を送り迎へざるなむ有らざりける。かくて大御世は、春の花のさかりに匂ふがごとく、松の葉のときはに榮ゆくまゝに、おのづから千世のふるみち古りぬることもおこり、かくれ沼のかくれたるあともあらはれて、言の葉の道も明星のあかりゆきつゝ、くもり夜のくもらはしき方もあらずなむなりにける。さるは官位高き上の品のあたりにこそ、もとより世にすぐれたる人々もあまたおはして、その名とり〴〵聞えにたれど、しづたまき賤しき我がともがらの、たやすくまねびいづべきならねば、今こゝにとり出でゝいふべくもあらず。たゞこの下のきざみにも、青淵のそこひふかき心をしめて、いはがねのかしこきかどある人々、これかれ出で來にけり。これをあがりたる世にくらべ見るに、猶今をすぐれたりと覺ゆるたぐひなむありける。それがなかに、おしてるや難波の圓珠の庵のひじり、つぎねふ山城の稻荷の山のはふりこそ、其の名をちこちにしも聞えにたれ。この二人のをしへ世に廣まりてより、歌の學びいにしへにたちかへりぬれば、あがりたる世をしたへる歌人もおほく出で來にけり。しかはあれど、得たるところ得ぬところたがひにしもありて、學びのちからたけたるは、かへりて歌の心におくれ、うたよむ方に心引きたるは、なか〱にまなびのわざおろそかにて、これをかね得たるなむ稀なりける。さるをこの二つをかねて、世にもすぐれ、人もゆるしたるは、縣居の大人、在滿の宿禰、さては橘の翁なむありける。この三人のぬしたち、其の學びのこゝろは等しきものから、歌の手ぶりはおもひうるかた殊にて、心々にぞ有りけらし。かれ大人は、尾上の松の雲をしのぎて、めも及びがたき古の高きすがたをたふとみ、宿禰は、秋の野にあやおる花のにしきの、こまやかなる中頃のたくみをよろこび、翁は絲竹のことさらにまうけたるこゑにはあらで、百鳥の音の、おのづからなるしらべをこのみて、たゞに眞心よりよみ出でたれば、いにしへにもよらず、後にも

つかず、われと一つのすがたをなむなせりける。いでやこの人々はしも、身は品くだりたれども、心は青雲の高きを占めたれば、くだち行かむ世にも、其の名かくれざらむ事しるし。されば今よりいく百とせを經とも、かくまさかりなるその世の手ぶりをおもひ見るべきくさはひにもひき出でつべくなむ覺ゆるは、めづらかなりとこそいふべけれ。しかるを、大人と宿禰とは、其歌もふみもはやく世につたへたるを、なほこの翁のみ、世にあらはれざりしが、あかぬわざになむありしを、翁のまなご芳宜園のあるじ、こたび思ひおこして、東歌六卷を板にゑりなむとす。こは翁のみづからえり出でおけるなりとぞ。これよりしも翁の言の葉廣くつたはりて、かの二人とひとしく、かぐはしき其の名のいやましにあらはれ行かむ事は、よろこばしきわざになむ。

翁はじめ名を爲直といひけるが、後に枝直となむあらためける。其のとほつ親をたづぬるに、古曾部の入道能因がむまご加藤五判官景貞といひけるは、伊勢の國になむ住みける。それより十つぎにあたりて、彈正景光といへるは、北畠の家の家司となりて、飯高の郡に住みけり。景光より七世、景之といへるが時に、北畠の家はほろびにたり。かくて後景之は世にかくれて、伊勢寺といふ所になむこもり居ける。景之がむまご、重攻にいたりて、出でゝ紀の殿につかうまつりぬ。翁はこの重政より四つぎの後にて、若かりし時に江戸に來りて、町のつかさの下司にめされにけり。よはひは九十あまり四にて、天明の五とせ八月になむ身まかりける。さて其家故ありて、中頃より藤原をなのり來つるを、さらにもとつ氏にたちかへりて、橘を用ふることは、翁よりとなむ聞えし。享和のはじめの年。

齊明記童謡序

むかし荷田宿禰の大人、古言のまなびのこと世にことたてそめて、いにしへの書らにときえがたき事どものあるを、其の眞心にはじめておもひあきらめられたるふし多かるが中に、このわざうたの考をば、ことにめづらかなりとみづから思ひほこりて、こをばたやすく人にもいはじ、いにしへの學びに心深からむ人の出で來むを待ちて傳ふべしとて、こゝろに祕めおかれつるを、よはひの末にいたりて、加茂の翁が、よろづきはことにすぐれたる事を、こゝろみ知りて、今はこを傳へむ人はいまし一人にこそあれ、いましこそつひに學びの年月つもりなば、我がおもひ得たるがごとくに、よみうべき人なれとて、翁になむ、口づからつたへたまひにけるとぞ。さるはその荷田の家にも

つたへず、たゞ一人にのみこゝろざして、傳へたうべる事なればとて、翁も又ふかく心につゝみて、さらにもらされずなむ有りけるを、年六十におほく過ぎ給ひて後、おのが父にむかひてのたまひけらく、このわざうたのこと、今なむいましにつたふべき、こは荷田の大人のみたまのとどまれるものぞ、おろそかになな思ひそとて、手づから一巻にしるしてたまはりぬ。そはうみの子のつぎ／＼にも傳へもてゆかむことを、おぼしおきて給へるになむ有りける。さてとし月へぬるに、おのが父も兄も、翁にさきだちて亡せにければ翁うちなげきて、わが後をこそたのむべかりし人々なるにとて、いたくをしまれつるが、身まかり給ひなむとする際にいたりて、春海を病の床ちかく召して宣ふ事は、かのわざ歌の傳へよ、いましが父につたへたる心ざしをわすれず、ながく家に傳へよとぞ宣ひける。其のかみ春海おもひけるは、かく年わかくこゝろつたなき身にて、おのれのみこを傳へもたらむことは、いとやすからぬわざなり、ちゝのいまさばこそあらめ、いかで私のたからとなすべきわざならむとおもひ定めて、橘千蔭、藤原宇馬伎、尾張黒生等にひらき見せて、ぬしたちこそよはひもたちまさり、物のこゝろもいたりふかけれ、このひめごとは、ぬしたちの傳へ給はむものなりとて、ゆづりいひければ、いかでかさることあらむ、こはそこの家さかえ、うからやから廣ければ、末が末にも絶えせざらむことを、思ひはかられたるにこそあれ、翁のこゝろにはそむくべからずとて、三人の人さらにうけひかずなむありし。かくてあまたの春秋をおくりむかふるまゝに、美樹黒生は世にあらずなり、千蔭はよはひすでにたかく、春海は家おとろへ行き、うからやからも多くうせて、今は世にたゞよはしき身の、かゝるもの傳へむ子だにはたあらねば、ゆくりなくゆふべの露にさきだたましかば、このつたへのこといかにかなり行きなむ、かつは學びの道はおほやけなるこそよけれ、今にありては世に廣く傳へむことこそ、かへりて宿禰と、翁との心にそむかぬわざなめれと思へば、すなはち千蔭にはかりて、翁の手づからしるしおかれたるを、そのまゝ板にゑりぬ。あなかしこ、こを見む人、さばかりひめ傳へたることを、みだりに世に廣むるは心輕しやなど、うたがひおもふことなかれ。

享和のはじめのとしもつき。

契沖法師富士百首の序

この契沖法師の富士百首は、さきに片山誠之がもたりける時に、おのれうつしとりて板にゑりたるになむ。さるを今は観

阿のぬしが家にぞをさめたる。法師のこの百首をかゝれたるが世にのこれるは、難波の若山滋古がもたると、此の巻と二つなり。わか山が巻は、文字おほきやかにて、すがたうるはしく、にほひおほし。この巻は文字ちひさくして、筆すみていにしへぶりなり。今おもふに、この巻のかたは、よはひの末にかゝれたるにやあらむ。

厚顏抄補正序

おほよそ、うつしみの世にありとある人、をりにふれことに遇ひて、心におもふ事あらざるはなし。其のおもふ事ひたぶるなる時は、あながちに心につゝみもてあらむ事を得ず。その心につゝみ得ぬ時は、かならず聲にたてゝなげく。そのなげくにつけては、やがて言に出でゝうたふ。そのうたふ時は、詞にあやあり、心にことわりあり。これをしもぞ歌とはいふなる。此の歌天地のわかれそめにし時、皇神の口づからとなへはじめ給ひけるよりおこりて、いくちよろづの世のすゑが末にも、なべて上なかしもの人、これをもて心をやらざるはなし。さるはうらうへなきひとへ心に、うちおもふがまゝのまことを、たゞ言ひ出づるわざなれば、かしこき神をもなごしつべく、おろかなる人をもこしらふべし。またこれを世につたへて、長くいひつぐ時は、はるかなる千年の下に有りながら、あがれる世の人の心をも詞をもくまなく知り、さやかに見む事、今の現にことなることなし。さはた世をまつりごち、人ををさむるたすけともなどかならざらむ。これぞこの言魂のたすくる國のくにぶりのあやにたふとむべく、もともめでつべき故なりける。かゝればわがいにしへの學は、この歌をまなぶよりむねとすべきわざはあらずなむ。しかあるを、藤原寧樂宮の御時よりこなたなる歌は、世々にえらびあつめられたる集ども絶えせざれば、おぼつかなき事なし。たゞいとも上つ世なるは、もはらと書きつめたるものも聞えず、たま〳〵にやまとぶみに、もゝちはたあまり七つ古ことぶみに、もゝちあまり七つをなむ載せられたる。これはしもこの歌のみなもとなるを、ながれての世にこの道に名高き人々、いかでこゝに心をば用ひざりけむ。其の日本紀なるは、弘仁の御時より後、世々の博士たちのかうせちありしかど、今は卜部宿禰が釋に引出でたるにのみかつ〴〵のこり、又古ことぶみなるは、これを說きしるせし人、はやくより世にひとりだに有りきとも聞えず かくなほざりにのみ過ぎもて來ぬるを、水戸中納言の君、ふかくうれたき事におもほしとりて、難波の契沖法師はこ

の學びにすぐれたればとて、先づやまとぶみの歌をしも拔き出でさせ給ひて、とき記さしめ給ひければ、おほせごとのまにまに、更に古事記なるをさへにあはせときて、厚顏抄三卷をつくりてなむ奉りける。此の上つ世の歌どもの注釋、かくそなはれる事は、これを始めなりとこそいふべけれ。あはれ中納言の君の此の道にまめなる、又法師がまなびのくはしき、遠く古の人にもまさりにけり。こゝにおなじ難波の里人、若山滋古は、かの法師におくるゝこと、百年にあまりて、まさに今世になずらひなき物しり人なるが、古の學びに心をふかむるまゝに、かの法師が注釋めでたしとはいへども、猶あかぬ事のおほかるを惜みて、このちかき世にまなびの名聞えたる人々の、これかれ考へいへる事どもの有るを、廣く問ひあまねくあつめて、よきをばひろひ惡きをば捨て、足らはぬを補ひ、ひがめるを正して、更に補正と名づけて、法師が注釋をしも全からしむ。此のふみひと度世におこなはれましかば、古の學びにこゝろざしあらむ人、たれかこのぬしのいさをしさを、うむかしみてたふとまざらむ。さは言へど、こゝに人ありて、今の世にのみかゝづらひつゝ、われはたゞ月にあざけり、風にうそむきてあらば、事足りぬべしといひて、いにしへ今をかよはし見むものとも思ひたらずあらむは、又さるかたにおもふ所ありぬべければ、それはわが言くはふべきわざにはあらずなむ。文化といふとしの二とせ、九月とをかいつか。

橘千蔭古今集序墨帖序

假名の出で來しはじめは、草の手のいとなだらかなるよりうつりて、つひに一つのすがたとこそなりにけれ。さるはあがりたる世には聞えざりしを、今の都となりてぞ、もはらとはなり來にたる。その筆の跡の今の世に傳へたるは、貫之のぬし、道風の朝臣などをこそ、ふるしともふるしとは言ふめれ、これより後なるは、とり〴〵におほくつたはり、そのすがたもさま〴〵になむ有りける。其の代々のあとの殘れるを見るに、下りたるほどのは、おのづからあらぬふしも出で來て、いやしげにもなりもて來にしを、花山、一條の御時より上つかなるこそ、なほ鳥の跡の本つ心をうしなはずして、のどかに高き心ばへ有りけれ。わが友橘のをぢは、筆とるわざに名高かる人にて、よく古のかんなのさまをしも得にけり。今この古今集の序を書けるを見るに、かののどかに高き心ばへのおほゆるは、めづらかなりとぞいふべき。此の卷を見む人、古のみやびを知らば、よくその心を思ひうべ

きになむ。

山づと序

長月の末つかた、玉河ちかきあたりの山寺に、はやうあひ知りたるひじりの有るをとぶらひしに、老いたる法師のひとり柴折りくべつゝ、かまどのもとにあるが、わが師はこの頃鎌倉のなにがし寺に、法のわざつとむることの有りて、まかりぬとなむいふ。をりしも秋の日のかたぶきやすきに、たち歸らむそらもなきを、こよひは一夜やどりて、明日なむかへり給ふべき、日も暮れぬなりとて、さすがに老法師のなさけ有るもうれしければ、さらばとて、阿伽棚のかたはらによりふしぬ。みねの松風はるかにひゞきて、まがきが本の蟲の音かれ／＼なるに、所がら心すみわたりて、うちも寐られず。かくては此のながき夜をいかにしてか明さむ、なにゝまれ開き見て、つれ／＼なぐさむべきものや侍るといへば、文どのの塵かき拂ひて、四巻いつまき取り出でたり。何ならむとて見れば、義疏とかいひて、大乘の道々しき注釋なりけり。かくひじりだちたるは心も得ず、世の常のかんなの草子、うた物語などや侍ると問へば、かんなに書きたるも、みな內典のかたならぬは侍らず、たゞし四天王のつくり置き給へる御歌なども侍り、これは世にまれなりとかうけ給はるを、見給ひつやといふ。いさやしり侍らず、そはいとことごとしき歌人にも侍るかな、いで見せ給へといへば、また文殿のうちよりさがし出でたるを見るに、かの世にいひもてはやす、四人の法師たちの集にて、なにのめづらしげもなし。さるは法師のおいしれて、物のわいだめなきもうちゑまるれど、またこれだにあらずば、何をかつれづれの友にはなすべきとて、みあかしのほかげほのかに漏り來るにむかひて、しづかにあぢはひつゝ見るに、すべて時世のならはしに引かれて、品くだれる歌どものおほかるはさらなれど、さはいへ、誰も其の一ふしよみ得たりとおぼゆる歌は、又心しらひあたらしく、しらべはたなだらかに聞ゆるがありて、いと心ゆくもあれば、其のよきをばえりもて出でつつ、小硯の筆して、なにくれと書いつくるに、沙をわかちて、黄金もとむる心地のするもをかしくて、夜の更くるもおぼえず。あかつきの鐘におどろきて、筆さしはなちて見れば、かく二巻をなむ拾ひ得たる。おのが若かりし程には、かゝる集どもをばおしこめて、末の世の手ぶりにて、見所あらじとのみあなづりおもひて、心もとゞめざりしを、今思へば、なか／＼にをこなるわざになむ有りける。そも／＼もろこし人の古言に、名高う聞

ゆるあたりにむなしき人なしといへるはけにまことなりけりとぞ、此の歌どもを見るにつけても、おもひ知られける。文化の三とせの秋。

あやむしろの序

高市直節にかはり書ける、
一名折柳集と云ふ

やよひの十日あまり、梅園院のひむがしいはんかたなし。名に高き老木の陰は、はやく散り過ぎたるに、ひもときそめたる櫻が本は、今ぞ時得がほなる。東のひさしはりうびんのたゝみ敷きわたして、わかれ惜む人々の座とし、北のはなちいでには、伊豫簾なからばかりかゝげ、あじろの屛風立てわたして、女房の座とす母屋のはしらのもとに、黑木の二階の厨子一雙をたてゝ、うへには例の火とりなどはなくて、ぬさをさま〳〵のかたちに造りて、花の枝につけたり。下にはしろき色紙に、雲がたのたむざくあまたかさね、けうさんして、硯のふたに載せたり。おばしまの下なる花がめに、おほきやかなる柳の枝をさして、その絲をわがねたるは、けふの心ばへなるべし。かくて誰をあるじともなく、歌は心々に誦して、講師などもなし。入相のかね霞を漏れ來て、夕づく日ほのかなる頃、さかづきずんながれてやみぬ。ふみ書ける人九人、長うた九つ、旋頭歌一つ、短うた三十あまりなむありける。寛政六年彌生。

行かひぶりの序

人のことわざ多かる中に、しなわかるゝものは、手かく業になむ有りける。そがなかに、先づうち見てけぢめいちじるきものは、ゆきかひぶみの書きざまなりけり。はかなき筆のすさみに、あやしくも、あてにも、いやしくも、見ゆめるものにしあれば、いとつゝましきわざなりや。さはたあまれるも足らぬも、その心の淺きと深きによりてしもぞことなる。さるはあまりに心をこめて、こと葉のかみしもひとしく、よみ出でたる歌をも、わざとはなち書きたらむは、なか〳〵に見おとりするわざになむ有るべき。そもまたおのがかどありがほにて、あはつけくはしり書きしたるも、かへりては心おくれてこそ見えめ。有るか無きかに消え〳〵なるは、おほつかなくても止みぬべきを、文字づよにまんながちならむこそ、女のともには似げなきわざなれ。たゞいたり深ききはの人は、おのづから心のみやびより出でゝ、筆のまに〳〵捨て書いたるにも、猶見どころぞ多かめる。こゝに橘の千蔭のぬしに、ものまなべる女あり、消息ぶみのさま見しらむためとて、ふるき物語共よりぬきでゝ書きつめおけるを、又手かく本にもとて、このぬしになむ、

書きてよとてもとめけるを、先づこの紫のものがたりなるをのみ書きて、あたへられつ。さるをこたび板にゑりたるなり。こは小簾の内なるどちのためにもとて、なすになむありけらし。この主はしも、ことばの林のおくをもわけ、鳥の跡のふるきためしをもよくわきまへ知れゝば、かゝるすさみも、古のみやびにこそかなひぬべけれ。されどおほよそ人のまねび出でむには、よしやあしや、はた見む人のこゝろ〴〵になむあるべき。

箏曲新譜序

今の世に人のもてあそぶめる、つくしごとの曲といふなるものは、いづれの時よりかおこりけむ、さだかに知りがたかれど、其の道の人のいひつたへたるは、大永の頃とかや、筑後のくに善導寺に住みける僧の、あるやむごとなき家にひめ給へるを、學び得たりしより、世には傳へけるとぞ。さて肥後の國の人、賢順といひけるをのこ、その善導寺の僧に學びて、その國の慶光寺の僧玄恕に傳へ、玄恕これを善導寺の僧法水につたへにけり。世に此の道の親とすなる、八橋檢校といへる法師は、そのわかゝりし時、此の玄恕と法水とに學びけるが、年經て慶安の頃にいたりて、更に考へしらべて、表裏中奥の品を定めてなむ、はじめて十三曲とはなしける。これより後、北島、倉橋、安村、三橋、久村、石塚などいへる法師たち、皆この業にすぐれたる人々にて、とり〴〵にあらたなる曲をもつくりけり。その曲の詞ども書きあつめたるもの、今は世にこれかれあれど、猶漏れたるも多かれば、こたび豐高法師、ことさらにその遺れるを拾ひて、あらたに板にはゑりたるなり。此の法師はこの道に名高かるすき人なるが、ことのあらまし記してよとあれば、いさゝかうちきゝたるまにまにこゝに書きつく。

萬葉集後讀記序

寛政のはじめつかた、信夫道別、安田躬弦などと共に、芳宜園につどひて、萬葉集かうがへよむ事ありき。さるは此の集のまなびする人、今は世におほく出で來て、さま〴〵にあげつらひいふめるが、いとよく思ひ得て、めづらかなりとおほゆるふしもあれど、又ことざまにひがみもて行きて、あらぬかたにながれたるたぐひもありて、一かたならぬを、千蔭がおもひけるは、いかでこのさま〴〵に言ふなるを、考へさだめて、初まなびの人の、道しるべにもせまほしきをとて、あひともによしあし定めいひて、かたみに得たる所得ぬ所をあげつらふ事とはなりぬ。さて三年ばかりを經て、よみをはりたる後に　千蔭筆とりて略解をばしるし

たりき。そも〳〵略解のおほむねは、ただことずくなにして、歌の心をのみさとじやすからむ事を思ひたれば、事ながきあげつらひどもは、みな代匠記、萬葉考などにゆづりて、引き出づべきことをも載せず、しるすべきふしをも漏したる類多し。さはいへど、縣居の翁のいはれたることをむねと立てゝ、ちかき頃の人の考どもをも廣くとりて、世にうごくまじき說をえらびあげたれば、此の集一わたり心得むには、かくて足れりともいひつべし。もしひろく此の集のおもむきを知らむとおもはむ人は、この略解を本となして、もろ〳〵の注釋をもまじへ考へなば、おのづからおもひ得る事もありなむかし。そは其の人の心にこそ。こゝにわがふせ庵をとひ來る人々、この頃此の集よまむ事をもとむれば、先づ略解をとりて、其の說に從ひて讀みもて行くに、むかしよしとて定めいへることにも、そはいかにぞ覺ゆるふしなきにしもあらず。又まれにはわろかむなりとて捨てつる說にも、引き出でつべきたぐひもあり。又あらたに思ひうることどももいでまうでくれば、其のふし〴〵いさゝかしるし置きて、またこの後、かへさひ讀みなむ時のたすけにもとてなむ。享和の三とせ八月。

かた絲の序

あるやむごとなき御前に、歌の事などまうしけるに、てにをはのとゝのへはいかが心得べきと宣ふめれば、そは伊勢の國人がものせる、こと葉の玉の緖こそよけれ、是れにそのゆゑよしはつくせりとて、ひも鏡ひと卷を添へて奉りしに、御前に宣はすらく、初學のたど〳〵しき心には、なか〳〵におもひまどひて、その絲すぢをしも、得わきがたくなむ、なほかゝらで、をさな心の人にも、とく心得べからむよしあらば、記して奉れよと宣へり。そはいかゞし侍らむ、かくまでくはしくとき記せしものを、心をだに深めて見給はゞ、などか思ひわき給はざらむと聞ゆれど、猶耳うとからず數へよとせめ給ふに、詮方なくて、さらば絲口を引きかへて、見せ參らすべしとて、何くれと書きつどへて、おもと人のもとまで參らせし也。こは全くかの玉の緖のかた端なれば、名をばかた絲となづけぬ。こを見給ひて、事の心大かたに思ひわき給はゞ、更にかの玉の緖に記せることわりも、くまなく思ひとり給ふべければ、今は例少く、耳遠き類をば、すべてもとつぶみにゆづりて、皆はぶけり。たゞ口ならし給はん料にとて、なすわざになむ。

聞中上人の都にのぼり行くを送る歌の序

いにしへのから歌このめる人は、かなら

ずわが國ぶりをもよくせり。かくてくにぶりうたふ人も、又から歌の心をもよくかよはし知れゝば、春の朝、秋の夕、おなじ莚につどひて、かれ歌へば、われ答へて、かたみにあひ睦ばへること、さらに唐大和のけぢめもあらずなむ有りける。そは志をいひ、思ひをのぶるわざなること、心ふたつしもなければなり。今のから歌このめる人は、古にことなれり。かれたゞこと國のことぐさをうつしまなぶをのみ、あながちに其の心となして、わがうまれ出でたらむくにの手ぶりは、とふべきものとしも思ひたらず。かくて我が國ぶりうたふ人も、かれをはるかに思ひへだてゝ、ことさへぐからさひづりよ、われは知らでもありなむ、われはかれと道おなじからずなどいふ人も出でくめり。かゝれば相共に花にうたひ、月にうそぶくことあるも、中々に心のゆくかたはなくて、徒にうるまの島人とたちまじり居たらむ心地ぞせらるゝ。こはその同じ道なる事をわすれて、聲と形のことなるに思ひなづめばなり。世にしたがひ時にひかれて、人のならはしうつろひもて行くことは、おのづからなる理なりとはいへど、いにしへにたちかへり思へば、うたてあるわざにはあらずや。しかるを聞中大德はしも、から歌の道に心ふかゝなる事、はやく世にも聞えたるが、また大和ことの葉の林をも分けて、よくわが國ぶりをもうたひ給へり。まことや、かれになづみ、こゝにへだつる、今の世のならはしを思ひ捨てゝ、心を種とする道は、かしこもこゝも二つなきを、よく明め給ひたるなむ、世にたぐひなきわざなりける。さるは塵の外のみかは、これをもてまじはり世に廣くて、あひともなふ人おほかなれば、かくてしも古の人の、春秋月花のをりにつけつゝ、かつうたひ、かつうそぶき、志をいひ、思ひをのべて、からも大和も、へだてなきみやびごころを、今の世にありて、猶あひ見るべくなむあるは、めづらかなりとこそ言ふべけれ。こゝに大德、長月のなかばばかり、あからさまに都にのぼり行きたまひなむとするを、つねにたまあへる唐大和のうた人、おなじむしろに來あひて、馬のはなむけしつゝ、とり〴〵わかれ惜しむ心をうたひ出でたるは、彼もなく我もなき、かしこきひじりごころを、ともにしたはざるなむあらざりける。春海はた、おなじ心しりの人の列に、かずまへられたなるを、たゞにやはとて、たふとき御法のふみに見えたる、十くさのたとひの詞をかりて、更にわかれをしむ心をうたふ。

其の歌、

わかれなむ今日をうきせに結ぶあわの

消えてもの思ふわが心かな
秋風にもろき芭蕉のそれならでくだく
るものは心なりけり
行く雲のたぐひと君をいふめればしば
しとだにもいかゞ止めむ
わかるとも年なへだてそいなづまの光、
の間にも見まくほしきを
かげろふのほのかにだにもあひ見ずば
なにごこちして月日へなまし
心をし君にたぐへむものならば影とな
りてもはなれざらまし
かへり來むほどや契らむまぼろしに似
たるこの身と君はいふとも
山河とおもふ心をへだてずば夢にだに
やは君を見ざらむ
いづこにもすみうきことやなからまし
心の水にやどる月かげ
山水にひゞきかよへる琴の音をみやこ
にそれと聞く人やたれ

長背眞幸が肥の道のしり熊本の城に歸るを送る序

かけまくもかしこき、二荒の山にしづまります大神の、むかしあらぶりし世を治め、まつろはぬ人をことむけ給ひける時、百の軍の君たちが、御軍にいそしくあかき心をもて、おほやけにつかへまつりけるを、めでよろこばせ給ひて、其の君たちの爲に、郡をわかち、鄕をあはせて、ことさらに國所をさだめてなむ、そをよさし給ひにける。さるは雲かゝる山も、砥の如く平らにふみなし、とほじろき川も、帶の如くほそらにあせなむ世までも、永く其の所をしれとて、天の下に二百まりの君たちをなむ、たてたまひにける。またその君たちはや、外にはあたまもる城をつらね、うちには八十のつかさをまけて、國つ神をあがまへ、靑人草をいつくしみて、天皇のしきます國の、遠つまもりの御垣になむ有りけらし。それ上つ代の國造縣主てふは、御世つぎの書らに、その事のくはしきよしをもらして、今考へいふべくもあらねば、なずらへがたし。又かの中つ世の國つかさのくらゐひくゝ、品かろきがたぐひは、中々にならべいふべき業ならねば、まねびいづべくもあらざりけり。此の君たちのかく品たかくおはすめるが中にも、その上の品なるをば、國のぬしと名づけて、世のおぼえいよゝかしこく、物のいきほひことにもぞ有りける。そも〳〵、肥の道のしり熊本の君はしも、かの國の主の貴き品におはしまして、世々にかしこき君たちつぎしらして、聖の道たふとみ給ふあまりに、文屋のつかさをおこし、物學びの博士をたてゝ、國人をなむみちびき給ひにける。されば物しり人おほくつどひ、名だゝる文人どもあまた出で來て、はや

く天の下にも聞え、はた後の世までもいひつぐべくなむあることは、むかし春海がわらはなりし時、その博士なりける秋山の翁にあひて、其のくはしきよしをぞ聞きける。こゝに高本の大人は、今の文屋の博士なるが、五ともの書をとりて、諸人を敎ふるいとまに、皇御國のいにしへの書をも考へ、又縣居の翁がしるせる文らをも讀みて、ひそかにこをしのびつつ、かく文屋のこと代々におこし給ひつれど、此のみくにの學びの事そなはらぬは、いとあかぬわざなり、いかで大和だましひならむ人をとて、こをその君にもまをし　またあだしつかさの人にもはかりて、八十ともの緒の中に、ひとり長背の家の子をえらみ出でゝ、この事をしもぞおほせたる。さるは長背のぬしが御國の學びにくまなく、古の心にゆきとほれる事は、またことくはふべくもあらぬを、そのまめなる心より、猶たらはずや思ひけむ、さらに縣居の翁がをしへを廣くとひさけ、くはしく聞きあきらめばやとて、神風の伊勢の國にいたりては本居宣長に名つぎをおくり、鳥がなく東のとほのみかどにしては、源清良、橘千蔭らになむこととひける。おのれはたをぢなきものから、むかし縣居の庭をふみならせし人のつらなればとて、今をかたらひ、いにしへをしのびて、うらなく睦ばひつるを、今年彌生のなかば、其の國にかへり行きなむとす。かくて別をしむ人々、うたげのむしろをつらね、うまのはなむけをなむすなるに、盃をとりて春海がことだてすらく、わぬしはや、今かへり行きなば、かしこき大和だましひをもて、その國人をみちびき、上つ代の學びの道も、今よりその國におこりぬべくなむあるは、わぬしの時に逢ひ、心ざしを得るのみかは、高本の大人がいさをも、わぬしによりてあらはれ、まして其君の、學の道たふとみ給ふ御心には、いよゝさかしとめでよろこび給はざらむや、さらばおのがどちの私の別れは、ことにもあらずと、醉泣しつゝいへば、ありとある人々、此の言を聞きて、いでやけふの別のむしろは、ことのかたりごとにもせむとて、おの〳〵ゑひに乘りてぞうたふ。その歌、

年月を千里のよそにへだつともふることしのぶ友なわすれそ

長曾禰又玄におくる序

むかし人の茶の湯にすけるは、事そぎ、物おろそかなるをこのめりしに、今の世には、得がたき品をもとめ、あたひなきくさはひを爭ふ事とぞなりにたる。さるはもとしづけき心をやしなひ、世の塵をのがるべきわざなるを、今は時にきそひ、人にてらひて、よろづほこらしげなるは、

人の心のうつろひ行く事、すべて世のならはしとはいへど、うたてあるわざとぞなりにたる。こゝに長曾禰のぬしは、此の道のすき人なるが、かの時にきそふならひをばまなばずして、しづけき心をやしなふ、むかし人の跡をなむしたふめる。今は仕の道をもしぞきて、かりそめなるふせやを、市の中のかくれがにて、かぐはしき木の芽を、とほく宇治の山里にもとめ、寒きみもひを、近くすみだ河のながれにくみて、これを朝夕の心やりぐさとぞなすなる。おのれもはやううるはしき友なればとて、歌一つと乞はるゝに、とりあへずかくなむ。

やま人のよはひのぶてふ木の芽こそ老のともとはなすべかりけれ

そこひなくすめる心にくみわけて今より水の品はさだめよ

琴後集巻十二

跋

千年筐の跋

縣居の翁の筆の跡に、おほよそ三つのすがたなむ有りける。その始のほどなるは、まめにうるはしきすぢをむねと立てゝ、かりそめにもみだれたる所なし。其の中らの程なるは、世にかゝはらぬ高き心ばへありて、やゝうるはしきにほひはうせて、おのづからにつよき勢あり。その末のほどなるは、物をものにもあらずおもひけちて、筆のまに〳〵つくろひたるふしなく、心やりのすさみなるなむ多かりける。今この巻を見るに、その始なる、中なる、末なる、すべてもらさず載せたるは、翁の筆の跡を盡せりとこそいふべけれ。いでやこを見む人、翁の筆の跡を、たゞに見るべきのみかは、そのまごころのみやびをも、おもひ知るべきにこそあなれ。もろこし人のことに、その筆の跡を見て、その人の心しらひを知るといへるは、まことにさりける。

萬葉佳調跋

歌にいにしへの手ぶりあり、今の手ぶりあり。そのいにしへは本なり、今は末なり。よく古のすがたを思ひあきらめてしも、今のうつろひ來しさまをも、知るべきわざになむ有りける。かれ古は古、今は今なりとて、今にのみなづみて、いにしへをおもはざるは、まどへるなりけり。されば長背のぬし、こゝにおもふ心ありて、萬葉集のうちなる、心みやびかに、すがたうるはしきをえらみ出でゝ、かのいにしへのかきざまの讀みがたかるをも、やがて今のかんなにうつしなして、

世の歌人の爲とせり。いでや古しのぶ人はさらにもいはじ、今の手ぶりにならふどちも、こを見て古をかうがへなば、よく今のうつろひ來しけぢめをも、おもひ明らめざらめや。はた此のぬしのまめなるいさをを、たれかはめでよろこばずしもあらむ。

怜野集のおくがき

事をまうけて歌よむことは、其のためしいと久しかりき。はやく萬葉集にも、さるたぐひの歌見えたり。さていにしへは、歌人の常になすわざにはあらざりしを、歌合といふ事はじまりてよりぞ、やうやうひろまりにける。しかはあれど、宇多醍醐の御時より、花山一條の御時までの、もろ〱の集どもを考ふるに、題詠の歌ども數おほからぬを見れば、其の世世の歌人たち、これをば猶かたへのわざとなしけるにこそ有りけらし。それより世くだりて、堀河の御時よりこなたは、世々に題詠さかりになりもて行きて、今の世となりては、大かたの歌人、題によるにあらざれば、歌はよむべきものとも思ひたらずなむなりにたる。そも〱今の世に、題詠のみもはらとなりにたるは、末の世のならはしにて、いにしへにはそむくに似たれど、今にありてはえも捨てがたき一つの故あり。そはいかにぞといはむに、いにしへは人のことゝひも、歌の詞も、そのけぢめあることなくて、よろづのことわざ、すべてみやびかなれば、見るもの聞くものにつけて、皆歌にいふべからぬはなし。かゝれば折に觸れ、事に逢ひて、よみ出づることやすかるべくさて設けてよまむ事は、まれにぞ有りぬべき。今の世には、人のものいひさとびて、舌だみたる口つきのみ多ければ、歌よまむとするには、先づよこなまりを正し、ひがめるを改むるにあらざればなしがたく、よろづのことわざも、古とはことになり來ぬれば、歌によみ入るべき事はた少し。よく其のみやびかならむをえらぶにあらずしてはなしがたし。これをみだりにとりなさば、いかでか歌とはなるべき。さるは見るもの聞くものにつけて、たゞによみ出でむ事はかたき方にて、まうけたる題によりなむは、なしやすくておだやかなるべし。かゝればその世の人の、題詠のみもはらなす事となりぬるは、おのづからなる勢になむ有りける。このおもむきを深く思ふに、題詠といふ事、古にありては、かたへのわざなりといふべく、今にありては、歌よむはしだてなりとこそいふべけれ。たとへひたすらに古をしたふ人とても、歌のまなびせむには、此のはしだてによらずしては、いづれの道をかは踏まむ。しかるを口か

しこき人の、われは古をこそ學ぶべけれ、題詠は後のならはしなれば、したがひがたしといひて、あながちにいひけたむとするは、よく事の心をもくみ知らで、ことわりをおして、空にのみはかりていふなれば、いと〳〵うけがたし。こゝに清原雄風ぬしは、わがたまあへる友にて、年頃月にあざけり、花をもてあそびて、世々のこと葉の色をも香をも摘み知りたる主なるが、われに語りけらく、にひまなびの人をみちびかむには、かならず題詠によらしめむ事は、さらに論じいふべき事なけれど、今の世の人のたよりと爲してとりあつかふめる、明題、題林のたぐひ、これかれおほかれど、みないかにぞやおぼゆる題どももまじり、またその歌どもも、題の心をあかさむためにはさても有りぬべけれど、あまりに品くだれる歌の見ゆるは心ゆかず、物の心得たらむ人は、よくえらびてこそ取るべければことなし、かのにひまなびのともがら、さばかりに品くだれる歌どもを、思はずに口なれゆかば、よみ出でむ歌の、おのづから惡しざまになりなむこそいとほしけれ、いかで題をも歌をも、一わたりえらびてものせばやと思ふはいかにといへり。此の事わがおもふところなれば、よろこばしくて、そゝのかしいふ事たびたびなりしを、このごろ其の撰なりぬとて、見するを見るに、先づその題は、ふるく出で來たるをばすべてのこさず、後なるをば今捨てたるも多し。又題の文字は、もと詞の爲にかりたるものにて、こゝろかなはざるもおほければ、いさゝか改めたるもあり。歌はもとより、其の題につきてよめるはさらなり、さあらぬ歌は、かの古今六帖の例にならひて、題をあるじにて、歌はまらうどとなして、あはせ載せつ。おほかたの歌のえらびざまは、ふるきは其の詞耳どほからで、すがたたけある類をとり、後なるは、其のしらべなだらかにして心やすらかなる種類を拔き出でたり。こはにひまなびの人を、あらぬ姿に口なれしめじとの心ばへなるべし。さはいへど、これを私の好みには任せずして、公にも、私にも、世々の歌人のえらびおける集どものうちなるをのみとりて、古の人のひろひもらせし、家集、打聞などのたぐひより、ことさらにとり出でたるがなきは、まめなる心より、おしたちたるわざは、えせじと思へるにこそ。かくつとめたるをめでゝ、芳宜園の翁が、舊草に新草まじり、とかいひけむふることの葉によりて、おもしろき野になずらへたりしは、げにつき〴〵しうこそ覺ゆれ。いでや此の集、世におこなはれましかば、にひまなびの人々の、こ

と葉の林分け入らむには、これをしをりとなさずしては、今はたなにゝか依らむ。文化の三とせといふ年のかみな月やうかの日。

月詣集跋

むかし、定家のまうち君の宣ひけらく、歌には師なかるべし、たゞふるき歌をもて師となむなすべき。又、歌はいにしへ今をとはず、よき歌を見て、その姿をまねぶべしとも宣ひけり。これはしも、ことわりいちじろき敎なるを、時うつり世くだちて、やう〱所せきおきて多く出で來てより、かへりてふるき歌を師とせむ事をも忘れ、よき歌を見て、まねぶべきものとも思はず、たゞ世の手ぶりにのみかゝづらへば、よみとよみ出づる歌ども、かしこにはゞかり、こゝにおそれて、皆いくたびも人のいひふるしたる跡をふまざるはなし。こはいかなる故ぞとおもふに、見る所廣からず、いつも初學のをさなきならはしをのみえ捨てやらで、せばき心に思ひなづめばなるべし。そはかのまうち君の宣ひおける詞には、いたくそむけるわざにこそ。いでやよし野の春をおもふとも、目にちかき山口にのみとゞまらば、奥ある花の世にことなる色香をばいかでか見む。又都の秋に心をやるとも、遠く千里の外に出でずば、海山の月のかぎりなきあはれをば、えやは知らむ。此の歌もまたかくのごとくになむ有るべき。わがとも淸水濱臣常におもへらく、今は歌の學びいとあさはかになりもて行きて、ふるき集どもの、世におほく殘りたるがあれど、これを見て世々の姿を考へ見むものとも思ひたらず、文殿のうちに高く束ぬれども、ぢすの塵うちはらふ事をだにものうくおもひ、からびつの底にひめおけども　つひにはしみのすみかとなりはつるが多きは、いとをしむべきわざなり、かくしつゝ年經なば、おそらくは世に絕えもぞせむ、さるは四條大納言のえらびおき給へるくさ〱、又能因法師があつめおける一卷をはじめて、續詞花、雲葉、秋風、萬代のたぐひの集ども、もろ〱あるを、すべてつぎつぎに考へしらべて、われよく其の傳へを廣からしめむ、そのもろ〱あるが中に、重保のあがたぬしの、月まうでの歌こそ、ことに知る人も少く、世によき本もなければとて、先づこれをとりて板にゑりなむとす。今その心を用ひたる趣を見るに、これをあだし集どものなかにさぐりて、おなじきをくらべ、ことなるを擧げ、詞のたぐひを引き、事のもとをことわり、また歌人の氏姓つかさ位をさへに考へいひて、これをしりへに添へたるは、くはしともくはしうなむ。濱臣こゝろと

き人にて、年はたわかければ、かのもろもろの集をも、かくの如くものして、其のこゝろざしはたさむ事うたがひなし。われ今は老いにたれど、もしそのいさをの全からむ日に逢はば、またも筆とりて、其のゆゑよしをこそ記すべけれ。文化の五とせ後のみなづきはつかまりふつか。

瀧本坊昭乘法師三十六人歌合墨帖跋

いにしへ人の假名は、全くもろこし人の、草の手よりいでたれば、猶その心しらひの殘れるを、世を經るまゝにあらぬ方にながれて、本つ心は失せもて來にけり。かくて瀧本の法師は、世に書きならひ來しさまをば捨てゝ、おのれ一つのすがたをなむ書きそめける。さるは古にたちかへるとにはあらで、今めきて艶になまめいたるかたをむねとたてたれば、今一きはつよき所をくはへましかばと思ふふし、無きにしもあらねど、又さるかたに筆すみて見ゆるは、さすがに上手のわざとこそおぼゆれ。この百年あまりこなたは、なべて世に、此の法師の筆をたふとむ事となりて、今はわづかに書きさしたる一ひらをも、人々寶とすめるを、此の歌合のまたくそなはりて殘れるは、めづらかなりとこそいふべけれ。これはしも、難波の金津氏の家に、年頃ひめおけるを、こたびあらたに板にゑりたるなりとぞ。

縣居翁自筆山里記跋

此の山里の記は、縣居翁のかゝれたるものの中に、ことにすぐれたりとすべし。伊勢の御の亭子院歌合の記、小野宮のおとゞの天德歌合の記などをはじめて、かかるたぐひの文世々にあまたありて、よしあしはとり〴〵なれど、おほかたはふるきをまねび來れるを、この記はひとりきはことにおもひおこして、詞をいにしへにとり、姿をあらたにまうけて書かれたるは、古今にたぐひもおぼえず、いとめづらかなり。淸水濱臣翁のみづから書かれたるを得て、とし頃よろこびもたるを、おのが家に里のしるべ一卷あるをおくりて、其の卷の末につがしむ。こはおのが兄、春郷のものせしを、翁のこゝかしこ改め直されたるをりに、別にあらためかゝれしなり。文化六とせの冬。

同岡部日記の長歌跋

あがたゐの翁の家集かきあつむるついでに、翁手づから書きさし給へるものなど、なにくれともとめ出でたるが中に、このひとひらは、岡部の日記に見えたる長歌なるが、引きなほし消しなどせられて、いとみだりがはしうはあなれど、猶千年のかたみにもとて、古田のぬしの御もとに、おくりまゐらするになむ。享和のみとせ八月。

同吉野の長歌跋

此のよしのの長歌は、其のはじめ土井の尼君のために、翁のかゝれたるなり。尼君これを橘千蔭にたまひたりしを、千蔭また源道別におくりにけり。其の後ゆゑありて、人の道別のもとより得たるを、こたび石井ぬしなむ得られにたる。この長歌をば、翁の書かれたるあまたありて、これかれ見つるが中に、これぞことにすぐれにける。さきに藤原德之が板にゑりたるも、すなはちこれをうつせしなり。今はかばかりなるはいと得がたうこそおほゆれ。さるは世にあたひなき寶ともいひつべしや。

橘千蔭書新百人一首色紙跋

色紙にものかくやう、いにしへはさだまりたる跡なかりしを、世くだりてより、おのづからに其ののり出で來て、今はみだりにはえ書くべからぬこととはなりぬ。さるは大かたの人の思ひまどふふしなるを、この橘の翁が書かれたる百首こそ、人の見ならひまねばむにたよりよけれと、金花のあるじの、ことさらに板にゑりたるはうべなり。かくて世にも廣くつたへもてゆかむ事は、いみじきわざにこそ。

篁千古が七十の賀の歌の跋

ことし長月のとをかこゝぬか、たかむらの翁が七十のあきを祝ふとて、そのうからやからの人々、をしねかる金杉の里に、うたげのむしろをなむまうくなる。軒端の日影しづかににほひて、夜半のしぐれは名殘なきに、松のみどりの色は、ひとしほ露にもてはやされて、をり得がほなるも心ゆく朝なり。東のひさしは、りうびんのたゝみ新にしきて、まらうどゐをかしく、かたへの放出には、伊豫簾かけわたして、女だちゐこみたり。なげしのかなたには、あじろの屏風一ひらを、翁がうしろのまうけとなし、すのこのかたは、わらふだすゑわたして、あるじがたの人なみ居て、かはらけとうでゝ酒すゝめなどしつゝ、みさかなには何よけむなどうたふも、つきぐ〵しうぞをかしき。おばしまの本に、菊の花のえもいはずゑまひ開きたるを、大きやかなるかめに幾本ともなくさしたるは、千世のかざし覺ゆるけふの心ばへなるべし。かくて人々この花をことぐさにて、あるは山路の秋をあはれみ、あるは下露の淵となるを待ち、もろこしのあとをも引き、大和のふることをも思ひ出でゝ、おのがじしことのばへざるなむあらざりける。かれあるじがたの人々、此の言の葉のしりへに、けふのゆゑよししるしてよとおのれに請へば、ゑひのすさみのすみつきおぼつかなきをも忘れて、いさゝかことのまにま

に書きつく。いでや今日をはじめにて、八十九十のよはひかぞへむ日にも、猶このためしにならはゞ、おのれはた筆さしぬらすわざのたびかさなるをも、この翁がためには、さらにいとはじとてなむ。

佛跡をほむる歌の碑の跋

寶暦の十まり三とせの春、縣居の翁にともなはれて、わがこのかみをはじめ、むつまじき人五人六人、よしの山の花見むとて、大和の國にまかれりける時、奈良の都のあたりみめぐりけるついでに、藥師寺にいたりて、此の碑はすりうつしたるなり。旅の行くてのわざにて、心いそぎのみせられしかば、式の如くにものもせで、美濃の國紙をつぎて、蠟墨もてなむ磨りたりける。此頃これをもののそこよりとり出でたるにつけて、そのかみの事おもひ出づれば、すでに四十とせのむかしにて、あひともなひ行きし人も、今はひとりだにあらずなりぬ。さるはこのはかなき一ひらも、夢とのみ過いにし世のしのび出でぐさなればとて、かくとりよそへるになむ。文化のはじめのとしさつき。

涼月遺草跋

むかし、縣居の翁に物まなべりし女房、あまたありしが中に、しげ子と、余野子との二人をば、其ころふるごとしのぶ人人の歌がたりに、たれ〲も、こゝろにくきかたになむいひあへりける。さるはやむごとなきあたりのをすのうちにて、花紅葉につけつゝ、いどみごとあるふしなど、歌人のえらみには、翁もつねに此二人をしもぞとり出でられたりける。又よの子は、からまなびのかたもたど〲しからで、唐歌をもよくつくりてなむ有りける。そは其のせうと鵜殿の孟一のぬしは、世に名高き博士なりければ、をさなき程よりかたはらにありて、まねび得たりとなむ。おのれわらはなりし頃、ふみ讀むとて、常に鵜殿のぬしの家に行きかよひたれば、よの子のつくれるから歌など、をり〲見し事もありき。なまなまのはかせは、はづかしかりぬべき口つきとぞおぼえし。此頃縣居の翁の集どもとりしらぶるついでに、はうごの中より、この二人の言の葉どもの、かつ〲散り殘りたるを見出でたれば、いかで書きつめおかむとするに、茂子が集は、もたる人ありといへば、そを得たらむ時、かさねてものしつべければ、まづよの子のをとりて、かく二巻とはなせり。文も歌も猶あまたありつらむを、其家集などいづちいにけむ　今はもとむべきよしのなきこそをしけれ。さてよの子、又の名は瀬川ともいへり。わかゝりける時より、紀の殿につかうまつりて、つかへをしぞき

て後は、をとこをもたらず、尼となりて身ををへにけり。其の住みける所をば、涼月院とぞいへる。天明八とせの秋、よはひ六十あまりにてなむ、身まかりける。寛政五とせのはつき。

琴後集巻十三

書牘

睦月ばかり山里人のもとへ

年あらたまりては、なに事かおはすらむ。春の日數もまだあさきに、岡べの下もえは、今しも御袖にたまるばかりも、摘みそめ給ひつや。谷の戸のはつ音は、いつよりか御朝いのまくらをば、おどろかしまゐらせたる。いとなむゆかしき。こゝには、こぞの雪のなごりにや、風のけしきも冬めきて、猶かすみもやらねば、ちまたの柳のうちけぶり行かむ程も、心もとなう見え侍り。さるは一年、まがきのもとにうつし植ゑ給へるしも、雪のうちよりも、いちはやく笑みさかゆとなむ宣はせし、此頃こそ心ことにもにほひ出で侍らめ。いかで一枝をと思ひ侍るを、ゆるし給はましかば、いとうれしうなむ。

しる人のたぐひならねど梅の花いろ香をわれに惜しますもがな

春雨ふる日友達のもとより、こと引きて遊ばむ、までこよといひおこせたるにさはる事のありければ

つれ〴〵と降り暮したる空の、ながめがちなるをりしも、ふりはへてそゝのかし給へるは、いとうれしうなむ。さてうけたまはるは、北殿の古御達も、此頃里居のほどにて、御かきあはせのかたきにまで來給ふとや。例のむかしおほゆるつまおと、ばちおとなどに、とき〴〵、わがぬしの今めきたる手をさしまじへ給ふらむが、かくしめやかなる軒の玉水に、いとゞひゞきあひたらむは、いと心ゆくべき御あそびならまし。かゝるをりにこそ、常にわらはれたてまつる、翁があやしのかは笛をも、取り出で侍るべきを、今日はちぎりたる事の侍りて、えさしとゞめがたう侍るは、あやにくなるあし分け小舟になむ。

おもふどちかたらひ人となすことに心ばかりや今日はひかれむ

とて

五月くす玉を人のもとへおくる

かきくらし日をふる雨の、たち出でむ空もなければ、明け暮れふるき繪ものがたりなど取出て、これにてつれ〴〵をもなぐさめ侍るをりしも、こゝにわらはの侍るが、几帳のはしらに、くき玉かけたるかたのあるを見て、いとなつかしき姿にも侍るかな、いかなるものにか侍るらむといひ侍れば、くそはまだ知らずや、こはしか〴〵のものにて、都にてはうちわたりをはじめて、高き家々などには、す

べてこの頃こそもてあそび給ふなれ、またこの東にても、やむごとなきあたりには、手ならし給ふなるはといへば、これに目止めて、いかでこれ一つ調じ出で侍りてしがなと言ひはべるを、をりにあひたる事をもいふかなとおもひ給へぬれば、こゝろみがてらそのあるやうなどをしへ侍りて、いろ〳〵のさいで、からの絲、名ある香など、取らせ侍りつれば、からうじてかくは物し侍るなり。もの〻心よくもたどらぬうひごとには侍れど、たはむれにもあすの節の御料にもなり侍らましかば、わらはが爲にも、いとめいぼくありてこそ。

あやめ草ふかきねざしはあらずとも君にひかれば嬉しからまし

六月人のもとより氷をおこせたるに

土さへさくとかいふなるは、暮まつ程もいと待ちどほなるに、をりしも、やむごとなきあたりよりわかち給へるなりとて、暑さわすれむ料にとて賜はれるは、いとめづらかになむ。先づ手にとり侍るだに、そゞろ寒きまでおぼえ侍り。わらはどもはめでくつがへり侍りて、ひたひに載せ、むねに當てなどしつゝ、もて興じ侍るもをかしうなむ。されど、こはおほやけのおものにもそなへ侍ると聞くなるを、かくいぶせきふせやの心やりぐさになし侍らむは、なか〳〵にかしこきわざなりや。とまれかくまれ、御まのあたりにこそ、よろこびは聞えつべけれ。

手にとるもあな珍しなあつ氷とほきつげの昔おぼえて

しぐるゝ日ものへまかるとて人のもとへみの借りにやる書

闕山ちかきあたりの、ことに世ばなれたる御すまひなれば、冬たつけはひものさびしう、人目も草もと思ひとり給ふらむをこそ、おしはかりまゐらせ侍れ。やつがり石山にちぎりたることありて、今日こゝまでまかで侍りぬ。ひるますぐる程より、空うちしぐれつゝ、今日たつ冬の、ことわりがほに降り出でたるが、都をばあからさまにたち出でつれば、さる心まうけだにせで侍るこそうたてけれ。

われはたゞ冬野にひろふ落ぐりのみのなきことぞわびしかりける

となむおぼゆるを、此の從者にたうべらばうれしうこそ。たちかへり來むふしは、必ず柴のとぼそ驚かしまゐらすべし。ゆふかけて行くかたとほかれば、こととも盡しはべらでなむ。

上田秋成がもとへ

春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。いまはいはほの中なる住ひをふりすて給ひて、巷の花柳にた

ちまじらひ給ふらむは、いかに心ゆく御すみかならまし。

巣ごもれる谷の鶯いかなればみやこの
春に心ひかれし

となむ聞えまほしき。されどうき世の塵の、のがれがたかなるも、なほ市のうちに隠れけむ、古人のためしにならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらむは、山住のつれづれならむよりはと、おしはかり参らするものから、いたづらに千里のよそにありて、萬のあたり聞え承らぬこそ、あかぬ業なれ。さはいへ雁の翅の行きかひだに絶えずば、中々に遠くて近きたぐひとや思ひなぐさみ侍らむ。柳の絲のくりかへしつゝ、今年もとだえなく、聞えまゐらばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音なをしみたまひそ。

伴蒿蹊におくる書

秋の日數ものこりすくなうなり侍りにたるを、都の御すまひよ、いかにあかしくらし給ふぞ。此とほのみかどは、大かたに山いとはるかにて、露霜の心おそきならひに侍れば、立田姫のすさみも、はかばかしうも侍らずなむ。さるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵に染み給はぬあたりは、なにの山里、くれの古寺、御心ゆくかたぞおほかりなむ。

都人いづれの山のにしきをかこと葉の
色にたぐへては見る

このごろは、御手染のめづらかならむこそおほからめ。風のたよりをわすれ給はで、しめし給はゞ、下照るかげにともなはれ侍らむ心地せむは、うれしきわざなるべし。あなかしこ、立つ霧になへだてたまひそや。

野村素行はおのがしたしき友に侍り。橘千蔭に物學び侍りて、古のみやびごとこのむ人になむ。わがぬしをかねてしたひまゐらするがあまりに、歌ひとつ聞え侍らむとて、おのれにことづけ侍りぬ。こはいとうちつけなるわざに侍るめれど、すきごゝろの止めがたきを、さるかたにつみゆるし給へや。此の人のあるやうをば、雪岡法師に、まのあたりとひ給はむことをこそ。

西村嘉卿にこたふる書

ふりくらし侍るこのごろの空をば、いかにながめたまふにかと、日ごと思ひまゐらせしを、ふりはへていとこまやかにしめし給はるこそ、ものよりもけにおほえ侍れ。さるは家とじの君の、おもほえず梢の花よりも先だち給へるとよ。なべて世の春雨をも、御袖にのみとや思ひとり給ふらむ。さるなげきにしづみ給ふとも知り侍らで、とひなぐさめをだにしまゐ

らせで、過ぎ侍りにしぞいとわりなき。紫の物語六巻かへし給へるを、ゆくりなくうちひらき侍れば、まぼろしの巻にて、なにか春のと侍るを見侍るにも、うちつけに御うへこそかなしう思ひやられ侍れ。さるはさかりなる頃とも知らずとのたまふは、いひ知らぬわざになむ。

あく世なくちぎりし花よいかなればまたきも風にまかせはてけむ

さてかのあだし巻々をも、御つかひにまゐらすべきを、ちかき頃は火のさわぎにて、書(ふみ)どもみなぬりごめにおし入れ侍れば、とみにはえ見わきかね侍り。かさねてこなたよりこそまゐらせ侍らめ。御返り猶こまやかに聞え侍るべきを、今日はやむごとなきあたりへまゐるべきちぎりの侍りて、今しもたち出で侍れば、こともつくし侍らずなむ。あなかしこ。

石原正明にこたふる書

さきにしめし給へる、五十番自歌合の判詞、からうじてつゞり出で侍り。これは数ならぬ身に、いなみ奉るべき事ならぬを、かくよろづにへだてなう聞え承りなれて、これにのみ心おき奉らむは、かへりてつみをも得侍りぬべければ、とまれかくまれ御こゝろにそむかじとてなむ。また酉の年の御筆ずさみと侍る二巻(ふたまき)、これをもこまかに讀みて、よしあしいへと侍るは、いとこそかしこけれ。學びのかたは、わかき時よりあながちに、おりたちてもつとめ侍らず。たゞなほざりの心やりに、書よむことをばこのみ侍りつれどそれは世の常の、めにちかき種類(くさはひ)にすぎ侍らぬわざにて、廣くもあさり侍らねば、よろづにたど／＼しくて、此の事とて一つあきらめたる事も侍らぬを、いかに侍ることにか、このちかき年頃は、むなしき名を人のいひつたへ侍りて、世のも

のしり人たちのつらにおもへる人も侍りぬとぞ。これはいとやすからぬわざにて、心のうちにふかくはぢ思ひ侍る事になむ。かくまなびの事おろそかなれば、うひ學びの人などの、はかなう問ふ事にも、わいだめ侍らぬ事のみおほかるを、ましていにしへ今の學びにくまなくおはする、わがぬしのしるし給へるものを、いかでか其のよしあしをばあけつらひ侍らむ。かゝればたゞめづらかなる御考どものあらむをこそ、はらにあぢはひ侍りて、わかをぐらき心のまどひをもはるけ侍らめとて、先づうちもおかず見侍るに、おのがふかゝらぬ心のなしにや侍らむ、とあるは然らじ、かくあるは如何になどおもふ事の侍るこそあやしけれ。こはわが學びのつたなきにこそあべけれ。いかでわがぬしのひがごとし給ふべき。これをとり出でゝいはむは、かへりて人わらへな

るべく思はるれど、さればとて心のうちに、うたがはしきふし〴〵のあるを、問ひあきらめもせで、止むべきにあらねば、をぢ〳〵しるしつけて聞えさせ侍るなり。これはよしあしいふとには侍らず、なほさらに其のゆゑよしときあかし給ひて、くはしうをしへ給はゞ、をしへに従ひ侍りて、うたがはしう思ひくし侍るをも、明らめまほしくてなむ。又此の一巻は、ちかき程に、石塚のなにがしがものせる古言清濁考をば、いかゞおもふと問ふ人の侍るにこたへて、おのが思ふ所をかつがつしるしつけ侍りしなり。此の清濁の事は、おのれはおもひさだめかね侍るを、わがぬしには、いかゞ定め給へるにか。おのが論じいへる事も、猶いかゞ侍らむ。一わたり見給ひて、わがぬしのおぼす所をも、をしへ給へや。これは彼の御筆ずさみの中に、此の清濁考の事をも、のたまひ出でたる事の侍るに引かれて、かくは聞えさするになむ。

稲毛直道におくれる書

こたび思ひたち給ひて、今の世にありふる人々のからうたどもを、廣くあなぐり出でゝ、あらたなる集をしも、えらび給はむの御すさみにつけて、春海が口ゆがめたらむうそぶきにも、猶とるべきかたやあるとて、ことさらに求め給ふなるは、いとこそかしこけれ。さるは詞の海に玉ひろはむには、芥藻屑をも捨てじとの御心より、かくくまなくのたまひわたるなめれば、そのよしあしは君が御心にまかせつべく、百の中のひとつにても、とがなしとてうべなはれ奉りて、世に聞えたる博士たちの、いかめしき名どもの末に、あやしの翁が名をもさしまじへ侍らむ事は、いといみじかるべきわざにて、何の面目かこれにしくこと侍らむ。しかはあれど、春海は常にあやしみ思ふこと侍り。今の世のくせにて、名をこのむ人のおほかるこそ心得ね。もとより深きこうつみたることもなき業を、みづからかへりみもせで、みだりに我はがほつくりて、人にもてらひ、世にもほこるめるは、いかなる心ならむ。たとへうるけたるしれ人をばあざむくとも、事の心をよく明らめたらむ人の見て、あざけりわらはむことは、はづかしきわざには侍らずや。其の名をこのむとおもへるは、かへりて恥をもとむるにぞ侍りける。なか〳〵にむなしき名の消せざらむよりは、木草と共にくちはてむこそ　人はめやすう侍るべけれ。かくおもひおきて侍れば、年頃わが心をくだきてこのみ侍る大和うたすら、世にのこし侍らむことはおもひもかけ侍らぬ事なるを、まして其の道に入りたちても見ぬ、もろこしのことの葉を、うは

の空にてまねび出でたるは、たゞをりに觸れたるたはむれわざなるを、いかでか世には傳へはべらむ。もし春海がつくれるなりといふを見給ふこともあらば、かならずかいやり給ひて、わがために人わらはれなるはぢをかくし給はむ事こそねがはしけれ。たび／＼せちに宣ふことを、かくいなみ奉るは、いとなめけなるつみは、さり所もなう侍れど、事の心をよく汲み給ひて、われをばもらし給はゞ、いとうれしきことになむ。

大村蜂住にこたふる書

わかう侍りける程より、學びの道おこたりがちに過ぎ來つる身の、今はいたづらにのみ年月をかさね侍りて、世に聞ゆべからむかたかどだにあらぬを、ひが耳に聽きたがへ給ふふしありてか、あまたたび問ひおとづれ給ふなるは、おもひもかけぬわざなりや。さるはおろかなる心にも、百が中の一つは、かしこき際の助ともなるべき筋もやとて、しるしつけ給へる條々、讀み考へよとてしめし給ふなめり。さはたおのがをぐらき心もて、何をかはいはむ。たとへかつ／＼思ひ得る事の侍るも、古の賢き人のいひけむ如く、人の心のおなじからぬは、その面影のことなるにたぐふべければ、おのがよしとし侍らむすぢありとも、君はたうべなひ給はじ。又君がこゝろゆく方におぼしとり給ふらむをも、かへりてはをぢなき心に、うけ引くべうもあらぬ事しもあれば、かゝるたぐひは、おのがじゝその心々にまかせおきて、そのよしあしは、後のかしこき際の定めいはむを待つべき事にこそあなれ。交りあさかる中にて、いふことのこゝろふかきは、罪をうるわざなめりとは、聖も教へ給ひにけり。かゝれば口とぢてもだし侍るべきを、君はしも、むかし楫取魚彦につきて、我が賀茂の翁のつたへしことどもを學び給ひつれば、春海はたかれとおなじつらに、翁の家に名簿おくりしを、おぼしちなみて、へだてなくことゝひかはさばやとて、ねんごろに聞え給ふめるは、いかであだし人のたぐひにおもひ侍らむ。さればなめしととがめ給はむをも思はず、心にうへうらをおかで論ひ侍るなり。ひがごとのおほからむは、さるかたに見ゆるし給へ。およそ古言をときあかすに、五十連のこゑをもてしるべとなす事は、早く顯昭法師もすでにいへり。ちかき世におよびて、難波の契沖阿闍梨、やましろの荷田のはふり、我が賀茂の翁など、皆こをもてふるごとをとくよすがとぞなしたる。しかはあれど、このいつらの音はしも、こを用ふるに道有り。その道をよくおもひわかずば、あらぬかたにぞ踏みまどひぬべ

き。されば賀茂の翁も、こゝをもて古言をみだることなかれとは、常にもの學ぶ人にいさめいはれしなり。先づ古言を知らむには、古書を廣く讀みて、その詞の例いかにともとめ、又おなじたぐひなるをあつめ見て、其の理を思ふべし。例多く、たぐひあまたなるは、おのづからにその意は知らるべし。またくだれる世の書をも廣く讀みて　古の詞のうつろひ來しをも考へ知り、又こゝを古にかへして思はゞ、相照して知らるゝ事おほかるべし。また今の世のいやしきことわざにも、猶いにしへの殘れる事多く、或は田舍人のいひならひたる言にも、古言の傳はれる事はあなり。かゝるたぐひまでをもよくおもひわかちて、古言をとくのたすけとなすべきなり。これを古を學ぶの正しき筋とす。さて例とたぐひを考へ得て、かつがつ其の心は見ゆれど、猶をぐらき方ある詞あり。そは五十つらの音をもて考へとくべし。例へば「たれ」を略むれば、「て」となるをもて、「手折りてば」といふは、「手折りたれば」なるを知り、ふぐしは、物をほる串なれば、「ほるくし」を約めたる名なるを知る類なり。然れども、まなびおろそけなる人の、古の書のこゝろも知らで、みだりに此のいつらの音をのみたのみて、なべての詞をもとかむとせば、いとたがひぬべし。すべて詞は、例とたぐひをしもおし考ふる時は、大かたは其の意明らかなるものなり。さるたぐひは、五十つらの音もていふべきものにあらず。たゞつゞめていへるを延べ、延べていへるをつゞめたるたぐひのみは、これによりて考ふべし。そはかならず詞の例を考へさだめ置きてなすべきなり。その延べもし、つゞめもして試むる時、その詞の古の書に正しく見えたる詞の出で來ば、そは相かよはして、とあるはかくいふ詞なりとも定むべき事もあり。そも又しひて一かたにいひ定めがたきも有るべし。さるゆゑは、いつらの音は、ともかくもあまたにかよひて、動きやすきものなればなり。その延べもし、つゞめもしたる詞の、たゞいつらの音より出でゝ、古の書にあとなきは、古言といふべからず。そはつゝしみて取るまじきなり。こゝに選みなくて、わが私のこゝろにおもひ定めて、これいにしへの詞の本なりなどいはむはまどへるなり。うち聞きて理有るやうに聞ゆとも、古により所あらぬを、誰か誠とすべき。かれ古の書にもよらず、我が心にのみはかりて、しひてといひかくいはむとするは、星なきはかりを執りて、物の重き輕きをさだむるが如く、いたづらにおもひをくだくとも、何の益かあるべき。こをもて古の書の心を知れる

人は、五十つらのこゑを用ふるに、その道によらざればなさず。さるを契沖、春滿、賀茂の翁などの、いまだ考へおよばぬ筋をも、われよくおもひ得たりなどいひて、このいつらの音もて、こと葉をとく事をしも、ほこりかにいひのゝしる人も侍れど、そはことの心をもよく知らず、おのが學びのほどをも、よくかへりみおもはぬ業なるべし。さる故に古言の學びの、いとかたかるわざなりとするは、いにしへ今の書をよく廣く讀み、いにしへ今のこゝろをよくわいだめ知るになむある。さはた年月をつみて、よくつとめ學びて、その正しき筋によるにあらずば、いかでそのおくがを知り得む。こゝにひとつの物語あり、ことのついでなればいはむ。ある法師の、常にいつらの音もて、古言をとく事をこのめるが、我が友藤原宇萬伎がもとに來りて、この頃古言を考へ侍りて、きりとかぎろひは、同じ詞なるを知れり。そは「かき」を約むれば「き」となり、「ろひ」をつゞむれば「り」となりぬといひしに、美樹が、いとよく考へ給へり。さらば鷹は燕と同じ鳥なるべし、「つば」をつゞむれは「た」となり「くら」をつゞむれば「か」となりぬとて、いと笑ひたれば、その人、こたふるに詞なくて、古言のみだりにとくべからぬを知りぬ。またこれと同じたぐひなる事を、ものゝ端にて見侍りつる事あり。むかし人のみかどに王介甫といへる人ありて、文字の形によりて、その心をとく事を好みけり。字說といふふみ、三十卷をつくりて、みかどに奉りぬ。おなじ時に、蘇軾といへりける人の有りしが、そのふみのうちに、波は水の皮なれば、しか文字をつくりたるなりとあるを見て、さらば滑といふ文字は、水の骨をいふにこそあらめとて笑ひけるとなむ。唐も大和も、かゝるたぐひは、まことの筋ならぬ業にこそ侍らめ。今君がしるし給へる條々を見るに、この五十つらの音に、いとなづみ給へりと見ゆるを、今かくその好みたまへるすぢを、あばきいはむは、うべなひ給はざらむこととしるし。しかはあれど、おのが思ふ事を隱して、人の心におもねり從はむことは、春海がはぢおもふわざになむ。そのしめし給へる條々の論ひは、あだしものにしるしつけ侍りぬ。あなかしこ、かいやり給ひねかし。

羽生田貴良がもとへ

さいつ夜はうれしくもまで來給ひつるかな。折しも秋の雨のしめやかなるに、あだし人もまじらねば、こゝろにおもふことをも、かたみにつゝまず、うちとけたる歌がたりは、いと心ゆくわざになむ侍りて、しめし給へる美濃の家づとを、お

のがことわりて聞えさせつるを、瓶子とりしわらはのかたはらより聞きて、何くれとしるし置きたるが、うちぎゝめくものゝ侍るを、此頃とりて見侍るに、こともとゝのはで、いとみだりがはしう侍れど、初學の人などの、言葉の林わけまどはざらむためには、助けなきにしもあらじやなど、おもはるゝふしも侍れば、ここかしこ筆くはへなどし侍りて、さらにあらため書かせ侍りぬ。こは世の人に廣く見すべきものにも侍らねば、とてもかくてもありぬべけれど、猶一わたり讀み給ひて、いかにぞやおぼさむ事の侍らば、うち置かでをしへ給はらむことこそ、あらまほしう侍るなれ。すなはち家づと八巻かへしまゐらせ侍り。御文車のうちに、とり入れ給ひねかし。

家づとを何ぞと見ればさゝぐりのさゝにはならぬ木のみたりけり

となむいはまほしきも、猶口さがなきつみや侍らむかし。あなかしこ、大よそ人になまねび給ひそ。

清水濱臣がもとへ

よろづのこと、いとはかなき業にても、物の上手はおのづからに高き心しらひあるものにて、なま〳〵の人はかへりて疑ふふしあめり。そのまだしき際の人には、とみにわきまへがたからむこそ、まことのいたり深きにはあなれ。かの雨夜の物語に、木の道のたくみと、手かくことと、うつしゑの上との心ばへをいへるなどは、よく其の心を得たるものなり。女房のはかなき筆ずさみとはいへど、事くはふべき事なむあらざりける。今いにしへの歌の、のどやかに、みやびかに、しらべゆるやかに、たけあるを、味ひすくなくてことたらはずとして捨てゝ、後鳥羽土御門の御時などの、いやしげに、さかし過ぎて、いつはりたる巧ある歌を、かへりて前にも後にもたぐひなしなどおもふは、物の上手の、高き心しらひある事をば思ひもわかぬ、よのつねのまだしき際の人の心とやいはむ。かくいふは、わが私の心をたてゝいふには侍らず、おほやけのことわりなり。今より後、百年を過ぎ侍るとも、物のこゝろ得たらむ人の出で來ば、かならずわがあげつらひをば、あらたむまじうこそ。かく思ひ定め侍るにつけても、かの家づとのひがごとの、人まどはしなるわざなれば、さゝぐりとなづけて物し侍り。うちかへし讀み給ひて、猶わがおもひもらせることもあらむをば、こゝろみにことくはへ給ひてよ。こは人のさがいふをこのむには侍らず、わがあがたるの歌のをしへの、いと高き心ばへある事を、心あひたる人々の、おもひまどはざらむためにとて、なすわざになむ。

鈴の屋の翁、さばかりすぐれたる人なるに、又いたくひがみたる事多きは、をしむべきわざにこそ侍りけれ。歌のあげつらひのみにも侍らず、わが國の古の道なりなど、いかめしくいひつゞくる事の侍るも、いと心得がたきことに侍り。さる事いふにつけては、ひじりの道をも、佛の法をも、口さがなくいひおとしめなどするは、いとあるまじき事とこそおぼえ侍れ。さてわが國の古の道といふ事、いかなる書に出でたるにか。おのが書讀むことの多からねばにや、いにしへのふみにさる事しるせるものは、いまだ見侍らずなむ。おそらくは私の心につくりかまへていひ出づるにこそ侍らめ。これをも其の古により所なきよしをあきらめいひて、初學の人などのためにとおもひをり侍れど、よく思ひめぐらし侍るに、こはことの心とほらぬことしるければ、心をたひらかにしておもはむ人は、誰もわきまへぬべければ、おもひ止みて、筆おこし侍らず。歌の事は、ようせずばおもひまどはむ人もありぬべければ、いはでは止みがたうこそおぼえ侍るなれ。猶まのあたり聞ゆべき事も多し。いとま得給はむをりに、むぐらふの露、ふみわけ給ひなむや。

一柳千古にこたふる書

さゝぐりを見給ひて、其のあげつらひども、御こゝろにかなひぬと承るは、いとうれしくなむ。そも〳〵人のしるし置けるふみなどを、其のきずをもとめ出でゝそしりおとしめ、わがさかしさを人にほこらむとかまふることは、世のえせものの癖にて、そは人の名高きがねたさに、あながちにまけじとするわざなれば、しひごとの多かるならひにて、人をあばきいはむとて、かへりてわが名をくたす類もおほかめり。今おのがものし侍る事は、さるえせものゝまねするやうなるわざに侍れど、これには深くおもふ所なむ侍りける。あがたゐの翁が教をうけて、其の學びの心をつぎたる人これかれ侍れど、古言のまなびにくはしきことは、鈴の屋のあるじこそひとりすぐれにたれ。翁のおもひ殘されたるふしをも、考へあきらめたるたぐひ多くて、この人出でゝ後、この學びの道そなはりぬるは、いみじきいさをにて、まことに藍よりも青しとせむ事、いへばさらなり。かくて今は世に名高くて、たふとみしたがふ人も多かるは いとよろこばしきことなるを、只その歌のあげつらひは、いたくひが心得のみ侍るこそをしけれ。さるはなほ〳〵しききはの人なりなましかば、さてもありぬべきを、しかすぐれたる人のひがごといはむは、人のまどふべきわざにて、か

つはあがたゐの歌のをしへも、此の人によりてつひにかくれぬべければ、今そのひがごとを改めことわりて、初學の人などの、あらぬかたにふみまよはざらむ、道しるべにもと思ひとり侍れば、おのがまだしう愚かなるをも忘れて、なすわざになむ侍りける。さはいへど、こは我が心あひたる人にのみこそ見せめ、世の人に廣くはしめし侍らじ。そは人をそしりて、われ勝たむのすさみなりなど、よそ人は思ふべければなり。又ちかき世に、新古今ぶりをまなぶといふ人おほかれど、其の人々のうたに、げにも新古今のすがたなりと見ゆるは、絶えて無くて、えもいはぬいやしげなる歌のみ多きは、笑ふべき事なりとのたまふは、まことにさる事にぞ侍りける。新古今のすがたはことざまなるものには侍れど、其の世に、そのすがたをはじめてよみ出でたるは、めづらかなる一つのすがたなりとも謂ひつべし。さるを二たびまねびうつさむとするは、いと心の拙きなり。ふるくは逍遙院のおとゞ、ちかくは實陰のまうち君など、此のすがたをねがひ給へれど、今より見れば、よき女のなやみて、かほにがめたるを見て、みだり心ちならぬ人の、しひてまねするたぐひにこそ侍りけれ。ましてなほ〳〵しき際の人のまねせむには、人わらへなる歌の、いでまうで來ずやはあらむ。かにかくに、まことのよき姿の歌よみ出でむことは、いとかたきわざにて、誰もよみ得まじう侍れど、せめて心ばかりは高うかまへて、よこざまなるかたに流れざらむやうにこそあらまほしう侍るなれ。あなかしこ。

詞の清濁は古言清濁考に從ひて改むべきやと人のとへるにこたふる書

古書の假字の清濁の事は、圓珠庵、縣居などは清むべき詞に、濁る音の文字を用ふる事はなく、濁るべき詞には、清むべき音の文字をもかり用ひたる例なり、といはれたり。しかるを鈴の屋は、ひとり思ひおこして、右言はかならず其の用ひたる文字の清濁のまゝに唱ふべし、古言の清濁は、今の世の人の口に唱へなれたるとは異なるを、人の其の異なる事を知らで、古言を今の世の唱へにかなへむとて、清音の文字をば、濁る詞にもかり用ひたるものなりとおもへるは、いみじき誤なりといはれたり。其の説古事記傳、玉勝間などに委しう見えたり。かの清濁考は、師説によりたりと見ゆれば、全く鈴の屋の考なるべし。およそ古言の學びは、鈴の屋ばかりくはしき人世々になければ、さばかりの人の考へ定めたる事なれば、かならず深き故ある事とはおもは

るれども、猶うけがたう思ふよしあり。これは春海などが學びおろそかなる身にて、たやすくいふべきならねど今試にいはむ。先づ清濁の事をいふに、續日本紀以下の古書をば正しからずとて、すべてとらず、たゞ古事記、日本紀、萬葉を據とし、それが中にも古事記をことに正しとし、萬葉はこれにつぎたりとし、日本紀はみだりなるかた多しといひて、さてその三の書のうへにも、おなじ詞に清濁の文字を交へ用ひたるをば、一かたを正しとして、一かたをば正しからずとせり。又日本紀、萬葉もたゞしからずといひて、つひに古事記をさへに、正しからずといへる事もあり。これはいかなる故にしかいふぞとおもふに、おのが濁音の文字あるべき所なりとおもひ定めたる詞に、清音の文字を用ひたるを見てさはいふなり。そは先達の説の如く、にごるべき詞には、清音の文字をかね用ふる事とする時は、疑なき事なるを、あらたに説をたて、文字の清濁は、かならず其の文字の清濁のまゝに唱ふべしと思へるにそむけば、此の疑はあるなり。されど古書の文字のつかひざまを、皆正しからずとして、おのが説をのみたてむとするは、しひたるわざにはあらずや。もとより古書にたゞしく清濁をわかち書きたりと見ゆる所もありて、それにまさしく後の世の清濁とは異也と見ゆる事も、まれ〳〵に無きにはあらず。こはすでに契沖、縣居なども、こゝに心づきて、この詞は後世のと清濁異なりなどいはれたるもありそれは必ず濁音の文字を用ひてまぎれなき類なり。さて清音の文字のみにて書けるが、其の文字のまゝに唱ふる時は、後世の清濁と異なる事あるは、そのなほにごる詞には、清音の文字をも、兼ね用ふる例なるによりて、しばらく後の唱によりて、文字のまゝには定めざるなり。これ先達のこゝに心をくはしくよせずして然るにはあらず、古書の文字の用ひざま、きは〳〵と定めがたければなり。其のきはやかに定めがたきは、もと濁るべき詞を、必ず濁音の文字のみにて書けるものにあらざればなり。鈴の屋の説は、あまりに事をくはしうせむとして、古の清濁の後の世と異なる事あるを、たしかに知らるべきあるを見て、すべての詞を、其の例にならはむと思ひ入りたる心の、一たびなづみ、二度なづみ、つひにおもひまどへるなり。濁るべき詞に清音の文字を用ひたる事、甚だいちじろき證ある事にて、あまりに目にちかき事なるを、この翁考へもらされしは、いと〳〵いぶかしきわざになむ。さて其のにごる詞に、清音の文字を用ひたる證有りといふは、

萬葉集中に、かくぞ、しかぞ、なに〱ぞなにしける、などある「ぞ」の詞、皆「曾」文字を用ひたり。これ曾はまさしき清音の文字なるにはあらずや。かゝる類のぞの詞、叙、序、などいふ文字を用ひたる所も多かれど、夫は猶少きかたにて、曾文字を用ひたるは、いく百千とも數へも盡しがたし。さて曾は清音なる事、もとより論なければ、己曾、許曾、など用ひたる事も、いくそばくといふ事を知らず。これまた〱濁る詞には、清音の字をもかね用ふる、いちじるきにはあらずや。てにをはの詞のみ斯くなりといふことわりもあるまじければ、いづれの詞にても、濁る詞に清音の文字を用ひたる事有ること疑なし。かゝれば先達の定めいはれたる說、うごくまじうこそおぼゆれ。おのがにしごりのやにて書講ずる日を、月の五日といふ日ごとを、日本紀の日と定めたれば、八月五日、れいの人々まうで來けるが中に、長尾景寛が問へらく、古言のすみにごりは、いかゞ定めてか讀み侍るべき、近き頃遠江人のものせる清濁考に從ひ侍らむか、いかゞと問へり。かの清濁考くはしくも見ねど、從ひがたき事多し、清濁の事は、師のをしへられたるには、清むべき詞に、濁音の文字を用ひたる事はなく、濁るべき詞には、清音の文字をも通はし用ひたり、是にて古書の清濁は事つきぬべし、古の清濁に、正しく今もことなりと覺ゆるも、まれまれにあれど、今よりはこと〲くは、さだかに知るべからねば、大かたは今の世にいひなれたるに從ひて有りぬべしといはれたり、この說によりて有りぬべしといへば、景寛いへらく、古言の清濁ことごとくその證ありて、今とは異なるよし、かの清濁考にいへるを、それをとり給はざるには、別におぼし定めたる事ありやといふ。おのがいはく、さる事なり、わが師說にしたがふ事、考へ得たる事あり、されどこゝにはまのあたり盡し難しといへば、さらば其おぼむねしるして見せ給へとあるに、けふ此の書かうずるにいとなし、後の五日を待ち給へとて、其の日はわかれぬ。かくちぎりたれど、一日二日のあひだに、したゝかにものせむ事はものうければ、いさゝかおもふ所しるしつけて、景寛にあたへぬ。この清濁の事、猶いふべき事も、更に考ふべきもいと多かれど、それはかさねてこそものすべけれ。これはたゞかたはしばかりになむ。

眞乘院雪岡禪師のもとへ

鹿の御苑の御ありさま、いかにとも訪ひたてまつらで年經侍りぬるは、塵の世にかゝづらふ身のならひとは、おぼしも汲ませ給ふべけれど、かくまでおこたりが

ちなるこそ、罪さり所なうおぼえ侍れ。しかはあれど、菜摘み水汲み給ふらむ御いとまに、はかなき花紅葉の、あはれわすれぬ御心のみやびも、猶むかしにかはらせたまはで、衣のうらの玉のみかは、御ことの葉の光をさへみがき添へ給ふとは、萩が花咲く宿に、をり〳〵おとづれ給ふにつけて、おぼろげならず傳へ承るぞうれしき。まことやかの蘆菴の翁は、年頃うらなくむつびかはし給ひつるを、過ぎにし初秋に、草の上の露よりももろく見はて給ひぬとなむ。さるはをしみ給はむ御なげきはいふもさらなり、よそに傳へ聞き侍りてだに、けふは人こそと、袖うちしぼり侍りぬ。此の翁しも、末の世のにごれる流れを捨てゝ、淸き河瀬の遠きみなもとをたづねて、古人のことの葉の、高き心ばへをよく汲み知りて、さらに人をもよくいざなはれ侍りしかば、おのづから其の門をふみならせしあたりには、心あがりしたる歌人なむ多きといふめるは、まことに翁がことたて初めししるしありとこそ、おぼえ侍るなれ。はやくより、其のつねの心おきてをきくに、わがあがたゐの翁のをしへのおもむきに違ふべくもあらずなむおぼえ侍りしかば、こととひかはさぬものから、猶心しりの人のやうに、したはしう思ひわたり侍りしやは。あはれ常なきは世のならひに侍れど、ことわりの齡なりとは、えも思ひはるけがたうなむ。

さしも世に高く聞えし松風のしらべ絶えぬといふがかなしさ

あらましかばとは、たれも〳〵このごろのくりごとにいひ出で侍るになむ。あなかしこ。

おなじ禪師のもとよりおくられし雅俗辨を論じてこたふる書

七の寶のよそほしきあたりに、あたらしき春をむかへたまひて、御法の花のゑみさかえておはさうずとうけ給はるは、まづこそよろこばしけれ。春海も事なくて年をかさね侍れど、いまは六十にちかくなりにて侍りぬるに、いとゞ何をしてかくいたづらにと、思ひめぐらし侍るにつけても、さらに聞えむかたなきこそわりなきわざなれ。この頃芳宜園の翁がもとへ御消息賜はりつるを見侍るに、かのなにがしが歌の事ども、翁があげつらひたりしついでに、春海もことくはへ侍りしを、又とがむる人のありとて、其の人のいへることども書いつけて、春海にも見よとて賜はりしは、うれしうなむ。されどかのあげつらひは、たゞとみの事にて、ふかくも心せでものし侍りつれば、ひがごとのおほく侍らむは、もとよりさる事ならむかし。さるは名をもかくし侍りて、

わがともがらのわざなりとは、人にも知らせじとての戯に侍りしを、いかなる人のいひもらし侍りて、さはまめやかにさいなまれ侍る事ぞと、今は悔い思ひ侍れどさらにかひなきわざになむ。又かのあげつらひの後に、歌よまむずる事のおほむねを、いさゝかしるし侍りしを、いたくことわりにそむきたりとて、雅俗辨といふものゝ出で來しをも、さらにしめし給へるは、かへす〴〵もうれしうなむ。その辨といふを、くりかへし見侍るに、春海が心には、猶うべなひがたき事こそ、おほう侍りけれ。今上人のために、春海が思ふところくはしう聞え侍らむこはまけじだましひにて、あながちに人に勝たむとのすさみには侍らず。たゞわが上人にへだてなう聞ゆるなれば、かならず人にな見せ給ひそ。かゝる事は、おの〳〵立てたる方侍るものに侍れば、人人おもふところ異ならむは、さてもありぬべき事なり。さるを、しひて我のみもの知りがほならむは、あらそひのはしとなりて、おもほえず、人の心をうごかす事の侍りぬべければ、いとつゝましうこそ。春海が歌よまむずる心をいふに、もろこしの聖の詞を引きていひ侍るは、わがみかどの事をいふに、もろこしのためしを引き出でむ事は、いかにぞやとおもふ人も侍るべけれど、これには故ある事になむ。およそわがみかどの、いにしへの人の歌の事、あげつらひいへる事は、ものに見え侍らず。たゞかの貫之ぬしにいたりて、はじめて古今集の序に、歌の心をばあげつらはれたり。かゝれば今にありて歌の事あげつらひ侍らむは、貫之ぬしをこそもととはなし侍りつべけれ。さてその貫之ぬしのしるされたる趣を、いかにぞと見るに、もはらから歌になずらへよそへて、かしこの事をかりて、ここの歌の心をば、あかされ侍りしなり。こはいかなる故にしかるぞと思ふに、からもやまとも、歌はまたくおなじものなればなるべし。かゝれば春海が歌の事いひ侍るも、貫之ぬしのをしへによりて、もろこしの事ども引き出でゝいひ侍るにて、聖ののたまひ置きしことを、より所となさむ事は、人のうたがふまじき事とおもひ侍ればなり。わが私の心にのみはかりていはむ事は、たとひいかばかりたけきことわりありとも、そは公のあげつらひとはいひがたくこそ侍らめ。そもそも歌は、人の心にうちおもふまゝを、見るもの聞くものにつけていひ出づるわざなる事は、誰も知り侍る事にて、いにしへも今も、それ然らじとは誰かおもひ侍らむ。されど其の心をのぶるに、しな侍ることにて、みやびかなると、さとびた

るとのわかち侍ることなり。そのみやびかなると、さとびたるとのけぢめは、いかにわかつべきぞといふに、おなじ心をいふにも、詞あやありて、いひざまの長閑にあてなるを、みやびたりとし、詞あやなくして拙く、心のあらはれていやしきを、さとびたりとは定め侍る事になむ。かの子夏が詩の序に、情發ニ於聲一聲成レ文といひ、また主レ文而譎諫。言レ之者無レ罪。聞レ之者足ニ以自戒一など侍るも、みやびごとは、必ず詞のあやあるをむねとなすべき事の本をいへるなり。文を成すといひ、文を主とすといへるにぞ、ふかき味ひは侍りける。また言レ之者無レ罪しか〴〵と侍るは、そしるべきふしも、うちつけにはそしらず、うらむべきふしもたゞちにはうらまずして。詞にあやをなしていひて、ゆるやかに其の心を知らすが、風雅の本旨なるをいひ侍る事なり。されば譎諫とも、風諫ともいへるなり。もし人をそしるに、うちつけに拙く心をあらはし、人をうらむるに、たゞちに思ふまゝをすげなくいはむには、いたづらに人のいかりをおこさしめて、これをいふ人罪を得むことうたがひなし。そはかの直情徑行といふものにて、みやびたるわざにはあらざるなり。かの溫柔敦厚詩敎也と聖ののたまひけるも、主レ文而譎諫といふ心を示されたるなり。されば孔子の正義にこれを釋して、依違風諫不レ指ニ切事情一故云ニ溫柔敦厚是詩敎一也ともいひ侍りき。この正義の說を合せ見て、詩の序にいへるも、このひじりの詞も、其のむねおなじき事は明らかにて、これにて詩のおほむねは盡き侍りぬべし。春海さきにこのあらましを、かつ〴〵いひ侍りしを、かの辨つくれる人の見て、いたくとがめ侍りしは心得ず。そは春海がわたくしの心に、おもひまうけていひ侍りしにはあらず。經傳のむねをのべ侍りし事なるをや。又かの辨に、溫柔敦厚を詩の敎との聖語は、詩書禮樂をあげつらふ時のことにて、うちまかせて、かゝらでは詩にあらずとは言はれまじきなりとあるは、しひて私の心をたてむとて、難じ侍るなり。詩書禮樂をならべてあげつらはむ時にしも 詩のおほむねをば宣ふべき事には侍らずや。とにかくに溫柔敦厚のおもむきにそむきたるは、風雅の道にはあらざる事になむ。又辨に、風人の心は、からも大和もひとしかるべきことわりにて、情のうごくにまかせて、はげしくも、やはらかにも、いひ出でむこそ、思無レ邪とあるにもかなふべけれとあるは、いと〴〵心得がたし。先づこの辨つくれる人は、風人といふ風字の心をば、いかに心得たるにか。鄭氏が毛詩の箋に、風化風刺皆謂ニ譬喩不一レ斥

言也と見えて、風とは、ものによそへて言ひて、うちつけにあらはには心をいはざるをいふなり。されば貫之ぬしも、この風の體なる歌をばそへ歌とぞ名づけられ侍りける。さて風は六義の一つなるを、詩人をさして、風人としもいへる事は、いかなる故ぞといふに、詩は六義ありて、おの／＼其の體ことなれども、詩の源(みなもと)は、風を第一とする事にて、もろ／＼の體、皆この風の心をかねざる事なくて、かの風化風刺などいふが、みやびごとのもとなればなり。此の風人といふ名の侍るにても、心にうちおもふまゝを、あやもなくいひ出でゝ、直情徑行などいはむばかりなるは、いたくみやびごとの道の旨にそむけるわざなる事を知るべし。さるを情のうごくにまかせて、はげしくも、やはらかにも、いひ出でむと侍るは、あまりなるいひごとにぞ侍らむかし。はげしくと侍るは、いかりのゝしり呼びさけぶ時に、そのいかりのゝしり呼びさけぶまゝをも、詩歌にのすべきものとおもへるにや。風人の口より、いかでさる事はいひ出で侍るべき。古より今にいたるまで、からにも、大和にも、歌にさやうなるは絶えてなき事になむ侍りける。さてしかはげしき心をも、いはでかなはぬ事ありて、風人のいはむには、さは聞えぬさまにいひて、おのづからに、そのおもむきを知らするやうにこそ、いひ侍るべけれ。さてしもみやびごととはいふになむ。又この思無レ邪といふ語をこゝに引きたるは、いかなる故にか。此の語は、魯頌の詩の一句を、聖の引き出でゝのたまへるにて、ふるき注さくに二つの説あり。其一つは、三百篇の詩を學ぶには、此の魯頌の一句に思無邪といへる心をむねとして學ぶべしと敎へたまへるなりといひ、又一つは、三百篇の詩多しといへども、その詩の心、皆正しき義理にかなひたる事、この思無レ邪とあるにそむける事なしと宣へるなりとせり。今いづれの義にしたがひても、大和歌の事をいはむに、なずらひに引き出づべき事にはあらぬを、此の辨つくれる人は、此の聖の詞をば、いかなる事を宣へるなりと思へるにか。こはうちあはぬ事になむ。其の心をもよくわきまへ知らざらむ事を、みだりにより所となして、引き出でつべき事かは。今辨つくれる人の心をくみ侍るに、歌は心におもふ事をいふものなれば、詞にあやをなさでも、心のまゝをいひ出でむを、まことの歌とし、詞をかざりあやをなすは、とりつくろひたるいつはりごとのやうに思へると見えたり。こは歌はまろはだかなるがよしなどいへる、えせ歌人(うたびと)のひがごとを、まことなりと信じ

て、いたくおもひまどへるにて、風雅の源にくらきなり。歌は心におもふまゝをいふものなれど、そのいひざまにあやあるをこそ、風雅なりとはなすべけれ。そのあやをなすといふも、いつはりてつくるにはあらで、おのづからなる詞のにほひなり。たとへば、よき人のものいひは、おのづからに品たかく、しづのをが口つきは、おのづからに品ひきゝが如くなるをいひ侍ることなり。さて末の世にいたりて、この詞にあやをなすにひかれて、浮華にながれて、いつはりたるふしなど出で來らむをこそ、わろしとはいふべけれ、詞にあやをなすは、文雅の本なるを、おしこめて狂言綺語なりなどいひて、そしるべき事には侍らず。又今の世にありては、心のまゝをたゞにいひ出づるにも、雅なると俗なるとあり。あやをなして詞をかざるにも、雅なると俗なるとは侍ることなれば、其のけぢめをよく考へおもひて、其のおもむきをえらばずしてはあるべからず。さて詞にあやをなすは、おのづからなる言の葉の道にて、からの歌ももとよりさる事にて、また我が國ぶりも、またくおなじ事になむ侍りける。さるをいにしへの歌は、たゞ何のあやもなくて、うちおもふ事をいひ出でたるまゝのものとおもへるは、古の歌のさまを、よくも思ひわきまへずして、みだりにさはおもへるにて、いと〳〵古にくらきなり。今そのおほよそをいひ侍らむ。かのすさのをの尊の御歌に、八雲たつしかじかとのたまへるは、其の御心は、たゞ妻ごめに八重がきつくるとのたまふべき事のみなるを、しか御詞をかざり給ひて、うちかへして宣へるが、御詞のあやいみじきなり。かく御詞のあやあるによりて、御心もこもりて、御詞の外に、ふかき御おぼしのほども、思ひやられ侍るなり。又歌の父母といへるふた歌も、難波津の歌は、一首のおもてはたゞ花の事をいひて、あらはには其の心をいひやぶらず。安積山の歌は、山の井をかりて、詞をのどかにいひおこせるなど、皆詞をあやなせるにて、こをからの歌にくらべ見るに、かの風人の本旨にぞよくかなひ侍る。すべて詞をおこすに、かならず枕詞をもちひ、序歌などいふすがたのおほく、譬喩の歌などいふ事の侍るにて、いにしへの歌は、詞をかざりてあやをなせるものなる事、明らけくして、あやもなく、たゞに思ふまゝをいひ出づるは、かへりて後の世の事にて、みやびたる言の葉の道の源にそむけるわざなる事を知るべし。さて世くだち行き、時うつろひて、此の詞のあやこまやかになりて、心も詞もふかく巧をもとむる事とはなり侍りにけり。さ

れど花山一條の御時までなるは、心にいつはりたるふしなくて、まことをうしなへるさまなければ、これよりして上つかたの歌は、猶かの風雅のむねにそむかざるが多くなむ侍りける。これよりくだりて、後鳥羽土御門の御時にいたりて、人人ことざまなる歌のすがたをこのみ侍りて、いつはりたるふしを多くかまへ、まことをうしなへる事をつくり出で侍りてより、まことの風雅のおもむきは、かくれ行き侍りけり。さてその後、かの爲兼大納言などの、新古今の手ぶりの巧にすぎたるを、ふたゝび學ぶべきことならずと思はれたるは、さる事に侍れど、そをあらためむとて、たゞ打ちおもふまゝをいひ出づるをのみ、よき事とおもひあやまられて、詞はえらむべきものともおもひたらず、いといやしげにあらびて、あらぬさまなる歌をよまれたるは、曲れるをためて、直きに過ぎたりともいひ侍らむ。これもまた風雅のむねにはいと遠くなむ侍りける。いまこゝろみに、もろこし人の詞をかりていひ侍らば、新古今の歌は、纖巧輕佻なりといふべく、かの大納言の手ぶりは、曝露率易なりとこそいひ侍らめ。しかれば歌は、詞のあやあるは、みやびごとのまことのすぢなれど、あまりに詞をかざらむとして、纖巧に引かれて、まことを失はざらむやうにありぬべく、又たゞごとに、うち思ふ心のまゝをいひ出づるは、うたのもとづく所なれど、率易といはむばかりにつたなく、心詞のあらびざらむやうにありぬべき事なり。このふたつの趣をあやまらざるを、まことの風雅のむねにかなひたりとこそいひ侍るべけれ。またたゞごと歌といふ事をとなへ出でゝ、それを歌のまことのさまなりと思へるも、いみじきあやまりなりたゞごと歌といふは、歌のひとつの姿にて それにはまた一つのいひざまある事にて、なほ詞のえらみなきにしもあらぬ事に侍るを、ちかき頃の人の、たゞごと歌とてよめるを見れば、たゞ何の用意もなく、心詞あらびていといやしげなるは、かたはらいたきわざになむ。いにしへの人のたゞごと歌といへるは、いかでさるたぐひならむ。かにかくに、これも文雅といふことの本をわすれたるわざにぞ侍りける。さはれかくやうに人のさがいふことは、いと〳〵あるまじき事にぞ侍る。あなかしこ、このふみ見たまひたらむ後には、とく〳〵かいやりたまひてよ。むつきはつかあまりやうか。

目寛のもとへおくる書

過ぎし頃は、例の夜とともにかたらひあかし侍りて、心ゆくわざになむ。いよゝやもひおこたらせたまふや。あしたゆふ

べ風すさまじうおぼゆるをりしも、物つつましうみづから心添へ給ひねかし。過ぎし夜御ものがたりし侍りしふし、冷然法師のまで來て、伊勢物語の傍注といふもの見侍りつるに、御風の宿禰の序こそ、いとつたなけれといはれしやつがりそをいまだ見侍らねば、ともかうもこたへざりしを、この頃ふみあきなふ人のもたりしを取りて見るに、こはいと心もせで、とみに書かれたるものにや、げにも法師のことの如し。されどかゝる事は、後よりとにもかくにもなすべきやうなければ、さてもありなむか。たゞ氏のかきざまのいかにぞやおぼゆることあり。荷田を閩田と書かれしは、何によられしにか。いにしへ弘仁の時、姓氏錄えらばれけむよりこなた、姓氏の文字は正しき定めある事にて、みだりにわたくしの心もて文字を書き改むべきことにあらず。大江の氏も、本大枝と書きつるを、音人の卿の表たてまつりて、大江と改めむことを請はれしかば、やがてみことのりありて、ゆるし給ひつるより書き改めしなり。賀茂と鴨も、その祖は同じく、こと葉も同じかれど、かく書き分ち來ぬれば、そをみだりたる人はあらず。かゝるためし猶いとおほかり。又東萬呂在滿などの、かきしるされしもの、あまたあるを見るに、みな荷田とこそあれ、かくやうにことざまなる文字を書かれし事はあらざりき。おもふにこは、蚊と閩と、音同じければ、閩を加の假名に用ひられたるものならむか。さらばいとあやまれり。ひろく字書を考ふるに、蚊も閩も、音文とはあれど、蚊蝱の蚊を、閩と書きしことは、物に見えず。閩に蚊字の義なきことはもとよりなれば、加とは讀みがたかるべし。閩は地の名にて、その語のもとは虺蛇の事より起れり。そは説文に、閩東越蛇種也故字从虫門聲と見えたり。もし強ひて此の字をわが國の言葉して讀まむとならば、へみとはいひもしつべし、いかで加と讀まるべきや。かゝれば、いにしへより書き來れる文字を、かく書きあらためむ事、我が國のいにしへのおきてにもそむき、またもろこしの文字のことわりにもたがへば、かならずなすまじきわざなり。たゞちかき世の博士たちのくせにて、姓氏の文字をみだりに書きなす事のあなるは、わがいにしへをも考へみぬ人のわざにて、いふにも足らず。いかでわが國の學びする人の、さるよしなきならはしをば學ぶべき。此の宿禰世に在りし時、しるしおけるもの、一くさだにあらねば、なか〳〵に、かゝるものゝはしゞ殘らむはあしかるべし。はた心あらむ人の見て　あなづりわらはむこそ本意なけれ。

宿禰をばたゞ名のみこと／＼しういひつたへてありぬべきなり。季鷹の縣主今は世に名高かれば、かの傍注のおこなはれむ事、此の序のあるによりて、光を増すといふなるよしもあらじ。かつこの序なしとて、その書のおほよその心、知られぬふしも見えず。こはかの縣主にもあひはからひ給ひて、いまより後の本には、除き捨て給ひねかし。宿禰世にありし時は、おのれもいとうるはしうし侍りつるを、今かゝるものをかたはらより見侍るも、いとめやすからず思ひたまへらるれば、くはしう聞えまゐるなり。あなかしこ、人のさがいふとな思ひたまひそ。

寂阿におくる書

をちつ日は、むぐらがもとをとはせ給ひて、ゆくりなく御物語聞え承はりしは、いとうれしうなむ。とはせ給へるをぢをぢ、御こたへとく聞えさせつべきを、老いほけ侍る身の病さへ加りて、はか／＼しうも物し侍らざりしは、いとなめげなるわざになむ。宣ひし事ども、しづかに考へ侍るに、先づは御心用ひのくはしき、御學びの廣き、さらにたぐひ有るまじうおはするこそ、めづらかなれ。己がかどなく、心のおくれたるに、今はよろづにもの忘れがちなれば、とはせ給ふことありとも、かしこき御耳を廣むべき事も何か侍らむ。されど、御詞はそむかじと思ひ侍れば、あらぬひがごとを、ひとつふたつ後にかいつけ侍り。猶申す事たがひ侍らむをば、さらにかへさひをしへ給はらむ事こそあらまほしけれ。あなかしこ。

「るゝ」といひて「ばかり」とうくる詞の格。

二十一代集のうちに、「るゝ」といひて、「ばかり」とうくる詞、いと稀なり。「る」を一つはぶきて、わするばかり、などいへるは、八首にもあまりてや侍らむ。また拾遺に、

春の野にところもとむといふなるは二人寢ばかり見出たりや君

とあるも、「る」を一つはぶきいへる格なり。然れば「ばかり」は、必ず「と」とうくる格と同じとして、定むべきかと思ひ侍るに、猶しからず。新千載集雜中に、爲家卿、

そむきけむ親のいさめのかなしきにはるゝばかりの道を見せばや

又後撰、

春くれば咲くてふことをぬれぎぬにきするばかりの花にぞ有りける

此二首などは、「るゝ」といふをうけたる格なり。然れば常に定まりていふ詞もあれど、又時にとりて變格もありと見えたり。かの「と」といふ詞の格にも、「るゝ」といふ詞よりうくる事たま／＼

はあり。あながちになづみがたくや侍らむ。

「いはゆる」といふ詞古くはうつぼ物語に見え侍り。「いへる」を延べて「いはゆる」といへるなり。「はゆ」の反「ふ」なれば「いふ」と云ふ語なれど、音を通はして「いへ」るをのべて「いはゆる」といへるなり。通音にて、反切をかり用ふること、古言に常にあり。萬葉の「ふぐし」は「ほりぐし」を約めたる語なり。さるは「ふ」は「ほる」の反なるを通はし用ひたり。「ほりぐし」とはいふべく、「ほるぐし」とては物の名目にいふ詞ならざれば、「ほる」の反をかりて、此の「ほり」の語をつづめたるなり。此の例多く侍り。

　くめ子君の御もとへ

おふけなくも御せうそこ賜りつるかな。そは山里の御すまひの、世にしづけくおはしつるほどよりも、かへりて歌にのみ御心よせたまふと、をしへたまはるよ。さるは御心ゆくわざにこそおはしまさめ、と思ひやり奉りぬ。此の頃ふたらの親王の御會の歌ども、めし給ふなるを、よみ出で給はゞ、うち〳〵にやつがりにも見せ給ひて、よしあし問ひたうびなむと宣はするは、いともかしこきわざなり。かく才みじかく、心つたなき身の、いかでさるさだめをばまうし侍らむ。さはいへ、故縣主のちなみにおぼしとり給ふめれば、なか〳〵に物つゝましげに、へだてあるやうに侍らむは、御こゝろにもそむきぬべければ、およばぬ心にも、おもひうる事の侍らば、心おくことなくぞ聞えまゐらすべき。ひがごとのみ多からむをば、なとがめ給ひそ。たゞおほせごとにそむかじとて、かくはこたへまゐるになむ。あなかしこ。おもと人のもとへ答へまゐる。

　さがらの殿の北のかたの御もと
　へかへし

くはしうしめし給へるは、いとかしこうこそ。過ぎし日は、御帳のまへちかう侍りて、みものがたりなど、くはしう聞き承り侍りしは、いとうれしきものから、猶おふけなきつみは、さりどころもなうおぼえ侍り。ことに尼君の御まへにも、何くれとおほせごとなど賜はりしは、いとゞ身におはぬ心ちなむし侍りける。よの子の集、日記など見せ給へるは、いとうれしうなむ。さるは、

　木曾路日記

ふみ見るもうれしかりけり木曾の山分けし昔の跡をたづねて

　さほがは

おとにのみ聞きわたりつるさほ河の淸き流をけふこそはくめ

とぞおもひ侍るは、いとみだりがはしう

侍れど、かの御まへにも、聞えあげたまへや。

おなじ北のかたの御もとへかへし

兼題の御歌賜はれるは、いともかしこうなむ。御言の葉の露を光にて、むぐらの門をもちてはやし侍るべく かつは集ひ侍らむ人々にも見せ侍らましかば、かたゐ翁がおもておこしにもと、よろこび聞えまゐらせむも、なか〳〵にてなむ。あなかしこ。

越前のかうの殿に侍ふきち子のもとへ贈れる書

とのにまうのぼり給ひて後は、おのづから雲ゐのよそなる心ちし侍りて、たつ霧のほのかにのみ思ひまゐらせ侍りしを、きのふゆくりなううちおどろかさせ給へるは、荻のうれ吹く初風よりも、いとめづらかになむ。さるはおもと人たちうちつどひ給ひて、來むよひの、星の逢ふせをしのび出で給へる御ことのはども二巻ふりはへてしめし給へるなむうれしき。先づ見もてゆき侍るに、色ににほへる千ぐさの露を分け入りて、花野の錦におりたち侍る心ちのせられ侍りて、めもあやなるは、誰も〳〵たなばたつめの手にやあえ給ひけむとおもふも、こよなき御すさみなりや。げに大かたのよに似ず、みやびごとこのませ給ふ殿の御手ぶりこそしるかりけれ。かゝるにつけても、ぬひ子のとじが世にありがたかりし宿世の、おもだゝしう侍りしも、いまはひと時の夢とおもひなさるゝ常なき世のさがこそ、わりなきわざに侍れ。昨日はかのとじが四十九日にあたり侍りて、人々歌などよみてしのび出で侍りしを、御せうそこ承はるにも、いとゞあらましかばとなむ、思ひつゞけられ侍りぬる。人々の歌どものなかに、千技子が長歌ひとつ書いしるしてまゐらするを 殿には刀自に親しかりしごたち、あまたおはすめれば、しのぶのくさつみはやし給はむをりあらば、見せ給ひねかし。猶人々のも侍れば、そはさらにも物し侍りぬべし。今はいとなきほどにて、もらし侍りぬ。あなかしこ。

琴後集巻十四

雑文

河づらなる家に郭公を聞くといふことを題にて

物語ぶみのさまにならへる文

年ごとに初瀬にまうでけるが、今年はう月ばかりにとて、思ひたちにけり。先づ夜一夜御堂にこもりて、例の河づらのやどりにおりぬ。おくの方は人多く居こみて、ぜじやう引きわたし、屏風たてまは

したり。衵きたるわらは、ひすましめくものなど、出で入るを見るに、こはさいつ日奈良坂にて行きあひたる人々なりけり。あじろのやつしたるに、ことさらに、卯の花あまた折りかざして、やりなしたるを、よしある人と目とゞめられしに、ゆくりなくこゝにやどりせしもをかしければ、さうじのもとによりてかいまみれど、物へだてたればよくも見えず。かり衣すがたのきよらなるをのこどもうち寄りて、ごたちは明日なむこもり給ふべきとて、はらへのまうけなどし、おほみあかしの事どもとりまかなふ。さるはいづれの殿の女房にかと、たゞならず覺ゆ。暮れぬれば河づらに向ひ居て、月の出づるを待つほどに、物おとしづまり行きて、岩こす波高くひゞき、山風遙かに吹きおろしたり。村雨の雲も、名殘なきまで晴れて、くまなくさし出でたるは、霞も霧もとぞおぼゆる。更け行くまゝに、今は人めなしとにやあらむ、月見むとて、おくの人々はしちかう出で來ぬ。いよすいとまばらなれば、さし入る月の光にさそはれて、すきかげあらはに見ゆ。白ききぬきたるも、また二藍、なでしこなどもあり。まみつらつきなどは、さすがに扇かざしたれば、分かず。すがたは皆あえかに、らうたげなる人と見えたり。二本の杉はいづこにかあらむと、水上を遠くのぞむもあり。又うれしき瀬と名にたちたるは、なつかしき水のながれよなどいひて、おばしまにより添ふもあり。月ややかたぶきなむとする頃、郭公の二聲三聲、まぢかく聞きなされたるは、たぐひなく艶に、をかしき夜のさまなり。一人が、

こゝをせに鳴くほとゝぎすかな

と口ずさみ出づれば、またひとりが、

初せ川なみまに月もやどる夜に

とそれが本をつきたるは、なれたる口つきと聞ゆ。かゝるをりに歌よまでやはあらむ、よしやうちつけなるわざも、なさけ知らむ人は、とがめじなどおもへば、あふぎのつまに、

月見つゝ寢られざりけり郭公ほのかになのる聲聞きしより

と書きて、簾のもとにおし入れたり。こを見て、あなうたてや、あだし人ありけりとて、皆おくのかたにかくれむとす。されど、みやづかへ人の、世なれたるきはなればにやあらむ、いたくはぢらふとにもあらで、あふぎをばとりて入りぬ。かゝる人やどれりとも知らで、くまなく見られしこそねたけれ、さはれかへしせざらむもすさまじかるべし、などいふ聲、かすかに聞ゆれば、猶おくのかたをまもりをるに、やがて白きしきしの、ふかく

たきしめたるを、その扇に結びつけて、
郭公月にかたらふしのび音をいづれの
　雲のひまもらしけむ
とあり。今一聲のとおもふも、あながちなるに、月ははや山のはにかくれて、川波の音のみ高う澄みわたりぬ。

　對月言志といふことを題にて書けることば

いよゝ高うかゝげて、ふけ行く影をひとりうちまもりて、つら〱思ひみれば、おのづから心の塵も名殘なくて、なべてよろづのことぐさこそ、くまなく思ひ出でらるれ。さるはちぐさの花に露のにほひを添へ、絲竹の音のひゞきをすますらむたぐひの艶になまめいたる、よのつねのをかしさをば、更にもいはじ。いでやすみのぼる光の、高くあらはれて、人のめとゞめむに、まばゆきばかりなるも、時のまに、あやなき霧のまよひにかきけたれて、たゞやみかとばかりたどり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西になる事のとゞめがたきや、うき雲のさだめなくて、きのふは榮え、けふは衰ふる世の有樣こそ、先づおぼゆれ。又あさぢが露にやどれども、所せくもおぼえず。海原の波にうかびても、廣きを知られざるは、たかきみじかき、おのがじしのすみかのきは〱につけて、身のやすかる心しらひによそへつべきもあはれなり。またおち瀧つ、せゞのしら玉は、これがために、心淸さをませど、野澤の水のにごりに宿りても、さらにみしぶのけがしさをきらはざるは、世にたがひ、時にさかふ事なくて、光をつゝみ、跡をかくすとかいふらむ、さかし人の心のおくさへ汲みしられぬべし。又有るを有りとも見ず、無きを無しともさだめあへぬ、ひじりごゝろのさとりも、たゞこの光をみがきてこそ照すべけれ。かゝれば、いたづらにわが世のかたぶくをなげき　老となるものとのみうちながめむは、いともいとも心あさしや。

六かたに見てやは過ぎむ空の月ちゞに
　心をおもひよせなば

　月花のあはれをことわることば

花をめづらしみ、月をあはれむならはしなむ、ながれての世はさらなる、そのみなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞおこりける。花に心をなぐさめませしは、わかざくらの宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原奈良の御世にいたりては、歌人おほく出で來て、かたみにみやひをかはし、こゝろ〲に思ひをのぶる事、皆月花をもて、心の種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、此のすさみいよ〱さか

りになりもて行きて、あるは物おもひなき春を花によろこび、くはゝる老を月になげき、あるはさかしきも愚なるも、たよりなき所にはなをたづね、しるべなきやみに月をたどり、あるは花のいのちを神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、また下が下なる、たき木こる山がつ、いぶせきふせやの賤の女までも、月と花とに心をよせざるなむあらざりけらし。さるはかけまくもかしこき、おほみあそびの、きはことなるが中にも、月と花とのためには、時にのぞみて、ことさらに宴の莚をまうけ給ふ事、掟たがはす、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさま〴〵なる世々のあとを見るに、いにしへも今も、高きもみじかきも、月と花とをうむかしみ思へる事ひとしくて、いづれを餘れりとし、いづれを足らずとして、一かたに心よせたる人、たれかはあらむ。しかるを、今にありて、其のよしあしをことわりいはむは、人わらへにもなりぬべし。しかはあれど、これをことわるにゆゑあり。そのおとりまさりは、もとより彼にはあらざめれど、おのがじしうち見る人の、身にたぐへ思はむには、其のよるかたいかでかなからむ。そもそも花は春にありて、にぎはゝしきにより、月は秋にありて、悲しみをぞおこすなる。今このくち翁が心にとりていはゞ、身すでに老いにたれば、つぼめる花のさかり待ち出でむたのしみもなく、品いやしければ、花々しき世を經て、時にかをらむねがひもかけず、たゞ鏡にうちむかふをりしも、かしらの霜を見ては、月の影かとおどろき、傾くよはひをおもひては、入りがたの月ぞ身によそへつべき。かゝれば、花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり、おほよそ人のためには、いかでかまねびもいでむ。

琴後集巻十五

墓碑　祭文

足水翁墓碑

翁、氏は片山、名は誠之、字を子道といひ、また常に足水とよべり。伊勢國壹志郡、菅瀬里の人なり。其の父何がしが時より、江戸の大城のもとに來りて、よろづの交易のわざをもて業とせり。事足り、家ゆたかなりければ、翁の家をつぎては、あながちに富を求むる心もなくて、すべて商人のわざをばおもひとゞまりてせず、淺草の里に、かごかなるすみかをしめて、大かたの世のまじはりをいとひて、しづけき窓に獨り心をぞやりける。其の常に

好める事は、春秋の木くさ花もみぢを、とほく野山よりうつして、手づからおほしたつるをもて、明暮のわざとし、又いにしへ今のうつしゑ、鳥の跡を、からも大和も、廣くつどへて　これをおきふしのともとなむなしける。そは只友とするのみにあらず、よくその誠いつはりをわきまへ知りて、其の品をさへ定むる事、其の道の人も言くはふべき事なしといへり。かゝれば其の家にをさめ持たるは、世に知らず珍しき品なむ多かりける。またわがみかどのふるごとをしたひて、山岡大人のをしへをうけて、ふみ讀む事をしもつとめたりき。ことし寛政といふとしの十とせ、霜月二十五日、病みてみまかりぬ。年は六十あまり八になむありける。其の子何がし、はやくより翁の常の心をしもよく知れゝばとて、おのれに、その在りし世のありさまをしるさしむ。又あひむつびたる人なればとて、橘千蔭に、歌をなむ請ひける。其の歌に、

かた山にたつ杉が枝をさし上る月曇りなく思ひあがりてありし人はも

山口標照がはかのいしぶみ

わがせ、名標照、うぢは山口、山口は其はじめ、平の氏より出づ。その家、とほつおやより、今に五世、江戸の淺くさの里にありて、よゝ家とみ、うぢひろきをもて、市のうちに聞えたり。そのちゝは賢千、今はかしらおろして、名を至言といふ。はゝは橋本氏なり。其のつまは目賀多氏のむすめにて、としつきあひ住みつれど、つひに子はうまざりき。標照いとけなかりしより、世の常のわらはべに似ず、假初のたはわざにも、おやの心にそむける事なく、人となりては、いよゝ父母のこゝろをなぐさむるわざにのみ心をつくせり。かれ其の親をうやまふ、まめなる心のまことをもて、人に相まじはれゝば、うからやからも、すべてむつばひ、家びとも、こゝろをよせて、從ひなびかざるはなかりき。其のなりを治むるにいとまあるときは、歌よむ事をこのみて、ふることのはのゆゑよしを、おのれに問へり。又禰尾のむかしおほゆるわざをしたひて、いづみをくみ雪をにて、心やりぐさとぞなしける。また大かたの世の、こゝろうすきならはしをいとひて、相まじらふ人多からず。唯源信瑞ら、ふたりみたりのみ、その心をかたらふ友になむ有りける、さるを、ことし寛政のこゝのとせ、む月の末より、こゝちつねならざりしが、つひにあつしくなりもて行きて、さつきはつかあまり一日に、みまかりにき。よはひはわづかに二十あまりみとせの春秋をなむへにける。あはれかなしきかも、かゝる人の、世に長からざり

し事よ。そもそも父母の心のやみはさらなり、をちこちのおほよそ人すら、かくと聞く人、かなしみ惜まざるはなかりき。こゝに今はのきはに、其の友信瑞にことづけて、しるしの石に、ありし世の事どもを、おのれしるさむ事を請へり。又其の父至言は、そのかみ鞠よく蹴たるをもて、わがせうと春卿とうるはしかりし友なりければ、左にも右にも、いなむべきわざならねば、つたなき筆をもわすれて、書きつくるになむ有りける。

たぐひなき香をわすれめや五月雨にかぐのこのみはくちはてぬとも

寛政のこゝのとせさつき。

祭二芳宜園大人墓一文

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海、謹みて芳宜園の大人のおくつきのみまへに、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼きて、うなねつきて申さく、あはれかなしきかも、君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、いまそのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齢におはして、我はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびにゆきかひたる時、あしたにまゐるとては、君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべにまかるとては、君の御袖のもとにすかりて、相うるはしみまつれる事、親子はらからにもなにかことならむ。書読むとては、君を師ともたふとみ、歌つくるとては、われを弟ひのつらにぞをしへたまひける。中頃にして、君はつかへの道にいとなくおはし、われは世のさがにかかづらひて、おのづからうときかたにも過ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、われもおなじちまたにうつり住めば、花を尋ぬとては、われ道しるべをなし、月をおもふとては、君が舟にあひのり、うき事もともにうれへ、嬉しきふしもともによろこびて、世にありふるわざの、まめ事も、あだ事も、かたみにへだてなく心をかはせる事、今に二十年、其の初めをくりかへしかぞふれば、あひ友たる事、すでに五十とせにぞあまりける。さるを今おくれたてまつりて、いつの世にかあひみむ、いづれの時にかこととはむ。常なきは人の身のならひぞと知るも、これをいかでかなげかざらむ、かゝるをたれかはよく堪へむ。あはれかなしきかも。文の林よゝにおとろへ、言の葉の道日々にくだり行けるを、賀茂の翁世に出でゝ、今をすてゝいにしへにかへり、青雲の高き心しらひをもとめ、しづはたのあやあるみやびごとをたふとみいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、かれになづみ、こゝにひかれて、猶あやしみとがむるたぐひは多く、たまあひてよ

くうけ引く人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこして、あまねくさとし、廣くいざなひしより、ちかき人はまのあたり相うづなひ、遠き人ははるかになびき來て、いにしへぶりの歌、世に盛になりにたるは、誠に君の力によりてなり。そのみづからよみ出で給へるうたを見るに、ふるきしらべ、新しきすがた、とりどりにそなはらざるはなし。そのいにしへをうつせるは、藤原寧樂の御世におよび、後のたくみにならへるは、堀河鳥羽の御時にくだらず。心におもふ事は、口につくさざる事なく、目にふるゝものは、詞にのせざる事なむあらざりける。これを見て、高きもみじかきも、めで尊まざる人なし。又ことこのみの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君の一うたを得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、ふかくよろこびける。しかるを今、こがねの聲たちまちやみて、玉のひゞき再び聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大かたの世人のうれひともいひつべし。これをいかでかをしまざらむ、かゝるをたれかはしたはざらむ。あはれかなしきかも。わがかくことあげするを、泉のしたにもさやかにきこしめし、天かけりてもはるかにみそなはせとなむ申す。

圓珠菴雜記　契沖阿闍梨著　賀茂吉溪大人標注　平忠夏流大人増注　全一冊

同　雜記　同上　全一冊

此書ともに契沖阿闍梨の見ひ出るまゝ記しおかれしことどもをまれ一あつめとかくしることどもをとり出そてみづから記せられたるを賀茂翁の前書きそへられたるをかねて平忠夏流大人増注せられしまことに此書を読まん人の指揮ともなるべき書なり

實方朝臣家集　藤方歌姫大人標注校正　全一冊

この家集世に流布せるものハ誤字脱文のことおほくよみときがたきものなるをこたび古写本のよきを得て校正し此集に見えたる言の其の勅撰家々の歌集なども載せたるをもあつめて附録せり標注ハ歌の解釈をおほくあげたり

貫之眞蹟本堤中納言家集　石摺一帖　貫之書

此書ハ堤中納言家集を貫之の書写されたるなり此かなの手本にて此帖にまさしきものなし

泊洦筆話第一稿　清水浜臣大人著　全二冊

此筆話ハ近世の哥人のうへにつきて聞えたる事を記しおかれ又ハ近来の世にしられぬ哥人の小伝かきとゞめられたるもおほく又其哥よむ心得となることをも記しおかれたれハいにしへをこのまむ人ハ必見るべき書なり
浜臣ぬしみづから筆話と題しかきおかれたり

源氏物語古寄図考　清水浜臣大人図　一枚摺

此書ハ世にけうときものゝあやしきをよめる同時代の器とりいふ物をみやびやかにかたちを一々うつしおきたるなりそれを今度一枚ものとして刻しあらハせり

自撰晩花集　隠士長流自撰

自撰漫吟集　契沖阿闍梨自撰
清水大人校正

この二集ハそのかみの名だゝる人たち自の歌をみづからえらミおかれたるなれバ誰もめでたき集の中にも殊にすぐれたる書なり

攝政忠通家集

伊能魚彥は下總國楫取あがたの人なり。常の名をば茂左衛門といひき。明和といふ年の末つかた此の大江門にまゐ來て縣居翁に名簿をたいまつり、翁の住み給へる濱町といふ所に軒を並べ、朝夕にしたがひむつびて學の道に心いれつゝ、よく古言の葉のおくがを究められしかば、常につみいでらるゝ言ぐさ、いさゝかも後の世のをまじへず。心のまゝに古言もて新しきことどもいひとられにけり。かくて天明の二年やよひばかりに、齡六十にて濱まちのやどりに身まかられぬ。今も其のうから伊能を氏にて楫取にあるが、その家に傳へもたる家集一卷あり。みづからの筆にて安永五年と六年と二とせのをかゝれたるのみなりけり。猶こゝに寫しつたへ、かしこにちり殘れるあるべきを、何かはかくてのみも此のぬしのみやびに思ひあがれる心の程はしらるゝを、あながちに多きを求めむはえうなき事とて、とかくよみからがへて板にゑらせたる也けり。

文政四年秋

清濱臣

楫取魚彦家集

　春の始の歌　安永五年
皇神（すめがみ）の天降（あも）りましける日向なる高千穂の嶽やまづ霞むらむ
　東（あづま）の比吉（ひよし）の大宮にまうでゝ
春の日の光たゞさす日の御子（みこ）の宮の櫻ははやもさかなむ
　ある人兄の家をうけ繼ぎて、兄の妻のいたくめでたりける紅梅を、その人とかしづきてあるが、それが木に名をおふせてよと請ひければ、やがて刀自が梅とこそよばめと云ひてよめる
しぬべとてとじが植ゑけむ梅の花うめもにつかふ色にざりけり
　正月廿二日源隆（たかし）羊蹄がり人々つどひて歌よみけるに、山の櫻を
白雲の八重たつをちに咲きにほふ吉野の山の山ざくら花
　雉子を
贄人（にへびと）のまつらむしらにあし引のかた山きゞしなきとよむなり
　春の夕隅田河に船を浮ぶといふことを
さねさし。武藏の國は。御心を。廣し御國。梓弓。春かたまけて。をとめらが。はなりの髮を。ゆふ川に。うち出でゝみれば。鷲のすむ。筑波の山は。そがひに。雲ゐたなびき。しみたてる。青垣山。吾（あ）がもすそ。かへりみすれば。霞ゐる。布自（ふじ）の高嶺は。影面に。ときじく雪の。ふりしきて。眞白にみえつ。二山の。中ゆく河の。すみだ川に。舟うけすゑて。おもふどち。遊ぶ此の日は。常にもがもな
　反歌
とほじろく淸くさやけき山河のかはらずたえず常にもがもな
　春の海とふことを
天雲の向伏すをちのわだつみの霞める方ゆ舟ぞみえくる
　雲雀を
春の野に雲雀きかむとゝめくればやへ棚雲の上にぞありける
　布
玉河に玉ちるばかりたつ浪を妹が手づくりさらすとぞみる
　猿をよめる
奥山の木の實とりはむ猿すらも春は

花咲く枝にまじれり

若菜

日ならべて春雨ふりぬけだしくもしめ野の若菜時過ぎむかも

同　旋頭歌

にほどりのかつしか川に朝な洗ふ子朝なにもなりにてしがも朝菜あらふ子

木の花常より早しとふ事を

あし曳の山の櫻ははしきかも風ふかぬまととく咲けるらむ

神に誓ふとふ事を

ちかひてし言葉はかへじ葛城や一言主の神ぞしらさむ

一夜隔てたる二夜隔てたるなどいふ事を人々詠めるに、吾は三夜隔てたるとふ事を

一夜だにありがてなくに二夜過ぎ三夜來ぬ君によゝとぞ泣かる

源秀城が馬の餞によめる

豊國に香春とふ里ありときくかはらできませ年はへぬとも

左京の君より忘貝を賜はせける時

こゝながら遠津磯貝えつるかもかとりの白水郎のかひはあるはも

四月　大君二荒山に登り給ふをかしこみほぎ奉る哥

千磐破。人乎和志。不服。惡氣伎輩乎。掃淸。治給弖。可幾加增布。百歳餘。外國毛。弓弦不鳴。鉾不執。浦安國等。安良計久。鎭賜志。神之坐。二荒乃山波。御繼々。不動祥登。巖之根之。凝敷山。萬代爾。不絶瑞登。落瀧津。佐也計伎山。山杉乃。過去時從。樛之樹乃。彌繼々爾。政中給倍利。御裔之。御孫之命。御祖之。神津三諸爾。今年志毛。參給倍婆。御供之。麻倍都伎美多知。諸之。宦人等。吹風爾。往雲如。御跡先爾。隨奉。國中之。大御寶波。夏草之。靡氣留奈志弖。畏。仕奉都。山川乎。倍奈禮流國毛。御坐爾。伊麻世流如。御園乎。往麻須如。神宮爾。到給奴。御靈毛。天翔末志。見志給比。宇禮志美麻佐武。今之此時。

反歌

靈治波布。神之御稜威爾。眞鳥住。荒伎其山毛。御園等成努。

此神之。鎭母利末世婆。巖疊。恐伎山毛。御坐等奈理幾。

同時中津侯御供に仕へ奉り給倍婆奉幣袋歌二首

大君の任のまに〳〵まへつ君草葉おしなみ借盧せすらむ

大君のよさしのまゝにつゝみなく事竟へませと幣たてまつる

同時莵狹清明ぬしに針袋を贈る哥

針袋旅の御爲とおくれども妹こひし
らのまさむ物かも
同源隆羊蹄ぬしに火打袋に添
へて
君が爲ぬへる袋のひだをおほみ日だ
にへずしてとく歸りませ
同那賀維寧ぬしに
うまや路を思ひてまたすすり火打日
も重ねずて歸りませ君
五月の始に遲れて二荒山に登
る人に、紫の火打袋を花にし
てあやめの葉に付けて
昌蒲草かつらにしつゝ遊ばむ日うち
越えまさむあらきその山
中津の君のみもとなる菅根と
ふ人の、みまかりけるをいた
める歌
足引の山菅根の子ねもごろにしぬべ
とおへる名にこそあるらめ
六月朔日中津の君の御前に氷
を奉る歌
とこしへに夏冬ゆけどみな月の今日
しもこほり奉りけり
寄レ驛相聞
驛路のはゆまうまやの早馬のはやく
ぞ人をおもひ初めつる
いさよふ月とふ事と船とを
雲に飛ぶつばさもがもよ山をしみ出
でがてにする月を見てまし
雲に飛ぶ翼あれかも月よみのうかべ
る浪の上こぎわたる
六月の末に旅だつ人をおくり
て
みな月の望にけぬとふ富士の根の雪
消の川やすゞしかるらむ
はらへ
浪の上の塵吹きはらひさやかなる河
瀬に立ちて祓するかも
七月七夕雨
この夕雨は降り來ぬ久かたの天の河
なみこゝにちるかも
秋野
野づかさを霧立ちかくす此の頃はを
とこをみなの花の時かも
中津の御嗣君、新殿に移り給
ふ時、鯉の畫を書きて奉ると
て
新巣の。御巣の御饗に。まつらまく
ほり。網おろし。水沫畫きたり。潛
得し。鰭の廣物是。
莵狹のあかしぬし伊勢の國に
ゆかむとする時、東の海つ道
ゆ、歸さは木曽の山越せんと
て、其のゆきへむ國々の古き
歌ども思ひ出づるまゝに書き
てよと有りければ、書きて送
るとて、其のおくに、
伊勢の國に君がいゆけば上毛野いか
ほの沼のいかまくおもほゆ
千賀眞恒の新室ほぎに

工等が柱築立て今作る新巣の凝烟の
八束垂るまで
　中津の君の新殿にして
海潮の滿來る殿の御庭には遠じろく
さきいろくづあそぶ
　同詠レ月
夕さればたちくる浪にさしのぼる月
も岸べによるかとぞみる
　同詠レ鹿
妻こふと聞きつる宵の鹿の音の夜深
くなくは別るとならむ
　同詠レ霞
かききらし霞降り來ぬ眞玉の玉のす
だれをかくと見るまで
　人をしのびに逢ひしりてあひ
　がたく有りければ、其の家の
　あたりをまかりありきける折
　に鴈のなくを聞きてとふ事を
天飛ぶや鴈が鳴く音はきくらめど近
くある我をしる人ぞなき

　詠レ舟
さきだてる浪ほの上を潮のむたいこ
ぎわたらふ浮寶かも
　八月十四日隅田河に船をうか
　べて
秩父嶺を遠にみさけて久方の天ゆく
月のてれる國原
　望の夜家に在りて
淺茅生のちふの露原露しげみ月こそ
やどれちふの露原
　十六日亦月夜よし、人々とと
　もに海邊に遊ぶ
海神の挿頭の玉やみだるらむ八重を
る浪に月の照りたる
　その夜物の音など吹合すめる
　を
わたの底うまし小汀に至らなむ月澄
みのぼる夜々の笛のね
　中津君例ならずいますがりけ
　る頃、とくさわやぎ給はむ事
　を奉レ禱歌
君が代の長月近し菊の露千年まけな
む御藥ぞこれ
　九月九日同じ御殿の御室ほぎ
　に
大土に所建御柱。天津水に。所練御
壁。御柱と。長く御壁と。平らかに。
おはしたばねと。御室ほぎする。
　同じ御殿にして御母君御手づ
　から摺らせ給へる御衣を賜は
　せければ
千種咲く秋の野深く入りぬれば花す
り衣著て歸るなり
　同「黃葉あやに染む」「花摺衣」
　「九月八日」とふ三くさをよま
　せ給ひけるに
山姫も待つ人あれや夕ぐれはもみぢ
葉衣ことに染めたる
　二
秋萩の花すり衣著る時を胸分けにす

といふべかりけり

三

待ちくてあすかざすべき今宵だに
我家の菊に露おくなゆめ

九月十三夜

おくれさく櫻のめでか長月の照れる
月夜をみるはしよしも

中津の殿の幼君一めぐり日足
らしませるをことほぎ奉る

さにづらふ君が八千代をけふよりぞ
先づ二年とかぞへ初めつる

九月廿五日の夜同じ殿の御母
君の御許に琴笛の勝れたる人
人を召して、終夜あそびし給
ふに、歌よめと仰言ありけれ
ば

常世かも海の宮かも糸竹は田鶴の聲
かも龍の聲かも

同じ月の廿八日に同じ御殿の
御嗣の君の御前にして「軍人
又「寄レ巖相聞」とふ二つをよ
めと仰せられけるに一首にて
まをす

巖すら踏みさぐゝめる御軍や妹が閨
戸をみずてはやまじ

その日御殿の上に鶴の群れ遊
びけるをまをせと仰せられけ
れば

千年の友と思ひてや群田鶴の尋ねて
きけむ濱松のうれに

水鳥

比良山の山おろしの風の寒きなべ志
賀の大和田に鴨がね聞ゆ

かれくになれるとふ戀の心
を

來むとふもこぬ空言になれくて今
はた來じと思ひなりぬる

中津の君難波菅笠とふ御歌賜
へる時

妹がきる難波すが笠水鳥のかづきて
ゆかなには菅笠

十月の始つ方、或人の家に盗
人の入りけるが、書のみをと
りて行きつと聞きて

初月の影をともしみうま人はふみ見
む爲と壁やうがてる

十月十八日、薩摩中將君、備
前侍從君。中津の君の御舘に
入らせ給へる日。お前に侍り
て親しき御なからひをことほ
ぎ奉る歌

茂りあふ五百枝樫原々々に風は吹く
とも霜はおくとも

十一月十日中津の侯御出題

野雪　とりものゝ歌

八千種ににほひしのべを久にあれと
や栲衾おほへるなして雪の降りた
る

榊

眞賢木の榊のうれにおく霜を面白し

とはいふべかりけり

幣

皇神にまつる千坐の置くらにおきたらはせる神のみてぐら

杖

山人の山をさかしみつく杖のつくる時あらむ豊の遊かは

篠

朝日子がさすや岡べの玉篠のたまさかなれやかゝる遊は

弓

梓弓夜音の遠音も守とはなるとふものぞよとの遠音も

劍

春の宮の宮のたちはき太刀が緒をときて遊ばなさ夜はふくとも

鉾

大汝神の命の執りましゝ御鉾の廣にひろりいませ君

杓

相坂の關のま清水ひさごもて汲みても知れや盡きぬ御代とは

蘿

榊葉にゆふとりしでゝいはふなる神の宮人山かづらせり

同じ日人々唐歌うたふ、題「少年行」此の意を大和長歌に戯れよめる二首

うめつ道。武藏の國は。御心を。廣し御國。民草の。豊けき國。其の國の。國のまほらに。大城を。高く貴く。敷きまして。遠く久しく。浦安に。治め給へる。畏きや。吾が大王の。御膝方に。生ひ來し吾ぞ。うら狹く。物は不レ思。天雲の。向伏す極み。天傳ふ。日は照せるを。しれ人の。得まく欲りする。金は。寶と雖云。如レ雲。涌くちふ國ぞ。如レ土。積みて何せむ。百年の。人は不レ在を。天地に。思ひたらはし。萬代に。清き其の名を。語り繼ぐべし。

反歌

白金も金も玉も天地の所賜國ぞなにかなげかむ

丈夫や命死すとも萬代に名は朽ちめやも波頭迦志美思倍

又

取りよろふ。筑波の山の。男之神を。背向に見つゝ。馬並めて。遠方野べに。朝獵に。五百つ鳥たて。夕狩に。千鳥蹈み起し。酒みつぎ。歸らふ時に。走出の。堤に立ちて。遊行女婦が。ふらへる袖を。見つゝ來しかも。

反歌

人の見むことをやさしみ遊行女婦に心は雖レ念不レ云來にけり

霰

山おろしの風もいぶせき曲庵の軒端

もたわに霞うつなり

　源是攸翁去年の冬の宴には歌賜へりしが、今年なき人となりませるを悲しみ思ひて、即ち彼の歌を始にしてよめる

朝倉の。宮の御民の。あへりけむ。龜の齢の。萬代と。ほぎけむ君は。去年のけふ。いませしものを。玉くしげ。ひらきも見ねば。白雲の。棚引きけめや。けふはまさなく。

　反歌

一年に千年や經けむ家に往きていづらと問へど君がまさなく

　いにし十日集會にやごとなき御許ゆ賜へりけるくさ〴〵の物を題にて、後の日奉りける歌六首

　鶉　鴈　雉　御母君より

君が光うつらさりせばかくばかり岸の埴生のにほはましやは

　歌袋　殿の御前より

もろ人は唐の大和の歌うたふ黒き白きを汲みて遊ばな

　心葉のふくさ　女君より

もの丶ふのますらたけをも眞心はのぶくさはひと歌によひすも

　料紙　若君より

風流士のさはにあなるも理ようしろ安かる世にしすまへば

　うちみだりの箱　思ふ人より

人皆は雲か浪かと打見たり野は此の頃の雪にうづめば

　山吹　をれたか　同じく

ふる雪を山吹きおろし花とこそ見つつわがをれ誰がさやは見ぬ

　同廿五日大江眞楯ぬしに馬の餞する歌

豊國の企玖の濱浪なみならず日にけに君をおもひ出んかも

　中津の御嗣君の御許へ薩摩の姫君迎へ給ふべき御契はありながら、姫君いまだいと幼くおはしけるを奉レ祝歌

若草をけふより結び初めませる君が千年ぞいやはるかなる

　酒をよめる

他國にありとふ酒の泉もがおもふ友どち舟うかべてむ

　十二月廿七日大垣の君のみ許に、姫路の君、中津の君、長岡の君、神戸の君等つどはせ給ひて御歌よみし給へりける日侍りてよめる

　御題二つ

　庭早梅

冬ながらけふの御爲といとはやも御園の梅は咲き出づるかも

　しらぬ人

かねてよりか丶らむと我は思はざりきまだ見ぬ人を戀ひん物とは

相聞　二首

浪の音の荒き磯わの白眞砂まなく時なしわが戀ふらくは

玉垂の小簾のたれ簾の誰により千名の五百名にたてる我が名ぞ

詠ㇾ國

大汝少彦名の造らしゝ大八島ぐには廣らに厚らに

年の暮に中津しらす君の御嗣の君ゆ振袖の御小袖賜ひければ、畏み悦びてよめる長歌

深草の。天皇の。大御代に。尾張の翁。百あまり。十まり三つの。極たる。老の身ながら。袖たれて。舞ひ出でし時は。高麗劔。わかき像を。ほめたまひ。ねぎらひたまひ。君がける。御衣たまひぬれ。吾もけふ。殿のわくごの。かしこしや。着ならしまして。袖長く。こくびやすらに。よく縫へる。御衣をかづけり。百とせの。老翁にならひて。かきかぞふ。五十の翁。眞袖ふり。足踏みならし。わかえ舞ひ出でむ。

正月元旦　安永六年

昨年の冬春たちけりと人はいへどいともしるきは今朝にざりける

人の許よりいとめでたき花をえさせければ

異木にはいともことなる梅の花折りけむ人の香もそはりつゝ

二月十八日中津の御嗣君の御前にして臣とふ事を

今更に何か思はむはやくより君にまたせる屍なるはや

その夜おもと人の許へ伊勢の濱荻を軸なる筆を賜ひければ、かなたよりもいと美しきくさぐさをおくられければ

神風の伊勢の濱荻かき分けて淸き渚に玉ぞひろへる

ある人武藏なる多摩川にしてあやしき石を取り得ぬとて歌をこはれければ

天地のなしのまに〳〵龜なして玉河の瀨に在りけむその玉

詠ㇾ虎

さす竹の君がおましと唐の虎とふ神の衣たてまつる

冬の風

冬されば千草がうれをおしなびけうちの大野を風吹きわたる

大和國へゆく人に、その國の名ある所々の道のついでなど書きて送るとて、その紙の裏に書ける

大和路の道のくまわの八十隈にこめし心をたぐへてぞやる

猫妻戀すとふ事を

東屋のまやの軒端に聲するは手がひのとらの妻やこふらし

商人に寄る戀とふ事を
吾がつめる戀の重荷を市中のあきじこる人に行きて賣らばや

呼子鳥
行き通ふ人もなげなる大野らにひとりわびつゝたれよぶ子鳥

八王子とふ所の女の許より手づから折れりとて蕨をおこせたりければいひ遣しける
手弱女の赤裳裾引きたま〳〵に玉のよこ山に折りけん早蕨

下總の國に行かむとする頃人人集ひて名殘を惜しみけるに、酒などたうべてある人、月日星の歌をよめといへりければ
此の卯月二つかさなる月日ほしかとりあがたにゆきてはや來む

夏の始に景序が改め作れる家を祝ひてよめる
築きたつる稚室葛根うみの子の八十續々に不絶在とぞ

四月廿三日、父まさずなりて四十九年なれば、後のわざすとて、おきつきの前にして詠める
ちゝの實の父いまさずて五十年に妻あり子あり其の妻子あり

花田色なる扇の紙に香取の浦浪のかゝりたるがゑがけるさまなるをもてかへりて、中津の君にたてまつるとて
香取潟遠の濱づとまつらまく立ちしく浪をかけて來にけり

同御母君に拾へる濱貝を奉りければ「立ちかへる香取の波の嬉しきに待ちしかひあるつとを見し哉」と仰せ下されければ
かひ有りと君が賜へる御言こそ香取の浦のかひには有りけれ

多摩の里人の許よりめづらかなる螢をさはに送られけるに
常よりも光ことなる螢はもうべ玉川にありしなりけり

桃の花によせて久しく戀ふる心を
實植せし吾家の毛桃花咲きて實になりぬべき時まつ吾は

浦を
風の音の遠つ大浦にはをよみはらゝにうける海人の釣ぶね

近江の膳所しらす君の御舘にして夏の水鳥とふ事を
涼とる君が御池は常世かも沖つ鴨鳥のあそばふ見れば

同御庭の橘
さす竹の君が御園は常世かもかぐの木實のかぐはしみその

中津の君の御舘にして詠百舌

鳥
目に飽かぬ事はなしとふ都人にいでや見せましもづの草ぐき

詠日
六月の中の十日の中空にいともかしこき日のみ面かも

御くだものに在りける桃の實を賜はせて、是に寄せて、相聞の心をよめと仰せられける時
言のみは花にやあらなむ桃の實のなりもならずも植ゑてこそ見め

橘千蔭の雨の日釣するかたを書きたるに、此の意をよめと姫路の君の仰に隨ひて詠める
うちきらし雨は降りきぬしかすがに魚一つだに得でや歸らむ

秋の初風
土はさけ水はかわける夏過ぎてけさの朝けの風の寒しも

七夕雨
あすゆ叉戀ひつゝあらん此の雨に笠なしといひて君をとめまし

秋の花野
秋の野の尾花くず花萩の花しらえぬ花もいま盛りなり

いはで思ふ
丈夫や下には人を戀ふれども丈夫さびて顯はさずけり

うらむ
石ばしる瀧つ早瀨の早河の早くいひてし言はいづらは

葛を詠める
しばの野に葛引く少女家のらへ此の野づかさに葛引くをとめ

立秋
草そよぎ簾動きて今しはと立ち來る秋のけはひしるしも

柿本朝臣人麿を
朽ちぬ名を長く殘してかも山の雲となりけん柿の本のうし

蛇を
雲を起し雨をふらする神すらも小をろちなせる朝倉の宮

をのわらはを思ふとふ事を
兄ならぬ兄を兄とし弟ならぬ弟をめづるますらをのとも

七月朔日姫路君の御舘に召されけるに、御題五
吉野川に鮎子さばしる
花ちらふ嵐に水はよどませて六田の淀に若鮎さばしる

上總の末の珠名を
金門にし人の來たてば招きけん尾花が末の玉名しおもほゆ

筑波山に登りて國見す
筑波ねに汗かき登り見さくる國うましけん女の神男の神

越の中の國の二上山のもとにて
大和なる二上山の名たぐひにこれや

越へのはしきやまの名
　紀の海に忘貝ひろふ
きの國の名草はあれどなぐさまず戀
忘るとふ貝ひろひてん
　同じ日御庭の草の花を種々つ
ませ給ひてそを題にてよめと
　仰言有りて
　葵の花を
玉しけるみ園に生ふる草の名のけふ
にあふひぞかしこかりける
　又からすあふぎを又檜扇とも云ふ
あかねさす大宮人の手にふれてさし
かざすめる花の名ぞこれ
　秋の雨とふ事を
櫻さく山べに雨をいとひ來つ秋のそ
のにもしづこゝろなし
　彼御殿の鶴嶋と云ふ、松に寄
　すとふ祝歌を
五百枝刺す木垂玉松たづがねの御殿
に千代をいや重ぬべし

源義臣とふ人は中津の君の近
つ御臣なり、生ける日にまめ
に私なく、七十餘にして御殿
に在りて終に事なく身まかり
しを
御代三繼仕へまつりて君のへに身を
終へきとふいそしの翁
　天の沼茅を
久方の天の沼茅のしたゝりゆ垂れる
御國となりにけらずや
　浦島の子を
堅魚釣鯛釣ほこりほこらしく渡つ海
の宮に年はへにけん
　雲を
天の原吹きすさみたる秋風に走る雲
あればたゆたふ雲あり
　蟋虫を
行幸の御供の馬のくつわなす志賀の
山路の虫のこゑかも
　梓弓引豐國福草の中津大城し

らせ給ふ、君此の秋かの御國
に歸らせ給ふ、されば相模在
鎌倉山ゆ豐國の企玖の長濱わ
たりまで、至り給はんずる
國々の歌の萬葉集に見えたる
を、おのれが拙なき筆もてう
つし出でゝ御脇つきの下へに
奉りおきける、その奥にかけ
る歌
さきくさの。中津の國を。しきませ
る。吾が君はしも。鳥が啼く。東大
城に。年かさね。おはしましぬれ。
敷きませる。御國御民は。天津水。
仰ぎてまてば。武夫の。八十伴雄を。
ひけ鳥の。ひきゐましつゝ。今年し
も。歸らひましぬ。天地の。神に乞
禱み。幣奉り。齋瓮居ゑて。經給は
ん。國の隈路の。百隈の。八重の山路
を。御殿なし。安けくませと。猪自
物。膝折りふせ。鶉自物。うなねつ

きぬき。齋まはりつ。しかいはひて
は。玉鉾の。道の長手の。御なぐさ
と。至りまさなん。日の經の。國内
ことぐ〵。靑丹よし。寧樂の都の。
古歌を。ひりひ出でつゝ。たどるた
どる、書きてまつりぬ。たまく〵も。
見し給へらば。かしこけど。御供に
有る如。おもほせ吾君。

反歌

こゝながら御供ともひて經給はん國
の古言かきてまつりつ

同源隆羊蹄ぬし御供として旅
立つを

豐國の國津御神のまもります君が御
供の道はやすけむ

同横山賴庸ぬしは筑紫に在り
ける人の東に在りてこたび御
供なるを

東路も筑紫も君がしめの内は家より
家ぞ旅となおぼしそ

猿を

おく山に蚊火たく翁夜くだちて猿啼
くねに寐覺すらしも

姫路の君の御許より「月多秋
友」とふ事を詠みて奉れと承
りて

此の秋もいで吾が庵にかたらはん常
入り來ませさゝらえ男

同じく詠月

大君の東の海に出づる月もりて愛づ
らむ他しくにひと

雁を俎に載せたるを

しが妻の待つらん知らに空蟬の世を
ばかりとやこゝに臥せる

月影に文見るとふ事を

照らし讀む文の心もみもはてず傾く
月の惜しきのみかは

藤原の宇万伎の身まかりし頃
雁の聲を聞きて

吾が如くいましも友やまどはせる夜
わたる雁の聲のかなしも

濱のべの御舘にしておのく〵
題二つづゝ得たるにおのれは
「大刀」と「蜆」との二つを一首
にてまをす

丈夫の大刀とりはきて妹が爲住の江
の濱にしゞみ拾へる

かく申しければ御前なりける
「日々花」と「蘇鐵」との二種を
よみ入れて奉れとうけ給はり
て

宮人は日々に花見て遊ぶらん袖つけ
ごろもゆたにとり着て

氷室を詠める　旋頭歌

鬪雞の野の室の氷のとくるまにく〵
照りとてる六月のそらに去年の落葉
みつ

東の比叡の山の麓なる不忍の
池にして、或人の得たりける
柿本朝臣の像を、こたび中津

の御嗣君に奉る歌

鳥が啼く。東の國。高光る。比叡の御山は。春べは。花咲きをゝり。夏まけて。蓮葉清き。池の方に。往きけん人の。水際の。木積に交る。神なす。御像拾ひて。塵はらひ。水沫かき捨て。浅茅原。つばらにみれば。柿本の。朝臣の御像。うれしと。家にもて行きて。幣まつり。いはひべすゑて。朝夕に。ぬかづき來しを。年有りて。吾にえさせつ。青みづら。依細の兒が。けふ／＼と。吾待つ君は。石川の。貝にまじりて。有りとかも。歎きけましは。遠き世ゆ。今のをつゝを。みるが如。言ひ出づるかも。そこもへば。荒れたる茅生の。庵の中に。まさしめんはた。かしこしと。思ひはかりて。菰枕。高き御殿に。さゝげもて。奉りつれ。今日よりは。妙なる殿の。みがける。玉の臺に。常しへに。しづもりいませ。御園生の。紅葉てりてる。柿のもとの大人。

反歌

柿本の大人の眞魂よ石川のかひある時を待ち出づるかも

姫路の君ゆ「對菊待月」とふ事をよめと仰かゝぶりて

月讀の神の御影を待つ宿に白木綿なして咲ける花かも

同じ御前へ宮づかへに出でたりける人の許へ申し遣しける

咲く花は八重もこそよき君がためはひとへ心に仕へたまはね

九月十三日の夜濱邊の御舘に侍りて

長月の月の光によもの山はあらそひかねて紅葉そむらん

恨みじとふことを

恨むべき人こそ人を恨むなれ吾はうらみじ恨むかひなし

ある御許にて歌よみけるに、種々の題の中に「柏」「山彦」とふを探りて詠みわづらひける人有り、吾は「熊」とふ事を得たりければ三つを一首によめる

山彦のこたへする山の柏原熊とふ神もこゝにますらむ

九月十日姫路の君の御舘にして、男御子生れませるを奉レ祝歌

嚴穂の垂穂の秋にあれませる君御壽は千秋五百秋にいませと祝ひき

あわをとふものを作りて中津の御嗣君に奉りける時、月と鳥を得て

照る月に天つ空飛ぶ雁金は空に結べる紐かとぞ見る

又手束弓とふ物を同じく作り

てこは露を得たり
手束弓手にぎり持ちて丈夫が狩場の
露に足結ぬらせる

詠レ鳶

久かたの天飛び下り飛び上り雲井の
よそに鳶のとぶ見ゆ

詠レ鯨

大海に島もあらなくに沖べゆも大島
なして鯨寄り來も

あしたの鳥

五百つ鳥ふみ驚かし御狩人朝けの風
に袖ふきかへす

ゆふべの鳥

明くる夜を待ちよろこびし村鳥今ぞ
むれ歸るゆふ山のへに

しぐれ

暮るゝかと見つれどいまだ暮れやら
ぬ空もしぐるゝ雲にぞ有りける

詠二靈芝一

種不蒔うつしも不植おのづから草野
女神の瑞たまはせる

奉二甲斐國酒折宮一歌二首

詠二八尋矛一

比々良藝の嚴し御矛の御稜威はや嚴
し御國と國鎭めます

詠二薙草劍一

賊人の燒きし燒津の荒草を薙ぎて名
におふ神寶かも

佛を

西の方に黄金なす人有りとへど吾が
日の本の日こそてらさめ

人々國の名を探りて詠めるに

薩摩

さにづらふ君に見せばや隼人のさつ
まの小門によする濱貝

壹岐

ゆきの島ゆきて見よかし天ぎらひ雪
と見るまでたてる白浪

武藏に名有る所を

武士の弓絃押し張りひき放つ矢口の
川のいにしへ思ほゆ

大和の國を名所ならでよめと
有るを

名ぐはしき所はいはじ大和路は聞え
ぬ山も川も見がほし

數の文字のみにて歌よめと人
のいへりければ

一九二八。千萬四四八。十四三九二一。
八萬十九二二四。四九九二八七四。
ひと國は千萬よしや豐みくにやま
と國にししく國はなし

「まつち山」とふ事を句の上に
「すみだ河」を句の下におきて
よめる

松てらす月をさやけみ秩父あがた山
の獵夫が圓居せんかは

「雪をまつ」とふ事を詠むに詠
みわづらひける時、又「鬚人」
とふ事をよめと人のいへりけ
れば

降る雪はまてどもふらず待たねども
積るは鬢の雪にぞ有りける

十二月二日古事記上巻よみ終へて、各其の巻の條々を別ちよめるに、鵜葺艸葺不合命を

味御路。如魚鱗宮從。海潮之。來寄波限爾。至麻志。生末世流御子之。如大御裔。如海。迦藝呂那氣無毛。如潮。盡時阿良賣也毛。與能許登々々爾。

同片歌

鵜葺草葺。葺不合豆。御名爾於婆須毛。

同じ延にして各神寶種々を探りよめるに

土かたになれる黒馬の手綱くり操り
たねゆかむ妹が金門に

脇息

人も見ぬみやま櫻木板にさきうま人
のへのわきづきにもが

硯

時じくに硯は潮の滿干なしすれる墨
はも雲の湧くなす

床几

けふの宴に高き御前ゆ御歌賜はり、又種々のをしもの賜へるをかしこみ喜ぼひて侍らふ人々の中へまをす

もろ人の今日の宴を君がます御あぐ
らのへにとり申さしめ

十二月八日の夜濱の邊の御舘に侍りて、「墨師」「疊刺」「辻君」の三つを詠めと仰せられければ

ます鏡すみし月夜を心淺くたゝみさ
してや君がゆくらむ

詠ㇾ天

九萬里に飛びかふ鳥すらも鷦鷯な
すらん天つみ空かも

嫗戀すとふことを

舌いでゝ皺める口の口やまず君をも
ひやむ時も日もなし

ある御前に櫻鯛を奉るとて

櫻さく春をちぎりて年のうちに花の
名におふ魚たてまつる

中津の御嗣君十二月廿二日に年を惜しませ給ふとて、侍らふ人々を召して歌よませ給ふ、御出題七つ

年の終

春の來むためと暮れゆく年なれば暮
れゆく年ぞ嬉しかりける

待ㇾ春

草はかれ木の葉皆おちて野も山も春
待つ時に成りにけるかも

朝雪

朝戸明けて眞白にふれる雪見れば吾
や海神の宮にきにけむ

寄ㇾ野

秋風に萩が花ちるいなみ野のいなみ
じといはゞわれ戀ひめやも

下に戀ふる
葉をしげみあさゝ花咲く青淵の上は
つれなき戀のくるしも

櫛

御みづらに取りなせる五百津爪櫛は
くしき御神の御はかりぞ是

杖

老らくの身の寶かも千束杖たづく〳〵
しくも道のあらなく

又三題擬二催馬樂調一

丹生山　春

丹生山に。畑うつをぢ。たが畑やう
つ。吾が畑打つや。はたうつをぢ。

水莖岡　秋

水莖のや。岡のかやぐさ。かやに刈
り。假庵にやふかん。薄からまし
や。尾花刈らましや。

珠洲海　冬

すゝの海。氷も渡れや。渡れらば。
はれ。渡れらば。のとの國人や。橋
にて來むや。あはれ。そこよしや。
長濱の浦に。

伊勢國山田なる宇治五十槻ぬ
し、能煩野にて拾ひ得たりと
ふ古代の玉を贈られければ、
詠みて遣しける

神風の。伊勢國。百船。度相在。足日
木乃。山田の原に。吾友の。つゝむ
事なく。安らけく。在りとは雖レ聞。白
銅鏡。不相見久に。可伎可增布。十
年者過奴。乏志久母。問須流並に。
能煩野に。在伎登布玉の。石上。古
代廼玉能。丹之穗なす。眞玉賜比
都。白玉之。五百津都杼比乃。何時
毛何時毛。御統乃玉乃。見末久保
利。吾須流君乎。見奈須。玉纒持
弖。朝夕爾。見都々志努婆奈。將レ相
日左右二。

反歌

狹丹頰布。爾乃保奈須玉。伊勢乃海
乃。那美爾波不レ思。示乃保奈須玉

ひとよはなの序

うた人はあしゆかずて。天のしたの名どころをしるとはいへど。まことにはあしゆかずては。よくしもしらえぬものにしあれば。かりねする小野のしぬばら。しぬばしきところどころよにおほくて。さ夜しぐれふることのはのおむかしきをききみることには。うらすのとりのとびた

つばかりおもほゆるを。おのれいまむそぢにちかきよはひになるまで、あしがちる難波よりをちつかたにしの國へは。いづくもいづくもすべてしらず。うつせみのよのうきことはおほかれど。すみのえのきしによるとふわすれがひひりひにだにいまだえゆかず。若のうらのあしべにあさるたづかねも。風のたよりの遠音に

のみきゝわたるばかりなれば。はるけき筑紫のくにぐになどはさらなることにて。いきの松原いけるよにはつひにみすてややみぬべき。吾孀のかたはしも。かつかつもむらさきおふるむさし野のとほのみかどのみもとまでは。いとわかゝりしときものしつれど。ゆくさもくさも道いそぐとは。そのゆきふりの海山をだにゆたに

もえ見ずてすぎぬるのみこそあれ。そをはなちては。みすゞかるしなぬ路の木曾のかけはしかけてもしらず。しなさかるこしのくに〴〵に白山のときしく雪も夢にだにいまだみされば。いはんやも。たまほこのみちのくなるところどころはおもひもおよばず。名にたてるしほがまの浦のけむりも。こゝろのうちのおもかげ

にのみいぶかしみおもひわたるを。天つちのちはひのいかなる人そもいはゞしのあふみの國の海量せにしは。大八嶋國のこるすくなく。おもしろき海川野山をふねよりかちよりいゆきたらはしみあきらめて。そこかしことこゝたくにつみあつめたることのはぐさを。ひとよ花となも名づけてみせられたる。見るにはいよ

よ露うちはらふまそでに玉をちらしたる。たびのころものうらやみにえたえずて。みかほしきくにの八十國ゆきめぐりまさめにみけん人しともしも。人しともしもと。しはぶれたるこゑあげてうたふものは。もとをりののりなが

天明の六とせといふとしのながつき

本居宣長

一よ花の序

うつそみの世の人に。いのちにますたからやはある。其のたからを得るは。いにしへの文を見うたよむ人になもある。あはれよろしきかも。いにしへの文見れば。玉ちはふ神代のこともたゞめに見るごとく。また見るものきくものによせ。うれしみかなしみにつけて哥をなもよみ出でぬれば。そのうた千五百世の後までながく傳はりゆきては。いまより後の人は皆友にこそ有りけれ。こゝに此巻のぬしはや。さとねのやま里の櫻の溪に世をのがれて。ふるき世の文をよみ。あるはたびにまかりてこゝかしこのくぬちめぐりて。ことにつけみのよろしきにつけうたよみしたる。そが數つもりて一まきとな

もなれる。すなはち一よはなとぞ名づけられたりける。このひとよはなの一よのうちにもゝくさのこともりて。まことに花くはしかも香ぐはしかも。ちいを世の後の世までに。ながく傳はりゆかむことうたがふべくもあらざりけり。しかあれば。是ぞはかりなき命をたもち。あたひなき寶を得たるなりける。あなうまし此卷。あなた

ふとこのうた

天明のいつとせちふとしの水無月のつごもりの比小林のよし見しるしぬ

ひとよはなの序

いにしへにうたひつる名所のうたは、したしくそのところにむかひその有さまを見て、ありのまに〳〵つくろはずうたひつる故に、後にうたふにもあはれにみやびて、今たゞに其所にむかひその有さまをみるがごとくなんあるを、のちの世となりては、やゝ此意をわすれゆきて、などころのうたよまむとては、わがくになるをおき、ひとの國なるをまうけ出でて、しらぬ有さまをおしはかりによめるたぐひ多き故に、つら〳〵見るにそのところをきゝあやまり、その有さまをよみたがへたる事すくなからず。たゞ目にその所を見、その有さまを望むがごとくなるは、いとなんまれなりける。然るにいま此のひとよ華をみるに、多なるうたどものあはれにみやびて、遠き所も直にむかひ、しらぬ有さまもしたしくみるがごとくなるは、うへなるかも上人、こゝらのとしつき天のしたをめぐり、國々の名どころをへて、そこの有さまをみるがまに〳〵つくろはずよませる故に、しらべも意もおのづからなるいにしへの風に

して、おしはかりによめるたぐひなるはあらざるなるべし。おほかた哥よむ人、などころのうたよまむには、此けぢめある事をおもひて、みだりにはよむまじきものぞ。さて后雄としごろ此けぢめを思ふが故に、此ひとよ花をめでゝはしにしるす事かくのごとし。こを見て古へ今のけぢめをよく〳〵あぢはひ、いまのあやまれるをわきまへ、いにしへのみだりならぬをかへりみて、今をはなれいにしへをおもはむ人は、此ひとよ華をもてあそびて、それに似ばやとつとめざらん。これそこのひとよはなの世にすぐれたるはな實にて、上人のうへなきいさをしなりけらし。

天明のいつとせといふとしの五月

淡海の人小原后雄記す

ひとよはなにしるす序

天の下にあらゆる海川野山も世にあらはれたるとしからぬとのあるは、さちを得たるとえぬとにこそあるらめ。かけまくもかしこき天皇の御幸をえてはうたひあげられて千代にいひつがれ、うた人のことくさとなりては世に高く聞え、あるは花にもみぢに所を得てあらはれ、あるは月に雪に名を立てたゝへらるゝそが中に、芳野の山のはやくよりよしとよく見はやされ、難波の海のなにはの事にもいひいでらる類は、もとより名細しければさらにもいはず。遠き東のおくなるむやむやの關も、はるけき筑紫のたの浦も名はともにひなびたれど、言のはに入りてぞ高く聞てゐる。しかはあれど、めも及はず、心もたえたる廣きみ國のはたてには弓削の河原のうもれ木の埋もれて、野中の淸水しる人なきも、また少なからずなん有りけるを、海量大徳あら玉の年月にみやび心をもて、つとめて雲ゐる山の崎々浪咲く沖の嶋々おちずいゆきめぐらひて、法を說きそのみちをさとす序で、野にも川にも見るま

に〱ことあけしていゝりたらはせりければ夷どもひなの人氣なき境をもことゝ〱に殘さずぞいひあらはせりける。如是して今此集にあげられたる海川野山はむかしより名だたるも、今あらたにいひあらはせるも、皆うまこりのあやにめづらしき境にて、しほ船の世にならびなきわたりのみとなむいへりける。かゝれば今の世にめでたき野山の殘れる恨もなく、くしき海山の聞えぬ歎きもいえて、すく名彥なの神功をいよゝ國中にかゞやかし、またかけともにして背面をこひ、日のたてにして日のよこの名どころをしぬばむ人はたゞ此集にこそよりなめ。これをおもへば、あやしきかもごとたまのさちたほときかも大德の功

群田の安足しるす

一　與華稱辭

古事記迩久衣彦者足不行之氐天下乃叓乎知登云今
乃諺爾歌人者居随尓氐之名所乎知登之云那留吾者是尓
能似人多流哉海量上人白拂乃風迩乗而千里乃海乎毛
直渡錫乃杖乃堅乎衝氐百重乃山乎毛直越行都都東波也
陸奥乃金華咲小田山尓登利西波也加羅人乃參集布
長嵜尓奈左母幣遊行多氣利流故其路乃隅隅行經名所多奈流
那幣尓旅乃厭心毛他國乃希事毛數志有禮婆詠出世流
謌之毛幾許尓曽古成尓禮氣曽乎古多備一巻登編那志氐
木尓母奈彫世流氣是乎見可尓良國國乃名高海山乃面向

所所乃名可可須河野乃可多知委可爾直目成悉爾棚
知奴婆祕吾者久衣彦乃不行謌人乃居那賀良爾不有
也毛如是弖上人乃渇流多謌乃調者富二乃嶺乃高良爾言
者小田山乃華也爾可武藏野乃心真廣久那知乃濱乃
真沙成功細也爾可奈母有氣流是乎以後爾傳信婆那布引乃
多藝知不絶千里乃濱浪打延氐長嵜乃彌遠長久住
乃江乃岸乃姫松幾千世毛人乃米泥毛天阿曾備氐牟
吾者毛与上人之目可良爾久衣彦登奈里上人之足故
爾居隨爾知流是曾能許謌乃端乎毛學信流言魂乃幸福奈流良牟

天明五年五月

松井邦

ひとよ花の
はしこと

このはなのひと
よのうちにもゝ
くさのことぞこ
もれるおぼろか
にすれど。おの
れこゝわくのと
しつきをふるが
うち。おほくの
國をめぐりしに
たぬしきことの
きはみなく。おも
ふことのかぎり
あらざれば。うた

をよみからうたをつくりてこゝろやりとせり。そのもゝにひとつをつみてふたまきとなし、からなるをば臥遊編といひ。うたなるをばひとよはなとなんいふ。そはこのひとまきのうちに名くはしきうみ山のたゝずまひ。くもきりのにほひ。

つきゆきはなも
みぢのひかり。
ことのはにのば
へつくすべくも
あらぬよそひの
こもりたれば。
かくなつけたる
になん

天明の四と
せといふと
しのしはす

櫻溪海量
しるす

櫻溪海量しるす

ひとよはな

櫻溪　海量

畿内(うちつくに)

山城

しも加茂にまうでゝよめる

ちはやふる加茂の神垣かみさびてあやにたふとしかもの神がき

あらしやまのざくらをみて

あし曳の山の嵐の山の櫻花にほふさかりにあひにけるかも

宇治にまかりけるとき

ふるさとのあふみの海のながれ出づるうぢ川浪をみればしぬばゆ

ものゝふの八十宇治川にかげみえてさける山吹みらくしよしも

大和

よし野山のさくらを

花くはし櫻ににほふみ吉野のよしのの山の春べよろしも

み吉野のたぎつかふちにやどもがな櫻のさかりあかず見んため

蝦鳴くむべ田の川のそこきよみきしの櫻のかげぞうつれる

大みねにまうでけるとき

雲霧のたちかさなりて大峯は人にかたらむよしもあらなくに

あさまだき霧のくらきに大みねのみ谷どよもしほとゝぎすなく

多武のみねにのぼりて

家づとに櫻の花をうちたをり多武の山水きよくさやけき

ふたかみ山にのぼりて

みわたせばかみさびたてりひさかたの天の香具山うねびみゝなし

かすが山を見て

ふるさとのならのみやこの春日山うへもたふとし神ながらかも

春日のまつりの夜うしみつばかりに、かりみやより大宮にうつしたてまつるををろがみて

朝日さすかすがの神のいでましのくろきの宮はみるにたふとし

神無月のはじめ泊瀬(はつせ)にまうでける時よめる

こもりくのはつ瀬の川のさゞれ浪岩間をくゞる音のさやけさ

香具山にのぼりて

ひさかたの天のかぐ山のぼりたちみれば神代のおもほゆらくに

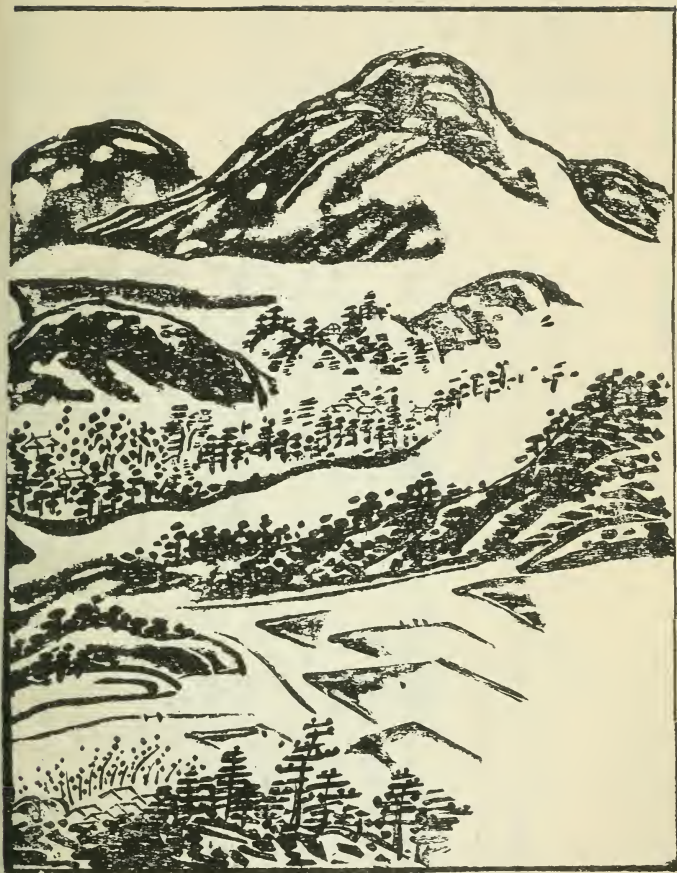
河内

かた野なる津田のさとにて

旅枕あまたかさねつ鶉鳴くかた野の野べの風のさむきに

攝津

すみの江にまうでゝ

すみのえの浦わの松のはごもりに神

嵐山春望
霞進

さびたてるあけの玉がき
すみの江のおきふく風に雲はれてあ
は路の嶋に舟のよるみゆ

天王寺にやどりて

あしがちる難波のてらにやどる夜は
ねられざりけりむかししのびて

布引のたきをみてよめる

たきつ瀬を音きてみればいはのべに
かけてさらせる布にて有りける

にしの國にまかりける時、須まの浦にやどりて日かず過ぎにけり、すべて吾みかどの中に名くはしき浦べのいづこはあれど、古より人のめではやすことこの須まあかしにまされる所はあらず、しかるに大かたの人の名にのみめでゝ心をとゞむるはまれなり、おのれおもふに、おほよそうみをのぞむに、浦べのひろくうちひらけたるは、紀の國ちさとのはまにまさりたるはなかるべし、又ひたちの筑波山より鹿嶋香取のうみをのぞみ、あるはひの國なる湯のたけより嶋原あま草のしま〴〵をのぞむ、同じ國なるからつのうみにうはら野といふ山の七里ばかり波ぢにさし出でたる、出雲の國なるみ保が崎の九里ばかり海にさし出でたる、つくしの國なる箱崎の浦の海の中道、これらの所いともよしといへども、風の音浪のひまのすさまじくして心のとゞまらざるに、今こゝにして見さくれば東はいづみより紀の國につゞき、西ははりまぢの崎々さし出で、南は淡路嶋のいとちかく四つの國のたかねのつらなりたれば、おほくの嶋のうちかこみて見るにおそろしきこゝちのせざれば、みやこ人などのまれにきてのぞまんになどかめでおもはざるべき、おのづから名にたかくたちけるはうべなることにこそ

おほ海のありそに出でゝあまのかる
みるめにあかぬすまの浦かも

東海道（うみつみち）

伊勢

五十鈴川のほとりにて

おちたぎち瀬の音きよきいすゞ川心
のちりもそゝぎはてゝき

外宮の前山のさくらを

ひさかたの天津み神の前山の櫻のに
ほひいやめづらしも

ふたみの浦にて

玉くしげふたみの浦をうちさらしよ
りくる浪に衣ぬらしつ

あさくま山にのぼりて

朝熊のみねよりみればふじのねはそ
ことも見えず春のかすみに

すゞが山をこゆるとき

鈴鹿川八十瀬の水のいはにふれなる
なる音の名におへるかも

尾張

熱田のみやにまうでゝ

ますかゞみてる日のかげもしらぬま
であつたの森はしげらひにけり

なごやより大野の浦にわたる
時

夜もすがらふねこぎゆけばちたの浦
のあまのたくひのをちこちにみゆ

遠江

荒井のわたりにて

をさまれる世にはあれどもこえわび
ぬ浪のあらゐの關ぢばかりは

駿河

ふじのたかねをみさけて

日のもとのやまとの國にかしのみの
ひとりぞたてるふじのたかねは

ひさかたの天津みそらをゆく雲の上
にぞみゆるふじのしらゆき

もろこしの人にとはゞやふじのねは
いづくの沖にいでゝみゆやと

淸見寺にのぼりけるに日の入
るほどにて、ふじのたかねは
そこともみえわかざれども伊
豆のみさきの沖中にさし出で
たるが見ゆるをめでゝよめる

きよみがた夕霧ふかくたちぬれど伊
豆のみさきはそれとみえけり

甲斐

沖津のうまやより身延山まで
ふじ川のながれにそひて山路
をのぼりゆくとき

もゝくまの山の間めぐるふじ川のか
はべの道のはるけくもあるか

みのぶにのぼりけるに雲のた
ちまひてみちもみえわかざれ
ば

山菅のみのぶの山をたかみかもたち
ゐる雲のはるゝ間もなき

相模

はこね山をこゆるとき

たび人のゆきかひたえず足がらのは
こねの山もふみならすまで

江の嶋にまうでけるに、折し
もしほひにてかちよりゆきけ
り、一夜やどりてかへさには
しほみちてふねにてわたりけ
れば

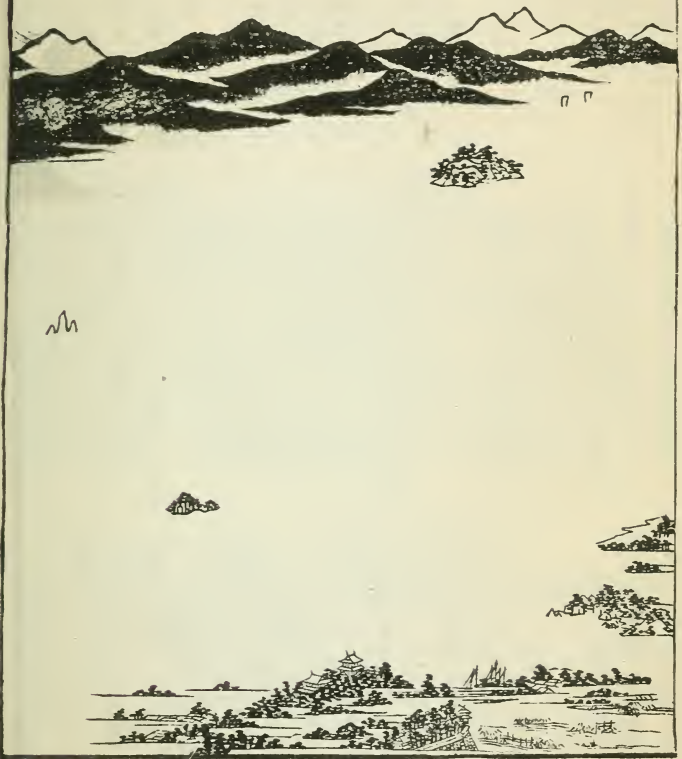
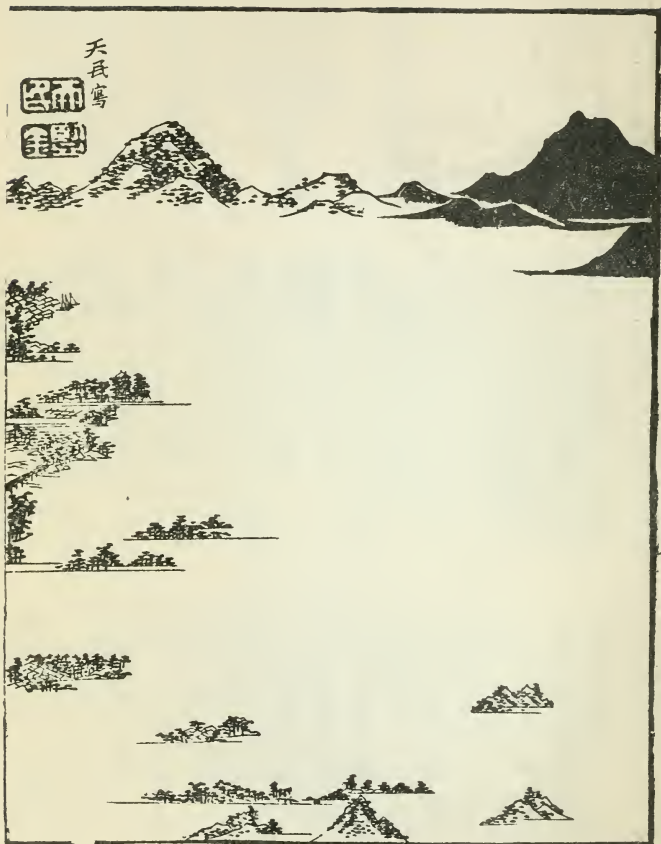
朝よひにしほひしほみちかちゞゆき
舟うけすゑてかへるえのしま

かまくらにてほとゝぎすをき
きて

たきゞこるかまくら山のほとゝぎす
むかししぬびて音にや鳴くらん

武藏

琵琶景勝

天民寫

むさし野にて
むさしのゝ尾花が末はとこ夏に雪ふるふじのすそみなりけり

月のてる夜すみだ川のほとりにあそびて
月見るとちふねうかべりすみだ川ながるゝ水のひまなきまでに

下總

香取のうらにやどりて
あしびたくあまとやいはん大ふねの香取の浦にやどるこの夜は

常陸

筑波根にのぼりて四面八面をみさくれば、西のかたにふじのたかね雲井にたてり、東の方は大うみかぎりなし、ふもとにはかゞみなす鹿しま香取のみづうみめぐれり、とね川きぬ川のながれもみゆ、こゝらの國のたかねの雲ゐにたちならべるはつくすべくもあらざりけり
ふたかみのしづもりませばうへしこそ海山川もつかへまつれり

鹿嶋なる大舟津にやどりて
あられふるかしまの崎にてりわたる月夜さやけみをりあかしつも

久慈川をわたりて
久慈川のながれをはやみこぐ舟の棹さす間なくみやこしぬばゆ

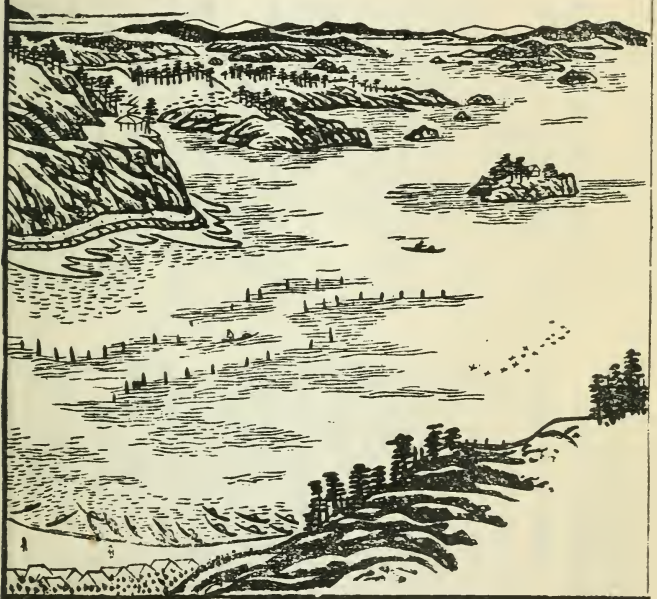
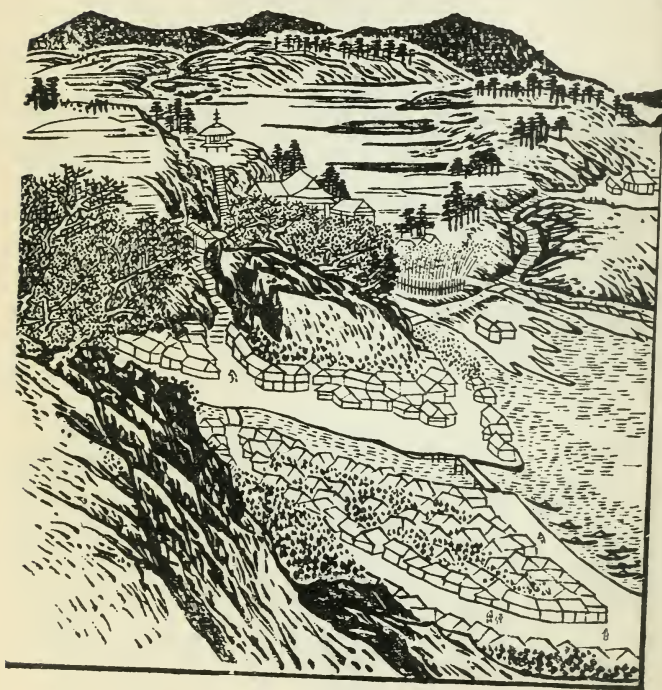
東山道(やまとのみち)

近江

彦根山のふもとなる浦べにてよめる長うたひとつみじかうたふたつ
いはゞしのあふみの國は足曳の、山しみかほしいさなとり、海もさやけし天つたふ、彦根の山はよろしなへ、たかくぞたてる白浪の、よするありそにあさよひに、うち出でみればあづさ弓、八十のみなとにもゝふねの、こぎりこぎいでしら浪の、八重をるうへにうまのつめ、つくぶ嶋たち沖べには、おきのいしなみやつべには、澳(おき)の嶋たち天つたふ、ひえのたかねはひさかたの、雲ゐにとほくさゞ浪の、比良のたかねとしほふねの、ならばひたてり神風の、伊吹のたけはみつ山と、神さびいましそかひには、たつの泉の山たかく、あらそひたてり大空に、かすみたなびき百鳥の、さへづる春は浦ごとに、さくら花さき四方八もに、霧たちわたりてる月の、さやけき秋は野べごとに、ちぐさ花さき沖べには、かり嶋わたりあしべには、水鳥さわぐ國からか、こゝたたふときみづからが、あやにはしけき見るごとに、たぬしき海ぞあふみのうみは
朝かげにみれどもあかずあふみの海

八十のみなとによするしら浪
うみこしにたちならばへる足引の山
の白雪見れどあかぬかも
　さとねの山にふるく櫻の谷と
　ふところのありければよめる
あづさ弓春日のどけくさきにほふ櫻
のたにはすめどあかぬかも
美濃
　養老のたきを見て
多度山のたきのながれは老人のわか
ゆとふ名にはやくたちけり
もゝしぬのみぬのたき野のた度山の
みたにひゞきておつるたきつ瀬
　木曾路をすぐるとき
五百重山千重やまめぐる木曾川の音
きゝわびぬ人はあらじな
　かつらはしをみんとて横山の
　さとにゆきけるとき
大野なるきれの横山やまふかみかへ
る道をもふみまよひけり

　廣瀬の山中にまかりて曾茂き
　山をみて
池田なる曾もきの山のみねたかみ雲
ぞかゝれる朝よひごとに
信濃
　あさまのたけをみさげて
天つたふてる日のひかりくもるまで
あさまの山にけふりたちたつ
　姨捨山にのぼりて月をみて
をばすての山べの月のかげさむみか
たしく袖に露ぞおきにける
上野
　刀禰川をわたるとき
とね川のみかさまさりて生ひしげる
あしの葉末を舟こぎわたる
下野
　ふたあら山にまうでゝ
みくしげのふたあら山の朝日かげに
ほへるみやはよろづよまでに
陸奥

　阿武隈川のほとりをすぐると
　き
みちのくのあぶくま川のもゝくまの
道ゆくたびのかぎりしらずも
　しのぶ山のふもとをすぐる時
ふるさとを雲ゐになしてみちのくの
しぬぶの山のしぬびこそすれ
　しほがまの浦にやどりける夜
　雪のふりければ
音にのみ聞きてしぬびし鹽がまの浦
めづらしき旅ねをぞする
　松嶋にて
天地はあやしきものか八百あまり八
十ぢの嶋のなれるおもへば
みるめかるあまにもがもな松嶋や雄
嶋のさきに世をばつくさん
あかなくにきえずもあらなむ松嶋や
雄嶋の崎にふれる白雪
　きたかみ川のほとりにて
みちのくの北かみ川に行きかよふ舟

にあふみの海をしぬびつ
森をかに日かずへて岩手山を
めでゝ
みちのくに吾きて見ればことのはに
えやはいはでの峯の白雪

出羽

出羽なる象潟は蚶滿寺の中よりみるぞいとよろしき、西東は一里あまりにして北南はみわたし二十町ばかりあり、嶋のかずは八十ばかりありといふ、くさぐさの木どもおひたち草ふかくしげれり、西みなみのあひだに鳥海山のたかくたちたるふもとまで二里ばかりありとぞ
象潟のみなそこきよみ鳥の海のたか
ねの雲のかげぞうつれる
坂田の浦にやどりてこゝかしこみあるきけり、いとひろきわたりにふねのかずなくのぼりくだるを最上川の末なりとぞいふ
世の中はかくこそありけれもがみ川
ゆきかふ舟のゆくへしらずも

北陸道(くぬがのみち)

越前

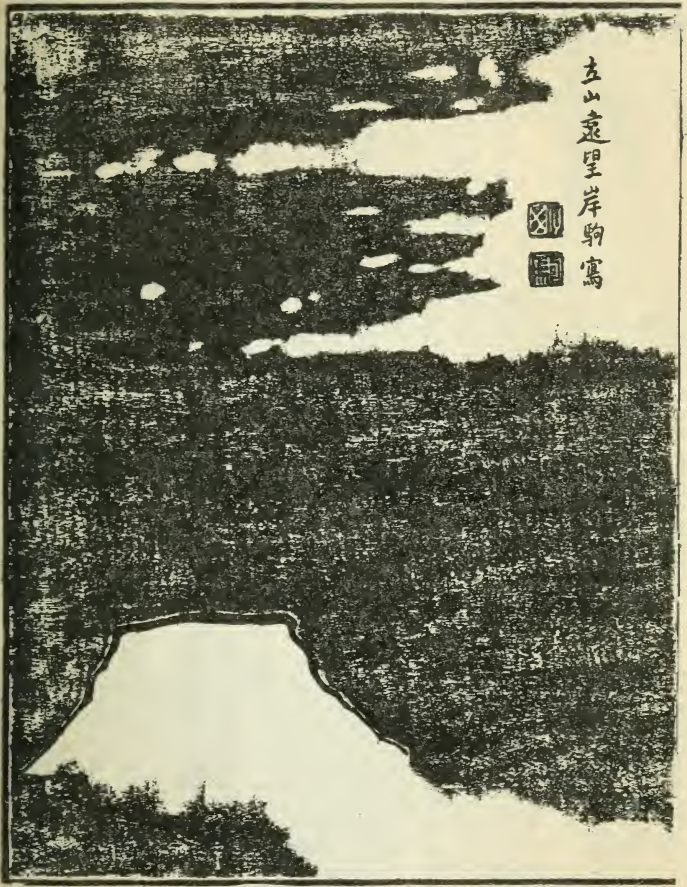
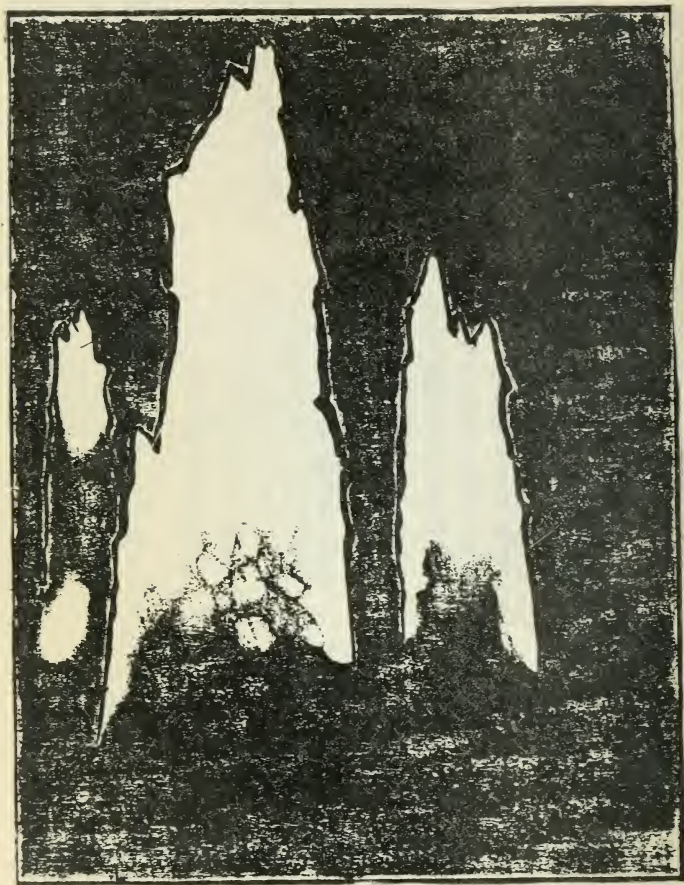
氣比のみやにまうでゝ
つぬがの海よする白浪たちかへりみ
ともあくべき神のみやかも

加賀

しらやまを見て
しなさかるこしの白ねの白雪はきゆ
る日なしといふはまことぞ
みこし路は夏の日すらもしら山を吹
きこす風のはだへさむしも

越中

礪波山をこゆる時雨いたうふりければ
やきたちをと波の山のみねたかみち
への雨雲たちかくしけり
礪浪山うちこえくれば雨はれてにふ
の山べに月てりにけり
射水川を舟にてくだる時かいの雫のかゝりければ
いみづ川ながるゝみづのはやければ
かいのしづくに衣ぬらしつ
射水川こぎてくだればしぶ谷のふた
かみ山もちかづきにけり
立山のふもとをすぐるとき
常夏に雪ふりおけるたち山をたび
らずしてみんよしもがも
ひさかたの白雲のへにあふぎみるた
かきたち山みれどあかぬかも
こしの道の中の國は、南にしら山とたち山のありて、北は海のちかければ川のながれはやくてひとつの川もなゝつ八つ、あるは十にもわかれてながれたり、名はいにしへにか

はりたれば、いづれをいづれ
とつばらにかうがへがたし、
いにしへのまゝよぶもあり、
はひつき川をわたりてよめる
はひつきの川の瀬むせぶ立山の高ね
のみゆき今やとくらし
かたかひ川にて
立山のみねたかければながれいづる
かたかひ川の瀬音たかしも
布勢川にて
ふせかはの瀬々のながれの岩にふれ
むせぶ音ばし山とよむなり
婦負川のわたりにて
かいかぢもとるいとまなみはやき瀬
をつなひきはへてわたるあやふさ
砕田川にて
あゆはしるさき田の川のよど瀬にも
吾はよどまず家ししぬばゆ
越後
しなの川のわたりにて
信濃川わたる瀬ひろみ天つたふ日の
たてよこもしられざりけり
山陰道
丹後
はしだてをすぐるとき
ひさかたの雲井につゞく大うみの浪
路にわたす天の橋立
但馬
豊岡川をふねにてくだるとき
木の崎のいで湯やいづこぬば玉の夜
わたる舟にまかせてゆけば
出雲
たく嶋のほとりをすぐるとき
いづもの海沖にたちたるたく嶋をみ
すごしがてにこの日くらしつ
八雲山をみて
八雲山みればたふとしちはやふる神
代のまゝのすがたとおもへば
亀山を
ちよろづのよはひをふとふ亀山のお
はせるそがのながれつきせじ
つるやまを
鶴山の松吹く風のおとたかみふりに
し年のしぬばるゝかも
日のみさきにまうでゝ
出雲の海沖にむかひて天つたふ日を
みるからにおへる崎の名
石見
かたみ山のほとりにやどりけ
るに八月の十六夜なりければ
石見なるかたみの山のみねたかみい
ざよふ月をまちかてぬかも
山のはにいざよふ月をふるさとの人
もたちでゝ今みるらむか
心あてにむかふたかねを出でゝくる
月はいづくもかはらざりけり
いし川をわたりて
高津のや神のおはせる石川のたゆる
ことなくみむよしもがも
高津山にまうでゝ

立山遠望岸駒寫

はろばろに吾きてみれば石見のや高
角のみやは神さびゐます
加茂山のみねのこの間にてる月のひ
かりさやけしあけの玉がき

山陽道(かげとものみち)

播磨

あかしの浦にて

ゐまち月あかしのとよりわぎもこに
淡路の嶋はみれどあかぬかも

曾根のまつを見て

あら玉の年ふかきかもあらがねのつ
ちにこたれる曾根のうら松

むろの津よりさこしの浦にわ
たるとき

はろばろにおもひし嶋のあづき嶋ち
かくも吾はこぎきつるかも
家嶋はちかくはあれどおほゝしくち
へのかすみぞたちへだてつる
つゝみもてゆくものにもかことさへ
くからにの嶋によする白浪

美作

さら山のふもとをすぎて

みまさかの久米のさら山よろしなへ
かみさびたてり久米のさら山

安藝

いつくしまにまうでゝ

わだつみの神のみつきと大とのにし
ほぞみちくる朝よひごとに

廣嶋の大城より三里ばかり北
のかたに金龜山福王寺とふ寺
あり、たづねまうでけるに、伊
勢のものがたりに業平朝臣の
あかねどもいはにぞかふる
めにみえぬこゝろをみせんよ
しのなければ　とふうたをよ
みて青きこけをきざみまきゐ
のかたにこのうたをつけて惟
たかの皇子にたてまつれりと
ふそのいしなりとて、つたへ
たるゆゑよしをつばらにしる
したるを見せたり、わたりふ
たさかあまりにして長さは一
さかばかりなる、その色はあ
をくてまことにめづべきかた
ちなるに、ましてそのたてま
つりしいにしへを思ふにいと
めづらしく、そのをりにしも
あへるこゝちしてよめる

みやびをのみやび心にかへにけるい
しをみんとはおもひがけきや

長門

長府をすぎて前田とふさとに
いたりけるに、おもはずに東
のかたに白浪たちさわぎこゝ
らのたきつ瀬のことなりひゞ
く流あり、うちおどろきてい
かにふ川ぞととふにせとのし
ほの引(ひき)なりとぞいふに、はじ
めてうしほのいきほひのいと
もかしこきことをしれり、こ

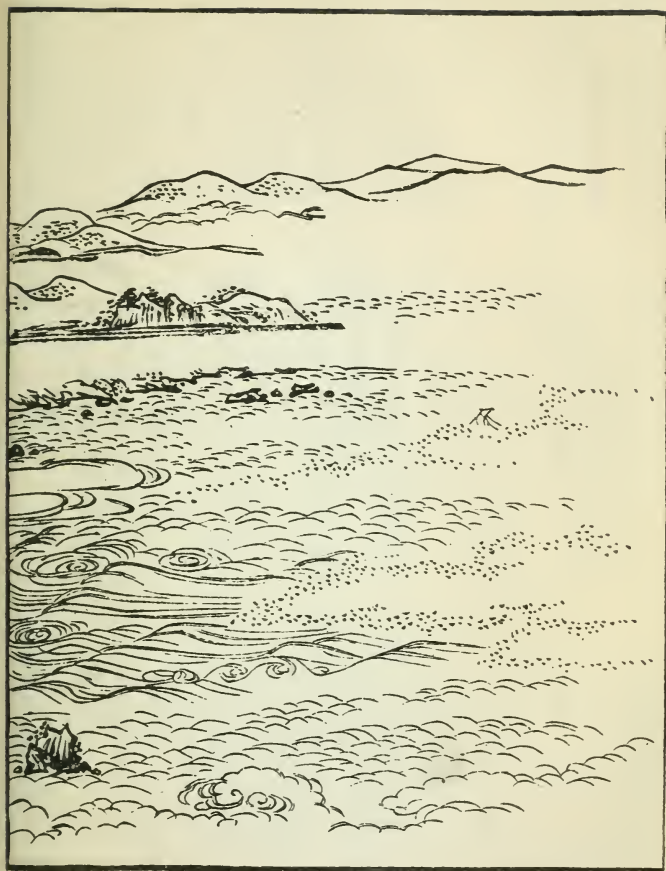
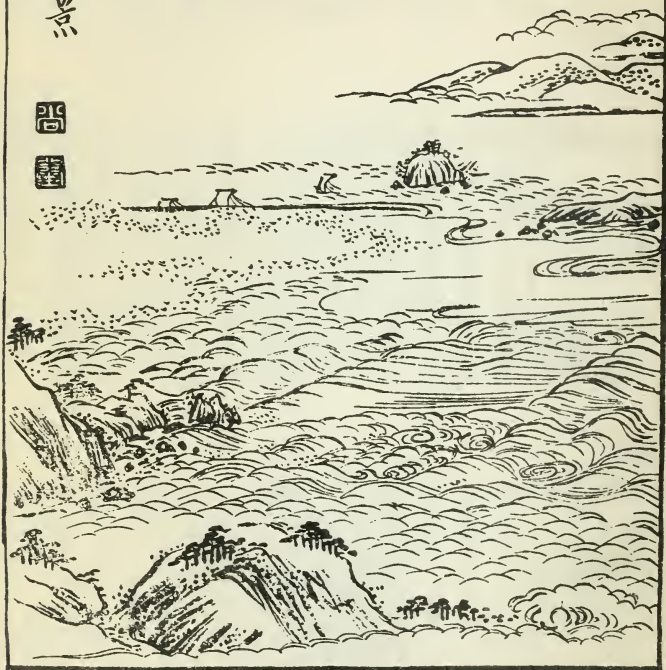
の所より赤馬の關まで一里なり、さてしほのひくときはあかまが關よりみそぢあまり七里東にながれ、備後の鞆の浦よりはまた三十あまり七里東にながれ、上の關にてうちあひ伊豫の灘に入るとなんいふ、鞆の浦よりは五十里ばかり東にながれてはりまのなだをへてあはの鳴門に入るなり、このあたりをかなわのせとといふ、むかひのきしにはやともの宮あり、あはひ十町ばかりもあるべしと思ふに一里に
　はあまれりとさと人いへり
山川のたきのながれもはやとものし
ほのはやきにあにまさらめや
はやとものうしほをはやみまほひき
てこぐ大舟しへたにたゞよふ

南海道（みなみのみち）

紀伊

　くまのゝうらにて
みくまのゝ濱べにおふるはまゆふの
もゝへの山をこえてきにけり
　ちさとのはまにやどりて、ま
　たちひろの濱ともいへり
いづるより入るまでさはるくまもな
しちさとの濱をてらす月かげ
　わかのうらにて
若の浦にうちでゝみればこちこちの
沖津嶋ねに浪たちわたる
玉もかるわかの浦ひの夕なぎにこゝ
らうかべるあまのつりふね
　たまつしまにまうでゝ
おきべより浪のよせくる玉津嶋つゝみ
てつとにするものにもか
　雜賀の崎にまかりて
あちのすむ沖津嶋ねのいはにふれく
だくる浪の音のさやけさ
　なくさの浦にて
みるめかる沼嶋は浪にかくろひぬ沖
よりしほのみちてくらしも

淡路

　あは路の國にてこゝかしこ見めぐりけるに、榎並とふさとのかたはらにおのころ嶋なりといふ所あり、わたり二町ばかりなる岡に松生ひしげれり、中にちひさき社あり、そのかたはらにいと大きなる松の枝ながらかれたるあり、この一木のみぞおほくの年月をへぬらむとむかししぬばる、ちかごろある人のかうがへて今の家嶋とふ嶋ぞまことのおのころじまなりと文にもあらはせり、又ある人のこの國のことをつばらにかうがへたゞせる文には沼嶋なりとしるせり、家嶋なりといふはいとよ

鳴門眞景

りがたし、さればこのみつのところ、いづれともさだめがたけれどたゞいひつたふる名によりてよめる

ちはやふる神代のことぞしぬばるゝ
おのころ嶋のあとゝしきけば

福良の浦にやどりて、鳴門をみんとて浦をつたひゆきて、鳥取といふ所にてたむけをこゆれば、いとしもたかゝらぬ山の長さ三十町ばかりさし出でたるうへをゆく崎をもたひがさきといへり、十あまり一日なりければしほはさかりならずといへど、又ことゝころに似るべくもあらず、白浪のたちさわぎいはほにふれてなりひゞく音のかしこさいはんかたなし

きゝしより見るはまさるといふこと
を鳴門のさきにきてぞしりぬる

阿波

あはの國板野郡なる撫養の浦は二十あまり四つのさとあり、大かたすなどり鹽やくをなりはひとせり、南のかた岡崎の浦より北のかた北泊の浦べまで二里ばかり入江めぐれり、きしのあひだ十町にはたらず、所々しほやのけむりたえず、つりするふねこゝらうかべり、黒崎とふ所にまかりて、あはの海むやの浦なるくろさきをけふまでみざることのくやしさをよめり、東のきし峯かさなれり、中にもたかきを大毛嶋といへり、土佐とまりより浦回をめぐり鳴門のさきまで二里にはちかし、東はちかく淡路嶋にむかひ、北ははるかにさぬきはりまの海につらなり、南は雲ゐに遠く紀の國のたかねどもよこたはりてをちこちのみるめいはんかたなし、ましてしほのみちひに白浪のたちさわぎ、いはほにふれなりひゞくおとのかしこさはことのはにも及びがたし、さつまのくろのせと、肥の國の早崎のせと、いづれもしほのみちひるときはたゞおそろしきのみにてことなるみ所もなきに、このなるとの崎にたちてしほのみちひるさまを見るは、よもやもの海山のうちひらけたるに、白浪の天につらなりてながるゝさまめもあやなり

紀の路よりしほみちくればあはの海
鳴門の崎に浪のさわげる

讃岐

白峯にのぼりて

おほぎみのみはかときけどあし曳の
嵐ならではく人もなし

志渡寺にまうでゝあまのおく
つきを見て

なせがためをさな子置きてみなそこ
に入りにしあまをしぬびぞわがする

伊豫

伊よの溫泉郡と周布郡とのさかひに田くはとふ里あり、南より北にめぐりてくるみとふさとまで五十町ばかりあり、西の方は、いともふかきたに川をへだてゝむかひのきしはかべのごとくみねつらなれり、こゝを櫻がけといへり、道のかたはら、たにのうへ、一ならびに三十町ばかりさくらをうゑつらねたり、をりしもきさらぎのつごもりなりければ、さきものこらずさかりなり、そが中にははやくちりすぎたるもまじりて、若葉のくれなゐ花にもおとらず、又むかひの溪々にはつゝじもさかりなり、うへのかたはたかくそびえたるみねよりふもとまでたにも尾にも櫻さきみちたり、たに川のいはにふれてたぎりおつるしらゆふ花なせり、名くはしき吉野にもまさりてめでたし、かくて十町ばかり行くに溪のまがりたるうへのかたに茅原とふさとあり、木の間よりみなぎりおつるたき有り、又むかひの方にいくちつゑともしられぬ高き峯みつひてたり、中にひとつはことにたかくそびえたり、すべていはほにしてはざまに木くさ生ひたり、岩間をつたひ落つるたきあり、せんはといへり、をりをりたかねよりふきおろす風にちる花はさながら雪のふゞきなせり、いつの世にいかなる人のうゑにけん

南の海伊豫の山ぢにおもひきや吉野
にもにるさくらみんとは

山たかみさける櫻を白雲のみねにも
尾にもたつかとぞ見る

土佐

ものべがはをわたるとき

くるしくも日は入りゆくか物部川わ
たる瀬おほみ舟もあらなくに

宇佐とふ浦に入うみあり、浦のうちといふ、又とさの入江ともいふ、かち路をゆけば八坂八濱あり、三里ばかり舟に

てわたり、きしちかく波しづかにしていとよし

かきかぞふ八坂もこえず濱ゆかずとさの入江をこぐがたぬしさ

よ津の浦に小室のはまとふ所あり、にしきかひいろかひ櫻貝なん、いとさはによると人ごとにいへれば、たづねゆきけるに、人ごとにたがはざりけり、みづからもひろひ、人のおくるをもめでゝよめるながうたみじかうた

みなみの海とさのくぬちはもゝたらず、こゝのそちまりことの浦、ありとしいひてそのうらの、おほかる中に高岡の、よつの浦なる玉だれの、をむろの濱はにしきがひ、さはにしよりで櫻がひ、かずなくありとうつせみの、人のつくればはろばろに、吾きてみるにからにしき、さらせるがごとさくら花、にほへるがごとしらまなこ、きよきありそに沖津浪、よせくるかひをみるめかる、あまと見るまでなみにぬれ、ひろひあかぬにあまのこも、つゝみてもて來さと人も、おくりきたればうらぶれし、心もなごみ草枕、たびのつかれもふるさとの、こひしきこゝろわすれぐさ、わすれてぞ見るかひのくさぐさ

家つとにかひをひりふとありそまにみちくるしほに衣ぬらしつ

わたり川をわたりて、この川を四萬十川ともいふ

うみ山をちさとすぎきてわたり川わたらん末のかぎりしらずも

龍串のいそは二十町ばかりつづきたるいはほなり、浪にされておのづからくさぐさのものゝかたちなせるを、此あたりの人のなにいしくれいしなど名づけてもてあそぶ、そのしな五十くさばかりもあり、あるはたかく、あるはひろくつらなりかさなれるなど、いともあやしきかたちなせり、をはりの所にいくちつゐともしられぬいはのありてつたひゆくに、はてのところに、かべのごとくなるいはのありて、いさゝかくぼかなるところにあしのおよびをかけ、手のおよびをかけてめぐるあやふさいはんかたなし、こゝを夢のうきはしとも、いめのかよひぢともいへり

うつゝともおもほえぬかなぬば玉の夢のうきはしわたるこゝろは

さゝ山をみさけてよめる、この山は伊豫と土佐のさかひにあり

土佐ぢなる幡多のさゝ山みねたかみ雲ゐくもたちはるゝまもなし

西海道

筑前

宰府の天神にまうでゝ

うち日さすみやこをいでゝしらぬひのつくしに身をもつくしたるきみ

箱さきのうらにて

あだし國しづめたまひて箱崎にしづまりいます神のかしこさ

つくしなる海の中道見わたせば沖津しほあひに浪たちわたる

はこさきの浦ひにたちてみわたせばおきつしほあひに日はかたぶきぬ

いきの松原にて

吾がいのち幾萬代をいきぬとも生の松原あく日あらめや

豐前

彦の山にのぼりけるに櫻のさかりなりけり、いともたかき山なるにみねにも谷にも咲きみちたり、中にも二十町ばかりつゞきたるなみきの中をゆくほどなど、とこよのくにゝもいりぬるかとうたがはる

とよ國の彦のたかねの櫻花又もみにこん春のしらなく

み吉野の山ならずしておもひきやかかる櫻の花をみんとは

宇佐のみやにまうでゝ

宮柱ふとしきいます神垣のかげをうつせるひしかたのいけ

肥前

玉嶋川をわたりて

しらぬひのつくしの海にながれ入る王しま川の音のさやけさ

松浦川のほとりにて

わがゆづることもやいづら遠つ人まつらの川はこゝといふなる

湯のたけにのぼりて

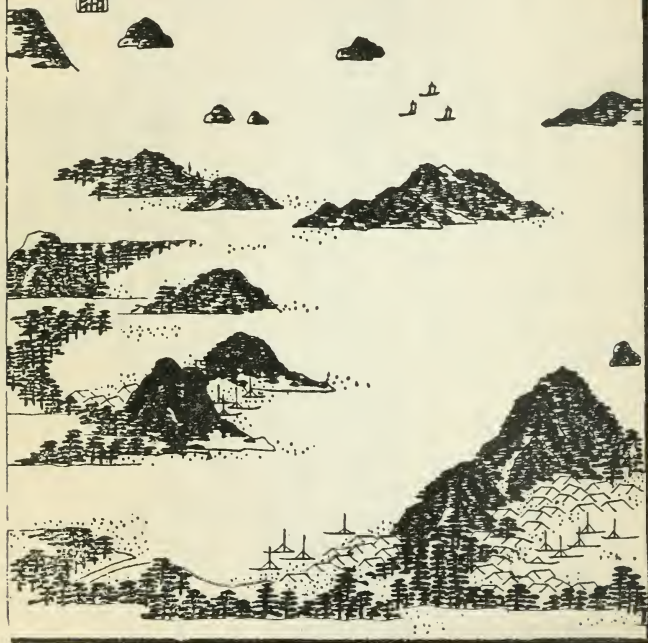
ひさかたのそらになびきてゆのたけの出湯の烟たゝぬまぞなき

嶋原より天草にわたる時早崎のせとにて

早崎のせとこぐ舟のあやふさはいのちのうちにわすられめやも

肥後

阿蘇のねにのぼりて見るにけぶりのわきいづる所あり、湯のわきあがり、ほのほのもえあがる所あり、つちのそこの鳴りひゞく所あり、このみつそのところはかはることもありて、そのありさま古へよりことなることなしといふ、いとものどかなる日ならではのぼりがたし、まれにはふた月も三月も又は一年も、いとはげしく烟たち、ひもゆることあり、さるをりは夜はふもと

博多勝景
應于
海量尊者
之需
遯齋

の里までひかりうつるばかり
にしてつちはひのふることあ
りといへり、まことに人の世
にて又あるべき所ともおもほ
えず、あやしき事のかぎりに
ぞありける

あそのねにもゆる烟をめにちかく見
ればあやしな神ながらかも

薩摩

天草のうしぶかの浦よりさつ
まのわきつの關にわたるとき
くろのせとにて

隼人のさつまのせとのしほざゐに浪
をかしこみいけりともなし

かごしまにまかりて櫻嶋をみ
てよめる

さつまがた沖べにみゆる櫻嶋浪のし
ろきや花といはまし

鹿兒嶋はさくらいとおほし、
きさらぎのなかごろさかりな
りけり、こゝかしこ見あるき
けるに、わきて東のかた一里
ばかり海つらの道をゆく、北
の山はさくらさきつゞけり

あまさかるひなもみやこも春の日に
にほふ櫻はかはりやはする

ひとよはなののちにしるす

ひとよはなてふふみはもな、海量大徳のみづからのからうた、やまとうたをかきのせたまへるふみなり。おほとこは、あふみのうみの海べたなる、彦根の大城につらなれる、里根のやまざとに庵しめて、おこなひたまふひじりになむあるを、吾みかどむそぢあまりの國の中の名かゝすところどころを、よりよりにゆきめぐらし、そのくにそのところにしておもふこゝろをのべておもひをやりたまへるになむ。なほこのうち見のこしたまへらむ四方のくまぐまをしも、ひとせにゆきかへりつつ、ありめぐりたまはむをりよみつくりたまはむを、このまきにくはへたまひなむ。このゆゑよしをはしにかきしるしてよとあるまにまにいさゝかしるしぬる。もとよりことつたなく筆たどたどしければ、たゞそのもとめをいなびしとばかりになむ。ことし大徳のよはひは、いそぢに一とせたらぬとし。おのれみちまろは、むそぢにふたとせたらぬとしになむ。かくいふは

天明の元年

美濃　田中道麻呂

寛政壬子歳仲冬之穀日

弘所

江州　彦根上本町　本屋九兵衛

江戸　通白銀町三町目　須原屋善五郎

大阪　心斎橋順慶町北　栢原屋清右衛門

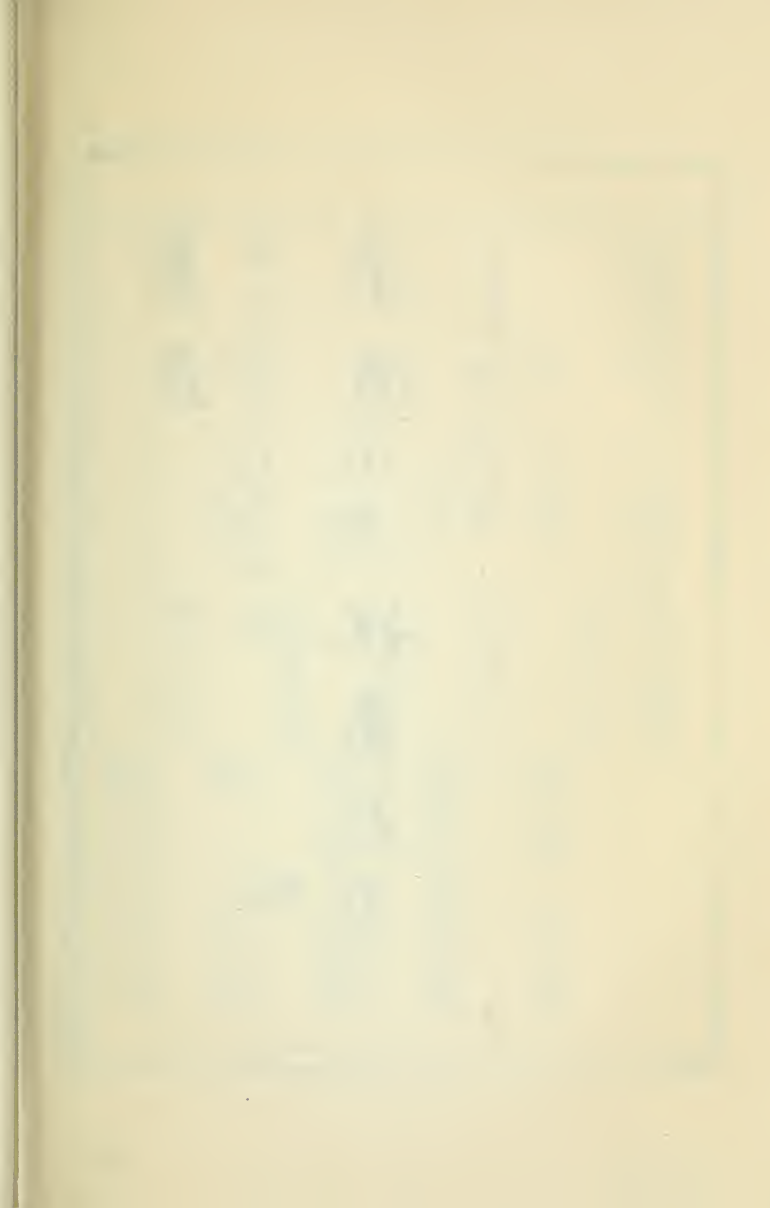
京都　二條柳馬場東　林伊兵衛

堀川高辻上　梶川七郎兵衛

第五

文化二年乙丑十月　於

東遊日次記第五巻

三年丙寅春

あづまにあそぶ日なみのふみのついで、いつゝにあたる卷のはしごと
おほよそもの學ばんことは、人をなつけ國ををさむるのわざにてぞあなる、さるを、ふみをよみそのことわりをあきらむるわざなりとのみ思へらんは、ひがごとにてぞあなる、人をなつけ國ををさむるはもとなり、ふみをよみそのことわりをあきらめんことは末なり、このもと末のことわりをよく思はざれば、まなびのいさをはたゝざるなりけり、今の世にありてははるかにいにしへを見わたすに、ふみをよみそのことわりをあきらめし人のすくなからずといへど、人をなつけ國ををさむるわざをよくまなばひえたる人は、いとも〳〵まれにぞありける、もとたるわざに心をとゞめずして、末のことわりをあきらむることをのみ、まなびの道なりとおもひあやまれるより、まなびの道のたゝざるなりけり、いかにぞなれば、はるかのいにしへをおもふべし、たまち

はふ神のおほみよはいふもさらなり、人の世となりても、もろこしよりふみどものいまだわたらざりしいにしへには、ふみのまなびとふことはあらざりしかど、人をなつけ國ををさめましませしなりけり、よく思ふべし、ふみはいにしへのひじりの人をなつけ、國ををさめましませしことをしるせるものにしあなれば、ふみは末なり、されば、こころざしをたつることのもとたることをよく思ふべきことにこそ、わきて、吾、

皇朝はことだまのさちはふ國、ことだまのたすくるくににして、もとより文字とふものゝあらざりしなり、もろこしのごと、はじめよりふみをつくりことわりをまふけて、をしへののりをたてさせたまはざりしかど、こゝろにおもふことをうちとなふるうたの、おのづから人をなつけ國ををさむるをしへとはなれるなりけり、そのゆゑは、うたは

その眞心よりいでゝうらうへなく、心直にことばのゆたけかれば、人の心をなごしおもひをよろこばしむるになもありける、かれ、おのづから人をなつけ國ををさむるをしへとなれるなりけり、ことわりをまふけをしへののりをたてたるは、たくみにして眞心にあらざれば、ことわりにはしたがふべしといへど、心になつくべきよしのあらざるになもある、うらうへのおもひなく眞心よりよみてしうたもて、人の心をなごしおもひをよろこばしむるぞ、人をなつけ國ををさむるのもとにてぞあなる、よて、人をなつけ國ををさめんまなびはいにしへのうたにてぞあなる、心直にしてことばのみやびかに、しらべのうるはしかれば、うちとなふるにもうちきくにも、人の心をなごしおもひをよろこばしめざることのあらざるなりけり、さりとてうたをもてをしへとするにはあらざれど、眞心よりいでたるうたなれば、人の心をなご

しおもひをよろこばしむるが、おのづから國ををさむるをしへともなれるなりけり、よしやうたはよまざれど、かみにたちましませる、君のみ心だになほにおはしまさば、しもたるものの、したがひなつかざることはあらざるなりけり、されば、まなびは末にして、志のもとたることをおもひはかりつべし、なほなる眞心のまゝならずして、ことわりもてをしへののりをたてたるは、ことと心とうらうへにして、人の心をなごし、おもひをよろこばしむることあらざるなりけり、よて、もろこしの、ふみのことわりもて人をなつけ國ををさめんとせしたぶりは、そのをしへの道たゝずして末みだれたり、吾皇朝のことだまのさちを本としたまへるたぶりは、ちよろづのすゑの末まで、をしへののりのみだるゝことのあらざるなり、これぞ人をなつけ國ををさむるに、もと末をあやまらざる、まなびの道とたゝへつ

べし、うたといへど、後の世となりては、直なる眞心のまゝにはあらずして、ことをまふけことわりをかまへ、たくみにちからをもちひることをのみめでおもへれば、大らかにゆたけき天地の心にはかなはず、さゝやかにくた〳〵しく、たよわくあさはかに、ますらをのもてあそぶべくもあらず、めゝしくたわやき、なべて世の人のこゝろばへの、こちたくむつかしげになり行こと、心あらん人よく思ふべし、よてここに、のちの世のたぶりに心をかけず、ことをまふけうたよむことをことゝせず、海山をゆきめぐり、名どころをたづね、春の花秋のもみぢ、月のゆふべ雪のあした、友がきのまじらひ、うたげのむしろ、神の宮ほとけのには、里のわかれたびのゆきかひ、うきにもうれしきにも、かなしきにもことぶきにも、ありのまゝおもふがまゝ、うちうたへるうたにおもひをやり、こゝろをなぐさむるになもあなる、こやこ

とだまのさち、ことだまのたすけにこそ、
文化のふたとせといふ年のかみなつき

海量しるす　七十三齢

東遊日次記第五卷

文化二年乙丑十月十一日、櫻田煙雲樓賦此、

中夏初冬八國遊、
二毛名勝暫淹留、
信中御嶽躡深雪、
飛地平湯掬漲流、
濃甲經過存浪跡、
芙蓉孤立望悠々、
相山武野都堪賞、
更混紅塵百萬樓。

たち出、ところどころ友をとひ神田橋本街大多和隆重が宅にやどる。

十二日　本所、あたりに人をとふ、ふじのみゆるところにて、

駿河なるふじはひとつをしなの甲斐さがみむさしの國ゆみるかも

兩國橋のほとり小野がやどりにて若山にあひけるに、あす柴邦彦が七十の賀に行といふをきゝてよ

みてつかはしける。

　さゞれ石のいはほなすまでいにしへもまれの齢をかさねたまはねは

やどりははしもと。

十三日　菊池善をとふ、つどへる人らふえふきことひをうたうたひあそぶ、この夜やどりてよめる。

　むさしのみふきくる風にうちうたふ聲は雲居に立のぼるらん

　武蔵野を吹まく風にふえのねも月のひかりもさへぞまされる

　ひえのねをおろす嵐に笛竹の聲すみわたるしぬばずの池

　霜きゆる夜半のあらしにさへわたる笛のしらべをききあへなくに

十四日、法仙居士をとふ、のりのこ

とゝひ、いとめづらしかりき、分て法相宗をきはめんのこゝろばへなれば、

くにつちもときもめにみぬちりひぢのかずなき数をつくす君かも

をりしも池のほとりにもみぢばのちりたるがいとおもしろかりければ、

もみぢばをえだにめづるとちりにしをめづるといづれわきぞかねつる

紅葉のさかりよろしもちりはてしのちの色をぞわがめでまさる

もみぢばのちりつもりしは枝ながらみるにまさりてあはれなりけり

つくろはぬまがきの上にもみぢばの散りしく冬ぞあはれなりける

もみぢ葉のちりぞつもれるから錦おりかけたりと人のみるまで

こゝかしことひて菊池が宅にやどる、月のいとさへければ、

月かげのさやけくもあるかかれ草におく白露を玉とみるまで

みつしほのひるにまさりてしらじらししものふる夜に月のてれゝば

十五日　神田の神のまつりと人々たちさわぐ、人のすすむるがまゝ糀町あたりしるべのかたにてみるに、道のほどたてによこに人みちみてり、君も吹あげあたりまでたちいでさせ給へりといふ。

かみもきみもめでますらしも春花のにほふがごときけふのさかえを

午ばかり、みはてずしてたちいでぬ。脇坂竹齋大人のみもとにみやびをらつどへるとききてたづねまゐりけり。夏のころより山水のみ見めぐりかへりきて、けふのつどひの珍らしかりければ、

くもふかく分いらなくに山人のつどひにあへるこゝちすらしも

十六日　下谷延命院にて浦和法藏院
の因明論をよ
めるむしろをたづ
ねける。しれる人
ひとりもあられざれ
ばことゝひせんす
べなくかへるがか
ひなきことゝおも
ひて
法をとくむしろ
に入てかへるかも
みゝなきがごとく
ちなきがごと
天文臺にはざまぬ
しをとふ、中西槐
庵が豐島のやどり
をとひけるからう
たをおくりけるこ
たへ、
萍遊相値歌遷喬、
萬水千山道路遙、
歸立往來何所作、
清風明月拂塵囂、
十七日とこ〴〵
をとひ、日暮れて
二本榎山下宗甫が
宅にかへる。
はろ〴〵にかへ
りぞきつる東路の
たびのやどりをふ
るさとにして

十八日
ふるさとのこゝちこそすれ草枕たびに月經てかへりきぬれば
わかれ路ををしみしかひはありそ海のおきつ白浪またものよりきぬ
十九日　如意にかきつく、
汲流龍谷水、慕跡寒山詩、含笑揮如意、招來天下奇。文化甲子冬、遊下野國阿蘇郡佐野、上瑞龍山天應寺、逢萬應師、請後園竹裂此。
二十日　櫻田のみたち、ふるさとの人らにあひことゝひして
けふひとひたびをわすれつひこね人よりきつどへる櫻田にきて
あるやごとなき尼公のみ母のみことゝのかくれさせたまへりときゝてよみてたてまつるうた、

大ふねのおもひたのみしたらちねのはゝにおくれて何こゝちせん

ぬれとこに身をけがしてもかわけるにゆづるめぐみのあさからめやも

ふところにいだかれひざにはひかかりかたにすがりしはゝのみことは

ちよろづの人はあれどもたらちねのはゝのなきよとなれるさぶしさ

かみな月しきてしぐれのふるなべにぬるゝたもとをおもひこそやれ

たらちねのはゝにはなれてうつそみの世の常ならぬことをしらなん

現身の世のつねならぬことわりををしへしのりをあふぎたまはね

のりの海ふかきめぐみをあふがずばいかでこええんいきしにの海

かぎりなくほとりもしらぬいきしにの海のと中にまよふはがなさ

かりの世をあと
にみなしてのちの
世はほとけの國を
ねがふのみこそ
さくら田備前町に
やどる。
二十一日　さぬき
人らをとふ、こと
とひするがうち、
ひとりが野山にあ
そぶにもてあそぶ
うつはをつくり、
それがふたにもの
かきてよとこふ
に、もだもあらで、
　ひとつきのにご
りざけこそ山水を
めづるみたりのひ
とりなりけれ
三緣山のほとりな
る辨財天宮のある
じをとひけるにあ
らず、のこれるも
みぢに日かげのう
つりていとあきら
けかれば、とくも
たちさらず、
　かみな月ゆふ日
てりそふもみぢば
のにほひにまさる
にほひあらじな

二十二日　雨いた
うふるを、
　秋の野の露もか
わかぬたび衣しぐ
れの雨はよきて
ふらなん

二十三日　ひこね
の君の四十年のほ
ぎにたてまつる長
歌ならびにみじか
うた、
　天地のひらけし
ときゆ　あれまし
ゝ神のみことの
かみながら高しり
ますと　宮柱ふと
しきませる　あし
原のみづ穂の國は
ひさかたの天津日
つぎの　樛の木の
いやつぎ〱に
はふ葛のたゆるこ
となく　すめろぎ
のしろしめすなる
國はしもさはにあ
れども　いはゞし
のあふみの國は
神がらかうべもた
ふとく　國がらか
山しみがほし　山
からの水のきよけ

く　水がらか草木
しみゝに　うまご
りのあやによろし
く　あめつちと日
月とともに　もち
月のたらへる國と
鶏が鳴東の國に
大とのをはじめま
しにし　神ろぎの
神のみことの　こ
とのきてよざしの
まにま　吳竹のよ
よにつたへて　眞
がねふくこがねの
かめの　名におへ
るひこねの山を
しろしめす君がよ
はひは　春花の色
香もたへに　秋の
田のにきびさかは
え　よろづよにさ
きくいませと　う
つそみのよの人わ
れも　うたうたひ
ことほぎまつる
かしこかれども
　眞がねふくこが
ねの龜の名におへ
る山のいはねのら
ごきあらめや

同じからた、金龜山上金龜城、
龜鶴遊翔洲渚清、
松竹芬榮橋繁茂、
延齡保壽是蓬瀛。
二十四日　中津の
守のみそのなる梁
正記をとふ、ひと
さかばかりなるす
ずりあり、おのず
からなれる石のお
もてをいさゝかつ
くりなしたるかた、
何ともわきがた
し、色はみどりに
し、かたくおもき
ことかたちとはふ
たつばかりなり、
おのれ飛驒の國よ
りもちかへりし石
墨といふをおくり
けるに、いとよく
もちゆべし、よろ
こぼひこれが名を
といへれば、
天地とともにな
りてしすゞり召す
るともつきじよろ
づよまでに
とうたよみして、
萬世とこそいはめ
と云ひつるになも。

二十五日　たち出、天民を訪ひ、櫻田のみたちにいたり、日くれて豊嶋なる槐庵がりやどりぬ。いとさむかりければ、

しもやおくこほりやすらんこのゆふべはだへにしみてさむくぞありける

二十六日　こゝかしこをとひ築地あたり諏訪の君がたち藤森平介をたづねことゝひす。うへ野あたりの法しきたれり、ともにあそばひをりて、いあろじにつかはしける。

よしゑやしさけによりてはけふここにうひにこしともおもほえなくに

（頓辭
鳳闕一時榮、世上何求身後名、雪月風光弄幻化、西方志願盡精誠。）

ほりどめのやどり。二十七日　文晁をとひ、西行法師のゑをかけるに、

内日さすみやこをいでゝ山水に心のちりをそゝぎはてゝき

白芝山をとふ、やどりをかへたり、いづちいきけん。

二十八日　兩國あたり深川これかれ所をとひ、つひに本所三ツめ小津輕のたちにゆきたまへる安彦うしをとひける、そのちゝのいみにこもりたまへり。日くれてかへるみちにてよめる、

ちゝのみの父のなげきのやどとへばかへる道だに心まどひぬ

二十九日　八丁堀の春海をとふ、阿波のさゝ木玄策をとふ、築地にまうづ、淨立寺をとふ、中津のたち大富

はじめてとふ、ふるくふるごとをこのめり。

ふるくよりふるごとかたる友なれやあひみることははじめなれども

くらなりの　　　を
とひ、日くれて長
崎のやのやどり。
晦日　阿波、吉益
順郷をとふ、
　國こそはちさと
へなるれはたとせ
の昔の友はしたし
きろかも
霜ふり月朔日
　しものふる月し
きぬれば草まくら
たびの心はうらぶ
れにけり
二日　雨ふる、あ
られふりいと寒し。
　いとゞしくさむ
くも有か霜のふる
月とはいへどあら
れ降れゝば
三日　空のはれざ
ればこもりをり。
　よしゑ矢師雨は
ふるともふるごと
をしぬびふるぶみ
みるがたぬしさ
四日　ある人のほ
き、松添榮色とい
ふことを人のよま
すに、

しら雲のいやふりつみてときはなす松のみどりのあたゝかに見ゆ

いくちよにさかえゆかんと常盤なす松のみどりも色やますらん

　幾千世のよはひをかけてときはなす松にさかえの色をみすらん

柴邦彦をとふ、尾藤二州をとひことゝひして、

　あふこととのめづらしきかもいくたびかとひきたりしにあらざりしゝを

藤田一學をとふ、小石川智香寺のやどり。

　霜のふる月かへりきぬさつき雨ふるころこゝをたちいでにしを

五日　長野きよらをとふ、　大泉寺をとふ、

　たまあへる友にしあれば思ひでゝとひくるごとにたぬしきろかも

日くれて護持院に清水をとひてやどる、　雨ふりいづ。

夜をさむみ枕にちかくふる雨のさわめく音をきゝあさへんやも

六日 雪ふる、ながめをりて、

足曳の山の木ごとにさく花とみるまでに雪のふりかゝりつも

花ならばいかにをしとやおもふらん風にみだれてちらるしら雪

うめにめでさくらになぞへふる雪にたびの心もわすれてもひぬ

玉しけるにはとみるまで大塚の山の木の間の雪のふりはも

雪ふればおもしろかれとふるさとの伊吹のたけのわすられなくに

むさしのにふりつむ雪にさゞ浪のひらのたかねをかけてしぬばゆ

草枕たびの長路にしら雪もかしらのしももふりぞつもれる

あづまぢのたびのたびのやどりにふる雪のきゆるおもひをやるかたもなし

いへにあらばめづべき雪をたびにあればはればやとのみ思ひわびぬる

ふる雪はいづこわかねどみなれつるひえのたかねのおもほゆらくに

うづみびのもとによりゐてふる雪をめかれをしらにこの日くらしつ

大塚の山の木の間にふる雪をゆたにぞめづるひとりのみして

わがめづる心をしるやしら雪のおもしろくしもふりぞつもれる

おもしろくふりつむ雪をおもしろくおもふ心を人はしらじな

足曳の山のしみ木にふりかゝる雪をなぐさにけふもくらしつ

みそらより風にみだれてふる雪をたれかはめでんあたらそのゆき

高風昨夜渡祗林、
雨撲閑牕傷客心、
到曉寒雲巻竹樹、
滿天雨雪散欽崟、
白鬚衰老甘羈旅、

黃面頽齢耽苦吟、
遥慕國淸三隱跡、
人間世外豁胸襟。
雪霽雲收夜色寒、
月出淸暉落玉欄、
地幽方丈爐烟靜、
人少閑窓旅思寛、
百歳行藏弄筆硯、
一身遊戲摧心肝、
吾生不乏江湖興、
往々書中有壯觀。
七日
雪後千峰曉色鮮、
玉樓高倚大塚巓、
芙蓉西望千秋雪、
滄海東看萬國船、
高聳城牆長不盡、
平臨市井幾無邊、
誰知人世多勞苦、
佛日光暉滿大千。

旅黃面頽齢耽苦吟遥慕國淸三隱跡人間
世外豁胸襟
雪霽雲收夜色寒月出淸暉落玉欄地幽方
丈爐烟靜人少閑窓旅思寛百歳行藏弄筆
硯一身遊戲摧心肝吾生不乏江湖興往々書
中有壯觀
七日
雪後千峰曉色鮮玉樓高倚大塚巓芙蓉西
望千秋雪滄海東看萬國船高聳城牆長不
盡平臨市井幾無邊誰知人世多勞苦佛日光

三十あまり三つの觀世音ぼさつの靈場をうつせるがうち、十あまり一つのむろにすめる人をとひけるに、その人はみやこにのぼりたりと、もる人あり、ことゝひして、

八日　たち出、櫻田あたりこゝかしことひて、備前丁やどり。

　冬ごもりえだにふゝめるうめの花こゝろひらくる春をこそまて

九日　清水のみとのゝみうち、しれる人の病めるをとひけるに、こへるがまゝよめる、

　いかでかはめぐみなからんたらちねのはゝのやまひをなげく子のため

二本榎のやどりにかへる。

暉満大千

十日　梅のふゝめるをみて、

　いつしかとおもひかけぬを梅の花さけるをみればおどろかれつも

十一日　軒端の梅をみをりて、

　をりかざす友こそなけれ梅の花いづこかはらぬ色香なれども

十二日　僧發をいざなひ廣尾のほとり陰山　とふ、

　とくきても訪はましものをあしがきの心のへだてなきをおもへば

　こゑしれる友にあはずば草枕たびの心は何なぐさまん

平林東嶽老翁をとひ、いといにしへの人らをおもひいでゝ、

　人しれずしぬばれぞするむらさきのゆかりむかしの人のとひしむかしの

十三日

十四日　さくら田のみたち人々をとひける、　松居がちゝ　が六十のほぎのうたをもとむるに、

　春ごとに色そふ松はいく千世にさかえさかゆるためしなるらん

日くれてかへるみちあられふる、

　ぬきみだる玉とみるまで白栲の衣の袖に霰たばしる

糀まち、しれる人のもとにやどる。うたよむ人なれば、

　うたしぬびふみみことゝひうつそみのよのこちたさもおもほえなくに

十五日　さくら田に人をとふ、堀どめのやどり。

十六日　柴邦彦をとひ、飛騨人のため、くさ〴〵のものをかきおけるをこひて、

橋本のやどり。

十七日　築地あたりをとひ、中津のみたち大富のとひことゝひしけるに、かめにさしたる梅のうたをこひければ、

冬ごもり枝にこもれる梅の花春をまつ間の友にぞありける

十八日　上野しのばずのあたりにここかしこ人をとひけるが、しみづの玄長がのきばの梅の花をみて、

むさし野のたびのやどりに去年もみつこともしぞみるうめの初花

十九日　櫻田のみたち人々にあひことゝひ、

草枕たびに年經てあまごろもなれにし人にあふがたねしさ

草枕たびの長路にふた年をふるさと人とまとゐするかも

ふるさとのともぞともしきめつらしくことゝふ人のいくらあれども

かへるみち、赤坂専福寺をたづね難波人にあふ。

ぬば玉の夢ならなくにあづま路に難波人らとまとゐするかも

二十日　のりのみ夜二本榎のやどり、ちあやまれるをさとさんよしのあらざれば、

のりのためみち引いとのむすぼふれとけぬ思ひないかにかもせん

二十一日　空くもれ、ながめをりて

月かげはそこともわかずくもり夜にまよひはてなんことのかなしさ

二十二日　正記をとひしにあらざりしかど　さけくみ、をとひことゝひ、ゑひてかへらんこともおもはず、日くれ風ふく、

たづねこしかずはたらでもさぶしさをわするゝものはさけにざりける

風ふけばいさゝむらたけうちそよぐ音のさやけし冬の夜にして

あろじ、くれ竹のおひしげらへる吾やどを君ならずしてたれかとふべき、とよめるに、

呉竹おひしげらひてよのちりのたたぬやどこそたぬしかりけれ

二十三日　さくら田にて荒木眞弓があふみにかへるをおくりて、

雪ふかきはこねをこゆるわかれ路をおくる心のやすからめやも

み雪ふる冬にしあればとゞまるもかへるもともにやすからなくに

あづま路にあふうれしさをつゝみにしそでにわかれのなみだかけてき

二十四日　淺草にまうづ、こゝかしことふ。

霜のふる月くるごとに法の師のめぐみはいと身にぞしむなる

二十五日　かゞみにむかふといふことを人のよめるに、

うちむかふかゞみにうつる吾かげのわれにもあらぬこゝちすらしも

年經ていふといふことを、

いかなれば人のつれなきあらたまの年月かけていひわたれども

ふみを、

いにしへのしづのをだまきくり返しみるにあかぬはふみのまき〳〵

清風隔世塵といふことを、

うち向ふこゝろのちりもしげりあふこの間の風のはらひはてゝき

二十六日　すゞりのふたにかきつく、法仙をとひてことゝひ、

大海はかへつくすともつきめやも硯の海にむかふこころは

　おほうみはよしはかるともするすみのすゞりのそこをいかでつくさん

二十七日　つき地のみてらにまうでて、

　法の師のめぐみおもへば天地もちりひぢよりもかるくぞありける

　のりの師のめぐみむくひんちからなき恨の涙とゞめかねつも

二十八日　あさくさにまうで、こゝかしことひてことひ、

　もろ〳〵をすくふちかひの身のうへにかゝるめぐみのかぎりしらずも

二十九日　雨ふる、こもりゐて、

　たびにしてふりくる雨のわびしさをわするゝものはさけにぞありける

晦日　さくら田のみたち、人々をとふ。

家をいでし身ぞとおもへどふるさとの人のことゝひたぬしきろかも

十二月朔日

名にしおふもの
にしあらばうゑな
なんとく年月のく
れなゐの花
おふかたの人に
まさりて行年をを
しむ心をたれにか
たらん
おもかげはよし
かはるともおもふ
ことなしうるまで
のよはひもがもな
あらたまの年の
くれ行ことわりを
しらぬ顔にもをし
む吾かも
人しれずひまな
くものをおもふま
にくれ行年をいか
にかもせん
なしはてぬうら
みあらずば行年の
くるしきまではを
しからましを

二日

春まだきはやく
も梅のさきぬとは
風のかをりにしる
くぞ有ける

三日　赤坂専福寺をとひて、かへりきてよめる。

直からぬ心とともに一すぢの糸のみだれのかぎりしらずも

夏引の手びきの糸のくるしくもみだれけるかもとく人なしに

奥山にふりつむ雪も春さればとくるにとけぬ人のまどひか

平林東嶽をとひて、

君とわれなゝそぢ八十年相老の末のかぎりはあらじとぞおもふ

四日

み雪ふる冬もつきぬをたがやどの梅さきぬれや風のかをれる

五日　うぐひすをまちて、

冬ながら梅さき(にし)ぬるを鶯はいかできなかぬうめさきにしを

六日　あふみにかへる人をおくる。
人やりのたびにあらずば梓弓はるまちてよとゝめましものを
七日　正記をとふ、うめのさかりなるを、
うめの花さかりにさきぬ鶯のすみかたづねてつぐるよしもが
梅の花めかれずめでんあづさゆみ春をもまたでちらばをしけん
八日　正記をともなひ赤坂専福寺をとふ、かへさ廣尾の野にて、
ふく風ははだへにしめどむらぎもの心ひろをの野べののどけさ
九日　さくら田のみたち、
ひこね人よりきつどへるさくら田はむさしとやいはんあふみとやいはん
十日　小野　　をとひてことゝひ、

君ならでたれにかたらんたびにしてこゝらの年をおくる心を

十一日　さくら田みたち、かへさら古賀　とふ。

たびはうきものとないひそめづらしき人のことゝひあかぬおもへば

十二日　松田をとひけるに　つまの身まかれる、とゞむるにあひて

ありし世にあひみざりしをおもひきや野べのおくりにあはんものとは

こゝかしことひ、菅の谷伯美がもとにて市川にあふ。

飄然萬里客、飛錫留闕東、西望芙蓉雪、額萎武野風、無由問舊好、不乏會英雄、況有金樽酒、歡娛不可窮。

十三日　しなぬの高島人、貞愼にかしたるふみどもをとく

かへさんといひしに、
しばしとてちぎりしことの月さへもかさぬべしとはおもひきや君

いかにやふみをもつかはしけれど　かへりこともきこえざれば　またもふみのつかひやらんとてよめる。

うつそみの身にそふものを心なくへだてられんとおもひかけきやしばしとてこへることばのいつはりにあらんものとはおもはざりしをことのはのうれしからざることわりを君によりてぞ吾はしりぬるおほろかに人はおもふや難波津の身をつくしにしことはしらずて日かずふることだにうきを月さへもとしだもいまはこえんとすらんあまのすむありそによするかたしがひかたごひこそはくるしかりけれちぎりてしことなたがひそさかしまに日月も年もめぐらぬものを

かにこそはよこにもはへれ人よ人めぐみおもはであためをなすらん

いさゝかもめぐみおもはゞまちがてぬ心のほどをおもはざらめや

しばしちふことは心のたがひある人としりせばかさざらましを

くやしくもかさざらましをかくばかりめぐみをしらぬ人としりせば

とぶ鳥のつばさもがもな信濃なるすはのうらみに行ましものを

つき地に人をとひことゝひ、中津人をとふ、堀どめのやどり。

十四日　神田あたり、つくし人をとふ、本所小津輕のたちをとひける、津輕人のもてあそぶに琵琶とふものあり、いづかたにてもみざるものなり。

津輕人もてあそばへるくちびはゝいつかいづれの人のはじめし

日くれてかへるに、空のくもりてのどけかりければ、

　み雪ふる冬はつきねど月かげのおほにぞかすむ春たつらしも

十五日　清水玄長をとふ、竹齋のつどひ、

林園邸第側、諸彦此、幽尋偏愛寒梅發、遙思臘雪深、揮毫耽逸興、酌酒避窮陰、不抱離蘆志、誰知大隱心。

夜にいりて雪ふりいとさむし、酒をくいみて、

氷る夜のはだへにとほるさむけさを雪ふりてせまるさむさのあたがたきふせぐはさけにあらずしてたれ

十六日　雪ふる、

　春のたつを、

さく月よめばまだみ雪ふる冬にはあれども

春たつといへども冬のつきねばや雪うちゝりてさむしこの夜は

夜をさむみ雪はふれどもてる月のひかりのどかにかすみ棚曳

あらたまの年のうちより春きぬと梅の花さく雪はふれども

月よめばまだ冬ながらはるたつとかすみそめたりむさしのゝ原

十七日松のほずゑにたづのすごもりをかきたるゑにときはなする松にすかくるあしたづの雲ゐにかける聲ののどけさ

福祿壽のゑにものかきてよといふに、

保得福祿壽、福祿壽、共全、共全福祿壽、此三本在天。

かみ風の風のまに〳〵ひさかたの空行雲にさはりあらめや

ふく風になびく柳のなごよかにあるべかりけり人のこゝろは

本所古え町寤默軒をとふ。

のがれすむやもひのとこをたれしかしるとふともなしにとひし心を

十八日　岡村勝容をとふ、阿波人をとふ、二本榎にかへる。

あきつ嶋やまとにたてるいそのかみふるごととひてしぬびけふもくらしつ

十九日

あづさ弓春たちぬればうべしこそさきてにほへり梅のはつ花

二十日　桐ケ谷の里、もとの八茂が宅をたづぬ、野をこえ、袖の浦にすめる大内の老婆をとふ、浦べにたちて、

かずしらぬ大ふね小ふねよりつどふ海原かすむ春たつらしも

かへり、正記をとひける、空くもり雨ふる。さけくみことゝひす、くれんとする、あられふり風ふき雪うちちる。

さけくみてあそびくらさんよしゑやし風は吹くとも雪はふるとも

二十一日　年ごろ安心のあらそひにより、このごろは吾のりのしのらからの人々、いつたりむたりをおほやけにめされて、そのまどひをたゞしたまへるにおよべり、このもとは功存智洞のふたりのものゝ、時のいきほひにほこり、かみをかすめ、おのれがまとひをかへりみず、をろかなるものをしゆるに、その心ねをとはず、又安心のことわりをもいはず、その手をとり

みほとけのみまへにしてたすけたまへとたのませ、安心領解往生はあひすみたりとおのれよりゆるし、その人にもいまやらちあきたりとおもひとらするを、もとより何のわきまへなきものゝ、他力易行の安心はかくこそありけれと、安心領解も往生も、おのれ〳〵がくちにまかせ、蓮師のたのめたのむとしめしたまひし御心をうかゞはず、その御ことばのみをもて、おのれをほこり、他をあざけるのあらそひとなれるなりけり。こをもてよくおもふに、いづれの道、いづれのをしへといへど、よくならひよくつとむることはかたきことにてぞあなる。かくいふべきことにもあらざれど、かゝるをりにありて、吾のりの師のみをしへのあらそひをよそにすごさんことも、もとよりこころのやすからざ

ればいさゝかちになくのおもひをのぶるになも、

湖海津梁幾往還、
隨時客舍滯東關、
千山萬水勞歸夢、
飛雪寒風破旅顏、
覺路明燈混世上、
迷川寶筏託人間、
獅虫惑亂腸堪斷、
爲法誰知鬢髮斑。

二十二日　いとのどけし、うめのさきたるを、

くさまくらたびのやどりに梅の花さけるをみればおどろかれつも

あら玉のたつ年のはにみるといへどましめづらしき梅の花ぞも

うぐひすのきなくこの間の梅の花さかりをつねになさんよしもが

二十三日　雨ふりていとのどけし。

かきくらし雨の
ふる日に梅さきて
心のどけし冬には
あれども
　雨ふれば露をふ
くみてめかれせぬ
うめのにほひのう
たてよろしも

客舍
舊臘坐看流節回、
林園雨濕白梅開、
白梅含露全欺雪、
晴
清雪爭光不及梅、
日
月吐清暉增冷艷、
風飜香氣絕薰埃、
不知衰老年華改、
更喜烟霞春色催。
去歲今年東海邊、
年々歲々感流年、
難逢萬古風雲會、
堪伴千秋詩酒筵、
白髮生涯弄雪月、
丹心遊戲盡山川、
一身輕擧塵埃外、
世路曾無俗累牽。

二十四日いとの
どけし、梁正記を
とひこと〻ひ、
み雪ふる冬もつ
きぬをおそくとく
も〻木の梅のさき
ぞにほへる
年のうちに春た
ちぬればうめの花
さきのさかりはけ
ふにぞありける
色に香ににほひ
よろしき梅の花み
つ〻しをればおも
ひなみこそ
つりをたる〻うた
をよめといふに、
いざやこらいと
はりもてこおほう
みのありそにいで
てつりをたれなん
大海のありそに
いで〻つるうをの
かぎりはあらじ萬
世までに
たちかへると
をとひける、小瓶
にうゑしくれなゐ
のうめあり、その
香をりもつねにま
されり、
冬ごもりをがめの梅のくれなゐににほふがうへに香さへかをれる

二十五日

風かをる梅の花さきかすみたち日かげのどけき年のくれかも

二十六日　さくら田にゆき、こゝかしことひけるに、大かたはあらず、よに人はみちてあれども大ふねのゆたにことゝふともぞまれなる

くれて行年のこなたにさける梅かざしあそばん人はいつらは

かへさ、さぬき人宮武良順をとひけり。はりま人きたる、伊勢人のうたをおくれるあり、おのれもしれる人なり、そのうたのこたへをよみてんやといふに、

年月をおくりむかふるへだてなくつねに心はたぬしからなん

二十七日

うつそみの身のおこたりを年月のくれゆくごとにをしむすべなさ

かへりこぬものとしりつゝ心いたくくれ行年のをしまるゝかも

二十八日　年のくるゝををしむ長らたひとつ短歌みつ、

四方の海波をしづけみ　あづさ弓春さりくれば　さとごとにはな咲ををり　露しもの秋さりくれば　野も山ももみぢ葉にほひ　人ごとに花をりかざし　あさよひにもみぢばたをり　いとまあるよにしあなれば　むらぎもの心ふりおこし　いそのかみふることしぬび　しき嶋の道あきらけく　のちのよにかたりつぐべく　ちとせにも名をしたてんと　ますらをの雄心もなく　いたづらにくれ行年ををしまざらめや

もち鳥のよにかかづらひいたづらに年のくれ行ことのかなしさ

　空蟬の常なきもはゞ千歳にも名をしたつべき心つとめよ

　よしゑやしかたちばかりは人ごとのしげくこちたきよにはすむとも

二十九日　あかつき雨のふりていとつのどかなれば、ひとりながめをりておもひをのぶるからうた、

烟雨冥々曉色微、
梅花如雪發春暉、
一身遊戲年將盡、
萬里關山客未歸、
遯跡却甘人共棄、
藏輝何厭世相違、
無諍三昧吾家事、
不用浮生論是非。

ひとゝせもけふを
かぎりになりぬる
ことをおもひつゞ
けて、

　河水もたゆる日
あるをくれて行年
はしばしもとゞま
らぬかも

　春秋の長き日も
夜も名のみにて早
くも年のくれて行
かも

　百を三つ十を六
つそふ日の数もけ
ふのひと日になり
にけるかも

　ふる年はいぬと
もよしやあたらし
き花さく月のつぎ
てきぬれば

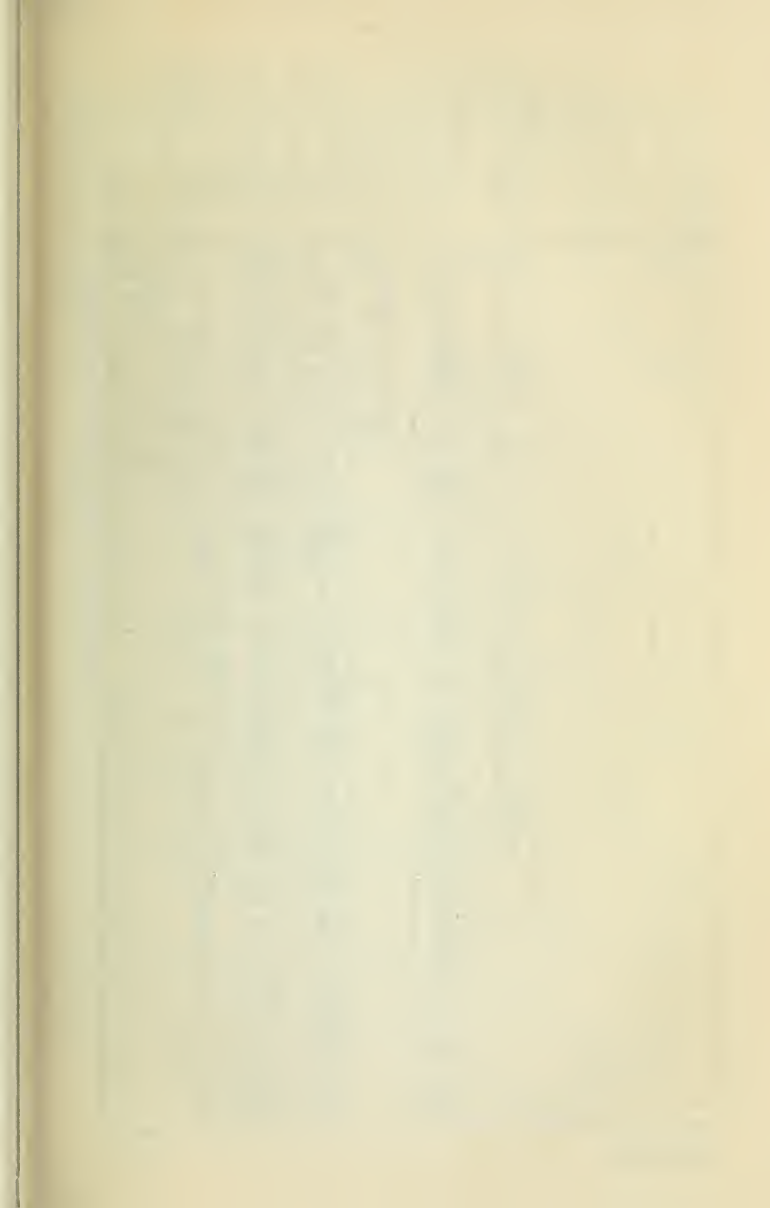
　玉くしげあけん
あしたは梅柳かす
みの衣きてやきつ
らん

　うぐひすのはつ
ねをつとに日高み
の山坂こえて春き
たるらし

去年今歳滯關東、
歳暮何人感慨同、
舊好分離千里外、
新知談笑寸心中、山川遊戯神通力、筆硯風流造化功、翫弄千秋萬古意、昇平恩澤樂無窮。

客裡明朝又一年、
誰憐孤客客中篇、
片心好是雖堪寫、
吾道由來不易傳、
富貴功名非所願、
津梁船筏有因緣、
人間別抱青雲志、
白髮生涯任自然。
白髮蹉跎惜暮年、
閑聽剪燭思凄然、
何妨世上無同伴、
不乏書中萬古賢。

[illegible]

客裡明朝又一年誰憐孤客客中篇片心好是
雖堪寫吾道由來不易傳富貴功名非所願津
梁船筏有因緣人間別抱青雲志白髮生
涯任自然
白髮蹉跎惜暮年閑聽剪燭思淒然何妨
世上無同伴不乏書中萬古賢

孫募冊子

林にあそぶ鳥のやどり、ところ得て生ひ栄ゆる木草の花、人の友垣の語らひもおのれ〳〵が好めるにひかれて心はゆくめり。父母に別れ奉りての世には、うからはらから頼みつべきが多かめるにも思ふをあかし、憂き嬉しさを語りなぐさむなんいとほしき。たゞまがりねぢけだにせずば、おのがむき〳〵しわざいかさまにもあれな。今や老いらくの世にかへりみれば、こゝの入江の蘆がちる夕風心さむらにおぼしゝめりしをも大方に先立

てたりしに、ただ一人世にとゞまれるは上田の翁なり。我には齢五つばかりおくれ給へど、萬に心さとく、兄とも推しゆづるべかめる。常に國ぶりの歌をよみて獨たのしとせる。その下書めくものあまたつゞら箱につみ入れわがまへにもてきて、これなむ年月に刈りつみし礒回の藻屑なり、もとより蘆原のしげけき小屋に生ひ出でてひぢりこに染みたるあやしの言草は、久方の仰ぎ望む御あたりには天彦のよびつたふまじ

く、又同じ民草の中にはほむともおとしむとも何心してと思へば、一つものに耳過しつゝ年はへにけり。君と我、土をつみて城をかまへ竹にまたがりて馳け走りし昔より何のたがふふしなくて相おいの今迄ゆきかひ問ひかはしぬるには、歌よませたまはずともおのがひが心をしられまゐらすには、見せ奉りて、一言をだにをかしと思はれなむいとうれしき、見をへて後にはし一くだりにても書

き加へてよと聞ゆ。あなわづらはしとは思ふ思ふ、百たらずの年波よせかへりて交らひし人の爲には、國つ罪こそかしこけれ、わが犯さぬ天つ罪を老(おい)が痩骨(やせぼね)いたきまでおほせらるゝともとてまん、かしら髪禿なる筆にこのこと打出でこそすれ、歌や文や露ばかりも學ばぬ道は、三吉野のよしともあしがらねのあしかるともあげてはいふべくもあらぬを、古言(ふること)の葉にならひてぞ世(よ)人さだめよ世人(よひと)

さだめよといふ。
享和二年の秋、舟競ふ（ふなきほ）堀江のわたなべの岸なる生島の叟記（しる）す。

附言

一、此集は翁時時のあはれにつき、且事に臨みて口すさばれし、歌や文や、物語、道ゆきぶりを、紙のはし、ものの裏などに書いつけられしを、取つどへて、えらぶとはなしについでられたるなり。この比かたり給はく、思はずよ、七十といふ齢をかぞへつめるは、うつつの夢路のたどりとやいふべき。いでや、今歳(ことし)を老が世の限りに、打亂りし事ども皆しをへ、筆とるわざも、かしこきながら、獲鱗のためしに、今日より後は、きのふの我にはあらで、みどり子のわきまへ知らぬ遊びして、

世をのどかにも終らばやとて、某(これ)の御寺に奥津城所(おきつきどころ)をさだし、かつ柩をさへつくらせて、此ふみ等をも、した書のまゝに納めてんと、うちうちおきて聞ゆ。おのれ、翁にしたしく交り遊ぶなべに、はしはじ讀み見し事のあれば、翁をしれる人々と心合せて、これを櫻木に咲かすべくとてなん、御寺にまゐりて、はかりごとすを、翁聞つけて、うたて、をこわざするかな、世にはひわたらんほどは、必しもあるまじきしわざなりと制せらる。いなや、此ぬしは既に世を見はてゝ、今はおはさずとこそ聞き

つれ、わがもの顔にのたまへる、いとあやしきといふ。翁打もだして、我刀に疵かうむれるよと、長き息つぎつゝ、ゐざり入り給ひぬ。

一、ふみの名の由は、常に机のかたはらに、あさらなる籐簍籠（つゞらこ）をかいおき、人來たれば見せじとし構へらるゝを、例の翁が籐簍籠よと、ねたくひ合へりしもて、今は呼ぶ事となりき。

一、歌や文や、翁の齡にしてはいと少なきは、若くておはせし昔は、よろづうち戯（たは）れがちに、まめ〴〵しき道に志もあらざりき。四十といふ年より、讀み書き習ひしとハふ

物語、別(べち)にまち文と題せられし一巻あるを、こは恥ある事どもありとて許しなし。さは四十を初めの手習の、それすら黄岐の術のいとまを偸みたる遊びなれば、うべも多かるまじく、大方は記(しる)しもとゞめられざりしを、七十をかぎりのわざに、藤簍籠の中、又こし方かゝる事のありきなど、むかし今、前後(まへしりへ)なく書きなめつゝ、猶某(それ)の所の障子に、かゝるを見し、誰屋の壁になど、友垣の告げ聞ゆるをものかきあつめつゝ、六巻(むまき)となりき。翁、此道に門をひらきて、知るを知らぬ

をいざなふにあらねば、よしや悪しやのほめそしりをも厭はれぬもて、その人がらをも世の人見給へかし。

一、木にのぼすまじき巻々猶多かれど、ゆるしなきには、題號をだも書きあらはさず。翁の常(つね)言(こと)に、命はかぎりあり、知るは涯(かぎり)なし、かぎりあるをもて、きりなきにしたがふは危しといふ古言(ふるごと)を遵(まん)じ給へる。うべことわりとは聞きつるなり。

文化紀元三月是の日、昇道杜多、岡崎の竹間裏にしるし侍る。

文化紀元三月是の日、昇道杜多、岡崎の竹間裏にしるし侍る

藻塩冊子目録

第一　雑集

藻屑　屏風歌七十首

第二　同上

同　春夏秋長短合體三百七十余首ヽ

二之餘　同上

同　冬雑長短合躰三百余首ヽ

自序

古人云く。文章窮して後工なる（たくみ）は、窮するの能く工なるに非るなり。窮すれば則ち門庭冷落して、車塵馬足の驕なく、事務簡約にして簿書酬應の繁なく、親友斷絶して徵逐遊宴の忙なく、生計羞澁にして、田を求め、舍を問ふの勞なし。終日門を閉し、兀座書と仇を爲す。其の工ならざるを欲するも得可からざるのみ。獨（ひとり）これならざる也。貧文富に勝り、賤文貴きに勝る。冷曹の文は要津に勝り、失路の文は

登第に勝る。本領省し、而してて心計間を以てするに過ぎず。聖人に到りては、拘囚されて易を演べ、窮厄して經を作る。常變一の如し。天を樂しみ、土に安んず。又一例の論に當らざる也。

<ruby>適<rt>たまたま</rt></ruby>此語有り。聊か以て間情を暢ぶるに足る。

<ruby>頃<rt>このごろ</rt></ruby>一夜夢に垢面短鬢の老翁來りて云く。兄は薄命不遇にして、鄉土を去り、六親を離れ、居無く、產無く、自ら恣に狂蕩を爲し、而して間に乘じ文を作る、然も句々皆寒酸憂愁、世塗の人

の誰か以て目を蔽はざらんや。夫れ前人慷慨の言、各自ら才を愛し、文を舞し、悶を解き、憤を發する者なり。兄や然らず。居常に書を讀み感有り、將に以て不遇に安んぜんとす。抑亦遇不遇は、共に天地間の動物、人稟の性、以て如何とも爲すべからざるのみ。故に來り、慰み問うと云ふ。覺めて後之を思ひ、冷落失路、窮厄するときは則ち樂しむ可からず。命祿するときは則ち何を以て憂へんや。余の薄命は、耄に及びて居無く產無し。

以蔽目哉。先人慷慨之言。各自愛
才舞文解悶發憤者也。兄不然。居
常讀書感。將以安不遇。抑亦遇不
遇。共天地間之動物。人稟之性。不
可以爲也。故來慰問云。覺後思
之。冷落失路者之窮厄不可樂。
命祿。則何以憂耶。余之薄
命及耄而無居無產[illegible]

惟是愚盲淺識の歎、終日門を閉し、兀坐筆に秉じ、富に勝り、貴きに勝るの文ならずと雖も、聊か以て消閑の策を爲すのみ。享和壬戌晩春、鴨塘頭乞丐翁鷄無常居士、盲眼を拭うて之を書く。

浪速
竹陽森世黄書
印印

識之歎。終日閉門。兀坐秉筆。雖不勝富勝貴之文。聊以爲消閑之策。享和壬戌晩春。鴨塘頭乞丐翁無常居士。拭盲眼書之

浪速　竹陽森世黄書
印
印

藤簍冊子巻一

題云藻屑

すみの江の浦の濱藻のよる時
時なる言草どもを、荷田の信
よしの家の屛風に、ゑらぶと
はなしにかいすさめる歌

都べはちまたの柳そのの梅かへり見
多き春になりにけり

大原や春日の神もゆるさなむ子の日
の松は森のした草

わが宿の梅の花さけり宮人のかざし
もとむとつかひ來むかも

折らばやと立ちよる梅に鶯のゆるさ
ぬ聲をおどろかすかな

とのゐ人よるをすがらの梅が香のし
きりに薫る明やちかけむ

思ふ人來むといふまに梅の花けさの
嵐に散りそめにけり

花林朧月

櫻さく春の林は久方の月のかつらも
花曇りして

禪林寺にて

櫻さくこの山かげの夕曇り空さへ花
の色にまがひて

高砂のをのへにたてる櫻花はやも嵐
のさそひやはせむ

夕日かげかゞやく峯の櫻花けふもな
がめて暮るゝ庵かな

大田南畝子のあづまに歸らる
るを送る

風あらき木曾山さくらこの春は君を
過してちらば散らなむ

あほの山尾の上の櫻たづねきて伊勢
までと誰も思ひこゆらむ

故里を荒るゝやとゝへば菫草すみう
くもあらぬ垣ねなりけり

吉野川かはづ妻よぶ夕ぐれに宿かる
我もひとり寐にして

宮のうちは男をみなも白栲の衣ゆゝ
しみ夏たちにけり

郭公夕かけていつも朝妻の片山ぎし
に啼くといふなり

曇り日のいはせの森の時鳥あなかま
なきてうとむとも聞く

橘のみえりの里の時鳥ぬかぬ玉なる
ねをもなくかな

鶯のふる巣の谷は氷とけいつか青葉
のかげとなりにき

かぐ山の尾の上に立ちて見渡せば大

和國ばら早苗とるなり
早苗とる時にはなりぬをとめらが難
波すが笠紐はつけてむ
五月雨は降るともゆかな墨の江のみ
としろ小田の早苗とる見に
山彦のこたへて悲しわが岡のともし
のねらひあやまたぬかも
けふもまたよそにと見しを上蔀おろ
すまもなき夕立の雨
あすか川嵐吹きそふ夕立にたぎち流
るゝ淵瀬はなしに
撫子の花のさかりの久しきに初秋風
も吹くといふなり
藤原の三井の清水はむすばなむ天の
かぐ山かげも見えけり
初秋の朝けの風を身にしめて思ふに
かなふ頃にもあるかな
女郎花さが野の原に堀りつれてたが
宮つ子ぞ夕いそぎする
尾花ならぬ方こそなけれ大原や野中
ふるみち分けまよひては
大空に光みちぬる秋の夜も月のとこ
ろはさやけかりけり
紀の海の南のはての空見れば汐けに
くもる秋の夜の月

河内の國くさかの里にありし
時

生駒山かげまだ峯にわかれぬを浪花
の海は月になりけり
出でて入る山のあなたのをちこちに
身をし分けても月を見てしが
天の原秋の夜わたり照る月の光をさ
まるあかつきの空
芦が散る秋の入江の夕やみに光とぼ
しくとぶ螢かな
この夕べ雁なきわたる山城のふしみ
のわさ田刈りやそめけむ
信濃路を迎へこしより荒駒のあらき
心もなれもこそすれ
御狩野はきのふと過し草むらにいづ
ちのがれてなく鶉かな
袖たれて秋の外山をながむればもみ
ぢにけりな時雨せぬまに
津の國のこや野をゆけば露霜に小草
花さき葉はもみぢせり
峯にたつ鹿の八聲のひまはたゞ紅葉
吹きおろす風の音かな
秋よりもしぐれ〳〵て木枯の冬にう
つろふ雲の立ち舞ひ

松が崎にて

時雨の雨早くも降り來大比叡や小ひ
えにかゝる雲と見しまに

奈良に遊びし時

春日野の時雨の後のけふなれや山は
みながら紅葉しにけり

高雄山

奥山の岩垣紅葉このごろはあした霜
おき夕べ散りかふ
枯れかづらたぐればたゆる百濟野の
萩の古枝の眞柴ゆふとて

はふり子が淸むる跡に木の葉散りて
神のみたらしこほりゐにけり

枯草原晨霜

この朝け茅生も薄も枯れふして霜の
原野は見るべかりけり

田舍住せし時

寒き夜を明かしかねてぞけさ見れば
生駒が嶽に雪の積れる

舟きほふ音もきこえず堀江河かきく
らしふる雪の夕べは

こやの野に宿りてましを夕づけて降
る雪悲しゐなのふし原

雪峯寒月

有明の月の光は埋もれて峯しろ妙の
雪のふりはも

御幸まちて野山の神もつかふらし鳥
立ちもらさぬ朝かりの場（には）

廣澤の水にうきねて鴛鴦（をし）の羽きる音
をきく夜寒しも

田の上の河べの家に宿からむ網代の
波に千鳥しばなく

宿りする宇治の橋本さよ更けて中の
河洲に鳴くは千鳥か

數ふれば年はあまたに積みつるを猶
幼きは心なりけり

鳳闕

思へども思ひやはえむ色に香に左の
櫻右のたちばな

舊都

古への高津の宮にたつ民は萬代まで
とつくりけむかも

里

九重にとなりて住める里人は宮馴れ
てしも物はいふなり

貴公子

よき人のながき心は初春のうら〳〵
照らす日影なりけり

武士

弓矢負ひいさ駒なめてもの〻ふの花
見がてらに鳥狩りする岡

僧

墨染にたちぬふわざのなくもがなう
き世の門はあけずあらまし

市買

畝火山木末にさわぐ朝鳥のさきに群
れたつ輕の市びと

散人

花鳥の色にも音にもほだされて暇あ
る身のいとまなきかな

松

足引の遠山松を見さくれば嵐にたへ
て年もへにけり

浪にふし岩根にたてる松の聲須磨の
浦山のぼりくだりに

風をいたむ渚の松に波かけて下葉の
紅葉沖に出でにけり

古葉おち霜にはまだき凋まねば秋こ
そ松のさかりなりけれ

春歌

立春

久方のはてなき空に朝霞たなびきわたり春立つらしも

春霞たつ野の野邊の神やしろむかふ朝日はけふを初に

去年よりも姿を見せてけさぞ鳴く竹の林の鶯のこゑ

立春霞

風はやき山はけしきをたちかへて横川の杉に霞たなびく

我こそは面がはりすれ春がすみいつも伊駒の山にたちけり

迎春東郊

東の野に出でゝ見ればにしごりの近き里からけさは霞める

田舍住せし時春のあしたに

のどかなる日影はもれて笹竹にこもれる庵も春は來にけり

春盤に五穀を盛りて加へし歌

うけ持の神代ながらの田なつ物年の

初に見るがたのしさ

元日に子の日ありし年、垂水の神岡に、松ひきて遊びし歌 神祠在本國豐島郡

あら玉の、年のあしたに、めづらしき、初子のけふを、空しくも、宿にはあらじと、新草の、もゆる野こえて、岩そゝぐ、垂水の神の、岡の上に、のぼりて見れば、遠山は、霞に匂ふ、朝雲に、田鶴なきわたり、遠しろき、三國の河に、舟よばふ、人しも見えず、瑞垣の、下ゆく水の、音さむみ、衣をさむみ、刀自も我も、五十が上の、百たらぬ、老にしあれば、我がために、生ふる小松の、根をはへて、千本さかゆる、ひきつれて、しるしもあれやと、菅の根の、永き日くらし、夕雲の、雪をさそへば、風さえて、衣をうすみ、肌さむみ、家路を遠し、かへらなむいざ、

反歌

子の日する野邊の小松にふる雪の白髮つくまで年はへなゝむ

元日宴

けふよりぞ事たつはるの位山つぎつぎたまふ千代のさかづき

白馬節會

今ぞひく馬の司のあゆみまであなおもしろの駒といふなり

賭弓

ま手つかふ弦音たかし的形のうらめづらしき春の朝庭

早春歌

水無瀬川さゞれに雪のふりつみて春の水花下かよふらし

春きてもとけぬ汀の岩むらにいつ波かけてこほりゐにけむ

春の雪足搔にくだき信濃なる菅のあら野の駒いさむなり

雪とけし岩田の小野の春日影みちゆきびとも若菜つむらし

仇まもる飛火絶えにし春日野にたゞ新草のもゆるをぞ見る

一夜きて旅寐うれしき故郷のあれし垣根にもゆる若草

柳もえ蘆つのぐみて津の國のながらの堤人のゆきかふ

梅

この里は梅の林にこめられて薫るものともしらずぞありける

江を渡る梅の追風香をとめて花のところに舟はよせなむ

おなじくは梅の木の本とめてまし埋みぞまどふ春のたきもの

梅の花香にかをらずば霞こめ雪にうもれて春もすぎなむ

かへし着る夜の衣に染める香は君がこてふに似たる梅かな

雪わけて昔の友をとひくれば吉野の里に梅も咲きけり

曇り日はことにぞ匂ふ梅の花風ふきとづる深き霞に

鶯のなきからしたる朽めよりたつ枝うれしき梅のはつ花

野鴉の羽ぶきの風に散らされし名殘の枝の梅かをるなり

空さえて香ごめに風のおくりくる雪と梅とをわきて見なまし

梅の花峯をくだりの林には里に出でしと鶯の鳴く

わが岡の林の梅を宮人の酒にうかべてわれにたまはす

山がつのくだく薪にゆるされて立ち枝あまたの岡のべの梅

梅の花風にちる毎鶯の笠とられたるこゝちやはする

鶯

高圓の野邊見にくれば新草にふる草まじり鶯なくも

かげらふのもゆる春日の小松原鶯あそぶ枝うつりして

宿しめてねよげにもあるか鶯の梅の小枕われにかさなむ

春の野の鴫の草ぐきたれ見ねどおどろきがほに鶯のなく

鶯は枕の窓にかげ見えて春日なぐさむ竹のした庵

柳

大寺の門べにたてる古柳土はくまでに枝は垂れにけり

九重もちかくやなりぬ道ひろきゆくてにもゆる春の青やぎ

一葉よりうかべならひし川舟をつなぐ岸根の玉の緒柳

紅梅

此殿の八重のくみ垣枝こえて紅ふかき梅のさかりは

二月や八重さく梅の紅にうたて灰さす野邊のあくた火

春雨

こち風のけぬるき空に雲あひて木の芽はるさめ今ぞふりくる

けふ幾日はれぬ雲間にのどかなる日影をこめて春雨ぞふる

おもしろく雨ふるからに春の夜を短しと思ふ初なりけり

春雨にきならし衣かたしきて柴のおき火を埋みかねつも

庵春雨

稀にとふ人をやどして春雨のよるをすがらに語る庵かな

春雨枕に雫す

春の夜の雨もる山にやどりして枕にちかき雫をぞ聞く

春月

三吉野の花おそげなる年だにも河瀬おぼろに月はかすめる

三島江や玉江の水もにごるなりかすみてうつる春の夜の月

白眞弓はりてかけたる月かげはみつれど幾夜はれぬ霞か

桃花

春の水あさく流るゝ片岸は桃の林の山もとの里

折る花におなじ色なるあら染のあさらの衣まくり手にして

春日遊墨江

蘆原の、瑞穂の國を、中におきて、外ゆく波の、千重波の、ゆたのたゆたに、五百つ舟、千舟をのせて、神代より、天のさくめの、跡とめて、入りくる舟は、玉はやす、武庫山風を、追風に、夕べはなして、あけたてば、伊駒高峯を、吹きおろす、嵐の風に、朝びらき、漕ぎてぞ出る、大伴の、みつの濱べに、ありたゝす、神の御前の、住の江の、いつはあれども、春の海、奈呉の浦べに、家わすれ、拾へる玉を、くゞつもつ、手たゆきまでに、をとめらが、裳の裾ぬらし、みつ汐の、夕さりくれば、あはと見し、淡路の島も、霞こめ、ほのにも見えず、あし鶴の、かへる蘆べは、汐さゐに、騒ぐ入江を、漕ぎたみて、ゆくちふ舟は、蜑ならぬ、難波をとめの、家路ゆく舟、

反歌

奈呉の海のなごりの玉藻我刈らむ汐みちくとも沖にをれ波

櫻花

いつはらぬ春の日數をかぞへきて山の櫻は咲きそめにけり

卷向の檜原杉むら霞みけりほのに櫻の色にこぼれて

ひなぐもる櫻がもとをたちくればみどりの空にかをる春かぜ

思ふことあらぬ枕に花の香のあさらにかをる春のあけぼの

しばしとてたゝずむ花に逢坂の關は

夕べの戸ざしせしかな
櫻花さけるを見ればかほよびと衣に
とほる光なりけり
櫻戸をおし明けがたの空見ればけさ
も尾上の花曇りして

山路花

おくれじとおひ來し人にあはぬかな
心そらなる花の山ぶみ
舟うけて誰ものゝ音を遊ぶらむあら
しの山の花の木がくれ
夜にかくれ逢ひにし人に花山の道に
ゆきあふおもなしや我

海邊花

須磨の浦の磯山櫻さきにけり波こゝ
もとに立ちくとや見む
風待ちてとまりする舟磯山に咲きち
る花の日數經しかな
汐なれし生田の森の櫻ばな春の千鳥
もなきてかよへる

雨中花

うちむれてきのふは見しを櫻花雨し
づかなるかげとなりにき
櫻花うれしくもあるかこの夕べ嵐に
かへて小雨そぼふる

客來問二吉野之花時一、答、登山兩回、
山水最奇絕、其多レ花之處、坂嶝開
豁、人跡絡繹、可レ謂二淸雅乏一矣、
思夫上古飛鳥藤原之世々、春秋屢
行幸、美二其山河之美一而臨レ水營レ
宮、雖レ見二田獵捕魚之御遊一更無二
望レ雲踏レ雪之轍一、故好古士到二于那
處一則懷レ古以永言也、又問、翁嘗
詠レ花、專用二那處一者如何、答、凡
題詠春花秋月、采二摘其地一、以調二
風姿一、猶二之生旦上一レ場、雖レ使二レ人
歡娛悲淚一、比二之良人世態動譟一、則
取レ感固淺矣、春花粉飾、姝子遇レ
雨、忽失二其美一焉、那處山水最奇
絕、但遊以二花時一者俗士耳、今敎
道以二數言一、其歌

空にみつ、大和島根の、國原ゆ、雲
井に見ゆる、三吉野に、うちこえく
れば、遠白き、河音さやけし、舟よば
ふ、六田の岸の、柳原、風になびけ
る、河のべを、上りてくれば、花ぐは
し、雲にうづめる、麓邊の、秋津の
小野の、岩むらの、中きりとほし、
ゆく河は、瀨々にむせびて、たぎちあ
ふ、水のまにく、棹とりて、下す
筏の、岩にふり、みだるをあやな、
遠近の、岸にたゞずみ、我が見れば、
水に影ある、山吹の、かさねの衣、と
き洗ひ、ほすいとまなみ、山風に、
櫻吹きまき、帶にせる、象の小川の、
水沫なし、河瀨におちて、瀧浪に、
みだるゝ見れば、風のみに、散りやは
まがふ、いにしへの、かたりにつた
ふ、とつ宮は、こゝとし聞けば、三舟
山、常ゐる雲を、ふりさけて、見つ
つしぬべる、夏見河、よどめる末は、

ゆふ花の、ぬさの手向か、さなくだ
り、瀬おりつ姫の、河社、とゞろと
どろに、ひゞきあふ、水のたぎちも、
廣き瀬に、流れてゆたに、淺花田、
深みどりなし、木綿疊、千むらの絹
は、天にます、たくはた姫の、神わ
ざか、妻よびかねて、夕河に、蛙ど
よめり、よき人の、よしと見まし丶、
みゑし野の、ゑし野の山は、峰高み、
川遠白し、昔見し、春のさかりを、
おもほゆるかも、

反歌八首

芳野川川隈ごとに水泡なしよどめる
花をむかし見しかな

櫻花うきて流る丶あと見れば象の小
川はまことさやけし

白雲はあしたにはれて三舟山夕ゐる
峰の風の靜けさ

夏見川よど瀬なからしさし下す筏が
聲のはやもかすめる

河かみの國栖の里人春こずばとはれ
ぬ宿とおもひたらまし

大瀧をくだけておつる白波の音はあ
らしのたえまなきかな

夕蛙秋をさかりの聲ならばたのめて
又もわれかへりこむ

宿かさぬよし里ならば秋つの丶岩が
ね枕夜を寒くとも

題吉野宮

名ぐはし、吉野の國は、山つみの、守
りてませれば、山なみの、よろしき國
ぞ、よき人の、よしと見まし丶、瀧つ
瀬は、清き河内ぞ、しかれこそ、大
宮人は、春花の、咲きのを丶りに、
鶯の、聲をとめつ丶、秋霧の、晴れぬ
まよひに、蛙なく、瀬々を乏しみ、
いきかひて、見れどもあかず、あそ
びせし、秋つの小野の、とこ宮は、
とこにはあらで、夏見川、流る丶水
の、たちやかへらぬ、

反歌

御舟山つねゐる雲のつねならば瀧の
みやこは今もあらぬか

禁庭花

山里にあらぬ色香の櫻花かよりかく
よりそふ光かな

御渠水花ぞながる丶大宮の内にも春
はとまらざりけり

花頂山のふもとに住みそめし
春

すまで我見やはさだめむ粟田山あは
だつくもは櫻なりけり

花下遊

石川のこまのたはれ男花に遊びぬし
ある人の帶なとらしそ

嵐山花 三章

たには路をくだる筏の岩にふり幾瀬
くだけて花は見るらむ

大井川くだす筏のあとたえて夕べの
波に花散りうかぶ

大井川きしの櫻のかげくれて月にな
りぬる波のひかりは

老木花

年ふかき櫻が枝は苔むして松を友なるよはひをや經む

山寺花

葛城やたかまの山の峰の寺寒き日かげに花も咲きけり

あはと見て歸るぞはかなをとめらが門ゆるされぬ寺の櫻は

谷わたる道はあらねどいと古りし寺こそ見ゆれ花に籠りて

古墳花

しめはへし苗代小田にかげみえて年ふる塚の花も咲きけり

瓶花

瓶(かめ)にさす花は昨日の山苞(づと)をとひきて人のけふも見はやす

山里花

山ざとは夕暮さむし櫻花ちりはそめねど匂ひしめりて

愛花篇

うちなびく、春さりくれば、百鳥(もゝとり)の、さまよふ野邊は、新草の、もゆる垣ねを、誰しめて、すむ人たのし、足引の、山のいほりに、むらぎもの、心すませば、語らはむ、人とぼしきを、庭もせに、櫻花さけり、ふゝむより、散りはつるまで、風をいとひ、雨をぞうらむ、春ごとに、我をたのめて、明けたてば、閨戸おそしと、夕闇は、ほのに見えつゝ、言とひを、我にはすなり、花ぐはし、櫻の愛(め)でと、古への、遠つ飛鳥の、すめらぎの、言あげませし、にぎたへの、衣とほりて、にほはせる、神のみことの、ゑまひにも、くらべ劣らぬ、花妻の、あれをたのめる、里にいでば、人戀ひよらめ、家にあらば、人訪ひくべみ、山口に、守部やすゑむと、岩波の、千千にくだけて、思ひをぞする、よしゑやし、戀ひはよるとも、袖はへて、とひも來べきを、朝されば、霞がくりて、夕づけば、霧の籬(まがき)の、妻ごめに、面(おも)わも見せじ、かにかくに、遠つ飛鳥の、すめらぎの、言擧げませし、花ぐはし、櫻のめでの、姫神の、色香おもほゆ、庭もせの、我花妻よ、ちりこすなゆめ、

反歌

櫻花あかぬなげきをわがすれど一夜の風に散るがさぶしも

長かれとたのみこそせね櫻花ひと夜の風に散らむものかは

落花

散るまでと頼めし庭の花にうき曉がたの村雨(むらさめ)の音

櫻ちる木のもと見れば久方の星の林に我は來にけり

とめこじな花に初瀬の山おろし春もはげしきならひなりせば

山風の吹くとはなしに玉だれの外面(とのも)

に花のけさは散り來る
龍田彦風をまもりの神山におのが時
とや散る櫻花
朝鳥のこゆる羽風(はかぜ)に色ながら尾の上
の櫻散りそめにけり
吉野山岩のかげみち春行けばたぎつ
かふちに花ちりうかぶ
行きくれてひとりのみ見る春の夜の
月に花ちる志賀の山越(やまごえ)
時鳥なくべくなりぬ花はみな散らせ
し雨のなごりある空
櫻花ちるを心のはてにして殘る日か
ずの春は春かは
根にかへる花としいへば賴まるゝま
たくる春も梢にぞ見む

花遲し

花おそき櫻がもとをとめくれば青根
が峯の外陰(とかげ)なりけり
けふと暮るゝ日數にもれてみ山には
遲げにもあらぬ花咲きにけり
花櫻かさねてにほふ袖の色に春をと
どむる雲の上びと

菫草

あすもこむ菫はなさく春の野の芝生
がくれに雉子(きぎす)なくなり

雲雀

春の野は雲雀の床と思ひしを空にや
どりの夕暗(ゆふやみ)のこゑ

賀茂の翁のよめりし

霞たつ春野の雲雀なにしかも思ひあ
がりて音(ね)をや鳴くらむ

是につきて

冬の野の枯生に變る草の床にいつ立
つ空と雲雀なくらむ

翁も思ありげなり我もしかり
とや人聞くらんかし

かはづ

夕されば蛙なくなり飛鳥川瀨々ふむ
石のころび聲して

躑躅花

三吉野は青葉にかはる岩かげに山下
照らしつゝじ花さく

藤花

神松にかゝれる藤もてはふれむいで
やひくてふ大幣(おほぬさ)にして
春と夏こなたかなたに咲く藤の花や
いづれに靡くなるらむ

大原野の春日の社に詣ではべ
りし時、ふぢの花の松にいと
おもしろくかゝりたるを、わ
が從者(ずさ)の童の、何の心もなく
て折りつみければ、里の子ら
がそれは神の木なり、たゝり
やあらむといふに、驚きて泣
き悲しむを、とりて、ふと前
にさゝげ、詠みて奉れる

折ると見ば罪はかしこし大直日見な
ほしたまへ幣の手向に

牡丹を人々とよめる

色にこそ物思はすれおほけなく國か

たむけに咲ける花かは
　楊太妃一捻紅を
いさゝめの色にそみてもその君の面
影見する花の名だてに
　浅紅　　　　　　　　信　美
花にそむ人の心のふかみ草うす紅の
色に匂へど
　白　　　　　　　　　布　濟
めでたくも咲きみてるかな白重粧け
だかき花の君にて
　白帯紅　　　　　　　默　軒
曙の薄花ざくら忘れめや牡丹の色に
匂はざりせば
　深紅　　　　　　　　敬　儀
紅の色ゆるされしふかみ草あでなる
種にいかで生ひけめ
　朱砂紅　　　　　　　益
ませの内に朱なる玉やしきたると見
えて花さくふかみ草かな
　紫　　　　　　　　　間　齋

ときめける濃紫の一もとにうべも貴
盛しき花とこそみれ

夏歌

　更衣
わた殿をいきかふ裾も輕げなり夏た
つけふのきぬの追風
人妻のこれや卯月の夏衣馴るれば更
ふるならひある世に
　新樹
奥深くわけし歸さの山ぐちは青葉し
げりて夏立ちにけり
いと早も蟬鳴く陰と聞きつるは青葉
にこもる瀧の水音
　加茂祭
けふてへば高き賤しき葵草かけて神
世をしのびつるかも
加茂山の神のおまへの駿河舞袖に桂
の風もかをれる
　杜若
身におはぬ司の色のかきつばた衣に
すりつけ思ひでに着む
　時鳥
時鳥待つをならひと夕かけて山のい
ほりに長居せしかな
まちまたぬ宿をわきてや忍び音に小
夜時鳥なきて渡れる
橘の島の御門にとのゐして山時鳥き
かぬ夜もなし
世をすてゝ思ふことなき曉に山時鳥
なきて過ぐなり
こゝた鳴く里には住めど時鳥初音は
いつも嬉しとぞきく
わが宿をいつ過しけむ時鳥あり明の
月にをちかへりなく
人やどすこゝは庵ぞ時鳥このあかつ
きの聲なをしみそ
わが袖にかけてをうれし時鳥卯の花
山のあかつきの露
時鳥またぬ隣もきゝやせし人のけは

ひのしのゝめの空
夏の夜の月におくれていでぬれど山
時鳥をちかへる聲
旅にしてさよ時鳥きく我をしのびて
妹がいねがてぬかも
高野山槇の木立の時鳥この夕暮もあ
はれとぞ思ふ
時鳥をしまぬ聲をいまぞ鳴くおのが
さつきの五月雨の空
大荒木の森にやどりてたか〳〵とい
むことなげになく時鳥
植ゑはてし山田の長が門に來てしこ
時鳥なにを鳴くらむ
花の枝のあを葉立ちぐきこのごろは
時鳥なく志賀の山ごえ
五月雨は夜中に晴れて月に鳴くあは
れその鳥あはれその鳥
高砂の尾の上おちくる時鳥きくやひ
びきの灘わたる舟
信濃路は野をあまたなり時鳥菅の荒
野を名のりてぞなく

夏草

伊吹山させもが草のしげければうち
散る露も雨とふりつゝ
山里は垣ほのひまの荒ければ内外も
あらず茂る夏くさ
胸分けてゆくや牡鹿の跡もなく茂り
にけりな夏草の原

あやめ

故里の長柄の沼のあやめ草うべしも
長き根をばひくてふ
あやめふく例たえねば都邊に花さき
うづむ沼もありけり

競馬

駒きそふ神のみ庭にたつ人も我かた
岡の方をこそひけ

棟花

さればとてかげ頼まれぬ隣かな棟花
さく窓のくらきに

蚊遣火

風もなき蚊やりの煙なびきあひて暮
なほあつき里の中みち
玉だれの隙にもれて香に薫るうすき
煙や蚊遣なるらむ

五月雨

難波人蘆荷重げにこぐ舟のつく岸も
なき五月雨の頃
五月雨に須磨の苫屋の蘆簾たれこめ
て今日も暮れぬとぞ見る
疎からぬ隣ながらも蘆垣のまどほに
なりぬ五月雨のころ

早苗

五月雨を思ひのまゝにせき入れて小
田のますらを早苗とるなり
五月雨はつぎて降らねば近江の海磯
曲の早苗植ゑぞ足らしつ

夏月

松風の音羽の山をこえくれば夏なら
ぬ夜の月澄みわたる
夏河に光を見せて飛ぶ魚の音するか

たに月はすみけり

夏夜

夏はたゞ夜なき里と思ひけり立ちの
いそぎの草の枕に

涼み

入りつどふ千船のひまを漕ぎ出でて
夕涼みする浪花人かも

水音はたえし名こその瀧殿に夕べ涼
しき風も吹きけり

都をば夜ごめに出でて朝日山あさ風
涼し宇治の川面

螢

蘆しげみ葉うらにすがる夏蟲のかく
れてもほの見ゆる光は

わた殿の下ふく風の冷かにてせきい
れし水に螢とびかふ

この夕べ引きや忘れし螢火のひかり
に見ゆる門のいたばし

蟬

明けぬれば樗花さく葉がくれにやめ
ば次がるゝ蜩の聲

なく蟬のやどりの松の木本にもぬけ
の衣の風に吹かるゝ

照射

夏山のともしの篝うちしめり雨うち
そゝぐ曙の空

宵のまの月はかくるゝあま催にとも
し雲やくしがらきの峰

扇

夏ならぬ繪かきすさべるかはほりの
それも涼しき花の種々

鵜飼

御舟近く波をこがせる篝火に鵜のと
る魚のかずも見えけり

西山夏雲

夕ごとに峯なす雲はくづをるゝ花に
あたごのあらき山かぜ

清水むすぶ

旅人のいくたびひでゝむすぶらむ泉
の河の夏のわたり瀬

ゆふだち雨

かきにごし岩こす波もやがてすむ淸
瀧川の夕立の雨

夕立の軒の宿りを始にてうれしき老
が友もとめけり

湊いりの五手の船ははやきかも漕ぎ
退けてくる沖の夕だち

風早み鞭さすかたに雲おちて我こま
嘶ふ野路のゆふだち

秋にまだ色はならはぬ葛の葉の裏ふ
きかへす夕立の風

夕顏

たそがれにほの見し花はしら〳〵と
有明の月の影に殘れる

撫子

朝寐髪かきなでしこの花の上の露の
しばしも目かれずぞ見む

藤原の宇萬伎ぬしの手向を、
洛陽三條の三寶寺の御墓に、
烟にあげて奉れる歌

鳥がなく、東の國の、武藏の海、大江の水戸に、高殿を、たか知りまして、天の下、まをしあづかり、すめろぎの、みことのまゝに、民草を、靡けたまへば、物部の、八十氏人は、夜の守、晝のまもりと、かしこみて、仕へまつれり、國士(くにつち)を、たひらの宮の、大城(おほき)には、みこともち人、守りすゑて、外のべ守らひ、すめろぎの、日々のみことを、はゆまして、まをしたまへり、中のへは、千々の軍(いくさ)を、こめおきて、弓とりしばり、千早人、たはわざやすと、夜の守、ひるのまもりに、召しくはふ、天のかな機、足玉も、手玉もゆらに、神の織る、しづ屋のうしは、卯の花の、うきこともなく、出でゝこし、道の空より、煩(わづら)ひの、神やつきけむ、手束弓、杖につきつゝ、中の重に、さもらひしさへ、時鳥、きなく五月(さつき)の、五月雨の、はるゝ日もなく、末つひに、うちこやしぬれ、さね床の、夜をすがらに、故郷の、家をぞしのぶ、晝はもよ、息づきくらし、水無月の、てる日を闇に、ゆく水の、過ぎて空しき、あら玉の、來經(きへ)ゆく年を、手を折りて、かき數ふれば、十あまり、三年(とせ)になりぬ、すべもなく、音のみし泣かゆ、おきつきどころ、

反歌

古へをけふにむかへて偲ぶともいや年さかるあすの日よりは

夏秡

唐崎のみそぎははてゝたが里に秡すずしく遣ぎ歸る舟

大ぬさの柵(しがらみ)かけてとゞむとも流るゝ夏の夕ばらひかな

秋歌

初秋

紀の國の室(むろ)の早稻田(わさだ)の穗むきより今朝吹きわたる西の秋風

晴砌風梧脱

軒ふかき玉の砌のこけの上に夜のまの秋の桐のひと葉は

七夕

天の川ふねさす棹のさはればや月の桂の花ちりみだる

天の川かは波たかし夜ごもりにかへすはすべな明けば面なし

殘暑

朝顏の凋まぬほどに降りはれて雨よりのちの秋の暑さは

暮れなばと頼めし秋の空見れば風ふきとづる西の八重雲

秋蛙

秋されば下の社のみたらしに人まを待ちて蛙なくなり

稻妻

秋たちて幾日もあらぬに風をいたむ

窓よりもるゝ宵の稲妻
稲妻の光ならずば暮れはてゝ野中の
松をそこと見ましや

秋風

吉野山紀の路に通ふみちゆけば笹わ
くる野の秋の夕風
村雨のはるゝ淺茅の露原にぬれてや
秋の風は吹くらむ

初秋十七夜、三井寺の高きに
登りて月を見る

照る月の影は波もて砕けども光は海
をわたるなりけり

あした湖上の樓に遊ぶ

白雲に心をのせてゆくらくら秋のう
な原思ひわたらむ

秋野

君が家の壁草刈りに野に出れば花ざ
かりなる秋にもあるかな

萩花

朝なさな露だにおもき萩が枝の末伏
すまでに雨のふれゝば
朝露はまだき下葉に消えのこる野寺
の庭の秋萩の花
萩が枝の末はさゞれに流れあひて波
も花なる野路の玉川

女郎花を植ゑて孫思邈を思ふ

あまた植ゑて人や妬める女郎花老を
養ふ色香とを見よ
花ごとに露を結べる女郎花心こまか
に見るべかりけり

槿花

一日てふそれも榮えを朝露のひるま
をまたぬ野邊の顔花

藤袴

花々に色はまけぬる藤袴野はみなが
らの香ににほひけり
香にめでぬ人こそなけれ藤袴たれに
許して花の紐とく

鴨頭草

月草にすらまく衣を目移しにあやな
千種の色にまよへる

紫苑

我ならぬあだ名もよしやしこ草のし
こちし人もなき世なりせば

苅萱

風わたる野路の苅萱下折れて穂に出
し秋のかひやなからむ

蟲

秋の日の峯に入るさをまちかねて草
むらごとにすだく蟲の音
蟲のねの多かる方に露わけて野路の
棚橋いくつこえけむ
矢田の野の淺茅にすだく松蟲のなく
音をとめて我たちまどふ
こにこむる友をしのびて松蟲の野に
さそふとや諸聲になく
庭草になきにしものを蛬うたて夜寒
の牀にちかよる

蟲聲非一といふことを

褄させわれ機おらむ秋の野にいとま

をなみの蟲の聲々

秋夕

思ふ事ありとはなしに悲しきは秋のならひの夕ぐれの空

傷岡雄之亡妻歌

夏すぎて、秋は來ぬらし、吹く風の、目にし見えねば、朝かげを、涼しと人の、ゆふぐれは、さびしかりけり、荻の葉の、音はさやぎて、蟋蟀の、なく聲きけば、古への、人のあはれと、いひつぎし、時にはなりぬ、その秋の、あはれちふことを、我のみの、身にしおふかは、妹なねは、秋たつ空の、すゞろにも、よみちふ國を、何しかも、ふるさとのごと、立ちていにし、空しき牀に、とゞまりて、いかにせよとか、男じもの、腋ばさみたる、はらからの、みどり兒とともに、泣く兒なす、慕ひなげかひ、こひまろび、足摺りしつゝ、まどふらむ、人こそあはれ、明日よりは、いかにせましや、年月を、長くと思ひて、語らひし、ことの悔しき、妹なねは、よみちふ國に、先立ちし、うなゐはなりに、相見つゝ、手づさはりて、遊ぶらむ、おもかげをだに、見まくほり、枕によれど、いねがてに、夢もむすばず、荻の葉に、秋風さやぎ、こほろぎの、なく宵々の、さね床ぞあはれ、

霧

みかの原夕こえくれば泉川いづこわたりも見えぬ秋霧

朝ぎりの海の玉藻と見しはこれふもとにしげき杉のむら立

おぼつかな濱名のわたり霧こめて引馬の驛朝だちかぬる

河内の國に人をとむらひし時、道の空にてよめる

伊駒根の雲は嵐に吹きおちてふもとの里をこむるあま霧

河内のくさかといふ里に宿りてある程

我すめど門たゝくべき人もなしこの山寺の秋の夜の月

月歌

山のはにさし出る月の影みれば西をはじめの秋ならなくに

我がすれる花田の衣のつき草の色なる空に月澄みわたる

千里までてらせる影とゆふ波の汐の湛へに月さしのぼる

秋の月仰ぎてのみもありがてに筆の林をわけぞわづらふ

世のうさを昔になして月見れば秋を盛りとながむばかりぞ

かぞへきく秋てふ秋の聲たえて月かげ高く夜は更けにつゝ

ひとへ山へだつ都は秋の夜の月をにぎはひ見るものにして

山月

世にいづる道は絶えにし山住の月のあはれは秋ばかりかは

峯月

ねざむれば比良の高ねに月おちて殘る夜暗し志賀の海面(うなづら)

田家月

いはけなき里の童が夕まどひ月にゆびさし門遊びして

故郷月

程もなくうつりしゆけば長岡のふるさと寒く月は照るらし

秋夜遊墨江歌

にぎはやひ、神のみことの、翅なし、漕ぎこし舟ゆ、空にみつ、大和島根の、青柳の、かつらぎ山も、生駒峯(ね)も、常ゐる雲は、秋風に、いぶき拂ひて、月讀の、出でましの空は、夕霧の、立ちものぼらず、住の江の、敷津にたてば、あからひく、入日の影に、沖見れば、網引き綱ひく、磯曲(いそわ)には、小舟釣りする、秋の葉の、風のみだれに、岸見れば、あらゝ松原、よる波に、根ごとさらせり、白鷺の、塒をほのに、夕闇の、暮るゝと見しを、月讀の、神の尊の、いでましの、みさきをはらふ、秋風も、身にししまねば、汐みつる、清き濱邊に、秋の夜の、ふくるをしらに、あそびす我は、

反歌

伊駒峯にいざよふ月を波の上の中空までも見つゝ遊ばむ

てる月にあられ松原ひま見れば桂の花のつちに散りしく

月前述懐

秋風に月澄む夜半の白雲をはらへどかゝるわが心かな

宵々に月はいでぬかなぐさまぬ心の隈を照らすばかりに

田舍住せし時

たゞならぬ雲のけしきに門たてゝすはさればこそ野分ふく風

詣八幡山放生會歌

秋風は、日にけに吹きぬ、白露は、朝に夕べに、淺茅原、玉と見るまで、おきそふと、人の語れば、空蟬の、世わたるわざの、いとまあらば、いきて見ましと、思ふ空、安からなくも、たまさかに、立ちいでけらし、堀江川、舟きほひつゝ、夕川の、みをさかのぼり、漕ぎゆけば、秋はもなかの、十日あまり、四日の夜よしと、月影は、高くさし出ぬ、伊駒山、常ゐる雲は、秋風に晴れみ曇りみ、岸つたふ、水陰草に、なく蟲の、聲をしきけば、かにかくに、秋ぞ悲しき、衣手に、露はそぼちて、波の路、遠く來にけり、ねば玉の、夜さへ更けぬれ、月讀の、光のさやに、みさくれば、我がこゝろざす、八幡山、神

さび立てり、この夜らや、神いさめすと、宮つこら、まゐりつどひて、白妙の、袖ふりはへつゝ、須賣神の、出でましの道は、岩が根の、こりしく道ぞ、級たてる、さかしきみ坂、たひらけく、歩み行くめり、神遊びの、三くさの笛は、春鳥の、百千の聲と、うちならす、鼓の音は、天雲の、よそにとゞろく、神のおとの、をちに聞えて、諸人の、心ぞすめる、かけまくも、畏けれども、いはまくは、尊かりけり、不知火の、筑紫の蚊田に、あれまし、そが跡とめて、里の名を、宇瀰とたゝへて、永き世に、生れつぎけらく、大神の、大御心は、遠じろき、河内の國の、輕島の、あきらの宮に、天の下、治め給へば、たく衾、新羅の國も、言さやぐ、百濟も高麗も、草木なす、風に靡きて、年のはに、八十船うけて、貢もの、奉るなべに、もろこしの、賢き道の、ふみどもを、よみて聞ゆと、唐人も、つかへまつれば、萬世の、今のをつつに、傳へ來て、大御代ごとの、すめみまの、神ながらしも、みはかりに、撰びとらして、國民を、治め給へば、そが法に、天のます人、益々も、さかゆく事は、この神の、大御心ぞ、いはまくも、畏かりけり、かけまくも、尊きろかも、東雲の、ほがらくと、天の原、朝霧こもり、出づる日は、このいつきます、すめ神の、遠つみ親と、あがめます、大日靈女の、神ながら、天照します、御影ぞと、あく世もあらず、拜みつるかも、

雁

てる月にかりの稀人なきわたる我がまつ友はこよひ來なくに

とぶ雁のゆくへは霧に埋もれて鳥羽田の千町夕ぐれにけり

たが衣かりがね寒く鳴くなべに月見し庵も戸ざしせるかな

擣衣

里はまだねぬ聲すなりから衣うつの山邊をこえて來つれば

何くれと語りつゞけて蘆垣の隣へだてず衣うつなり

里はあれて尾花露ちる夕暮に秋をうづらのころもうつ音

人やりのわがふる衣うつ音をふもとの家にきく夜寒しも

寐よとつく鐘より後に音ふけて人待ちがてら衣うつなり

小鷹狩

武藏野の尾花高萱ふみしをり小鷹手にするゝ行く人やたれ

鹿

月かゝる梢の紅葉散りはてゝ牡鹿のたちどあらはなりけり

霜の上におきふししげきさを鹿のなく聲ごとに我もねざめて

時雨して宿りやはせしさ夜中におどろく軒の鹿の一こゑ

しかりとてあはせし夢か野にひとり妬きをおのと恨むばかりぞ

聲のみやひとり月見る窓の前に尾の上の鹿の影も落ちくる

奈良に遊びし時

もみぢ葉をとめつゝ來れば春日野の男鹿の床に我も宿れり

紅葉

朝戸あけて宿りの野邊を見渡せば近き林にもみぢ色づく

大原や里のなかみち秋行けば青葉まじりに紅葉散りしく

とめこしをかひなくぞ見る山寺の早き戸ざしの庭のもみぢ葉

九重の秋は西より東より紅葉かざしてかへる宮びと

庭の面にみだれて遊ぶ沓おとのありやと見しもちる紅葉かな

荒乳山關路の北のもみぢ葉に雪か時雨か雲のたちまふ

大あらきの森の下草時雨にも霜にもあはでもみづるやなぞ

山ざとの稻ほす賤が門むしろしぐれぬけふは紅葉ちりしく

遊箕面山歌

神代より、いひつぎけらく、天地の、始の時ゆ、もちわきて、大山つみの、なしませし、何處はあれど、雨にきる・みのおの山の、谷間ゆく、淸き河内は、眞榊の、枝にとりかけし、鏡なす、そこひもすめり、この山に、鎭もる神の、にぎ魂と、見てやすぎなむ、槇たてる、峯の岩がね、きりとほし、おちくる瀧は、天の原、ほろにふみあたす、いかづちの、音にまがへれ、この山を、うしはく神の、あらみ魂かも、

瀧の肩に紅葉一木たてり

うつせども影はとゞめず落ちたぎつ岩垣紅葉色深きさへ

秋のはて

秋もはや二十日三十日と手を折りて山の紅葉を思ふころかな

久かたの天の河原もかげきえて秋の夜くらく雁なきわたる

豊年の新嘗まつる神の前に幣を散らして秋はいぬめり

秋はつる日、信美の家に、庚申をまつらるゝにいきあひて、歌よめといふに、よめる

枕にはよらぬならひの今宵しも秋の別れをかねて惜しまむ

かへし　信美

たが宿も枕によらぬ今宵とてゆく秋さへもとまらざりけり

きゝろ如氏
し

貳

冬歌

鴫

世の事はきこえぬ冬の山里にけふも時雨のおとづれぞする

音たつる時雨もしらで稲扱の夜聲にぎはふ冬の山里

苫あげて夜のほど見れば友船のそなたしぐれて波騒ぐなり

霜にのみ心づくしのきせわたにうたてしぐるゝ秋菊の花

片岡の洩りて日かげはさしながら木の葉をさそふ夕時雨かな

蘆庵時雨のやどりしてそのあした傘もたせこされしにいひやる

村時雨ふるに隣れる笠の山かさでぞ君をとゞめましもの

落葉

森ふかき神の社の古簾すげきにとまる風のおち葉は

散りはてゝその木ともなき冬枯に一葉名殘の色は見えけり

有馬山落葉に道はうづもれぬ君がみ幸の跡たえしより

遊佐保山歌

神無月、時雨の常に、佐保の内は、露霜さむみ、こゝに來て、往しへ思へば、草木すら、しなえうらびぬ、靫おへる、伴の男廣き、大伴の、ますら武雄が、家居せし、山路にけふは、袖ぬらすかも、

霜

おきわたす霜の絶間となりにけり今朝はおちたる野路の棚橋

氷

夜のほどに降りしや雨の庭たづみ落葉をとぢてけさは氷れる

信濃路のかしこきみ坂こえ來れば氷をわたる海もありけり

霰

宮木ひく杣が假寢の板ぶきに霰おと聞くさ夜のねざめは

霙

みぞれふり夜のふけゆけば有馬山いで湯の室に人の音もせぬ

おぐら江の堤を冬ゆく 二首

風わたる枯葉に朝の霜消えて蘆の穗白し淀の大澤

何にこの莖葉とゞめし花はちす浪もこぞめの色に見えしを

冬月

さゞなみの志賀の海面月冴えて氷に浪のたつかとも見ゆ

雪ふると見し夜の雲は名殘なくはれてふけゆく月のさやけさ

池の面にとづるとぞ見し月影は空にさやけくこほる曉

更科や姨捨山の風さえて田ごとにこほる冬の夜の月

神無月の比、宇治の橋本に宿りしあした

風もなき朝たつ霧のそれをさへ流れて早き宇治の川波

冬枯

冬枯れて荒れのみまさる菅原や伏見も西の都なりしを

散りはてゝ寒げに靡く枝ごとに芽はりて見ゆる門柳かなは

かつまたの池の蓮の枯れ莖に風吹きわたるあした寒しも

千鳥なく須磨山かげの濱つゞら浦づたひしも冬枯れにけり

雪

故郷はいかにふりつむけふならん奈良の飛鳥の寺の初雪

一年の昔にたえし山里をけふ訪はずばと雪ふみまよふ

大原のをかのお神が降らす雪大和國ばら道もなきかな

杉が上を雲は走りて吉野なる樫の尾の上に斑雪ふる

大空を打傾けてふる雪に天の河原はあせにけむかも

誰が戀の終の夜がれとなりぬらむ消ぬが上ふる雪の道芝

丹波路に打越えくれば野も山も照る日ながらにはだれ雪ふる

鯨よる浦山松につもるゆき波に消たれてまた降り積る

よびかはす聲をたよりに夕越ゆる山路を知らず雪のふれゝば

雪淺し

いつしかと待たれし雪を朝日さす松の雫に見るがわびしさ

雪深し

聞きしより思ひしよりも冬深き雪の下なる越の旅寐は

故郷の難波江いかに寒からむ鴨の河原に雪のふれゝば

根芹生ふ田井の水澁の色ながらこほれる上に雪のつもれる

但馬なる雪のしら濱風さえてなほ降りつもる雪のしら濱

冬深み雪ふりつげばみ越路の松の梢は道の芝草

積む雪のとゞろに崩る山かげは朝戸をおそき里の門々

感懐

九重に八重降りつめる白雪の下にうもれて老いや朽ちなむ

沫雪のあはれは老が思ふこと積むとはすれど下くづれして

狩

大君のみ鷹あはすと狩る杖の音高しもよ野路のふし原

水鳥

巨椋の入江の小舟漕げば立ちかへれば浮かぶ鴛鴦の聲

風ならば閨戸に聞くを靜なる空に嵐

のあぢのむら鳥
池の島松の小枝にゐる鶴の妻よびかねて波の上におつ

　翠池浮鴨
おのが名の青波たてゝ冬の池にこゝだ浮べる鴨といふ舟

　千鳥浦つたふ
須磨の山の松ふく風や送るらむ生田の浦に千鳥なくなり
大井川冬はあらしの山松の影見る淵に千鳥なくなり

　網代
夜舟こぐ宇治の川波騒ぐらし網代にかゝる氷魚のみだれは
うちかけし波さへ氷る網代木を守りあかすらむ宇治の里人

　冬の梅
こぬ春にあらぬものから待つほどを梅は心にまかせてぞ咲く
難波江や西吹く冬の浦風にそむけて開く梅のはつ花
枯芦にこもれる沼の岸見れば花寒げなる梅のひともと
ひらくやと冬の北窓あけ見ればふゝめる梅に雪のかゝれる

　佛名
聲清くとなふるみ名を頼まれて身は罪なしと思ひこそなれ
御名唱ふ宵の法師があけ衣明けて出づとも誰かとがめむ

　追儺
年毎にやらへど鬼のまうでくる都は人の住むべかりける

　歳暮
谷水の音羽の川もこほりゐてよどめど年はとまらざりけり
老いらくは安きことなり年月の暮ると明くとの跡につきては

　田舍にありし時
世の中にさはらで年も暮れにけり八重葎さへ枯れし垣根は

　年の暮に、荷田信郷とひ來て、めづらしく都の春を迎へらることよ、客中の歳暮よみて聞かせ給へ、翌まうでむとていぬ、試みらるゝにやと僻ごころするに、日くれて、信美の來られしに、筆とりてよとて、つゞめきし歌

空蟬の、世は海にかも、我はもよ、棚なし小舟、沖邊ゆかば、風をいたみか、澳つかい、とりがてぬかも、荒磯べは、波のさわげば、邊つ械も、とりえぬかもや、人皆は、しかにはあらじを、我はもよ、世のしれ人ぞ、難波江の、芦の八重葺、ひまもなく、物をぞ思ふ、心から、住家定めず、草枕、旅とあはれと、都人の、見らくをやさし、水無月の、暑き晝はも、夏虫の、ほむしの衣、一重こそよき、

年ぞ、あら玉の、來經ゆく月日、くれはてゝ、月も隱れぬ、其の月の、入りぬるがごと、闇夜なす、黑き御車、とゞろかし、よみちふ國に、出でましの、御供の人も橡の、にぶ色衣、にふゝにぞ、歩みやつかると、をろがみの、心もあらねば、弱車、ひかれも出でず、葎生の、門さしこめて、此の夜らを、守りてぞあかす、かけまくも、かしこけれども、玉きはる、命なにせむ、老が身に、あすを春とも、おもほえず、あはれあはれと、この夜らを、歎きてあかす、かしこけれども、

反歌

立ちさへしよもつ平坂岩くえてとはらふ道といつかなりけむ

弱車とほらふ道ぞたのまるゝ老が越ゆべきよもつ平坂

右　國母御葬送之大路、與ニ寓居ニ

夜半もよ、露にぬれつゝ、秋されば、ひぢこそまされ、天の河、あふぎて見れば、月影は、滿ちてぞかくる、わが齡、わが世もしかぞ、長月の、夜寒になれば、雁がねの、おほふ翅に、もる霜に、はだへ氷れど、冬ぎぬの、神も守らず、やれくだつ、時雨の雨の、古衣、身にとりまとひ、ぬる夜まれに、わびつゝぞある、しかはあれど　世は海なれば、大船に、眞楫しゞぬき、わたりする、人の憂けきも、よろこびも、我は知らずえ、み冬つき、春は近けど、西の市に、立ちも走らず、東の、市にも出でず、足びきの、山邊の家に、庭雀、うずすまりをり、かた鹽を、取りつゞしろひ、さす鍋に、湯わかし酌みて、あら玉の、來へゆく年を、迎ふとやきく、

右寛政五年六月漂然來ニ京師ニ茲歲

冬十二月廿八日夜賦之

歲晩夜坐感懷

此の年や、何ぞの年ぞ、この夜らや、いかなる夜らぞ、あら玉の、來經ゆく月日、老が身に、堪へぬ重荷を、弱車、かけてしのべば、いにしへは、うけきが中に、よろこびも、あり經しことを、白浪の、あとなきかたに、過し來て、今のうつゝの、よろこびに、憂けきが添ふは、我のみか、豐葦原の、久方の、天の益人、おのが世の、よけきにあかねば、悲しびを、むかひの岡の、櫻花、咲きのをゝりに、ぬばたまの、ひと夜の風に、散りかすぎなむ、その花の、みさかりのごと、やすみしゝ、國のはたてに、あふぎ見て、阿部橘の、とこ宮と、思ひたのみて、夜の守、晝のまもりの、をとめらが、赤裳ひきはへ、神のごと、つかへませしを、此の年は、何ぞの

相近、因有ニ斯作一
年かへりて、睦月のおほやけごとども、皆とゞめさせ給ふが、二月朔日をはじめに、御ためししき〳〵行はせ給ふと洩り聞きたいまつりて、

年きりと思ひし花も咲きにけりにほひおくれて見ゆるものから

客舎感懐

年といへば、月日あまたに、春霞、秋たつ狭霧、ほとゝぎす、鳴くや五月の、さみだれの、けふを幾日と、長きけに、いぶせくもあるか、神無月、時雨の雨の、晴れ曇り、雪に籠れる、ころまでを、久しとをいへ、其の年を、十はた三十、四十ちふ、老のはじめも、いつのまに、遠ざかりぬれ、百足らず、経ぬる齢は、海にある、ものとし聞くを、天雲の、よそにはあらで、おのが身に、積みつるやなぞ、山川の、七瀬よどまず、この年も、暮れはてぬめり、何すとか、世には有りけむ、うつし身と、我思はねば、花のごと、栄ゆる人の、今までも、世にはあらじと、住の江の 濱によるちふ、白玉の、忘れてぞある、宿さへも、訪はるをやさしみ、松の戸を、さなしかためて、釘さして、入れじとぞ住まふ、此の戸ひらくな、こゝにある子よ、

反歌

浦島が箱ゆたなびく白雲の天にも行かな老いに老いては

其二

年てへは、明くる暮るゝと、ひとゝせを、ひと日のごとに、いひつゝも、過ぐるを惜しみ、新らしき、春を迎ふと、よき人の、家のためしに、清まはり、ゆまはりしつゝ、神にねぎ、言穂咲かして、うからやから、にきびゆきかひ、たぬしきを、経めとぞ祝ふ、うち日さす、宮のとのべの、水鳥の、鴨の堤に、草枕、假庵にはあれど、六年まで、起居伏しなれ、世の人の、なすわざ知らず、鹿こじもの、ひとりある子も、打ちたのむ、せなに別れて、ぬば玉の、衣着まとひ、ひたぶるに、後の世たのむ、すべのすべなさ、

反歌

いき死にのふたつの海の中つ瀬にかかりてあまた年も経にけり

雑歌

天

八百萬千よろづ神の神ごとも天まづなりて後とこそきけ

日

久かたの日のたてぬきに春秋をあやに織りなすたく機の神

星

闇だにも忍ぶさはりとさやけきは天
のかどせ男あしき神也

雲

はれ曇る人の心にくらぶれば雲のま
よひはかごとなりけり

曉雲

吉野山雲にまがへる花さけば花にも
まがふ曉の雲

雲有ニ歸山情一

まがはじと花に別れて小初瀬に夕べ
はかへる春の浮き雲

青靄

淺みどりわがまづ染めて春の色を野
山に見する朝がすみかな

煙霧

ゆふぐれの霧のまがきの松島は煙に
たてるま柴とも見ゆ、

雨

三吉野の山に入りにし人とへば花に
も雨はさはらざりけり

露

白露に消えはおくれぬあだものゝ命
を人はたのむなりけり

風

巻向の檜原さやぎてふく風に初瀨少
女のそでかへる見ゆ

思ひつゝけふも暮れぬる都邊に山風
さえて出でがてにする

山

二荒山あづまの空ときゝつるを茂き
み蔭はこゝにしありけり

阿耨多羅わがたつ杣をはじめにて比
叡の山びこ呼ばぬ日もなし

萬代の國のしづめの富士のねをあふ
げば空にうつしみの神

田子の浦や千尋のそこに走り出の富
士は仰ぎて高きのみかは

高嶺こそ時をもしらね春されば靑柴
山に霞たなびく

消えてふる雪か散りけむ水無月の富
士の裾野の夕立の雨

庵原の淸見がさきに朝はれて富士は
秋こそ見るべかりけれ

箱根路の雪ふみわけてましらねの富
士の高嶺を空にみるかな

谷

誰か來てすみつきにけむ山深き谷の
ひとつ家煙たつ見ゆ

原

下野や那須の篠原しのぶとも都は遠
しあゆめわが駒

野

むらさめの名殘は草に埋もれて野末
の小川おとまさるなり

海

越の海は波高からし百船の渡りかし
こき冬は來にけり

伊豆の海をこぎつゝくれば波高み沖
の小島よ見えがくれする

わだつみのそこも知らぬ泊して袖

には波のかけぬ夜もなし

海上眺望

唐土(もろこし)をいでゝ幾日の波の上に富士の高ねは見ゆとこそきけ

河

津の國にありといふなる玉川は卯の花くだす流れなりけり

瀧

岩根よぢかづらにかゝり越えくれば落ちたぎつ瀬の水かみにして

散る花は春の水沫に消えはてゝとはに流るゝみよし野の瀧

池

河内(かふち)なる狭山の池の廣ければ稲葉刈り積む舟も見えけり

道ゆかばとひても見ませ笠縫の眞菅刈るてふま野のふる池

皇都

神ながらえらび定めて國士をたひらの都今さかりなり

九重の内外(うちと)にあそぶ鶯は春は暮るれど古巣忘れて

神社

神まつる黒木の殿のかりそめを松のひと木に造りけるかな

里ちかき野中にたてる神やしろ木深からねどしげりあひにけり

寺院

小初瀬の寺のなが屋のかり枕夜ごろになじむ鐘の音かな

墨染のくらまの寺ときゝつるは雪にあかるき山路なりけり

今はもよ片われ月の九重に東の寺の西にたつ見ゆ

曉はうれしとを聞く鐘の音をゆふべの寺にあはれすゝめる

門

門ひろき人の情を見きくには交りがたきものにざりける

隣

たのめこし壁の隣のともすればあふさきるさにうたて世の中

宿

朝疾くと思ひし宿を鶯のなく音ほだしに出でがてにする

田廬

引きはへし山田の引板(ひた)の縄朽ちて守りにしまゝの岸のふせ庵

窓

よそはまだ暮れもはてぬを森陰に文見る人の窓のともしび

法の師のおこなふ窓の紙やれてたのめる西の風は寒しも

竹窓夜雨

ねざめては文見る窓に植竹の葉をうつさ夜のむら雨の音

軒

軒ならぶ都の西の錦織り音たかしもよ靜かなる世に

闕

逢坂のゆるさぬ關にたゝずみて時雨
をよそに過しつるかな

僧

木葉うく閼伽井は雪に埋もれて佛の
つかへ今朝ぞおこたる

翁

百年をかぞへもしらぬ古翁この一郷(ひとさと)
の神とかしづく

若子

弓箭おひ君がみ幸のみさき追ふわく
子うつくしわが聟にせむ

樵夫

大木曾や小木曾の山の深ければ眞木
の杣人こゝた入るてふ

漁夫

ちぬの海の波まにうかぶ櫻鯛網引や
花を散らすなるらむ

懸想

山川の岸に根這へる藤かづらおもひ
かけては橋とならめや

踈くなる

玉だれの小簾(をす)にかゝれる葵草かれが
れ秋にあはむとやする

夜一人をり

君は今は越えはてぬらむ立田山なが
むる峯に月は入りにき

名をかる

たつ名をばよそにおふせてかつ歎く
それをたよりに人や戀ひよる

堪へ忍ぶ

あまりにも老いぬる人の心かなとは
ねど恨むふしも見えぬは

三年たゆる

三とせこぬたよりをきけばあづま路
の草の枕に妻もとむてふ

月へだつ

今こむといひしも久し我ならで親を
思はゞ早歸りこね

一夜へだつ

隔つるは一夜ばかりのさね床に心づ
からや塵のつもれる

不レ逢

たらちねの許せし我を人ごとの千名
の五百名にあはぬこの頃

片戀

中々に思はずもあらぬ風の音の聞え
てくるし片戀にして

弓による戀

引きならすとのゐが弓弦音ふけて誰
が上ならむうしと告ぐなり

機による

千々わくる糸のみだれや高機の空な
る人も心あひては

糸に寄る

神ごとのたゝりにかけてくる糸のた
えばつがむよ戀ひな亂れそ

荻に

亂れあふ荻の葉風のさやく＼に人ぞ
いふなる夜には隱れよ

女郎花に

堀り植ゑてかひある花は女郎花くね

るも我を頼むなりけり
秋もはや末野の原のをみなへし人に
折られむ時も過ぎけり
　ないがしろ
さりともとたのむ心も我からにあく
た河にぞ身を流しつる
　怠
おこたりは我と恨みむ綱引きてあふ
夜あはぬ夜心見しから
　夢
思はぬも思ふも夢の枕とふおもふに
見えて早もさめなむ
　竹與」心倶空
ためずとも直き心はおのづから竹と
共にやむなしかるべき
　野渡無」人舟自横
冬枯の野川の風を身にしめてあはれ
や一人わたり呼ぶ聲
　世人結」交用二黄金一
まじはりをこがねに結ぶ世の人のつ
ひの心ぞ常なかりける
　白眼看二他世上人一
世中の人をさくればおのづから塵な
き庭の松のしたぶし
　悔教三夫婿覓二封侯一
何にかくいだし立ちけむ劒太刀名の
惜しけくも今はあらなくに
　調與二時人一背心將二靜者論一
我をしる人しなければ我が知らぬ人
に見すべき言草(くさ)もなし
　元興寺の僧にならへる
鷹すゑて分くる野山に引く犬のさと
きは人に疎まれぞする
　畫題　初夏晩來微雨
よしやふれこの夕ぐれは時鳥たびだ
ちぬべき雨もよの空　　澄月
綠そふ小雨や暗き木がくれにほの見
えそむる窓のともし火　　蘆庵
舟とむる江の波くれて打ちそゝぐ雨
に待たれつ山時鳥　　蒿蹊
橋見ゆる野川の岸の夏木立くれゆく
いろも雨をふゝみて　　立齊
夕づけて水に音なく降る雨は卯の花
くたすはじめなりけり
　海島暮天舟泊圖
名もしらぬ沖の小島の磯枕夕浪さわ
ぎ秋の風ふく
　漁舟圖　天地一釣竿の心を
海原にたゞひとすぢの釣の糸の外に
うつさじおのが心を
　月下草露のうた
更けゆかば霜やむすばむ白露の光を
寒み月すみわたる
　山田に喬松たてり
植ゑはてし山田の岸のひとつ松影い
とはるゝ時は來にけり
　小松に雪かゝりたる
さがの山弟(おと)ねのけふも風さえて小松
がうれにつもるしら雪
　手毬胡鬼の子

鶯の軒端の聲をはじめにて百千とり
どりあそぶ春の日

　河柳三日月

涼みとる淀の里びと河ぞひの柳にお
つる月を見るかな

　鶺鴒石上に遊ぶ

いその上に下りゐるほどもいとまな
き教に遊ぶ庭たゝきかな

　池水氷り千鳥群れとぶ

冬の池のさゞなみとづる曉に氷らぬ
聲をなく千鳥かな

　紅葉散り鹿の足跡あり

この秋もゆきてかへらぬ跡みれば我
さへもねに鳴きぬべらなり　蘆庵

もみぢ葉はなほ散りしけやさを鹿の
跡を獵夫(さつを)の目にたてぬまで　蒿蹊

暮れてゆく秋をを鹿の跡とめてみ山
に我もかへろとぞなく

　屏風に殿づくりの上を時鳥な
きて過ぐ

殿守のとのゐ人かも瀧口に名乘りて
過ぐるさ夜ほとゝぎす

　高き山に雪つもり月空にすむ

しら山をおろす雪吹(ふぶき)の風の上に冬の
夜なかの月すみわたる

　楠公贊　三章

君が思ふ君にありせば劒太刀とぎし
心のかひぞあらまし

君こそは君をしらざれ天地の神し知
れらばしらずともよし

ほまれある名をば仰ぎておほかたは
君が心を知らぬなりけり

　浦島子

古郷と思ひしものを年へてはしらぬ
國にも我は來にけり

　東方朔偸桃

すまじきは盗みなりけり幾千とせ後
の世までもかたりつたへて

　六歌仙

言の葉も人の譽もおのづから六つて
ふかずにあふや何なり

　陶淵明

秋菊の露のおきふし安き身をなど世
に出でゝ立ちやまどひし

　能因窓よりかしらさし出した
る

いつはりをわが心からゆるされて迷
ふか道のはてしらぬ空

　蓮性倒騎

西をさす心のかたはたがへどもそむ
かで法(のり)の道あゆむ駒

　西行猫の火爐手にすゑたる

杖笠のほかには何をから猫の火とり
の灰のかゝる身にして

　雪中常磐子

ふる雪にはぐゝみかぬる夜の鶴かな
しき聲も天にきこえむ

　小原女の柴に腰うたげ煙くゆ
らせたる

やすらひてあだにくゆらす煙ぐささそ

れも眞柴の空になびきて
　旅人雨を凌ぎつゝつれだつ
三吉野の花に心のいそがれて雨やめてとも言はで行くらむ
　廬山雨
白雲のうへのいほりと思ひしを夜をすがらの雨の音かな
　綠毛龜
こきとても綠の衣のくらゐ山おふてふ龜の名こそをしけれ
　鶴むれ飛ぶ
鳴きわたる天の鶴むら聲なくば空目(そらめ)の秋の風のしら雲
　松に月かゝれり
月すみて松に聲なき秋の夜は緒すげぬ琴のあそびなりけり
　比枝に雪つもれり
ま白根の日枝のみ雪の曉は富士見ぬ老が思ひ出にして
　老梅
なべて訪ふ人もあらじな故郷の老木の梅の春のはつ花
　立雛
別れすむ敎ならはぬいにしへの河洲の鳥にあそぶさま見よ
　明烏
夜烏とたのめし聲をいぎたなき枕に明くる東雲(しのゝめ)のそら
　そのかたと云ふに
朝妻に泊りする舟寒からしたえず伊吹の山おろしの風
　早友迫門の圖
うみ苧(を)なす、長門の國と豐國の、中のわたりは、はや友の、神のまもれば、百船の、小戸の汐あひ、潮まちて、眞檝しゞぬき、風まちて、漕ぎこそわたれ、此の神の、相うづなへば、鯨うく、大海原の、西をさし、北へめぐらせ、よくゆきて、よくもぞ歸る、この浦の、礒回(わ)に立ちて、人さはに、住みぬる里を、たにの浦と、名には聞えて、かしこしや、海を賴めて、背ともなる、山に畑うち、鹽木こり、寒き宵々、波の上に、千鳥妻よぶ、蜑の子の、いづち泊りと、漕ぎこねば、妻まちかぬる、枕邊に、波の音さわぎ、あとべには、山風さえて、幾夜明かすも、
　反歌
わたの底の和布(にぎめ)刈る夜は荒鹽の干るも滿つるも神のまに〳〵
　見二神崎遊女宮木古墳一作歌
うつせみの、世わたるわざは、はかなくも、いそしかりけり、立ち走り、高き賤しき、おのがどち、はかれるものを、ちゝの實の、父やすてけむ、ははそ葉の、母が手はなれ、世のわざは、多かるものを、何しかも、心ゆもあらず、たをや女の、操くだけて、しなが鳥、猪名の湊に、よる船の、

梶枕して、浪のむた、かよりかくより、玉藻なす、靡きてぬれば、うれたくも、悲しくもあるか、かくてのみ、ありはつべくは、生ける身の、いけりともなしと、朝よひに、うらびさぶしみ、年月を、息次ぎくらし、玉きはる、命もつらく、おもほして、此の神崎の、河隈に、夕汐まちて、よる浪を、枕となせり、黒髮は、玉藻となびき、空しくも、過ぎにし妹が、おきつきを、をさめて代々に、語りつぎ、いひつぎけらく、此の野邊の、淺茅にまじり、露深き、しるしの石は、たが手向ぞも、

右遊女入水之事見二圓光大師傳記一

賀荷田信義之新室歌

かけまくも、畏けれども、いはまくも、あやに尊とき、すめみまの、神の尊の、み心を、たひらの宮と、定めまし、御代のつぎ〴〵、老松の、千とせなせれば、枝葉おひ、根はひ廣ごり、天雲の、上につどへる、臣達の、末にまゐ出て、夜のまもり、晝のつかへに、雲にのる、龍の尾をふみ、鵲の、橋を渡りて、かしこしと、身もたな知らず、汐干の、荷田の氏人、いさをあれば、この大宮の、外のへなる、鴨の河ぎし、つきならし、岩根とりなめ、眞木柱、えつり壁草、はこびもて、造れる家は、さき草の、さきくまさきく、うみの子の、末のすゑまで、住みつがむ、はじめおこせば、大鳥の、羽がへはせじな、河のべの、いつ藻の花の、いつも榮えむ、

反歌

築立つる君が新室もろ人のほぐ豐御酒に歌たのしせな

送二佐々木眞足東行一歌

東路は、はるけかりけり、わたつみの、へたゆく道を、海渡り、河舟よばひ、ぬでゆらぐ、馬に鞭さし、眞木たてる、山をも越えて、ゆく人も、のぼりやはえむ、雲だにも、いゆきはゞかる、不二の峯を、何にたとへむ、打よする、駿河の國と、なまよみの、甲斐にうしはき、伊豆相模 國のことごと、立ちきそふ、高峯こと〴〵、八尺瓊の、五百つつどひを、緒に貫きて、きすめる玉の、あな玉は、二つやはある、天にます、玉の親ちふ、神わざに、造りみがきて、立ちいでの、峯にとこしく、つむ雪の、光かがよふ、走り出の、麓の海の、田子の浦に、ゆふ花さけり、みすまるの、玉拾はずば、浪の穗の、ゆふ花つみて、濱づとに、もてこ我がせこ、歸りこむ日は、見ぬ老が爲、

小澤蘆庵を始めて訪ひきし時、翁箏の琴橋の經亮大和琴搔き

合せ、あるじせられしによめる、

山さとの二木の松の聲あひて秋のしらべは聞くべかりけり

かへし

山かげの二木の松の秋の聲ひとに聞かるゝときも待ちけり　翁

二木の松とは、此の庵の庭もせに、年深きが立てるをもていひよするなりき、翁世を去られし時にも、

玉琴の緒はたちしかば君が庵のふた木の松よたゞ秋の聲

南禪寺の庵にありし時

君がすむ宿の水音きゝつれば濁るこころも洗はれにけり　翁

かへし

わが庭のさゞれ石こす谷水のすむとばかりは人目なりけり

年の暮にはいつも炭を切りて贈らるゝに詠みてかへせし歌

埋火のすみつきがたき都にも思をおこす友はありけり

かへし

思ひやるかひこそなけれ埋火のすみつきてたゞ久にあれこそ　翁

河内の國にとひゆく人のありて、はろ〲來たりき、去年の秋、なき人をこゝに伴ひこしことを思ひ出でゝ、すゞろに打ちなかれつゝ、

身はおなじ家にありとも物思ふ心をいづち宿りかへてむ

年月うとかりし人の許より、度々音づれすれど、聞えぬはいかにぞや、恨みつべきものぞといひおこせしに、

なか〲にわが怠りをしるべにてうれしきひとの心をぞ見し

といひしかば、心とけぬとなむ、又の便にいひこせしなり、

住家定めずをちこちしあるくを、今は何處にと人のとひければ

風の上にたちまふ雲の行方なく明日のありかはあすぞ定めむ

と答へしかは、爪はじきして、憎きものにいふとなむ聞えし、

又長柄の濱松かげに、假庵つくりてすむとて、

結ぶより荒れのみまさる草の庵を鶉の床となしやはてなむ

庵を鶉居と名づけしは、聖人鶉居鷇食の謂にあらず、鶉は常居なしと云ふによれるなり、此の庵に、ある夜ぬす人入りて、聊あるものをかづきもていにけり、あした思ふ、

我よりも貧しき人の世にもあればうばら枳殼(からたち)ひまくゞるなり

その入りし壁のこぼれを窓に作らせて、盜窓と名づけて、風を入るゝ便よしと人に語りしかばあなしれ〴〵し、とてあしくいふとも聞きし、

岡男鳥といひしは、友垣の中に、ものら問ひかはしつゝ、いと嬉しき語らひ人なりしに、病して俄に失せしかば、打泣きつゝ、

我こそと思ひさだめて捨てし世の人におくれむものと知らずて

まさのりと云ひしも、まめ語(かたり)する友なりしが打ちつゞきて早う死にけり、えがたき人々をさいだてゝ後は、友とて求めずなりぬ、

ぬぎかへむ一重衣もあらでたゞ露おきそふる秋にさりける

或人、世にありわびていひこせる、

ゆく末の遠きをさても忘られてみのひとつだに今はたまはせ

と聞えしによね一斗をおくりて、

行末もあすのたよりもしらぬ身のひるまばかりは過ごせとぞ思ふ

岩井何がしといふ謡曲の上手の七十の賀を求め來られしかば詠みてあたふ、

鳶のねぐらの竹のふし博士(はかせ)世の長びとゝいはふべらなり

知るしらぬ人の、齢積めりとて、祝の歌乞ふごとに、いつも贈れるうた、

かぎりなく齢たもちて春秋を千々よろづ代とかぞへても見よ

あるやむごとなき御方に、時時まゐりて、ものらきこえたいまつるなべに、わづかに散りとゞまりし文どもを、めなし鳥の益(やく)なきものから、取りあつめ奉るとて、詠みて加へし歌、

今はたゞ老波よするくづれ岸ふみとめよともたのむ君かな

御かへし、祿にそへて給ひつれど畏ければしるさず、

四天寺回錄 三章

雲水とは五層の浮圖の名なり

雲水も燒けか亡ぶとまだき世をしるせし文にありやあらずや

名ぞまこと荒れにし岡の冬枯の昔にかへる風の音かな

始ありし昔のときを人は見し今の終にあふがかなしき

船

から機を五手にたてゝ四つの舟わたりしみ代のためしゝのばゆ

空かすむ難波の海のあさなぎに帆手

打ちつれていづる舟びと

車

ひむがしにたつ市見れば小車のはこぶ秋物ところ狭きまで

馬

なか〳〵に翅は折れむひと日にも千里ゆくてふ甲斐のくろ駒

牛

五月雨の晴れまもとめて鋤きかへす水田の歩うしとこそ見れ

犬

宵よひに垣もる犬におどされてにくくも妹を思ひこそなれ

戸ざしせぬ野寺の門に臥しなれて稀にぞ犬の何をとがむる

猫

たが家を離れてこゝに迷ひこしとゞむ一夜に馴るゝから猫

猪

ふみ迷ふ富士の裾廻(すそわ)の眞萓原あら猪のかよふ道は見えけり

鯛

安濃の浦の鯛つる蜑がけふも亦釣り誇りては酒にかふらむ

鯉

淵ふかくすむとはすれど淀舟の棹にぞ鯉のおどろきをして

鱸

出雲なる松江の鱸秋風にすがたを見せて立つるしら波

鯨

松浦(まつら)潟かよふ鯨のあと見れば天路にけぶる八重の汐風

蟹

蘆原のことば茂くてかひなげに世にすむ我と人も見るがに

津の國のなにはにつけてうとまるゝ蘆原蟹の横走る身は

蛛

世中はかくこそありけれ軒わたる蛛の巣垣に秋の風ふく

軒こぼれ瓦くだけて古寺の蛛の網にも月のかゝれる

鷲

かゝ鳴きて夕べはかへる荒鷲の翼にしのぐ筑波やま風

鳩

野分ふく風に翅(はね)きり飛ぶ鳩の宿りまどへど友ははなれず

雀

二むらの竹のうてなのねぐら鳥とのゐ呼びおこす雪の朝聲

色を分ちて、人々とよみける中に、

花にさき絹に染みつく紅のうつろふ色を見はてずもがな

常に茶を煎てあそび敵とするによめる、

あかでしも春の木の芽を摘みて煎て心は秋の水とこそすめ

東坡云、佳茗似二佳人一、
すむといひ清しといふもよき人の常
としきけばあかぬわが友
茶如レ接二高貴之人一、失レ度其
悔不レ可レ歸、
天しるや眞名井の水のえらびなき悔
の千たびはしれ人の友
法にいり法を出でずばあぢきなくす
むも濁りて終の世や經む
空也堂の法師、茶筅の歌乞ひ
しに、
草木にもあらぬを竹の穗に靡き末は
みどりの波もたちけり
茶盒子を造りて、其土色もて、
冬衣と名づけたるに、
こく薄く重ねてもなほ冬衣の袖まも
らね寒げなりけり
香煙一縷遣レ悶といふことを
詠めといふに
憂きことを空の烟にふきやれば垣根
の夏の草やなになり
河内の尼、足袋ぬひておくり
しに、
淺沓のあさましきまで老いぬれば
このたびを世のかぎりとぞ思ふ
かへし
淺沓のあさくは君をたのまねばなど
このたびや限なるべき　唯心尼
伴蒿蹊の女の、とみの病にむ
なしきと聞きて、
齡とて人のいはふは憂きことの數そ
ふ年のつもるなりけり
翁の齡、我には一年を越えさせしかば、いとほしさにいひやりけるなり、昔今を思ひめぐらすに、唐の郭汾陽、この國にては皇后宮大夫俊成卿をおきて、終の世まで、憂き事しらず、富と齡と、ためしなく聞えたるはあらずなむ侍りき、
冬の夜の長きをかこつ老を憐
みて、傍にある人の、何くれ
と慰めかねつるあまりに、光
源氏の物語を、つぶ〳〵と讀
みて聞ゆ、一夜に一卷、或は
二卷、長きは二夜三夜にも、
卷々の終るごとに、これがあ
たひに、歌よむべく云ふ、い
なまで詠みつるが、その心を
や違へつらむも知らず、いみ
じきをこわざなりけらし、
桐壺
宵のまにはかなの月は入りにけり妬
める雲をかけしながらに
帚木
さま〴〵に定めあらそふ人のうへに
はては心もさみだるゝ空
空蟬
やり水のほまれの門をひきいるゝ車
は戀の重荷なりけり
夕顔

けやすしと思はゞなどてよりて見む
明くるをまたぬ夕顔の露

若紫

九重の北山ざくらさきにけりかけし
霞も名殘なき空

末摘花

中川にことよき橋を渡されて見るめ
なき野を分けもこしかな

紅葉賀

もみぢ葉の光をけふは照りそへて千
秋と君を祝ふべらなり

花宴

かすむ夜もしづ枝やすげに手折らる
る薄花櫻色ににほひて

葵

わりなしや妬さひとつのうき瀬には
人をも身をも沈めつるかな

榊

神風の伊勢はそなたとさし榊のさし
てのらねば戀のしげゝむ

花散里

色は香にまけてにほへる橘の花散る
宿もたえずとはまし

須磨

心から身は山がつにやつせども猶こ
りずまのうらなげきして

明石

都にもひゞきの灘の汐あひにかづく
白玉たれにさゝげむ

澪漂

忘らるゝ身はかつしれど住の江の濱
によりこしかひはありけり

蓬生

藤浪のかけてまつとはとひてしる露
ふる宮の門のしるしに

關屋

心にはゆるせし關にあふ坂の山した
雫袖ぬらしけり

繪合

須磨の浦にすみははてじと繪に寫し
ことにかこちてけふをまちけり

松風

うつりきてわが宿ながら明石がたな
れし岡邊の松のあらしか

薄雲

さりし世をむなしき空にかへりみる
心の鬼よ我をいざなふ

朝顔

朝顏の花田は色をふかむれどうつら
でおける庭の白露

乙女

をとめらがつれまふ衣の音さえて夜
や更けぬらむ庭火しめれる

玉蔓

筑紫路をいかになれとか立ちいでゝ
都にも世を憂みやわたらむ

初音

雪わけてけさ谷いでし鶯の春のかた
には聲もこほらず

胡蝶

春の日をくるゝにあかで飛ぶ蝶の行方は花のちりのまがひに

螢

見ゆを厭ひ見えぬを恨む夏蟲の光は人のためならなくに

常夏

稀に遊ぶ庭のまうけの水うまやとこなつかしき花の夕ばえ

篝火

まどはせし箱のふたみのあひ難みおほふははかな何のみだれぞ

野分

玉だれの小簾の見入れに心さへすさびにけりな野分てふ風

行幸

小鹽山み幸のためし野にみちてうち散る雪にみ鷹よぶ聲

藤袴

たきあはすけふのきそひは秋深き野にぬぎすてし衣にやあるらし

眞木柱

葎生ふ壁のこぼれの蝸牛(かたつぶり)はひかゝりてはゆく方もなし

梅が枝

鶯の巣だちの鳥はひさかたの雲井にいまや名のるひと聲

藤末葉

大嶋のなるとならずとしほ舟のから き渡(わたり)も風を待ちえて

若菜上

なほ若きけこそそひぬれ春の野に摘む菜を君が老のはじめに

若菜下

陸奥にいつかきにけむ手ならしの琴は緒絶(をだえ)の橋となりにき

柏木

背きても世にありふべき心にはまけてはかなき人の悲しさ

横笛

とりつたふ世々の形見の笛の音の殘りて寒き秋にさりける

鈴蟲

それにとてつけし心を笛竹のふしたがへりと歎きてぞ寄る

夕霧

まよひ入る心の奥も霧こめてしのゝみだれの小野の山ぶみ

御法

はなやぎしつかさの衣と見し色は野邊の煙の雲のむらさき

幻

春さむみ淡(あはだ)立つ雲にかくろひて光はいづら峯のしらゆき

匂宮

昔にはぬしこそかはれ梅さくら匂おくれぬ春は來にけり

紅梅

折りてやる花に心を添へつればこをばいく春見ませとぞ思ふ

竹河

みだれ碁の右まけたりと聞くからに
めでし櫻はちりぬともよし

橋姫

都にも色をあらそふ秋ながら人香な
つかし宇治の山里

椎が本

あはれ君世をうぢ山の奥深くほだし
の綱はたちて入りけむ

總角

情ある人もつらしな蓮葉のうへに心
をのせし身なれば

早蕨

法の師のこれを薪にかへて摘む野の
つく〲し山の早蕨

寄生

見まさりにかく咲く花を根分してぬ
すまほしき園の白菊

四阿

うちつけにその人かたをかいま見の
あなあやしとも思ひこそなれ

浮舟

河島にいさよふ波のいかにしてふた
ゆく心せきやとゞめむ

蜻蛉

それとだに思へどすべな宇治川の玉
藻になびく妹がくろ髮

手習

おのが上をよそに聞きてはかつ歎く
たが許さねば死なぬ命ぞ

夢浮橋

ありてなき世の常をしも渡らへばな
きがありてふ夢(いめ)の浮橋

藤簍册子 歌集部終

文化丁卯春發行

江戸　須原屋　平助
大坂　大野木市兵衛
京都　小川　五兵衛
　　　菊屋　源兵衛

橘曙覧遺稿

志濃夫廼舎歌集

一

橘曙覧遺稿

志濃夫廼舎歌集

井手氏蔵梓

志濃夫廼舍翁小像

雲ならで
かよはぬ
峯の
石(いは)かげに
神世の
にほひ
吐く
艸の花

曙覽

橘曙覧の家にいたる詞

おのれにまさりて物しれる人は、高き賤きを撰ばず、常に逢ひ見て事尋ねとひ、あるは物語を聞かまほしくおもふを、けふはこの頃にはめづらしく、日影あたゝかに久かたの空晴渡りてのどかなれば、山川野邊のけしきこよなかるべしと、已の鼓うつころより野遊びに出でたりき。三橋といふ所にいたる。中根師質、あれこそ曙覧の家なれといへるを聞きて、俄にとはむと思ひ

なりぬ。ちひさき板屋の淺ましげにて、かこひもしめたらぬに、そこかしこはらひもせぬにや、塵ひぢ山をなせり。柴の門もなく、おぼつかなくも家にいりぬ。師質心せきたるさまして、參議君の御成ぞと大聲にいへるに驚きて、うちより、ししじもの膝折りふせながらはひいでぬ。すこし廣き所に入りて見れば、壁は落ちかゝり、障子はやぶれ、疊はきれ、雨もるばかりなれども、机に千文八百ふみうづだかくのせ

て、人麿の御像なども、あやしき厨子に入りてあり。おのれきものぬぎかへて、賤が着るつゞりおりに似たる衣をきかへたり。此の時、扇一握を半井保にたまひて、曙覧にたびてよと仰せたり。おのれいへらく、みましの屋の名を、わらやといへるはふさはしからず、橘のえにしあれば、忍ぶの屋と今日よりあらためよといへり。屋のきたなきこと、譬へむにものなし。しらみてふ蟲などもはひぬべく思ふばかりなり。かた

ちはかく貧しくみゆれど、其の心のみやびこそ、いといと慕はしけれ。おのれは富貴の身にして、大廈高堂に居て、何ひとつたらざることなけれど、むねに萬巻のたくはへなく、心は寒く貧しくして、曙覧におとること、更に言をまたねば、おのづからうしろめたくて顔あからむ心地せられぬ。今より曙覧の歌のみならで、其の心のみやびをもしたひ學ばばや。さらば常の心の汚れたるを洗ひ、うき世の外の月花を友とせ

むにつき〴〵しかるべしかし。かくいふは参議正四位上大蔵大輔源朝臣慶永、元治二年衣更着末のむゆか、館に帰りてしるす。

これは正二位の君、福井におはしましけるほど、かり場にかよはせ給ふ道のゆくてなればとて、我が父曙覧がすみかに立ちよらせたまひてよませ給へるを作らせ、御手づからかゝせ給へるなりけり。我が父世にありしあひだ、厚き御めぐみをうけしことども、あらはなるわら屋のかどより、か

くろへたる心の奥まで、おつる事なくかくものしたまひたれば、父の身にとりては、いともかたじけなくいともおもておこしになむありける。同じくは此の度梓に鏤らせつる父が歌集の巻首に掲げて、世に公けにせまはしく思へりし旨を、御もと人して聞えあげつるに、つたなきことだにいとはざらむにはともかくにもとのたまひつれば、やがて御筆のまゝをかくなむ。

明治十一年六月

橘今滋謹誌

春のころ、蜂のみちをつくるさまを見るに、おのがじしこゝかしこにあかれちりて、あるは櫻、あるは桃、さてはつつじ山振、何にまれ花といふ花のかぎりを、いさゝかづつついばみもち歸りて、軒にかけたる巣のうちに積みかさねつつ、そのくさ〴〵を、ひとしなに釀しなせり。

こを嘗め試みて、櫻もてかもせるはこれ、桃もて醸せるはこれ、つゝじ山吹もてかもせるはこれ、とやうに、舌のうへ、に味ひの辨へられむはいまだなりをへぬなまなまのみちにて、さらにうまし物といふべくもあらぬものなるをや。歌よむもこれにおなじ。おのがじし好めるかた

を學びて、あるは萬葉、あるは古今、さては千載新古今いづれにまれ、詞といふ言葉のかぎりを、いさゝかづつ取りつどへて、ひとうたにつくりなす。こを唱へ試みて、これは萬葉もてつゞれる、これは古今もてつゞれる、千載新古今もて綴れるとやうに、心のうちに姿の辨まへ

られむは、いまだなりをへぬなま〱の歌にて、更にうまし言の葉といふべくもあらぬものをや。されば、花をついばみて醸しなすがみちにて、これやがて蜂のおのが物なり。舊きを學びて新らしくなすが歌にて、これすなはちよみぬしのおのが物なり。そのおのがものとする

わざに勤めず、萬葉古今に似せ、千載新古今ににせて、われ歌のさま得たりと誇るとも、誰かまことの萬葉、古今、千載新古今をおきて、似せものの萬葉、古今、千載新古今を翫ばんやは。こしのみちの口福井のさとに、橘曙覧といふ翁あり。わかき時より歌を好み、世のかぎり、こを

わざとして終られけり。そのかいつみおかれし集を、家にも遺し世にもつたへむと、子今蕊ぬし人人とかたらひはかり、かく板に鏤められけるに、同じくは、芳樹がはし書をそへてと、佐藤誠ぬしして、こひおこせられしかば、此の集を開きみるに、あがたゐの水をくめにも

あらず鈴の屋の響きにしたがへるにもあらで、ひとふしある口つきの、いとめづらしくおもひしままに、誠ぬしに、ひとゝなりを問ひ聞くに、世のかぎりやまと魂たぢろかで、おほやけを尊びし古へをしたふ志厚く、さいつとし天の下のみまつり事、あらたまらむとせしころは、

あつしき病に煩ひて、今はのきはと見えたりしかど、誠ぬしが都よりのかへさに立よれるを引きとどめ、衾手づからかいのけて、ありさまどもたづね聞き、今日こそ身のいたづきをも忘れたりけれと、よろこばれしとぞ。さるひとつ心を種として、よみ出られし言の葉どもなれば、彼似

せ物のかきつをえ離れあへぬかいなでの歌つくりとはこよなくて、蜜のおもむきをよく味ひ知られし翁なるべく、これなんおのがかねていへるこゝろばへにはかなへると思へるまゝに、あぢきなきそぞろ言ながら巻のはじめに記しぬ。さるはかかるすぢ、はやくからうたにつきて、もろこし

人のいひふるしたることなれど、同じことまたいはでしもあらめやとて。明治十とせといふとしの六月ついたちの日、東京四谷の寄居子庵にて

近藤

芳樹識

例言

一　此の集は、吾が父年ごろ事にふれ時にあたりて詠まれたる歌どもの、自ら撰り拔き自ら書き殘し置かれたるを、いさゝかもたがへず、その儘鏤らせつるなり。

一　四季の順序もて部類せるにもあらず、類題の體にもあらずして、前後わいだめなく見ゆめれど、そもまた詠み出でられたる次々に書き置かれたる原書のままを存すればなり。

一　卷頭の歌の詞どもを掻摘みて、やがて卷每の名とし、表紙に記されたる篆書の題辭もまた手澤のままなり。

一　補遺は、易簀の日、枕上に散りぼひし草稿どもを取あつめ、今滋が手に寫し置きしものにて、ことさらに一卷になすばかりの歌數にしもあらざれば、末卷の附錄には物しつるなり。

一　父が遺意をさながらに傳へむとのこゝろしらひなれば、いさゝかの事もつくろひなさず物しつるが、中にも補遺の歌どもは、いまだ淨寫をもなしたまはず、猶考へ訂さまほしかりつらむと覺ゆる書きざまなるもありしかど、これはた、なまじひにさかしらごとして、あらぬすぢにもてひがめん事のかしこさに、たゞ寫し誤らじとつとめて書きとれるのみなり。

明治十一年六月　　橘　今滋謹誌

起嵐草

松籟艸　第一集

阿須波山にすみけるころ

あるじはと人もし問はば軒の松あら
しといひて吹きかへしてよ

秋のころ人しげく來にけるに
わびて

顔をさへもみぢに染めて山ぶみのか
へさに來よる人のうるさゝ

朝ぎよめのついでに

かきよせて拾ふもうれし世の中の塵
はまじらぬ庭の松の葉

飛彈國にて白雲居の會に初雁

妹と寢るとこよ離れてこのあさけ鳴
きて來つらむ初かりの聲

同國なる千種園にて甲斐國、
のりくら山に雪の降りけるを
見て

旅ごろもうべこそさゆれ乘る駒の鞍
の高嶺にみ雪つもれり

世を遁れて後はそれとたのむ
べき生業もなく貧しう物しけ
れば、人も養はず何わざも自
らうちしつゝ辛きめのみ見つ
つすぎにけるを、此のごろひ
でり打つゞき、つね汲む井の
水沽れぬれば、さらに遠きわ
たりより妻のくみはこびつゝ
苦しともせで物するをあはれ
に見なして

汐ならで朝なゆふなに汲む水も辛き
世なりと濡らす袖かな

師翁のはる〴〵來てこゝに旅
居せらるゝあひだに、敦賀に
あからさまに物すとて行き給
ひけるが、あなたに久しうと
どまりおはしければ待遠に思
ひてかくなむ

角鹿のうみきよる玉藻をめづらしみ
歸るの山は忘れましけむ

遲日

のどかなる花見車のあゆみにもおく
れて殘る夕日かげかな

鬪花

あらゝかにとがむる人のこゝろにも
似ぬはせき屋の櫻なりけり

苅萱

斂鎌とりかりしかるかや葺きそへて
聞けばや庵のあきの夜の雨

閑居雪

中々にふり捨てられてうれしきは柴
の網戸をあけがたの雪

舟中雪

枯れのこる渚の蘆にこぎふれて散ら

しつあたら柴ふねのゆき
　平泉寺の僧都と萬松山にゆくとて足羽川を舟にてくだりけり、川つゞきに見及ぼさるゝ物どもを題にして人々歌詠みけるに狐橋を
川岸の崩れにかゝるきつねばし葦の茂みに見えがくれする
　閑居月
あばらなる屋所はやどにてすみわたる月は我にもさも似たるかな
捨てられて身は木がくれにすむ月の影さへうとき椎がもとかな
　竹内年名が藜もてつくりたる杖くれける時
偃人（やまびと）の手ぶりにかなへ作り出でゝ心つきよきつゑにもあるかな
　述懐
なか〱に思へばやすき身なりけり世にひろはれぬみねのおち栗

花ざかりに玉邨江雪のもとにて
あだならぬ花のもとにはたえず來て年に稀なる人といはれし
　都にのぼりて
大行天皇の御はふりの御わざはてにける又の日、泉涌寺に詣でたりけるに、きのふの御わざのなごりなべて佛ざまに物し給へる御ありさまにうち見奉られけるを、畏けれど憂はしく思ひまつりて
ゆゝしくもほとけの道にひき入るゝ大御車のうしや世の中
　むすめ健女今とし四歳になりにければやう〱物がたりなどして頼もしきものに思へりしを、二月十二日より痘瘡をわづらひていとあつしくなりもてゆき、二十一日の曉みまかりたりける、歎きにしづみて
きのふまで吾衣手にとりすがり父よ父よといひてしものを
　健女みまかりて後いくばくもあらぬほどに、山本氏がり府中にものして歸るさ、れいは待ちむかへよろこべりしをさないがことをせちに思ひいでて
聲たてぬすもりかなしみねぐらにもかへりうくする親鴉かな
　人の刀くれけるとき
拔くからに身をさむくする秋の霜こころにしみてうれしかりけり
　野邊に藥屋つくりて始めて移りける頃、妻のかゝる所のすまひこそいと恐しけれ、聞きたまへ雨いみじうなんふる、盗人などのくべき夜のさまな

り、などつぶやくをきゝて

春雨のもるにまかせてすむ庵は壁う
がたるゝおそれげもなし

　父の十七年忌に

今も世にいまされざらむよはひにも
あらざるものをあはれ親なし

髮しろくなりても親のある人もおほ
かるものをわれは親なし

　墓にまうでゝ

慕ひあまるこゝろ額にあつまりてう
ちつけらるゝ地の上かな

　竹間霰

村竹はことなしぶなり砕けよと風の
あられはうちかゝれども

　幽人釣春水

吉能川春のなぎさに絲たれて花に鰭
ふる魚をつるかな

春風にころも吹かせて玉しまや此の
川上にひとりあゆつる

　山家樋

山ざとのかけひの竹をゆく水もよを
ばもれてはながれざりけり

一すぢのながれをうくる竹ならでま
た何をかはおもひかくべき

山ざとのかけひの水のやりすてゝ心
とゞめぬ世こそやすけれ

　人にかさ貸したりけるに久し
　う返さゞりければ童してとり
　にやりけるに持たせやりたる

やまぶきのみのひとつだに無き宿は
かさも二つは持たぬなりけり

　野つゞきに家ゐしをれば、を
　りく蛇など出でけるを妻の
　見る度にうち驚きて、うたて
　物すごき所かな、と言ひける
　を慰めて

おそろしき世の人言にくらぶれは這
這いづる蟲の口はものかは

　母の三十七年忌に
　　おのれ二歳といふ年にみ
　　まかり給へりしなりけり

はふ兒にてわかれまつりし身のうさ
は面だに母を知らぬなりけり

　紙をとぢて米薪やうの物をは
　じめ日毎にとりまかなはむ物
　にあづかれる何くれの事書い
　記しおけと人の勸めけるによ
　り、此の掟始めたりけり、とぢ
　たる物の上に上書のかはりに

うるさくは思ふものからかきつめて
あらましすなりあすの薪も

　かくて一月二月ばかりはこま
　やかに記しもてゆきけるが、
　餘りわづらはしさに怠りざま
　になりにたり、さて思ふにお
　のがさがよいかにもてつけ直
　さむにも、かゝる事はえたふ
　まじきなりけり、よしや今は
　よくもあしくも己が心のむき
　にこそと、綴ぢたる物をもか
　たへにうちやりて

夕煙今日はけふのみたてゝおけ明日
の薪はあす採りてこむ
　足羽川のほとりの桃の花ざか
　りを見やりて
紅藍に水を纐りてあすは川神代もき
かぬ桃咲きにけり
　早苗
うつぶしに多くの植女立ちならび笠
もたもとも泥にさし入る
　王子元日
物ごとに淸めつくして神習國風しる
き春は來にけり
　歸雁
春かけて門田の面に群れし雁一つも
見えずなる日さびしも
　菅原神の九百五十年の御祭に
　梅花盛といふ題を詠みて奉り
　ける
うめの花匂ひ起さぬかたもなし東風
吹きわたる春の神垣

　加賀國山中の溫泉にて
たをやめの袖ふきかへす夕風に湯の
香つたふる山中の里
　秋田家
蚱蜢うるさく出でゝとぶ秋のひより
よろこび人豆を打つ
　新竹
稀にきてすがる小鳥のちからにもひ
しがれぬべく見ゆる若竹
　戸川正淳が男兒うませけるに
ますらをと成るらむちごの生さきは
握りつめたる手にもしるかり
　竹
村雀をどればわれもうかれつゝそよ
めきたちてさゝといふなり
　初秋月
蟋蟀の聲もまじりてこの夜ごろ秋づ
きかけぬ淺茅生の月
　苔徑月
露しげき苔路にひとり月をおきてさ
さるゝものか夜はの柴の戸
　愛山
人ごゝろ高くなりゆくはて〳〵は山
より外に見る物もなし
　樹間鹿
あはれなり角ある鹿もたらちねの柞
の陰を去りうげに鳴く
　公につかふまつるつねの心お
　きてとなるべき歌よみてくれ
　よと人に乞はれて
世の中の憂きに我が身を先だてゝ君
と民とにまめ心あれ
　越智通世が妻のみまかりける
　とぶらひに
亡き母をしたひよわりて寢たる兒の
顔見るばかり憂きことはあらじ
　木屋四郎兵衛が父のもにこも
　りをるに
言あらくいさめたまはむ聲をだに聞
かまほしくやせめてこふらむ

笠原元直が游學のため江戸に
物するに
すゝめやるまなびの道の門出も今日
と聞くにはねぞ泣かれける
佐々木久波紫がことなるみえ
らびによりて、やんごとなき
めしにあへるに
今日のみのおもておこしになしはつ
な立てむいさをの末を思はで
庭なる山吹の、秋、花咲きけ
るを見て
黄金色とぼしき屋所といふ人に見せ
ばや秋の山ぶきの花
與女見雪
妹とわれ寢がほならべて鴛鴦の浮き
ゐる池の雪を見る哉
笠原元直のみまかりけるを悲
みて
今日のこのなげきさせむと同じ世に
魂さへあひて生れきにけむ

湖上月
片田舟かた乘りすなといさめても月
に心のよる浪路かな
書中乾胡蝶
からになる蝶には大和魂を招きよす
べきすべもあらじかし
山家
白雲の行きかひのみを見おくりて今
日もさしけり蓬生の門
落葉深
今朝見れば簀子つゞきになりにけり
夜ひと夜ちりし庭のもみぢ葉
古書ども讀み耽りをりて
眞男鹿の肩燒く占にうらとひて事明
らめし神代をぞ思ふ
島崎士夫が子の袴着に
顏にさへつひによらせよしどけなく
着なす袴の皺をさながら
中根君の江戸よりせうそこし
給ひける返りごとに

雪わけてとのゐしに行く島の殿身も
消えいりてかなしかるらむ
人に示したる
口そゝぎ手あらひ神を先づ拜む朝の
こゝろを一日わするな
幽居雪
薄じろくなりてたまれる雪の上も汚
さで一日見る庵かな
跡といふものはあらせぬ雪のうへに
心をつけて獨り見るかな
辻春生が母のもにこもりをる
に
乳ぶさこふ兒のむかしに身をなして
泣きまよふらむ母よ〳〵と
母なしは我のみなりと巣だちする鶯
見てもうらやまるらむ
河崎致高君の江戸へ行くに
旅ごろも岐蘇は五百重の山つゞきや
どりおくるな朝出いそぐな
南部廣矛が吾嬬へゆくに

わかれには涙ぞ出づる丈夫も人にこ
となるこゝろもたねば

虎晝

聞きしらぬ獸のこゑも吹きたちて野
かぜはげしきもろこしが原

牧笛歸野

思ふこと無げなるものははひ乘りて
牛の背に吹く總角が笛

歸路を牛にまかせて我はたゞ笛吹き
ふける里のあげまき

古溪螢

み谷川水音くらき岩かげに晝もひか
りて飛ぶほたるかな

五月

梅子のうみて晝さへ寐まほしく思ふ
さ月にはや成りにけり

雨いみじう降りつゞきて人皆
わびにわびたりける頃、めづ
らしう晴れそめたる空を見や
りて

天地もひろさくはゝるこゝちして先
づあふがるゝ青雲のそら

馬

髻をとらへまたがり裸うまを吾嬬
男子のあらなづけする

詠十二支 内六首

辰

やゝたくる野べの朝日をよろこびて
そゞろ飛びたついなごまろ哉

巳

うつろひて南にかゝる日の影になま
がはきする花の上の露

午

目にあまる桑の葉の露のひるさびし
機おる音も里にと絶えて

申

あさりありく鷄も塒にかへりきぬ夕
食の妻木をりにかゝらむ

酉

夕顏の花しら〴〵と咲きめぐる賤が
伏屋に馬洗ひをり

戌

長しとは誰がことならむ秋の夜もく
るればはやくそやの鐘の音

繪に、竹取の翁かぐや姫に物
いひをるところ

あやしくもよごゝろつかでおはすめ
り竹の中にはありしものゆゑ

薄

女郎花萩より上に立ちのぶる薄けだ
かくうち見られける

靜處落葉

ちり〳〵てつもる木の葉のうはじめ
り風も音無き庭となりけり

遠山見雪

はなれうき朝床いでゝ少女子が黑髮
山の雪を見るかな

雪朝

宵に逢へる人にはあらねど朝寐顏む
かひくるしき雪の色かな

煙草買ふ錢無かりし時
けぶり艸それだに煙立てかねてなぐさめわぶる窓のつれ〲

蝨
著る物の縫ひめ〲に子をひりてしらみの神世始まりにけり
綿いりの縫目に頭さしいれてちゞむ蝨よわがおもふどち
やをら出でゝころものくびを匍匐あり我に恥見する蝨どもかな

屋上霰
音きけばあないたやとぞうめかるゝ身を打ちたゝくあられならねど

竹内甚八郎が江戸へ行くに
おとに聞くとちの木山の雪なだれ輕く思ひてあふなだれに

佐々木久波紫がはじめて江戸へ旅だつに
うれしさもふたつなからむ日の本の寶の山をうひに見むたび

神まつり
潔やさかきの青葉すがむしろ木綿しでなびく神の廣前
里人の群りつどふ神やしろうちひゞかする皷いさまし
海山の物をつくしておふな〲御饗奉らむ千座五百座

牡丹
目をうばふさかりは二十日ばかりなり國傾けの花の色香も

水鷄
月も影さゝずなりゆく古沼に聲をすませて鳴くくひな哉

扇罷風生竹
思はずもあふぎたゝみて見いれけり一ゆすりする風のむら竹

春よみける歌の中に
すく〲と生ひたつ麥に腹すりて燕飛びくる春の山はた

夏夜
寢よといふ鐘はつくとも一すゞみこの小夜風にせではあられじ

秋夜
つゞりさせ夜ふけて蟲の呼ぶ窓に火あかくともしあるは誰が妻

冬よみける歌の中に
今朝も來て枯木の小枝くゞるかな雪にあさりをうしなへる鳥

ある時よめる
旦暮につく鐘の音を八枚手のひゞきにかへて聞くよしもがな

松戸にて口より出づるまゝに
ふくろふの糊すりおけと呼ぶ聲に衣ときはなち妹は夜ふかす
こぼれ絲網につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす
我とわが心ひとつに語りあひて柴たきふすべくらす松の戸
人みなのこのむ諂ひいはれざる我もひとつのかたはものなり
友無きはさびしかりけり然りとて心

うちあはぬ友もほしなし

赤穂義人錄を見けるとき

影さむきしはすの月にきらめきし劒
おといかにするどかりけむ

贈正三位正成公

湊川御墓の文字は知らぬ子も膝折り
ふせて嗚呼といふめり

燈明寺郁なる新田義貞公の石
碑見まつりて　碑面に新田義貞戰死此所としるされてあり此の石のあるわたりを世ににたつかと人よびて地名のごとくいひならはせり

にひ田塚たゝかひまけてうせぬてふ
文字よみをれば野風身にしむ

菅原の神

御涙(みなみだ)の外なかりけむ誰ひとり都へい
さといはぬあけくれ

鐘の聲瓦の色も御涙もつくしの空の
うさをそへつゝ

三線

寢おびれて鳴くうぐひすかとばかり
に彈きかすめたる物の音のよさ

月

人は皆見さして寐たる小夜中の月を
靜かに入るゝ窓かな

鹽を無くなして買へかしとい
ひけるに、錢なくて買ひえざ
るなり、今日よねをつきをれ
ばこぬか出でくめり、そをう
りて鹽かふべし、しばらく待
ちたまへと妻のいふをきゝて
戯れに

汐のせにはやくかはりてこぬかとは
からきになれていふにぞありける

酒人

とく〳〵と垂りくる酒のなりひさご
うれしき音をさする物かな

煖むる酒のにほひにほだされて今日
も家路を黄昏(たそがれ)にしつ

本覺寺の庭の牡丹花見に物し
けるに去年なくなられし院主
のことを思ひいでゝ

花に來てむつるゝ蝶の羽づかひもあ
るじ尋ぬと思はれてたゞ

緇素見月

樒(しきみ)つみ膺すゑ道をかへゆけど見るは
一つの野路の月影

遠鹿

迷ひありく鹿の遠音に耳たてゝ我も
めあはぬ夜を重ねつゝ

春雨

月のかささしもあらじとあなどりし
春の雨にもぬれつゝあさ庭

雪朝

雪ふりて拾ふ落葉の乏しさに朝けの
煙たてぞおくるゝ

待子規

まちよわり母のいさむるうたゝねに
夜ふかさるゝもほとゝぎすゆゑ

雪

うばら垣刺もつ枝もやはらかになび

けて雪のふりかゝりつゝ

年内立春

む月物はこぶにはまだ日もあるを春
はそゞろにたつの市といふ

鶯告春

春たつとつげの小櫛もとらせずよほ
のぐらきより鶯のきて

松前鐵之助

蛛の巣に顔さしあてゝ三年まで簀子
の下に匍匐ひぞかゞみし

高山彦九郎正之

大御門そのかたむきて橋上に頂根突
きけむ眞心たふと

御魚屋八兵衛

誠有れば地下にて鳴く蟲の聲も雲井
にひゝくなりけり

濱田彌兵衛

大灣の首長とらへて目の前に日本人
の所業見せきつ

伊勢大宮に千日詣といふ事し
ける笠因直万呂　松坂人にて雨龍天王社の神職なり

よどみなき心の中を宮川や千といふ
日を渉りすましつ

大石良雄

睡りつとあばめられしも一くさの名
しろとなりぬますらをのため
山階の里の柴戸しらむにも我が仇人
のひまやさぐりし

間十次郎光興

血つきたる槍ひきさげて落ちくさの
柴のかくれが我ぞさぐりし

大石主税

うつし繪にうつして父のありさまを
恨む／＼も泣きし子ごゝろ

近松勘六行重母

劒太刀焼刃に我と身をふれて勵まし
やりつ仇ねらふ子を

祇園百合女

一つある葉かげの苔かき抱き身を野
に朽たす姫ゆりの花

芭蕉翁

昏のさむきのみかは秋のかぜ聞けば
骨にも徹る一こと

嵐雪

内日さす都のてぶり東山寢たる容儀
にいひつくしけり

塙検校

何事も見ぬいにしへの人なれど涙こ
ぼるゝ不盡の言の葉

僧桃水

宿かりし佛もこゝろおかれけむ 鞋
つくる法師の家

石川丈山翁

比叡山ふもとの里に門とぢて劒を筆
にとりぞ換へつる

朱舜水

さくら咲く皇國うれしく思ひけむさ
つ矢遁れて來つる唐鳥

武者小路實隆卿

をこになど畑の末に思ひしぞ君の御
ゆきに馳せむとはせで

僧涌蓮

疾く起きてつとめぬ身にもしむぞか
し窓にうれしき在明の月

甲斐國德本

人いかす心の淵をあすか川淺せにか
へて世をわたりつゝ

岡野左内

すがり居し垣の山吹飛びはなれうし
ろも見ずにゆく蛙かな

賣茶翁

木芽(このめ)煮て此のごろ都うりありくおき
なを見けり嵯峨の花かげ

岸玄知

吾が物とおもはむのみを價にて錢は
とらせつ野路の楳(うめき)の樹

千利休

來し君の朝顏いかにまもりけむ一つ
殘しゝ花にならべて

桃山隱者

吾がためは徑(こみち)もなさぬ桃山の春日の
どかにひとり文見つ

玉瀾女

此の筆は眉根つくろふ筆ならず山水(やまみづ)
かきて背(せ)に見する筆

契沖阿闍梨

もしほやく難波の浦の八重霞やへや
へならぬしわざ立てける

筑前國孝子莊助

かれとこれ片足(かたあし)々に蹈みしめてつひ
にそむかぬ兩親(ふたおや)の言(こと)

僧元政

不二の根も背に負ひ來つる吾が母の
御蔭の下に見てや過ぎけむ

池無名

勢田の橋その人とほく去りて後すて
し扇を見ほしがる哉

小澤蘆庵

うらやまし嵯峨山ちかく家ゐして花
の便りを得たる身の上

飛驒國富田禮彦おほやけのお
ふせにて去年より此の國の堀
名といふ山里に物しをる春ば
かりとぶらひたりけり、こゝ
は近きころ白がね出づとて、
禮彦はじめて其の司にまけら
れて、おふな〳〵いぞしみけ
るにより、日ごとにほり出だ
すかずおほくなりつゝ、今の
さまにて考ふるに、つぎつぎ
ふえゆきなんずるやうなりな
ど物がたるをきゝて

とし〴〵にさかゆく御世の春をさて
咲きあらはすか白がねの花

春さむき越の山邊に白銀の花守(はなもり)しつ
つ庵むすぶ君

夜晝と手人(てひと)いさなひ御つぎ物掘りう
かたする白がねの山

人あまたありて此のわざ物し

をるところ見めぐりありきて

日のひかりいたらぬ山の洞のうちに火ともし入りてかね掘出す

赤裸の男子むれゐて鑛のまろがり碎く鎚うち揮りて

さひづるや碓たてゝきら／＼とひかる塊づきて粉にする

箕かけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる

黒けぶり群りたゝせ手もすまに吹き鑠かせばなだれ落つるかね

鑠くれば灰とわかれてきはやかにかたまり殘る白銀の玉

銀の玉をあまたに筥に收れ荷緒かためて馬馳らする

しろがねの荷負へる馬を牽きたてゝ御貢つかふる御世のみさかえ

　禮彦がをるところのさうじを見れば、短冊色紙やうの物あまた押したり、聞くに此のさうじ市よりもてくるほどに、途にて薪負はせたる牛のあへるが、にはかに痛く荒れて角振りたつるほどに、さうじに疵つけたりとて、えだちつかへつる人どもいたうかしこまり、いかゞはせんとわびけるを、禮彦露ばかりも憤る氣色なく、そのまゝこゝにたておきつゝ、つきたる疵どもの上に紙を大きくも小さくも切りてほどよく押し並べ、自らひとりでにかう書をも歌をもをかしう書きすさびたりけるなりとなん。げに物の司となりては、萬のことなるかぎりは、人のあやまちしつらむをもあながちに責むることなく、見直し聞直しせむこそ神習ふおほやけ心にはあらめと、此のしわざをいたくほめて

物めぐむ心獸に及びつゝ角つきたてし罪もとがめず

　禮彦春になりて故郷より孫生れけるよし告げきたりけるを、男兒にさへありけりと喜ぶこと限りなし、いかでこの祝ひ歌詠みてをと乞ふまゝに

萬代の色ぞ見せける高山の松のひこばえ初みどりより

まだ知らぬ兒の拳もかゝらんとふとる蕨もうち見らるらむ

　蕎麥いだしてもてなしけるをあまた食ひて戲れに

蕎麥の實の角をとりたるあるじぶり圓く居よりて腹つゞみうつ

　かへりかゝりけるにはる／＼送りきて、今は別れむとするに、禮彦はたこゝの任はてゝ

日を經ずその國に歸るべきなりときけば

衣手の飛驒は百重の山のあなた君も又こじ我も行きえじ

君もこじ我も行きえじと思へどもまたゆくりなく逢ふことも有らむ

高山にさかえて立てる松がえのさかえていませ千世といふ世も

三崎高子、さいつころ其のもととぶらひたりけることありけるに、うつくしき扇とり出しくれなどしけるを、ほどなううちわづらひてみまかりにたる、あはれそのをりかうならむとも思ひたらず、なに心なうてありけるを、にはかにはかなうなりゆき、此の扇はた知らず〱長きよのかたみとなりぬと思へば、見るに心うちしをれて

君にまたあふぎと思ひしを今はたゞ涙をたゝむ物となりけり

秋訪田家

餘所人は見なれぬ里の一くるわ稻こぎやめて我をゆびさす

秋衣

狩ごろも縫ひし花ずり脊に着せて小鷹すゑたるふりはやく見む

暮秋鹿

小牡鹿の蹄にかゝる今朝の霜あはれ鳴く音も消えむとすらむ

山家老松

眉白き翁出で來て千とせ經る門の山まつ撫でほむるかな

閑居風

かけがねをかくればはづし〱して夜たゞ寐させぬ柴の戸のかぜ

田家煙

山ぞひの鹿猪田につゞくはなれ村家なみまばらに立つ煙かな

漁村

家々の窓の火あかし網むすぶ手わさに夜をやふかすなるらむ

行路雨

雨ふれば泥蹈みなづむ大津道我に馬ありめさね旅びと

古寺雨

風まじり雨ふる寺の犬ふせぎしぶきのぬれにうつるみあかし

笠原白翁が十月ばかり都へのぼるに

木芽山雪ふらむ日も遠からじ都よしとて歸りおくるな

寺田清遠の父、この四とせばかりわづらひて物もいひえず足もたゝでありけるを、清遠夫婦露怠ることなう夜晝いたはりつかうまつりしに、齢七十あまりにて今年みまかりたりけるとぶらひに

きのふまで床邊さらでありし身のよるべなみだのひまやなからむ

溫かに着せまつらむと妹と背がとりし衾もいまはかひなし

忘れては小床なでつゝたらちねのみ膝こひしみ獨り泣くらむ

詠四時華

朝出でゝ夕べに還るそれならで芳野の山をうづむしら雲

言ひよれどいなともうともいはぬ色に水もながるゝ堰出の玉河

松も皆むらさき色になりにけりはひまつはれる總の多さに

都へのたより絕ゆべき冬ならで雪になりゆく垣根おもしろ

ほとゝぎす啼きて來ぬべき夜のさまを軒に知らせてうち薰りつゝ

いつも〳〵たそがれまちて匂ふかな人通はする宿にもあらぬを

露をおもみ風をまつらむすがたにぞみながらなりし宮城野の原

今朝もまたいぎたなくせし懈怠を見おくれたりし垣根にぞ知る

さらぬだに人の物いひ嵯峨の野に紐とき出でゝなにぞあだめく

ゆひそへし竹もゆがみて初霜のおきうげにする一もとの秋

色匂ひ品をあらそふ春秋に我があづからぬ花の仙人

風さゆる冬のはやしに白雪かとばかり見えて匂ふものあり

寒僕

なりひさご市より取りてくる酒もおのが夜さむは溫めぬなり

降りたまる霙の中に足いれてふるふふるふも人のしりゆく

寒婢

雞の音によびおこされてうつ石もとる手わなゝく曉の霜

寒燈

ともすれば沈む燈火かき〳〵て学をうむ窓に霰うつこゑ

寒猫

埋火に夜がれせずなる老ねこま霙にぬるゝ妻ごひはせで

寒枕

冷えいらむ夜をもいとはでうれしきはさしのべたりし妹が手まくら

雪朝行人

ふたりとはまた人も見ず雪しづれ朝日におつる杉のした道

煙

あないぶせ銚子かけてたく藁のもゆとはなしに煙のみたつ

川千鳥

夕浪のよりつかへりつ磯松のこずゑさわたる村ちどりかな

よればよりかへればかへり夕波のさわぎにつるゝ川千鳥かな

筑紫人日高万二滿が其の國へ・

かへるに
程すぎて歸らぬ君と夕占(ゆふけ)とひまつらむ妹(いも)にとく行きて逢へ

雪江晩釣
島山の色につゞきて釣夫(いさりを)の着る笠白したそがれの雪

馬上眺望
鞍橋に手をうちかけて駒の足明石ならねば須磨にむけさす

松田眞信、しはすのつごもりの日、子生ませけるに
一日だに年のうちにと鶯のいそぎたりけむはつ音いさまし

安居村弘祥寺に春ばかり人々とゝもに行きて
すゝけたる佛のかほもはなやかにうち見られけりうぐひすの聲

人のある山亭に日比宿りをるとぶらひけるに、昨日はまろうど數多ありて酒のみ踊り興じけるに引きかはりて、今日はいとさうゞしきをひとりそこの來けるいとあやにくなることかななどいひていたくわぶるけしきなり、己が心にはさる折に來あはざりしをなかなかに身の幸ひぞとひとり喜びつゝひそかに
水鳥の立ちさわぐこそうたてけれかばかり淸き山川に來て

中根君の御仕ごとはげしうわたらせられしを、さいつ比よりすこしのどやかなる道に入り給ひければ、かくてぞしばらく身もやしなはれ給はむと、よそよりも喜ばれけるを、又にはかに召されてあまりさへ遠き所へはるゞ物し給ふことゝなりける別れに
我がむれに入れて歌よみ遊ばむと思ひし君のまた江戸へゆく

社頭松
斧いれぬ神の御山のまつの木は千代にさかゆく枝葉しげりて

荒和祓
明日よりは夏の暑さもあらびこじなごみわたれり瀬々の川かぜ

故水戸中納言君の御一周忌に、寄月懷舊といふことを詠ませ給へるに詠みて奉れる
にはかにも隱るゝ月か筑波山ことしげき世を中空にして

飛驒國富田禮彦が五十賀
君と我いそぢはかくて經にきけり百(もゝ)のよはひもいざもろともに

初雪
うつくしくふれるはつ雪ことの葉の跡つけつくるやすらはれけり

春月
打(うち)なびく柳のけぶりはづれても猶う

ちくもるはるの夜のつき
　島田良郷みまかりて後とぶらひに物して
讀みさしの書ちりぼへる文机のあたりさびしき窓のうちかな
　ふるさと人小槌屋善六が八十八賀
知る人の無くなるが多き故さとにひとりある翁千代もかくもが
　幽居花
屋所のはな咲けば苔路をかき掃きてこてふににたり春の稀人
　遲日
うぐひすも鳴きつかれたる聲させつ淀川づゝみなが〱し日は
　石
地にいつ落ちけむ星の雲の根となりかたまれる千引なるらむ
　佐藤誠が春ばかり江戸へ行くに
うぐひすもつねよりことに聲ひきて門おくりする君が朝だち
ゆくさきに見と見む花の歌袋肩たゆきまでおもりゆくらむ
武藏野のはてなく待たせわびさすな老いませる父いはけなき兒に
　岡邊君の御許より人してあまたゝびめしけれどいなみまをしければ、來たる人さらば歌だに詠みて奉れといひければよみける、時は五月ばかりなりけり
水かさますさ月の川にさす小舟とにもかくにものぼりわづらふ
　勝澤青牛翁の江門へ行き給ふに
ほとゝぎすのみかは我も此の朝け君に別れてなきつ一聲
　この翁かなたへ物し給ふことあまたゝびに及びけるを思ひて
道すがら馬ひく子らも目をつけてまた來ませりと君をいふらむ
　多田氏に行きて酒のみて醉ひたるまゝに寐ころびたりけるが、目ざめて見ればあるじをらず、雨をやみなうそぼ降る、あくびしつゝあたり見まはし、自ら茶うちすゝりなどしてすべり出できて
雨の音きく〱寐たる手まくらの夢のうちにや歸り來にけむ

襁褓艸　第二集

正月ついたち、わらはども鶯鳴きつといへば、余も聞きてむと窓あけ、しばらくうちまもりをりけれど今一聲だにせず、わらはどもおのれらは聞きつる物をあやにくなるものかなと言ひあへり、口惜しう思へどすべなし

春もまだ睦月の中のうぐひすは面えりしつゝ鳴くにやあるらむ

柳辯春

そことなく青む六田の柳原めにたつばかり春もなりにき

花参差

隙あらく見し枝々も花と花からまりあひて咲きぞうめける

寶石山にゆきけるにあるじよろこびてねもごろにもてなす

摘みとりし春の園生のにひ木の芽にひ試みをわれにさせける

みさかなはなにはあらめどこゆるぎの急ぎ掃きて煮たるたかんな

松田眞信がはじめて江門へ物するに

めづらしき野山〳〵の秋草にうひ旅衣すりつゝやゆく

月前蟲

身ひとつの秋になしてや蟋蟀なきあかすらむ月の夜な〳〵

雨中鹿

鹿の音のしをれがちにぞ聞かれける在明の月や雨に成りけむ

農

暇なき田廬のしづのなりはひや晝は茅かり夜は綯索ひ

二月十日本保に物して河野氏に宿りてありけるに、十二日より風ひきてうち臥したりけるを、藥の事などあるじのあつかひ物しくれけるにより、からうじて十九日の朝病床おき出でたりけり、さるをりしも今歳は寒さはげしうして、鳴かむものとも思はでありける鶯の、めづらしう二聲三聲しけるは、いつはあれど嬉しうて

うぐひすもうかれや來つる立ちそめて我もうれしき今朝の朝床

本保にて螢のむらがれるを見て

花さそふ風に吹かるゝこゝちしてほたるわけゆく野路の川ぞひ

水風涼

枕よりあとより通ふかぜのよさ水ある宿の竹のしたぶし

やよひばかり本保の河野氏に

やとりをりけり、あるじ事しげしとてあらぬがちなるに、よそ人はたひとりだにとぶらひくるなく、おのれひとり宿もりしをりて、いとさう〴〵しう物しける時

世の人の花見る春のすくなさにおもひくらぶる我が月日かな

閑居時雨

曉も待たでしぐれになりにけり窓もる月をさへしむら雲

古寺鐘

麓寺かはらのいろもかつ消えて夕ぎりがくれひゞく鐘の音

忠臣待旦

百しきや御はしのうへの朝霜を人に後れて踏みし日もなし

秋山路

朝かぜにゆられて落つるさゝ栗に小笠うたるゝ秋のみ山路

市

なにひとつうることもなく空手にて辰の市人おほきなりけり

赤

賤が家這入せばめて物うゝる畑のめぐりのほゝづきの色

山家床

土牀むしろの上にきしかたも行末もなくいびきかくらむ

をりにふれて詠みつゞけゝる

起き臥しもやすからなくに花がたみ目ならびいます神の目おもへば

吹く風の目にこそ見えぬ神々は此の天地にかむづまります

いかで我きたなき心さり〳〵て神とも神と身をなしとげむ

龜

はひ出でゝ甲をぞならぶる族のおほさくらべや龜も始むる

擣衣

槌をだにとる手たゆげにする子らも衣うちならふ里のならはし

とほつ人思ふ心を手力のかぎりにこめてうつやさごろも

煙艸

春野やくしわざおぼえて艸燃すけぶりの靡きおもしろきかな

山家樋

うきふしはぬけて見ゆれど筧竹猶よの中の外は流れず

納涼

ロあそびいひあふ賤の門すゞみ暑さわすれのすさびとはなし

鹿聲近

はしたなくしか鳴きたてゝ山里の垣ねすぎゆく此の夜ごろはも

暮山雪

墨ぞめの夕の雲にまとはれて白さあらはす嶺のうすゆき

閑庭霜

庭中に來たつ狐のもの音を枯生の

霜に聞く夜さむしも
　夏詠みける謌の中に
遣水に來てはひたれる村鴉こぼすは
がひのしづく涼しも
　秋庭
秋の雨一ふりかへて庭のさま見する
紅葉の今朝の色かな
　わらはの朝いしつゝなきいさ
　ちけるを、いたくさいなみう
　ちたゝきなどしける時
撫るよりうつはめぐみの力いりあつ
かる父のたなうらと知れ
　岡部君の江戸へゆき給ふに詠
　みて奉れる
み出たちつゞく小笠のはる〲とか
くれゆくまでうちながめをり
　贈正三位正成公
一日生きば一日こゝろを大皇の御た
めに盡す吾が家のかぜ
　藤原忠文卿
荒駒の艸かむ音に何がしの宿直(とのゐ)する
夜と人も知りけむ
　袈裟のまへ
夕霜に身はさかるれど鴛鴦(をしどり)のつま思
ひ羽はあだに重ねず
　三月
おそかるも此の一月をせきにしてひ
とり櫻の時になしつる
　砂月涼
そとの濱千さとの目路に塵をなみす
ずしさ廣き砂の上の月
　蓮含露
たゝまりて葉まだ見せぬ葩(はなびら)のぬれ色
きよし蓮のあさ露
　竹書
葦といひ楊と見つゝ力いれし心のた
けを知らぬがちなり
　秋風
ともしびをかすめて過ぐる一かぜも
秋になりたる閨のふしよさ
　新樹
ほとゝぎす一鳴きなきてくゞりつる
枝見るたびになつかしの陰
　閏八月ばかり多田氏にさそは
　れて寶石山に行きて、日くる
　るまであそびて
白雲はゆふべの山にかへれども立ち
いでむとも人はまだせず
　擣衣處々
さえわたる星よりしげき槌數にきぬ
うつ里の多さをぞ知る
　辻春生今日歌の會ものすべき
　なりしを、にはかに江戸なる
　叔父みまかりけるにより、こ
　の會のぶべきよし言ひおこ
　す、やがて喪に籠らひをると
　ぶらふついでに、今度の設け
　の題右寺紅葉を傷み歌になず
　らへてかく
見に來よときのふいひける山寺のも

ちちりぬと聞くはまことか

今とし父の三十七年母の五十年のみたままつりつかうまつる

顯はさむ御名はかけても及びなし身の恥をだに殘さずもがな

なにをして白髪おひつゝ老いけむとかひなき我をいかりたまはむ

いひがひもなき身のうへをわび泣きて御墓のもとにうづくまるかな

みいかりをなごめまつらむすべなさを繰言しつゝよゝと泣くかな

柞葉のかげに五十の翁さびのこるかひなき霜の下くさ

富田禮彦がむすめのみまかりけるとぶらひに

墨をすり木の芽を煮やし朝夕につかへし容儀忘れかぬらむ

日高萬二滿が筑前國にかへるに

君が今朝門出につくる雪の上の跡だにしばし殘れとぞ思ふ

雪朝遠樹

あけはつる空にとぢめし夜あらしの行へしづけき杉むらのゆき

いまはなき人となりにたり、府中の山本の叔父が、おのれ本保の里にものすといひけるをり、かしこには吉野瀨の橋いとあやふきところなり、いたく心づかひせよといひさとされけるを、此のはしわたるたびごとに老人のせちにいたはり給へりし心のほど、身にしむばかりぞ思ひいださるゝ、今日またこゝに來かゝりて

こゝろせよといひし一言いつもいつもおもひぞわたるよしのせの橋

こゝすぎて道すこし行きけるに、島崎土夫が己が旅居訪らひに本保にとて來けるにあふ、土夫よし翁おもふかたへ行け、我も今日一日のうちには歸らであるべきにあらず、いでこゝにて別れむといはる、しかせむもほいたがふわざなり、さらば本保まで來給へ、己れも立かへり通雄がりゆきて、しばしだにうち語らひ、さてともかくもはからひたらむよからましと、道のかたへにたゝずみつゝ云ひをる間に

いざ來ませ通雄が家は酒もありあるじに乞ひて飲みて別れむ

こゝにて相わかれ、おのれ府中のかたへ行きけるが、途のほどにて土夫主の福井さしてゆかれける、行くへはるかにながめやりて

日は暮れぬ山も見わかずなりにけり
別れし人はいづくゆくらむ

妓院雪

庭の雪たはれまろがす少女ども其の
手は誰にぬくめさすらむ

俠家雪

眞荒男が手どりにしつる虎の血のた
ばしり赤し門のしら雪
まれ人を屋所(やど)にのこして鳥うちに我
は出でゆくたそがれのゆき

須賀原氏の三月三日初弓の祝
といふこと物するに誂こはれ
て

弓といふ物は男兒のとるものとちご
も心のいさみてや見る

飛驒國山崎弘泰みまかりける
よし富田禮彦が告げおこせけ
る時、弘泰は茌名翁の敎子に
てぞある

おなじ枝にやどりて在りし友鴉一つ
失せたるゆふべさびしも

薔薇

羽ならす蜂あたゝかに見なさるゝ窓
をうづめて咲くさうびかな

海棠

くれなゐの唇いとゞなまめきて雨に
しめれる花のかほよさ

楪子

雨づゝみ日を經てあみ戸あけ見れば
標て梅ありその實三つ四つ

篆刻をたくみにして行脚を旨
としをる江戸人蟲松居が四十
賀に歌こひければ

花にふれ月にかたしく旅ごろもかく
て千とせも重ね行くらむ

杣人

うつばりにとる木は無しと杣といふ
杣に入る子もいひてなげきつ

佐野君の婚姻

ちとせもとちぎる夜床にうちかはす
妹背の袖や鶴の毛ごろも

海邊夏月

ひたりくる月のかげさへとゝのひて
波間すゞしき蜑の呼びこゑ

月あかき夜ひとり夜ふかしを
りて

浮雲のこゝろにかゝる空ならでこよ
ひばかりの月を見まほし

閑居秋

芽子すゝきはかなき花を折りかこふ
籬にあまる秋の色かな
痩せて咲く垣の朝顔見るにつけ秋く
れかゝる伏屋をぞ思ふ

鬪雞

逢坂の杉の下みちまだ闇き雞の音ふ
みてこゆる旅人

橋螢

ながれくるほたるの影もあらだちて
水音すごし兎道の川橋

江戸人高橋氏本保に年ごろ居

けるが、こたびうからこぞり
て江戸へかへるに

一日經ば一日ちかづく故さとの空な
つかしみ道いそぐらむ

同じ時そのむすこ直言に

小笠とり杖たてまつりたらちねに心
をつくせ岐蘇の山道

初尾花

旅びとのかち行く野路のはつ尾花は
つ〳〵笠に垂れかゝるなり

出雲國人小川正海のその國へ
かへるに

をりもあらば二たび君を三保岬羅摩（みほみさきかゞみ）
の船のたよりもとめて

秋ばかり抄谷に遊びて酒の
み、醉のまぎれに傍らにおほ
きやかなる石のあるに戲れ書
きける

あかくなる顏うちふりて秋山のまだ
醉はざるをあざ笑ふかな

青牛翁の許とぶらひてありけ
る序殊更に乞ひて書畫どもと
り出させ見ける時

品さだめいひこゝろみて古びたる物
をあまたに見もてゆくかな

古ものゝ中に君をもすゑおきて今の
世ならぬ品と見るかな

川津君の女郎花もらひに人お
こせけるを、をしみてやらで
歌詠みてつかはしける

さき出でゝまだいはけなきをみなへ
しいかでか君にまかせらるべき

ひた土に莚しきてつねに机す
ゑおくちひさき伏屋のうちに、
竹生ひいでゝ長うのびたりけ
るを、其のまゝにしおきて

壁くゞる竹に肩する窓のうちみじろ
ぐたびにかれもえだ振る

膝いるゝばかりもあらぬ艸の屋を竹
にとられて身をすぼめをり

癸亥の年の八月廿九日はじめ
て齒一つおちけるを見て

ふけにける吾が身の秋をまだ知らで
落葉あやしむ痴をの子かな

上月景光君の都に在るによみ
ておくりける、人より物きゝ
たることなどもありていさめ
いはまほしう思ひをる比なり
けり

故郷の垣根の秋に見かふるなみやこ
の花に目はうつるとも

明日香川淵をあさすな流れては盡き
やすからむせに心して

中根君のかうじかうぶりてこ
もりゐ給ふころ、獨言に詠み
つゞけゝる

秋雨にうちしをれては君が屋のあた
りの空をながめやるかな

年魚（あゆ）とると網うち提げ川がりに行き
ます時になりけるものを

秋の花それもなにせむ折りとりて見すべき君に見せられもせず

道とほく隔てはせざる月かげをへだたりて見るこのごろの空

雁がねの聞ゆるたびに見やれども玉章かけて來たれるは無し

十三夜

おくれたる影とはなさぬ心より月を今宵の空にまたれき

鹿聲遙

とほざかるかたちのみかは聲もしかちひさくなりて野べを行くなり

長月ばかり府中の山本氏の女ども、これかれひきまとひ來て、此の庵に宿りたることありけり、着すべき夜の物などかねて人のもとよりかりきて、其のまうけしおきけるに思ひかけざるをの子ひとりそひきて、それきすべき物なし、日くれてなりければ又かりに行かむもびむあしきにより、ありあふ今滋がのをその男子に着せて、今滋はおのがふしどの中にいれて寐さす、わらはなりしほどこそさしてもあらるれ、今は大きなるからだになりぬれば、ひとり〳〵が身じろくたびによるの物よりはづれて肩さきあらはれ、ともすればこわき手足つきあてなどして寐まどふまゝに、かの柳澤淇園の堪忍は執行せざれば身に感ぜざるゆゑによく忍ぶことなりがたし、予も堪忍を守ることを思ふに乗合の舟ばかり事になるゝに便りよきことはなしと思へば、京より夜舟にて浪華へあそび、浪華よりも又舟にて京へのぼりつゝひたぶるに堪忍の稽古せり、人の世にある乗りあひて泊りしをりを思ひいづれば、いかほどの不自由も忍ぶに堪えざる事なかるべし、夜泊りのせつなさ、膝ををりて足を縮め人の足を枕として押しあひ睡らむとすればゆすり起され、少しまどろむと思へば鼾に目ざめて、起き臥しともにまかせずと雲萍雜志といふものに言はれたることのあるを、げにもと思ひいでつゝ寐所の中にて

わびしかる物の譬にひくふねもかゝるうき寐をしやはならへる

府中の松井耕雪が大きなる黑木もて作りたるひをけくれけるを、膝のへにするおき、肱もたせ、頰づゑつき、朝夕の

友とす

撫でやまぬ火桶のいろにならひもてみがきをゆかむ歌の上をも

よそありきしつゝ歸ればさびしげになりてひをけのすわりをる哉

旦暮(あけくれ)になづる火桶を巖にてつきぬことをおもひめぐらす

見ありきしひるの野山の物がたりひをけにいひて夜を更かすかな

つれ〴〵なるまゝに

一人だに我とひとしき心なる人に遇ひ得で此の世すぐらむ

うまれつき拙き人にまじらへばわかれて後もこゝちあしきなり

我がりきて人あしくいふ人はまた人がり行きて我をそしるひと

寒艸

枯れのこる莖うす赤き葩の腹ばふ庭に霜ふりにける

田家灯

賤どちの夜もの語りのありさまを篁ごしに見するともし火

本保の河野氏に日ごろやどりをり曉がた寐どころ中にて

朝出いそぐ旅寐ならねば雞の聲も夜中になして打きく

錢乏しかりける時

米の泉なほたらずけり歌をよみ文を作りて賣りありけども

暮秋蟲

聞く夜あり聞かざる夜あり秋のむし鳴きやむころになりやしぬらむ

詠劍

弱腰になまもの着たる蝦夷人(えみしびと)我が日(ひの)本(もと)の太刀拜み見よ

七重にも手もて曲げなばまがるらむ蝦夷の國の太刀は劒かは

社頭雨

古社ありと知られて見ゆる火の影ものすごき山ぞひの雨

水上月

掌にむすびあげたる水の月さてたもたるゝよしの有れかし

梅雨留客

子規ならねど稀に聲きゝし君はかへさじさみだれのそら

山行伴鹿

日ごろ來る我をば知りて秋の山鹿も袂に角たれてよる

雨中旅

艸まくらつかれて寐たる宇都の山うつ雨くるし菅の古かさ

落葉

柴の門しばしたゝずむ足もとを木の葉に埋(うづ)む一あらしかな

池水鳥

津の國のこやとかたみに呼びかはし鳴きかはすらむ池の鴛鴦

辻込の雙松閑戸

紅藍の塵を二樹(ふたき)の松の葉にうづめさ

せたる庭の山ざと
花下會友
かはらけの酒にも山のさくらにも散るといふことをいとふ木の本
松岡幸山長遠この九月十六日みまかりけるよし聞きてとぶらひに物しけるに、その妻なる者わづらひてありけるほどに、ありとありし事どもかきくづしいひいでゝ、いたう歎きけるありさまいとあはれになむ、長遠世にありし時、神世ながらの醫道のはやう亡せて、古き醫書といふ物の世に傳はれるが無きをいたく歎き、たらはぬながらに大同類聚方のたゞ一部今も世にのこれるを大綱にとりてなほあだし、もろ〳〵の書どもにつきて、いさゝかも此の道によしある事のあらんを取り拾ひ、一つの醫書著さむと思ひおこして、貧しき身ながら其の事にかゝづらふことゝだにいへば得がたき書をも遠き境より求め出だしなど、おふな〳〵力を盡して、今はその書 かねてのあらましなかばに過ぎて綴り出でけるものから、なほ全くはなしをへで有りけるを、思ほえずうちわづらひてはかなく成りにたる、妻なる者にしか〳〵の書いづこにかと問ひけるに、涙こぼしつゝ文筐どもさぐりめぐりて、七冊の文とり出だす、見もてゆくにおのれは醫の事知らねばつくりざまのよしやあしやは見わかねど、藥名病名をはじめよろづいり、ほかなる事どもを皆皇國語もて假字がきに物したるさま、皇國念ひの志のまめ〳〵しさ貴しとも貴し、いつばかりにかありけむ、こゝに來けること有りけるに、かつ〳〵かきつゞりたる物とり出し見せて、記ざまいかに思ひ給ふらむなどいひたりしことの有りけるなど思ひ出でられて袖うちしぼらるゝに、妻なる者またかの人今といふ際にも此の文のことをいひ出でゝ、今三卷ばかりになりにたるを口惜しく書きをへで我は目ふたぐことよとうちなげきつゝ、やがてなくなりぬるにこそと、打かへし打かへし語るを聞くに胸ふたがるを、せめてねんじて詞をだにとて靈代の前に手向く

一部の文かきをへむ程をだにこの長
遠を世には在らせで
一ともに滿ちたらずとてなげかめや
世に無き文をかきし七卷
書き繼がむ人また有りて汝が功績つ
ひには全くならむ行すゑ
えみし唐土きたなき國の術からぬく
すしの書を一人書出つ

寒艸

うつりゆく下葉いかにと見けるまに
霜いたゞきつ庭の萩原

松田眞信が都へ出たつに、五
月ばかりにはかへり來べうい
ふ

待ちわぶる心をくみてほとゝぎすお
のがさ月のをり違はすな

其のところしり給ふ君よりた
まはりたる牡丹の繪にうちそ
へおくべき詞詠みてくれよ
と、ある人のもとよりこひけ
るにより、詠みてとらせける

みめぐみの露餘りあるうれしさを滋
み洩してひらく葩
大きなる花のうへにもおきあまる惠
みの露の色ふかみ草

伊藤千村主のみまかりけるに

青葉山なく時きぬるほとゝぎす今歲
は君に聞かせざりけり

林美鷹がみまかりけるに

君ひとりまた無くなりし友の數ふや
して我を泣かせつるかな

羇中更衣

あらたむる衣ひとつもなつこだち若
葉に慰る旅すがたかな

宰相君よりたまはりたる題待
雪

初雪のふりなつかしく見なされむを
りをはたさぬ冬枯の庭

江樓流螢

ながれては水もほたるも釣殿の簀子
の下をくゞりあひけり

劔

水奔る白蛇なしてきらめける燒太刀
見れば獨ゑまれつ

眞宗寺君の男兒生ませけるに

獸みな膝伏せさせむ獅子の聲生れな
がらに立つる兒かな

瀑布

茂りあふ青葉々々を吹きゆすり伊吹
吹きかくる水煙かな

ある時

何ごとも時ぞと念ひわきまへてみれ
ど心にかゝる世の中
忘れむと思へどしばし忘られぬ歎き
の中に身ははてぬべし

人のこひによりてよめる三社
のうた

伊勢大宮

神樹葉の蔭ものふかき五十鈴川骨身
にしみて凊し尊し

石清水

男山さかゆく御世を常磐(ときは)に見そなはすらむ峰の神墻(かみがき)

春日山

かすが山ふもとの芝生蹈みありくしかのどかなる神やしろかな

大國主神

八十神にひとりおくれて負ひたまふ帒にこもる千のさきはひ

事代主神

天地とともに久しく天皇の御尾前つかへ國まもる神

護摩堂といふ所の蔦のもみぢ見に人々と共に物したりけり、近き頃心なき者の苅りはらひたりけるよしにて、蔦なくなり、巖のあたりいとさうぞうしう見ゆ、さりとていたづらに歸らむも口惜しう思ひて、此の山の石ほり出すことをなりはひとする男の子どものをるちひさき庵にいり、酒あたゝめかはらけとりめぐらしなどす、やう〳〵ゑひごゝちすゝみゆくまゝに

もみぢ葉の今は見られぬ岩上もつたなしとせず醉へる顔ばせ

寒樹交松

色あせぬ松にまじりてからみあふ枝ぶりさむき木がらしの杜

瀑布

かつふれて巖の角に怒りたるおとなひすごき山の瀧つせ

源義家朝臣

年を經し絲のみだれも君が手によりて治めし東の國

西行

心なき身にもあはれと泣きすがる兒には涙のかゝらさりきや

曉時雨

窓くらくにはかに成りて在明の月をよこぎる村しぐれかな

島崎土夫主の軍人の中にあるに

妹が手にかはる甲の袖まくら寐られぬ耳に聞くや夜嵐

歸りこば脚結(あゆひ)の紐もとかぬまに先づ顔見せよ待ちつゝあるぞ

朝夕にあひて語らふ君こねばさびしき庵にさびしくぞ居る

上月君のとほき國にあるに

海中に風にあへりと聞くからに立ちさわがれつ我がこゝろさへ

白雪のふるにつけても古人(ふるびと)の遠き旅路に在るをこそ思へ

同じ時河津君の許に

浪華海船出はなれぬと聞きしより我も心のたゞよひてのみ

日數あまた大海の上にたゞよへる心いかばかりわびしかるらむ

佐野君のもとに

君はやく歸れをとのみ思はれつみ母
のみ顔見るたびごとに

荒波にたゞよひぬれどつゝがなく舟
つきたりと聞くぞうれしき

佐々木久波紫主の許に

舟出すと聞きつる日より難波の海な
には思はず君をのみこそ

年も今は立ちかへり來といふなるを
何時ばかりかは君顔見する

畑中君のもとに

大かたの旅だにあるをいかにしてと
ほき舟路に君をやりけむ

髮白き翁にてます父君をおきて行き
つるこゝろいかならむ

宮北君の許に

黑駒にのりて行きつる後かげ目にあ
る君のいまはいづくに

日に三たび駒あゆませて來かよへる
顏をば早くみやの北の君

松田眞信主の府中に軍人の中
に在るに

遠からぬあたりには在れど顏見ずて
あれば千里を隔るも同じ

妹も子もまつ田の君を草枕旅路にお
くがうれたかりけり

ある時

水車ころも縫ふ世となりにけり岩根
木根立物言ひいでむ

洛東岡崎の尙絅のもとより都
にのぼり來よとあまたゝび言
ひおくりけるかへりごとに

春たゝば谷のうぐひす出でたゝむ友
を求むる聲をたよりに

都に久しう物しをる佐藤誠が
もとよりも尙絅と同じ樣にお
のれに都に上るべく言ひさと
せるかへり事に

さそふらむ水のまに〳〵に浮艸の身
は何所へもよすべかりけり

辻春生主の今莊驛に軍人の中
にあるに

夜晝とむらがる人を呼びたてゝ聲う
ちからしかけめぐるらむ

吹きあるゝ嶺の夜あらし火矢の音寐
るま有りともいかで寐られむ

竹内篤主の軍人の中にある（此のぬし妻を迎へて、日數幾許もあらぬ程に出でたちて行きたる也けり）

太刀とりていづこへ行きしあひそめ
てまだ日もあらぬ妹を打すて

正月八日青牛翁御使にて
宰相君より煙艸賜りたりけ
り、御詞さへそへさせ給へり
けり、その御詞は　安御代は
竈の煙のみならでけぶりくゆ
らせ賤が伏屋に　とあそばし
たりけり、いとかしこくいた
だきまつりてかく

煙ぐさ賤が伏屋にくゆらせて君のめ

ぐみに咽ぶあさゆふ

山口清香に筆かりて返しにもて行きたりけるに途にておとしたりけん、かしこにいたりてふところ探れど筆見えず、いかにともすべきやうなくてかく

うれしさをつゝみ餘れる袖なれば筆もたまらですべり落ちにけむ

辻春生主のことにめさげられたりける祝に

忠實ごゝろつかへの道に盡しけむいさをのしるし顯れにけり

雨中新竹

風ふけばかよりかくよりまろび落つる露もなまめく雨の若竹

冬野

倒れたる薄くゞりて行く水の末もさびしき野邊の冬がれ

夜蟲

つゞりさせいつまで呼びて此の蟲は寢ること知らに夜を明すらむ

或日多田氏の平生貓より人おこせて、おのが庵の壁の頽れかゝれるをつくろはす、來つる男のこまめやかなる者にて、此のわたりはさておけよかめりと、おのがいふところどころをもゆるしなう、机もなにもうばひとりて、こなたかなたへうつしやる、己れは盜人の入りたらん夜の心地してうろたへつゝかたへなる所に身を小くなして、このをの子のありさま見をる、我ながらをかしさねんじあへで

あるじをもこゝにかしこに追ひたてて壁ぬるをのこ屋中塗りめぐる

十五夜れいよりもいとあかくて、窓にさし入るかげこよなき物から、誰ひとりとひ來る人もなく、なか／＼にさうざうしう思ひ、よひよりうちふしけるが、寐どころの中にて

寐てあかすをしさはあれど此の月をいたづら人の見ふかすもうし

月

盞のかずもあまたに成りにけり酣すぎてめぐる月かげ

橋苔

目をわたすたよりばかりと見られけり苔になりたる谷の古はし

中根君の開發といふ里にしるよしして狩に行き給へるみともにて、そこなる賤が家に入りたりけり、あるじとおぼしきをの子とく門の外にはしり出でてみむかへつかうまつりなどするさまを見て

めぐまるゝ身のうれしさをあらはして膝折り伏する賤が笑み顔
やがて瓶子もて出でゝ海山の物をつくしてけうす
みさかなはなによけむとてかはらけを君のつぎきに我にさへくる
夜ふけて歸り給ふに、物がたり打しつゝみともつかうまつる
月かげをふむ〳〵歩む川ぞひの道は歸さもいそぐものかは
ひゝなのかたに
少女子が妹脊の道のうひまなびつきづきしくもならべもてゆく
朝夏艸
暑き日によれし草葉も朝露のひるま忘れて起きかへりつゝ
夏月透竹
なつの夜の月の初霜おきあかす竹の下陰さむくもあるかな

宮北君の艸庵とぶらひきて歸り給はむとする門送り物しけるに、そこに繋がれてある馬の手綱とりて、こは近きころ得つるなるが心にかなひておぼゆるなり、いかに見給ふやとの給へる、おのれさるすぢにはうときものから勝れてたくましげになむ見なさるゝ、やがてうち乘りて一足歩ませ給はんとする時
千里ゆく陸奥馬をわれ得つと鬣なでて笑まるますらを
林下幽閑
日たけても檜杉のおくの檜皮ぶき枝うつりしてふくろふの來る
加賀國打越村某寺のこひによりて詠める、弓波山十勝
琴湖朝晴
ことの海しらべ調ふうら波ににほひあひたる朝日かげかな
千松灣雨聲
濱づたひ砂たゝきて降る雨にこずゑ鳴りくる松の村だち
茗圃香風
朝ゆふの風も木の芽の春の香にうちふく頃となりにける哉
七曲逕行人
蟻よりもちひさく見えて行く人をながめぐらす七めぐりかな
菅神祠櫻花
ちはやふる神の御まへに匂ひあひて齋垣の櫻咲きぞ出にける
矢田埜積雪
胸わけに分けなやみ來るかち人に矢田野の雪の高さをぞ知る
鐘樓晩靄
夕がすみかゝるさびしき鐘の音に今日もくれゆく山寺の庭
御幸橋螢

こゝをせと聚りくらむ光もて螢も橋をつくる夜な〳〵

翠眉山落月

おちかゝる山邊の月ををしみ餘り曉露に立ちぞぬれける

牛鼻崖漁燈

牛の鼻すがたをかしき岩角を夜目にも見せて續く漁火

花

さくら花かくていつまで看をりとも飽く世といふはあらぬ成るべし

峰のはな咲き出づる見れば梢にも立ちつゝかれぬしら雲のいろ

萼をつけずしもあらで山ざくら綻び鈍るこゝろにくさは

蘭畫

山に生きて人きらふらむ花の繪をみかはやうども書く世なりけり

門柳

陽炎のもゆる岡邊につくる屋のかどの青柳かぜに枝ふる

藁ぶきに雛さけぶ賤が門一もと柳ひるしづかなり

青柳風靜

打のぼる佐保路のやなぎ靡く見て吹くらむ風に心づくかな

露をだにゆりはこぼさぬ春かぜを小枝にもちてなびく青柳

雲雀

うち振ふはねも心のすゝむにはおくるといひてひばり鳴らむ

人に示す

眼前いまも神代ぞ神無くば艸木も生ひじ人もうまれじ

奇面艸

春明艸　第三集

正月ついたちの日古事記をとりて
春にあけて先づ看る書も天地の始の時と讀みいづるかな

名所立春
八雲たつ出雲の國の手間の山なにのてまなく立つ霞かな

春雪
白ゆきのふる木とまたもなしてけり芽はると見しを春の青柳

茶つみの詩金屋氏の乞によりて
茵華匂ふ少女が玉手もて摘みつる春の木の芽めしませ

佐埜君の艸戸豁かし給へりけるを喜びて
君としも知らで足おと門にせし駒迎へにもはしらざりけり

青牛翁の許より消息にこのごろそこの來けるに、杖つきてものせりと下部の者告げたりき、僻目にさ見けるにや、はたさいつ頃より心地つねのやうにはあらで物せらるゝよし聞きをれば、いかにか更になやましきけのそひたるなどにはあらじかといと心がゝりになむ思ふと言ひおこされけるに
目くるめく老の坂路にたふれざるさきにと思ひつきしなりけり

春駒
陽炎のもゆる春埜の荒こまはあれさせてこそのどかあるらめ

春詠みける歌の中に
村雀軒端をめぐるさひづりも花ある朝はこゑいさむめり

海浦妙泉寺とぶらひける時
所から入相のかねも浦風にうちさらされてひゞく山寺
魚多き浦邊にいりて魚食はぬ寺にやどりつ二夜さへにも
なまぐさき里わけきつる袖の臭に叩きはゞかる山寺のかど

群盲評古圖
花もみぢ見知らぬ色のうはさをばころ〴〵にさぐりてはいふ

星
大空にならべるよりも人心ものほしほしの數やしげけむ

美人撲蝶圖
うつくしき蝶ほしがりて花園の花に少女の汗こぼすかな
蝶うつとせし手はづれて御園生の花うちこぼし立つ少女哉
人妬くおもふ心を花ぞのの蝶にうつして臂は張るらむ

敗荷

莖折れて水にうつぶす枯蓮の葉うらたゝきて秋の雨ふる

夜山

影垂るゝ星にせまりて薄黒き色たゝなはるおぼろ夜の山

漁樂圖

網すてゝ葦間の月を寐つゝ見る舟はもて去る風ふかば吹け

揩痒虎圖

寐まどひて胸かく虎の身ぶるひに小篠風もつ岨の岩かげ

雲荘畊隱圖

吾が庵を外山の雲の末に見て小雨ふる田に牛ぬらすかな

雲閉づる松の戸出でゝ垣つ田の畯かなるに耒をとるかな

升龍圖

のぼるらむ勢波をゆりたてゝ磨る墨ながす海ばらの雲

老檜圖

岩走る瀧もはふ根の下行きて雲に枝さす檜おそろし

青松白鶴

香青なる松の末葉に白妙の羽うちつけて鶴舞ひめぐる

白きはね青葉がくれに打たゝみよそにうつらぬ松上の鶴

萬竹圖

ありと有る竹に風もつ谷の奥水の響をそへて鳴りくる

河隈の巖に根はふ竹と竹なびきぞ回る水を狹めて

澗(たに)めぐり流るゝ水をはる〴〵と靡きおくりてつゞく竹かな

滑らかに露もつ苔路風ありて下陰くらき竹の奥かな

詠松

龍鱗(たつうろこ)苔さへむして白雲の底に根はへる奥山のまつ

疎竹三禽圖

茂からぬ一もと竹の細き枝に乘りて親まつ雀の兒みつ

山がらと雀と二つ今一つ何鳥なれか竹くゞりをる

竹の霜うちとけ顔に頭三つ集めてかたる友すゞめかな

竹の霜解けて雀の睡るかな三つ一枝に羽をまろめて

臨水梅

花著て水に浸れる岸のうめの枝をくぐりて魚はしりくる

山中

樵歌(きこりうた)鳥のさひづり水の音ぬれたる小艸雲かゝるまつ

鹽場圖を唐の心ばへにならひて

夕食にはあらぬ煙を立てさせて空にぎはひをさする鹽竈

雨漏りてはては倒れむ蜑が屋を火に焚くまでにふやす鹽竈

桂燒き玉かしがする年ごろを藻鹽の
煙わびやたつらむ

背面美人圖

深見艸こちむきがたき癖(くるひ)をばあやし
くもちし花にもある哉

美しき黑髪たれにこゝろをばとられ
て横もふり見ざるらむ

み額のひかりこなたにさすごあらば
其の曉もまちぞ遂ぐべき

ふりかへる片頰をだにと見たがらせ
人をも後むかせざりける

畫石

筆採りて五日經にけむ明けがたにほ
のぼの石の形見せけむ

煮泉圖

涌く清水岩根ながるゝ雲汲みて鶴飛
ぶ山に松風を煮る

つもりたる落葉掃ひて木の芽煮るば
かりの水を岩間にぞとる

歲寒三友圖

霜千(ち)たび故人(ふるびと)あへり玉刀自(たまのとじ)髯ある翁
なよびたる君

松風醉歸圖

吹きおろす風の松の葉髯につけ手ふ
り顏振り歸る醉人

歸るそら狂ひまどひて醉へる顏松の
あらしにすまひつゝ行く

蟻

大瀾を反す堤の崩れをも引きいだす
ことありの土あな

雪竹圖

薄白くなりたるのみの雪の竹斜めな
らざるすがたとぞ見る

雨竹圖

一そゝぎ濺ぎし雨に所せく重なりあ
ひてなびく竹かな

露竹圖

白露のたま〳〵落ちて枝振ふ竹のし
づくを窓にもてくる

風竹圖

靜かなる態(すがた)にしばし返るまもあらし
に竹のくるひめぐれる

懸崖菊圖

花あまた岩根によりて咲きさかる菊
高く見てわたる溪水

劒

福艸(さきくさ)の三尺(みさか)に餘る秋の霜枕邊におき
て梅が香を嗅ぐ

牡丹

置きあまる露の匂ひも深見草花おも
りかに立ちぞふりまふ

北潟といふ里のわたりにいた
づらに廣き入江のあるを、行
末田に墾らむため、近き空地
の土を掘りとり此の江塡めさ
せむとするいそぎどもある
を、今年は年凶くて產業に乏
しき民どもなどはほと〳〵飢
もすべからむ勢ひなるを思し
歎かせ給ひ、さる扶けともな

れかしと、貧しともまづしき限りをよびよせて、この土はこぶわざをせさせ錢たぶべしとの命下りけるにより、其のこと見あつかふ司人として南部廣矛先つ頃より彼處に在る、せうそこする序に

痩せ姿さぞな見るめもうき中におり立ちてこそ君すくふらめ

其のころの事なりけり、浦べにて捕りたるなりとて鮒あまた人に持たせておくりくれたる、さるわたりにて事しげからむ中にも、かくまでに物し給はる心の底深く汲みとられて嬉しう覺えらる

老が手にゑとらへかねてはねめぐる藻臥束鮒(もふしつかふな)見ぞおどろきし

この中に二つといふものはことに能く動くやうなりければ、物に水いれて放ちおきけるに日を經て益〻勢づきけるを見る〳〵

網いれむ恐れわすれて游べかし水とぼしくて住みうかりとも

靜かなるこゝろの友と見をるかな鰭ふる魚に我もまじりて

わざをなみ靜かにあそぶ魚ぞ善き夜中曉いつ見てもはた

戲れに

吾が歌をよろこび涙こぼすらむ鬼のなく聲する夜の窓

燈火のもとに夜な〳〵來れ鬼我がひめ歌の限りきかせむ

人臭き人に聞かする歌ならず鬼の夜更けて來ばつげもせむ

凡人の耳にはいらじ天地のこゝろを妙に洩らすわがうた

吾妻屋野梅がむす子のおとな姿になりたるに

我よりも高くなりたる男ぶりよろこぶ親の心たふとめ

春水滿四澤

道の邊の桑の立木も澤水の中になりたり春の雪解

示人

君臣品さだまりて動かざる神國といふことをまづ知れ

首夏

若葉さすころはいづこの山見ても何の木見ても麗しきかな

さびしかりける日

ほしかるは語りあはるゝ友一人見べき山水たゞ一ところ

かたる友見べき山水一つづゝそれだにあらぬ此の世此のくに

山本君の丹巖洞によばれて

つらなれる山見てすがる欄干に肝つぶさせて飛ぶ魚のおと

里梅

風のうめ斜にふきてちりぞ入る藁う
つ戸ロ牛吼ゆる窓
里に入るすなはち匂ひかゞせつる梅
に來にけり石ばしの爪
秋になりたる空ながめやりて
秋たつや先づすみわたるこゝろには
月もおくるゝ物とこそ見れ
山家積年
杉の菴すぎておもへば世の外の山の
月日も短かかりけり
山にてもなほうきときはいづこへと
迷ふ心もたえて幾とせ
年あまた累りきつる軒の雲はれよか
しとも今はおもはず
老の身のゆく末かけぬかけ作りよろ
ぼひつゝも山に在りへぬ
竹久友
朝夕のまじはり深くしげりゆく竹な
らはゞや重ぬらむ世も
狛君の別墅二樂亭
廣き水眞砂のつらに見る庭のながめ
を曳きて山も連なる
早梅
ところせく香をもつ梅にせまられて
あるにもあらず年も成りけむ
春をいそぐ心さこそはうかれけめ花
笠ぬひて梅くるひいづ
田螢
夜もなほほたるのかさを引く水のう
へにあらそふ小田つゞき哉
池蓮
しづまれる華うごかして夕蛙はす咲
く池をとびくゞるかな
早梅
手かくれば匂ひ起しつおりたちて春
といはれぬ梅にはありとも
辭見華
木の本にもろ膝くみて苔むしろさく
ら見る日にしく物ぞなき
閑對泉石
山たかみ雲吐く岩根ゆく水は翅ひた
しに來る鳥もなし
三丸殿のおもと人師子君かね
て歌みせなどし給へりし物か
ら、いまだ對面せでありける
を、今日はじめて艸廬驚かし、
今たび殿中のみつかへしぞき
て東にかへり給はむとのあら
ましなるよし告げ給へる、あ
ふと別ると嬉しさ悲しさ、な
にとも思ひまどはしくて
逢ふからにわかれを告げて人をかく
わびさせにくる心なになり
府中の青木夏彦とぶらひたり
けるに、なくなりし父翁のこ
と言ひいでゝ袖うちしぼる、
こぞの秋ばかり此の家に宿り
をり、朝とくおき出でたりけ
るに、雙鶴翁きて、今おのがか
たに湯わきてはべり茶一つま

ゐらすべしいで來給へとていとよくもてなされしことなどありけるをおもひいでゝ、已れもともに打ちなかれつゝ

窓のうちに我をよび入れ朝目よく木の芽にやしてくれし君はも

問ひよれどわれをまつ風音もせず釜の上しろく塵たまりつゝ

おのがすみかあまたゝび所うつりかへけれど、いづこもいづこも家に井なきところのみにて、妻して水汲み運ばすることもかき數ふれば廿年餘りの年をぞへにきける、あはれ今はめもやう〳〵老いにたれば、いつまでかかくてあらすべきとて、貧しき中にも思ひわづらはるゝあまり、からうじて井ほらせけるにいと淸き水あふれ出づ、さくもてくみとらるべきばかりおほうあるぞいと嬉しき、いつばかりなりけむ　しほならであさなゆふなに汲む水もからき世なりとぬらす袖かな　とそゞろごといひけることのありしが、今はこのぬれける袖もたちまちかわきぬべう思はるれば、この新しき井の號を袖干井とつけて

濡らしこし妹が袖干の井の水の涌出るばかりうれしかりける

紅葉勝華

花といへどほと〳〵まけもすらむかしそめてこがるゝ秋山のいろ

世の中のありさま思ひなげかれて

せめておちし涙もいまは盡きはてゝ空うちにらみから泣をする

府中にものして貴志氏に宿りをりけるころ、佐々木久波紫主角鹿に物すとて此の里過ぎられ、殊更に已れをとぶらはる、その夜こゝなるたれかれともろともに夜更くるまで物語りしをりつゝ、別れむとする時

中々におとづれをだにせでゆかば別れむうさも知らであらましを

短冊ばこに詞かきてとこはれて

いつはりのたくみをいふな誠だにさぐればうたはやすからむもの

色紙ばこにも

すゞり石きしらふ音を友にして歌かきつけつ今日も日くらし

獨樂吟

たのしみは艸のいほりの莚敷ひとりこゝろを靜めをるとき

たのしみはすびつのもとにうち倒れ

ゆすり起すも知らで寐し時
たのしみは珍しき書人にかり始め一
ひらひろげたる時
たのしみは紙をひろげてとる筆の思
ひの外に能くかけし時
たのしみは百日ひねれど成らぬ歌の
ふとおもしろく出できぬる時
たのしみは妻子むつまじくうちつど
ひ頭ならべて物をくふ時
たのしみは物をかゝせて善き價惜み
げもなく人のくれし時
たのしみは空暖かにうち晴れし春秋
の日に出でありく時
たのしみは朝おきいでゝ昨日まで無
かりし花の咲ける見る時
たのしみは心にうかぶはかなごと思
ひつゞけて煙艸すふとき
たのしみは意(こゝろ)にかなふ山水のあたり
しづかに見てありくとき
たのしみは尋常(よのつね)ならぬ書に畫にうち
ひろげつゝ見もてゆく時
たのしみは常に見なれぬ鳥の來て軒
遠からぬ樹に鳴きしとき
たのしみはあき米櫃に米いでき今一
月はよしといふとき
たのしみは物識人に稀にあひて古へ
今を語りあふとき
たのしみは門賣りありく魚買ひて烹
る鐺の香を鼻に嗅ぐ時
たのしみはまれに魚煮て兒等皆がう
まし〳〵といひて食ふ時
たのしみはそゞろ讀みゆく書の中に
我とひとしき人をみし時
たのしみは雪ふるよさり酒の糟あぶ
りて食て火にあたる時
たのしみは書よみ倦めるをりしもあ
れ聲知る人の門たゝく時
たのしみは世に解きがたくする書の
心をひとりさとり得し時
たのしみは錢なくなりてわびをるに
人の來りて錢くれし時
たのしみは炭さしすてゝおきし火の
紅くなりきて湯の煮る時
たのしみは心をおかぬ友どちと笑ひ
かたりて腹をよるとき
たのしみは晝寢せしまに庭ぬらしふ
りたる雨をさめて知る時
たのしみは晝寢目ざむる枕べにこと
ことと湯の煮えてある時
たのしみは湯わかしわかし埋火を中
にさし置きて人とかたる時
たのしみはとぼしきまゝに人集め酒
飲め物を食へといふ時
たのしみは客人えたる折しもあれ瓢
に酒のありあへる時
たのしみは家内五人五たりが風だに
ひかでありあへる時
たのしみは機おりたてゝ新しきころ
もを縫ひて妻が着する時
たのしみは三人の兒どもすく〳〵と

大きくなれる姿みる時

たのしみは人も訪ひこず事もなく心をいれて書を見る時

たのしみは明日物くるといふ占を咲くともし火の花にみる時

たのしみはたのむをよびて門あけて物もて來つる使えし時

たのしみは木の芽瀹して大きなる饅頭を一つほゝばりしとき

たのしみはつねに好める燒豆腐うまく烹たてゝ食はせけるとき

たのしみは小豆の飯の冷えたるを茶漬てふ物になしてくふ時

たのしみはいやなる人の來りしが長くもをらでかへりけるとき

たのしみは田づらに行きしわらは等が耒鍬とりて歸りくる時

たのしみは衾かつぎて物がたりいひをるうちに寢入りたるとき

たのしみはわらは墨するかたはらに筆の運びを思ひをる時

たのしみは好き筆をえて先づ水にひたしねぶりて試るとき

たのしみは庭にうゑたる春秋の花のさかりにあへる時々

たのしみはほしかりし物錢ぶくろうちかたぶけてかひえたるとき

たのしみは神の御國の民として神の敎をふかくおもふとき

たのしみは戎夷よろこぶ世の中に皇國忘れぬ人を見るとき

たのしみは鈴屋大人の後に生れその御諭をうくる思ふ時

たのしみは數ある書を辛くしてうつし竟つゝとぢて見るとき

たのしみは野寺山里日をくらしやどれといはれやどりける時

たのしみは野山のさとに人遇ひて我を見しりてあるじするとき

たのしみはふと見てほしくおもふ物辛くはかりて手にいれしとき

　秋のころ賤獄にのぼりて

血になりし昔おもへばなまぐさき色とぞ見なす秋の梢も

　旅にて

今朝見ればあかきもみぢに霜ふりて秋風さむし岨のかけ道

　養老瀑布見にものして岩根に腰かけなどしつゝあたり見めぐらすになべて人げんの世かいはなれたるやうにおぼえらる

こくたちし人かあらぬか岩ばしる瀧よりおくにたきゞこるおと

　伊勢外宮にまうで頂根突きをりつゝ

一日だにくはではあられぬ御食たまふ御めぐみ思へば身の毛いよだつ

　內宮にまうでゝ

おはしますかたじけなさを何事も知

りてはいとゞ涙こぼるゝ
御ひかりを朝夕うくる御めぐみは身
を粉にすともむくひえられじ

山室山にのぼりて鈴屋先生の
御墳拝みて

宿しめて風もしられぬ花を今も見つ
つますらむやまむろの山
おくれても生れし我か同じ世にあら
ば履をもとらまし翁に

みやこに上りてありけるころ
山紫水明處といふはなれやに
やどりをりて

むらさきに匂へる山よ透きとほる水
の流れよ見あく時無き

山紫水明處に在りける程なり
けり、大田垣蓮月尼の急注か
しくれけるを誤りわりたりけ
るをわびて

ゆく水のゆきてかへらぬしわざをば
いひてはくゆる鴨の川岸

早鶯

呉竹の葉山がくれの枝うつり羽音ば
かりはさせつうぐひす

風光日々新

あらはして日々に入りたつ春色をい
つはらざりき梅ややなぎは

痩馬圖

見るめなく脊梁すほれる痩馬の髦（たてがみ）
みだし秋かぜになく

逸馬圖

溢るらむ力ほこりにみをやきて蹄蹴
たつるつなぎうまかな

洗馬圖

馬あらふ西の厩の柳かげ落星みゝを
うちふりて立つ

君逑艸　第三集

二月二十六日 元治二年乙丑

宰相君御獵の御序己が艸廬に
ゆくりなく入らせ給へる、あ
りがたしともいふは更なり、
たゞ夢のやうなる心地して涙
のみ打ちこぼれけるを、嬉し
さの餘りせめて

賤夫も生るゝしるしの有りて今日君
來ましけり伏屋の中に

其の後御館にまうのぼるべう
川崎致高主を御使として仰せ
ごとありければ、賤しき身の
さるたふとき御まへにまうで
まつらむことのせちにかしこ
く思ふ給へらるゝ旨きこえま
つりてかく

花めきてしばし見ゆるもすゞな園田
（ぶせの）廬に咲けばなりけり

かく聞えあげければかしこく
もきこしめしわけさせ給ひ
仰せの旨ゆるさせ給ひける上
に、すゞな園田ぶせの庵にさ
く花をしひてはをらじさもあ
らばあれ　といふ御謌あそば
し給ひたりけり、ゆほびかな
る御心ばせのかたじけなさ言
にいひ出づべうもあらねどさ
りとて空しくやはとて奉れる

御めぐみの露をあまたに載きてすゞ
ろ色そふすゞな園かな

華

師木嶋の大倭ごゝろをみよしのゝ花
はをしへによりて咲くかは

同じ日にいひならふべき品ひとつあ
やしきまでも無きさくら哉

うちつけに春の眞心さきもらす花の
姿のしどけなきかな

かひありと思はれぬるは世の中にさ
くら見くらす日數なりけり

鈴屋先生の敷島の大和心のう
たをかしづきをりつゝ、なほ
漢土も大倭も道の大むねは同
じかるべう思ひまどへる人を
さとす

山ざくらにほはぬ國のあればこそ大
和心とことわりもすれ

伊藤千邨主の三回忌に

語らひし人のふる聲しのぶ山なくほ
とゝぎす聞くにつけても

青松院君七十御賀に寄松祝を
詠ませ給ふに詠みて奉りける

脚曳のみ山の奥の松蘿千とせもかゝ
れ君がとしの緒

四月廿四日加賀國山中に湯あ
みに物して大藏屋仰道がもと
になんやどりをりける、仰道
あらたに家つくりひろげける

が、からうじて此のごろかう
までには調ひけるなりとて、
　新室の壽乞ひければ
槇ばしらふとしく建てし家づくり手
うちたゝきてほめたゝへ見る
人あまた來入りつどひて夜晝と千世
よろづ代ににぎはゝむ家
　仰道こたびその國守よりほめ
られける由にてその哥こふま
まに
めしありて司のまへに出づる日も地
に手つかぬゆるしある民
　同じところにて明けがたに寐
さめて廣き板敷にひとりはひ
出でゝ空うち見やりつゝ
いつもかくしづまりてのみ在明の月
の如くは世にすまゝほし
　小倉原西應寺やどりあひける
に、春のころむすめなくなり
て悲しさやらむかたなうおぼ
ゆるを、その歌よみてくれよ
　といへるに與へたる
垢つける小櫛見るにも少女子が黒髪
すがた忘れかぬらむ
　高瀬川といふところへ、川せ
うやうに、仰道にいざなはれ
人々ともに行ける時
床に鳴くこほろぎ橋を横に見て醉ひ
倒れたる寐ごゝちのよさ
　人々醉ひくるへるまゝに大き
石ども力を出して抱きもた
げ、川中へうち入れてきよう
ありげにするを見て
醉人の水にうちいるゝ石つぶてかひ
なきわざに臂を張る哉
　五月三日の朝出でたゝむと言
ひけるに、仰道空くらくなり
ぬ雨ふるべう思はる明日にし
給へ今日はかへさじといふ、
とかく心まどひして事はたさ
ざるあひだに時うつりとゞま
るともなくてとゞまりける、
しばらくありて空やう／＼う
ち晴れこよなきていけになり
ければ
浮雲のたちまよはるゝ心よりふらぬ
雨いみするやどりかな
　人にあとらへられて此君亭と
いふことを
一日だに無かるべしやと譽められし
すがた見あぐる簷の旦暮
　闕時雨
須臾とてせきの杉村よる陰もなほゆ
るしなくもる時雨哉
　雲雀
升りおりいつ事ゆくといふこともあ
ら野のひばり春すぐすらむ
　鶴
紅藍の頂たかくさしのべて巖の上に
つるさけびをり

芳賀眞咲が江門へゆくに

太刀の緒にすがりこそせね雪霙ぬれむ旅路にやりたくはなし

宰相君の都に上らせ給ひて歸り給へるころ、高雄山のなりとてちひさき折枝に紅葉の著たるを賜はりたりける時

高雄山みねのもみぢの錦をばかづきぬといひて人に誇らむ

菊

秋のきくおのづからなる花は見でうるさく人の作りなす哉

山路にも諂ひあれや菊のはな人目に媚びて今はさくめる

人の手をうるさくからで吾が秋を岩ねに盡す山の邊のきく

正月十五日 慶應三年丁卯 おのが家にて詞の會始め物しけるに、靑牛翁來たりてやんごとなき御懷紙とり出しかついへらく、

宰相君の今日の會ゆかしがらせ給へる餘り、己れに行きてその有樣見てまゐりつばらかに語り聞かせよとのたまへる仰せかうぶりけるよと示さるる、げに此の君のなにゝまれ御心深う物し給へる御本性なるに、深き御殿のうちにのみおはしましつゝ下ざまのふるまひ近く見給はむやうの事ふつにあらざめれば、人々よりつどひくつろぎざまに物する圓居の樣など御らんじほしう思さるらんかし、こゝをもて今日の會の始め終りのさま詞によみつゞり、靑牛翁して御らんじさせぞしける、かゝることはをこごとがちに物したるなん、中々に御心にかなはんことも多からむかとてわざと畏まりもおかで戯れ詠みにぞよみける

人麿の御像のまへに机するゑ燈かゝげ御酒そなへおく

設け題よみてもてくる歌どもを神の御前にならべもてゆく

さぐり題手にとるやがて頬杖をつきかゝりけり口たゝきやめ

ことごとく歌よみいでし顏を見てやをら晩食の折敷ならぶる

老いし妻の飯七とりて盛りたるを一口君にさゝげ見まほし

疊かず狸のものゝ廣さにて客人膝をおしすりてをる

溫めてたゞ一めぐりさする酒あかくなりたる顏つきを見す

汁食すとすゝめめぐりてとぼしたる火もきえぬべく人突きあたる

おのがわざと曙覽一人はひとみちに歌なほしをる手も動さで

夜更くれば腹空しくやなりぬらむ物足らぬげに誰がかほも見ゆ
客人もあるじも身をぞ縮めをる下冷つよき狭き屋のうち
食ふ物はつくる寒さは強くなる小き火桶すがりあらそふ
よみ出でし歌こと〴〵く取りあつめ神の御まへにすゑて額づく
戸をあけて還る人々雪白くたまれりといひてわび〳〵ぞ行く

南部廣矛が宮舘へ旅立つに

白川の關より奥に入らむ旅野くれ山くれ日數あまたへむ
冬は火もこほるとさへにいふわたり還りおくるな霜ふらむころ
一足だに入れむさき〴〵島人を諭せ日嗣の畏かるゆゑ

閨怨

火に彈く丸の音づれ懼々も吾が脊のゆくへ人に問はるゝ
荒き波よる晝おもひさわがれつ水漬く屍に君やまじると
艸むさむ屍と思ひさだめけむ君ゆゑ消えむ露の身のはて
寢させむと泣く兒のこゝろとる歌も父は千里と聲を曇らす
取りて來む夷が首を肴にて脊子に飮せむ待酒釀みつ
矛とりて君往きしより年三とせ經れど櫛笥をあけし日はなし

初午詣

稻荷坂見あぐる朱の大鳥居ゆり動して人のぼり來る

春田雨

驅ふ牛の背にひたりつく雨の花はらはで明日もかけよ犂

大野人布川正興やよひばかり訪らひく、その見せける白山百首の中なる哥によりて

ゆるぎけむ白嶺おろしにいさ〴〵と吹き立てられて君も來つらむ

そのあくる日こゝの桃花見に物すとて今滋さそひて出でゆきける、おのれひとり家にのこりゐて

くれなゐの雪うちはらふ花の袖かへすがへすもうらやまれける

山口淸香が別墅二足菴卽景

川代にふれてゆれあふ浪のせに羽をすりては小鳥群れたつ

ある時詠める

月草のうつりやすかる心より本をうしなふ國人のさが

某氏の別業によばれて行きたりけり、主人は知らぬ人なりけり、河津君してこゝの山水の景色見がてら一たび來てえさせよと言ひおこされけるによりゆきたるなりけり、其のあくる日河津君許より昨日は

いかにありけむこゝちそこなはれなどはせざりしやなど人してとぶらはれける返り言に

山里といへどうるさきことまじるただ吾が廬を出でざるがよし

松間鶯

曳きし音の在所さぐりて見る松のしげみいとなくくゞる黃鳥

連峰霞

芳野山高ねつゞきにたつかすみ洩れて青根の薄青く見ゆ

ある時作る

利のみむさぼる國に正しかる日嗣のゆゑをしめしたらなむ

神國の神のをしへを千よろづの國にほどこせ神の國人

閑夜冬月

霜のうへに冬木のかげをうす黑くうつしてふくる庭中の月

夜氷

月かげをこほりの上にはしらせて沈みにしづむ夜はの川音

海邊雪

松をのみしほたれさせて蜑少女ゆきに小櫛をとる朝けかな

伊吹舍先生の書きすて給へりし反古一ひら、今の先生よりうけて持ち傳ふるに哥一つそへてくれよと芳賀眞咲がこひけるにより詠みてあたへたる

これや此の書看ふければ夜七夜も寐でありきとふ神の筆蹟

聚蟻

庭潦天時をばしらではと鑿しにはありもこりけむ

微かなる蟻も力を合すれば我に千重ます物をゆるがす

楯矛を伏せて仇まつゝはものゝ法に出でくる土あなの蟻

地上に墮ちて朽ちけむ菓の瓤くろめて蟻のむらがる

群よびにひとつ奔ると見るが中に長長しくもつくる蟻みち

ものかげに穴はかならずよりてほる蟻は軍の法うまくえて

縱橫に群れひく蟻のすみやかさ妙に軍の法を具へて

蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに奔る西へ東へ

雨の花ひとつこぼるゝ露の音にありたまりえぬ石の上哉

赤心報國

眞荒男が朝廷思ひの忠實心眼を血に染めて燒刄見澄ます

國のため念ひ瘦せつる腸を筆にそむとて吾が世ふかしつ

仇に向き腕たゝきけむ古人にならひてこそは國に仕へめ

正宗の太刀の刃よりも國のためするどき筆の鋒揮ひみむ

國を思ひ寢られざる夜の霜の色月さ
す窓に見る劍かな
國汚す奴あらばと太刀拔きて仇にも
あらぬ壁に物いふ
松の葉の夜おつるにも耳たてつ枝な
らさゞる世とはおもへど

　ひとりごとに
幽世に入るとも吾は現世に在るとひ
としく歌をよむのみ
歌よみて遊ぶ外なし吾はたゞ天にあ
りとも地にありとも

　眞宗寺刀自君夫君におくれて
のち、小きいほ作りて獨かき
こもらるゝ菴の名をおのれに
つけてくれよとあるにより、
合掌庵としたまへと言ひて、
ついでに詞を
合すらむ手つきのさまも潔く壁さす
月にながめらるらむ

　梯民也許にゆきけるに、むす
めの琴とりて組といふものこ
とさらに彈きてきかせければ
うつくしき聲とはきゝつ山とめで水
とほめけむ耳はもたねど

　久しくわづらひてありけるこ
ろ
おろかにてやみがちにする老人は世
にあるもありと思はれなくに

　二月二十六日（慶應元年丙寅）今日は
宰相君の去年伏屋に入らせ給
へりし日なるをとて、殊更に
家ぬち掃ひきよめ
御館のかたはろ〴〵拜みまつ
りなどせめて物しける時
あなかしこ思へば去年の今日なりき
葎生わけて君の來ましゝ

　御簾中君の御母君の六十一の
御賀の歌つかうまつるべく仰
せありけるにより詠みて奉る
少女さびかくて千かへり百かへりく
り返しませとしの緒手巻

　ながら月ばかり
宰相君の東郷山にたけがりせ
させ給ひ、御みづからとらせ
給へりし茸あまた賜はらせけ
る、いとありがたく戴きまつ
りて
秋の香をひろげたてつる松のかさい
たゞきまつるもろ手さゝげて

　三丸殿のおもと人たちの大安
寺にまうで給ひぬとてかの山
の松たけ數多賜はりける、消
息して喜びきこえけるついで
に
秋ふくる西の山寺いかなりし岩かき
もみぢそむるそめざる
秋の香をさとうちもらす家づとに君
が山路のあそびをぞ思ふ

　野村恒見、子多くもちたれど
皆むすめのみにて有りけるを、

今たび生れたりけるうひ孫なむ、めづらしう男兒にてありけりといふをきゝて

君が家にまれに生るゝ男兒の立つる産ごゑ勇ましきかな

辻春生がはじめてみやこに物するに

語にのみ聞きすぐしけむ都がた見まさりすらむ目をつくるより

河野通雄が刀佩き氏名よぶことを公けより許されける祝に

許されて劍とり帶く民の長民はぐゝみにふるへ利こゞろ

うけばりて世に氏の名をよぶことを許し給ひき河野氏の家

おのが草廬の中に潛みをりつつ、心のうちに獨娯しと思ふことの朝夕おのづからありけるを、折々そゞろに詠みうかびたる謌のつもれりけるを、青牛翁見てこれ書き連ねくれよといはれけるにより書きてまゐらせける事の有りけるを、翁、宰相君の御まへにもて出で御覽ぜさせられけるを、御意にや協ひたることのありけむ、此えせ謌の姿にならはせ給ひ畏くもよみ出で給ひて、これ曙覽に見せよとの給へりしよし、翁承はりつたへ、御謌見奉ることゝなりけるを、いたくかたじけなみ更に詠みて奉れる

雀等がさへづりごとに大鳥の聲あはせむと思ひかけきや

こゝろ狹き雀鶺鴒のさへづりをなに風吹きて空につたへし

そゞろによみいでたりける

人臭き世にはおかざる我がこゝろすみかを問はゞ山のしら雲

梯たてゝいつかのぼらむ短山高山神のいますいほりに

人の目に見えぬ高山短山神のいほりを覗くよしもが

體といふ宅はなるれば天地と我の間に垣一重なし

天地の間に隔てなき魂をしばらく體のつゝみをるなり

物皆を立つ雲霧と思へれば見る目嗅ぐ鼻幽世と同じ

幽顯一重の蟬の翼もさへず人の臭もたぬ吾がまなこには

美豆山の青垣山の神樹葉の茂みが奥に吾が魂こもる

嚴凝と神習ゆく斯吾魂いよゝますます嚴凝してむ

海浦妙泉寺日穗法師のそのわたりにてとれる柴栞を手づからいと美くしき物に造り出でけるを、自ら持てきてくれた

りける、見るに色にほひ麗しく味ひこよなし、かの紫栞てふ、のりの大王のやうにたふとびいふめる淺草のなどよりも遙かに品あがりてさへなんある、はじめもらひけるほどにこれかれの人に頒ちやりたるを、とりかへさまほしうさへ思ひなりぬるばかりなるもわりなきしうとなむ、日かずへて喜びを便につけて

いぶかしや後の五百年すぎぬればかかる妙なるのりさへにいづ

三世(みよ)のこと知りとほるてふ佛すら說かざるのりを授く我等に

内田君のもとより唐紙からの扇おくりたまはりけり、使のをの子に此のよろこびみづからゆきてきこえんといひつかはしければ、またふりはへ使おこせて、さては中々にそこをわづらはする中立となり、大方の世人めきてをかしからず、必ず來なと言ひおこせられければ、ゆかでうたを持たせてやりたりけり、雨そぼふる日にてぞありける

のどかなる雨のおとづれ聞きめでゝ出でぬことにはなしつ柴の戸

失題

何わざも我が國體にあひあはず痛く重みし物すべきなり

まのあたりたよりよげなる事がらも後に到りてさあらぬが多し

恐るべし末世(すゑのよ)かけて國體(くにがら)に兎毫(うのけ)ばかりも疵のこさじと

事により彼が善き事もちふともこゝろさへにはうちかたぶくな

其のわざを取り用ふれば自ら心もそれにうつる恐れあり

目のまへの事いふならず禍の遺らむ末の世を思ふなり

潔き神國(かみくに)の風(ふり)けがさじとこゝろくだくか神國の人

武士

尊かる天日嗣(あまつひつぎ)の廣き道踏まで狹(さ)き道ゆくな物部(もののふ)

眞心といはるべしやは眞ごゝろも正しき道によらで盡さば

大綱(おほつな)と天日繼を先づとりてもろ〱の目を編む國と知れ

天皇(すめろぎ)に身もたな知らず眞心をつくしまつるが吾が國の道

旨屯草

白它艸　第五集

詠劒

肝冷す腰の白蛇(しらへび)吾が魂(たま)はうづみ鎮め
つ山松の根に

破研

山に在りて磨りやぶりたる古硯奪は
むとにや雲窓に入る

破れたる硯いだきて窓圍む竹看る心
誰にかたらむ

碎きつる吾が腕臂(うでひぢ)のなごりをば窪み
に見する古研(ふるすずり)かな

玷瓦硯(かけがはら)ひとつにこゝろいれて山買ふ
錢を無くしたりけり

古硯ゆがみし石は吾がたから價かた
るな軒の山松

愚にも山を出(で)しかな玷瓦硯(かけがはら)嚢にいれ
てはるぐ\

松の露うけて臺する雲の洞硯(ほら)といふ
も山の石(いは)くづ

六鶴圖

啄食

しげりたつ葦原せばめ居し鶴のあさ
り所をかへて群れ立つ

顧歩

たゝみつる羽の上つら見めぐらし砂
に足さす浦の蘆たづ

唳天

眞名鶴の立つる一聲鳴きやみて後も
響をのこす大空

舞風

有るかぎりひろげし翅あさ風になが
しやりたる鶴いづこまで

警露

寢つかれぬ鶴のこゝろを更くる夜の
松よりこぼす露に知るかな

理毛

居すくみて上毛つくろふ浦の鶴沖つ
荒浪うちも驚かず

疎竹

ほそやかにもとあらけなく立つ竹の
心にくゝもならびあふかな

勝澤牛翁先生の老の坂路やう
やうのぼれるにより、御つか
へしぞかせ給はるべくあまた
たび申文たてまつられけれ
ど、なにのみさたもなくて年
へにけるを、こたびといふこ
たびねがひの如くゆるし給は
る、翁よろこばるゝこと限り
なし、このごろ唐のがくもん
する人たちにあつらへて、題
淵明歸去來圖といふことを詩
に作らせらる、その心ばへを
詞もておのれは

こゝろみに松撫でさせて君を見ば晝
にある人に能くこそは似め

ある日辻春生が桃莊によばれ
て歸るさ、こゝちあしく息く

るしくなりてえあゆみがたくなり、今滋に背負はれて橋こしけるが苦しさ猶やまで、背おはれても行きがたきにより鹽町なる東屋野梅が家に入りて一時ばかり息をやすめをり、からくしてすこし心地おちゐるやうにおぼえければ、今滋野梅二人の肩にかゝりて喘ぎ〳〵つゝ家に歸り人々に助けられて寢どころに臥したりけり、その翌日の夜野梅ふりはへ來てふしたる枕上にをりつゝ近き頃翁のつね心地安からず物し給へりとは聞きをれど、かくまでも衰へ給へりとは思はざりけるを、昨日の有様見はべりてうち驚かれ侍りき、そも〳〵かゝる身のほどにて人がりよばれありき給はんやうの事あるべくもあらず、翁の病の樣をうかゞふに腹のうちいと〳〵うすくなりぬるものとみえたり、されば何よりも食物のほど過ぎざるやうにもはら心もちひ給ふべきなり、さる病の身にあるをも何とも思はず人がりよばれてうまきもの飽くまでくひ給はんやうの事し給へるは、翁の身にしてあるべくもあらぬしわざといふべし、今よりおのが諫めごとにしたがひて、人がりゆき給はむことは更なり、家に在りても食ひものゝ量を定め、人の許より贈りものするなどありとも濫りにはな食ひ給ひそ、身を養ひ損ひてあたら命をなちゞめ給ひそと、かへす〳〵言ひきかせける　この野梅はをさなき時よりの友どちなれば、あだし人のやうにも思はで、年頃かうねもごろに物しくるゝなりけり、頭かく〳〵今よりはかならずぬしのいさめ言うちまもりて、食ひ物をはじめよろづ身の害ひとたらむやうの事は絶えてすまじきなりと誓ひごとたてゝ、其のおのれをいたはりくるゝ心のうちを喜びつゝ夜中まで兩人物がたりしつゝ居りける時

千代の坂のぼりはげませ諫めごとうけずば杖を打ちふりてだに

中根雪江君の許より鶉の肉と梅酒と賜はりけるよろこび

芹かてゝとくあつ物にしまつ鳥うまさえならず又とらせたべ

うめのみのいとすき人といまどいへ

えならぬ味に酔ひぞ狂へる

今とし（慶應三年丁卯六月二十六日）司に召されて今より年々米賜はるべき仰言かうぶりけるとき

御めぐみの露いたゞかむ片葉だに具へぬものを杜の下草

我うへにかゝるあやしや民くさをうるひ洩らさぬ露にはあらめど

人の家にて誰が筆のあとにか有るらん知らず、蓮華かきたる繪を見てにはかにほしうなりて、譲りくるべく乞はまほしけれど、その家の物にてはなし、持主を問ひければつねうとき人にて、さることいひ出でむも憚りあり、とてもかくても高間山の峯の白雲と思ひわきまへむより外にすべなし、物めでする心のわりなさは我ながらせいしわびつゝたけきこととは獨うちうめきて

蓮華池のこゝろの知られねばおり立ちて香もかゞれざりけり

日頃へてこの詞を野梅にあひて言ひ聞かせけることありしを、野梅心にかけて常親しう物する近藤某に物のついでに語りければ、近藤某さばかりのことならむには己れ身にうけて此の事はからひみむと頼もしく言ひけるにより、野梅もしさる事とゝのへえさせ給はらむには翁いかばかりか喜ぶらむといらへおきつゝやがておのれにかゝる手びきこそ出きけり、彼人しかいふからむには拙からず計らふべく思はる、まことによき人にあひたりけり、翁ののぞみ遂げ給はむ折きにけるなりといひて笑ひをふくむ、おのれ聞きて道びき出きにけるは嬉しきことなり、さらば己れ近藤主がりゆきてなほよく乞ひすがらまほしきを、ぬしも來てたべとてふたり連れだち近藤某のもとに行きつゝ、何は言はず此の畫早くおのが物にせまほしき事のみかへす〴〵いひつづけて

ゆるすべく華のあるじになかだちし我にえさせよ一もとのはす

さて後近藤氏のもとよりかの畫辛うじて翁にえさすべくたばかりおふせたりけり、今よそひ新らしう物し、筐などもとゝのへてまゐらせむといへばしばらくまち給へと言ひおこせける嬉しさこよなきものから、早う見たさに何ばかり

なき日かずをも待遠におぼえつゝまた詞よみて近藤氏に遣はす

待ちどほにさてもあるかな蓮花この世にしては見られざるらむ

はすの華もし手に入れで死にもせば魂ゆきて君を責むらむ

ありく\てかけ物おのがもとにきけり、嬉しさいふばかりなし、懸物入りたるはこの蓋に筆さしぬらして

浮蓴（うきぬなは）くり返してもかへしても見まほしかりし蓮（はちす）手にいりき

四十谷村に知れる人ありけり、大安寺の山に遊び給へ、己が家を休み所にし給へ、とあまたゝびせうそこす、長月ばかり空になう晴れわたれる日、子どもゐて出でゆく、東屋野梅をも誘ひけり、楢原の郁うち過ぎけるに、ある家よりゆくりなく聲をかけて野梅にいづこへか物し給ふといふ、野梅云々なりとつぐ、聲かけし人、さるしばらくのやすみ處はいづこにてもよからむ、我が家は此の南どなりにぞあなる、物たらはでわびしからめど主人ぶりもせじ客人ぶりもし給はで、たゞ心安からむことをむねとはして、我がり來給はずやといふく\さきに立ちいざなふなり、ひさごわりごうちひろげ盞とりめぐらすあるじ心かろきをの子にて、よろづかゆき所搔くとかいふやうにものす、此の頃松たけさかりと生えいづ、いで此のうしろの山にあないしはべらむ、茸がり物し給へといふ、おのが山路のぼり苦しうするを見て、翁はかゝるところえ歩み給はじ、やつがれ背おひまゐらせむとて肩さしいだす、いと心苦しうは思ふものから、たゞいふにまかす、うばらの蕀おそろしうからまりあへる道をも心易げにせおひありきて、松茸の重なり生いでたる谷々見す、少し平なる處もとめ出し、物しきて己れ一人すゑおき皆木の根草むら見ありく、茸だにとりうればたゞちにおのがすわりをる所に持ちきあらそふ

採りととる茸びら我に貢ぐとてはこびつゞくる膝うづむまで

日くれかゝりければ皆山くだりて歸路のあらましものす、ありあふ紙とり出させて戯れ

うたを
羊腸ありとも知らで人のせに負はれて秋の山ぶみをしつ

かくなん走り書に物す、あるじ額臂口などに筆はさみもしくはへもして物かく、いとよくかく、皆の者面白がりて頭をあつむ

とりなれし手もて書くすら思ふにはまかせぬ物を今のふるまひ

などほむるを傍らよりは今めかしとや思ひ見るらむかし、かくしておのが家にをらざるほどに上月景光君の來給ひて、今は〳〵と待ちをられけんを、あまりにおそなはりければわびて歸り給ひにけりと己が顏みる、すなはち妻が語る、書き殘しおき給へりけん詞二つ机上にある見れば　松のみをいづこの山に拾ふらん　又、藥とりいくらか雲に入りぬらん　などあり、かへりごとをあくる日せうそこもてのこしおき給へりしみ歌どもかへりきて見はべり、足ずりしてくちをしくぞ思ふ給へりし、かく三たびまで徒らに歸しまゐらせつることのあやにくさよ

君をのみまつの戶かくて出でつるも寂しきまゝのしわざとを知れ
遠ありき病わするゝ藥とり山くだりきてきゝつ君來と

いかで今日明日のほどにいま一たび驚かし給へかならず、大安寺方丈のさいつころおのが楢原山に遊びけるよしきゝ給ひて楢原の野鶴にかの翁のさることありけむには、我が山寺につれ來べきをくちをしくも徒らにかへしぬる物かな、いかで此の頃すぐさず、今一度山寺さしてふりはへ物すべくそゝのかせとせめ給へば、とく來てたべと野鶴いひおこせるにより、長閑なる日まちつけてまた野梅ゐて出でゆく、楢原鄕にいたり野鶴おどろかす、野鶴薪とりに山にのぼりて在らざりけるを、童よびに走りて直ちに歸りく、おのが面見る、すなはち其の妻なるものに此の翁の寺にものし給はん限りは、幾日にもあれ家に歸らであるべければさ思ひてよと一言いひ捨てゝ己れにそびく、寺近くなりけるわたりにて

いつ來ても世はなれはてし此の寺は

入るからにこゝち異にする
こたびは寺のうちにても一所はるかに隔りてしつらひたる松雲院塔主とよぶにやどらすべしと、始めより方丈の言含めおき給へりしなりとて、共のかたへあないす、げにいと奥まりたる所にて、厨などへは廻廊つゞきにこそはあれ、道は一丁半ばかりも有るべう思はれて、物しづかなることになき所になむ、此のなが〳〵し廊をこともなくうち弄りつゝ往來して物はこびなど、野鶴ひとりしてあるじす、さるは翁來ばそこ松雲院のあるじになりて、翁の心に協はむやうに萬ものせよと方丈のかねてうちまかせおき給へりしなりとぞ、夜になりて埋火かきひろげ、三人が物語りしをる所のさうじあけて、ゆくりなく入りくる人あり、顔よく見れば上月景光君なりけり、いかにしてかゝるならむといぶかしさにしばしは物もえいはず

こだまもや君にへんげて來つるかと
顔まもられつともしびの影

こだまのへんげ人いひけらく、我は誰彼と連れだちて今朝こゝにきたりひねもすあそびて游びつかれ宿りけるなるが、翁き給へりと方丈の告げ給へる、聞くゝ等しく今とぶらひにものしつるなりけり、處しもあれかやうなる山寺にて思ほえずかたみにやどりあへる、いかなる宿縁にかとて、かつあやしみかつ喜ぶ、廻廊のかたよりしそくとりて入りくる人のけはひす、野鶴おどろおどろしき聲たてゝ方丈の來給へるなりといふ、やがてまとゐしをる中に打交り給ひ、今日はる〴〵物しつることを喜び給ふ、こはかへさまなるわざものし給へるものかな、己れ先づみもとに至りて御消息仕うまつるべきなるをなどわびていふ、しばらくありてへんげ人も方丈もこゝ去り給へりけり、あくる日の朝、山口清香とぶらひにく、此の人も上月君らと一つむれにてぞあなる、又そゞろはしきおとして孝顯寺方丈長谷部南邨君をはじめよべ相やどりの客たち一群うちつれ來給ひ、思ひもよらぬ所にて對面するこ

とかなとて、何くれ物がたりし給ふ

山寺のいはほの洞の相やどり一夜ぬれあふ衣手の露

野鶴が今朝茶のはなの折枝のもとに大きなる松茸さしそへたる花瓶のあるを見て、おのもノ＼けうじつゝ面白がる

ゆくりなくかく來たりあひ宿りあひ語りあふ事もあればある物か

夜中にめざめて戸あけあちこちながめわたす

あはれとはそよこの事ぞ杉むらにすきてほのめく在明の月

まつ茸さかりと生（な）りいづるころなりければ朝夕たけのみとりきて野鶴がもてなす

食ひあきてありつる物の味ひも煮ざまによりて新しく食ふ

方丈とうしろの山に登り、小亭に入りて四方の景色を見る

うちわたす野山の廣さゆく水のながさ目にあく時なかるべし

年ごろ御寺のすりつかうまつる匠なりとて、高屋村某出できて物かきてくれよといへば書きてとらす、此のたくみおのが里わたりにては今よりのち鮭のうをおびたゞしうよりくるを大網もてとらふるなり、盛りなる頃はいと面白くあないし侍らむ、かならず見に来給へとねもごろにいふ

網いれて大魚とるらむ舟あそびまつとしきかば來む日頃へず

方丈人のもてきてまゐらせつるなりとて、松たけ一つかきたるかみゑ取り出して哥かけといはる、かほしかめつゝ筆とる

入相の鐘の音ひゞく杉むらの下道ふかくかをる秋の香

このみ寺に傳はれる屏風、久隅守景のかきたる畫、さいつ年も見けることはありけるが、今日またねもごろに看もてゆくに、大方のところにて守景ぞ守景ぞといひて見するとはさらにやうかはりて、まことに魂入れて物しけむ筆の勢ひ見ゆ、中にも周茂叔の手に蓮華もちてあると、李太白の瀑布見て立てるとの二圖はことに拔出でゝ眞に迫るとかいふべき畫のにほひなり

これやこの泥（ひぢりこ）のごとくろがねの研（みが）きすりたつ腕とぞいふべき

かくて三日あそびをりて家路に杖を曳きたりき

今は三とせ四年もやすぎつらん、松井畊雪がもとにて書畫

ども數多見わたしける中に、高島芙蓉のかきたる不盡山のゑめとゞまりて欲しく思ひけれど、かくともえいはでやみにけるを、此の頃わづらひて何事もたゞ物うく思はるゝまに〳〵、夜ひる衾ひきかづきてのみ有りければ、心のうちいよゝ物さびしくなりもてゆきつゝ、はかなきことどもいたづらに思ひ廻らさるゝくせなん生憎なるにつけ、ある夜ねざめにふと此のふじの畫にはかに見まほしうなりけるにより、いと味氣なくしひたるわざにはあれど、かの繪ゆづりくるべく夜あくるまちて便りもとめ、晡雪のもとに其のよしいひやりけるに、晡雪速かにうべなひて人して持たせおこせたりけり、いひやりはやりつるものゝいかゞかへりごとすらむと思ひわづらひてありけるほどなりければ、畫とり出すとひとしく病もなにもうち忘れ、やがて壁にかけさせてしばしは目もはなたでぞありし

痩肩をそびやかしてもほこるかな雲ゐる山を手に入れつとて

見し富士の畫そらごとゝはなしはてぬ心の曇り去りぞ盡せる

上月君の明日の故郷にやどりける夜、この庵いとちひさきに松の黒木もて作りたる大きやかなる火桶つねすゑおけるを、今滋とふたりひをけのかたへにちゞまり寐る狹きこといふばかりなし

七まきにひをけをまきて足だにものべえぬ菴に龍うちねぶる

かくて夜すがらいをねかぬれば、折々頭もたげて窓の外内見などす

更科やをばすて山にまさる月なぐさめたりき夜はのねざめを

秋の七夜を一夜になしけむばかり覺えられし夜もからうじて窓白みければ、兩人ともに起きあがりけるに朝食しつらひてもてく、此の庵年ふりたる庭中に、わざと木どもしげらひたるかげによりて、あやしく事そぎて作りなしたればおのづから遠き山中に宿りたるやうなる心地せられていと興ありておぼゆるに、あるじの君心しらひして、食ひもののし方をはじめ何くれのうつは物ども驛路おもはせたるあ

り様にこしらへたてられたりければ、いとゞ旅心地そはりて、わが國のさかひはなれざるところのやうには思はれず
こゝにして岐蘇の山路の旅ごゝちあぢはゝるゝも命なりけり
あるじの君初ゆきには必ずこゝにものして朝の景色見給へといはる
我がためのあすの故さと今一夜寐ての朝けの雪を見に來む

福壽艸 補遺

今滋が近きわたりなる友どちの許に行きける歸るさ、福壽草の有りけるを買ひておのれに家づとにせむとてもてかへり、机上にすゑてこれ見給へと言ひける時

正月立つすなはち花のさきはひを受けて今歲も笑ひあふ宿

去年の暮ばかり三丸の殿のおもと人たちより、被風といふ物給はりたりけり、不知火の筑紫の縣かあらぬか、ふくれたるさま身につくれば、未だは着ぬ人さへ暖かに見ゆらむとおぼしく、今は冬しらぬ翁となりつるぞなど言ひほこらるゝ嬉しきたま物を、かへすがへすうちいたゞきて

雪といふものは見すれど寒からぬあやしき冬に逢ひにけるかな

同じ殿の内の今一かたのおもと人たちよりも、かくさまなるものたまはらす、今より後いかなる夜さむにもまくることあらじと、たま物着かさねたる肩うちそやかして

かくばかり針目細かに縫ひし衣いかなるかぜも吹きはとほさじ

梅風

とがめざるかをりに心ゆるびして花をあらすな梅の夜あらし

梅烟

匂ひあるけぶりを曳きて梅の花よそめあやしき曇りをぞもつ

嗅梅

焚物の立ちきれつきて一(ひと)にほひ嗅する窓の夕ぐれのうめ

倦繡圖

縫ひものゝあやに倦みけむ手を頰にあてゝ窓による少女かな

倦書圖

うみつゝもあだし物には手もゆかでそれとさだめぬ書を見ちらす

雪羅漢

功德つく事とや思ひ立ちすくみあだしものには雪もまろめず

窓高く積むことしらで雪佛崩れやすかるわざにおりたつ

冬夜月

たゝなはる雪の八重山月いでゝ黄はづかしき空となりつゝ

古寺松

法師(かりのし)のさばかりこそは痩せつらめ軒の山松ふとらさむとて

行ひの員(かず)に箒をとるわざもいれてきよむる古でらの松

大御政古き大御世のすがたに

立ちかへりゆくべき御いきほひと成りぬるを、賤夫の何わきまへぬ物からいさましう思ひまつりて

百千歳との曇りのみしつる空きよく晴れゆく時片まけぬ

あたらしくなる天地を思ひきや吾が目昧まぬうちに見むとは

古書のかつ〴〵物をいひ出づる御世をつぶやく死眼人

廢れつる古書ども〻動きいで〻御世あらためつ時のゆければ

湊河なる楠正成朝臣の墓石の文字を搨りとりたるをつたへ受けてもてる人のあるをりをり見かく、天地をつらぬくかの朝臣の忠ご〻ろは、年月ふるま〻に光りそはりて、やんごとなき物なるより、心ある心無きわかちなく、此の搨もじを貴みまつるならはしとなりにたる、さはいへど人々たくはへもたる大和心の芽、かつ〴〵はり出づる春や來にけんと、年ごろしかめられし眉根少しはうちのばされて

年々に御墓の文字をすりふやし寫しひろむる君の眞心

ある時

友ほしく何おもひけむ歌といひ書といふ友ある我にして

草莽さひづりめぐる朝すゞめ寐み〻に聞きて時うつすかな

ひよりぞと思ひて出づれば風さむし全く好き日は日にも得がたし

私の無き空にすら全くよき日は乏しきを人はいはんや

賴山陽

外史朝廷おもひにますらを〻勵せたりし功績おほかり

慶應四年春浪華に行幸あるに吾宰相君御供仕給へる御とも仕まつりに上月景光主の召されて、はる〴〵のぼりける馬のはなむけに

天皇の御さきつかへて多豆がねののどかにすらむ難波津に行き

すめらぎの稀の行幸御供する君のさきはひ我もよろこぶ

評梅

檜垣ごしこぞめの梅とおぼしくて匂ふ枝つき見あげられける

雪谷早行

明けわたる谷間を見れば踏み來つる雪おそろしや木の根岩角

天使のはる〴〵下り給へりける、あやしきしはぶる人どもあつまりゐる中に、うちまじりつ〻御けしきをがみ見ま

つる
隱士も市の大路に匍匐ならびをろが
み奉る雲の上人
天皇の大御使と聞くからにはるかに
をがむ膝をり伏せて

退筆

人に毛を齕みつくされし圓頂ころば
かされて塵中にをり

雪彌勒

一夜だに身をたもたれぬ雪佛其の曉
に逢はむと念ふな

島田氏の理亮庵尼の七十賀

花がたみ目ならびあへる孫曾孫々々
の曾孫產むも見るらむ

五月節句日伊藤政近君許より
獨活くれける、遠き山里より
えけるなりとて、味ひよく賞
の和らかなること類なし、此
のわたりにてはこのごろ無き
ものなれば、こよなう嬉しく
思ひて

うとまれぬ匂ひ味ひ心をばひかれつ
今日のあやめよりけに

螢來窓

窓に入る雨夜のほたるしめ／＼と照
りて簾をおりのぼりする

庭落花

花の塵篩の末にかけまくも畏き風の
ちらしぶりかな

紙漉

家々に谷川引きて水湛へ歌うたひつ
つ少女紙すく

水に手を冬も打ちひたし漉きたてゝ
紙の白雲窓高く積む

紙買ひに來る人おほしさねかづら這
ひまとはれる垣をしるべに

居ならびて紙漉くをとめ見ほしがり
垣間見するは里の男子か

黃昏に咲く花の色も紙を干す板のし
ろさにまけて見えつゝ

鳴きたつる蟬にまじりて草たゝく音
きかするや紙すきの小屋

流れくる岩間の水に浸しおきて打敲
く草の紙になるとぞ

豆腐哥

酸くもあらず辛くもあらぬ味ひを一
かどもてる豆のしるかな

淡しかる味にかどもつ豆のしる高き
いやしき品にまじはる

田谷郡なる櫻屋といふ茶店の
壁にかいつく

弱草に杖を曳きては來べきなり後の
山にさくらある家

四十谷郡安達氏席上

白山の雪に鳴く鹿の川音に貯へもて
る富びとのいへ

松雲院にやどりをりて今は出
でたゝむとする時

松に雲かゝるけしきを寐つゝ見て十
日あまりの日を過しけり

此の御寺の山つゞきに鶴巣つくれりけるを、いかゞしたりけむ雛ひとつ羽がひに疵つけられたりけるがありしを、方丈いたはりてとかく養ひたてられければ、日数へて疵癒えたりけらし、雛鶴こゝ去りてもとの巣にかへりけるを、折折は方丈の山のあたりにかけりくと、法師ばらの物がたりするを聞きて

疵いえしつばさを君に見せむとて大空たかく舞ひは入りにけむ

栂原郡貴蔵山に入りて何くれの木どもとりきて杖作りけるを五本さへもてきてくれける、いづれも面白きつくりざまにて心しらひしけるほど思ひやらる、貴蔵がたのもしき心よりいひ聞せけることばを其のまゝ詞にいひつゞけ物す

一つ杖千とせつき経てまた一つ五つ千とせをも積ぎてつけかし

病にわづらひける時

死ぬるやまひ薬のまじと思へるをうるさく人のくすり飲めといふ

死ぬべしと思ひさだめし吾がやまひ醫師くるしめ何にかはせむ

死ぬべかる病を癒す醫師の今も世にありや吾は見およばず

死ぬる命とりかへさるゝくすり師は世はひろけれど有るべく思はす

宮北君の御許より鯉たまはりけるよろこびに

旅にある君を朝夕こひといふ魚やたまへる我がこゝろしり

鯉をしもたまはりたりし正月立あすのはがため外にもとむな

示人

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはゞかしこみまつれ

太刀佩くは何の為ぞも天皇の勅のさきを畏むため

天下清ぐ拂ひて上古の御まつりごとに復るよろこべ

物部のおもておこしと勇みたち錦の旗をいたゞきてゆけ

狛逸也君の其の御名の心ばへを哥に詠みてくれよとの給へるにより詠める

剣太刀壁によせおきて聆長にいねつつ高き鼻かくらむ

五月廿八日より病床にありけるまゝに、野山のけしきも見がたく、臥してのみありけるにより、つれ〴〵慰まむため、大きなるうつはものに水いれ小き魚放ちおきて、朝夕うちながむ

湛へつる器の水に鰭ふらせ海川見さ

る月をよろこばす

顔のうへに水はじかせて飛ぶ魚を見かへるだにも眉たゆきなり

窓の月浮べる水に魚躍るわが枕邊の廣澤の池

ひれはねて小き魚のとぶ音に寢るともなくて寢る日あけらる

　佐々木久波紫が大御軍人に召れて越後路に下れる馬のはなむけに

負氣なく勅に背く奴等を罰め盡して歸れ日を經ず

　同じ時また芳賀眞咲に

大皇の勅に背く奴等の首引拔きて八つもてかへれ

　吉田重郎主に

大皇の勅頭に戴きし功績あらはせ戰ひの場に

　伊藤政近主に

朝日影かゞやきあはむ御旗をば戴き奉り太刀取り進め

　小木捨九郎主に

大皇の醜の御楯といふ物は如此る物ぞと進め眞前に

　岩佐十助主に

さしたつる錦の旗の下に立つ身をよろこびて太刀とりかざせ

　同じ時野郁恒見に

愚にもまどへるものか大勅たゞ一道にいたゞきはせで

勅にそむくそむかず正し見て罪の有無うたがひはらせ

　伊藤某仲右衛門

大皇に背ける者は天地にいれざる罪ぞ打ちて粉にせよ

　山内某佐左衛門

大皇の勅頭にいたゞきてふるはむ太刀による仇あらめや

明治十一年八月廿九日版權免許

石川縣平民
美濃國厚見郡今泉村寄留
出版人 井手今滋

東京日本橋通貳丁目 稲田佐兵衛
京都三條通堺町西ヘ入 出雲寺文次郎
大阪北久太郎町四丁目 柳原喜兵衛
濃州岐阜西材木町 山岸彌平
尾州名古屋本町八丁目 片野東四郎
越前福井照手上町 岡嵜左喜介

發行書肆

昭和二年十一月十一日印刷
昭和二年十一月十四日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第二十四卷
和文和歌集
（非賣品）

編輯兼發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七巻及追加篇二巻 書目豫定一覧

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○近代艶隠者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土產 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

正篇 ○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿簑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿簑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四巻 第五巻 近松名作集 上下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蝉丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○栬狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信
州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繫馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金
五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山
○お染久松袂の白しぼり ○八百屋お七 ○笠屋三
勝廿五年忌 ○心中二つ腹帯 ○傾城思升屋 ○愛
護若塒箱 ○富仁親王嵯峨錦 ○鬼鹿毛無佐志鐙
○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○壇浦兜軍記
○蘆屋道滿大內鑑 ○苅萱桑門筑紫轢 ○敵討襤褸
錦 ○御所櫻堀川夜討 ○釜淵雙級巴 ○ひらがな
盛衰記 ○鵯山姫捨松 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授
手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶
々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州
安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神霊
矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版
歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲
櫻本町育 ○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋 ○兵根元曾我 ○源平雷傳記 ○百
夜小町 ○傾城淺間嶽 ○成田山分身不動 ○中將
姫京雛 ○丹波與作手綱帶 ○傾城壬生大念佛 ○
鳥邊山心中 ○嫗髮歌仙櫻 ○心中鬼門角 ○伊勢
頭戀寢刃 ○漢人漢文手管始 ○五大力戀緘 ○金
門五三桐 ○四谷怪談 ○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○傾城色三味線 ○傾城曲三味線 ○傾城歌三味線
○世間息子氣質 ○浮世親仁氣質 ○世間娘氣質
○咲分五人娘 ○傾城禁短氣 ○商人軍配團 ○棠
大門屋敷 ○鎌倉諸藝袖日記 ○日本新永代藏 ○
御前義經記 ○好色萬金丹

第十巻 怪談名作集

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁
野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句冊 ○垣根草
○漫遊記

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記
○啌多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千禄本
○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道

万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○卽席耳學問　○盧生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語　○世上洒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間萬事吹矢的(草稿)

第十二卷　洒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の卷　○嫖客三體誌　○娼妓絹籭　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林　○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園　○和唐珍解　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房　○寸南破良意　○仕懸文庫　○猫射羅子　○道中粹語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○三教色　○契國策　○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　○婦美車紫鄙　○起承轉合　○粹町甲閨　○古契三娼　○滸都洒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問　○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟烟の卷　○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三卷　讀本集

○櫻姬全傳曙草紙　○昔話稻妻表紙　○本朝醉菩提　○三七全傳南柯夢　○占夢南柯後記　○天羽衣　○飛驒匠物語

第十四卷　滑稽本集

○風流志道軒傳　○古朽木　○阿多福假面　○指面草　○人遠　○茶懸物　○無彈砂子　○小紋雅話　○奇妙圖彙　○浮世風呂　○早變胸機關　○客者評判記　○浮世床　○人間萬事虛誕計　○同上後篇　○假名手本藏意抄　○一盃綺言　○古今百馬鹿　○八笑人　○七偏人　○柳巷訛言　○市川評判圖會寶の梅　○福來雀　○一雅話三笑　○言葉の花　○鍋の味噌津

第十五卷　人情本集

○春色梅曆　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用　○八萬鐘

第十六卷　第十七卷　第十八卷　南總里見八犬傳　上中下

第十九卷　狂文狂歌集

○古今夷曲集　○萬載狂歌集　○萬代狂歌集　○四方のあか　○四方の留糟　○千紫萬紅　○萬紫千紅　○めでた百首　○かくれ里の記　○(石川雅望の作では)狂文あづまなまり　○吉原十二時　○(風來山人のものでは)風來山人六々部集(前篇)　○風來山人六々部集(後篇)　○風流志道軒　○(手柄岡持のものでは)我おもしろ

第廿卷　第廿一卷　偐紫田舍源氏　上下

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上 下

○東海道中膝栗毛　○續膝栗毛　○續々膝栗毛　○南總記行旅眼石　○江戸前噺鰻　○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上 下

○眞淵歌文集　○蘆庵六帖詠草　○桂園一枝（景樹）○うけらが花（千蔭）　○琴後集（春海）　○宗武歌集　○曙覽歌集　○藤簍冊子（秋成）　○言道歌集　○良寛歌集　○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇　○柳多留三十一篇　○誹風柳多留拾遺十篇　○川傍柳五篇

第廿七巻 俳文俳句集

○五元集（其角）○五元集拾遺（同）　○五元集脱漏（同）　○雜談集（同）○類柑子（同）　○玄峰集（嵐雪）○其袋（同）○去來丈草發句集　○ひとりごと（鬼貫）　○鬼貫句選（鬼貫）　○七車（同）　○とくとくの句合（素堂）　○韻塞（許六）　○風俗文選（同）○葛の松野（支考）　○笈日記（同）○雅文消息（許六・野坡）　○蛙合（仙化）　○俳諧職人盡（蓼和）　○鶉衣（也有）　○蕪村句集（蕪村）　○蕪村文集（同）

○新花摘（蕪村）　○寫經社集（同）　○十番左右句合（同）　○明鴉（几董）　○續明鴉（同）　○新雜談集（同）　○井華集（同）　○太祇句集（太祇）　○春泥句集（春泥）　○三春日記（蓼太）　○芙蓉文集（耳得）　○白雄句集（白雄）　○骨書（樗良）　○俳ざんげ（大江丸）　○はいかい袋（同）　○曉臺句集（曉臺）　○佐渡日記（同）　○おらが春（一茶）　○一茶句集（同）　○鼠の道行（成美）　○成美家集（同）　○蔦眼集（道彦）　○鶴芝　士朗）　○斧の柄（乙二）　○續繪歌仙（宜麥）　○屠龍の技（抱一）

追加篇 第廿八巻 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）　○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段）　○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段）　○廓文章（吉田屋の段）　○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段）　○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）　○木下蔭狹間合戰（七つ目 竹中陣屋の段）　○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）　○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）　○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）○八陣守護城（八の切・正清本城の段）　○生寫朝顏日記（宿屋の段）　○壺坂靈驗記（澤市内の段）　○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）　○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切碁立の段）

○河東節

○松の内 ○神樂獅子 ○隅田川舟の内 ○禿萬歳 ○炎すゞ嚴の疊夜着 ○酒中花 ○水調子 ○うかぶ瀬 ○ぬれ扇 ○亂髪夜編笠 ○助六所縁江戸櫻 ○常陸帯花柵 ○道成寺 ○淨瑠璃供養 ○邯鄲 ○熊野 ○泰平住吉踊 ○浮世傀儡師（外記物） ○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季 ○松づくし ○泰平船づくし ○高砂松の段 ○神樂高砂 ○曇繪の島臺 ○萬屋助六心中 ○自然居士過去物語 ○源氏妹が宿 ○夕霞淺間嶽 ○尾上雲賤機帯 ○源氏十二段 ○頼光大江山入 ○鉢の木 ○與作小萬夢路の駒 ○道行三度笠 ○鵜飼石和川 ○お夏笠物狂 ○競牡丹 ○源平妹春の鶏合

○常磐津節

○老松 ○子寶三番叟 ○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃） ○積戀雪關扉（關の戸） ○四天王大江山入（古山姥） ○雨顔月姿繪（葱賣） ○戻駕色相肩（戻駕） ○帯文桂川水（お半） ○倭假名色七文字（源太） ○壽靫猿 ○松色操高砂（太神樂） ○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢

木獅子）○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲縁苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清 ○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女 ○戻り橋 ○三保の松 ○松の島 ○三世相錦繍文章（おその六三） ○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし鳥）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○[illegible]連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野 ○御代榮益穂富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春 ○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草 ○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同(山歸り)○月花玆友鳥(山姥)○筐花手向橋(吉原雀)○復新三組盞(大山參り)○道行浮塒鴎 ○道行旅路の嫁入(八段目・おかげ參り)○六歌仙容彩(文屋・喜撰)○彌生の花淺草祭(惡玉)○おどけ俄煮珠取(玉屋)○道行旅路の花聟(落人)○再春菘種蒔(舌出し三番)○初霞淺間嶽(淺間)○〆能色相圖(神田祭)○造鈕菊睦言(菊畑三菊)○菊嬉闇睦言(お岩)○倭假名色七文字(手古舞)○重褄閨の小夜衣(白絲)○明烏花濡衣(浦里)○梅柳中宵月(清心)○日月星晝夜の織分(夜這星)○初櫓噂高島(三人三吉)○貸浴衣汗雷(夕立)○忍逢春雪解(三千歳)○色增艶夕映(雁金)○花雲助相肩(雲助)○青海波○助六曲輪菊(助六)

○新内節

○二重衣戀占(花咲綱五郎)○若木仇名草(蘭蝶)○千日寺名殘鐘(三勝半七)○眞夢血染抱柏(花箇平三)○歸咲名殘の命毛(尾上伊太八)○傾城音羽瀧(おとは七郎兵衛)○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪(浦里)○明烏後眞夢○累身賣の段

○薗八節

○道行相合巨燵(梅川)○桂川戀の柵(お半)○鳥邊山○花街の色糸(植木屋)○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿(おひな吉三郎)○道行緣花房(お花半七)○口舌八景(小いな半兵衛)○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江戸長唄(めりやす大薩摩を含む)

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子(相生獅子)○二人椀久○英獅子亂曲(枕獅子)○百千鳥娘道成寺(さなきだ道成寺)○高尾さんげの段(高尾懺悔)○天人羽衣○京鹿子娘道成寺(娘道成寺)○英執着獅子(執着獅子)○風流妹脊の杜建(杜建)○門出京人形(水仙丹前)○亂菊枕慈童(菊慈童)○鐘入解脫衣(解說)○劒鳥帽子照葉盞(劒鳥帽子)○柳雛諸鳥囀(鷺娘・うしろ面)○初咲法樂舞(法樂舞)○ねこのつま○乘掛情の夏小立(與作)○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町(關寺)○春調娘七種(七種)○童子戯面被(めんかぶり)○衣かづき思破車(やれ車)○童獅子○致草吉原雀(吉原雀)○相生獅子○嬲染分紅葉(うはなり)○隈取安宅松(安宅)○御代松子日初戀(小松曳)○其容形七枚起請(こもそう)○關東小六後雛形(淡島)○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前(高砂丹前)○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形(雛形狂亂)○三重霞嬉敷顏鳥(三重霞傀儡師)○舞扇薗生梅(舞扇)○濱松風戀歌(濱松風)○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪(汐汲・猿廻し・老女)○遲櫻手爾葉七字(花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蚤)○戀男調松風(調松風)○再春菘種蒔(舌出し三番叟)○戀罠奇掛合(犬神)○四季詠寄三大字(門傾城・鹿島踊)○閏玆姿八景(節季候・心猿・晒女)○正札附根元草摺(正札附)○寄三津再十二支(小原女・乙姫・○四つ竹)○其九繪彩四季櫻(丁稚・天下るの傾城)

新獅子・○三升猿曲舞（猿舞）○石橋（外記の石橋）○老松○不動○七所御攝初鐵漿（西王母・鼓入娘）○大和い手向五字（官女・牛若）○外記猿○復新三組盞（初雁の傾城）○廓三番叟（廓三番）○歌へすゞ餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）○月雪花蒔繪の巵（月の卷）○拙筆力七以呂波（芝瓶の傾城・供奴・浦島・瓢簞鯰）○八重霞賤機帶（賤機）○後の月酒宴島臺（角兵衞獅子）○御歳玉海老手遊（とんび奴）○吾妻八けい（八景）○六歌仙容彩（業平小町）○姿花後雛形（小鍛冶）○初子日○俄獅子・○外記の傀儡獅○初しぐれ○巽八景○花瓶曆色所八景（助六・景清・新鷺娘）○勸進帳○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷）○島臺○軒端松○士農工商○秋色種○雛鶴三番叟○花見車○手習子・○繊どの○常磐庭○鶴龜○五色の絲○今様小鍛冶○柳糸引御攝（裸三番叟）○壽○鞍馬山○翁千歳三番叟○廓丹前○菖蒲ゆかた○喜三之庭○紀州道成寺○連獅子○時雨西行

○歌澤

寅派、芝派の歌詞を全部收め　。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尚唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇 第廿九卷 謠曲三百番集

○脇能物

○高砂○弓八幡○志賀○淡路○御裳濯○代主○佐保山○松尾○養老○老松○白樂天○放生川○鶴龜○東方朔○白髭○大社○寢覺○源太夫○道明寺○難波○鵜祭○輪藏○富士山○江島○賀茂○嵐山○氷室○逆矛○要石○和布刈○竹生島○九世戸○岩船○金札○呉服○西王母○右近○繪馬○鱗形○玉井○内外詣

○修羅物

○田村○八島○箙○忠度○俊成忠度○經政○通盛○兼平○賴政○實盛○巴○清經○朝長○敦盛○生田敦盛

○三番目物

○野宮○井筒○芭蕉○采女○東北○梅○佛原○墨染櫻○身延○半蔀○夕顔○定家○江口○揚貴妃○雪○二人靜○千手○六浦○藤○杜若○羽衣○誓願寺○小鹽○雲林院○遊行柳○西行櫻○陀羅尼落葉○源氏供養○大原御幸○吉野靜○住吉詣○松風○熊野○草紙洗小町○山姫○祇王○胡蝶○吉野天人○鷺○葛城○龍田○三輪○卷絹○檜垣○關寺小町○鸚鵡小町○姨捨

○四番目物

○三井寺　○櫻川　○柏崎　○百萬　○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蟬丸○花筐○班女○加茂物狂○水無月秡○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○碪（砧）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱法師○俊寛○攝待○鉢木○土車○高野物狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○蘇武○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○菘上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大典閑曲曲舞獨吟○護法○豐干○千引○常陸帶○空蟬○鶏龍田○阿古屋松○紫式部○鶉○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛花○十番切○笠卒都婆○隠岐院○明智討○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○鞠○碁　其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二冊は、第十一卷黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に伴ふ多量製産の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）